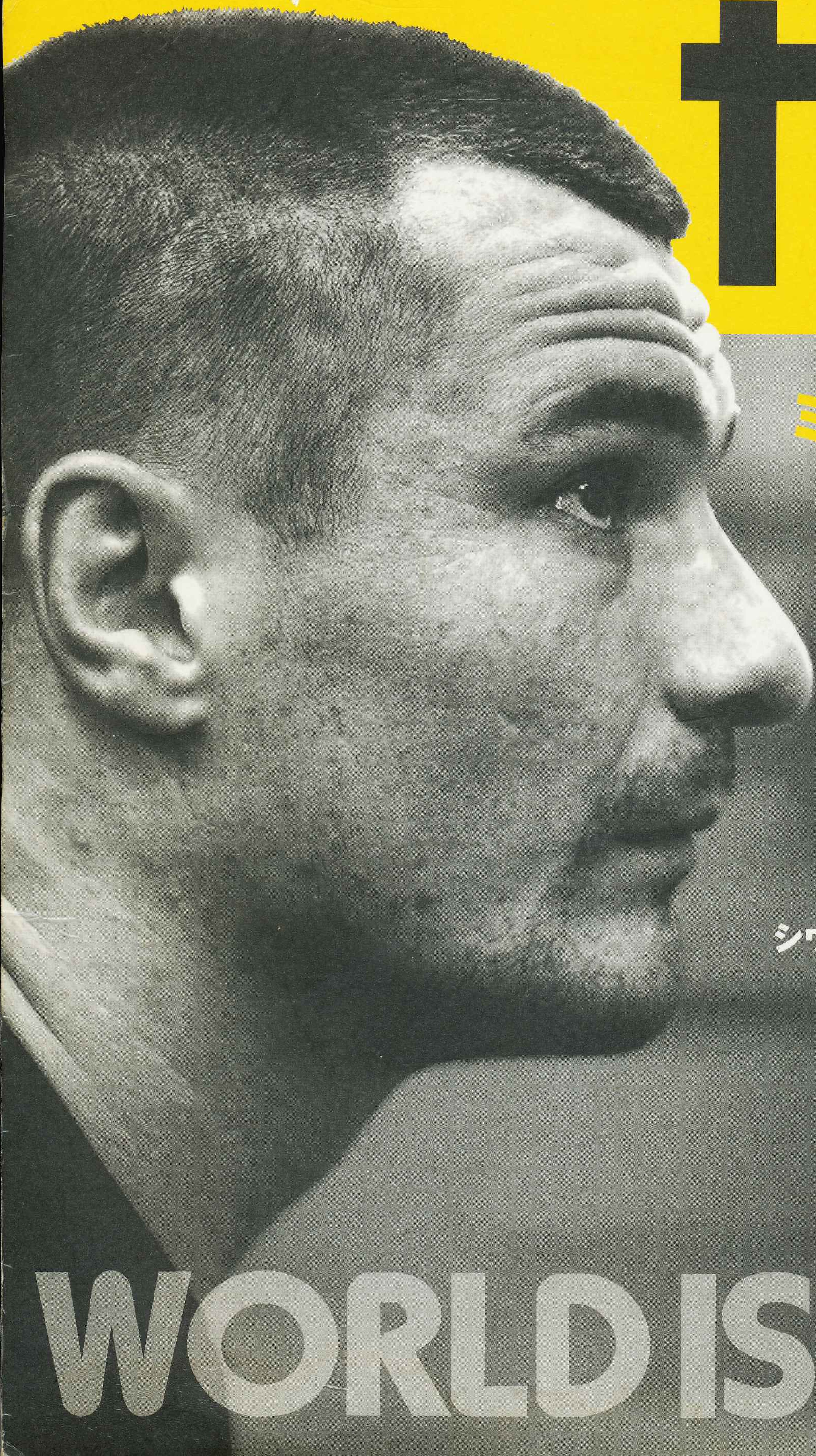
PRIDEから修斗まで、格闘技大解剖！

MAGAZINE ガチ!

INFOREST MOOK



「失ったものを取り戻すために」
ミルコ・クロコップ

「強さの秘密はサンボにあり」
エメリヤーエンコ ヒョードル

「立ち技を語り、組み技を魅せる」
アントニオ・ノゲイラ

「楽しさの追求」
BJ・ペン

「選んだ道、選ばなかった道」
宇野薫

「前田の連絡を待っている」
クリス・ドールマン

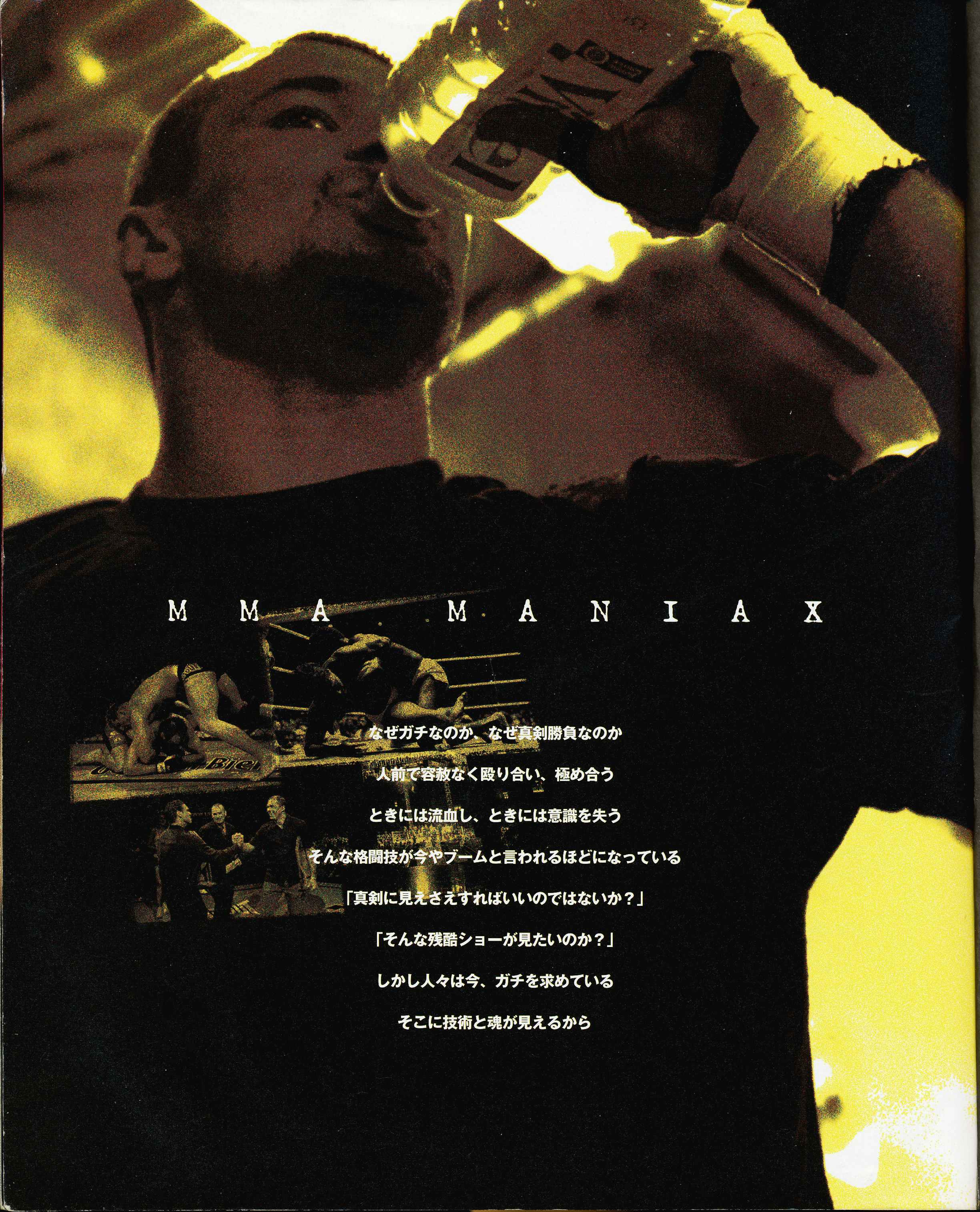
シウバはヒクソンの孫弟子だった
対談"近藤有己×松原隆一郎"
10年目の佐藤ルミナ

★特別企画★
ブラジルVT黎明期
その後のリングスジャパン
海外記者たちが語る日本格闘技界
女子総合ヒストリー

WORLD IS MINE



肉体改造！1日15分のトレーニング。
鍛え上げた筋肉は美しい
K-1 WORLD MAX 2003 世界王者
魔裟斗 シルバーウルフ所属
ウルフメッシュキャップ
フリーサイズ
2,800円(消費税込)
魔裟斗をめざせ！プレゼント
プレゼントマーク入り商品お買上げの方には、魔裟斗選手のトレーニングビデオ「魔裟斗流」をプレゼント！
練習メニュー・注意点・アドバイス等、独占インタビューも収録。※お一人様1個限りとさせて頂きます。
広告以外の商品もたくさんあるゾ！ケイタイからでもOK！ http://www.fightingroad.co.jp
ブラックタイプ
ラバータイプ
バーベルセット ブラックタイプ
バーベル重量 消費税込価格
30kg ¥12,000 ¥6,800
50kg ¥17,000 ¥9,800
70kg ¥22,000 ¥13,800
100kg ¥29,500 ¥17,800
140kg ¥39,000 ¥23,800
ダンベルセット ブラックタイプ
ダンベル重量 消費税込価格
20kg ¥7,000 ¥4,800
30kg ¥9,500 ¥6,800
40kg ¥12,000 ¥7,800
50kg ¥14,000 ¥8,800
60kg ¥16,500 ¥10,800
バーベルセット、ダンベルセットは全てシャフト付
バーベルセット ラバータイプ
バーベル重量 消費税込価格
30kg ¥16,000 ¥9,800
50kg ¥24,000 ¥13,800
70kg ¥32,000 ¥19,800
100kg ¥44,000 ¥26,800
140kg ¥60,000 ¥34,800
ダンベルセット ラバータイプ
ダンベル重量 消費税込価格
20kg ¥9,500 ¥6,800
30kg ¥13,500 ¥8,800
40kg ¥17,500 ¥10,800
50kg ¥21,500 ¥12,800
60kg ¥25,000 ¥14,800
バーベルセット、ダンベルセットは全てシャフト付
Wプレゼント
バーベルセット、ダンベルセットお買上げの方に、魔裟斗選手のトレーニングビデオ「魔裟斗流」をプレゼント！
さらに、ウエイトグローブもプレゼント！ 発汗によるスベリをなくし、安全にトレーニングできます。
魔裟斗
スピード配送実施中!! 当社は受注後5日前後の到着を目指します。
SAND-BAG HARDTYPE
高級レザー使用！
取付けクサリ付き・中身入り
① φ40×H150cm
② φ40×H130cm
③ φ40×H100cm
トレーニンググローブプレゼント付
今、サンドバッグお買上げの方にトレーニンググローブをプレゼント！
サンドバッグハードタイプ
①18,000円 ②14,800円 ③12,800円
7,800円(消費税込) 6,800円(消費税込) 5,800円(消費税込)
SAND-BAG STAND
自宅でできる本格ボクササイズ
ワンランク上のサンドバッグスタンド。パンチはもちろん、激しいケリ込みもOKです。
パンチングボール別売 3,500円(消費税込)
サンドバッグスタンドお買上げの方に、トレーニングビデオ「魔裟斗流」をプレゼント！
サンドバッグスタンド サイズ:W100×D138×H200cm
29,800円→9,800円(消費税込) サンドバッグ別売
HARD BENCH
ワンタッチでシットアップベンチに。折り畳み可能。
コンパクトなマルチギア
ハードベンチ サイズ:W62×D126×H85～105cm
20,000円→9,800円(消費税込) プレートセット別売
省スペースで夢の筋肉
安定感抜群のベンチプレス台
TRAINING BENCH
トレーニングベンチ サイズ:W52×D126×H100cm
12,000円→5,800円(消費税込) プレートセット別売
めざせ逆三角形
背もたれ角度4段階に調節可能
キングofベンチ サイズ:W130×D137×H100～130cm
35,000円→12,800円(消費税込) プレートセット別売
割れる腹筋！
折り畳み可能。
手軽に腹筋・背筋のトレーニングができる。
SITUP BENCH 5段階の角度調節が可能
シットアップベンチ サイズ:W56×D127×H123cm
10,000円→4,800円(消費税込)
蹴って！殴って！ストレス解消にも!!
ヒット商品！
パンチにキック！激しい衝撃をガッチリ受け止める。
高級レザーを使ったプロ仕様。
打撃本体には多重構造ウレタンを採用。
Wプレゼント
ファイティングバッグお買上げの方に、トレーニングビデオ「魔裟斗流」をプレゼント！
さらに、トレーニンググローブもプレゼント！
ファイティングバッグ サイズ:φ40cm×H180cm×土台60cm
30,000円→14,800円(消費税込)
BENCH MAT
ベンチマット
8,000円→4,800円(消費税込)
サイズ:W110cm×D200cm×厚5mm
あこがれの広い肩幅
ラット運動による肩部の集中強化で男らしい肩幅を作る。
背もたれ角度4段階に調節可能
KINGS SET
キングスセット サイズ:W130×D137×H205cm
40,000円→18,800円(消費税込) プレートセット別売
KINGS SET TRAINING MENU
FITNESS BIKE fr
有酸素運動で脂肪を燃やす
抵抗値設定
速度の計測
運動時間累計
走行距離累計
消費カロリー累計
サドル高さ調節可能
運動不足解消にも！
フィットネスバイクfr
39,800円→7,800円(消費税込)
サイズ:W51×D80×H110cm
この高性能でこの価格！
スポーツジム並の機能でプログラムトレーニング。自宅でできる本格バイク運動がボディを引き締め、筋肉を増強。
強靭な筋肉を目指す方へ…
ズバリ筋肉をつけるにはコレ！タンパク質含有率世界一!!ボディビルダーのようなハードトレーニングをする方からフィットネスレベルのトレーニングをする方まで、筋肉の材料として最適な本当に品質の良いホエイプロテイン。
運動後 食後 1日 附属2～9杯
グリコ ホエイプロテイン 6,720円(消費税込)
バニラ味 内容量:パウダー1kg
WHEY PROTEIN
Glico グリコ
脂肪燃焼を目指す方へ…
ズバリ脂肪燃焼にはコレ！持久力アップと脂肪蓄積の抑制。ダイエット、シェイプアップにピッタリ!!
運動前 食前 1日 約2～4粒
グリコ HCAタブレット 3,675円(消費税込)
内容量:タブレット240g(標準120粒入)
HCA TABLET
Glico グリコ
FIGHTING ROAD
株式会社ファイティングロード
〒547-0027 大阪市平野区喜連2-5-49
籠本平野ビル7F
受注後スピード配送
J-DMA 社団法人日本通信販売協会会員
当社は、日本通信販売協会の会員です。
お申し込み方法
ご注文はTEL・FAX・ハガキにて 通販OK
TEL/06-6706-4411
FAX/06-6706-4412
Eメールでのお申込み shop@fightingroad.co.jp
受付時間 AM9:00～PM9:00 (年中無休)
ご使用OK！
VISA JCB MasterCard AMERICAN EXPRESS NICOS
■ハガキでの申し込み方法
切手
〒547-0027 大阪市平野区喜連2丁目5-49 籠本平野ビル7F ファイティングロード スーパーファイト係
商品名
住所
氏名
電話番号
●代金は商品到着時、配達員にお支払い下さい。●表示価格には送料は含まれておりません。●返品・交換は未開封に限り、到着後7日以内可(送料はお客様負担になります)●改良のため予告なく色・形状が変わる場合があります。●全商品に生産物賠償保険付 ●広告有効期限:掲載から1ヶ月



M M A　M A N I A X

なぜガチなのか、なぜ真剣勝負なのか

人前で容赦なく殴り合い、極め合う

ときには流血し、ときには意識を失う

そんな格闘技が今やブームと言われるほどになっている

「真剣に見えさえすればいいのではないか？」

「そんな残酷ショーが見たいのか？」

しかし人々は今、ガチを求めている

そこに技術と魂が見えるから

MIRKO CRO-COP

Train yourself to grind a sword

All treasure is buried into the ring

ミルコ・クロコップ

刀を研ぐがのごとく

再びトップに戻るために——。
ランデルマン戦で失意のどん底に落ちたミルコだったが、
彼のリングにかける思いはその程度で消える物ではない。
あまり練習を公開しないミルコだが、今回は特別に取材を許可してもらった。
ひたすらストイックに自らの肉体と精神を研ぎ澄ましていく、
そんな表現がぴったりくるような情景であった。
彼のリベンジロードはまだ始まったばかりだ。

和良コウイチ＝取材・文
text by Koichi Wara
上田隆章＝撮影
Photo by Takaaki Ueda

寡黙に繰り返される実戦的トレーニング

ミルコ・クロコップが、完全復活に向けて、着々と準備を整えている。

7月17日、PRIDE武士道～其の四の2日前に来日したミルコは、大山峻護を一蹴した後も、そのまま日本に滞在。8月15日のエメリヤーエンコ・アレキサンダー戦に向けて、チーム・クロコップのトレーニング・キャンプを張っているのだ。

品川に借りているマンションからカゴ付きのママチャリ（3段変速ギア付だが…）をこぎ、ときには40℃近いアスファルトの上を約10分間かけてBCGに向かうという毎日を送るミルコ。大山戦後1週間は午前2時間だけのトレーニングで済ませていたが、2週間目に入ってからは午前2時間、午後2時間行なっている。

取材日は、2週間目に入ったばかりの午後であった。チーム・クロコップのメンバー4人と一緒に現れたミルコは、アップの後に、ミット打ち。スタンドレスリングでコーナーに押し込まれてからの攻防を身長2mのレスラーと行なった後、変則的なライトスパーを始める。スタンドの打撃のスパーを5分、次に寝技のスパーを5分、これを代わる代わる行なうのである。

なるほど、打撃と組み技を完全に分離させることのない、試合に即したトレーニング法だ。これをパートナーだけ取り替え、自らはほとんど休むことなく延々続ける。打撃と組み技では呼吸も使う筋肉も異なるため、交互にやり続けることは相当きついはずだ。

寡黙に身体を動かし、ほとんど練習の指示にしか口を開かなかった男が、ようやく笑顔を覗かせ、仲間と談笑し始めたとき、練習は終わりを告げた。

なぜミルコは今回日本でトレーニング・キャンプを張ることになったのか。その理由は、5月23日、PRIDE武士道～其の参における金原弘光戦にある。

立ち上がりからミルコはラッシュをかけて、一時はKO寸前にまで追い込んだものの、次第に失速。判定にまでもつれ込んでしまった。ケビン・ランデルマン戦の敗戦を一刻も早く払拭したいミルコにとっては、"完全復活"を謳える内容でなかったのは事実だ。

この一戦について、「ミルコの体調不良のせいだ」「いや、これが金原の実力だ」と関係者やファンの議論は分かれたが、ミルコ自身はこの両方の要因を認めている。

つまり、対戦相手の金原に関しては、その実力を率直に認めているのだ。その上で、ミルコが万全にほど遠い状態であったのもまた、事実である。

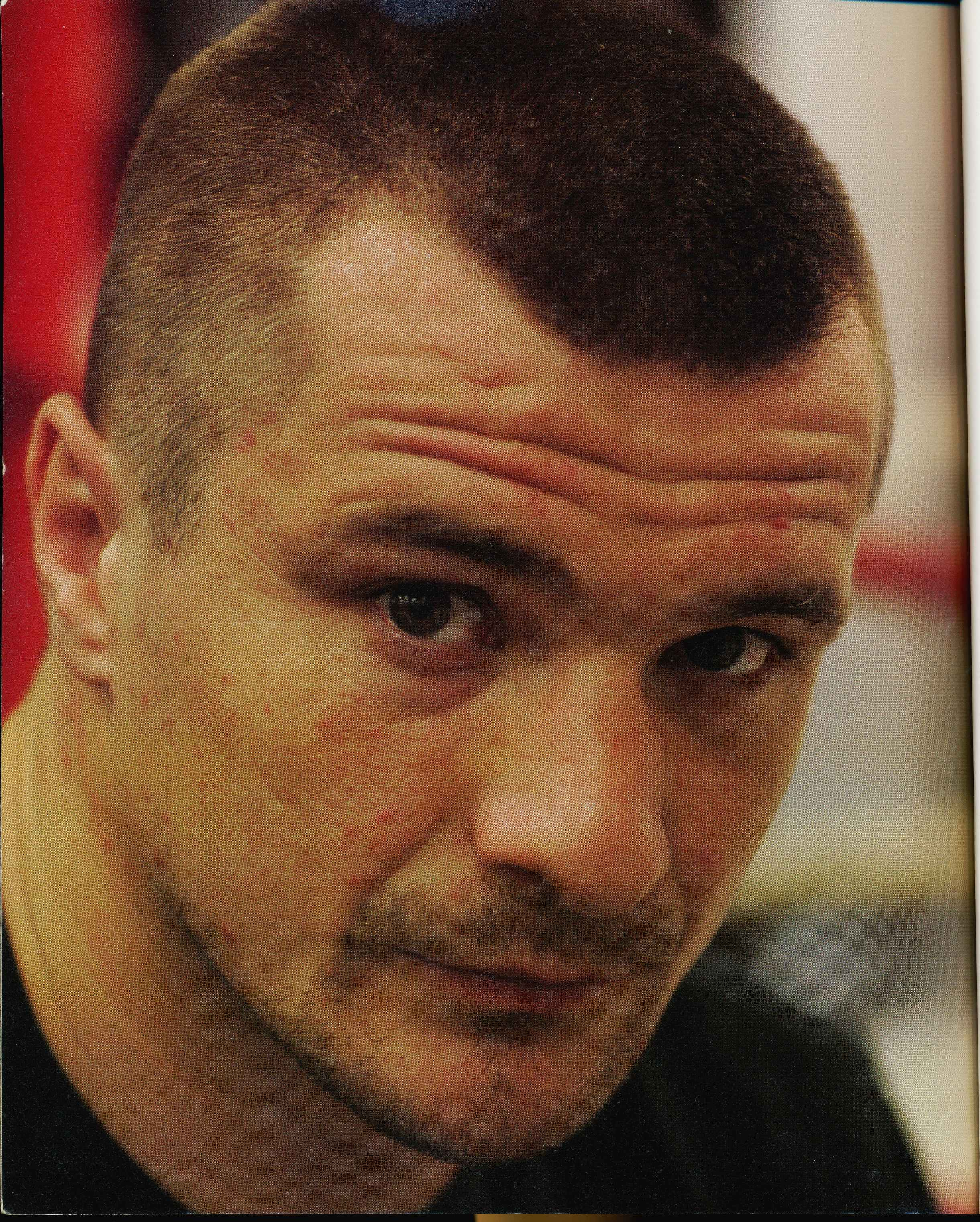
試合後に血液検査を行なった結果、"過労"状態——身体のエネルギーをほとんど使い果たしている状態だと診断された。血糖値、血液中の鉄分やたんぱく質など16種類もの検査結果は、ミルコの体調を最悪のものだと指し示していた。

実際に、金原戦での体重は99・45kg。ミルコの体重が100kgを切ったのは久々のことであり、最近では97kg契約で戦ったヴァンダレイ・シウバ戦以来だった。ミルコはちなみに、組み技の練習を増やしたことによって首から僧帽筋にかけて太くなり、ハムストリングスなども発達。最近の大山戦の計量では102．5kgだった（それでもたいてい来日してからは食が細くなって1kg弱減るようだ）。

また、時差ぼけに弱い体質のミルコにとって、4週間で2度の日本との往復は、自ら望んだものとはいえ、かなり過酷なスケジュールであった。

最後にマスコミとして指摘しておかなければならないことは、やはりケビン・ランデルマン戦のTKO負けから1カ月でのリング復帰は、選手の安全面から見ても無謀であったことだ。

ついでにそのランデルマン戦にも触れておこう。ランデルマンの参謀コールマンは

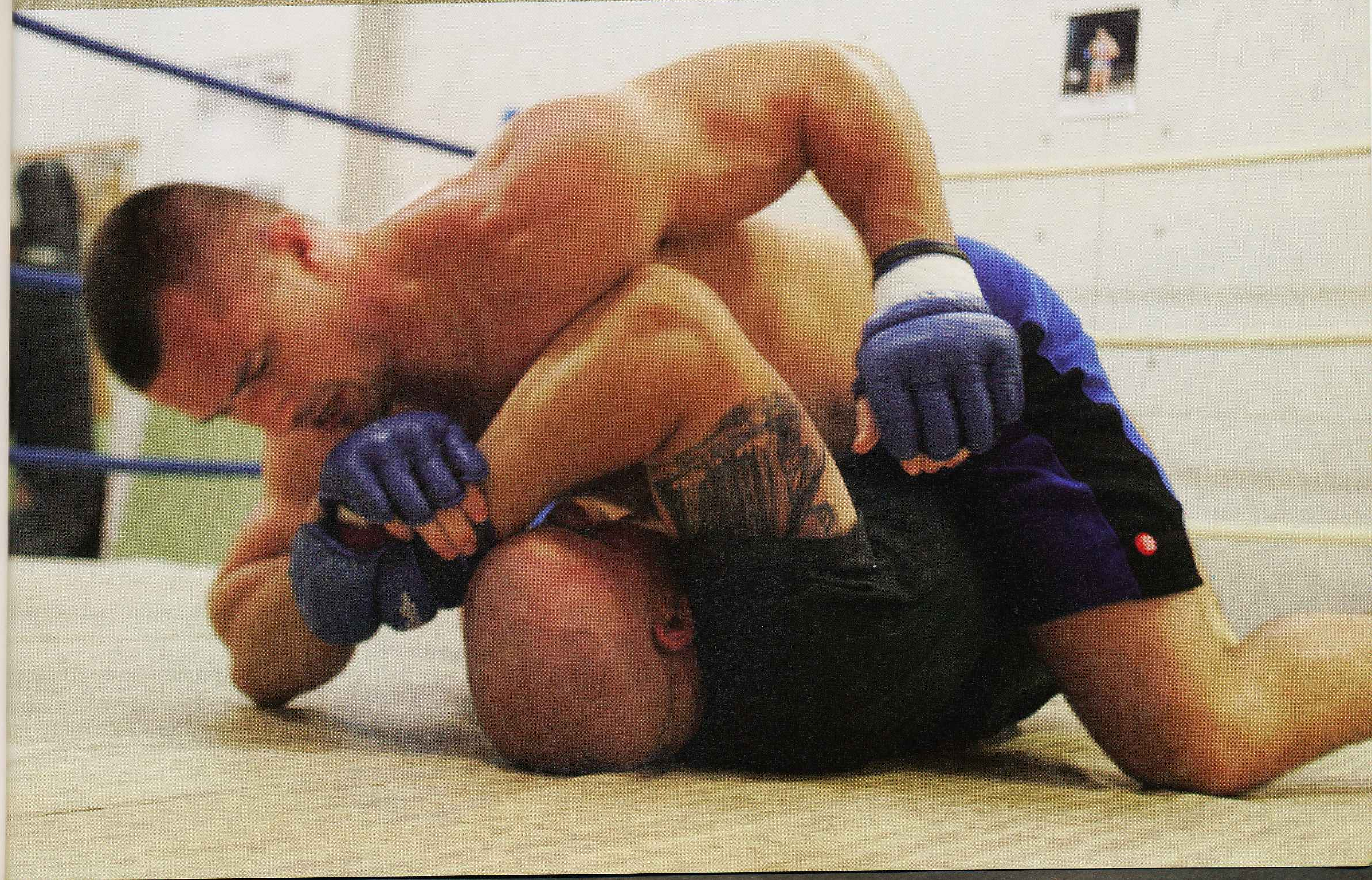


立ち上がりからミルコはラッシュをかけ

おこう。ランデルマンの参謀コールマンに

どん欲に試合を繰り返すのはなぜか





アイトの経験も豊富。グラウンドの練習で

たが、残念ながらミルコのお眼鏡に敵う

どん欲に試合を繰り返すのはなぜか

「左ハイの瞬間に右のガードが下がるところを左フック、タックルを何度も仕掛けて下に意識を持たせてから左フックを狙った」と後にメディアに語っている。

だが、ミルコ自身は「ナメていた。あのパンチを食らってしまったのは自分のミステイクだ」とひと言。コールマンの言葉にも「後付けの理由で言っているのでは」とあまり気に止めていないらしい。

実際にどうなのかは分からないので、ここではおいておく。そこでもう一つランデルマン戦に関して指摘しておくならば、試合のため来日した際に、ミルコの周囲の人間はある変化を感じていたことだ。それは、「ミルコは人馴れしていた」というのである。

どういうことか。いままで仲間の人間以外は寄せ付けず、”自分の時間“だけで生きてきたような男が、自らの為に製作された映画の主役を務めることによって、いろいろな人間関係に気を煩わせなくてはならなくなった。さまざまなしがらみの中で過ごした期間が、いつもの”寄らば切るぞ“的な空気を殺いでいたというのである。それが、相手を「ナメて」しまったことにつながるのか？

それにしても、なぜミルコはこんなに短い期間に試合を組みたがるのか、と考えて不思議ではない。これはもともと立ち技の選手であったミルコにとって、総合格闘技におけるキャリアがライバルのノゲイラやヒョードルに比べて浅いことを自覚しているからだ。真の頂点を目指すためには、もっともっとキャリアを積まねばならない。2度とノゲイラ戦やランデルマン戦の過ちを繰り返してはならない。比較的格下と思われる日本人選手との試合も厭わないのは、「どんな相手でも試合から学ぶことがある」と考えているからだ。

そして金原戦の教訓から、どのように体調を管理するのかは、ミルコにとっても最重要課題の一つとなった。そこで、日本でのトレーニング・キャンプである。

試合のために日本とクロアチアを往復することなく、時差ぼけの心配もない状態で、大山戦の4週間後に控えたアレキサンダー戦に臨むことができるのだ。

ちなみに現在のチーム・クロコップのメンバーは以下の通り。

イゴール：最初の藤田和之戦のときにミルコが大学のレスリング部からスカウトし、丸3年行動を共にしている。マッサージを行ない、プロテインやサプリメントの用意もするなど、ミルコの身の回りの世話をする（ただし取材前日にBCGで高瀬大樹とのスパー中に右手の中指骨を骨折するアクシデントに見舞われた…）。

サーシャ：身長2m、体重120kgのレスリング上がり。もともとナイトクラブでバウンサーもやっており、ストリートファイトの経験も豊富。グラウンドの練習では、ミルコの上になって始めることが多い。対アレキサンダーを想定するのには、体格的にもよいパートナーだ。

ドマゴイ：身長198cm、体重108kgのストライカー。ロングレンジからの蹴りを得意とする、テコンドー、ムエタイの選手。打撃のスパーリング・パートナー。

ウラジミール：ミルコのミットを持つボクシングのトレーナー。弟はWBCのランカーだとか。

そして、クロアチアからわざわざ連れて来た、体調管理や栄養を考えながら調理をするコック——彼らはみなクロアチア人である。

クロアチア国内では「腕に覚えのある者は来い」とミルコは公言している。チーム・クロコップにはさまざまなストライカーやグラップラーが集まってくるが、実際彼らのレベルは玉石混交。集まっては消え、消えては集まりの繰り返しである。なかにはマイク・ベンチッチのように長く付き添った者もいるが、それでも次第にミルコをスパーで極めることができなくなり、「動きが予想つくようになった」といって、金原戦後にミルコから別れを告げられた者もいる。

最近オランダのボブ・シュクライバーのラインから、”寝技がとても強い“とのお墨付きがあった者がクロアチアに送られてきたが、残念ながらミルコのお眼鏡に敵うレベルではなかった。

もしかしたら、ミルコの寝技の進捗度は我々の想像を越えているかもしれない。

だが、間もなくチーム・クロコップに加わる男の存在は、はっきり言って、ベンチッチと比べるレベルにある者ではない。間違いなく、ミルコの寝技の技術を格段に変えるはずだ。

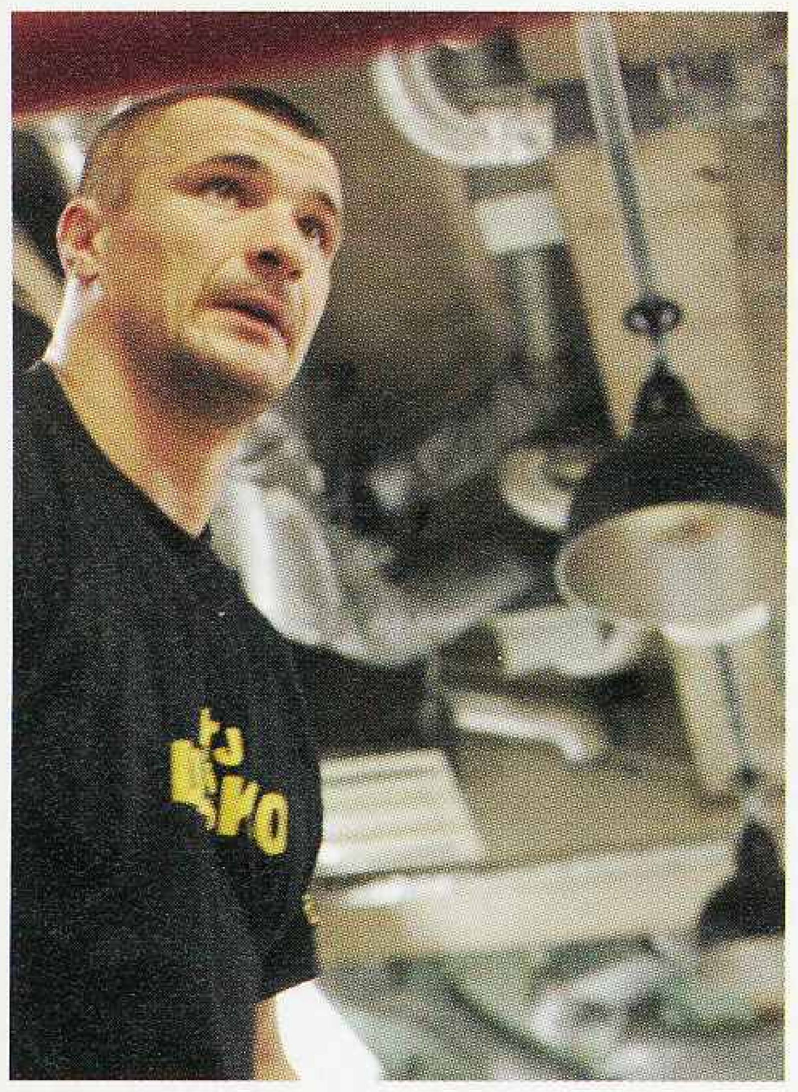
ファブリシオ・ヴェウドゥム（ベーリンギ柔術）。柔術ファンには改めて紹介するまでもないが、昨年ムンジアルとコパドムンドの黒帯ペサディシモ級で、それぞれ優勝と準優勝を飾り、今年7月にもムンジアルでペサディシモ級を制したばかりのトップ柔術家である。

また昨年のアブダビでも99kg級2位の実績を持ち（高阪剛にも勝利）、このときのマット・リンドランドとの試合を映像で見たミルコは、「これこそ本当の柔術黒帯のトップだな」と舌を巻いたという。

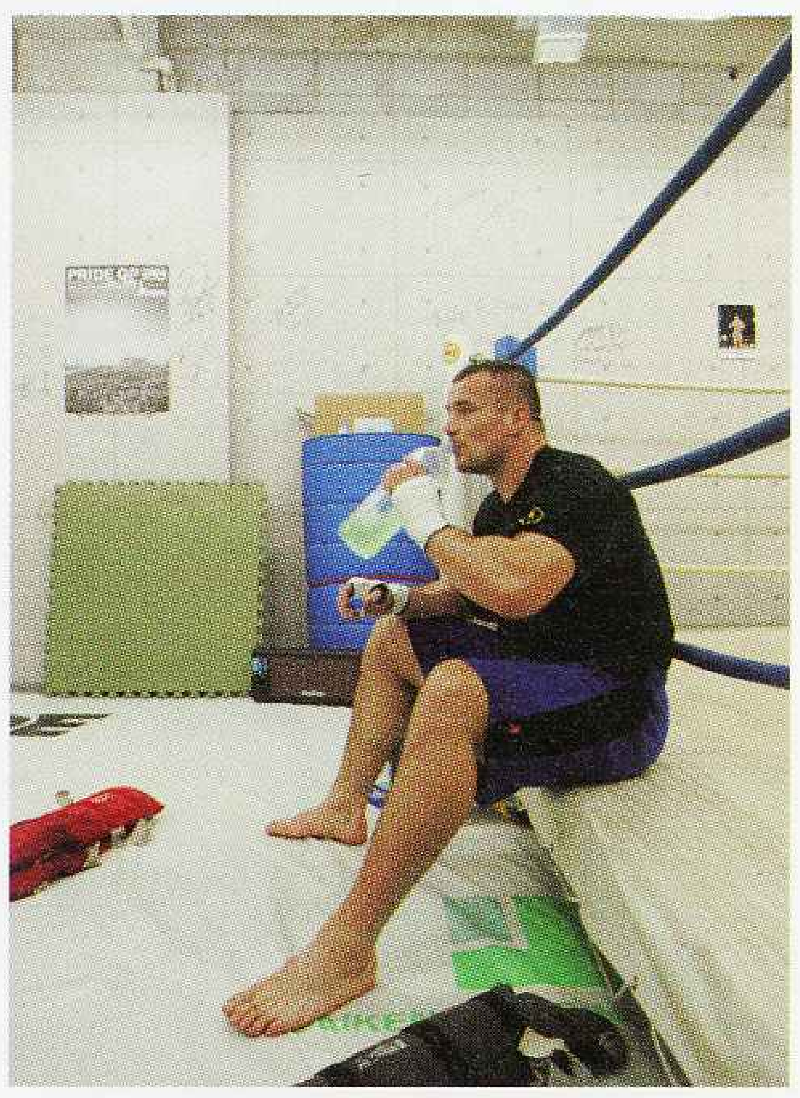
ファブリシオは総合でも、今年5月のジャングルファイト2でエベンゼール・フォンテス・ブラガにKO勝ちしている。

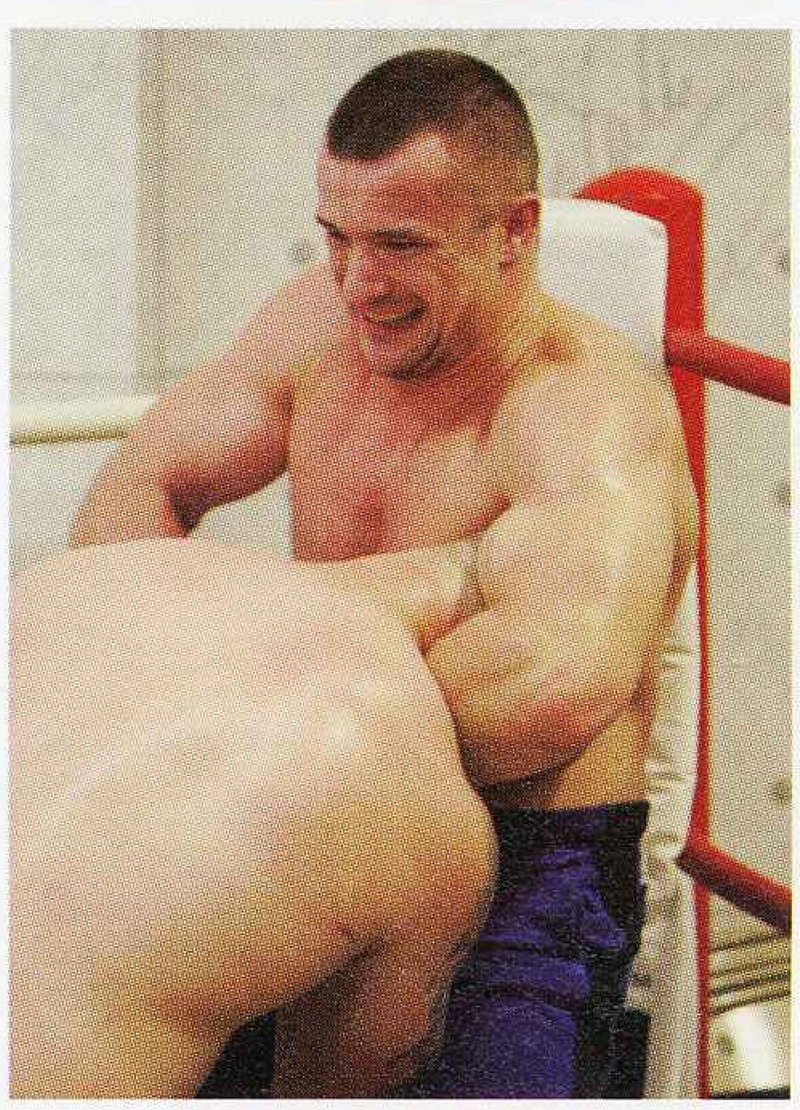
かつて柔術界では100kgを超えようとするクラスには、ずんぐりむっくりで柔道っぽい体力勝負のような者が多かった。だから、ノゲイラのような長い手足を利したガードポジションを得意とする技巧派が目立っていたわけだが、いまの時代は少し

最高のトレーニングチームを求めて









失ったものを取り戻すために

違う。重量級でも身長193㎝、体重105kgのファブリシオやマーシオ・ペジパーノなど軽量級のような足の使い方をする、ガードポジションも得意とする技巧派がトップを占めているのだ。

そして実績的にはムンジアル3位が最高位のノゲイラより、ファブリシオは遥かに上であるため、裸の総合に慣れさえすれば、いまノゲイラの占めている位置に取って代わる可能性もある（ノゲイラ自身がパウンドフォーパウンドで最高の柔術家を5人選ぶとき、「基本的な技術で戦う、本当にハートの強い選手」と真っ先にファブリシオの名を挙げていた）。

今後ファブリシオはチーム・クロコップでミルコの寝技の向上をサポートをしながら、自らは打撃のレベルアップを図り、年末のPRIDEデビューを狙う。

かねてから、ムエタイ、ルタリーブリ、レスリング、柔術などトップクラスが揃ったシュートボクセの練習環境を「羨ましい」と洩らしていたミルコだが、このような強力な援軍を得ることによって、もう嘆く必要はなくなったようだ。

ところで、PRIDEグランプリを見守る立場になってしまったミルコは、決勝の行方をどのように予想しているのか。

ヒョードル、ノゲイラ、小川、ハリトーノフ。この中でミルコは、「ヒョードルが勝ち上がるのではないか」と予想した。ノゲイラに対してはランデルマン戦同様に「自分のミステイクで敗れた」と総括しているため、「ノゲイラの最後まで諦めないスピリットはすばらしい」と評価しながらも、グランプリでヒョードルに勝てるとは思っていない。また、ハリトーノフに関しては、さほど興味を抱いていない模様だ。

だが小川については、技術や実力の面以外のところで、違和感を抱いている。総じて日本人の謙虚さに好印象を抱いているミルコだが、「彼のアティテュードは好きではない」と不快感を表明。開幕戦で小川に敗れたステファン・レコとミルコが仲の良いことも影響しているのかもしれないが、「もし戦ったらKOする自信がある」とまで、周囲には洩らしているようだ。

さて、今後のリベンジロードはというと、8月15日のエメリヤーエンコ・アレキサンダー戦を経て、10月にはランデルマンとのリベンジマッチを目論んでいる。そして自らがいまだトップの選手であることを証明し、年末にはヒョードルとのチャンピオンシップにまで持っていく算段である。

「いまはすました表情でポーズをつけて、写真に映りたくない。ちゃんとインタビューに答える資格も、いまの自分にはない」というミルコ。そのため取材はやや変則的なものになってしまったが、現在は映画のオファーも断り、国会議員としてもしばらく活動をやめて（野党議員であるためさほど忙しくなく、7月13日の登壇を最後に「次は秋に会いましょう」とコメントしたとか）、いまは練習だけに専念している。

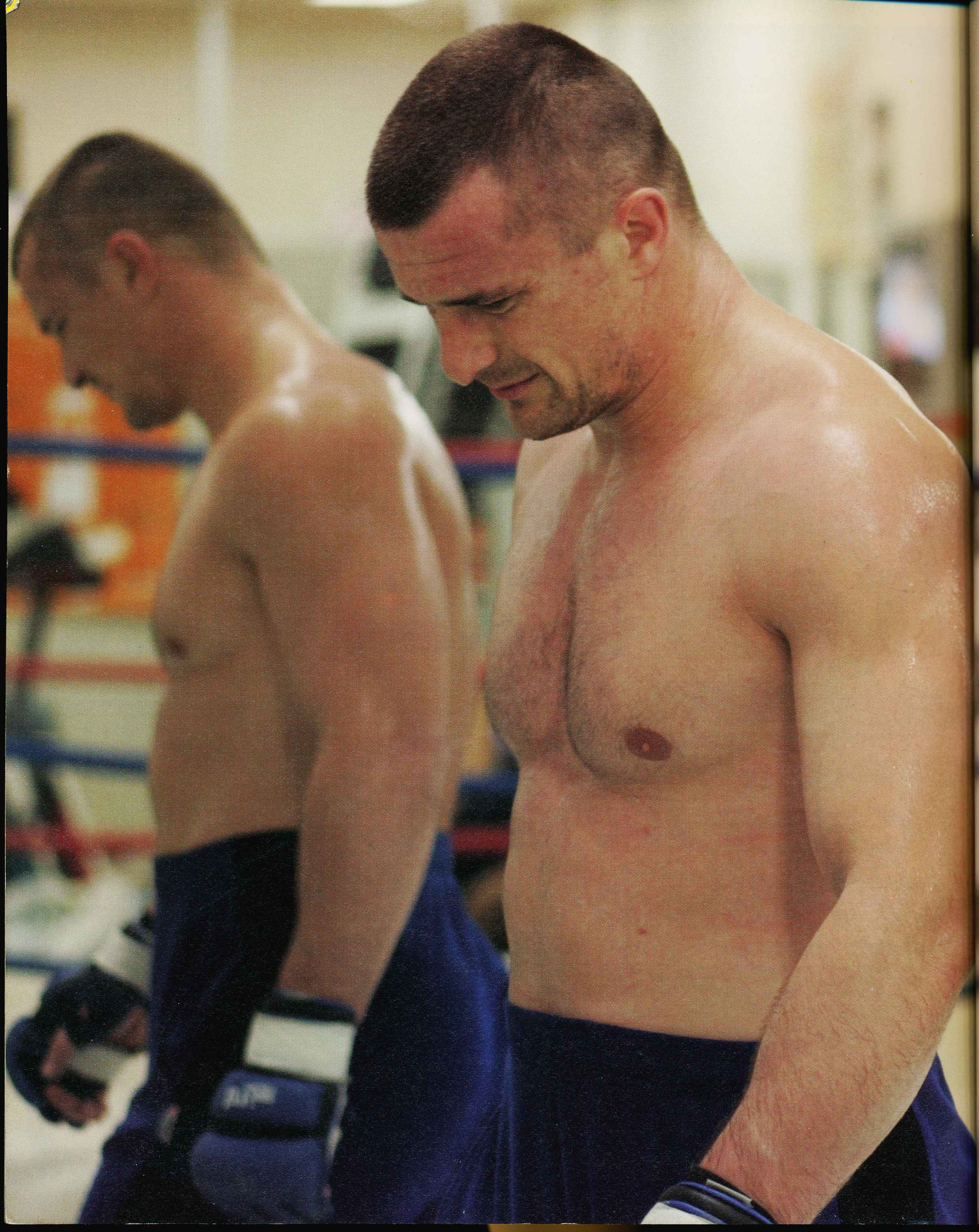
練習しているか、食事をしているか、寝ているか。いま日本での生活は、いたってシンプルに構成されている。〝戦い〟だけに集中したミルコは、失ったものを取り戻すために、今日もただ走り続ける。

Mirko crocop

ミルコ・クロコップ

1974年9月13日生まれ
クロアチア・ビンコブチ出身
188cm 104kg
96年よりK-1に参戦。いきなりジェロム・レ・バンナを撃破。その後、藤田和之とのMMA戦のオファーを受け、勝利。PRIDEに参戦するようになってからはMMAで快進撃をすすめ、ヘビー級3強の一角として注目されるようになる。その後、ノゲイラ、ランデルマンに敗北を喫し、今はリベンジに向けて調整中。





Matsumoto's EYE

松本秀彦の眼

「ソ連十字」は永遠に極めるチャンスがある

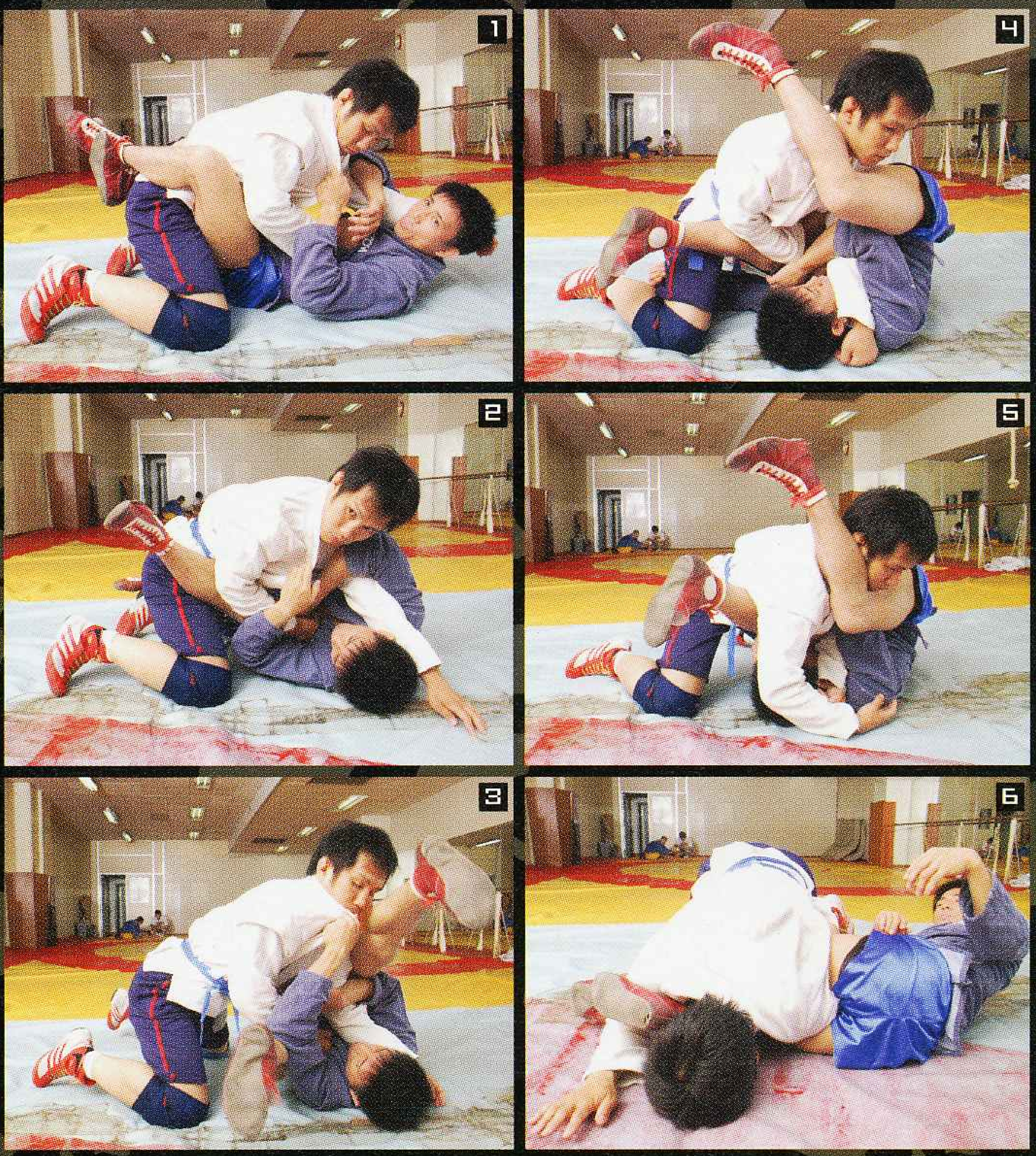
上になったコールマンがヒジを出しすぎなのが駄目です。引き込む人間の帯より先にヒジを出さないというのが、我々の基本。一瞬ですけど、肩よりも先にヒジが出ている。あそこにヒジを持っていったら、普通下の人間は回りますね。

あとヒョードルがうまいのは、相手の動きに合わせて向こうに(頭を入れて)回ったんですよ。それは「ソ連十字」と呼ばれるもののパターンです。

普通だったら、左手で足をすくって仰向けにして倒すじゃないですか。このときコールマンは上から潰せば取られないと思っている。つまり潰すことによって一回クッションを置こうとしていたんですが、ヒョードルは左手で相手の左足をすくって、ぐるっと内側に回った。潰しにいったコールマンは、この回る勢いを止められなくて取られました。流れの中でいったのがいい。あれは普通の選手ならワンクッションおいちゃいますから。

左手は最後は相手の腕の抑えにいった裸用の十字で、ちょっとサンボから進化させていますね。道衣があったら右手は自分の道衣を握って、左手は足を抱えたまま回っていけば楽なんですけど、道衣胴衣がなくても腕が抜けないように最後は両手で抑えていますから。

こういった十字の取り方は、旧ソ連の選手が良くやる。相手の動きに合わせて臨機応変に、ヒョードルのように向こうに回るか、仰向けにして返すか。相手の動きによって何回でもくるくるまわって、極めるチャンスがあるんです。前転しても駄目、潰そうとしても駄目。足を外そうとしても別の技があるし、立っても足をすくって極められる。こういうテクニックを持った選手も総合ではあまりいないと思いますね。



ENKO FEDOR

エメリア・エンリコ・ヒョードル

ロシアン・パワーの秘密

Not only power
Technique is the most important.
The secret is hidden in Soviet.

最強の秘密をロシアの国技から探る

ヒョードルの強さはサンボにあり

PRIDEグランプリ開幕戦ではM·コールマン相手に下からの腕十字を極め、パウンドだけでないグラウンドでの実力を証明したE·ヒョードル。続くK·ランデルマン戦でも絡みで一本勝ちするなど、これまでの戦いでは余り見られなかった寝業師ぶりを発揮しつつある。そこで、"いま最も頂点に近いサンビスト"松本秀彦と、"サンボマスター"田中康弘に、ヒョードルの腕十字から窺えるサンボテクニックに深く切り込んでもらった。

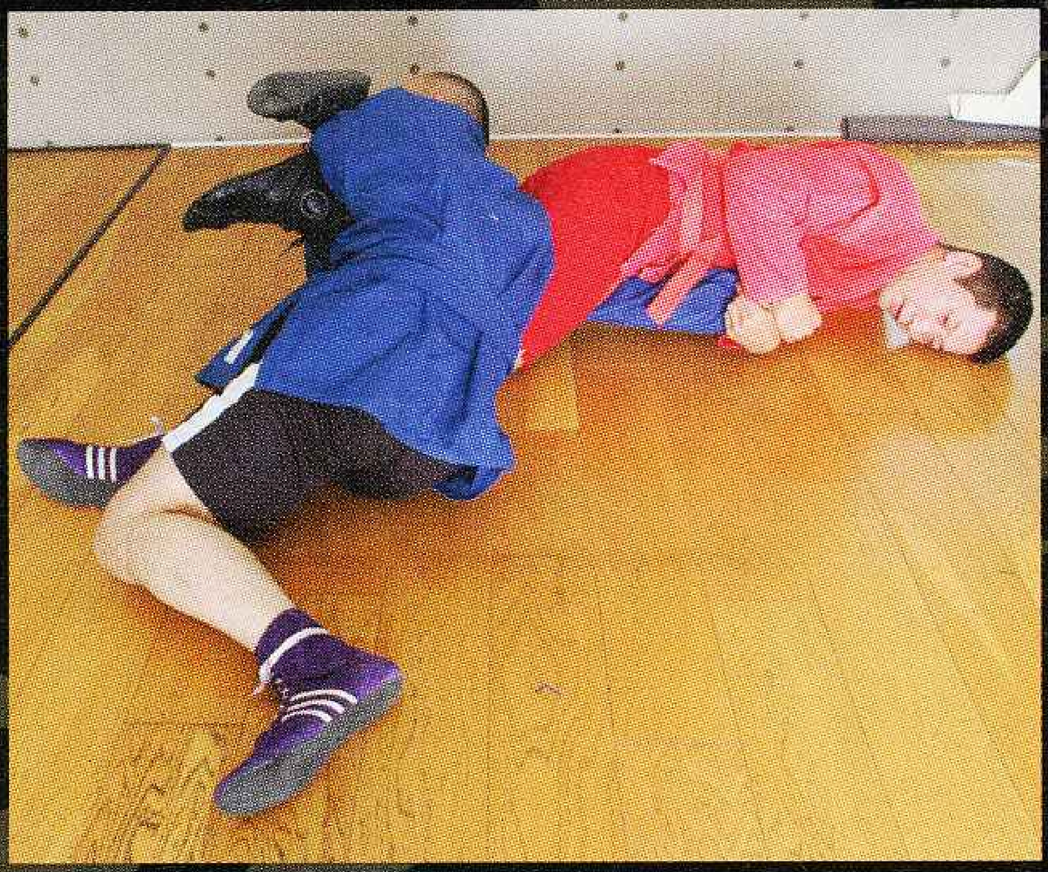


和良コウイチ=取材
interview by Kouichi Waizumi

大屋美和(技術写真)=撮影　日本スポーツ出版社(試合)=写真提供
photo by Miwa Ohya

田中康弘の眼

脇に入った「かかとの向き」が腕十字の生命線



（左端）脇に入れた足を使って、相手を前のめりに崩す。（左2）フィニッシュの形。脇に入った右足（ヒョードルの場合は左足）かかとの向きに注目してほしい。3）首だけ刈りにいっている、腕十字の駄目な例。（右端）上から取る時でも重要なのは、脇に入れた足のほうだ。

上からコールマンが殴っていて、手が首のところに来たところで、ヒョードルが右手でロックしていますね。相手の腕が首のところに来る瞬間まで待っていたんです。道衣があれば持つけど、裸だからしっかり巻いて、自分の首と一緒に挟む。そこが相手の腕が抜けずらいところなんです。

そして腰を向こうに抜くとき、相手の脇の下に入れている左足がサンボの使い方です（※左端の再現写真では右足のほう）。かかとの方向を見てください。力の向きが、コールマンの脇を開けるようになっていて、そうすると相手は前のめりになるしかない。

でもたいてい日本人の場合は、先に首だけかけてしまいがち。上から取るにしても下から取るにしても、首から殺そうとする。頭を殺しても、頭というのは球体だから、そこを中心にして身体が回っていっちゃうんですよ。

ところがロシア人というのは理に適っていて、相手の一番身体の力が出るところ、つまり胸を止めちゃうので、相手の身体の動きが止まる。首をかけるのは最後でいいんです。この理屈は上からでも下からでも一緒です。

十字をうつ伏せで取るというのは、サンボの奥義。仰向けで取れるのだったら、逆に言うと実力差があるというわけです。

EMELIANENK

サンボ的な視点で見た ヒョードルの強さと脆さ

●テイクダウンを取られる理由

「ランデルマン戦を見て一つ言えるのは、ヒョードルが負けるとすればこの手のタイプです。ランデルマンにテイクダウンされましたよね。道衣があったら普通は腰を切れるんですけど、ヒョードルは重量級のサンボの構えなんです。軽量級のサンボはスピードがあるから、もっと低く構えるんですが、ヒョードルはちょっと前傾ではありますけど、真っ直ぐ立っているんで反応が遅れる。道衣のあるなしと、重量級にしてランデルマンはあのスピードですから、この手のタイプが出てきたらヒョードルは間違いなく上を取られます」（松本）

●脇の甘さ

「コールマンは脇を指すのがうまいし、やっぱりレスリングの一級品という感じだけど、こういうところヒョードルは弱いですね。意外と脇が甘いから、脇を差されてもっていかれている。ロシアの重量級は、基本的に脇を差してどうこうという投げをあまりやらないというのもあるけれど、ランデルマン戦を見てもあまり裸でレスリングをやっていないのかなと思いますね」（田中）

●ガードからは絶対取られない

「ノゲイラ戦を見て思うのは、この手のタイプに絶対ヒョードルは負けません。ノゲイラは引き込むじゃないですか。両脇の間から足が伸びていてクラッチされていない形（オープンガード）って、サンボでよくなりますからね。ヒョードルにとって慣れているポジションです。そこで関節を取られるほど甘くないですね。これはヒョードルに足を取ってくださいというポジション。多分関節の取り合いに行ってもヒョードルはいい試合をすると思うんですけど、リスクを背負いたくないからいかないと思う。取り合ったらあまり差がないですからね」（松本）

●腕絡みは相手の技術不足

「腕力ですね。ランデルマンは防御を知らなかったのでしょう。いとも簡単に手首を取らせて、腕を伸ばしている。伸ばしちゃうと腕に力が入らないですから。普通は手首を取られたらすぐ伸ばして縮めたりするけど…。アームロックという技自体あまりレベルが高いものじゃないし、サンボでは実際ああいう体勢にならない。ただその前にパンチを打って腕を伸ばさせるなど、ヒョードルはこのルールにおけるテクニックをうまく使っています」（田中）。

ヒョードルの正確な実績

サンボ>>>	
1997年	ロシア選手権3位、モスクワ国際選手権（クラスA）優勝
1998年	ロシア選手権3位、モスクワ国際選手権（クラスA）優勝
1999年	ロシア選手権3位、モスクワ国際選手権（クラスA）優勝
柔道>>>	
1997年	モスクワ国際選手権（クラスA）3位
1998年	ロシア選手権優勝（23歳以下）優勝
	ロシア選手権3位
	モスクワ国際選手権（クラスA）3位
	ロシア軍選手権優勝
1999年	ロシア選手権3位
	モスクワ国際選手権（クラスA）3位
	ヨーロッパカップ（トルコ・イスタンブール開催）優勝
コンバットサンボ>>>	
2002年	ロシア選手権優勝
	世界選手権（ギリシャ開催・ヘビー級）優勝
	世界選手権（パナマ開催・アブソリュート）優勝

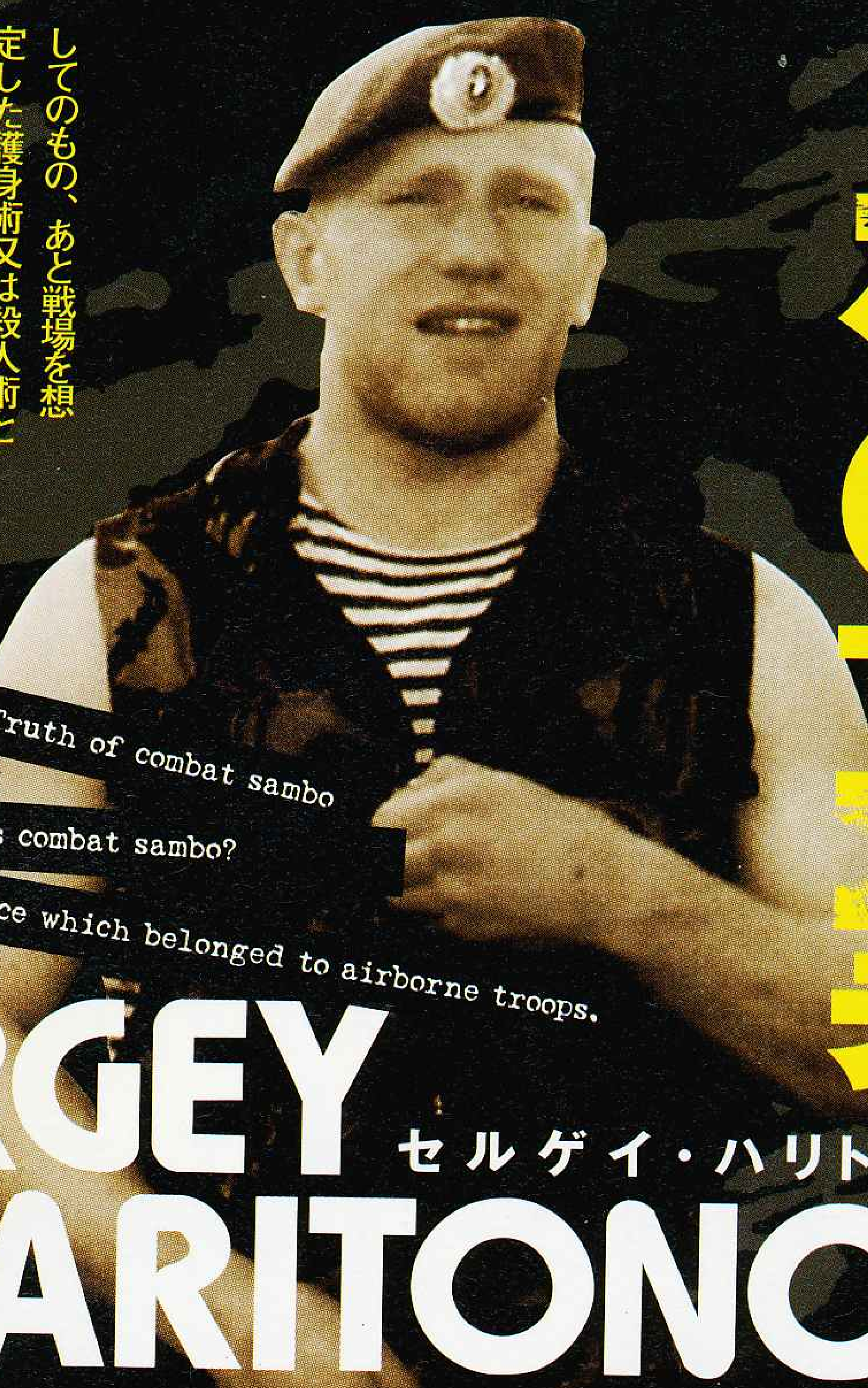


まつもとひでひこ　1972年8月10日、愛知県小牧市出身。身長168cm、体重65kg。木口道場所属。史上初の全日本6連覇を成し遂げ、世界大会でも銀メダリストになること2度（00、02年）。日体大柔道部出身でありながら、足関節やマツロックといったオリジナル技も駆使して世界と伍するサンビスト。



たなかやすひろ　1967年11月16日、埼玉県川越市出身。日本ウェルネススポーツ専門学校専任講師、NPO法人ディフェンスプラン・サンボ振興会代表理事。18歳よりサンボを始め、柔道やレスリング経験のない純正サンビストとして史上初の全日本選手権優勝を飾る（89、91年）。88年世界選手権4位、88年カリーニン国際3位など。現在はアンプラグド国分寺や読売日本テレビ文化センターで指導を行なう。

コンバットサンボの真実



SERGEY KHARITONOV
セルゲイ・ハリトーノフ

日本ではイメージばかりが先行する「コンバットサンボ」の、実際の姿というのはどのようなものなのか。空挺部隊でその格闘術を身につけたハリトーノフに、「コンバットサンボとは何か」を直撃した。

和良コウイチ=文・撮影
text&photo by Koichi Wara

――まずはハリトーノフさん、どんな子ども時代を過ごしたのですか？

ハリトーノフ(以下ハリ) 小さいときは慎ましく、そして大人しい子どもだったよ(笑)。いつもテストのときは百点満点だった。それで音楽学校に入って卒業もしたんだけど、当時は自分がプロの格闘技選手になるなんて想像できなかったね。

――音楽学校で楽器は何を？

ハリ アコーディオンさ(笑)。だけど父親がスポーツマンだったこともあって、自分もサンボをやるようになったんだ。

――サンボは何歳から始めたんですか。

ハリ 小学校1年生から始めたんだけど、ちゃんとした訓練を受けたのは9、10歳頃からだね。

――それであなたが生まれ育ったアルハンゲリスクで、チャンピオンになったと？

ハリ その通り。初めてチャンピオンになったのはアルハンゲリスクだよ。最初に子どもの部でチャンピオンになったね。

――全ロシア大会には出場できましたか。

ハリ アルハンゲリスクでチャンピオンになったので、そこの代表として全ロシア大会に出た。他にもモスクワ、リャザン、エカテリンブルクのトーナメントにも出ていったよ。

――当時の得意技は何ですか？

ハリ ムリーロ・ニンジャ戦でも決めてみせた、パットホワット(払い腰)さ。

――ところでハリトーノフさんが空挺部隊に入ったのはなぜですか。

ハリ 空挺部隊というのは、ロシア軍の中ではエリートの中のエリートだからね。それはとても重要な経験だった。第一に生き延びるための経験であり、自分の身体を使って戦うことだけではなく、武器の使い方や車の運転も学ぶことができ、俺はそこで自分が立派な"男"になったと思う。

――そこで学んだ格闘術はナイフで切りつけたり、目を突いたり、金的を蹴ったりというのが含まれているわけですね。

ハリ もちろん訓練コースの中に入っていたよ。どんな状況でも自分の身を守るための術を身につけることができた。

――その格闘術の名前は「サモザシータ」(自己防衛=サンボの語源に含まれる)ですか。

ハリ その通り。それは自己防衛のためだけに使うんだ。

――訓練の中には非常に厳しいものがあったと想像しますが。

ハリ 空挺部隊では肉体を鍛えるためにいろいろな訓練があったよ。背中に重いものを背負いながら、長距離のクロストレーニングを行ない、途中でいろいろな運動を挟みながら走り続けた。

――それは相当厳しそうですね。

ハリ 俺はいまシャワーを浴びるときにはリラックスできる。そのときは冷たい水しか浴びることは許されなかったからね。

――ああ、それも戦場を想定した訓練…？

ハリ そう、訓練の一部だよ。

――そんな訓練ばかりやっていると、嫌になって逃げ出す人もいるでしょう？

ハリ 俺がリャザンの空挺学校に入ったときには、確かに準備段階でもう嫌になって我慢できなくなった人もいたよ。

――コンバットサンボを始めたのは、空挺部隊の中ですか。

ハリ その通り。10年前ぐらいかな。

――コンバットサンボというのも、いろいろ種類があるようですね。いまや世界選手権も開かれているルールも確立した競技としてのもの、あと戦場を想定した護身術又は殺人術としてのもの…。

ハリ そう、いまはスポーツとしてのコンバットサンボと、実際の戦闘のときに使うコンバットサンボとは分かれている。俺もこの間初めて見たんだけど、互いにライフルを持って戦うコンバットサンボもあるんだ。それは相手の武器を落とさせたほうが、勝者となる。

――ブッ放したら駄目ですか(笑)。

ハリ 駄目だ。でも、「自己防衛」の必要があればいいんじゃないか(笑)。

――競技としてのコンバットサンボというのは、いまハリトーノフさんがPRIDEでやっているような戦いを想像すればいいですか。

ハリ 似ている技も多いね。PRIDEとの一つの違いは、畳の上で闘うことや、ヘッドギアをつけなければいけないことだ。試合時間は5分間で階級別。俺は100kg超級に出ていた。まあ、大きな違いといえば、PRIDEと違って1日3～5回戦わねばならないことかな(笑)。

――たとえば相手が寝ているときに殴る、蹴るもしていい？

ハリ OK。禁止されているのは、目を突くこと、口と鼻の穴を引き裂くこと、背中にある脊髄を蹴ること…ぐらいかな。あと金的を蹴るのも昔は許されていたんだが、いまは禁止されている。

――コンバットサンボでのハリトーノフさんの実績は？

ハリ 全ロシア選手権のチャンピオンになったり、ユーラシア大会のチャンピオンになったりもしたよ。

――そういった大会にはどれぐらいの人数が参加しているんですか？

ハリ そうだね、だいたい150人ぐらいかな。いまは一年中大会が行なわれているよ。

――コンバットサンボを経験して、いまPRIDEの戦いで最も活きている部分は？

ハリ コンバットサンボの経験の全て、そして空挺部隊での経験全てが、PRIDEで役に立っていると思うよ。

ライフルを持って戦う コンバットサンボもあるんだ

Sergey Kharitonov
セルゲイ・ハリトーノフ
1980年8月18日、ロシア・アルハンゲリスク出身
身長180cm、体重101kg
PRIDEのリングではジェイソン信長とLAジャイアントに腕十字で一本勝ち、ムリーロ・ニンジャとセームシュルトにはKO勝ちするなど無敗。
ロシアントップチーム所属

サンボ、この偉大なる社会主義の遺産

最近ヒョードルやハリトーノフらをつくり上げた格闘技、
サンボに注目が集まってきている。
だが、その知名度とは裏腹に、サンボとはどういう格闘技であるのかは
あまり知られてないのも事実。
そこでソ連時代に国技と認定されたこの格闘技の実態を紹介しよう。

和良コウイチ＝文・撮影
text&photo by Koichi Wara

約70年前に国家によってつくられた

サンボ(САМ Б О)という言葉は、「САМО З АЩИТА」(自己防衛)、「Б Е З」(〜ない)、「О руЖ И Я」(武器)の三つの頭文字を組み合わせてつくられた、「武器を持たない自己防衛」が本来の意味となる。

スターリン時代の1938年にサンボは国技として定められた。全く文化も宗教も異なる民族を束ねるためには、新しい社会主義国のスポーツをつくることによって、ナショナル・アイデンティティを国民に獲得させることが必要だったのである。

当初それはソ連邦内にある24の民族格闘技を研究し、その長所を集めてつくった新しい格闘技とされていたが、実態は少し違うようだ。いまやサンボの代名詞とされる関節技は、それらの民族格闘技には含まれておらず、サンボ設立の主要人物であるオシェプコフとスピリドノフは日本で柔道と柔術を学んでいるという事実からも明らかなように、やはり日本の格闘技の影響が最も大きいようなのだ。

東京五輪でソ連が柔道競技に参戦以降、サンボ出身の柔道家が本家の地位を脅かすようになり、日本人の技術を上回る腕ひしぎ十字固めのバリエーションを誇るようになったのは、歴史の皮肉か。

スポーツサンボとコンバットサンボ

サンボは大きく二つに分かれる。国技になったほうのいわゆるスポーツサンボと、社会主義が崩壊するまでは軍や警察の間でだけ伝えられたコンバットサンボだ(日本ではコマンドサンボと称されることも多いが、現地では英語のコンバットサンボ又はロシア語のボエボエサンボと呼ばれる)。

コンバットサンボは多義的な言葉だ。一つは、いまや10カ国以上の参加による世界大会が行なわれるまでになった“スポーツとしての”コンバットサンボ。サンボ衣を着て、ヘッドギアやスネ当てを着用して戦う総合格闘技であり、KOか一本、もしくはポイントにより勝敗が決するというもの。ヒョードル兄弟も世界王者になり、ハリトーノフもヨーロッパ、ユーラシア王者になっているのが、これだ。

もう一つは、戦場で用いるためのコンバットサンボ。もちろん、ルールに縛られることはないし、試合も(でき)ない。ハリトーノフも在籍していた空挺部隊など、軍隊の中でもエリートだけが学ぶことができる格闘技だ。普段の練習では、実戦を想定してヘルメットや防弾チョッキ、ブーツ、武器類などフル装備で行なうことも多い。技術的には、どうしても関節技より打撃が多くなるようだ。関節技は、相手の手首を極めて武器を奪い取る際に用いられるという。

ブラジルとロシアの源流からいま日本人柔道家が現れる

社会主義国時代には優秀な成績を残す者には名誉・金・地位を保証し、国家を挙げてのバックアップを受けたサンボ。いまPRIDEのリングで活躍中のヒョードルやハリトーノフは、サンボで鍛えられた肉体を用いて、他の選手と比してアドバンテージを持つ投げ技、寝技を有する。またコンバットサンボも経験していることから、スタンド、グラウンドとも殴ることに対して抵抗感なく、実にスムーズにタイミングを読んで打つことができるように思える。

彼らのベースにあるサンボの源流が日本にあったことは先に述べたが、同じようにノゲイラに代表されるブラジリアン柔術も、もとは日本から来たものであることはよく知られた話だ。前田光世がブラジルのベレンに渡った1914年頃に、オシェプコフは日本からの帰国後ウラジオストックに柔道場をつくり、ここからサンボの歴史は始まったといえる。

いま柔術とサンボ、それぞれの出身者が総合では「最強」の座に就く。彼らの源流にある日本人柔道家がその地位を脅かす日は、もうそこまで来ている。









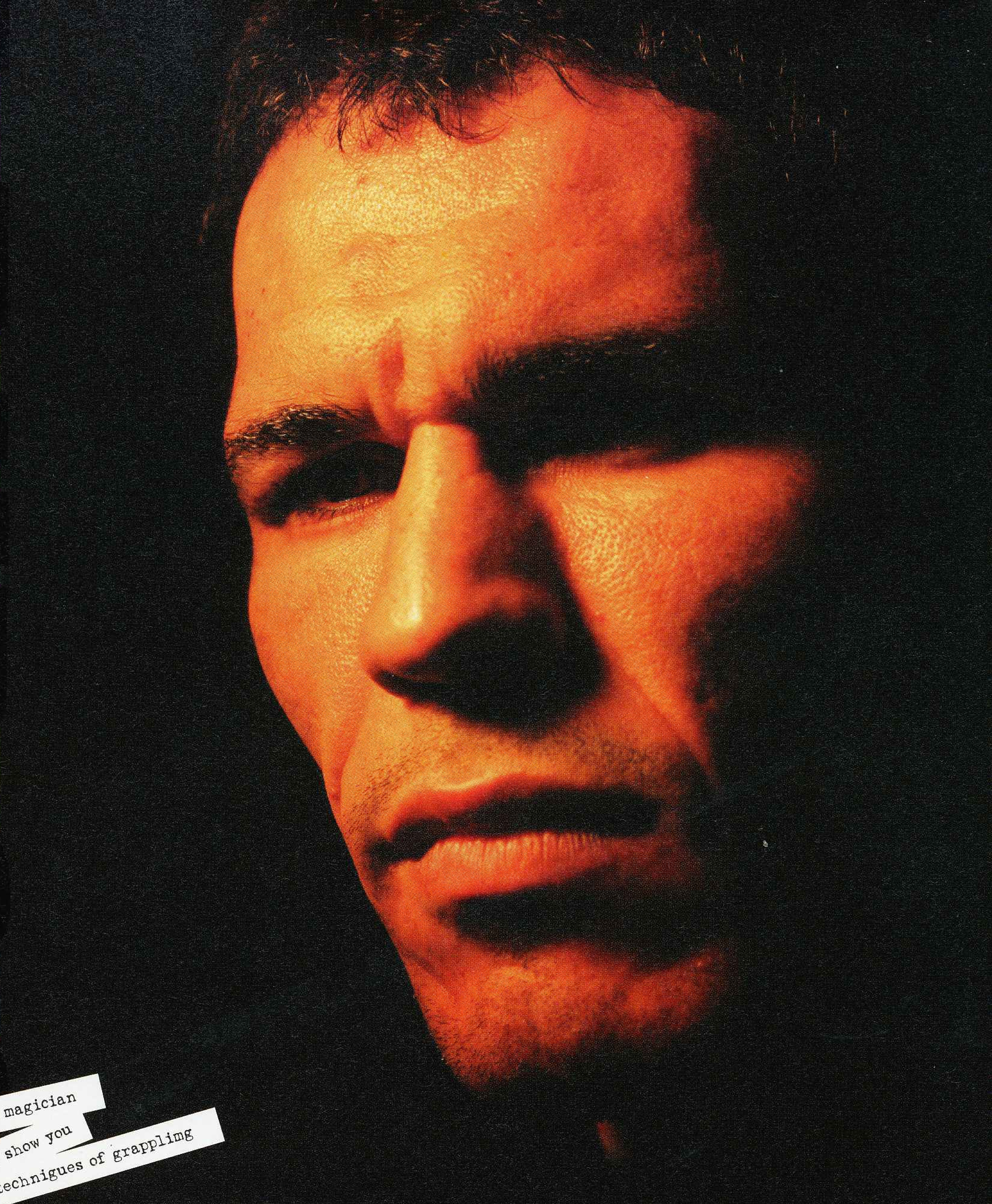
(上)サンボマスターでもあるプーチン大統領はサンビストの誇り。サンボ関連施設には肖像画が掲げられている。(上2)コンバットサンボの練習風景。(上3)空挺部隊などで行なわれる、もう一つのコンバットサンボ。(左)コンバットサンボ世界選手権のポスター。

自宅に作られたリング付きの道場。気の置けない友人が集まり、ここで好きな時間に好きなだけトレーニングできる

――PRIDEマットを席巻しているスピニング・チョークだけど、この技はいつから使い始めたんだい？

ノゲイラ　基本的には同じ技だよ。ただ、ミウトンはハーフガードからスピニング・チョ

ANTONIO RODRIGO NOGUEIRA



Jiujitsu magician
Will show you
unbelivable techniques of grapplimg

ボクシング合宿を通して、コンディション、関節技、全てが強くなる

アントニオ・ホドリコ・ノゲイラ 立ち技を語り、組み技を魅せる

1000の技を持つ――そんな宣伝文句が色褪せてしまうほど、
華麗なテクニックを実戦の中で披露してきたアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ。
今回、本誌のために大西洋を望む豪邸で、三大妙技スピニング・チョーク、
オモプラッタ+アンクル・ロック、三角絞め→腕ひしぎ三角固めを
実弟ホジェリオを伴い分析してくれた。さらにはその3大必殺技の由来、
ブラジル・アマチュア・ボクシング・ナショナルチームでの
キューバ合宿の波及効果も大公開。

Text & Photo by Marcelo Alonso　Making by Manabu Takasima



自宅に作られたリング付きの道場。気の置けない友人が集まり、ここで好きな時間に好きなだけトレーニングできる



ミノタウロに先駆けること8ヵ月、スピニング・チョークで一本勝ちを奪ったジュカォン・カルネイロ。



レスリングのがぶりを丹念にミノタウロに指導した、ジェフィソン・テキセイラ。

――PRIDEマットを席巻しているスピニング・チョークだけど、この技はいつから使い始めたんだい？

ノゲイラ　もう、ずっと前からだよ。僕とホジェリオがスピニング・チョークを使い始めたのは、6年も前のこと。元々はホジェリオが、ヒカルド・デラヒーバに習った技なんだけど、細かい点に改良を重ねてきたんだ。ホジェリオは習ってからすぐに練習で使っていたんだけど、バーリトゥードの試合に使うほど、技の完成度に自信がなかった。

――いつ頃から、この技をVTで使うことができると思うようになったんだい？

ノゲイラ　ジェフィソン・テキセイラがBTTのレスリング・コーチになり、レスリングのがぶりの態勢で腕の巻き込み方や、位置を修正してくれてからだから、去年の9月以降だね。これまで相手のタックルを潰したときは、がぶった後はヒザを入れたり、パンチを落としていたから、それが盲点になっていたんだけど、そのままスピニング・チョークに移行するのに、最高のポジションだとテキセイラの指導のあとで気づいたんだ。それから集中的にスピニング・チョークの練習をするようになり、スパーリングのなかでも自然に、この技が出るようになった。ヒース・ヒーリングがタックルを仕掛けてきたときだって、僕は全くスピニング・チョークをかけたことを意識していなかったんだ。で、気づいたときにはもうヒーリングが失神しかけていたんだ。でも、実際にはBTTメンバーのジュカォン・コルネイロは去年の8月にもう、この技で一本勝ちしているし、彼が最初のVTでスピニング・チョークを極めた選手になるだろうね。僕以外では、6月のメッカVTでもミウトン・ヴィエイラがスピニング・チョークを極めているよ。

――ミウトンがジャジソン・コスタに極めたスピニング・チョークは、君が見せるのと少し違ったように感じたけど。

ノゲイラ　基本的には同じ技だよ。ただ、ミウトンはハーフガードからスピニング・チョークを仕掛けたんだ。ジャジソンはヒザを立てて、ミウトンの脇の下にクビをもぐりこませ、態勢を変えようとした。ミウトンはロールしたり、引き込む必要がなかったんだ。なぜなら、彼は最初からサイドに回った形でチョークを仕掛けることができたから。だから、スピンする必要がなかったんだよ。

――1日に百回も、この技の練習をしているというのは本当？

ノゲイラ　いや100回はやっていない。右と左、片側40回づつ。だから80回繰り返していることになる（笑）。でも、スピニング・チョークだけじゃなくて、どんな技にも言えることさ。僕は何でも反復練習の繰り返しをしている。技の完成度を高めるだけじゃなくて、自分の動きのなかに技を取り組むためにね。

――このインタビューをするに当たって、日本からスピニング・チョークだけでなく、三角絞めから腕ひしぎ三角固め、そしてオモプラッタとアンクル・ホールドの連係について、君の話を聞いて欲しいといわれていたんだけど、こないだヒカルド・アローナがクイントン・ジャクソンに三角絞めを叩きつけられてしまい、KO負けを喫してしまった。アローナの三角絞めはどこがいけなかったのか教えてくれるかい？

ノゲイラ　掴んでいるクイントンの腕を彼の体の中側に引っ張っていたことがミスだった。肩より外側に引っ張れば、関節が伸びるんだよ。それでもクイントンのように力のある選手なら、リフトアップしてくるかもしれないけど、そうなるともう三角にこだわることなく、足を開いて自ら態勢を整えるしかない。

――トライアングルから、アームバーというのはミノタウロが、マーク・コールマン戦で初めて見せた連係だったよね。

右側40回、左側40回、1日で80回スピニングチョークを繰り返す

スピニング・チョークを魅せる、そして語る



ホジェリオが僕の右ストレートに合わせて両足タックルを仕掛けてくる（①&②）。僕は腰を落とし、右ワキを差してタックルを切って、がぶりの態勢へ（③&④）。右腕はホジェリオのクビに巻きつけ、右ヒザをついてバランスを取りつつ、ホジェリオの右ワキを差していた左腕を抜く。と同時に左ワキの下で、しっかりグリップするんだ（⑤〜⑦）。ここで大切なことは、左肩をホジェリオの背中に押し付け、立たせないようにすること（⑧）。そして、左ひざをつけたまま、そこを支点にして回転を始める。背中から力を込めて、腕に力を入れるとホジェリオの右上にプレッシャーがかかりチョークが極まっていく（⑨&⑩）。最終的にはグリップを解き、腕を抱えるようにスリーパーの時の要領で締め付けるんだ（⑪）。これでスピニング・チョークの完成だよ。

ロシア人は強くなって当たり前、でも、寝技ならブラジル人の方が強い

ノゲイラ　誰か他に使った格闘家もいたかもしれないけど、僕自身はあのコンビネーションを誰かに教わったことはなかった。コールマン戦の前にファスVTのレスラー、ホドリゴ・アルティエイロが僕の練習に付き合ってくれていたんだ。コールマンが三角絞めに入るチャンスを与えてくれるファイターだというのは分かっていたので、彼と重点的に三角絞めの練習をしていた。やっぱりアルティエイロが、僕の腕ごと体をリフトアップしようとしたとき、掴んでいる腕を相手の肩より外に持っていけば、腕十字の態勢になるって気がついたんだ。それ以来、この技を使うようになったし、多くの選手も使っているよね。この技を極めた日、実は入場の直前までトイレのなかでベベウを相手に、繰り返し技の反復練習をしていたんだ。で、すぐに試合で使えるほど、僕はこの連係に自信を持つようになっていたんだ。

――オモプラッタとアンクル・ロックのコンビネーションも君が考え出したものなのかい？

ノゲイラ　オモプラッタは、これもデラヒーバに習った技なんだけど、僕は好んで使っていた技なんだ。いろんな仕掛けがあって、凄く実用性が高い。僕の得意技の一つなんだけど、アンクルへの移行はヒカルド・リボーリオが練習で使っているのを見て、僕も取り入れるようになった技だ。

――スピニング・チョーク以外はガードポジションから仕掛ける技だけど、去年の3月にはガードからの仕掛けを全て、エメリヤーエンコ・ヒョードルに防がれてしまった苦い経験があるね。

ノゲイラ　ヒョードルは関節技を防ぐことを念頭に置いて戦っていて、仕掛けるということがなかったからね。彼は元々、かなりの寝技の腕前を誇っていたと思う。でも、関節技を駆使する自信がまだなかったから、僕との試合のときにはパウンドに徹しきっていたんじゃないかな。でも、最近はリング上で戦うことになれてきて、随分と技を見せるようになってきた。ファイターというのは、概ね経験を積めばテクニカルになり、そして少しアグレッシブさが少なくなるんだ。ヒョードルもそうだし、ボブ・サップ、そしてミルコ・クロコップにしてもそうだろう？　唯一の例外はヴァンダレイぐらいだよ。

――最近、ロシア人選手が力をつけてきていることをどう思う？

ノゲイラ　ある意味、当然のことだと思う。ロシアはスポーツ、格闘技大国だ。レスリングもボクシングも、柔道も強いし、サンボという競技も普及している。今、ようやくそれらの技術を融合させてVTで戦うことができる選手が育ってきた。元々、個の部分での強さは他を圧倒するものがある国だから、ミックストアップが上手くいくととてつもない強さを発揮することは分かっていた。でも、寝技という点では、我々ブラジルの方がアドバンテージを握っているから、やはり彼らに勝つには寝技勝負になるだろうね。

――ところで最近、ムエタイだけでなくボクシングのトレーニングを本格的に行なっているようだね。

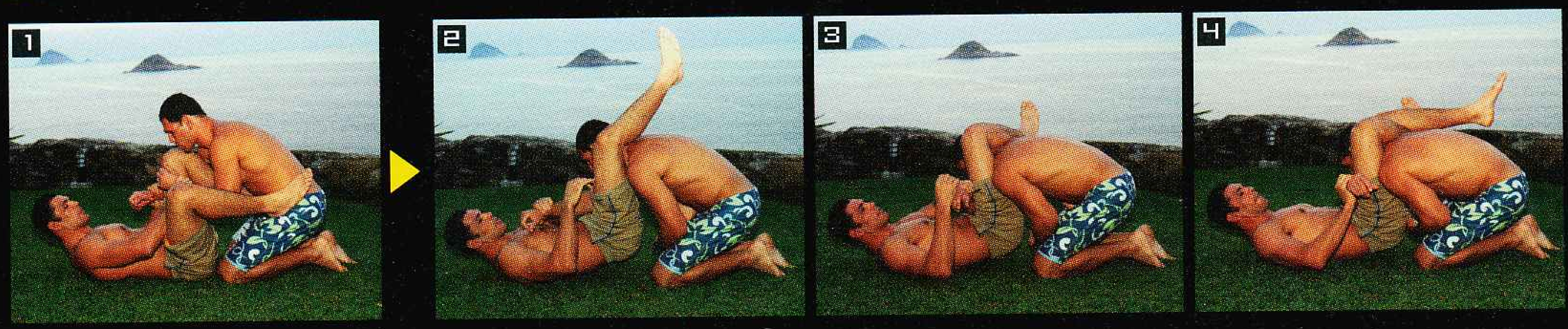
ノゲイラ　ムエタイは身も心もタフになる素晴らしい打撃競技だけど、相手の攻撃をかわす、相手との距離を作るという部分でボクシングを本格的に習う必要があると思うようになったんだ。

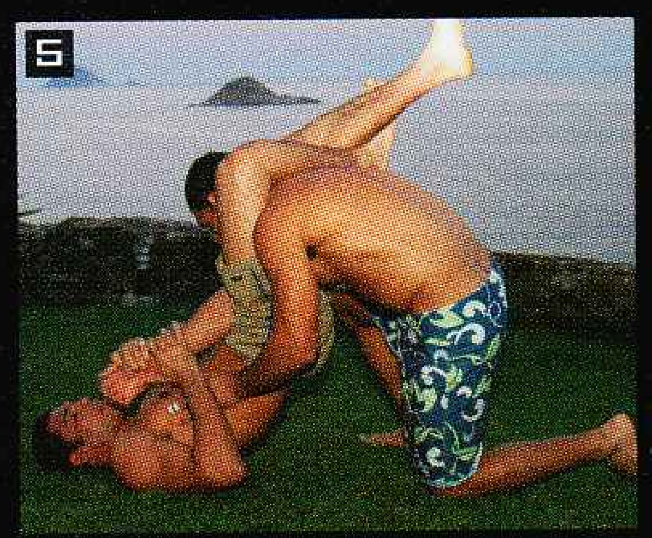
――それはいつぐらいから？

ノゲイラ　去年、ミルコ・クロコップと戦ったときだよ。ブラジルのアマチュア・ナショナルチームのコーチをしているルイス・ドリアは、実は僕がバイーアで15歳から19歳まで、ボクシングを習っていた人物なんだ。今WBO世界ライト級王者で、この前までWBA世界スーパーフェザー級とWBO世界ジュニアライト級王者だったア

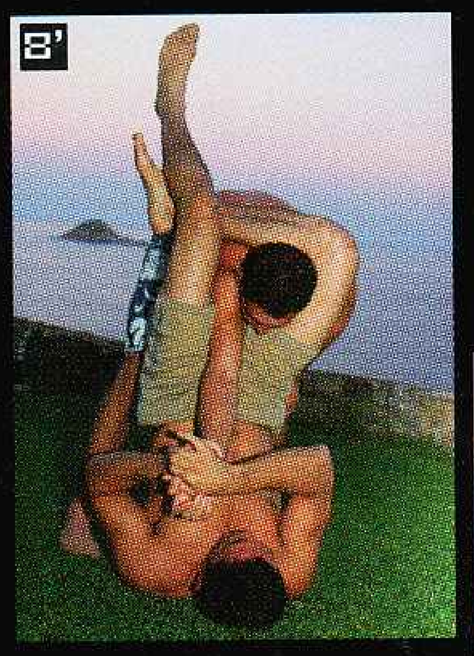
DIGO NOGUEIRA

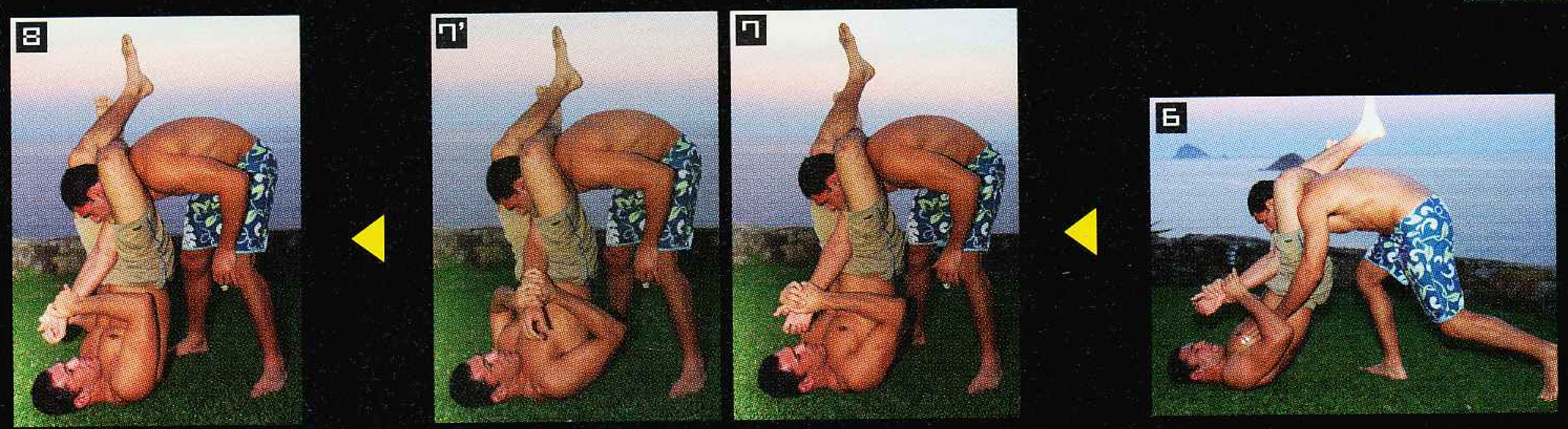
三角絞め→腕ひしぎ三角固めを魅せる、そして語る





まず最初にガードの態勢からホジェリオの右手首をしっかり捕まえる（①）。右手をひきつけると同時に、両足をあげ三角絞めの態勢に。このとき、ホジェリオの右手を彼の顔の下を通過させるように、僕から見て右側にホジェリオの手を持ってくるんだ。そうするとホジェリオの顔が下がって、足がロックしやすくなる（②〜④）。ロックすると、また腕を戻して三角絞めは完成する（⑤）。だいたいはこれで極まるけど、時折、この態勢で僕の体を持ち上げてスラムを狙う選手もいる（⑥）。この場合は、ホジェリオの右腕を彼の体の右外側に向けるんだ（⑦）。これが右腕を内側に持ってきてしまうと、持ち上げることを許してしまう（⑦'）。きちんと腕を外側に持ってきていると、相手が持ち上げようと力をいれた時点で腕を極めることができる（⑧&⑧'）。





ボクシングが進歩すれば、パンチだけでなく距離のとり方などVTでアドバンテージを握ることができる

セリーノ・ポポ・フレイタスも同じジムでボクシングをやっていたんだ。ポポは普段68キロぐらいの体重なんだけど、もう僕はボコボコにされていたよ。

——たしか、ナショナルチームと一緒にキューバでトレーニングを行ったよね。

ノゲイラ　ダリアは僕をナショナル・メンバーの一員に加えたかったみたいだけど、まぁ、とにかく素晴らしい機会を与えてもらったよ。いろんな意味で、印象に残ることが多かった。彼らはアマチュア・ボクサーだよね、お金のためじゃなくてメダル、そして名誉のために戦っている。オリンピックの6ヶ月前から、調整しているんだ。彼らの情熱を肌で感じることができた。これ以上ないっていうくらいハードな練習を4週間に渡って完遂できたことは、とても大きいな意味がある。

——本当に意義のある経験になったみたいだね。



パンチの完成度だけでなく、さらなる波及効果が期待できるボクシング・トレーニングだ

ノゲイラ　僕が一番大きな選手なのに、ずっと小さい選手が僕より遠い距離をとって、物凄い踏み込みとともに相手に近づいてパンチを打ち込むんだ。凄いだろう？　そんなことが実際に有りえることなんだと理解できたことだけでも、物凄くためになったと思う。あの遠い距離をキープできて、あのタイミングで相手の懐に入り込むことができれば、VTでも物凄いアドバンテージになるだろうね。



ミノタウロの自宅は、セントロから車で35分ほどの南下したリオでも有数の高級住宅街ジョアにある。

——ただ、ヨコイと戦ったときは、ボクシングとグラップリングの技術的なバランスが上手くいっていないと感じた関係者も多かったみたいだよ。

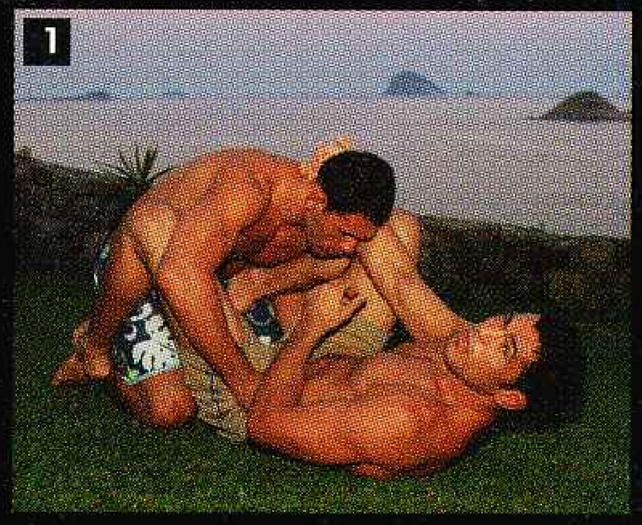
ノゲイラ　ヨコイと戦ったときは、少しボクシングのトレーニングに集中しすぎていた。やはり試合前はVT用の練習をしないといけない。だから、ヒーリング戦は違和感はなかったと思うんだけど。

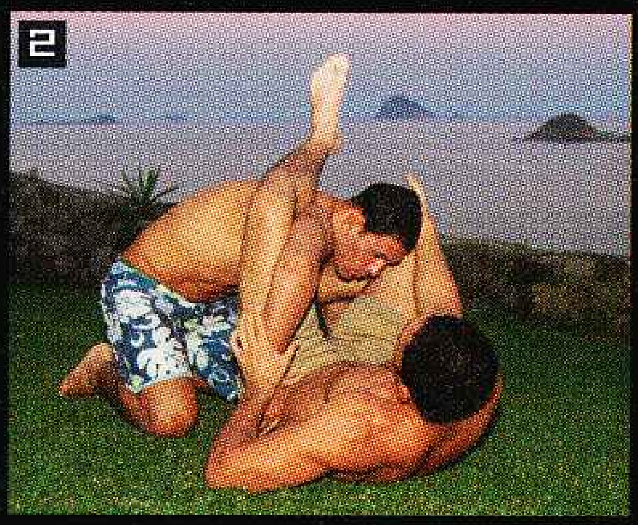
——ボクシングの練習を本格的にするようになって、また一段と強さが増したと考えていいのかな？

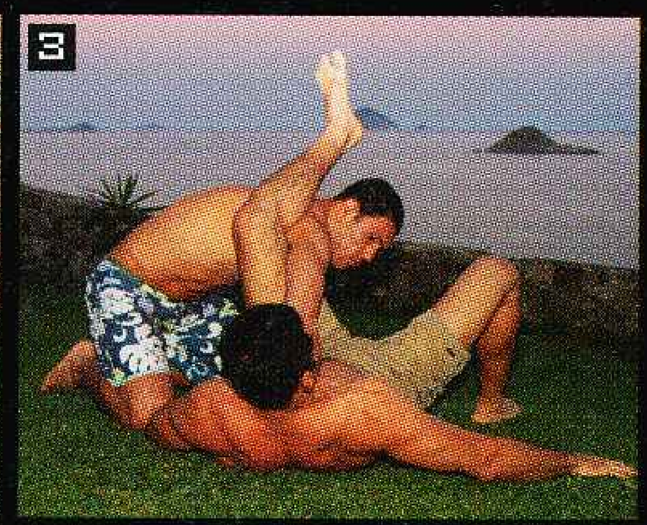
ノゲイラ　もちろん。拳を使った技術、リング上で発揮できる力だけじゃなくて、ウォーミングアップの仕方、クールダウンの方法、色んなことを学べた。今、僕はこの家に作ったリングでいつでも練習ができるから、これ以上ないくらい良い体調を維持できているんだ。ボクシングの練習は、体を動かすことだけでなく、僕にコンディション維持の仕方を教えてくれたから、僕は最高の体調を維持でき、最高の動きがリング上でできるはずだよ。寝技でもスタンドでも、どちらの展開になってもね。

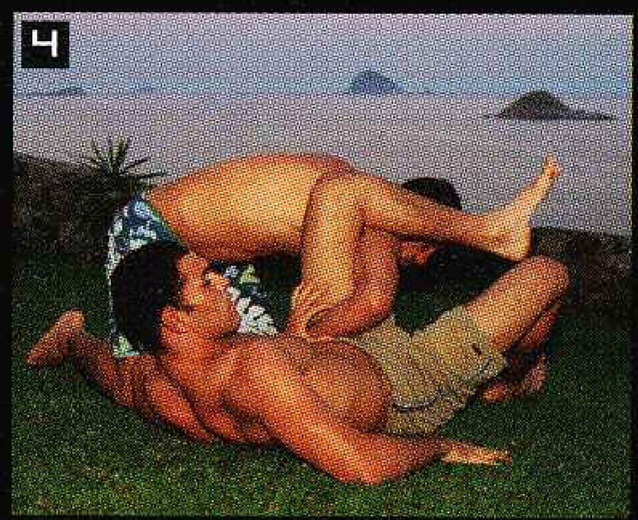
ANTONIO ROD

オモプラッタ&アンクル・ロックを魅せる、そして語る

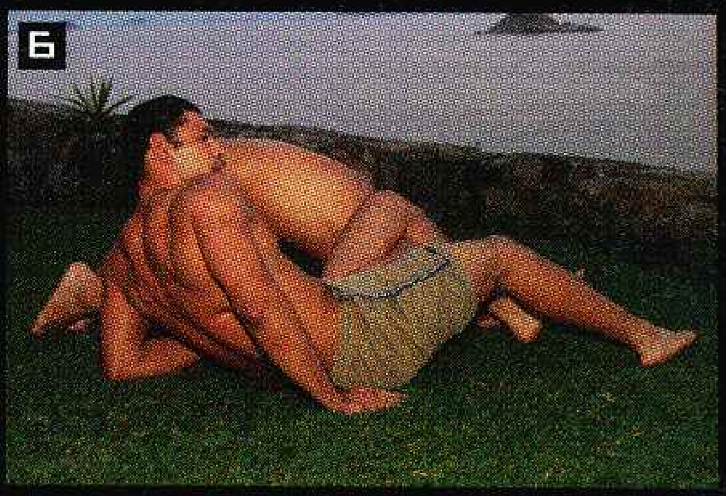




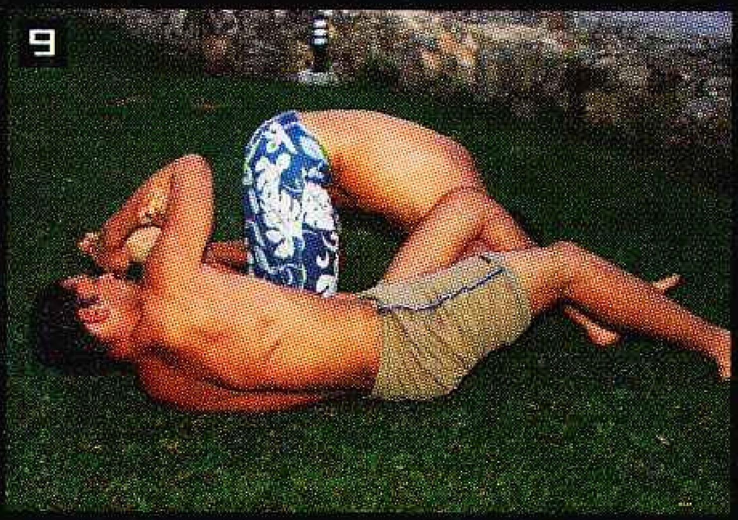






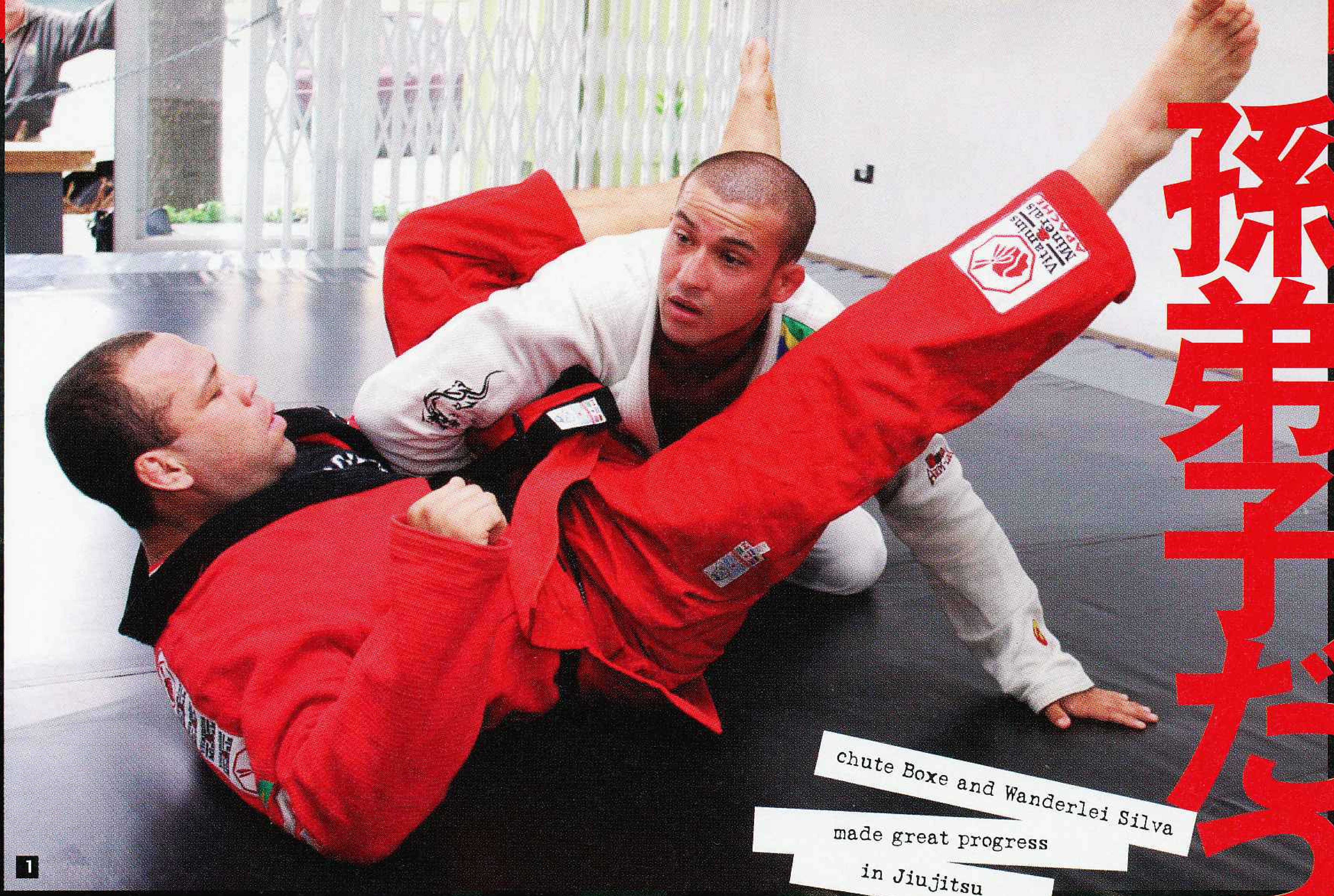


まずスタートは、ごく普通のオープンガードの態勢をとる（①）。左足をワキの下から通し、カカトをホジェリオのクビの後ろに持っていこうというくらいの意識で、深くいれる（②）と同時に、右手を使って尻を滑らせる（③）。そのまま体がホジェリオと平行になるまで、右手を使い尻の向きを変える（④）。全体重を左足にかけ、同時に立ち上がるぐらいのつもりで上半身を起こす（⑤&⑥）。ここで注意すべき点は、ホジェリオが立ち上がったり回転して逃げないように、左手でホジェリオの右足をしっかりと捕まえておくこと（⑦）。そうでないと、僕がエンセン井上にやられたみたいに顔をニーで蹴られることがあるからね。そして、そのまま目の前にある足首をホールドすると（⑧&⑨）、この技は完成する。









1

ヴァンダレイ・シウバは、ヒクソン・グレイシーの孫弟子だった

シュートボクセ外伝 ～組み技～

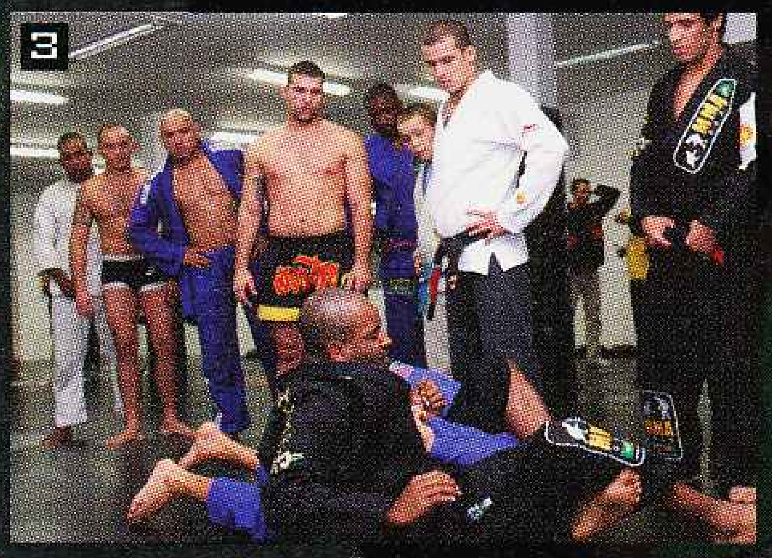
CHUTE ★ BOXE

世界のバーリトゥード界を席巻するシュートボクセ・アカデミー。
彼らの最大の強みは、もちろん危険な打撃にある。その一方で、なぜ彼らがあれほどアグレッシブな蹴りやパンチを駆使することができるのかという見方もできる。
どこよりも早くグラップリングの重要性を理解していたシュートボクセ。
彼らが歩んできたグラップリング習得の軌跡とともに、シュートボクセの組み技に取り組む姿勢をヴァンダレイ・シウバ、クリスチアーノ・マルセロを中心に紹介したい

Text & Pix by Marcelo Alosno

まだ本格的に練習はしていないんだ。でも、

2

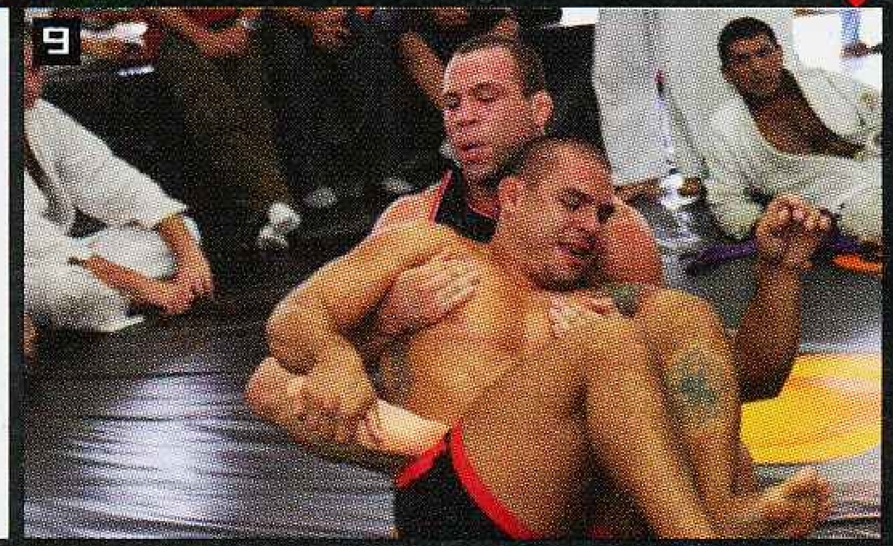
3

4

5

6

7

8

9


①道衣を着て柔術のトレーニングに勤しむヴァンダレイ・シウバ。オモプラッタを狙う。ガードの中にいるのがクリスチアーノ・マルセロ。②シュートボクセは「シュートボクセ柔術」をオープンさせた。③ハファエル・コルデイロは、ムエタイのヘッドコーチ。柔術でも黒帯を巻く。④ヴァンダレイに十字をしかけるニーノ。2001年ムンジアル・メジオ級２位のニーノ・シェンブリも、グレイシー・バッハからシュートボクセにやってきた。⑤道衣を着るムリーロ・ニンジャとエヴァンゲリスタ・サイボーグ。⑥シュートボクセといえばムエタイ、そしてバーリトゥードの名門。壁にはズラリとグローブが。⑦ショーグン＆ニンジャ兄弟が、女子練習生と。⑧１９９８年ナショナル選手権で準優勝ジョアォン・カルロス・ネートがレスリングのコーチを務める。⑨マカコとシウバの実戦さながらのスパーリング

組み技効果？
思いっきり打撃が使えるようになった！



―クリスチアーノ・マルセロが、いかにシュートボクセに大切な人物か、ヴァンダレイ、君の口から語ってもらえるかな。

シウバ　クリスチアーノが、俺達のチームに加わったことは、本当に大きなターニングポイントになった。それまで俺達は個々に、それぞれの場所で柔術を習っていたに過ぎないのが、彼がアカデミーにやってきてメンバーが全員揃って、俺達のアカデミーで柔術のトレーニングを積めるようになったんだ。毎日、シュートボクセのVTチームは柔術衣を着て、練習するようになったんだよ。俺はVTチームの練習だけでなく、一般のクラスにも顔を出しているし、物凄く寝技が強くなったと思う。全員で一つのことをすれば、欠点もよく見えるようになってくるからな。

―その後、チームにはジョルジ・マカコ、ガブリエル・ナパォン、ニーノ・シェンブリら黒帯柔術家が加わったね。

シウバ　とにかく強くなる要素は全て整ったといえる。素晴らしい環境だよ。彼らと練習をしているおかげで、物凄くガードワークに自信が持てるようになった。だから、以前よりずっと積極的にスタンドで打撃をだすことができる。思い切り踏み込んで、そこにタックルを合わされても、きちんと対処して、またスタンドへ戻ることが可能になったんだから。ますます、パンチやヒザ蹴りに磨きが掛かるということだ（笑）。

―マカコが「ヴァンダレイのギロチンは凄い」と言っていたけど。

シウバ　日本のファンには楽しみにしていて欲しい。彼らはペケーニョ（＝アレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ。修斗世界ライト級チャンピオン。ペケーニョとは愛称で、ポルトガル語で小さいという意味）というギロチンのスペシャリストを既に知っているけど、今度はグランジ（＝大きいという意味のポルトガル語。ペケーニョに対してグランジとは、ヴァンダレイ自身のことを指している）というギロチン・マスターの存在を、すぐに知ることになるだろうから（笑）。

―柔術だけでなく、ジョアォン・ネトというレスリング・コーチもチームに加わった。

シウバ　実はケガのせいもあって、彼とはまだ本格的に練習はしていないんだ。でも、彼のクラスを見る限り、とても緻密なテクニックを知っているし、彼もクリスチアーノ同様、チームにとてつもない効力をもたらしてくれるだろう。テイクダウンの指導を見ていても、すぐに彼の持つコーチの資質が理解できたよ。すぐに彼のクラスに合流して、テイクダウンを学ぶことにする。倒すことも大切だし、倒されないようになることも必要だからな。

―投げといえば、ルタリーブリからやってきたダニエル・アカーシオも実戦のなかで、素晴らしいテイクダウンを見せてきた選手だね。

シウバ　ダニエルの素晴らしいところは、パンチの打ち合いを恐れなくて、得意の投げを試合で使える点だ。寝ても立っても強いのに、投げがその上をいく。なんといってもハートが強いから、あんなに凄い投げを試合で決めることができるんだろう。

―ヘビー級転向も噂されるヴァンダレイだけど、シュートボクセはグラップリングとリンクし、ますます完璧なファイターに近づけそうだね。

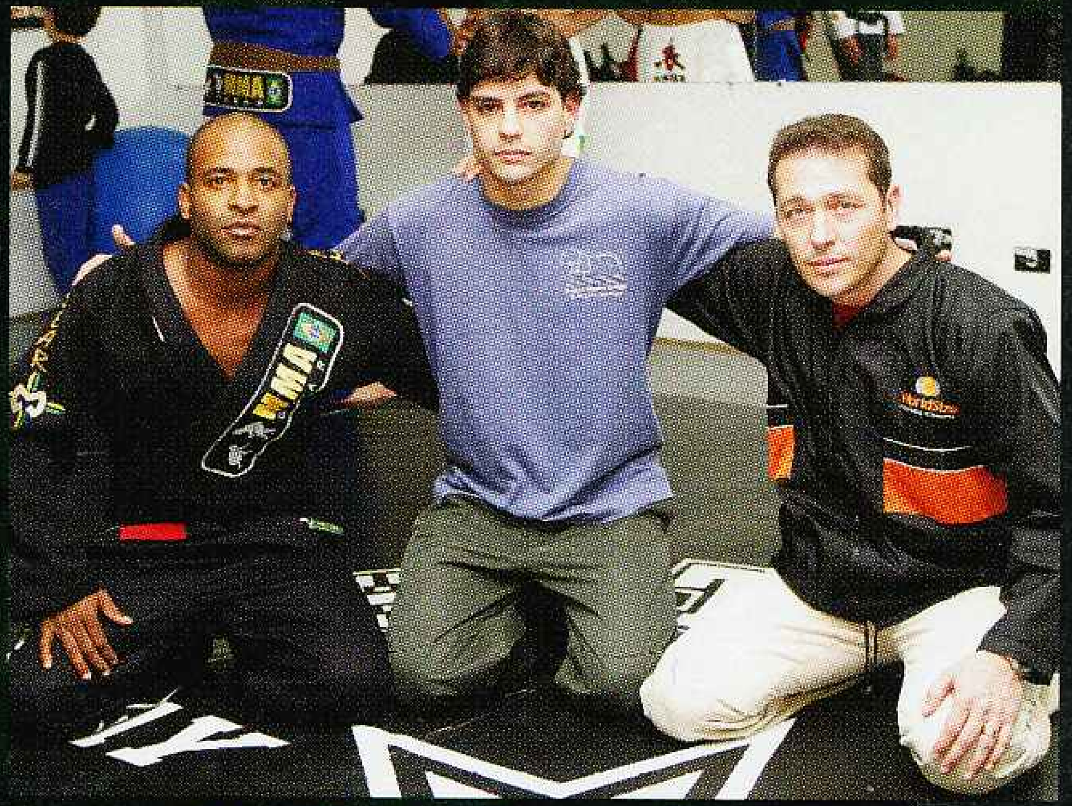
シウバ　とにかく今は、ユーキ・コンドーという俺の階級で最もデンジャラスなファイターと戦うことに集中している。だが、奴をぶちのめした後に、俺はヘビー級に転向するだろう。年末にはアントニオ・ホドリゴ・ノゲイラか、ミルコ・クロコップ、エメリヤーエンコ・ヒョードルのうちの誰かと戦いたいと思っている。とても強い3人だけど、俺は大丈夫だ。柔術もレスリングも強くなっているし、アグレッシブなヴァンダレイ・スタイルは凄みを増すばかりだからな。

ヴァンダレイ・シウバ、シュートボクセのグラップリングを語る



シウバとコルデイロ、シュートボクセの黒帯柔術家だ

シュートボクセストーリー



シュートボクセを支える両輪フジマゥ・フェディリコ会長(右)とコルデイロ(左)に挟まれているのが、レスリング・コーチのネート

1978年、コーヒーの名産地パラナ州クリチバにシュートボクセ・アカデミーは誕生した。シュートとカタカナで表現すると、日本でいう真剣勝負＝ガチンコと混同しそうになるが、ポルトガル語でシュート（実際は“シュッティ”に近いかもしれない）とは蹴るということ。つまり、蹴りのあるボクシング、キックボクシングと同じ意味合いを持つといってもいいだろう。

シュートボクセの創始者フジマゥ・フェディリコは、まさか自分が開いたキックボクシングの道場が、25年の時を経て、世界最高のバーリトゥード・アカデミーになり、日本や米国、スペインに支部を持つことになるとは夢にも思っていなかった。

シュートボクセが初めてVTとアクセスしたのは、1991年にリオで行われた「柔術 vs ルタリーブリ」のVTをテレビ観戦した時だった。これによりVTという新しい世界を知ったフェディリコは、柔道の黒帯で息子がムエタイを狙いにやってくるアントニオ・カルロス・ニコに、寝技の基礎を教わるようになる。

当時、既に複数の支部をクリチバに持ち、ムエタイを最も人気のある格闘技に仕立て上げたビジネス・センスの持ち主は、この瞬間、時代がVTを中心に動き出すことを

――今回はシュートボクセ飛躍、その影の主役といもいえるクリスチアーノのことを大々的に日本で伝えたいと思っている。
クリスチアーノ　オー、サンキュー・マイ・フレンド。僕が柔術を始めたのは12歳の時、それまでは4年間テコンドーのトレーニングをしていた。最初の柔術のコーチは、カーウソン・グレイシーの黒帯カスキーニャだったけど、1年後にはハウフ・グレイシーが指導していたグレイシー・チジューカへ移ったんだ。でも、その直後にハウフがカリフォルニアへ引っ越してしまって、チジューカにはホイラーがやってきた。1994年、ブラジルへ里帰りにきたホクソン（ヒクソン・グレイシーの長男、故人）と初めてアカデミーで出会い、僕と彼の交流が始まったんだ。
――ホクソンと友人になったことで、君の長いヒクソン・グレイシー家における生活が始まったのかい？
クリスチアーノ　1995年、僕が18歳で紫帯だったとき、パンナム選手権に出場し、大会後にヒクソンの家を訪れたんだ。ホイラーが「一度、ヒクソンと練習してこいよ」って言ってくれたもんだから。その時からだね、ホクソンが僕の親友になったのは。で、僕らが余りに楽しそうに過ごしているから、キム（ヒクソン・グレイシー夫人）が「ここに住んでみない？」となったみたいで。キムがヒクソンに話をして、ヒクソンもそれを了承、結果的に僕はヒクソンの家にそれから2年間も住むことになったんだ。
――じゃあ、ほとんど家族のようなものだよね。
クリスチアーノ　ヒクソンは僕にとって父親のような存在だよ、実際。10代の娘が二人もいるのに、柔術をやっているだけの見知らぬ男を家に招きいれることができる。凄いことだと思うよ。だからヒクソンが僕を信用してくれている以上に、僕は彼を尊敬しているんだ。ヒクソンのことを悪く言う輩だっているよ、でも僕は絶対にそんな言葉に頷くことはない。だって、そいつらは2年も一緒に一つ屋根の下で生活したことないじゃないか。ヒクソンは柔術の偉大なマスターというだけでなく、僕の人間形成に最も影響を及ぼした人物だと胸を張って言えるよ。そしてホクソン……、彼が亡くなったと聞いた2日後に、僕は彼の名を背中に刻んだ。これからも、マイ・ブラザーとともに生きていこうと思ったから。
――……。ところで、ヒクソンの影響を強く受けた君は柔術の大会に出ていても、一本勝ちを狙いポイントを稼ぐことはなかったんだね。
クリスチアーノ　ヒクソンの家で生活していたとき、僕は少しでも彼のような人間になれるよう努力していた。柔術のスタイルだって、ヒクソンに近づきたいからね。ヒクソンはポイントなんて気にしなかった。彼はパスを許しても、一本を狙えるならパスをさせて、そして関節を狙う。そんな動きができる柔術家はヒクソン、ただ一人だ。
――ヒクソンのスタイルを継承しているというわけだね。
クリスチアーノ　だから僕は柔術の大会に出場することをやめてしまったんだ。今の柔術は相手を極めるかどうかを争っているんじゃなくて、ポイントゲームになってしまった。僕はいつも関節を極めることにこだわりたいんだ。
――そんな君の姿勢が、アーノルド・クラシックでのシャオリン戦に集約されていたというわけか。
クリスチアーノ　あれは2002年の2月だったね。オハイオ州で開催されているサブミッションの大会、アーノルド・クラシックに出場し、僕はヴィトー・シャオリン・ヒベイロと戦った。そしてアームロックを極めたんだ。物凄い音が彼のヒジから聞こえてきて、「あっ、壊れた」って思ったんだけど、シャオリンはタップしなかった。で、僕はテイクダウン・ポイントで負けてしまったというわけさ。
――君がヒクソンの家に住んでいた当時、ヒクソンは息子のホクソンをファミリーを代表する柔術家に育てようとしていたと思うんだけど。彼らの練習を見たことは？
クリスチアーノ　もちろん、あるよ。僕は彼らのガレージ・トレーニングの一員だったから。とにかくヒクソンは、ホクソンに

ンは似ている」

ソン・クリスチアーノ・マルセロに聞く〜





①兄弟のように仲の良かったヒクソンの長男ホクソン、そしてヒクソン・グレイシーとともに生きる決意のタトゥー。②クリスチアーノは1978年12月3日生まれの26歳。こう見えてもシルバと同い年

本能的に悟ったのかもしれない。
シュートボクセ自体が、VTに乗り出したのは、1993年だ。その後、同アカデミーの看板選手となるペレが、ビーチで4人のカポエイラ・アカデミーに通う人間と乱闘事件を起こした。要はリンチに近い暴行を受けたのだが、フェディリコ会長は、ここでペレ、ハファエル・コルデイロ、ニルソン・デ・カストロ、ファービオ・ピエモンチのトップ4選手を選抜し、ペレに暴行を働いた4人のカポエリスタにVTでの決着を要請した。
このとき、シュートボクセ勢は4人が4人揃って対戦相手を病院送りにしたにも関わらず、フェディリコ会長の胸中には新たな疑問が沸きあがっていた。
「果たして、今日のような戦い方で、あのルタリーブリを圧倒した柔術家たちに対抗できるのか。柔術に対抗するには、どうすれば良いのだろうか」。彼の優れた頭脳は、柔術を学び、そのテクニックを吸収するという非常に明快な答を弾き出した。
UFCがアメリカで開催され、VT人気が世界の格闘技界を席巻していた当時、VTとは柔道vsボクシング、柔術vsケンポーというような、スタイルの優劣を争う異種格闘技戦に過ぎなかった。にも関わらず、この時点でフェディリコ会長は、VTに勝つには戦いの全ての要素を取り入れる必要があることを認識していたことになる。
幸い、クリチバは柔術のメッカ＝リオのように競技間の争いが激しいことはなく、比較的に簡単にシュートボクセのメンバーが、柔術のトレーニングに参加できた。
あくまでも個人が、柔術の道場に足を運ぶという形式が取られており、ペレとショーグンはグレイシー・バッハ系エリオ・ソネッカ&グスタヴォ・ムギアチの下で、フェディリコ会長とコルデイロはカーウソン・グレイシー系のピーニャ、ヴァンダレイ・シウバは同じくカーウソン系のエリック・タヴァレスの門を叩いている。
ブラジルでナンバーワン・ムエタイ・アカデミーの異名を既に獲得しつつあったシュートボクセ勢が、この各々のレベルで柔術を習うようになった頃、VTではストラ

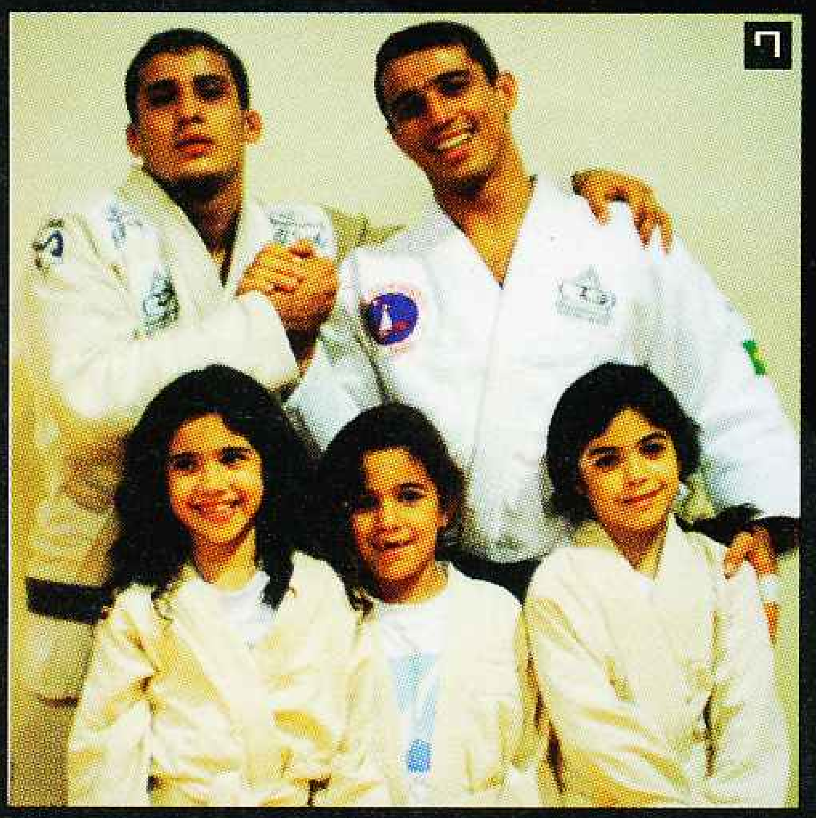
対してじっくりとディフェンス面を指導していた。アグレッシブさはグレイシーの血
エスに誘われシュートボクセにやってきた。一人の選手としてね。
ン・グレイシー柔術のシンボルのタトゥー
イカーは倒され、寝技で敗れることが日常

が「ここに住んでみない？」となったみた

なれるよう努力していた。柔術のスタイル







③グレイシー・ファミリー勢ぞろい。下段にカーリーニョス、ホイラー、ヘウソン、そして嬉しそうな顔のヒクソン。中断右端がクリスチアーノ、左が在りし日のホクソン。中央の女性はキム夫人。上段左から二人目はシャンジ・ヒベイロ。④2002年のアーノルド・クラシック。シャオリン、マーシオ・フェイトーザ、ダニエル・モラエスらと顔を並べる。⑤父のように慕うヒクソンと。⑥ヒクソンのガレージ・アカデミー。⑦直接の師匠にあたるホイラーと3人の娘たち。

ヒクソンは僕にルーツを忘れるなとだけ言った

対してじっくりとディフェンス面を指導していた。アグレッシブさはグレイシーの血に含まれているからね、とにかく防御方法を丹念に教えていたね。

――なぜブラジルへ戻る決意を？

クリスチアーノ　何か行動を起こすときには、正しいタイミングを見計る必要があるだろう？　忘れがたき日々をいつまでも満喫できるほど、人生は長くないからね。そろそろブラジルへ戻るべきだ……、そう感じたら、それはヒクソンの家を離れることを意味するんだ。

――ブラジルに戻ってきてからは、何を？

クリスチアーノ　スポーTVで格闘技の番組をやっているジョルジ・ギマリャエスと一緒に働き始めた。そして「VTをやろう」と思ったのもこの頃だ。カンポグランジで行われたBRFというVTの4人トーナメントに出て優勝した。一回戦は4分ほどで一本勝ちしてけど、決勝は37分も戦ったんだ。途中で対戦相手のグローブが破れてしまって、予備のグローブがないから急遽、素手に変わってね。貴重な体験をさせてもらったよ（笑）。カリフォルニアから戻ってから、ホイラーに茶帯を巻くことを許され、ミナスジャライスのアカデミーを任されていた。この頃はムンジアルに出て準優勝しているんだ。そして2001年、メッカVTのプロデューサーでもあるギマリャエスに誘われシュートボクセにやってきた。一人の選手としてね。

――その頃のシュートボクセの印象は？

クリスチアーノ　後からハファエル・コルデイロに聞いたんだけど、彼らは僕を2週間でリオに追い返してやろうって思っていたらしい。とんでもないくらい、スネが腫れ上がってね。「ここが踏ん張り時だ」って、必死になって練習を続けていたら、そのおかげで彼らに認められるようになったんだ。そう、「痛みなくして、前進はない」ってシュートボクセのモットーを最初の2週間で、本当に痛いほど教えてもらったよ（笑）。

――そして柔術のコーチも務めることになった。

クリスチアーノ　当時、トップ選手は既に個々に柔術の指導を受けていた。でも、柔術家たちはシュートボクセのメンバーに本当の意味で柔術を指導することを憚っていたみたいで、彼らはリアル・スキルを教えてもらっていなかった。僕はプロフェッショナルとして、ヒクソン、サウロ、ホイラーに習った技を彼らに伝授したよ。

――シュートボクセのメンバーに、柔術を指導することに対して、ヒクソンは？

クリスチアーノ　多くの柔術家たちが、僕の行動を非難していたときに、ヒクソンは「自分のルーツだけは忘れるな」と言ってくれた。僕は彼に自分の背中にあるヒクソン・グレイシー柔術のシンボルのタトゥーを見せたよ。それにシュートボクセのメンバーは多くのVTファイターが、柔術といっても衣無しの練習しかしていないのに対して、彼らは柔術衣を着たピュア柔術のレッスンを毎日受けている。最初はディフェンスから、そして今では彼らは柔術の技で対戦相手を仕留めることができるまで成長した。一流のアスリートが、3年近くも本気で柔術の練習をしてきたんだ。彼らのテクニックは、一流といっても過言ではないよ。それに多くの選手が、一般ジム生相手のクラスにも顔を出す。彼らは本当に強くなることに貪欲で、真摯な姿勢を持ち続けているよ。

「ヴァンダレイとヒクソンは似

～シュートボクセ、組み技飛躍のキーパーソン クリ

――オリジナル・シュートボクセのメンバーで最も優れた柔術家は？

クリスチアーノ　ヴァンダレイ……ではないね（苦笑）。マウリシオ・ショーグン、ムリーロ・ニンジャ、そしてハファエルかな。

――君はヒクソンとヴァンダレイ、稀代のVTファイターと一緒に練習をしたことがある唯一の人間だ。

クリスチアーノ　神に感謝しているよ。実はヴァンダレイとヒクソンは見た目、そして人々との接し方はかなり差があるけど、内面は凄く似ていると思うんだ。謙虚で、他人を悪く言わない。そしてフレンドリー。二人とも格闘家として、類稀な資質を神から与えられている。一番似ていると思うのは、いい感じで自分に自信を持っている点だよ。だから対戦相手を尊敬することができる。彼らは二人とも最強になるために生まれてきた男達なんだ。

イカーは倒され、寝技で敗れることが日常茶飯事だった。なんの苦も無く勝利を手にできる柔術家たちは、当然、柔術の技術だけで戦っていたが、寝技で逃げる術を身につけつつあったシュートボクセ勢は、異種格闘技戦を超越したクロスオーバースタイル、総合格闘技的なVTを持ち込んだ。組み技だけの柔術家の寝技を凌ぎ、立ち上がって打撃KOするスタイルは、すぐにブラジルVT界を席巻していく。

1996年にサンパウロで行われていたフリースタイル・トーナメントにペレとヴァンダレイが出場。ペレは当時、VT界で頭角を現していた柔術界の寵児ジョルジ・パチーユ・マカコを下し、ヴァンダレイもまたトーナメントを制した。

このサンパウロのローカルVTでの彼らの活躍に目をつけたのが、今ではK-1ブラジルを主催するセルジオ・バッタレリ（P120参照）であった。当時、ブラジル発の国際的なVTイベントの開催を企画していたバッタレリは、ワールド・バーリトゥード・チャンピオンシップの共同開催を経て、1997年にインターナショナル・バーリトゥード・チャンピオンシップ（以下IVC）を開催し、ブラジル全土から選抜したファイターに戦いの舞台を与えることになる。

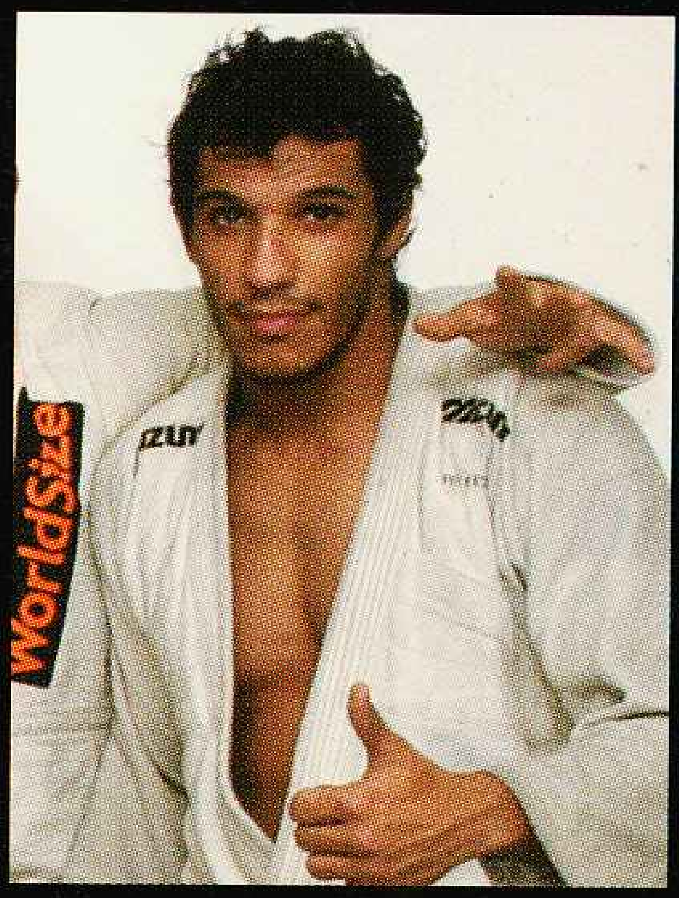
このIVCで、シュートボクセの名は世界的に認識されるようになる。彼らはIVCの成功をきっかけに欧州、北米、そして日本へ進出することにも成功。一方、国内でフェディリコが打った次の手は、シュートボクセ所属選手に桧舞台へ立つまでの経験を積む場を自らの手で行うことだった。2001年、メッカ・ワールドVTを地元クリチバで行い、ムリーロ・ニンジャ、アンデウソン・シウバら、次世代バーリトゥーダーがメジャーデビューを果たした。

世界を舞台に戦うようになったシュートボクセ勢だが、圧倒的な戦績を誇ることができたかというと、実はそうでもない。PRIDEにおけるシウバの活躍に注目が集まるが、一方では世界を相手に苦戦を強いられる所属選手がいたことも事実だ。

その原因は、以前は組み技だけだった柔術家がムエタイ、ボクシングを学び始めた

ルイス・アゼレド（ムエタイ&柔術）

マカコ・ゴールド→ 桜井マッハ速人と日本で対戦したこともある。メッカＶＴの第１回大会に出場し、当時シュートボクセ所属だったアンデウソン・シウバを破っている



「シュートボクセの凄いところは、師匠の威厳という部分かな。ブラジルではマスターといえども、友達のような雰囲気があるのんだけど、ここは違う。フィジマゥ・フェディリコ会長、マスター・コルデイロの言うことは絶対だ。彼らは物凄く厳しいトレーニングを選手に課す。でも、その全てが選手のために必要なことだから、皆がそれこそ壊し合いのようなスパーリングを繰り返してる。で、練習が終われば何事もなかったかのように、おしゃべりをしてね。こんな雰囲気は、僕は今まで経験したことがなかった。ロニー・アレックスの下でムエタイ、マカコに柔術の黒帯をもらったけど、ここの打撃の練習はとにかくアグレッシブだ。そして、マカコ・ゴールド時代は寝技を鍛えられたけど、ここでは優れた立ち技のスパーリング・パートナーに恵まれている。僕の名前をフェディリコ会長に推してくれたマカコに感謝しているよ」

ジョルジ・パチーユ・マカコ（柔術）

マカコ・ゴールド→ シュートボクセ第一世代の最大のライバル。マカコとペレの抗争が、シュートボクセの名を有名にしたといっても過言でない。ＶＴ32戦のキャリアを誇る

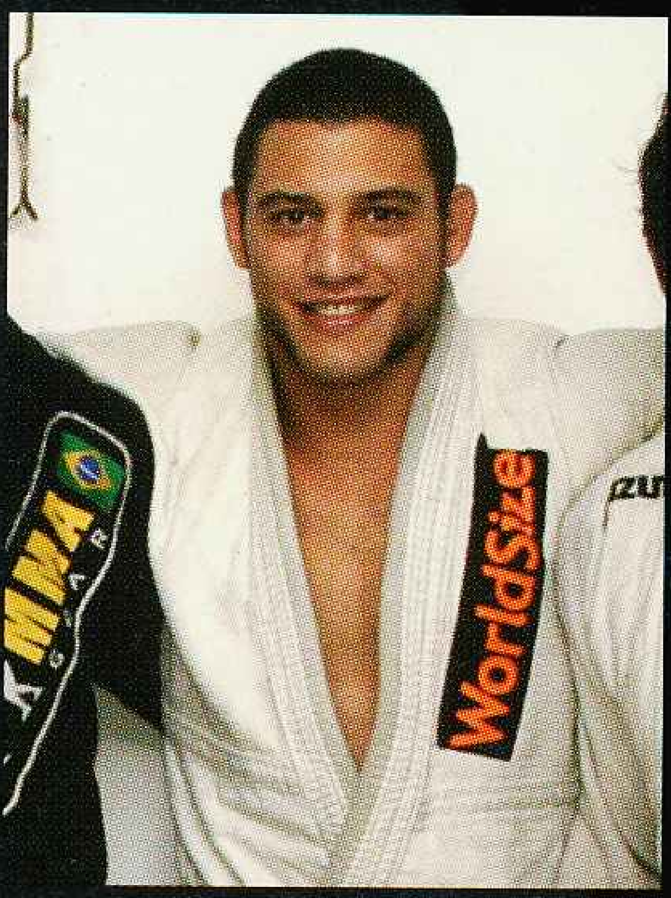


「シュートボクセに移ったのは、今のVTでは絶対的に打撃が必要だから。そして打撃のナンバーワンは、シュートボクセだ。凄いメンバーに囲まれ、世界で最高のトレーニングをするために、僕は毎週木曜日から日曜日までをここで過ごしている。正直、片道400kmのドライブを週に2回、しかも毎週するなんてクレイジーなことだと思う。でも、ここでの充実したトレーニングは何ものにも変えることはできない。今まで『ハードトレーニングを積んできた』なんて言ってきたけど、ここでの練習を経験すれば、以前のトレーニングなんてハードでも何でもなかったことが、よく理解できる。ショーグンとニンジャは兄弟なのに、血みどろになってスパーをし、僕は先週4日間で、コルデイロから3度もダウンを奪われた。ボディへのニー、ボディへの前蹴り、そしてアゴにニーを一発。とんでもない、練習がここでは行われているんだ」

シュートボクセに流れる、新しい血

ニーノ・シェンブリ（柔術）

グレイシー・バッハ→ あの桜庭和志と1勝1敗ながらまったく評価されない悲劇のファイター。柔術時代のガードワークは神技と表現したくなるものだっただけに飛躍に期待



「シュートボクセに来る5ヶ月前に父親が亡くなって、それまでのうのうと生きてきた僕は、一転とてもシリアスな状況に追い込まれてしまったんだ。とにかくファイトの機会を自ら作って、生きるためにファイトマネーを稼ぐ必要ができた。最初はヘンゾのところへ行こうと思ったけど、僕にはニューヨークへ行く現金すら残っていなかった。するとジョルジ・ギマリャエスがフジマゥ会長に話を通してくれて、僕は今、シュートボクセでプロフェッショナル・ファイターとして生活できるようになった。グレイシー・バッハ時代の友人はカーリーニョスが気を悪くすると気にしていたけど、僕は生き残らないといけなかった。試合が必要なんだ。それにシュートボクセにやってきて、この厳しい練習を経験しVTがどういうものか、ようやく理解できた。僕は黒帯柔術家じゃない。大志を抱いている白帯のムエタイ・ファイターなんだ」

ダニエル・アカーシオ（ルタリーブリ）

RFT→ テイクダウンの強さに定評のあるアカーシオは、ルタ系フォーミガ→ヘナヴァソン・ファイトチームを経て入門。メッカＶＴレギュラーの元は外敵



「僕はもともとルタリーブリの選手として、メッカVTに出場し、シュートボクセの選手と戦ってきたから、チームの一員に誘われるなんて思いもしてなかった。強い選手がひしめきあい、なかなかチャンスが回ってこないリオを離れるのに、完璧すぎるオファーだった。でも、ルタドールの僕がムエタイのシュートボクセにやってきて、まさか柔術衣を着て練習するなんてことは、全く想像していなかったよ。生粋のルタリーブリ選手の僕にとって、衣は初めての経験。でも、クリスチアーノの指導は凄く丁寧だし、7ヶ月のトレーニングで、僕は青帯を巻けるようになった。ここにくれば打撃が伸びることは分かっていたけど、まさか寝技でもこんなに進歩できるとは嬉しい誤算だよ。特にニーノと衣無しで練習して、色んな点で勉強になっている。残念なことにスタンドで勝てるから、まだその部分を試合で出せていないんだけどね（笑）。」

ように、世界中でシュートボクセが手を染めたクロスオーバースタイルが当然となり、ＶＴは総合格闘技に姿を変えていたからに他ならない。ここにシュートボクセでは、個々に柔術を学ぶのではなく、専任の柔術コーチをアカデミー内に設けることになった。その役目を果たしたのが、優れた柔術の技術を持ち、わざわざクリチバにムエタイの習得にやってきたクリスチアーノ・マルセロだった。ハードなムエタイ・トレーニングを積むクリスチアーノに対し、誰もが心を開いており、皆が彼を友人として信用していたことが、シュートボクセ勢の寝技の成長を大いに後押しした。

防ぐ柔術から、仕留める柔術に方向転換したシュートボクセ。昨年は選手の大量離脱を経験したが、その後、マカコ、ニーノ・シェンブリ、ダニエル・アカーシオら、柔術&ルタリーブリから新しい血を導入し、コーチング・スタッフにもレスリング専門のコーチ=ジョアォン・カルロス・ネトが加わった。ＶＴのための柔術は、ムエタイのアカデミーに、柔術だけを習いにくる新しい練習生を生み、新たなビジネス展開が可能になるまで発展した。

２００４年7月、フェディリコ会長はシュートボクセ柔術をオープン。世界最強のＶＴアカデミーのブランドは強く、今後、シュートボクセ柔術は、柔術界でも台風の目になることは火を見るより明らかである。７００平米の新しい道場の2階には、６つのベッドルームを併設し、ブラジル全土はおろか海外からの格闘留学生を受け入れる態勢も整った。さらにフェディリコ会長はクリチバの郊外に、５０エーカーの農場を買い取り、日々厳しいトレーニングを繰り返す選手たちに、リラックスできる環境まで提供している。

「ＰＲＩＤＥだけじゃない、ＵＦＣ、ブラジル国内のイベント、日本のパンクラス、修斗、世界中のリングをシュートボクセのメンバーが制覇する準備は整った」と豪語する。この言葉、シュートボクセの実績を知る者であれば、誰一人として大言壮語と捉える人間はいないだろう。



近藤有己×松原隆一郎

近藤有己という不思議を分析する。

I only moves
Punch, Kick, Beat the opponents
Fighting is whole my life.

近藤有己とは不思議な選手だ。
立ち技・寝技を問わずにあらゆる角度から襲う打撃など、
規定の枠をぶち壊すような発想がリング上の至るところに現れている。
シウバ、ミット打ち、伊藤式体操、古武術、生涯現役…。
これらのキーワードから「近藤有己という不思議」を解明すべく、
大道塾ビジネスマンクラス師範代「戦う東大教授」松原氏が乗り込んだ。

和良コウイチ＝文　峯本清成＝撮影
text by Koichi Wara　photo by Kiyoshige Minemoto

近藤有己

松原　まず話のきっかけとして、近藤さんはシウバというのはどういう選手だと理解しているのでしょうか。

近藤　やっぱりアグレッシヴで…ひねくれていない選手。

松原　アグレッシヴと言うのは打撃のことですか？

近藤　全部ですね。ひねくれていないというのは、本当に試合で逃げるようなところがない。自分がやるべきことを淡々とやるという感じですね。にらみ合ったりするのは、自分の中では、多分彼にとってもおまけでしかないというか。本当にやるべきことを淡々とやるという。

松原　でもそれは、普通の見方と正反対ですよね。彼はすごく興奮するタイプで、それが現れてアグレッシブな攻めになっていると思われていますよね。近藤さんは、むしろ淡々とやっているというか、やるべきことをちゃんとやっているという見方ですか。

近藤　そうですね。そういう気がしますね。そのとき自分ができる攻撃をやるという。たとえば相手がガードポジションになったときに、ここに顔があって、自分の手が空いているから殴るだけ。それが終わったらもう一方の手が空いているから殴るという連続でしかない、すごくシンプルな感じがしますね。

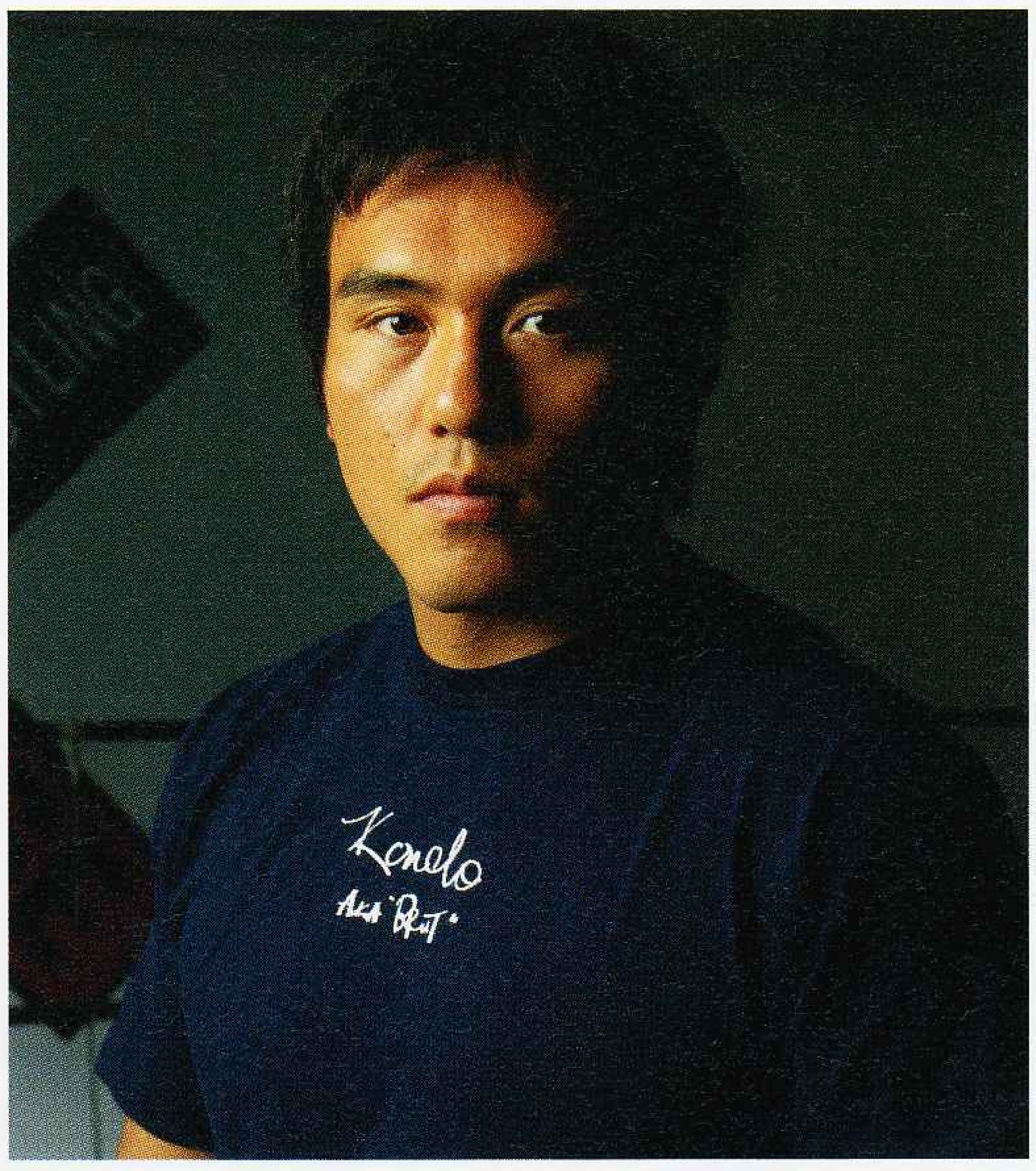
松原　最初にシウバがPRIDEに出てきたとき、私はたまたま会場で見ていて、印象に残りました。面白いなあと思ったのは、打撃の選手であるシウバが下になったらずっと首相撲をやるように首を抑え、ほとんどパンチを相手に打たせなかったことです。だからムエタイ・スタイルを寝技にも応用しているし、そういう意味で自分のスタイルがしっかりしている選手だなと思ったんです。近藤選手は、シウバは目の前にあることをちゃんとやっていると見ているんですね。

近藤　そういう気がしますね。吉田選手に三角絞めを仕掛けたときも、自分ができる技だからやっただけ、そこでできそうだからやったというしかないと。

松原　そうだとすると、近藤さんと割と似ているということになりませんか？（笑）

近藤　そうですね。似ているというか、自分もそういう風にシンプルに、たとえば相手が打撃出身だとか、打撃か寝技のどちらかが弱いとか、それなら自分は打撃に活路を見出そうとか、あまりそういうことを考えない選手になりたいなと思いますね。いろいろな固定観念やイメージで捉えたくないというか。やれることをそこでやる、自分がやれそうなことをどんどんやっていくというのを目指しているんです。

松原　共感するところがあるんですね。じゃあ彼が挑発してくるのは、あまり気にならない？



Yuki Kondo

こんどう・ゆうき

1975年7月17日、新潟県長岡市出身
身長180cm、体重88kg
パンクラスism所属
現ライトヘビー級キング・オブ・パンクラシスト
第5代＆8代無差別級キング・オブ・パンクラシスト

僕は掌底のほうが得意な気がする。そのうち、グローブで掌底を出したい。

近藤　そうですね。それは本当に彼の中のおまけにすぎないですよね。

松原　ところで最近トレーナーの方についてボクシングをやっているそうですが、キックボクシングではなくてボクシングをやるのはなぜですか？

近藤　いや、ボクシングのミットだけを持ってきたというか（笑）、ボクサーを育てたトレーナーなので。

松原　その方に習われたものと、総合でのパンチの打ち方は違ってきませんか？

近藤　うーん、「習っている」という感じではないですね。本当にミットを持ってくれる人、自分の可能性を引き出してくれる人というか。こうしなさいとか、こういう軌道で打ちなさいとか、そういうのではなくて、ミットを出すところに自分が気持ちのいいパンチを打つだけです。

松原　実際菊田さんとの試合にも現れていましたけど、普通のボクシングとは違いますよね。延々と頭を振っているわけではないし。それに蹴りがある競技ほど間合いが遠くないし、不思議に近い間合いで打っていました。ああいう打撃ってあまり見たことがありません。不思議な感じだったんですけど、それはトレーナーとの間でできたものですか？

近藤　いや、トレーナーとのミット打ちは、単にトレーナーとのミット打ちでしかないというか。

松原　たとえば打っている最中に実際だったらタックルが入ってくるわけですよね。パンチに集中していて、気持ちをすぐ変えられるものですか？

近藤　気持ちというか、身体の反応ですね。

松原　そういう身体の反応は、どうやっているのですか。競技の枠を考えちゃうと、ボクシングやっているときはタックルを考えないでしょうし。近藤さんは、自分の中ですぐ切り替えられるわけですよね？

近藤　なかなかできないですけど（笑）。自分の中でもそれはテーマで、打撃だけのスパーリングをやっているときに急にタックル来られちゃうと、100パーセント取られちゃうんですよね。だから自分の中で「打撃のスパーリングなんだ」という固定観念に捉われたくないというか、一瞬一瞬の最高の対応を目指したいですね。

編集部　トレーナーに習ってから、いままでの自分のここが間違っていたと気づいた、というのはありませんか。

近藤　うーん…だんだんパンチ力が増してきているのはあるんですけどね。徐々により体重を乗せやすい打ち方ができるようになったというか。ある日突然ここを変えたからよくなった、というのはないですね。

松原　もともとパンクラスは掌底をやっていたわけですよね。近藤さんは掌底も強かったと思うんですけど、選手によっては、拳は強くても掌底やったらめちゃくちゃ弱い奴とかいますよね（笑）。

近藤　そうですね。僕、結構掌底のほうが得意な気がします。

松原　でも、いまはパンチ力もそれなり強いんじゃないですか。

近藤　あまりパンチ力強くないですよ（笑）。掌底の頃はパンチが禁止されていたから掌底だった。今度はグローブで顔面パンチが解禁になったんで、流されるままにパンチで勝負しているという感じですね。だからこの先もっと掌底も出したいなというのはあります。

松原　え、そうなんですか！

編集部　グローブをつけたまま？

近藤　はい。

松原　それは面白いですね。そんなこと考える奴はいないだろうから（笑）。曙さんな

松原隆一郎

んて、そう考えるべきなのに、拳にこだわってしまっています。

近藤　ただグローブのパンチも、結構自分の中では磨かれてきたなというのもありますね。より伸びのあるパンチ、体重を乗せられるパンチ、充実度があるパンチを単純に追っているという感じです。

松原　パンチの打ち方に関して意識しているところはないですか。2度目の菊田戦が僕にはすごく印象深かったんですけど、コーナーに押し付けているからそれなりに下半身に力が入っているんですよね。それなのにフッと上体の力を抜くじゃないですか。あの脱力の感じが凄く面白くて。かなり軸を意識していないと、ああいう風に一瞬で強いパンチは打てないと思うんです。それに押していて脱力、というのは怖い感じがするんですけども？

近藤　あまり押し付けているような感じではないですね。下半身の筋力で押さえつけているというのではなく。

松原　押しているときにあのヒザを打とうとすると、空間をつくらないといけないですよね。その動きも矛盾していると思うのですが。

近藤　押し込んでいることは押し込んでいるんですけど、多分みんなの考える「押し込んでいる」という感覚ではないと思います。

松原　で、シウバは特にコーナーに相手を押していって、ああいうヒザを打つとか、稽古していると思いますが、近藤さんはどんな練習をやっている？

近藤　そういう練習はやったことがないですね。まあ、やったほうがいいとは思いますけどね（笑）。

松原　マリオ・スペーヒー戦での、グラウンドのヒザとかも？

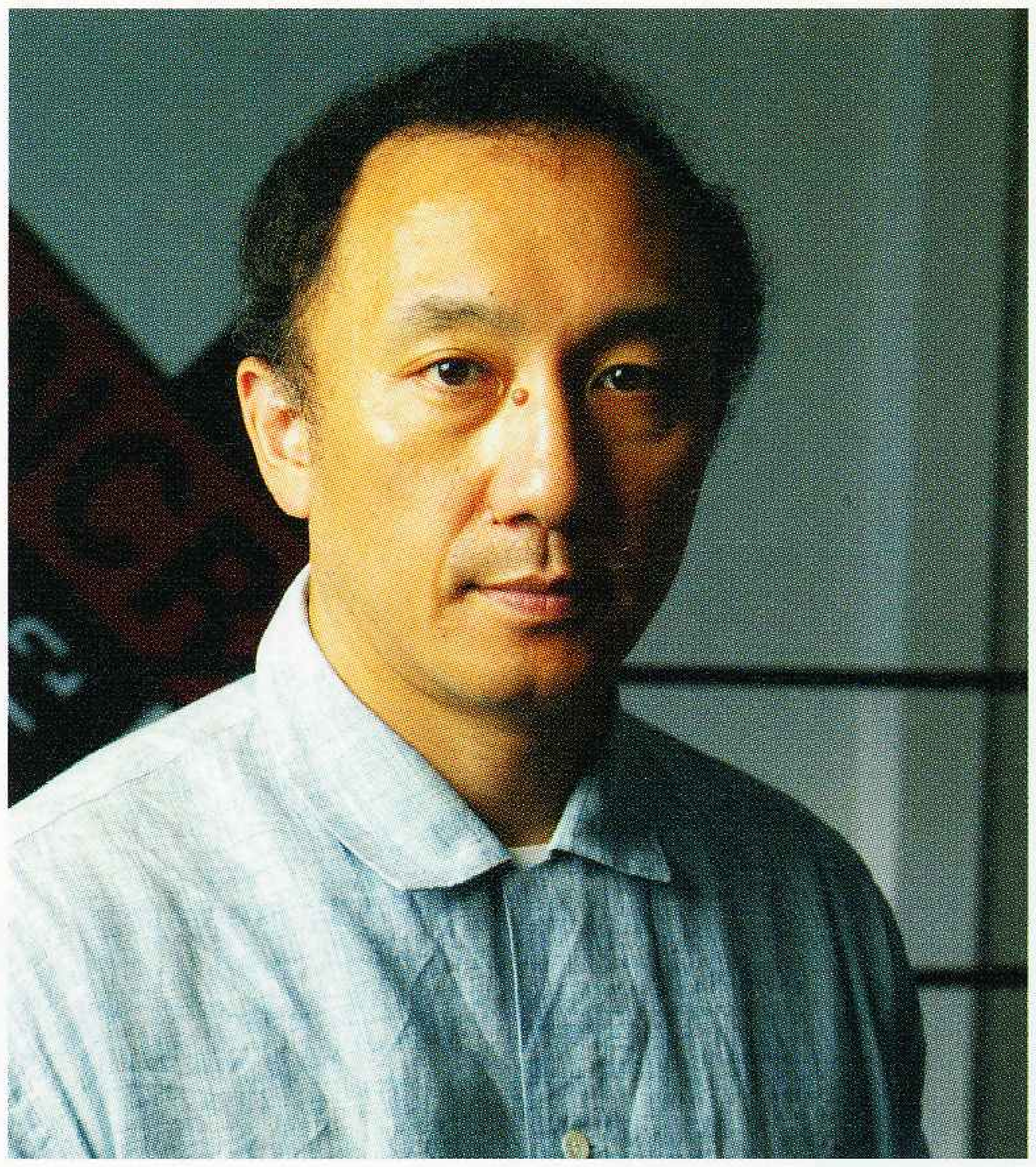
近藤　やってないですね。

松原　やっていなくて、あんな変な角度から打てないですよ、普通（笑）。極真の回して打つヒザみたいな。

近藤　あれは本当にそれこそパッとミット出されたとき、いかに自分が反応するか、いいパンチが打てるか、というのと同じです。横四方で抑え込んだときに、顔があってヒザ蹴り打てるぞと思って、じゃこんな感じかなと打ってみた感じですね。

松原　そうですか。ムエタイでもあんなタイプのヒザを打つことは普通ないでしょうからね。それから近藤さんは古武術のほうに関心があるようですけど、もともとヨガをやっていましたよね。そちらもずっと続けておられるのですか。

スペーヒー戦でのグラウンドのヒザ蹴りは、練習やらずにあんな角度から普通打てない。



Ryuichiro Matsubara
まつばら・りゅういちろう
1956年9月5日、兵庫県神戸市出身
東京大学大学院総合文化研究科教授、
専攻は社会経済学、相関社会学。
33歳から大道塾に入門、現在は同塾ビジネスマンクラス師範代。
最近は講道館の月次試合にも積極的に出場し、柔道二段の腕前。

近藤　そうですね。

松原　で、次は伊藤式体操をやっていると。僕は伊藤式というのは全く知らないんですけど、そういうものを続けるメリットというのはどんなものですか。

近藤　やっぱり身体に対する刺激というか。

松原　僕なんかは年を食っているんで、稽古をすると筋肉が張って、次の日とてもやる気にならないんですけど、ヨガなら家でできるじゃないですか（笑）。ピラティスとか、じいさんばあさんがやっているやつもやるんですけど、いままで背骨一つ一つを意識したことなんかなかったから、あんなリハビリみたいなことをやっても面白い（笑）。確かに中の筋肉につながる感じもあるし、もともとパンチを打つとき軸を鍛えたいなと思っていたんですが、近藤さんはどんな感じなんでしょう。

近藤　まさにそういう刺激ですよね。

松原　こういう体操をやっていると達人になれるとか、思います？

近藤　そうじゃないですね。達人に憧れたりもしないし、達人と呼ばれたいとも思わないですし。ただずっとやっていたら達人の境地に近づくかなという気はしますね。

松原　いま古武術が流行じゃないですか。身体を使うとか、ああいう全般の流れというものに対してどう感じていますか。

近藤　すごく興味ありますね。桑田投手が習った甲野（善紀）さんとか。

松原　甲野さんにどういうことを質問したいですか？

近藤　特に質問したくないですね（笑）。言われるがままに、やってみたいですね。甲野さんのバスケットボールのビデオを借りて見たんですけど…。

松原　すれ違うときの変な動きですよね。

近藤　ああいうの面白かったです。

松原　僕、一度だけ甲野さんに会ったことがあるんです、日本体育学会のシンポジウムで。僕の印象だと、何か特定の競技とかじゃなくて、バラバラに変な動きができる方ですよね。突然バスケットボールに応用できそうな変な動きがあったりする。その日室伏広治さんも来ていたんですけど、背中に彼ともう一人乗せて、200kgぐらい負荷があるのに立ち上がったりするんですよ。室伏さんは興味を持って話を聞いていましたね。彼もあのぐるぐる回って重い物を投げる中では極めたものがあるんだけど、でもさらにプラスできるものがあったらヒントにしたいと思っているんでしょう。

近藤　甲野先生に限らず、そういう機会に恵まれたらいろいろなシステムを一通りやってみたいですね。

松原　じゃあその中で自分が勝手に消化する部分もあるだろうし、勝手に捨てる部分もあるだろうなという感じですか。

近藤　僕が思うのは、拾うも捨てるもないというか。多分身体を使うための一個の答えがあると思うんですよ。そこがたとえると、山の頂上ですよね。山には登り口がいろいろあって、それこそ伊藤式体操だったり甲野先生だったり他の古武術だったりがあって、その登山道が違うだけであって、頂上は一個しかない。頂上に近づくためのプロセスで、これはいいから取り入れよう、これはちょっと間違っているから捨てようという感じではないですね。

松原　どれも間違っているわけではないから、すべての引き出し口を収めておいて、そのうち取るものは勝手に無意識に取るだろうと。

近藤　そうです。そういう感じです。

松原　いま近藤さんの一日のスケジュールはどんな感じですか。

近藤　練習して、最近は取材など受けて、体操をやったりして、帰ってテレビを見て寝てとか（笑）。練習はお昼ぐらいからスパーリング中心で、だいたい週3、4回。あとはトレーナーとミット打ちをやるという感じですね。

松原 走ったりはしないんですか？

近藤 走りは最近ちょっとやりますね。

松原 最近ちょっと（笑）。

近藤 寝る前とか、散歩がてらにちょっと走って。

松原 朝は走るわけではない？

近藤 朝はちょっと駄目ですね。朝はやる気がゼロなんで（笑）。

松原 僕もそうだから分かるな（笑）。

近藤 最近はウェイトトレーニングも始めるようになったんですよ。ちょっと何年かやっていなかったんですけど、また新しい刺激を入れようと。

松原 ボディビルダーがやるようなやつではなくて、きちっと技に合わせたということでしょうか。

近藤 あまりボディビルというのもよく分かっていないんですけど（笑）、筋肉の太さとか見た目のごつごつ感は意識していないというか、本当にシンプルにそこにある重量をいかに上げていけるかという。ベンチプレスもやりますし、スクワットとかデッドリフトとか、あとハイクリーンもやります。基本的なやつです。

松原 ベンチは、どういう感じでやるんですか。

近藤 まだコレという確信はないですけど、なんか前よりも楽しくできますね。パンクラスに入った頃に何年か続けていたんですけど…。

松原 レスラーになった当初は、身体の見た目をつくらないと、ということですよね。

近藤 そのときは多分ボディビル的なトレーニングなのかなという気がしますね。

松原 僕もずっとウェイトが好きでやっていたんですけど、柔道を始めたら、柔道をやっているオヤジには、ダラーンとして腹が出ているのに、異常に振り回す力が強い人とかいるじゃないですか。そんな人に投げられてバカバカしくなって、全日本クラスになる前はウェイトは意味がないんじゃないかと思ってやめちゃったんですけど（笑）。そういう意味で近藤さんはある程度レスリングの動き、打撃の動きとか思い通りにできちゃったから、新しい刺激としてウェイトをやると解釈していいですか？

近藤 ある程度できたから、というのではないと思いますけどね。ウェイトはまったく無視していられ続けられないな気がして。たとえばデッドリフトをやるとき、前ならどこの筋肉が鍛えられているのかという意識だけだったんですけど、いかにフォームを維持して、形をおっていけるかに変わっていって。

松原 自分の身体全体をうまく使ってその形を出力して、より強く殴るとか瞬時に反応するとか、あくまでそのための道具としていろいろやっていると。

近藤 そうですね。それこそバスケットとか野球とかもやってみたいです。野球の投げるという行動の中で、いかに自分の出力をボールに伝えていけるとかというのが面白いというか。ウェイトも筋肉ではなく、骨を意識する。骨格を意識している感じですね。

松原 じゃあシウバとやるにしても、トレーニングの計画はないということですね。



最近ウェイトも始めるようになった。意識するのは筋肉ではなく、骨格。

この時期までこれをやろうというのもなく、淡々として。

近藤 そうですね。なかなかちゃんと決まらないですし、もうあえていつやるとか聞かないというか、急に明日になってもやれるようにしています。

松原 それはすごい。

近藤 なくなってもがっかりしないように整えています。

松原 なるほど。ところでもともと近藤さんは少林寺をやっていたそうですが、どういうプロレスラーになりたいと思っていたんですか。

近藤 「戦って勝つ」ですね。

松原 僕、最初近藤さんが出てきたときに不思議な人だなあと思ったんですよ。プロレスの人ってプロレスのりがあるじゃないですか。パンクラスでも鈴木選手とか。近藤さんは最初からそういうのが薄い感じですね。

近藤 そうですね。プロレスラー的な煽りとか、そういうところはあまり興味がなかったですね。もう本当に戦いの中で感動して、この世界に入りたいと。自分は獣神サンダーライガー選手と佐野なおき選手との試合で感動してプロレスラーになりたいと思ったので。

松原 それは…（笑）。

近藤 この試合は最後にシューティングスタープレスがあったんですよ。もうありえない技だなというところに感動していたんで。それがだんだんプロレスラーをやろうと思っていた頃に、もっと妥協のない試合をしたいという衝動があって…。

松原 じゃあ、目指すものってありますか？

近藤 よりいい自分ですね。よりレベルアップした自分を目指していきたいなと。

松原 たとえばキックの選手だったら、団体の中で上の選手としてやらせてくれないからという理由でやめちゃう人もいますよね。よく「モチベーション」って言いますけど、近藤さんはあまりそういうものとは関係ない方に見えます。

近藤 まあ多少はありますけど（笑）。やっぱり一番になりたいというのがあるんですけど、できるだけそういう気持ちをどんどん削っていって、もっとシンプルになりたいですね。一番になりたいという気持ちをできるだけ捨てていって、結果が一番だったという風になりたいですね。

編集部 菊田選手が「ホイスとやれないとモチベーションが…」ということを最近言っていますが、ああいう感覚というのは近藤さんにはないですか。

近藤 ないですね。こいつとやって名前をあげたいとか、そういう感覚はないことはないですけど、できるだけそういうのは削っていきたい。モチベーションをあまり重要視したくないですね。正直一回シウバとの試合が決定したときはすごい高揚感がありましたし、本当に毎日の張りが違うんですよ。それこそ朝からテンションが高いというか（笑）。やっぱりこいつを倒して名前をあげられるという欲みたいなところでの興奮もありましたし。ただそれが全てだと思いたくもないし、昨日よりも強い自分をずっと目指していきたいですね。

ずっと目指していきたいですね。
松原　じゃあどこまで行くんですかね、昨日より強い自分というのは。
近藤　目標としては、生涯ずっとリングに立ちたいですね。
松原　引退も考えていない？
近藤　ずっとジジイになっても強くて、試合をする。本当のところどこまでいけるのかは、分からないですけど（笑）。
松原　負けが込んできたらどうするというのは考えていないんですか？
近藤　目標としては常に第一線で、ずっとジジイになってもやりたい。常にメインクラス、トップクラスの実力をもっているというのが目標ですね。頂上が見えてきたら、それができそうな気がするんです。
松原　頂上はもう見えてきている？
近藤　もっと見えてこないと。かなり見えているけど、もっと見えてくれれば。
松原　私なんか、普通の人が引退した後の33歳から格闘技を始めているんで、中学のときは柔道をやっていましたけど、もう自分だけ毎日伸びていけばいいと思っているんです。当然若い人には簡単に負けてしまうんですけど、それでも死ぬまでやるという感じで。自分の周りにも55、56歳ぐらいで延々高校生と乱取りやったりする人もいるし、一生やればいいと思っているけど、きっと近藤さんはそれでもないですね。もっと一線でやるという意識があるわけですね。
近藤　う～ん…。
松原　それは若いから（笑）。
近藤　できたら一線で（笑）。それに、まだ本当に格闘技の面白さのさわりしか見えていないような気がするんですよね。
松原　それは凄いな（笑）。
近藤　本当に、「気がする」でしかないんで。
松原　とりあえず分かっている面白さというのはなんですか。
近藤　この肉体を駆使して、躍動する面白さですね。たとえばウェイトトレーニングで筋肉を意識するというのが僕の中の無駄な動きの出力の出し方であり、骨や軸を意識する出力の出し方のほうが、無駄な動きには見えない。自分の中ではそれがすごい躍動感であり、心地のいい世界ですね。
松原　ああ、それが躍動感。身体の軸を感じる心地よさですね。
近藤　それをずっと追い求めていって、もっと心地よくなりたいですね。
松原　他に、この躍動感を分かっているような選手はいますか。
近藤　う～ん、もしかしたらヒクソン・グレイシーは似たような方向性にあるんじゃないかなという気がしますね。多分ヒクソンも身体の使い方をすごく研究しているんじゃないかなと。
松原　骨とか形を意識するということと、「不動心」というのは、近藤さんの中では関係あることなんですか。
近藤　そうですね。やっぱり肉体と心というのは別々のようでいて一緒だったり、肉体の作用が心に現れたり、その逆もあったりという相互関係があると思います。
松原　なるほど。話を変えると、パンクラスの中にはグラバカという異質な人たちがいて、彼らは喋ることも非常に攻撃的です



みんな「モチベーション」て言うけれど、近藤さんはあまり関係ないように見える。

よね。近藤さんはどう感じていますか。
近藤　多少むかつくというのもあるんですけど（笑）。身体のバランスを崩さないのを研究しているのと同じで、そこでいかに心のバランスをいかに崩さないか、という意識があるかもしれませんね。
編集部　近藤さんはヒョードルにも似ていないですか。試合前のたたずまいとか。
近藤　ヒョードル選手は最近ちょっと気になりますね。何をこの人は思っているのか。身体もぽちゃっとしていて、つるっとしている感じがあって。面白いですね。
松原　ヒョードルには独特の変な雰囲気がありますね。あれは何なのでしょうか。
近藤　それは分からないですけど、あまりつくっていない、シンプルにやっているなと感じます。
松原　そういう意味では同類に近い？
近藤　そうですね。似たようで、面白いというか。見て学びたいですね。
松原　よく現役の方はどこどこの道場に行きたい、と言うじゃないですか。たとえばヒョードルのところで練習してみたいとか、そういうのはないんですか。
近藤　あまりないですね。もともと面倒くさがりというのがあって（笑）。行けたら本当はいいと思うんですけど、行動力がないんですよね。
松原　それはおかしい（笑）。
近藤　それは本当に足りないところです。
松原　でも逆に言うと、外に出て行かなくても、いまいる場所でできているんじゃないですか。
近藤　いや、本当に面倒くさがっているだけかもしれません（笑）。
編集部　近藤さんは試合前に「明日死ぬかもしれない」と考えたことがありますか。
近藤　ジョシュ・バーネット選手とやるときは結構リアルに思いましたね。毎回ちょっとはあります。この間のシャノン・ザ・キャノン・リッチ戦でも、やっぱりちょっとは。部屋出たときに「ここに帰って来られないこともあるんだな」という風に。それは相手が強敵になればなるほど、そう思う度合いは上がりますね。
編集部　それが勝ったときの解放感に結びつくというのはありますか？
近藤　う～ん、解放感には結びつかないですね。若干ありますけど。その解放感って、何かぎゅっと押し潰されそうなところから来ると思うので、押し潰されそうなプレッシャーというのは自分のイメージでしかないんで、そういうのはどんどん削っていきたい。誰も押し潰していないんで。
松原　とにかくさまざまな固定観念を殺ぎ落としていきたいわけですね。
編集部　「無我」という感じですかね。どこかのプロレスラーみたいに（笑）。
近藤　そうですね。そういう風になっていくのかもしれません。
松原　近藤さんとしては、とにかくリングで結果を出していけばいいと。
近藤　う～ん、出せばいいというものだけではないという気もしていますけどね。そこまでの余裕がないというか。
松原　一番余裕があるように思えますけどね（笑）。今日はずいぶん面白い話をたくさん伺い、ありがとうございました。



生粋の総合格闘家というプライドはありますよね。

I only moves
Punch, Kick, Beat the opponents
Fighting is whole my life.

郷野聡寛

GONO AKIHIRO

デビュー当時は天才と呼ばれ、パンクラス移籍後も"ビッグマウス"として周囲を騒がせている郷野聡寛。俗にいう「アグレッシブな試合」とは対極にある彼のスタイルだが、それはどこから来たものなのか。そのスタイルの果てに彼が目指す理想の闘いとは何なのか。

和良コウイチ=取材 Interview by Koichi Wara
和智正夫=撮影 Photo by Masao Wachi

──郷野選手は94年のトーナメントオブJで総合デビューしてから、もう10年になりますね。

郷野 懐かしいですねぇー。もう10年選手になってしまいました。

──総合格闘技を10年やっているというのは、相当な重みだと思うんですよ。93年に第1回アルティメット大会があって、それがいまの総合格闘技をもたらしたのですから。

郷野 僕は、元々総合格闘技がやりたくてこの世界に入ってきたんです。例えば柔道やレスリングがベースにあるわけでもなくて、野球を高校までやっていて、それで、総合格闘技やりたくて一から始めたという。

──それがスポーツ会館のコマンドサンボスクール。

郷野 そうですね。打撃も投げも関節も全部同時に始めたので、だから自分の中で、生粋の総合格闘家というプライドはありますよね。例えば柔道とかレスリング上がりの選手が出稽古に来ても、やっぱりコテンパンにやっつけようと思いますから。

──今でもですか。

郷野 はい、今でも。そういうところで絶対負けられない。

──それこそ郷野選手が世に出ていった94、95年というのは、九州の真武館の大会でコマンドサンビスト(郷野)がハイキックで空手家をKOしたとか派手なことをやったり…。

郷野 はあ、ありましたね(笑)。

──「天才」だと騒がれました。

郷野 僕は昔からどんなスポーツをやっても、同じ時間で他の人よりうまくなったんですよ。ただ、絶対そこでコツコツがんばっている人にいつか抜かれるというパターンがずーっとあったんです。「天才」とか書かれたときも、どうせこの先行き詰まるだろうなっていう(笑)。漠然と「このままうまくいくはずがない」という感じはありましたね。

──他人よりすぐ上手くなって、精神的に満足しちゃうんですかね?

郷野 満足はしてないんですけど、諦めが早いというか、できないとふてくされるというか(笑)。

──でも総合格闘技に関しては諦めずに、ここまでやってきたわけですね。でもやめたかったときもある?

郷野 やめた方がいいのかなって思った時も、やっぱり何回かありましたよ。最初は修斗でプロデビューしたとき(96年)。相手はトッド・ビョーナサンという…。

──あれは面白い試合でしたね(笑)。

郷野 勝つ寸前までいって負けるという。あの時はまだ電車で後楽園まで来ていたんですけど、帰りの西武池袋線で身投げしようかと思ったぐらいで。

──(笑)

郷野 でも池袋駅って終点じゃないですか。最後、電車が速度を思いきり落として入ってくるんですよね。これじゃ死ねねぇなみたいな。でも一番、「このまま続けていても強くなるのかな?」と思ったのが、97年の1回目にラリー・パパドポロスとやったとき。何やっているんだか分からないような負け方して、悩みましたね。

──真武館の大会のときにも、郷野選手が「今後も続けようかどうか迷ってるんですよ」みたいなことを言っていた記憶があります。「遊びたいから」となんとかポロッと(笑)。

郷野 そのときは、たぶん女の子にフラれたばっかりだったんですよ。それで全てに対してやる気が無かったんだと思いますね(笑)。フラれただけでそんなになる若い時代もあったなと…20歳のときですよ、たぶん。いま30歳ですから。

──で、総合格闘技を10年やるということは、率直に言って相当身体にガタが来ている部分もあると思うんですが?

郷野 それは、同じぐらい続けている人はみんなそうじゃないですか。例えばルミナさんも相当ガタがきていると思うし。

──特にグラウンドでパウンドがある競技というのは他にないわけですよね。打たれ弱くなったり、KOされやすくなったり。

郷野 僕は最近ほとんどかわしていますけど、ビッグパンチを最後にもらって負けますから(笑)。だから小さなダメージの蓄積と大きなダメージの一発と、どっちが残るのかなという。でも、脳に関してはあまり関係ないですね。一度、2年前に記憶喪失になったときには本当にヤバいかなと思いましたけど。大阪で渋谷とやったとき。そのときは記憶喪失が1週間ぐらい戻らなくて、親にも「もう辞めて欲しい」って初めて言われたし。

──そういうこともあって、ガードを下げて相手を誘ってカウンターをとって、という今のスタイルをつくるようになったんですか?

郷野 うーん、それももちろん大きな原因ではあるんですけど…。

──「打ち合いなんかしたくない」って言っていますよね。

郷野 昔から、自分から手を出せとか打ち合えって言われても、そういうのがうまくできなかったんですよね。漠然とそれは俺に向いてないんじゃないかって。だからといって、自分に何ができるかといったら分からなかったわけで、だから言われたようにやるしかなかった。それでなかなかうまくいかなかったというのがあったんですよ。いまのスタイルのきっかけは、ロイ・ジョーンズのビデオを薦められて、見てからですね。自分の親友で今でも現役でボクシングをやっている友達なんですけど、その彼にいろいろなボクシングの戦いの考え方を教えてもらったんです。

──僕が特に印象的だったのは、昨年の2度目のカストロ戦。相当にスリリングで面白い試合だったんですけど、郷野さん自身はどうですか。

郷野 あのときは10月の渡辺(大介)戦で親指にヒビが入っちゃって、それが治らないまま、練習がほとんどできなかったんですよ。だから本当にそこで彼にボクシングを教えてもらっていなければ勝利も有り得なかったですし。

──あの闘い方ができる日本人って、ちょっといないなって思いました。

郷野 世界にはどんな強い人がいるか分からないから狭い範囲の話になっちゃいますけど、こと日本の総合格闘技の中で、打撃の立っている時間で、俺に見えている世界が他に見えている奴は絶対いないという自負はあるんですよ。

──見えている世界…。



生粋の総合格闘家

郷野　こういう風に攻める、こういう風に守るという、僕が見えている世界。

―でもあれほどスリリングな世界だったのに、写真一枚も載せない専門誌もあったのは、一方で豪快な決着を望む人にはつまらない試合だったのかなと思います。

郷野　まあ、その通りだと思うんですよ。特にああいう大きな会場で見ていると、後ろの人とか絶対分からないと思うし。だからこそ、そういう戦略であるとか、闘いにおける考え方を啓蒙する解説の人がいなきゃ駄目ですよね。だから、後日収録で自分が自分の試合を喋るしかないなと思っているんですけど（笑）。

―この間のPRIDE武士道のショーグン戦ではKO負けしましたが、試合中にコンタクトが外れていたらしいですね。

郷野　右目だけ取れちゃったんで、片目だけの状態になっちゃったんです。相手がどれぐらいの距離にいるのかがつかめないんで、カウンターを狙うにしてもタイミングが計れなくて。でもこっち（左目）だけは見えているんで、よけるのはできるんですけど、打ちにいけないというジレンマがありましたね。

―体重差の影響はなかったですか？

郷野　ないわけじゃないですけど、僕の技術でカバーしきれないものじゃなかったと思うんですよ。ガス欠になるまで有効打はほとんどもらわなかったし、組み合っても倒したのは俺で、俺は一回も倒されてない。だから俺が劣っているとは、どうしても思えないんですよね。

―そういう意味では、惜しい試合を落としましたね。

郷野　でも、僕らしくていいじゃないですか。

―（笑）

郷野　近藤戦も、これに勝てば上にパンっていくって時に負けて。

―ここ一番で負けてしまう。

郷野　それが「自分の道」だと思っているんで（笑）。近藤戦で負けた後もがんばってこういう舞台にまで行けたし、またがんばろうと思いますけどね。

―PRIDEという舞台を味わってみて、普段とはキャパシティや注目度、演出、ギャラの面など違うと思うんですけど、実際どう感じましたか？

郷野　まあ、格闘技に対する考え方が全然違うな、というのはありましたよね。要は僕の細かい技術は全く望まれてないかなと。

―それは観客がですか？

郷野　観客も、運営側も。最初のルールミーティングで、判定基準の一番大事なところはKOや一本を狙う姿勢というのがあったんですよ。要はもう派手にやりあいなさいよ、ってことで。

―郷野さんのスタイルとは違いますね。

玉砕覚悟で意味のない大技を出すような奴らをボコりたいっていうのはあります








郷野　例えば、俺が磨いてきたものを駆使して、最後に倒したとしても、見られるのは最後の倒したところだけで、その過程はまったく見てもらえないなっていう。

―でも、そういった大きなキャパシティの人達をも、ちゃんと相手にしていきたいと思っているんですか？

郷野　そうですね。より多くの人の目にとまる舞台で試合したいというのは、みんな思っていることだろうし、もちろん俺もそう思いますけど、今の自分の技量じゃまだ無理だなって。例えば、ロイ・ジョーンズの試合を見ても、ジャブをヘッドスリップでかわしてすぐカウンター入れるとか、相手がくるところをフェイントかけて、相手がストップしたところでまた休むとか、そういうのは絶対みんな見ていないと思うんですよ。でも、彼はショーマンシップを発揮して、腕回して打ったりとか、アリシャッフルやったりとか、余裕があるとダンスかましたりするんですよ、試合中に。要は自分の技術が上がった結果、お客さんを喜ばせるようになりたいとは思います。でも実力も無いのに見た目の派手さだけ追っかけて、玉砕してもいいやって意味のない大技を出すとか、そういうのは自分とは全く対極のところにあるんで、そういう奴らを自分の技術でボコりたいっていうのはありますよね。

―自分がまたチャンスをもらえたら、そうできる自信がある？

郷野　そういう相手とはやらせてもらえないと思いますけど（笑）。厳しい外国人相手にそういう技術で勝てるようになりたいですね。

―GRABAKAの話に移りますけど、今のGRABAKAというのは、郷野さん的にはいい感じですか？

郷野　ちょっと、調子のいい選手と悪い選手の対比がはっきりしていますね。

―佐々木選手もしばらく調子が悪いですね。でもファビオ・レオポルド戦はチャンスもあったのに惜しかった。

郷野　相手は柔術では強いんでしょうけど、総合格闘技においては佐々木の引き出しの方が絶対多いわけじゃないですか。精神的なものでその引き出しを開けられないと思うんですよね、今。テレルに喰らったKOで恐怖心が出ちゃっているような。克服するところはそこだけだと思うんですよ。

―山宮選手はどうですか。精神的に何か変わったところはありますか？

郷野　本人も言っていましたけど、とにかく練習に付いていくのが精一杯で、練習に追われているうちに試合の日が来ちゃって、試合に対する心構えがちょっと遅れちゃうところがあるって言っていましたね。

―山宮選手みたいなベテランでもそうなってしまうんですね。

郷野　そうですね。やっぱり今までとはやっていることが全然違っていたとまでも、試合前にみんながやっているような追い込んで追い込んでっていう練習は一回もしてないと思うし。

―そうなんですか（笑）

思うんで。試合で見たまんまというか、勢いと体力で何とかするという感じだったのが、こっちに来て、こうしたらこうすればいいとみんな考えてやって

この世界でのし上がって、ロイ・ジョーンズに『あなたのお陰です』って言いたいですね。

俺のやり方

（自分の試合は）後日、自分で試合解説するしかないなと

思うんで。試合で見たまんまというか、勢いと体力で何とかするという感じだったのが、こっちに来て、こうしたらこうすればいいとみんな考えてやっているところに、勢いでいってもそこは全部かわされて押し込まれちゃうと言っていたんで。初めはほんとボロ雑巾でしたからね。レスリングが強いんで、上を取るんですけど、下からあっという間に極められたり。

――今、高瀬選手も出稽古に来ているんですよね。

郷野　はい、試合の前はけっこう来ていましたね。

――やじ馬的に聞きますが、グラバカと言えば寝技、高瀬選手も寝技がウリで、一時は一緒に練習していましたが、しばらくたってまた再び練習してみるとどうですか。

郷野　いやー、強いですね、寝技は。やっぱり自分だと凌ぐので精一杯ですよ。ただ、凌ぐ技術だったら菊田さんにもまれてきたんで負けてないぞってぐらいで（笑）。

――高瀬選手が三崎選手は強いって言っていました。

郷野　一番伸びている選手だと思いますよ。見た目には（石川）英司が一番伸びているみたいに思われますけど、負けないぐらい（三崎）和雄も伸びていて。

――マカコ戦はすごかったですからね。

郷野　そうですね。そういう練習をしてきていましたから。2月に國奥に勝って、その後PRIDEで勝って、乗っているじゃないですか。

――一方、大将である菊田さんは近藤戦以降、イマイチ気持ちが乗っていない？

郷野　もともと、菊田さんは自分や和雄に比べたら闘うことが好きじゃないような気がするんですよね。例えば今までも、試合前にみんながやっているような追い込んで追い込んでっていう練習は一回もしてないと思うし。

――そうなんですか（笑）

郷野　本当に自分の8割ぐらいの力でやる練習で、今まできた選手だと思うんですよ。でもそれはそれですごいことですよね。

――じゃあ逆に言うと、その限界が来ているのかもしれない？

郷野　そうですね。だから、追い込む練習、苦しい練習をやれば、もっとバッと強くなれるかもしれないんですけど…。

――でも彼は大将だから「やれよ！」って言う人もいないし。

郷野　まぁいないですね。それに昔から言われてやるタイプじゃなかったみたいですから（笑）。それが菊田さんの生き方というか、格闘技に対しての取り組み方だし、やっぱり菊田さんは今までのやり方でやると思うんです。

――ところでこのムックで、郷野さんの評価を海外の記者に聞いたんですよ

郷野　僕の名前なんか通っているんですか？　海外で。

――通っていますね。基本的には評価が高いですよ。ただし数人が共通して言っているのは、「とてもオールラウンドで良いファイターだが、大一番で勝てない。真のトップとなるには言葉で表せない何かが欠けている選手だ」と。

郷野　それ、僕が今まで喋ったこと、まったくその通りじゃないですか（笑）。

――自分自身はトップに立つためには何が欠けていると思いますか。

郷野　分からないですね。もしかしたらそこは限界なのかもしれないし…。それは自分が引退してから分かることだと思いますね。今は自分の信じた道を行くしかないんで。

Gono Yoshihiro

郷野聡寛

1974年10月7日生まれ　東京都久留米市出身　身長176cm、体重90kg。修斗参戦時は8勝5敗4分の戦績。ムリーロ・ニンジャと引き分けたことがある。その後パンクラスに移籍し、現在も活躍中。玄人受けする打撃スタイルと派手なマイクアピールで人気がある。

この世界でのし上がって、ロイ・ジョーンズに『あなたのお陰です』って言いたいですね。

――近藤選手との差についてはどう思いますか。個々の技術を見ると、それほど差があると思えないんですが、でも向こうはとにかく安定感がありますよね。

郷野　まず見えるところで言うと、スタミナだと思うんですよ。彼は本当に無尽蔵のスタミナがあって。入門したときからスタミナは凄かったという話も聞いたことがあります。自分もはっきり言って練習はしっかりやっている自負はあるんですよ。だからスタミナも昔ほど自信がないわけじゃないけど、近藤と差がつくとしたらそこだなって気はしますよね。

――うーん…。

郷野　後は、見えないところでは心ですよね。彼のモットーである「不動心」というのは、本当にあるんじゃないかっていうぐらい。練習では強い選手がプロのリングに来るわけじゃないですか。だから、練習と変わらない気持ちで試合に臨めば、練習通りの力が出るはずじゃないですか。でもみんな緊張やプレッシャーで、どうしても随分早い段階でリミッターがかかっちゃって、すぐ息上がるし、動きも力んじゃって重くなる。その差だと思うんですよね。いかに自分の普段の力を出せるかという心の状態をつくることを、近藤は知っていますよね。

――郷野さんは現役引退するときというのは頭をよぎりますか？

郷野　まだよぎらないです。今のままだと、心はまだまだいけると思うので、身体が壊れて終わるというのが一番怖いなと思いますけどね。やりたいのにできなくなっちゃうのは辛いんで。でも、ちょこちょこケガも出てきているし、やっぱりケガをしたときは終りを考えちゃいますけどね。

――では今後の目標は？

郷野　自分のスタイルの向上ですね。完成に向けての向上。

――自分の内側を見ている感じですね。あいつを喰ってやるとかじゃなく…。

郷野　いろいろな試合を見ると、『絶対俺の方が強いと思うけどな』とかよく思いますけど、それは一時的なものであって、ずっと変わらずに思っているのは自分のスタイルの向上ですね。

――そこは近藤選手とすごく似ていますね。よりいい自分を目指すだけという。

郷野　直接あまり話すわけじゃないですけど、やっぱり近藤の考え方から学ぶところも大きいことは大きいですね。どう考えても、自分より精神的に成熟していると思うんで…それは格闘技に対してですよ。人間としてどうかは知らないですけど（笑）。

――郷野さんがのし上がっていくためには、自分自身の努力もあるし、一つは試合の見方をファンやマスコミが共有できていけば変わってくるかもしれないですね。

郷野　やっぱり格闘技がブームというか、報道するメディアも増えてきて、「お前、文章書いて金もらっちゃ駄目だろ」って文章を書いている奴もいますからね。まあでも、そっちにはそれほど期待してないですから（笑）。

――期待してないですか（笑）

郷野　そっちに期待するより、自分の力を上げていって、どんな相手に対しても余裕を持ってパフォーマンスができるぐらいの力を付けられればいいなと思っています。それで総合格闘技の世界でのし上がって、ロイ・ジョーンズに会いたいんですよ。『あなたのお陰です』って勝手にお礼を言いたいですね。



PRIDEに出る_

中村和裕・高瀬大樹・長南亮・横井宏孝 それぞれの事情

**「PRIDEに出る」ことは多くの格闘技選手の憧れであり、目標だ。
高額なファイトマネー、地上波での放送、周りの注目度はまるで違う。
だが、注目を浴びるリングに出るということは相応のリスクを伴う。
出場チャンスを得るための苦労、払わなくてはならない犠牲。
それでも「PRIDEに出る」ことを選んだ若手選手たちは、
今、どんな現実に直面しているのだろうか。**

茂田浩司=取材・文
Coverage/Text by Kouji Shigeta
大屋美和=撮影
Photo by Miwa Oya

「膠着しようが判定だろうが とにかく勝たないと次がない」（中村）

PRIDEには夢がある。試合は大会場。趣向を凝らした演出で大観衆の歓声を浴び、地上波での試合中継や格闘技番組での露出で知名度は飛躍的に上がり、高額なファイトマネーを得られる。

だが、PRIDEは「おいしい舞台」だろうか。注目度の高いリングでは、試合内容から会見での発言に至るまで、ありとあらゆる場面においてプロとしての、自覚、プロとしての覚悟が問われる。

PRIDEファイターの厳しい現実。彼ら4人はそれぞれに模索し、苦悩している。

「いい試合だった、と言われても、負けたら次の試合はないんですよ」

大勢の客で賑わうランチタイムの喫茶店。店内に鳴り響くジューサーミキサーの音に気を止める風でもなく、中村和裕はやや早口で続けた。

「ノゲイラとの試合が『いい試合』と言われても、横井君は勝ってたら6月も試合はあったわけじゃないですか。勝たないと次はない。勝たないとダメなんです」

中村は「勝たないとダメ」な試合を控えている。PRIDE武士道（7月19日）でホジェリオと再戦するのだ。デビュー戦で一本負けを喫してから1年4ヵ月、この間の成長ぶりが試される。来年のミドル級GP出場という目標を達成するためにも取らなくてはならない試合だ。

中村はいつも「吉田道場」の看板の重みを感じてきた。コンスタントに試合の機会が与えられ、メディアに登場する機会も多い。「あいつばかり優遇される」という声は結果を出して見返すしかなかったが、現実はデビューから2連敗。ホジェリオ戦、KI-1JAPANGPでの堀啓戦と、共に高い評価を受けたものの、中村の傍らには当時無敗の吉田がいる。3戦目で初勝利を挙げるまで辛かった、と中村は振り返る。

「いい試合だと言われて納得してた自分にも甘さがありました」

PRIDEという舞台に戸惑い「観客を楽しませる試合」を模索し、悩んだこともあったが「勝利」に集中しようと決めて吹っ切れた。元々、貪欲に勝利をモノにするのが柔道時代からの中村のやり方なのだ。

「お前なぁ、100（kg級）なんて井上康生がいるんだから無理なんだよ」

そんな言葉で揶揄された経験は一度や二度ではない。それでも練習に打ち込み、勝利を積み重ねて強化指定選手（A指定）まで這い上がった。PRIDEでも中村は「勝利至上主義」を貫く覚悟でいる。

「膠着しようが判定だろうが、とにかく勝つしかないんです。会社員で給料を貰ってるわけじゃないし、いつ怪我して辞めていくかも分からないですから」

インタビューの3週間後、中村はホジェリオに判定負けを喫した。

「自分のパンチが効きませんでした…」

呆然とする中村をよそに、勝者ホジェリオは吉田への挑戦を表明。中村の敗北は「吉田道場」の敗北なのだ。中村は今その重みを改めて噛みしめていることだろうか。

勝利しても、時にその内容までも厳しく問われるのがPRIDEだ。高瀬は今、その壁にぶち当たり、悩みの中にいる。

「なかなか難しいですけど…」

「非常に難しいんですねぇ…」

取材中、高瀬は幾度となく「難しい」と呟いた。

5月の武士道、高瀬はカーロス・ニュートンに2-1の判定で勝利した。だが、動きの少ない内容と、勝利して喜んだ高瀬を見て「愕然とした」とDSEの榊原社長が雑誌のインタビューで痛烈に批判。高瀬は難しい立場に立たされることとなった。

高瀬の、ニュートンなら動きのある寝技勝負が出来るという希望を受けてのマッチメイクだった。だが、以前の練習で高瀬の寝技の強さを知るニュートンは、普段のダイナミックな動きを封印し、極力寝技を避けた。結果、膠着状態の多い試合となった。

高瀬VSニュートンは選手の間でも賛否両論だ。「あのニュートンが動けなかった」と高瀬の強さを評価する者がいれば、「堅く守らず、もっとニュートンを動かす手もあったのではないか」と高瀬の戦法に疑問を投げ掛ける者もいる。

「あの試合内容で万人が拍手をくれるわけないのは分かってますし、批判も真摯に受けとめてますから。でも…」

高瀬はPRIDE26でアンデウソン・シウバから一本勝ちしてブレイク。だがその後は「ストライカーとの対戦」を勧められても首を縦に振らず、ホドリゴ・グレイシー、桜井速人、クリス・ブレナン、そしてニュートンと強豪とばかり対戦してきた。

「自分と同じぐらいの強さの選手と戦ってどんどん強くなってると思います。ストライカー相手なら一本取るかKOされるかで面白い試合になるかもしれないけど、弱い相手と試合しても最終的には強くなれない。強豪とギリギリのところで戦っていってボン、と出たのが桜庭選手じゃないですか」

高いハードルに挑んでいることは理解できるが、ニュートン戦には首をひねった。引き込みを多用し、ニュートンに立たれて「寝技勝負に来なかった」では桜庭に負けたグレイシーの言い訳そのままではないか。今の総合で、打撃やスタンドレスリングを使わず「引き込みからの寝技」で勝てるのか。高瀬に聞いた。なぜ引き込んだのか。

「…最初の3分でスタミナが切れたんです」

練習で追い込んだつもりになっていたかもしれない、と高瀬は言う。ニュートンをボコボコにした自信から「ニュートンとの

喜びと苦悩



P
中
そ
「P
高
茂田
Cove

寝技勝負なら」と高を括った部分もあった。スタミナ切れで体が動かなくなり、引き込む形を取らざるを得なかった。自分に憤りを感じます、と高瀬は唇を噛み締める。

「今、スタミナ作りから始めてます。スタミナさえあれば何でも出来るんです。批判は真摯に受けとめますから、最後のチャンスを頂きたいです」

高瀬の価値を判断するのは識者や関係者ではなく観客だ。榊原社長の批判によって、逆に高瀬に対する注目が高まったきらいもあり、真価が問われるのは次戦だ。観客に届く試合が出来るかどうか。観客に届かなければ「次」はない。

「PRIDE26（アンデウソン戦）の前に戻りました」

崖っぷちの状態に逆戻りしたが、これもPRIDEの持つ一面なのである。

長南もまた、次が勝負だと決意している。PRIDE初試合の5月の武士道では自分らしい「戦い」が出来なかった、と悔やむ。これで評価が決まる、との意識が彼の体をしばりつけた。ポジション取りが抜群に上手く「面白い試合」になりにくいアルメイダを相手に、後半はよく長南らしさを出していたようにも見えたが、本人は自分の求める戦いじゃなかった、という。

「もっと『一本取られてもいい』ってガンガン行っても良かった。顔がボコボコになったり、どっか伸ばされて手を吊してれば負けたと思えますけど、あんな試合で負けても全然悔しくないんですよ」

対戦相手のこともある。須田、桜井、松井ら日本人相手の凌ぎ合いを経て辿り着いたPRIDEだったが「対世界」では長南のモチベーションは上がらなかった。

「日本人相手に『負けたら終わりだ』と思ってた時の方がここらへんにグーっと来た」

長南は胸を拳で叩き、目を見開いた。

「日本人トーナメントをやりたいんです。今モヤモヤして伝え切れてない位置付けもはっきりするし、マスコミの評価も一旦壊してそこからマッチメイクして貰えたら。人間的には何の恨みもないですけど、上でふんぞり返ってる人間は蹴落とさないと」

長南は数人の選手の名前を挙げた。「殺戮ピラニア」のキャッチフレーズ通り、上位の選手を食って上がってきた彼にとって、ある程度の地位を得ると途端に「対世界」を語り始める選手は「守りに入ってる」ようにしか見えない。そうした選手が上にいる限り浮上の目がないのなら、戦って叩きのめすしかない。彼の考えは明確だった。

「自分のスタイルを変える気はないです。ファイトマネーが高いのは嬉しいですけど（笑）PRIDE用の試合をやるわけじゃなくて、自分の求める戦いをやっていきたいんで、それが認めて貰えないなら出る必要はない。次の試合はもっと自分のスタイルで勝負するつもりです」

「殺るか、殺られるか」の戦いを求めて行き着いたPRIDEで、彼はどこまで自分のスタイルを貫き、自分の色を出せるのか。次戦が彼にとってのターニングポイントになりそうだ。

「もし自分の戦いが認められないならPRIDEに出る必要はない」（長南）

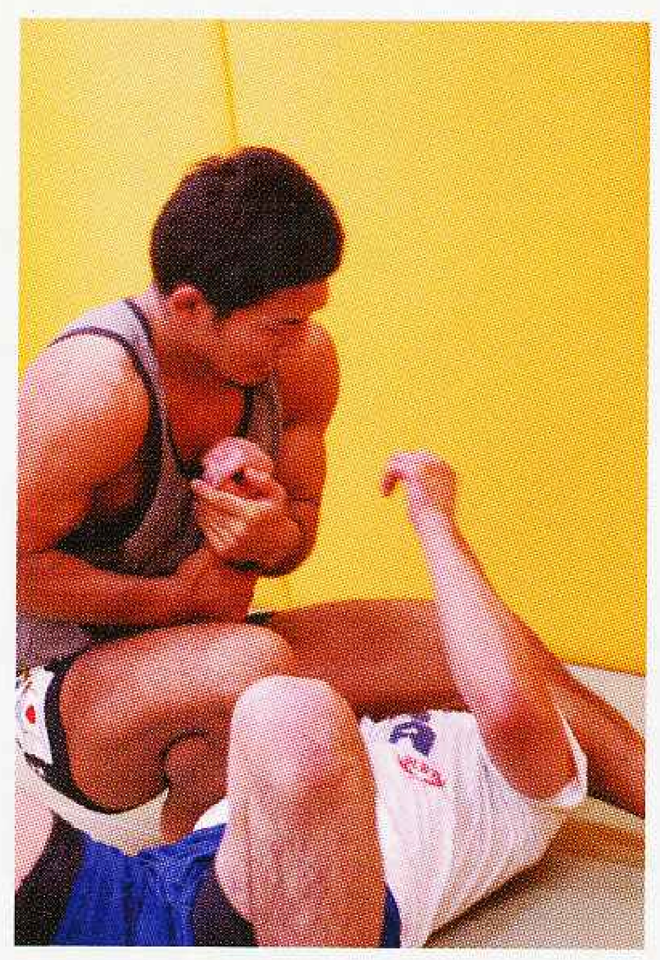
「3人へのライバル意識？　僕、ないです。そういう競争には加わりたくないです。ファンの心理で楽しみたいんで（笑）」

横井は、他の3人と明確に一線を引く。実に1年半ぶりの総合の試合がPRIDE GP開幕戦のノゲイラ戦。誰もが尻込みしたくなる厳しい戦いにも平然と臨み、1R終盤までは互角に戦って存在をアピールした。とはいえ、その後も総合にシフトするわけでもなく、ZERO-ONEやハッスルに出場しながら空いた時間に合同練習に加わり、練習や練習後のお喋りを楽しむ。

「僕にも向上心はあるんですよー」

大きな体と濃い目のヒゲに似合わぬ、つぶらな瞳を輝かせる横井。横井の潜在能力は誰もが認める。だがプロレスの巡業もあり、練習時間は最も短い。

「他の人よりどうしても練習量が少なくなるんで、その部分で色々と考えてます」

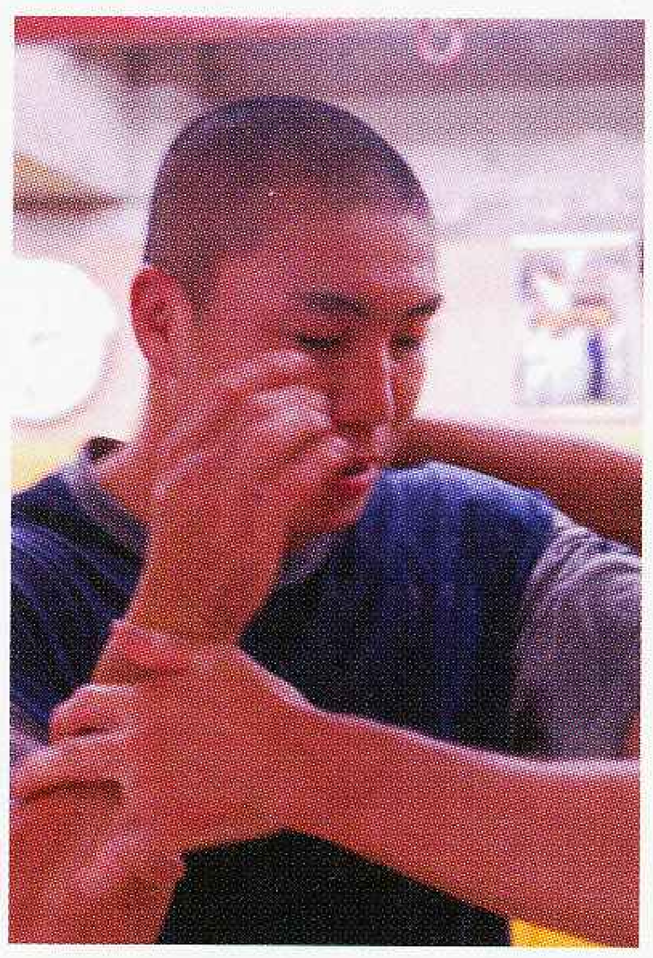


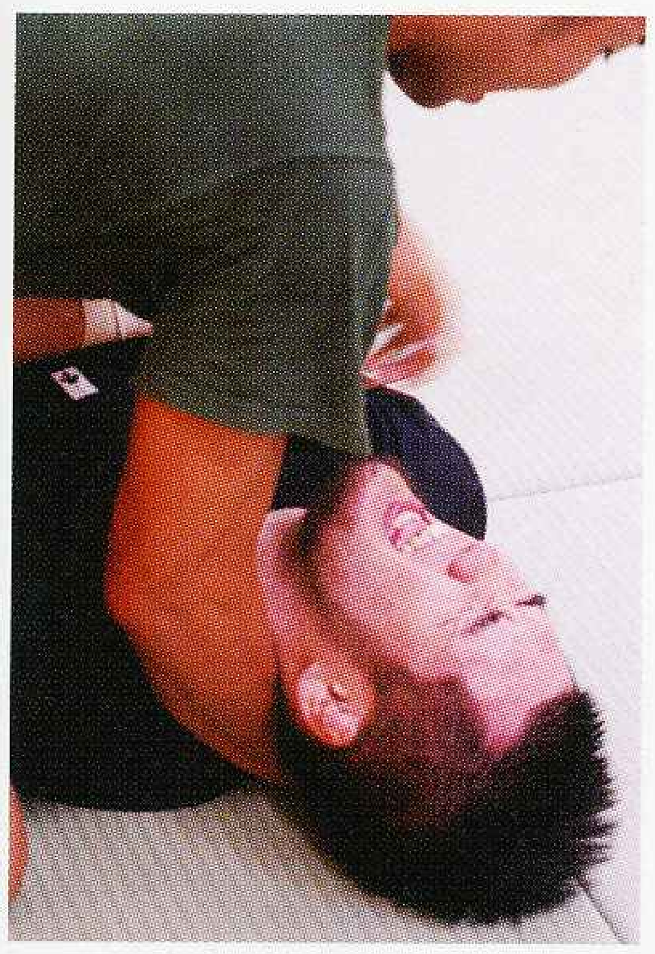
中村和裕
なかむら・かずひろ
1979年2月21日、広島県福山市出身
身長179cm、体重100kg
吉田道場所属
国際武道大柔道部出身。柔道では00年講道館杯体重別2位、02年ドイツ国際優勝などの実績を持つ。



高瀬大樹
たかせ・だいじゅ
1978年3月20日、埼玉県北足立郡出身
身長180cm、体重87kg
フリー
かつては「日本の総合格闘技界で俺より寝技が強い奴はいない」と豪語。現在は謙虚なキャラクターに生まれ変わった。

長南 亮
ちょうなん・りょう
1979年10月8日、山形県鶴岡市出身
身長175cm、体重80kg
フリー
以前U-FILE　CAMPに所属していたとは思えない異色のキャラクター。マッハをTKOで破ってブレイク。





横井宏孝
よこい・ひろたか
1978年6月8日、北海道岩見沢市出身
身長178cm、体重100kg
チーム・アライアンス所属
ノゲイラ戦では善戦。噂の怪物くんぶりを証明すると同時に、やられた技スピニングチョークを有名にした。

最近のテーマは「コツを掴む」。「コツ」を探しながら練習して毎日が発見の連続、強くなってる実感がある。他の3人や高阪、吉田、桜庭らと練習するのが楽しい。

「高阪さんの寝技が凄く好きなんです。ノゲイラと似てました」

そんな言葉をサラリと言う。

「総合は年に2回ぐらいは試合したいです。寝技で極めに来る人とKOKルールでやりたいです。寝技を楽しみたいんで」

今は自分の出番ではない、と判断しているのか。マイペースの横井が本格的に動き出すのはいつのことになるだろうか。

昼間、4人はGｰスクエアと吉田道場、高田道場（松井と対戦経験のある長南を除く）で毎日のように合同練習に励む。スパーリングの相手は高阪、吉田、桜庭を始め、軽量級から重量級まで様々な選手たち。夜は長南はキック、中村はボクシング、高瀬はGRABAKAでの出稽古に励む。現在、国内で考え得る最良の練習環境にいる。

練習後は飯を食いながら談笑するが、ライバル意識はある、と長南。

「刺激し合わないと意味がない。練習でも取られたくないと思ってますし、試合することはないと思いますけど、やるなら絶対に負けたくない」

では今現在、吉田、桜庭と彼らに実力差はあるのか、ないのか。高瀬は即答した。

「足元にも及ばないですよ。だからみんなで頑張ってるんで、実際、そのぐらいの差はありますよ」

毎日苦しい練習に取り組み、試合をすれば時に厳しい批判も浴びなくてはならない。それでもPRIDEに挑戦する理由は何か。

「ファンの人からの『頑張って下さい』という声があるからですね。分かってくれてる人は分かってくれてますから」

今、最も辛い立場にいる高瀬はそう言って一瞬、表情を緩め、すぐまた険しい顔に戻った。PRIDEで戦うということはかくも辛く、苦しいことを伴うのである。それだけに、勝利した時の喜びもまたひとしおだろう。「その時に」に備えて今日も4人は練習に励む。



Love fighting
Enjoy fighting
And he ruled the MMA World at ease

Born to be Free in Hilo

BJ PENN

BJペン

——楽しさの追求——

父親の名前はジェイ・ディ・ペン（Jay Dee Penn）、愛称はダッド。
一番上のアニキの名前もジェイ・ディ・ペン（Jay Dee Penn）、愛称はジェイ。
二番目のアニキの名前も、やっぱりジェイ・ディ・ペン（Jay Dee Penn）、愛称はJD。
弟の名前はリーガン・ペン（Reagan Penn）、そのままよんでいる。
彼の名はジェイ・ディ・ペン（Jay Dee Penn）、皆は彼のことをBJと呼ぶ。
四国の半分もある大きな大きなハワイ島、ビッグアイランドの古きよき時代を
しのばせる街並みと、人々の優しさに満ち溢れた街、ヒロ。
この街の雰囲気、人間を誰よりも愛するBJは、アメリカ本土や日本、オアフ島で話を
聞いたときよりも、ずっとにこやかな表情で、言葉も多く、リラックスしていた。
あの激しい戦いからは想像もできない、穏やかなBJの素顔。
「好きだから」、「楽しいから戦う」という天才BJペンは、猛しい火山が聳え立つ激しさを
内包した穏やかな島——ビッグアイランド、そのものだった。

高島学＝文・撮影
text & pix by Manabu Takashima

ズッファ＝撮影（BJペン vs マット・ヒューズ）
pix of BJ vs Matt Hughes by ZUFFA

人間的には何の恨みもないですけど、上で
ふんぞり返ってる人間は蹴落とさないと」
「他の人よりどうしても練習量が少なくな
るんで、その部分で色々と考えてます」



横井

おだろう。「その時に」に備えて今日も4
人は練習に励む。

——初めてビッグアイランド（ハワイ島）を訪れたのですが、本当に雄大な景観を持つ島ですね。

BJ そうだろう？ 自然も多いし、のんびりしている。なんといっても気候が最高なんだ。ここで生まれ育ったら、他で生活するのが嫌になってしまうよ。

——ところでBJ選手のお父さんは、このビッグアイランドで一番の富豪だという話をよく聞きますが？

BJ ハハハハ。ダッドはハードワーカーで、ずっと仕事ばかり。家族と過ごす時間もない人だった。物凄い金持ちだとは言わないけど、余裕のある生活はできているよ。

——世界中に流通した釣具を開発したというのは本当ですか？

BJ 人の噂って言うのは怖いねぇ。ハハハ。そういう会社を買収するとか、しないとかという話はあったみたいだけど、釣具なんて開発していないよ。ダッドは不動産じゃないけど、そういう土地関係の仕事をメインに、お金になることなら何でも、いろいろやっているんだ。

——これも噂で耳にしたのですが、BJ選手はもともとリッチファミリーの出身だから、ファイトマネーのために戦っているのではない。そしてファイトマネーは全額寄付していると。

BJ ハハハハハ。本当、色んな話があるんだね。寄付をしたのは、ジエンス・パルヴァーの試合の時。セプテンバー・イレブン（9・11テロ）のあとだったし、色々考えるところもあって。でも、その時だけだから、あんまり美談として伝わるのもね、変な話だ。

——それにしても、こののどかな街で、格闘技に関わるというのが、何か不思議な気がします。

BJ 柔術ではないけど、島の人間はキックボクシングやボクシングみたいな、打撃系の格闘技のことはかなり興味を持っているよ。僕も子供のころから、蹴ったり、殴ったりが好きだったし、まぁボクシング・ジムでスパーリングをしたりしていたぐらいで、試合に出ることはなかったけど。

——4人兄弟全員が、柔術を嗜んでるようですね。

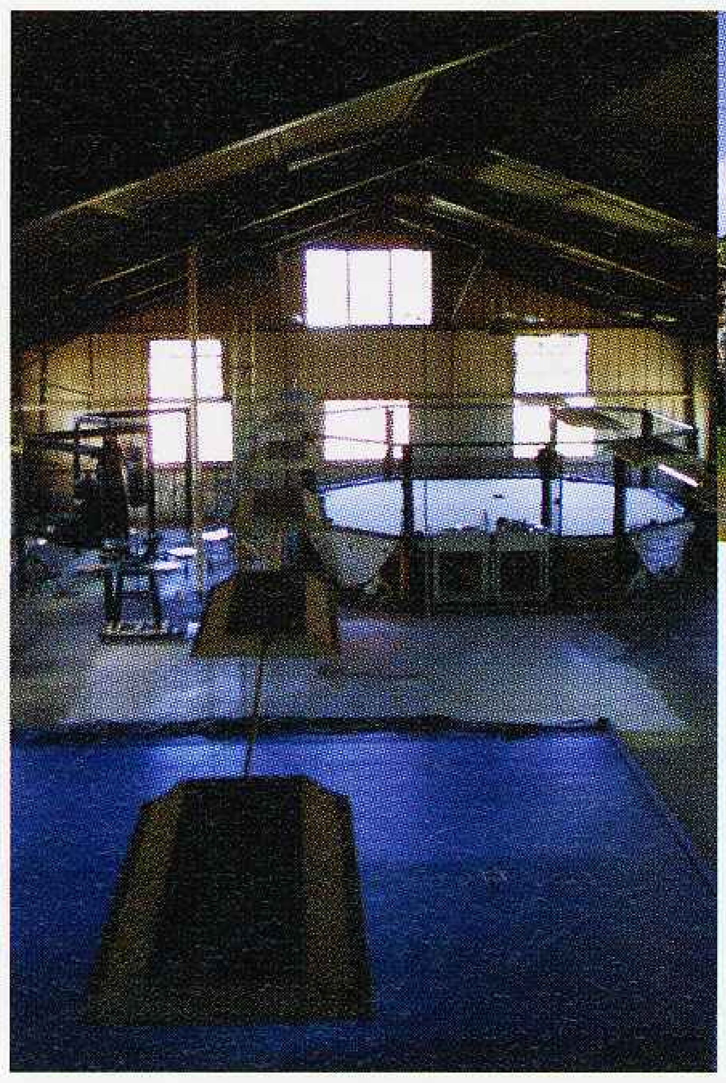
BJ うん、みんなやっているね。元々、ダッドが柔道をやったり、ボクシングが好きだったから、みんなファイトには興味を持っていたのかもしれない。でも、僕が柔術を始めたのは、本当にたまたまだよ。僕が住んでいるストリートに、テコンドー8段で、指導をしている人が引越してきた。で、僕はやっぱりボクシングとかやっていたから、興味があってアカデミーに出入りするようになったんだ。そうしたら、そのトレーナーが実はカリフォルニアで、ハウフ・グレイシーに柔術を習っていた。テコンドーじゃなくて、柔術にはまったね。とにかく僕は興味を持つと、もう回りが見えなくなるタイプみたいで、色々と彼に質問を繰り返すようになったんだ。で、あまり僕がしつこいもんだから、もう構ってもらえなくなって。でも、チョークやアームバーをしかけられているうちに、どんどんはまっていった。ただ、真剣にやっていたというわけじゃないんだよ。なんだろうな、そう趣味の一環だよ。趣味として興味があっただけで。そのテコンドーの先生から、ハウフを紹介してもらってカリフォルニアで柔術の練習をするようになったんだ。

——BJ選手が柔術にはまって、二人のお兄さんや弟さんも柔術を始めたのですか。

BJ どうだったけな？ JD（二番目のお兄さん）は、僕が柔術をやっているのは見ていないよ。JDはその時、ラスベガスに住んでいたんだ。そうそう、で、僕が柔術を始めたって知って、ジョン・ルイスのアカデミーに通うようになったんだ。



月水金はブラジリアン柔術、火木土はサブミッション・レスリングの指導がある。プロ選手はクラスの途中で、オクタゴンに上がりケージを利用した打撃など練習していた。





古いクラッカー工場の跡に作られたBJペンMMAアカデミー。やや湿気を含んだ土地だが、日陰に入ると十分に涼しい。通りに面したフィットネスには、最新鋭の機器が並び、その裏には柔術マット、オクタゴン、そしてなぜかTシャツのプリント・マシーンが置かれていた。なんとも風情のある道場だ。





——だから、ジョン・ルイスつながりで彼のパートナーだったアンドレ・ペデネイラスが主宰するノヴァウニオンに柔術修行へ出向くことになったんですね。

BJ いや、僕はカリフォルニアにいるのが嫌になって、こっちに戻ってきていた。そうしたら、たまたまノヴァウニオン出身のヘナート・シャルート・ベヒーシモが、こっちに住むようになって、柔術の指導を始めたんだよ。

——なぜ、カリフォルニアに住むのが嫌になったのでしょうか？

BJ 気候だよ。寒いしジメジメしている。ホント、理由はそれだけ。ヒロに帰りたくなった。ハウフには今も感謝しているけどね、それとこれは別だから。

——こちらに戻ってこられてからは、柔術の練習だけをしていたのですか？

BJ 柔術とボクシング、MMAの練習も楽しむ程度でやっていた。

——その楽しむということなんですが、ブラジルのノヴァウニオンに行っていたときも、コンピューター・ゲームばかりやって、それほど熱心に練習はしていなかったというのは本当ですか？

BJ その話、アベから聞いたんだろ？

——はい、ノヴァウニオン・ジャパンの阿部修さんから伺った話です。

BJ アベの奴めぇ、アイツ、ポルトガル語も英語も話せない変な奴だった。でも、妙にうまが合ってさ。アベの言う通りさ、僕はずっとそんな調子だった。楽しめたら良かったんだ。

——でも一旦、練習に参加すると、ジョン・ホーキやシャオリンと、真正面からスパーリングで渡り合っていたとも聞いています。

BJ ノヴァウニオンが良かったのは、強い選手が必死になって、スパーリングをしているところなんだ。強い選手が大勢いるジムってあるけど、あんまり互いに本気で練習しないことも多いじゃないか。何だか気を遣ってしまって。そうじゃなかったから、ノヴァウニオンは最高だった。

——ブラジルへ行く前に、ハワイで楽しむ程度でMMAの練習をしていたと言われましたが、ノヴァウニオンではアンドレ・ペデネイラスからバーリトゥードの指導を受けていたのですか？



かなりふっくらしたBJ。今後は77kgで戦っていく

BJ それはまったくない。僕は道衣有りの柔術の練習を楽しみに行ったんだから、あの頃、ブラジルにいるのにVTの練習はする気がなかった。柔術は趣味だから。

——MMAへの転進を真剣に考えたのは？

BJ まぁ、UFCを初めて見たときから、自分はこの世界で成功するんだと、何となく思っていた。楽しんでやっているからって、柔術時代に学んだことを忘れることはないし、それに最も大切なスキルの数々を、あの頃に手に入れわけだから。その柔術の技術を活かして、テクニカル

でストロングなMMAのスタイルができそうだって、感じていた。だから、ムンジアルで優勝したあとも、

ックかな？

——何か意外な感じがしますね。

BJ 実はフランクとは、デビュー

五味隆典との試合は昨年10月にランブル・オン・ザ・ロックで行われた。組織名、プロモーション名、何もつかない世界ライト級王座が賭けられた一戦。その後、五味の活躍ぶり

れないようなモノも置いてあるんだよ。

——BJ選手自身は、どんなトレー

ます。

BJ そいつは大したことない。スリー・オワ・ツーの方がよほど危険

でストロングなMMAのスタイルができそうだって、感じていた。だから、ムンジアルで優勝したあとも、カリフォルニアのウェストバレー・コミュニティ・カレッジに、レスリングをするために通っていたこともあるんだ。柔術とレスリング、それにパンチを合わせればMMAで成功するんじゃないかって、その頃から思っていた。

――では、ムンジアルで優勝したあとは、MMAに転向する方向で、ほぼ気持ちは固まっていたということですね。

BJ ハッキリと決心したのは、ジョン・ルイスから「キング・オブ・ザ・ケージで、カオル・ウノと戦わないか？」と連絡があった時だよ。あっ、でも初めて総合にチャレンジしたのは、ムンジアルに出る前だよ。

――えっ、それはいつのことですか？

BJ まだハウフのところにいた頃の話だから、確か18歳の時だったと思う。オープンハンドのパンクレーション・ルール。大会名は、何かーFCの下部組織だったと思うけど、覚えていないな。オープンハンドで戦ったのは、アレ一回きりだ。本気になったのは、カオル・ウノと戦えると聞いた時からだね、やっぱり。

――でも、実現しませんでしたね。

BJ ウノのUFCデビュー、ジェンス・パルヴァー戦が決まったから流れたなんてことを言われたけど、ウノはこの話を知らなかったよ。ハハハハ。

――MMAデビューを決心してからは、あちらこちらで練習をしていますね。

BJ そうだね。ジョン・ルイスやチャック・リデル、彼らとは今でも練習しているんだ。

――デビュー前に、特に影響を受けたMMAファイターはいますか？

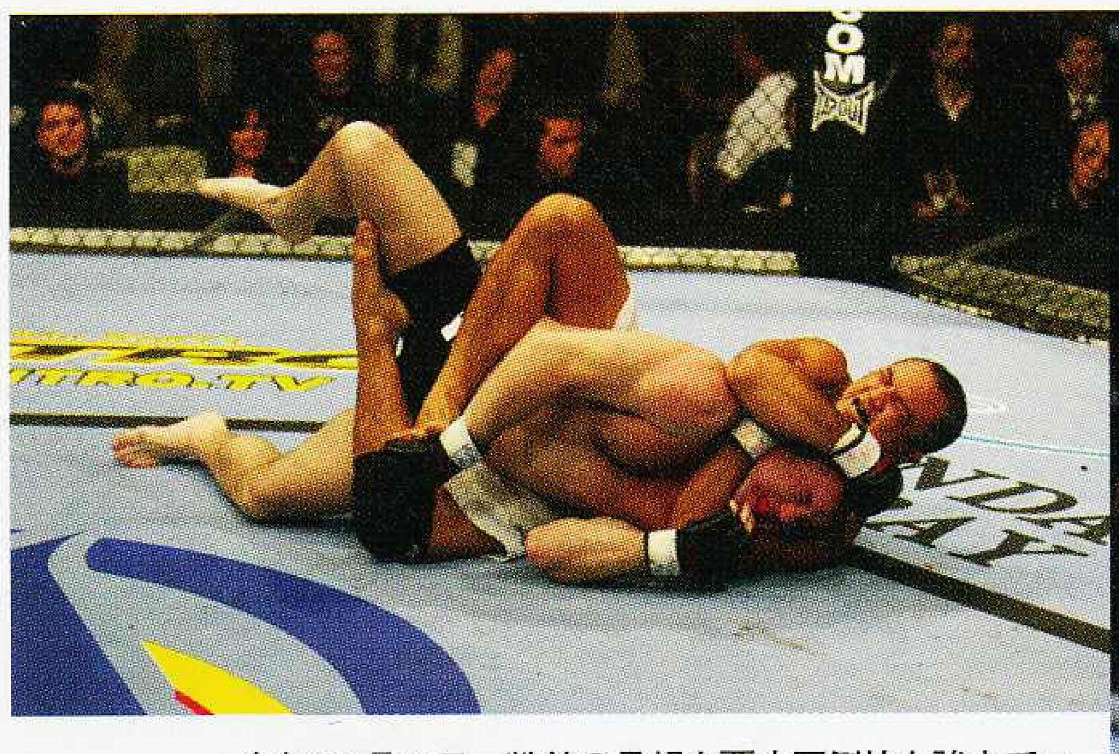
BJ う〜ん、フランク・シャムロックかな？

――何か意外な感じがしますね。

BJ 実はフランクとは、デビュー前にアメリカン・キックボクシング・アカデミーで、一緒に練習した時期があったんだ。クレイジー・ボブ・クックや、ファービオ・メンジスなんかもいたよ。でも、フランクと会ったのはその時が最初じゃないんだ。僕がハウフのところで練習していた17歳のとき、ハウフのところに練習しに来てね。彼とハウフとの練習をみて、「凄いなッ！」って、ちょっと感心してしまったのを覚えている。練習をするようになってからは、とにかくフランクが「何があっても諦めるな。絶対にトライし続けろ」と何度も言っていたことが凄く印象に残っている。結局、またハワイの気候が懐かしくて、アメリカン・キックボクシング・アカデミーがあったサンノゼからも、抜け出してきちゃったけどね。ハハハハ。

――メインランドでの練習と、ここビッグアイランドではどちらが充実していますか。

BJ 練習という面だけで済ますことができないだけの居心地の良さが、ここにはある。僕はこの街が好きなんだ。それに僕はもうプロフェッショナルだ。ホビーじゃない。ベストの環境を作り、厳しい練習を課すことも仕事のうちだ。それにはトレーニング以外の時間の重要性も増してくる。だから、僕はここに自分のアカデミーを作ったんだよ。昔はクラッカー工場だったんだけど、古い建物でなかなか感じが良いだろう？ 僕はここで練習しているだけでなく、指導もするし、ジムのオーナーでもある。通りに面したワークアウト用のスペースにある機器は、全て僕が自分で見繕ったものなんだ。肩、ヒジ、手首、ヒザ、腰、体の特定の部分の専用マシンもあって、他のフィットネスじゃ、ちょっとお目に懸かれないようなモノも置いてあるんだよ。



今年の1月31日、戦前の予想を覆す圧倒的な強さでマット・ヒューズを下しUFC世界ウェルター級王者となったBJだが、その後、ROMANEXのリングに上がったという理由で、タイトルを剥奪されてしまい今では訴訟問題にまでこじれている。





五味隆典との試合は昨年10月にランブル・オン・ザ・ロックで行われた。組織名、プロモーション名、何もつかない世界ライト級王座が賭けられた一戦。その後、五味の活躍ぶりが、彼を圧倒したBJの強さを際立たせている

――BJ選手自身は、どんなトレーニングを？

BJ 今はちょっとケガをしているから、治していてあまり練習はしていない。本来は1日おきに体力トレーニングと実戦トレーニングを交互に繰り返しているよ。体力トレーニングの日は、朝にジムワーク、夜はミット打ちというように2度、実戦トレーニングは1日に1度だけ。日によってはオアフ島へ渡り、ハル・シマニシ（嶋西晴臣氏、HMC代表）のところでムエタイ、シャルートのところで柔術やMMAの練習をすることもある。

――ハルさんは「BJは天才。1度技を見せるともう、次の瞬間には自分でできるようになる」と言っていましたよ。

BJ ハハハハ、そう。どうかな、自分ではなんとも言えないよ。そう言ってもらえるのは嬉しいけどね。このアカデミーでも、カイナン・カクを初め、ロス・エヴァネスなど活きの良い選手が育っているから、十分厳しいトレーニングを積めるよ。弟のリーガンや一番上の兄ジェイも、柔術のエキスパートだしね。練習後にゆっくり過ごす時間が、ハワイ島にはある。僕にとってはオアフ島ですらビジーに感じるんだ。

――練習以外は、どんな時間を過ごしているのですか？

BJ ビーチに行ったり、サーフィンに行ったり、滝つぼに飛び込んだり。

――ヒロ・スタイルですね。じゃぁ、パーティーも。

BJ そうだね、ハハハハ。自然児みたいにリラックスしている。試合がないときはアルコールもやっているしね。

――ウォッカとレッドブルを合わせた危ないカクテルがあると聞いています。

BJ そいつは大したことない。スリー・オワ・ツーの方がよほど危険さ。最悪だよ、今晩試してみる？

――いやいや、結構です。シリアスなことをお聞きにします。UFCとはどんな関係なんでしょうか？ 1月にマット・ヒューズを破り奪取した世界ウェルター級のベルトを剥奪されましたね。

BJ そうだね。ベルトは家に残っているけど、もう、タイトルホルダーではなくなってしまった。何で、こんなことになるのか、ホント、参ったよ。僕は契約書にあるルールは一切、破っていない。法的には何の問題もないはずなのに、だから、K―1ROMANEXで戦ったけど、今でもUFCでも戦い続けたいと思っているんだ。

――なぜ、ズッファUFCがそんな判断をしたのか、理解できないですね。BJ選手は、いつもアグレッシブでファンからの支持も相当高かったというのに。

BJ K―1のオファーを受けないことはビジネス的にマイナスだったし、それでも問題にはならないはずだった。これで僕がUFCに出なくなるなんてことは、UFCにとってもマイナスになると思うんだけど。UFCは「コイツ（BJ）を倒すために、こんな凄い男を用意している」っていう風にすれば盛り上がるはずなのに。僕を応援する人、僕が嫌いな連中、どちらも興味を持つカードができるじゃないか。UFCはもっと、ビジネスが上手くなって欲しいよ。6月のUFCにはシャルートのセコンドに就くためにラスベガスを訪れたけど、ズッファの連中は僕とは何も話したがらなかった。今はROMANEXで1試合契約が残っているだけで、スケジュールは白紙に近いよ。でも焦りはない。周囲の状況をじっくり観察し、自分からはあ

まり動かないで様子を見ておく。テイク・イット・イージー、誰か僕をエキサイトさせてくれそうなビッグネームの登場を待つことにするよ。あまりイージーな相手と戦いたくないし、とことん自分を追い詰めるような戦いをしたいんだ。ジェンス・パルバーや、カオル・ウノ、そしてタカノリ・ゴミ、マット・ヒューズと戦ったときのようにね。そういう状況になるまで、ヒロでゆっくりとリラックスして過ごすよ。この最も居心地のよいジムでね。今は凄く戦いたいという欲求があるのは否定しないけど、楽しくなくなったらスパッと辞めるよ。僕は楽しいから戦っているんだけなんだから。

——引退後の人生も考えていますか？

BJ 考えないよ、人生の全てを考えるなんて無理。ただ、分かっているのはずっと現役のファイターではいられないということ。今のように柔術を教えているかもしれないし、MMAの指導しているかもしれない。それかレスリングと柔術をブレンドしたスタイルを広めているかも。ここでは子供たちの指導もやっていて、彼らの人生に柔術が何か、影響を与えるものになってほしいと思っているんだ。僕がそうであったように。格闘技を学ぶっていうことは、ハードなことだから、それによって子供たちの内面がどう変わっているのかなんて、僕にはまだ分からない部分も多い。でも、小さな子供たちが柔術を始め、将来、30歳や40歳になっても格闘技と関わっているかもしれないんだし、その可能性がある限り、僕はできるだけの努力をしたい。多くの子供たちに、格闘技に触れる機会を与えてあげたいと思っている。最近まで柔術が自分の全てだと思っていたけど、柔術は僕の一番好きな格闘技であって、人生の一部でしかないと思うようにもなった。でも、一番好きな格闘技ということは結構、人生で占める割合が多いし。そんなことも含めて、どう伝わるか分からないけど、子供達と接していきたいね。

——柔術は人生の一部ですか。では、オクタゴンやリングで戦うことは。

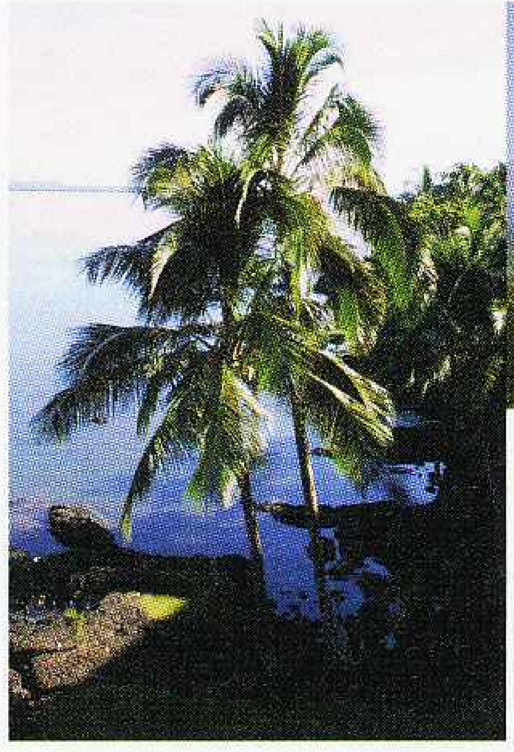
BJ 今、一番したいこと。ずっと続けたいと思っていること。

——じゃあ、ヒロ・スタイルのパーティは？

BJ これもずっと続くだろうねって、違う、違う。ハハハハ。パーティはとても楽しいけど、結婚するまで。結婚したら、打ち止めだよ。ハハハハ。

——へぇ、天下のBJペンも結婚生活を夢見るんですか？

BJ 最終的にはね。ハハハハハ。





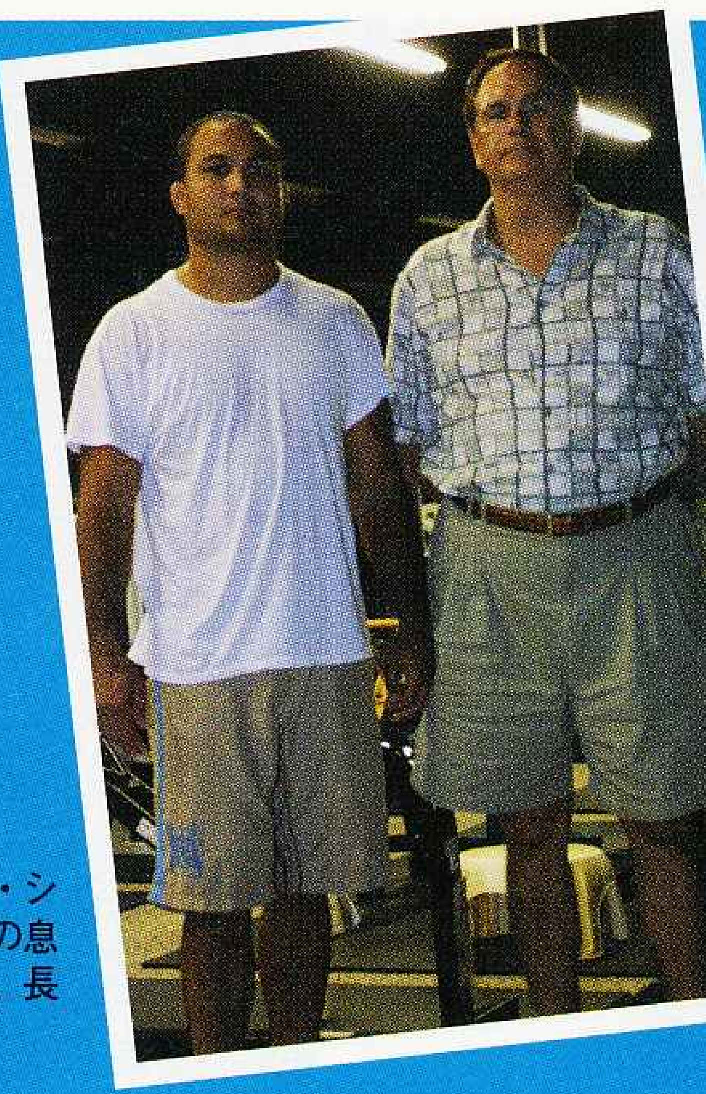
マウナケアの広大な斜面。広い大地を豊かな自然がBJを今も育み続けている。

BJ Penn
ビー・ジェイ・ペン

1978年12月13日、ハワイ州カイルア出身
身長175cm、体重69.8kg
非ブラジル人で初めてムンジアル（柔術世界大会）黒帯で優勝した男。その後、UFCに参戦し、宇野を含めて3連勝。しかしジェンス・パルバーに判定負けを喫した。その後、宇野と引き分けたりしていたが、地元ハワイで五味隆典に勝利。さらにウェルター級に階級を上げてマット・ヒューズに完勝。いままさにパウンドフォーパウンド最強と言われている。



大富豪?? ジェイ・ディ・ペン氏が息子の成長を語る
「息子は4階級制覇するよ」



BJと並ぶ父ペン氏。ネブラスカからハワイにやってきた人物で、韓国系ハワイアンのローライン・シンさんと結婚。アジアン、ポリネシアンとヨーロピアンのハイブリッドがBJだった。ペン氏の4人の息子達への言葉は日本的には親バカとしか表現のしようがないが、欠点を直していく日本的な教育と、長所を伸ばす教育方法の差は明白で、元気のない日本も考えを改める時が来ているのかもしれない。

——息子さんのMMAでの成功をどう思われていますか。

D 自分のやりたいことをやっているわけだし、とても良かったと思っているよ。今やっていることが好きで、それに専念して、完璧に集中しているからできたんだろうね。

——BJ選手には素晴らしい家族のサポートがあるからという話も聞きます。

D 本当に練習したいのなら、環境は整える。でも、その環境をいかにして欲しがるかも私は見てきた。BJは寝袋一つもって、世界中のどこの道場でも泊まる覚悟がある。そして、練習環境以外の何も求めていない。ここにはBJペンという素晴らしい指導者がいるし、簡易のベッドもある。でも、その環境云々を口にしている人たちは、寝泊りする覚悟、練習以外のことは顧みない気持ちで、ここを訪ねてきたのかい？ そうじゃないだろう？ BJはそういうことができる人間だった。

——このジムはBJ選手が作り、経営しているらしいですね。

D ああ、彼は彼の信念や考えのもと、試合で稼いだ資金でジムを開いたんだ。

——お父さんは、資金援助していないのですね。

D 私が息子を助けたのは、トレーナーを雇うときや、海外へ行く旅費を出してやったぐらい。助太刀程度だよ。

——もし、BJ選手がMMAファイターでなく、他のスポーツや役者を目指していても、同じようにサポートしましたか。

D 彼のようにベストを尽くしているならね。大切なことは、彼が何をしたいか、それに対して、どれだけ専念しているか。私の息子だし、愛しているから、どうせなら楽しいことをやれといつも言ってきた。

——BJ選手の引退後のことなど、考えたりしますか？

D それは考えないな。というのも、BJは16歳でトップの成績を残しハイスクールを飛び級で卒業しているんだ。その気になれば、医療関係、政治でも、科学者でも、彼が望めば、その道でやっていけるから、心配はしていない。彼のスキルが衰えても、続けると言うようなら、きちんと座って彼と話をするよ。どんなビジネスにも、人生にも近道はない。近道しようとするよりも、自分が正しいと思うやり方でやっていれば、次につながるし、結果は良くなる。そして自分の間違い、他人の間違いを認めれば、人間として成長できる。こういうことは、常々に息子たちに伝えてきたよ。

——BJ選手は、子供の頃から何か特別な面を持っていましたか？

D 一番驚いたのは、4歳で雑誌を読んでいたことだ。彼はプロレスが好きで、ハルク・ホーガンのファンだった。本屋でプロレスの雑誌をねだられたことがあって買ったんだ。かなり値段ははったけど、買う価値はあると思った。でも、BJは2週間後に新しいのが欲しいと言ってきたんだ。「まだ読めもしないのに、新しいのは必要ない」と諭すと、「もう全部、読んだ」っていうんだよ。「写真を見るのと、記事を読むのは違う」といい、新しい雑誌を手にとって開いてやったんだ。そうしたら、驚いたことにBJは、そこに書いてあることを声に出して読み始めたんだ。だから、また新しいのを買ってやったよ。子供の割りには集中力があったんだと、後で気づいたよ。

——息子さん同士を比較することは、良くないことかもしれませんが、やはりBJ選手は4人のお子さんのなかでも特別な存在でしたか？

D 息子達は全員、特別な存在だよ。一番下のリーガンは、柔術ではBJに負けないほど才能が豊かなのに、コンピューター関係に夢中で、そっちの道を選択した。上から二人目のJDは、ビジネス、財政が好きで、今、ランブル・オン・ザ・ロックというMMAの大会を仕切っている。あなたも知っての通り、MMAのイベントというのは決して楽な商売ではない。ただ、いくらでもやりようがあるということをJDは知っている。だから、彼はDVDを始めとするマーチャダイズに力を入れた経営を念頭に置いているんだ。そして公正なレフェリングと、できる限りのファイトマネーを支払う姿勢が大切だと分かっている。きっとランブル・オン・ザ・ロックは、これからもたくさん良い試合を提供し、素晴らしい選手達を輩出していくことになるだろう。BJはご存知のようにMMAファイターとして成功した。前妻との間の子で長男のジェイは、柔術で茶帯。ブラジルへ行って、世界王者になることを今も私は勧めている。

——お父さんにとっては全員が特別な存在だよ。私にとっては全員が特別な存在だよ。



JOSH BARNETT
Killer or Otaku?
“童顔の暗殺者”ジョシュ

The Babyface Assassin reigns supreme in the MMA world.

ジョシュ・バーネット

残された最強の一角。
PRIDEではヒョードル、ミルコ、ノゲイラによる
三強時代と言われて久しいが、
常に格闘技ファンの心にひっかかる人物が一人いた。
そうジョシュ・バーネットである。
プロレス、アニメオタクとして知られるジョシュだが、
そのファイトは残忍のひと言。
彼はどうやって今の地位に到ったのか。
これからどこに向かっていくのか。

タダシ★タナカ＝取材・文
Text by Tadashi Tanaka

ズッファ（P37,39試合）、日本スポーツ出版（p40試合）
グリフォン（p38プライベート）ジョシュ・バーネット（P39プライベート）＝写真協力
Photos by ZUFFA, Japan Sports Publishing, gryphon, Josh Burnett

ないと思うようにもなった。でも、

履うときや、海外へ行く旅費を出してやっ

は違う」という、新しい雑誌を手にとって

うんだよ（笑）

アイ・ラブ・ジャパン

「自分は明らかに日本でのほうが顔と名前を覚えられているよ」

「そりゃ日本に足を向けて眠れないよな」こんな軽口から取材が始まった。

最近では東京でアパートを探すまでに到っているが、これはうまくいかなかったようだ。

「自分が考えていたよりずっと難しいことだと気付かされたよ。ずっとツアーしてるわけだから家具付の部屋でないとダメだって条件を付けたんだ。車がないからJRの駅に近くなければ意味がない。それにボクの体のサイズも考慮すると、予算オーバーの物件しか出てこなかったんだ」

結局、今のところはアメリカをベースにして往復する生活のほうがベターという結論になったという。

「でもあきらめたわけじゃないんだぜ。東京に留まる仕事があるときは、ウィークリー・マンションでも借りるよ。それが賢い方法だと教えてもらったからね」

PS2は自宅用とプロレス巡業用に2台持っている。巡業用のはチップを入れることで日本でもアメリカでも使えるようになっているそうだ。

日本という存在は彼にとって最初から特別なものだったようだ。ハイスクール時代のフットボール兼柔道のコーチは日本人だった。趣味はアニメや怪獣フィギュアの収集。やがて「北斗の拳」を愛読して"青い目のケンシロウ"を自称するようになる。

幼少の頃はどんな子どもだったのだろうか。父親が木こりだったとも聞いたことがある。その荒々しい職業は息子が格闘家になる大きな要因となったのだろうか？　しかしジョシュは父親についてはなにも語りたがらない。

「答えたくない」

そう質問をさえぎられたので困った表情をしたら、テレビっ子として育った幼年時代、そしてプロレス観戦歴を自ら語りだした。

「テレビのプロレスやカンフー映画とか、常にファイトを見てきたんだ…」

プロレスの仕組みに関しては幼少の頃からわかっていた。しかし「(ただの)フェイクではない、リアルシング(本物)だ」と思っていたそうだ。日本のプロレスを発見したとき「ドラマはあるにせよ、技術的に優れている」ことにも気がついていた。「どちらが勝つのか知らないで見て」いたと言うジョシュは、95年にUWFインターナショナルと新日本プロレスが全面対抗戦でぶつかったときは、「自分はビック・マーク(※1)である」と認識したそうだ。彼はUインター大応援で見ていたのである。(※1マーク／業界用語で、プロレスを純粋に楽しむ一般大衆ファンの意味)

「完璧な"UWFインターナショナル・マーク"だったね。多くの選手たちがプロレスリング・マークだったことを認めたがらないけどボクは違うぜ！」

最初にパンクラスを知った頃から今にいたるまで、毎日インターネットでプロレス情報を収集している。巡業中は漫画喫茶をご愛用だ。「95年頃に『ビックファイト』っていうインターネットサイトがあったんだ。リングスやパンクラスの情報が載っていた」らしい。UWFインターナショナルファンということが知られたおかげで、専門誌からTシャツやキャップを貰ったし、先日はついにDVDセットも手に入れたそうでご満悦だ。

普段、素顔のジョシュ・バーネットは単なる一(いち)プロレスファンになってしまう。プロレスの夢のカードを聞かれたら、「アントニオ猪木対ヴォルク・ハンなんて面白いだろうね」とか、「15のロストポイントが消えていくUインター・ルールでの桜庭和志対近藤有己なら凄い試合になる」などと語り出す。どこまでもオタクなのであった。

彼はオタク的であることをどう考えているのか。以下はジョシュとメールでやりとりした文章である。

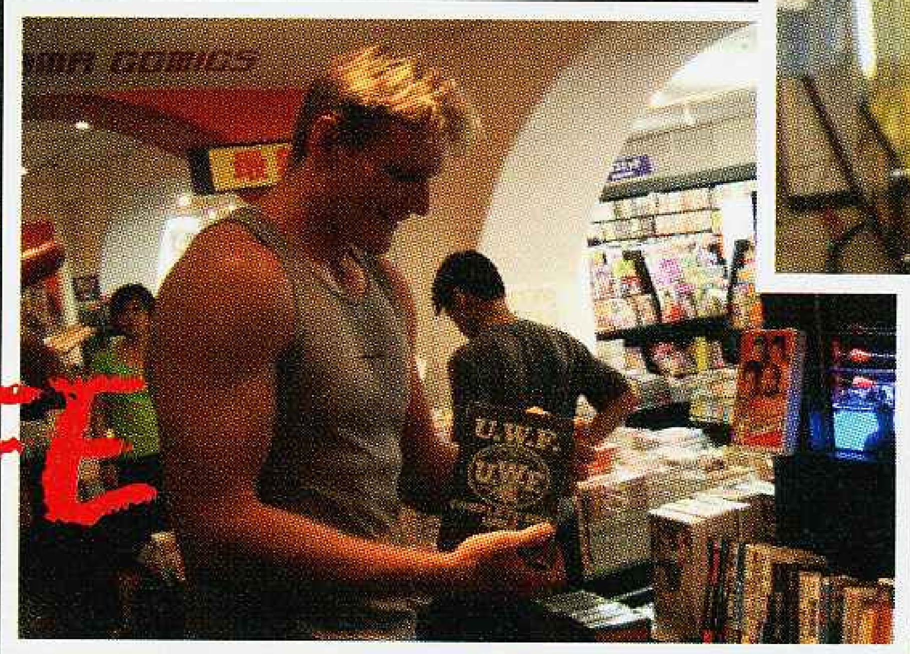
――貴方はオタク的な側面と気の強いファイターの側面を兼ね備えていますね。あなたの中ではどういうバランスになっているのですか？

「自分の中でしっかりした倫理観を持っていれば、容易なことさ。日本の名著『葉隠(※2)』には、サムライは日々4つの誓約(四誓願)を心に決めて、振り返ることなくただまっすぐに進めば、日常の諸事を無事にすめることが出来るとある。要は、自分は何者で、何をするためにいるのかってことを前もって理解していれば、常に正しい判断につながるってことなんだ。オタクだどうだとか、そういうことを基準にして判断する人もいるだろうけど、自分に自信を持って行動していれば、人々はそっちを重要視してくれると思うよ。君が優柔不断になったり、信じているものに不安感をもったりしなければ、すべてはうまくいくはずさ。

(※2／『葉隠聞書』(山本常朝)以下の文で有名な武士道を伝える江戸初期の書物。「武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。二つ二つの場にて、早く死ぬ方に片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわって進むなり。…」)



「オマエハモウシンデイル」すっかりお馴染となったジョシュの決め台詞は、彼の目の前に立っている人物がオリジナルだ！



NO OTAKU, NO LIFE

これはジョシュが来日時に日本のファンと巡った秘密ツアー(?)の様子です



←UWFのDVD BOXを手にしてニヤつくバーネット。
↓ガシャポンをするバーネット。

プロレスオタク・ジョシュ 青い目のケンシロウ

Josh Barnett
ジョシュ・バーネット

(ジョシュア・ローレンス・バーネット)
1977年11月10日生まれ　ワシントン州シアトル出身
身長191cm／体重117kg
マット・ヒュームが主宰するAMCパンクレイションに所属。柔道2年、レスリング3年、ムエタイ6年と豊富なキャリアを誇る。03年1月4日の東京ドーム大会で新日本プロレスに初参戦。同年8月31日パンクラスで近藤有己をタップさせ、無差別級王者になった。大晦日の「イノキボンバイエ」では、無敗のまま王座を返上していたセーム・シュルトを撃沈させ、誰もが認める総合ヘビー級のトップとなっている。04年5月22日にはK-1 ROMANEXにも参加して快勝。秋にPRIDE参戦が噂されている。

Photos by gryphon

総合格闘家としての戦歴道標

総合格闘家としての戦歴道標

高校時代に義理の兄が「UFC2」のビデオを持ち込んだことが総合格闘技にハマる契機になった。96年、19歳で早くもプロ格闘家デビューしている。ハワイで開催された格闘技イベント「スーパーブロウル13」の8名トーナメントに優勝したのが彼のデビューとなった。この99年9月の出場選手には、格闘技ファンには有名なボビー・ホフマン(旧リングスに参戦)やリコ・ロドリゲス(後のUFC王者)などがいた。決してB級大会だったわけではなかったのである。

「無名だったからね、ボクが勝つと賭けたのはたった3%だったんだぜ!」

最初に話しかけてきたのは格闘技ジャーナリストの高島学だったという。翌年2月、日本でも知名度が高い元UFC王者ダン・スバーンを「スーパーブロウル16」で破ったのが脚光を浴びるきっかけだった。スバーンはすでに40歳を越えていたとは言え、まだ無名の若武者がベテランの強豪を腕ひしぎ十字固めに極めたことはちょっとしたニュースになった。

UFCでのデビューは超巨漢のガン・マギー戦で、見事レフェリーストップで完勝した。ようやく世間がジョシュという逸材に気がついたのは、皮肉にも総合で初の敗北を喫したブラジルの強豪ペドロ・ヒーゾ戦(01年2月　UFC30/KO負け)だった。

「バカなミスをしちまった。それが敗因だよ。1Rはリードしていたし取りこぼす相手じゃなかった」と、今でも強気なコメントを崩さない。

血まみれになりながら元パンクラス王者セーム・シュルトをタップさせた試合は強く記憶に残るものだった。01年6月の「UFC32」でのことである。「左目を流血させられたことであせったけど、逆にそれで早くなんとかしないと試合を止められるって必死になったのが良かったね」と振り返る。

次の犠牲者は二度目の対戦となったボビー・ホフマン。リングスで活躍した巨漢をTKOで下した。この結果により、ジョシュにはランディー・クートゥアが持つヘビー級王者に挑戦するチャンスが巡ってくる。時は02年3月、ジョシュは若干24歳。格闘技のメッカ、ネバタ州ラスベカスで開催された「UFC36」でのことだ。

チャンピオンのクートゥアは当時38歳でありながら、円熟味が増したファイトを披露しており、ジョシュが勝利すると予想していた人はわずか。賭け率は圧倒的に差をつけられていたという。それでも、見事下馬評を覆したジョシュのコメントはこうだ。

「ボクに賭けて5万ドル儲けた奴がいたんだって。おいおい、ボクに何パーセントかよこせよなって思ったよ」

元五輪レスリング代表で誰からも尊敬されているクートゥアを完封し、史上最年少のヘビー級王者についたわけだが、ここからジョシュの数奇な運命が始まる。

「運営するズッファの連中とうまくいかなくなってねぇ」がジョシュの言い分だが、実際は二度のステロイド検査で陽性判定となり、ラスベガスのコミッションから半年の出場停止処分を食らってしまったのだ。証人として出廷したマット・ヒュームの弁護証言は素直に非を認める戦術を取らず、権威あるコミッションには逆効果だったことも伝わってきている。ジョシュは語る。

「ボクシングだって観客はWBCやWBAの名前を見にきているわけじゃない。イベン



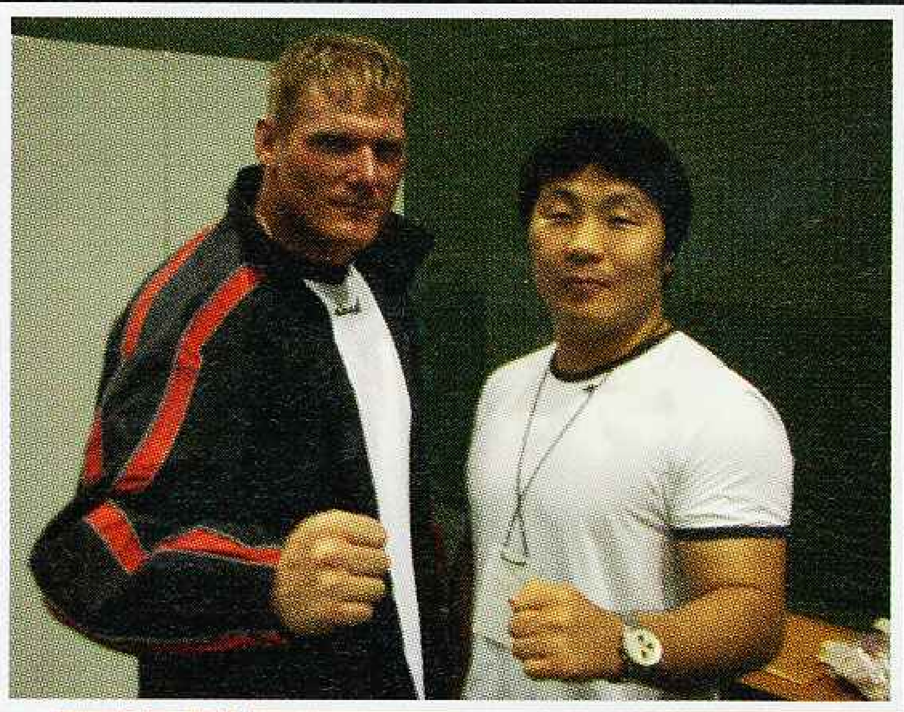
UFCではセーム・シュルト、ボビーホフマン、ランディ・クートゥアと下して、あっという間に頂点を極めるが、その後ステロイド疑惑でベルトを剥奪された。

JOSH'S JAPANESE NETWORK

ジョシュのプライベートアルバム



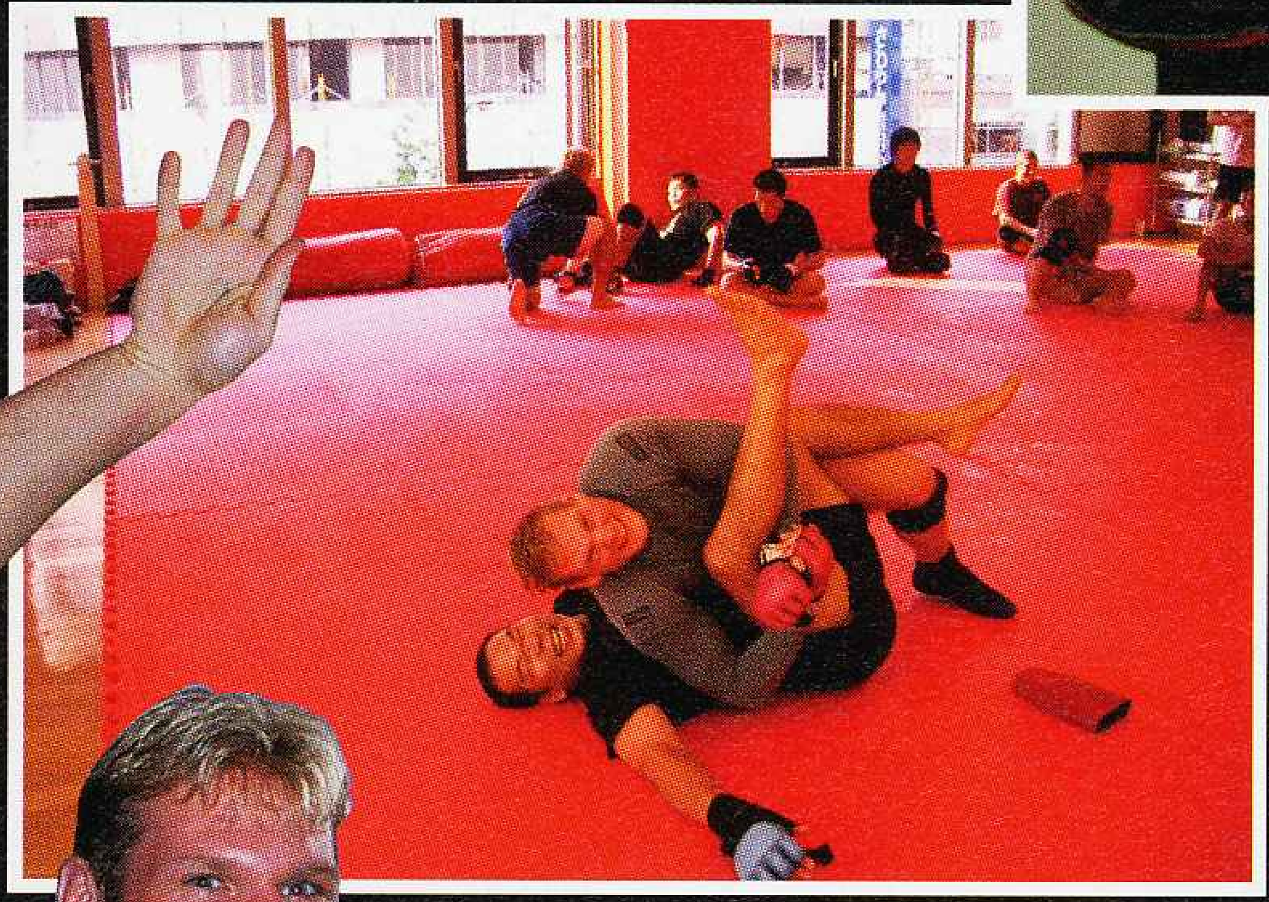
練習後の食事中。新日の矢野、棚橋、、竹村、中西とLAのレストランで。



アルティメットクラッシュ2の試合後に。



Uスタイルの興行後。新日本上井、柿原、成瀬、高阪、横井らとグループショット。



高阪をピンフォールするジョシュ!



阿部裕幸選手と足関対決!



中華料理店にて。左からジョシュ、奥さんのシャノン、宮戸優光氏夫妻。



にファイトを見てきたんだ。」
プロレスの仕組みに関しては幼少の頃か
のです
「自分の中でしっかりした倫理観を持ってい
別に仔細なし。胸すわって進むなり。…」

ダー・ホリフィールドが出るからPPVを買うんだろ？　ズッファの連中はUFCの名称が最重要で、選手の扱いは二の次。だから自分は憧れの日本に戦場を変えることにしたのさ」

UFC王座は剥奪されてしまった。

最初の交渉相手はPRIDEを運営するDSE（ドリームステージエンターテインメント）だったが、ジョシュの要求したギャラ額が法外だったために決裂してしまったようだ。その件のせいで彼は随分業界で悪口を言われたようだが…。

「言いたい奴には言わせておけよ。ビジネスなんだからね。安く売る選手もいれば、言い値の高額を受ける団体もある。結果としてお互いがハッピーならそれでいいじゃないか。」また、こうも続けた。

「UFCに残ってまぁまぁの金額を貰い続けることもできたんだ。でも、ボクはそれより金額が低くなってしまっても、ちゃんとジョシュという個人を売り出してくれて、イメージを大切にしてくれるプロモーションを選びたかった。ニュージャパンはボクをプッシュしてくれているだろ？」

この件で業界に悪評が立っていることを持ち出したら、「ケンシロウは黙っているだろ？　ボクは反論しない」とクールである。

具体的にはその売り出しに関して新日本とどういう話し合いがあったのか。

「そりゃ彼らはボクに角（つの）を付けて、天山の弟として売り出すことだってできたんだけどね（爆笑）。でも彼らは『ルー・テーズとカール・ゴッチを合体させた、正統派の後継者として君を扱いたい』と言ってきたんだ」

その台詞で彼は決断したようである。

「ニュージャパン・プロレスリングは31年もやってるんだよ。無くならないわけさ。K-1の館長はどうなったんだい？　オールジャパンの多額の借金は？　色々噂は回ってくる。選手たちは情報が早いよ。悪口を言われるのは気にならないなぁ。今の状態に満足してるからね」

新日本プロレスのデビューは03年正月の東京ドーム大会。それもいきなりのIWGP王座挑戦試合だった。余りにも経験がなさすぎて試合はぎこちないものであった。本人も満足してないという。

新日は創立31年目の03年、ついに禁断の領域に踏み入れた。5月2日「アルティメット・クラッシュ」東京ドーム大会で総合格闘技に進出を果たしたのだ。異種格闘技戦ではない、本物のガチンコである。さすがにこういう試合があるとは最初の契約時点では知らされてなかったという。

「ただ、だからと言って問題があるわけではない。新日の自分への扱いは素晴らしいもので、空港に出迎えられたときから、きっちりスケジュールも渡されるし、すべてが満足いくものだ。だから話があった時点で“新日の旗を振らせてくれ”という気持ちになったんだよ」と告白する。

「オフィス、選手、共にとてもよくしてもらってるからね。ツアー中は飯塚、ライガー、長井とも一緒に練習する仲さ。そうなると、自分も新日の一員って意識になるもんだよ」

東京ドームでは、公約通りKOTC王者のジミー・アンブリッツに完勝し（TKO）、「新日本プロレスの旗」をマント代わりに羽織る世界最強のオタク・ファイターの姿があった。

さらに同年8月31日、セーム・シュルトの返上で空位となっていたパンクラス無差別級王者を、新日本の拠点会場である両国国技館でエース近藤有己と争うことになった。ガチンコの大会はハッピーエンドにならないリスクがある上に、メインイベントより途中の試合の方が記憶に残ってしまう場合が多々ある。しかしこの大会は、会場を「近藤コール」が埋めつくし、メインはジョシュが予言した通り素晴らしい『伝説の試合』となった。勝利したのはシアトル出身、金髪の白人青年元UFCヘビー級王者である。ちなみに総合格闘技の最初の先生であるマット・ヒュームが、初代無差別級パンクラス王者決定トーナメント（94年12月）に出場している。師匠の果たせなかった夢を弟子が十年後に同じ会場で果たしたというわけだ。

2発のジャーマン・スープレックスを炸裂させて、プロレスラーであることをアピールしたジョシュも、また下手に抵抗せず投げられたあとに、冷静にそれをチャンスにしてバーネットを追い込んだ近藤も会場を興奮の坩堝にした。高田延彦をブン投げるゲイリー・オブライトを思い出し、プロレスがリアルファイトで成立している現場に感動したファンは少なくないだろう。

ジョシュは、元リングスの高阪剛を参謀につけ、宮戸優光のUWFスネークピットジャパンで大江慎にムエタイを教わり、冷静に近藤の打撃をさばいた。アニメ・オタクとして知られ、Uインターのビデオを見て格闘家になった青年は、試合後、対戦相手に道場式のお辞儀をすることでUWFファイターであることをアピールした。そしてジョシュはこの勝利を、新日本プロレス、UWF、そしてパンクラスに捧げたのである。

今年の「G1クライマックス」出場予定には、当初ジョシュがリストアップされていた（※3）。

「でもボクが入ってしまうと、全員に勝つことになってしまう。ニュージャパンが勝たそうと思ってる選手もボクがやっつけてしまうからな（笑）。それではじかれたのかな。ボクは出たかったよ」

「パンクラスの韓国大会が中止になったのはとても残念だけど、（ロン）ウォーターマンとはいずれやることになるさ。K-1　ROMANEXの次回やPRIDE参戦のオファーもある。トーナメントが見たいかい？田村さんのUスタイルでトーナメントがあるらしいね。G1で勝たせてくれないなら、Uスタイルで優勝するってのはどうだい？」

可能性は無限なのだ。誰もジョシュを止める権利はない。

「キング・オブ・パンクラスのタイトルは可能な限り沢山防衛していきたい。ボクはキング・オブ・キングスになりたいからね！」

童顔の暗殺者は死を恐れていない。前進あるのみである。

（※3／執筆時にはジョシュのG1参戦は見合わせられていたが、その後他の選手欠場により再び参戦の噂が出ている。）

僕はキングオブキングスになりたいんだ



近藤に勝利したジョシュは、同年10月に高橋義生と対戦し勝利。さらに大晦日にもセームシュルトに勝っている。すべて無差別級キング・オブ・パンクラス・タイトルマッチであり、すべて一本勝ち。

CONTENTS

INFOREST MOOK GACH MAGAZINE

cover photo
model:
Mirco Crocop
phtographer:
Tkaaki Ueda
design:
Yukinori Hidaka(Zapp!)
title logo design:
Ken Suzuki(Zapp!)

ところでプロってなによ!?

「プロとは何か」は、まだ歴史の浅い総合格闘技にとっては、難しいテーマだ。この種の議論は、いままでプロレスに偏った「プロ論」に陥りがちだったが、「強いだけじゃ駄目」は分かったとしても、そう単純なものでもない。では観客を意識した試合をするのがプロなのかというと、そう単純なものでもない。では観客を意識した試合をするのがプロなのかというと、プロ選手の側から朝日昇をゲストに招き、高島学、橋本宗洋、タダシ☆タナカという、スタンスも個性も全く異なるライターが2時間近く激論をぶつけあった。

和良コウイチ=司会
chairman by Koichi Wara

――まずはやる側の選手から考える「プロ」というのは、どういう選手のことですか？

朝日　僕が思っているのは、まず強くて当たり前。これは理屈抜きですよ。野球でもサッカーでもうまいのは当たり前。その上でお客さんをたくさん入れたらプロじゃないかな。誰も見てくれなかったらファイトマネーもらえないし。

――強さや技術を持っているのがプロではないんですか。

朝日　それは人それぞれですよ。好みが違うじゃないですか。技術が好きな人もいるし。サムゴーの蹴りを見ても「こりゃ金取れる」って思うし。俺はいつも自分が芸人だと思っているから。芸人って何か一本筋があって、これを見てくれ、買ってくれっていう。ペケーニョのギロチンとかね。パフォーマンスだけじゃなくて、そういった意味での芸。本物の芸ですよね。それでどんどんお客さんが呼べて、お金がもらえるんじゃないですか。

橋本　それで明解に割り切れる世界が本当は理想ですよね。ただ、それがプロとなると本当に一握りというところはあるんで。お金、強さ、人気…僕がプロだと思うのは、何でもいいから基準があって、それをファンと共有できている人ですね。何か俺はプロだってものがあって。

高島　ただ朝日さんの話で思うのは、総合格闘技はプロ野球みたいに生き残り合戦という意味では断然小さいものですよね。目指した人間の数とプロになれる数、そこで活躍している人間の数の割合が全然違うわけだから。僕からしたらプロでも弱い選手もいるだろうし、そういう部分ではもっと強さを大切にしてほしい。で、橋本くんが何か一つの基準と言っていたけど、強くないのに喋りが上手いとかじゃなくて、総合格闘技のプロであるなら強くあって欲しい。興行的なところだと、チケットが売れる人をプロと言ってもいいのかもしれないけど。

――例えば負けが多くても、チケットが売れる選手はよくオファーされる場合があります。

高島　基本的に体を痛めつけるわけだから、興行側に求めるのは安全性です。チケットが売れるからといって、試合と試合の間のインターバルを置かないのは危ないことだし。選手がプロである前に、興行側はどうなんですかって思います。

橋本　ただコスプレで入場しようが、喋りが面白かろうが、弱かったら寒いんで、それは共有しているとは言えなくなるじゃないですか。だからある程度、結果を残さないといけないでしょう。

タナカ　一つのキーは石井淳だと思う。石井淳はチケットは売る。応援団も来る。興行という観点からすればおいしい人。でも強いか弱いかといったら、負け越している。僕はさっきの高島さんのように「強くないといけない」という理論で割り切れてなくて、石井淳は負けているけど、試合は面白い。チケットを買った応援団だけじゃなくて、関係ない見ている僕らも面白い。だからいいんじゃないというのもある。ところが石井淳をプロの格闘家として考えた場合、昼間は仕事をしているでしょ。厳密に言うとプロではない。だから石井淳を考えることで日本の総合格闘技の現状が分かるんではないかな。

――格闘技だけでは食べてはいけないという意味でプロではないということですけど、日本のほとんどの総合格闘家はそうですよね。

高島　満足いくファイトマネーをもらってないから面白い試合ができないのか、面白い試合をしないからファイトマネーが上がらないのか。試合スタイルで一つの個性だから、テイクダウン&パウンダーはファイトマネーが上がっても、いわゆるいい試合はできないかもしれない。だからマスコミが強さを認めてあげるべきなんです。僕がよく言うのは、ボクシングでミゲール・カントという世界王者がいた。彼は一発殴ったらクリンチする。強いんだけどしようもない。でもその人が勝てば評価される。

橋本　面白い試合と違う基準も、格闘技は他のスポーツと違う。ジャンピングフットスタンプやるのが面白いのか。野球だったら今のゲッツーいいねとか、外角低めばっちりという部分まで、コアじゃない層まで見てくれるじゃないですか。そういう違いはあると思いますよね。

――格闘技はその低いレベルにわざと落としたままにしているんじゃないかと思うんです。ちゃんと説明する義務を怠って、「俺もよく分からないし、このくらいでいいだろう」と。

高島　僕が一つ思うのは、伝える側の批判になるけれど、野球の原稿を書いている人はシンカーがどう曲がるとか、フォークがどう落ちるとか、とりあえずキャッチボールくらいをやったことがある人が書くわけですよね。でも多くの格闘技マスコミは、偉そうには言えないけど、なんでここで腕が取れたのかを分からずに書くから、「フォークボールが消える魔球になった」ってことにもなる。しかも専門誌の人たちが技術はツウにしかウケないと言っている。それで「プロとは？」って言うわけでしょ。選手からすれば「知るかそんなもん」ってなりますよ。

橋本　自分が分かるレベルでしか語っていないというのもあるかもしれないですね。それはなぜかと言うと、みんなキャッチボールくらいはしたことあるんだけど、腕十字を極めたことはない。文化としての根付き方が違うんですよね。

高島　でもハーリトゥードをやったことがある記者なんていないわけでしょ。何か分からないことがあったら、時間を惜しまず知っている選手のところへ出向いて、技術を聞いたりすればええやん。実際にホームランを打ったことない人でも、むちゃくちゃメジャーリーガーに詳しい人もいますよね。それは伝える義務なのに、怠っているわけでしょ。マスコミが成熟してないのに、選手にだけプロになれというのはおかしい。

タナカ　所詮10年じゃないかっていうのもあるよ。総合って言葉でくくってしまえば、そもそも始まったのが10年前でしょ。それはマスコミも成熟してないし、選手も成熟してないと言われてもしょうがない。やったことがある奴が書いている、書いてないというのは日本だけの問題点ではないよ。ネットで英語の情報を見ても、しょうもないこと書いている奴もいるわけでね。

――アメリカなどの状況も同じですか。

タナカ　基本的には同じ。ただやったことがある奴が書いているから偉いとは思わないね。見る側がお金を払ってみているわけだし、見る側の99%がやったことがない人

桜庭人気を煽って怪我をおして戦ってたんだから人道的にも桜庭をちゃんとかばえよって。（高島）

う面ではどうなんでしょうか？　ロシアで1件死亡事故が起こっただけで、ボクシングやプロレスでは結構死亡事故が起こって

タナカ　基本的には同じ。ただやったことがある奴が書いているから偉いとは思わないね。見る側がお金を払ってみているわけだし、見る側の99％がやったことがない人間だから。むしろ素人目で見ている方がいいという意見はあってもいいと思う。ライターがそれぞれ「技術論が得意」とか「プロレス的な見方ができる」と、それぞれ強みを持っていればいい。ただアメリカの場合、プロレスと格闘技が完全に分かれている。だからプロレスラーが総合をやると必要以上に悪く言うところがある。アメリカ版のPRIDEではプロレスラーの試合がカットされているし。プロレスをやっていると判断してカットするのは分かるけど、シュートであってもカットしている。プロレスと格闘技が分かれている分だけ歪になっている。

――日本は日本なりのプロレスと格闘技の歪がありますね。

高島　レベルが低いから見せたくないっていうのもあるんじゃないですか？

タナカ　それもある。ただ偏見は問題にしておきたい。

朝日　格闘技は裏の凄さが全然評価されないじゃないですか。川尻と戦ったときの宇野くんとか、これはメジャーにいく人間だと思ったけど、評価されないのかなって。すごい試合運びがうまくて、理想のゲームなのに。ああいう試合をもっと正確に伝えられるようになったらいいなと思う。

――でも、「みんな分からないだろうな」って気持ちもあるんですよね？

朝日　今の時代はまだ分からないだろうなって。やっぱりミルコがドカン！と蹴った方が分かるし。

高島　格闘技は今流行りだからって気持ちもあるんです。夢がないのかもしれないけど、格闘技は後楽園とか3千人くらいでしょ。流行っているから5万人も集まって、後ろの方からスクリーンを見るんですよ。流行じゃなかったら、スクリーンを見に金払わないですよ。

強くて当たり前。その上で本物の芸があって客が呼べなかったらプロじゃない。（朝日）



朝日　昇

あさひ・のぼる

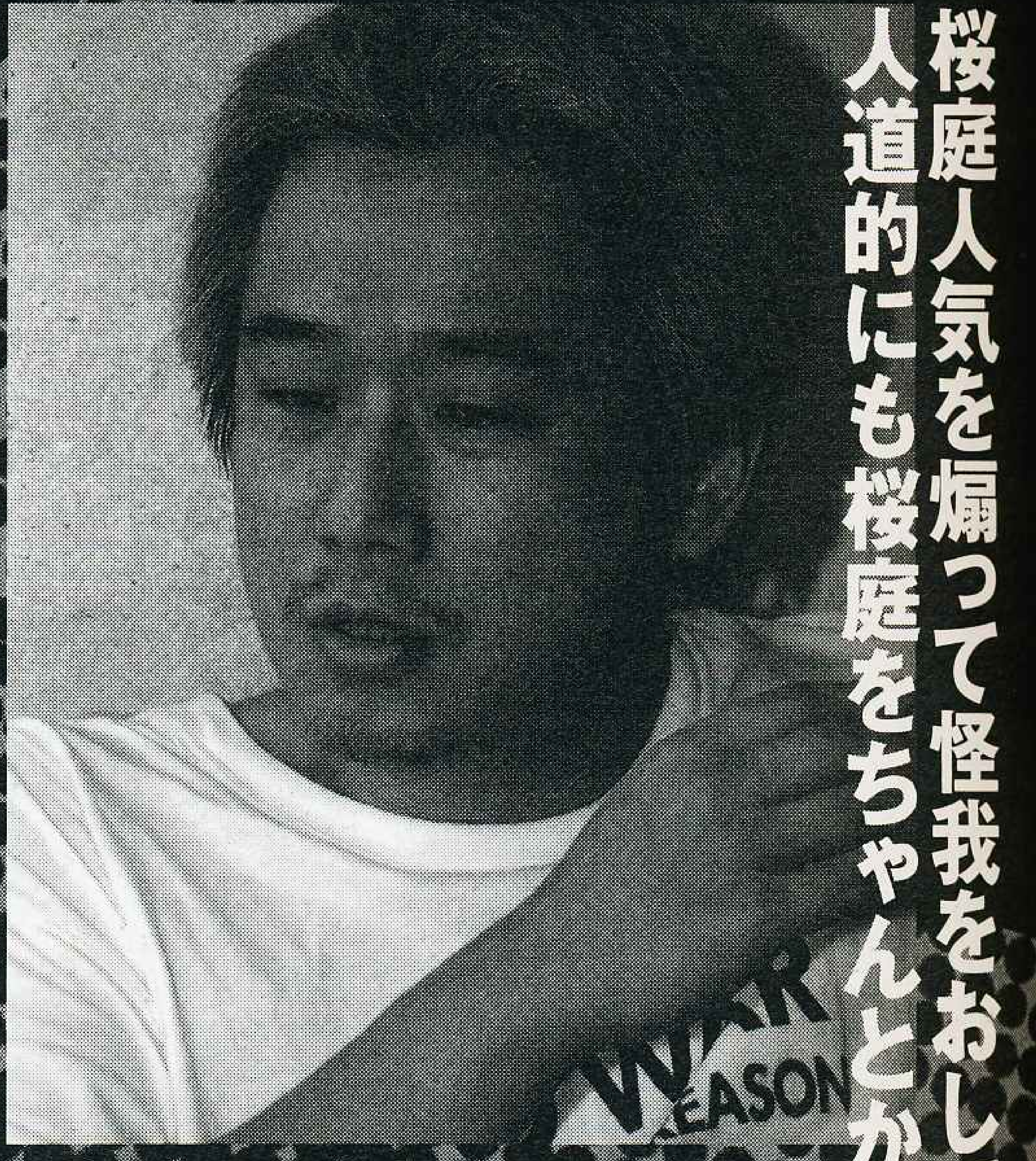
1968年1月5日、神奈川県出身。身長162cm、体重68kg。元プロ修斗ライト級王者（初代）。東京イエローマンズ所属。初期修斗から寝技にこだわり、98年に現王者ノゲイラに敗れるまでの7年間無敗を続けた。01年に東京イエローマンズを設立。

高島　学

たかしま・まなぶ

1967年9月28日、兵庫県出身。95年1月、サラリーマン、世界放浪を経て、業界内の伝説「テルティウス・ファクトリー」の世話になりながらフリーライターに。01年、廃業を決意もゴン格に拾われながら、アッパー体制確立に再び廃業へ。なぜか未だに原稿を書き続けている。

桜庭人気を煽って怪我をおして戦ってたんだから人道的にも桜庭をちゃんとかばえよって。（高島）



朝日　流行だから20％も視聴率取れるんですよ。

高島　後楽園とか下北でやっていることがしっかり根付く方、それも大切じゃないですか。それに良いと思いますよ、半分はレッスンプロでも。僕が業界に入った頃は、東京に総合格闘技の道場なんてなかった。今は潰れるところがあるくらい競争過多なんですよ。5万人も入るところが主導しているから、やりたい人間も増えているのは絶対にあると思う。だからPRIDEが5万人入れている間に、後楽園でやっているところがしっかりしていけばな、と。それを思ったら、アマチュアがちゃんとしてのプロじゃないですか。

――そういう意味で言うと修斗はしっかりやろうとしていますね。

高島　もっと総合全体でアマチュアから始めてほしい。以前、頻繁にDEEPがPPVで中継されていたとき、最後の2試合までが長い。で、その2試合を見たいためにお金を払うのかと。修斗とかパンクラスのPPVは大会場だけだから、最初からいいカードが揃っているけど、なんでクラスBレベルの試合をお金払って見ないといけないのかなって。面白いからって、ボクシングの4回戦でパンチを振り回しているのが評価されるのかなって。

朝日　でもアマチュアはめちゃくちゃ面白いですよ。クラスCでライダーキックVSライダーキックとかありますから（笑）。

タナカ　そういう意味でバター・ビーンというのは4回戦レベルでアメリカで有名な選手なんですよ。だからボクシングのプロの世界では全然評価されてない。

――須藤元気×バター・ビーンというのも、危ないマッチメークですよ。

朝日　目の前で事故が起こったことがないからですよ。しゃれにならないですから。冗談じゃないんだよって。

ケン（編集長）　総合格闘技の安全性という面ではどうなんでしょうか？　ロシアで1件死亡事故が起こっただけで、ボクシングやプロレスでは結構死亡事故が起こっていますよね。

高島　ボクシングは死にますよ。顔面だけを狙って殴り合うんですから。総合格闘技はボクシングや柔道、モーターレースに比べれば競技人口が圧倒的に少ないんです。だからロシアで1件しかなかったって言っても、それはかなり高い確率ですよ。ボクシングとの比較で言えば、頭を殴るだけよりも総合は関節を取ったりするから安全じゃないですか。でも僕はシュートボクシングが一番怖いですよ。パンチでダメージ与えて、後ろから投げたりしたら…。

――ダン・ヘンダーソンと大山峻護の試合のように、その前のパンチでKOみたいなものなのに、そのまま投げられて頭を打つという場面もありましたね。

朝日　でもそれってレベルの差があるから、成長する選手も成長しないですよ。

タナカ　前回のPRIDEから投げ技が流行っているけど、そろそろ落ちつかないといけないんじゃないかと。

朝日　試合って殺されるかもしれないんですよ。レフェリーが止めてくれなかったら怖いよ。

高島　ダウンがあるから戦うって部分もありますよね。ダウンがあるから立ち上がって殴り合う。

橋本　一発殴られてKOのほうがダメージが少ないこともあるかもしれないですよね。

高島　本当、カウント8で「まだやります」って言ったら、もう3発余計に殴られるかもしれないし。

朝日　そうなると今の総合格闘技を裁くレフェリーにそこまで資質があるのか、と。実際、ド素人が大半じゃないですか。

――パンチ十投げもそうですけど、アローナがランペイジにやられたバスターも、すごく怖いですよね。柔術の試合ももちろん、他のどの競技でも許されないですよ。

朝日　修斗もアマチュアの大会で事故が起こって禁止になったんですよ。

高島　カーロス・ニュートンだって、バスターでやられたじゃないですか。あれだけ

世界最高峰の戦いをしているのに。ただそれも技術改革で、技をかけている方が外せばいいという見方もできるんですが。

朝日　そうそう。

――柔道でも危険だからと禁止されている投げはいっぱいありますからね。

高島　そろそろ、寝技の顔面有りを導入し、10年になろうという選手が出てきますよね。例えば佐藤ルミナとか、そういう10年選手が生まれ、果たして本当に安全なのか、これから答が出るのでは。

朝日　アイツはファイトスタイルもディフェンスしないアタッカーだから。

高島　どれくらい体がやばくなっているんだろうって。KO負けもしているし、グラウンドで殴られているし。こういうスタイルを10年もやっているとどうなるのか。彼は最初の人だけど、これから10年やる人がどんどん増えてくるわけじゃないですか。

朝日　本当、分からないですよ。

高島　キックボクシングの世界でいうと、K-1になびくわけでもなく、キックをやり続けている小林聡、引退したけど小野寺力、僕はそういう人たちに光が当たって欲しい。長いモノに巻かれることなく、必死に一つのことに打ち込んでいる。専門誌は一般誌やTV、新聞じゃないのでそういう彼らを利用するのでなく、正当な評価を与えて欲しい。でも光が当たるときにはもうボロボロになっている。それは体を張ってやり続けてきたから。今はもうみんなK-1なりPRIDEに右にならえでしょう。でも何でも大きいホテルの大きいレストランで食べなきゃいけないのか。路地裏でもおいしいものは食べられると。本物はどこにいっても本物。

――ところで、PRIDEの榊原社長が、高瀬×ニュートン戦、三崎×マカコ戦を酷評していたことについてはどう思いますか。

タナカ　あれには裏話があって、そのカードはやめておいた方がいいと言う人間がいた。でも高瀬が「ニュートンだったら絶対にいい試合をする。スパーリングもやったことあるし自信がある」と頑固に言うから、「やっぱり駄目だったじゃないか」という書き方になったんですよ。

高島　でも、僕はいい試合だったと思う。動きがなくてもいい試合だと評価できる部分があるんですよ。

橋本　そこが僕の言う共有するってところなんです。「ツウな見方ができるファンと俺は共有していきたい」というスタンスでやっている人間ならいいんでしょうけど、「いい試合をします」「ヒーローになりたい」と高瀬選手は言っている。彼の言う「いい試合」というのは「動きがあって素人が見ても面白い試合」だと思うんですけど、それであれだったから駄目だった。だからもし高瀬選手が「分かる奴にしか分からなくていい」というスタンスであれをやって「世界の強豪のニュートンに勝ちましたよ」と言うんだったら、いいんですよ。

――個人的には、1Rはいい試合だったと思います。ガードから結構つくることができたし。

高島　榊原さんがそういうことを言うのは分かるんですよ。だって彼は自分でリスクを負って商売をしているから。プロモーターが「こういう選手は嫌い」「ああいう選手が好き」と言えば、選手もここではそういう試合しないといけないなとか、じゃあ出ないという自由もあると思う。ただそれを言われたからって、僕らがそのまま伝えていいのか。

――三崎×マカコ戦について、パンクラスの広報の方は「あれは榊原社長が正しい。イベンターとして正解です。渋谷の男女100人に見せても伝わる試合をしないといけない」と言っていましたね。



橋本宗洋

はしもと・のりひろ

1972年9月24日、茨城県出身。96年、『格闘技通信』にバイトとして潜り込み、そのまま沈むも99年から『SRS・DX』編集部に所属。昨年秋の同誌休刊にともない、フリーライターに。『紙のプロレスRADICAL』、『DVD　club』などで執筆中。

お金は安くてもいいから分かってくれる人か、そうでない人込みで大勢を相手にするのか。（橋本）

高島　それが本気だったらいいんじゃないかな。

――ぶっちゃけ、ブームとかいっても、みんな基本的には流行っているから見てるんであって、ちゃんと格闘技が好きな人は少ないと思いますよ。

高島　ツウのファンにさせるのはとても大事な作業なことだと思う。ただツウにさせ方が「あいつと知り合いだぜ」じゃなくて、「あれパスガード狙ったんだぜ」って。それは本当には分かってなくてもいい。知ったかぶりだろうが、そうやって喋るような人がいっぱいいたらなって思う。

橋本　それを増やしていく作業と同時に、それに甘える選手は減っていって欲しい。選手には、もっとホームランを打つ選手であって欲しいんですよ。

高島　格闘技におけるホームランは何？

橋本　一本勝ちとKO勝ちでしょうね。

高島　それはマッチメークの妙っていうのもあるよね。一本勝ちとKO勝ちを増やそうと思ったら、いくらでも増やせる。

橋本　本当に実力やランキングが拮抗した中でやってくれたらな、という気持ちがあるけれど。

タナカ　それはUFCが競技を目指して、修斗的な考え方を持っている人間がいて、一時マッチメーカーが「プロレスラー交じりの日本の大会のようなカードは組みません。実力が拮抗したカードを組みます」と公言していた。残念ながらここ2年くらいはPPVの契約数の問題で、昔名前があった選手が出るようになった。そういう例もあるから、ものすごく難しい。僕に言わしたら、歴史はすでに1回転している。僕らマスコミが伝えていく任務もあるんだろうけど、それはまだしょうがないっていうのがねえ。まだできて10年だから。

――やっぱり伝える側の問題を抜きにして語れないですよ。いま格闘技がブームとか言っても、ちゃんと試合の見方など伝えていかないと、人気が落ちてきたら流行り物を消費するように、あっという間にその人たちを去らせてしまいますよ。

高島　その通りだと思いますよ。

朝日　でもブームとか言っても、誰も知らないですよ。近所のおばちゃんとかコンビ二の姉ちゃんとか、PRIDEを本気でアイスホッケーと思っていたり（笑）。

タナカ　基本的にまだ立ち技のK-1は分かりやすい。ただ視聴率20％って言っても、小川でしょ。僕ら的にも嬉しいけど、1回戦、2回戦は誰と戦っているのか。彼のおかげで盛り上がっているから悪くも言いたくないし。

高島　小川が頑張っている中で、ミノタウロがどんなにすごいか伝えないといけない。小川がPRIDEに出ます、記者席でハッスルしましたで、エェのかと。

――見る側からの視点として、桜庭和志選手はよくプロの象徴として取り上げられていますが、桜庭選手についてはどう思っていますか？

タナカ　近藤有己は「自分は第1試合だったら第1試合の試合をします。メインだったらメインの試合をします」と言っていたんですよ。それでシャノン・リッチに勝ったけど、「あれは自分の考えるメインの内容じゃなかった」と言って満足してなかった。一方で、この前の桜庭の第1試合は、第1試合の役割は果たしてなかった。「今のコンディションだったら第1試合でもいいんじゃないか」という感じなのかもしれないけど、第1試合だったら格下相手に簡単に勝ってくれ、と。それを周りも分かってないし、本人も錯覚していると思う。

高島　でも桜庭人気を煽ってみんながやっていたから、怪我が治らない間にチケットが売れないからって、試合に出続けた。だったら人道的に桜庭をかばえよって思います。

タナカ　うーん…。本人が出たがりという問題もあります。

高島　桜庭がいたからミノタウロが出てきたし、ヴァンダレイがいる。だったら今の

桜庭が駄目なんじゃなくて、そこまで追い込んだのは自分たちじゃないのかって見方があってもいいと思う。

すけど、お互い高い技術ゆえに動きがない試合もあるじゃないですか。

朝日　正直言って、反省しています（笑）。

総合が始まってまだ10年。選手もマスコミも成熟していないのは仕方ない。



タダシ☆タナカ
ただし・たなか
1959年、大阪府出身。ウォール街の証券マンから格闘技ジャーナリストに転身し、既存の報道姿勢に対抗して「シュート活字」を提唱。著書に『誰も知らなかったプロレス&格闘技の真実』（幻冬舎）など。『日本プロレス帝国崩壊』（講談社）が近日発売予定。

桜庭が駄目なんじゃなくて、そこまで追い込んだのは自分たちじゃないのかって見方があってもいいと思う。
タナカ　ニーノとのリベンジ戦が求められているカードだったのか？　今の桜庭こそ、シャノン・リッチみたいなエンタティナーと戦わせないといけない。
朝日　桜庭さんは偉大ですよ。よく一緒に練習すると「実はあいつ弱いんだぜ」って噂が立つけど、桜庭さんを弱いっていう奴は誰もいないですよ。エンセンが、「桜庭さんと金原さんは強いよ」って名前が出る前からずっと言っていたもんね。それで、あのパフォーマンスでしょ。ああいうのを嫌う人もいるけど、みんな緊張する中でやっていて、それで強いしね。全員がああなれとかじゃなくて、渋い中井祐樹みたいなのがいてもいいけど、桜庭さんは偉大だよ。
高島　マッチメークも噛み合っていたわけじゃないですか。一回、ガイ・メッツァー戦みたいのがあって、それをしないようにしたわけじゃないですか。桜庭に関しては途中まではマッチメイクの妙がすごく機能していたと思います。
朝日　ただ体重差がかわいそうですよね。全然適性ウェイトでやってないでしょ。
橋本　桜庭vsランペイジ戦は、ものすごくランペイジが減量したんですけど、別に契約体重が発表されているわけじゃないし。
——桜庭という素材は「強くて魅せなきゃいけない」というプロの象徴的な存在ですよね。でもどんなに厳しいハードトレーニングをしても、みんなが桜庭になれるわけじゃないですからね。
橋本　そうですね。いろいろな生き方があっていいと思います。
朝日　その方が面白いですよ。
橋本　逆に言うと桜庭の本質を履き違えた人が結構いると思うんですよ。コスプレ入場とか。プロレス技も沸かすためにやっているのに、そんなに沸いてないとか。
——朝日選手の試合でもあったと思うんですけど、お互い高い技術ゆえに動きがない試合もあるじゃないですか。
朝日　正直言って、反省しています（笑）。ジョン・ホーキとやった時も1Rが終わってセコンドにひと言、言ったんですよ。「今日は客無視」って（笑）。申し訳なかったけど。
高島　でも、ありだと思う。僕は負けてもいいから良い試合をするという人には魅力を感じない。客を無視してもいいから勝ちたいという方がありだと思う。
朝日　でもお客さんのことは考えちゃいますよ。メインのときはお客さんが入っているかなって、最低限の責任として。
タナカ　僕なんかはキックボクシング世代だから、富山勝治というキックボクサーを思い出しますね。彼は普段はショーマンをやっているけど、負けた試合があってリベンジ戦のときにローだけで勝ったときがあった。そのとき「今日はどうしても勝たないといけない試合だったからこうなってしまいました」と言ったのは、子ども心にすごく覚えているんです。だから使い分けですよ。
橋本　僕が覚えているのは、亡くなった森下社長が「僕が選手に言うのは一番いいのはKO勝ちか一本勝ち。その次にいいのは判定負けじゃなくて、KO負けか一本負けですよ」と言ったという話を聞いて、それを選手に言っちゃいけないだろうって。僕は武蔵とか好きですからね。武蔵が武蔵として、武蔵らしく評価されるのが一番だなと思っていたんですけど、でも本人が「倒して勝ちます」とか言うから、変になるんであって。
高島　それはいいじゃない。倒して勝ちたいんだから。でもリングに上がると勝つ方が大事になるんだから、倒しにいけないんでしょ。
橋本　郷野みたいに「きっちり技術の差を見せて、僅差の判定で勝ちたい」と言ってその通りになるのならいいなって。
高島　武蔵が戦ってきた相手は、総合の世界と比較にならないと思うけど。
橋本　武蔵は去年のワールドグランプリで「とにかく武蔵勝て！」とみんなが一致団結した瞬間に活きましたよね。そういうあり方もあっていいと思います。
高島　そうなれたら幸せだなあ。
橋本　変にKOを求めずに、ようやく武蔵が武蔵として活きられるリングになったし、やっている人の気持ち、見ている人の気持ち、伝える人の気持ちが一致したから、ああなったんじゃないですか。この前、ボクサーと戦いましたけど、1年前だったら「なぜ倒せない」って叩かれていましたよ、きっと。判定でも何でも勝つのが武蔵なんだって認められて。それが共有するってことですよね。
——前に橋本さんが郷野に対して聞きたいことがあるって言っていましたよね。後楽園のままでいいのか、それともさいたまスーパーアリーナでやれる人間になりたいのか、と。
高島　僕が思うのは、選手とその周りの人間がリング上の強さと経済効果を、どこまで冷静に別モノと捉えられるか。本来は強い人間が、多くの観客を集められる世界になっていくべきだけど、今はまだ多くのケースで違う。それをさも自分が集めてきたお客の前で試合したみたいに言うけど、あなたは集めてもらったお客の前で試合しているだけでしょ。その辺を履き違えたら、その後の人生で痛い目に合うと思う。
橋本　武士道のコンセプトからしたら、ミルコやヴァンダレイを出すことはいけないですからね。後楽園かさいたまかという話は、その選手の意識の中で「お金は安くてもいいから、小さいところでもいいから分かる人にだけ分かってもらえればいい」って考える人なのか、分かってもらえない人も込みで「なんで分かってもらえないんだ」というジレンマがある中でも、たくさんの人の前で、たくさんのギャラで戦いたい人なのか。どっちなのかなって興味はありますよね。
高島　本当に歌が上手くなりたくて、その歌の上手さが分かる人の前だけで演奏するのか、ハロープロジェクトの一人になってドームで口パクでやるのかって違い？
橋本　僕はどっちも悪いとは思わないんです。本人の意識がどっちにあるのかを知りたいんです。格闘技マスコミとしては、男ならでっかいところで勝負しろよって感じもありますけど、音楽ファンの自分は武道館で1回やるんだったら渋谷公会堂で7回やるって人が好きだったりもする。だからどっちもいいと思います。
——個人的に思うのは、凄く技術があっても伝わりにくい試合がある。それを観客の視点から見て「つまらない」とばっさり切るんじゃなくて、じゃあ高瀬のラバーガードは何を狙っていたのか、とその辺は伝えるべきじゃないかって。ツウになりつつある読者やファンが育って来ているのに、そういう人たちに届かせる原稿がないんじゃないのか。一般ファン、一般ファンとみんな言うけど、いま本当に面白がっている人たちに、もっと分かりやすい技術論なり、ディープなインタビューなり、その人の人間性をきっちり伝えるものをやらなきゃいけないんじゃないかな、と。
橋本　確かに技術は追求してくと面白いんだけど、でもそれを分かる以前の人もいるから…。
朝日　でも酷すぎるなってレベルでやられるとね。それをどうにか伝えてもらうのがマスコミの役目だし。やっぱりスポーツじゃないですか。
——プロとは何かを選手に求めると同時に、我々も「プロの観客」を育てる義務を果たしたいと思いますね。

未来は僕らの手の中！

世界に羽ばたく日本人ファイター7

Seven

世界の重量級ではやっぱり見劣りがしてしまう日本人ファイターだけど、軽量級、中量級には豊富な逸材を抱えている。まだチャンピオンにはなっていないけど、この男たち、もっと注目を浴びてもいい。本物だけしか生き残れない時代に現れた、この若き本格派ファイターたちの中から次世代の桜庭和志、近藤有己が生まれてくるはずだ。

熊久保秀幸、橋本宗洋、高島学＝文
text by Hideyuki Kumakubo, Norihiro Hashimoto, Manabu Takashima

高谷裕之（格闘結社田中塾）

1977年6月10日、千葉県習志野市出身
身長167cm、体重74kg

ジョン・ホーキとドロー、ステファン・パーリングを左ハイ一発でKO。それがキャリア3戦目と4戦目というのだから、驚くしかないだろう。倒れずに殴るスタイルを代表しながら、寝技に持ち込まれても、あのホーキの攻撃を凌いでしまった。これまで多くの組み技系選手を圧倒してきたホーキの寝技を、打撃系の日本人が、である。まだキャリア6戦にして、世界の頂点が見えてきたが、もう少しキャリアを積ませたいというのが周囲の声から聞こえてくる。なんせ、リング上で精神的に追い込まれたことがない。だから世界を目指す前に、その"しんどさ"を味わう必要があるというのだ。だが、今の高谷を見ていると、追い込まれることなく頂点に立てそうな気がしてならない。（高島）



川尻達也（Team Tops）

1978年5月8日、茨城県稲敷郡出身
身長170cm、体重76kg

世界的に見て、これほど真っ当な評価を受けていない選手はいないだろう。それが川尻達也だ。UFCでタイトル・コンテンダーにあるイーブス・エドワースを完封し、何もさせなかった。雷暗暴を一発のパンチKOできる総合格闘家が、世界にどれだけいるというのか。今年の3月には、結果はドローだったとはいえ、あの世界の宇野薫をボコったというのに。PRIDE偏重、あるいは個性的な戦う空間がもてはやされているのは知っている。だが、ごく当たり前にプロ修斗で、とんでもない成果を残している選手に対して、失礼な扱いが多すぎる――、と怒りたくなるほど川尻達也は強い。世界で3本の指に入る実力者だ。（高島）



所 英男（STAND）

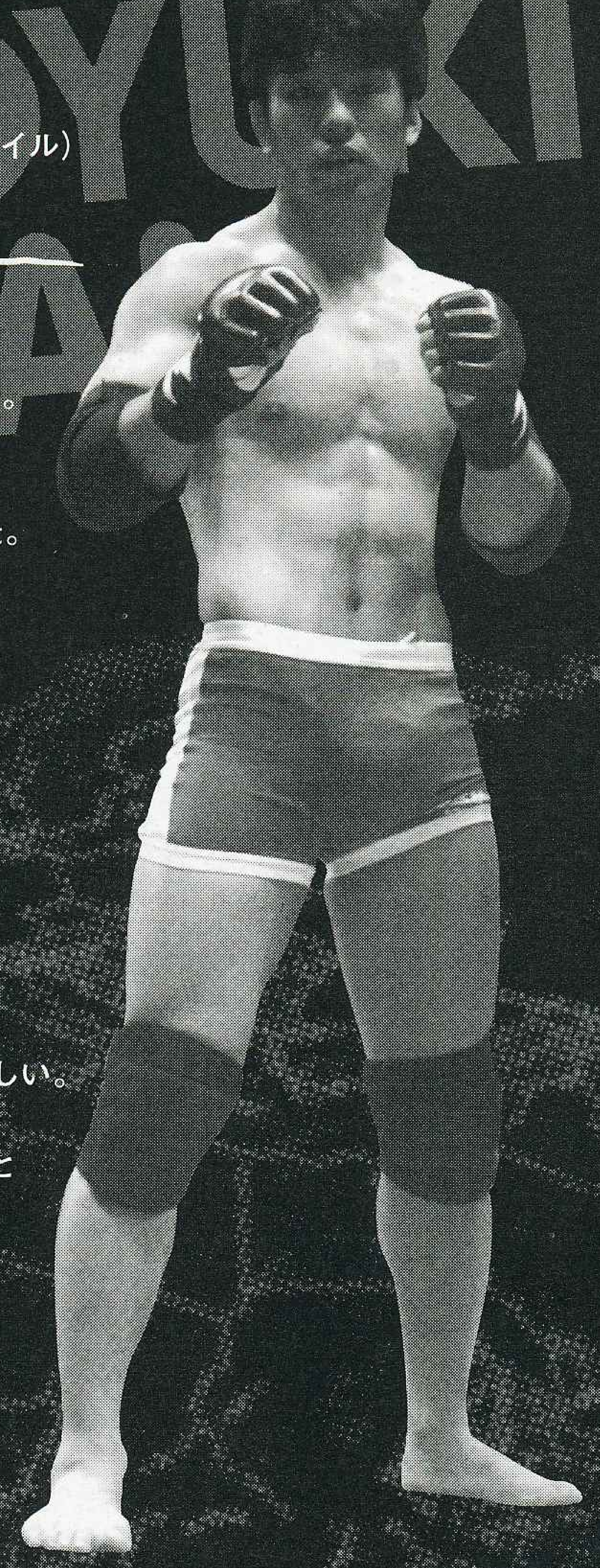
1977年8月22日、岐阜県揖斐郡
身長170cm、体重65kg

ただのリングスファンだった野球少年は、チケットを買いに行った際に声を掛けられて格闘技を始めた。運動神経の良さですぐに頭角を現したが、それほど目立つ存在ではなかったと思う。所が存在感を示したのは、やはりZSTのレギュラーメンバーになってからだ。常に攻めるアグレッシブな姿勢、田村潔司を髣髴させる回転体のような止まらない動き、そして極めの強さ。当初は投げたTシャツを誰も拾ってくれなかったが、今では奪い合いが起きるほどの人気者となった。所の試合は常に面白い、外れがない。負ける時だって豪快な負けっぷりだ。彼は口癖のように呟く。「僕なんてまだまだですよ」。その謙虚な姿勢こそが、強さの秘密なのかもしれない。（熊久保）



小谷直之（ロデオスタイル）

1981年12月8日、神奈川県横須賀市出身
身長173cm、体重71kg

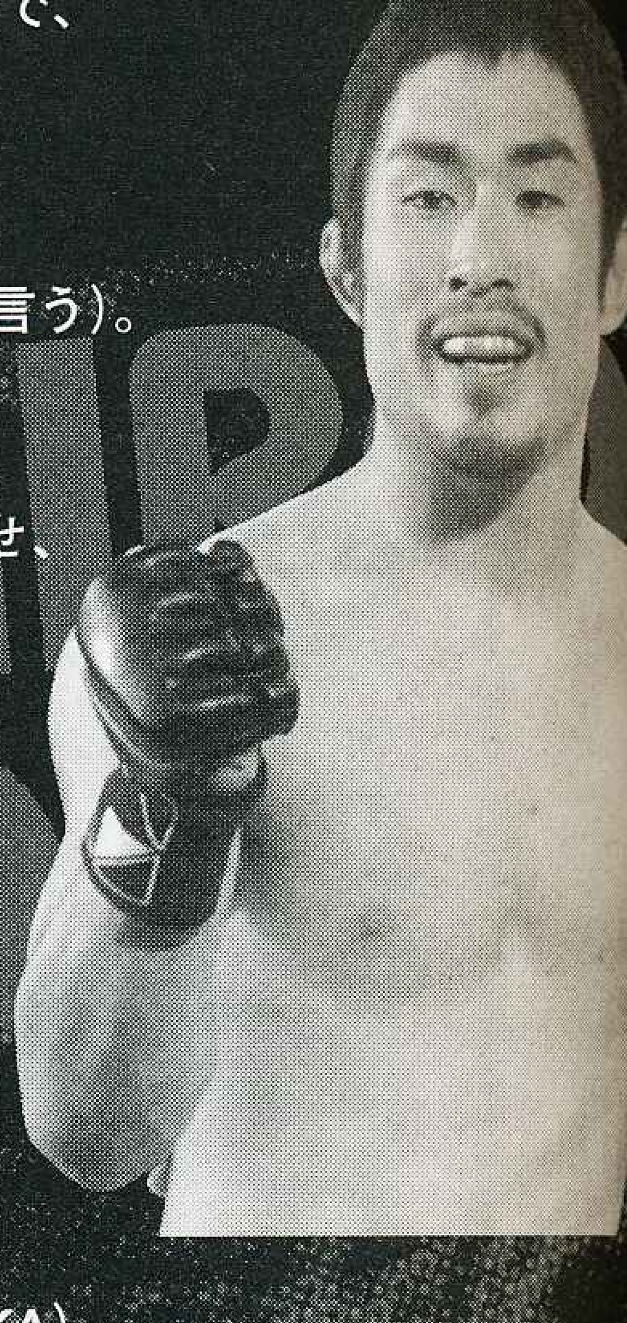


プロデビュー戦にして、
元ムエタイ王者の藤原敏男氏が
その打撃センスと攻撃力を大絶賛。
リングス時代は7戦無敗、
記録は15戦目まで続き、
「KOKルールの申し子」と言われた。
今秋にはアメリカでの
大規模なトーナメントに挑戦、
バーリトゥードにも
本格的な侵攻を開始する。
極めも強く試合も面白いのだが、
最も面白いのはリングを
降りた時の素の姿だ。
オドオドとして視線はうつろ、
ZSTの仲間からは
“挙動不審”と称された。
これが本当にあの小谷か、
と思わせるほどそのギャップは激しい。
格闘技をやっていなければ、
この子はどうなっていたのだろうと
老婆心を出してしまう。
そう、小谷はまさに
格闘技をやるために
生まれてきたのだ。（熊久保）

前田吉郎（パンクラス稲垣組）

1981年10月31日、香川県高松市出身
身長170cm、体重63.9kg

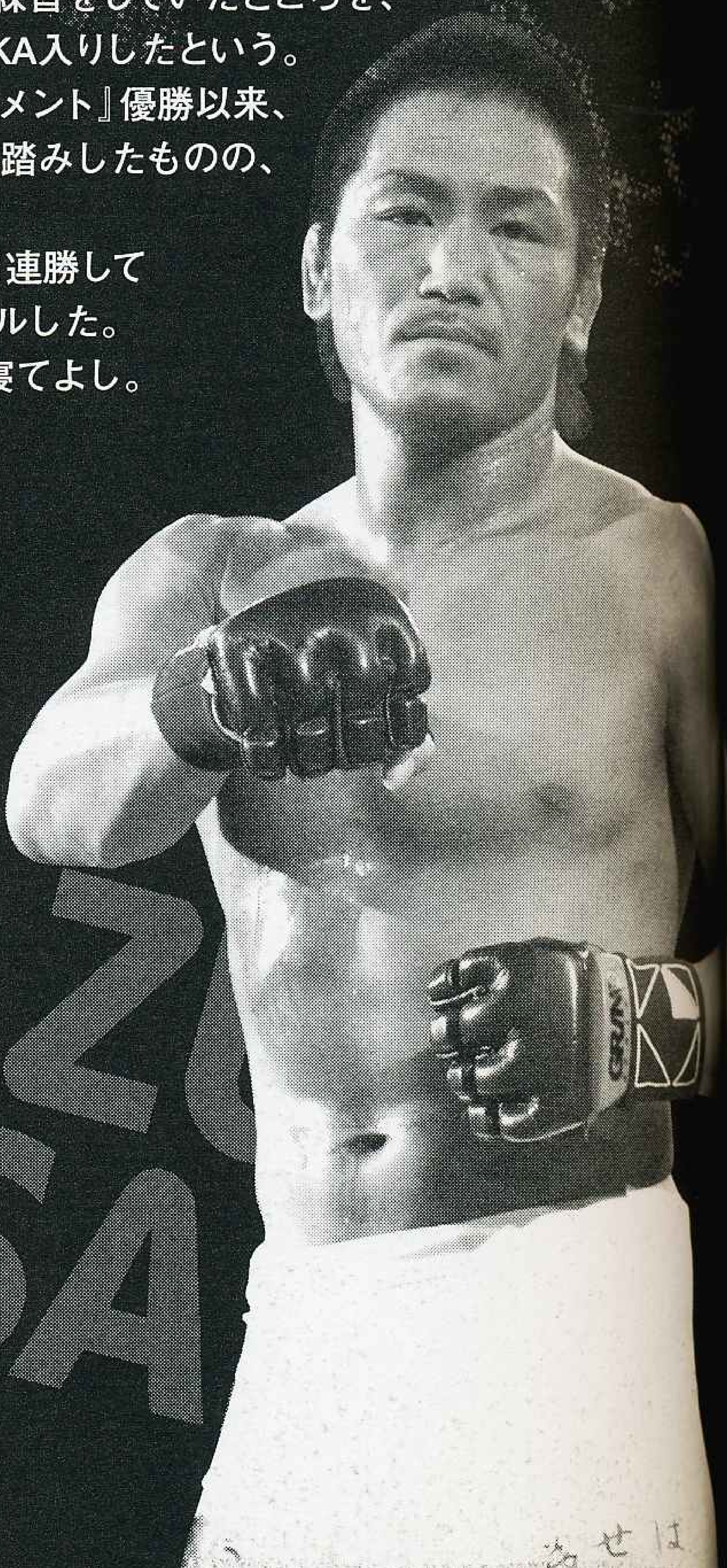
今、パンクラスマットで最も勢いのある選手だろう。
デビューから10連勝は団体記録（現在も続行中）、
対戦相手の中にはバレット・ヨシダ、アレッシャンドリ・ソッカも
含まれているからタダゴトではない。
ヒクソンVS船木戦をテレビで見たことがきっかけで
ピーズラボ大阪（稲垣組）に入門するまで、
格闘技経験はゼロ。だが、
その反射神経は師匠・稲垣克臣も
舌を巻くほどだ。唯一のこだわりは
稲垣組への愛情（「血の結束」と前田は言う）。
相手に関しても観客に対しても
ほとんど頓着しない男だが、
一瞬の隙を見逃さずに打撃をヒットさせ、
さらに連打で追い込む躊躇のなさは、
まさにその“無意識”の
産物なのかもしれない。（橋本）



三崎和雄（パンクラスGRABAKA）

1976年4月25日、千葉県香取郡出身
身長178cm、体重77.8kg

石川英司とともに“GRABAKA第二世代”を支える男である。
柔道出身で、かつては某強豪社会人チームに所属。
地元・千葉で仲間たちと総合の練習をしていたところを、
菊田早苗に認められてGRABAKA入りしたという。
2001年の『ネオブラッド・トーナメント』優勝以来、
順調に成長。昨年後半はやや足踏みしたものの、
今年に入ると國奥麒樹真戦、
ジョルジ・パチーユ・マカコ戦と連勝して
ワールドクラスの実力をアピールした。
ファイトスタイルは立ってよし寝てよし。
スタンド打撃、パウンド、極め、
いずれのパターンでも
勝利を収めている。
その芯にあるのは
強烈な“負けず嫌い”。
どんな技より、
意地ムキ出しの
闘いぶりがファンを
ヒートアップさせる。（橋本）



長南 亮（フリー）

1976年10月8日、山形県鶴岡市出身
身長175cm、体重80kg

E・ヒョードルがVT対応の“新・ロシア人”なら、
この長南亮は“新・日本人”である。「柔よく剛を制す」ではなく
「剛よく剛を叩き潰す」スタイル。スタンドで殴り、
テイクダウンして殴り、
下になれば蹴り上げて相手の顔面を破壊する。
いわく「パスされたってマウント取られたって、
痛いわけじゃない」。
その徹底した攻めの姿勢で、
昨年9月には桜井“マッハ”速人を
眼窩底骨折によるTKOに追い込んだ。ただし、
単なる暴力的なストライカーではない。
「自分を“怖い”という気持ちに
させてくれる相手と闘ってみたい」とは
マッハ戦前の言葉。
極限の闘いの中で己を研ぎ澄まし、
突き詰めていく武道性が、
この男の真骨頂ではないか。（橋本）



ひと目でわかる 日本人ファイターの階級マップ

もっと団体の枠を超えた対決が見たい!

総合格闘技の日本人選手の層が厚くなっている中、団体や道場の枠を越えた見取り図をつくってみました。「あの選手とこの選手が同じ階級だったのか!」ときっと新しい驚きもあるはず。いまは何が起こるか分からない時代。「夢の対決」と思っても、あっさり実現するかもしれません?! (名前は五十音順)

和良コウイチ=構成・文
text by Koichi Wara



●55kg
漆谷康宏(RJWセントラル)
マモル(シューティングジム横浜)

●60kg
今泉堅太郎(SKアブソリュート)
大石真丈(KzFactory)
砂辺光久(ハイブリッドレスリング武∞限)
松根良太(パレストラ松戸)

●65kg
阿部裕幸(AACC)
植松直哉(KzFactory)
佐藤ルミナ(KzFactory)
TAISHO(チーム・バルボサ)
高谷裕之(格闘結社田中塾)
戸井田カツヤ(和術慧舟會トイカツ道場)
所英男(スタンド)
中原太陽(和術慧舟會GODS)
前田吉朗(パンクラス稲垣組)
山本"KID"郁徳(PUREBRED東京)

●70kg
宇野薫(和術慧舟會)
川尻達也(TeamTops)
小谷直之(ロデオスタイル)
須藤元気(ビバリーヒルズ柔術クラブ)

●75kg
伊藤崇文(パンクラスism)
大石幸司(パンクラスism)
加藤鉄史(PUREBRED大宮)
國奥麒樹真(パンクラスism)
五味隆典(木口道場レスリング教室)
三島★ド根性ノ助(コブラ会)

●80kg
上山龍紀(U-FILE CAMP)
菊地昭(KzFactory)
桜井"マッハ"速人(マッハ道場)
長南亮(フリー)
中尾受太郎(フリー)
三崎和雄(パンクラスGRABAKA)

●85kg
石川英司(パンクラスGRABAKA)
佐々木有生(パンクラスGRABAKA)
渋谷修身(パンクラスism)
須田匡昇(クラブJ)
竹内出(SKアブソリュート)
美濃輪育久(フリー)
門馬秀貴(A3)

●90kg
大山峻護(フリー)
金原弘光(フリー)
菊田早苗(パンクラスGRABAKA)
郷野聡寛(パンクラスGRABAKA)
近藤有己(パンクラスism)
桜庭和志(高田道場)
小路晃(フリー)
高瀬大樹(フリー)
田村潔司(U-FILE CAMP)
山宮恵一郎(パンクラスGRABAKA)
山本喧一(パワーオブドリーム)

●95kg
高橋義生(パンクラスism)

●100kg
中村和裕(吉田道場)
藤井軍鶏侍(フリー)
山本宜久(高田道場)
横井宏孝(チーム・アライアンス)
吉田秀彦(吉田道場)

●100kg以上
小川直也(UFO)
高森啓吾(パンクラスMEGATON)
藤田和之(猪木事務所)

●修斗 フェザー級:60.0kg以下、**ライト級**:65.0kg以下、**ウェルター級**:70.0kg以下、ミドル級:76.0kg以下、**ライトヘビー級**:83.0kg以下、**クルーザー級**:91.0kg以下

●パンクラス フェザー級:64kg未満、**ライト級**:69kg未満、**ウェルター級**:-75kg未満、**ミドル級**:82kg未満、**ライトヘビー級**:90kg未満、**ヘビー級**:100kg未満、**スーパーヘビー級**:100kg以上、**無差別級**

パッと見てすぐに、修斗=軽量級&中量級、パンクラス=中量級&重量級、PRIDE=軽重量級&重量級&軽重量級といった勢力図の傾向が見て取れる。以下各階級を追ってみよう。

まず、65kgまでは、修斗の独壇場。修斗でいうライト級は、前田や所といった他団体のトップクラスが入っても、この中では傑出した存在にはならないことが、層の厚さを物語る。イコール、日本人が最も世界の頂点に近い階級だといえる。

修斗でいうウェルター級=70kgは、五味や三島のPRIDE転出によるウェイト増もあって、やや全体的に層は薄くなった。だが、小谷や川尻の急激な台頭、宇野の修斗復帰、そして須藤の総合復帰という新旧世代の絡み合いは興味深い。

パンクラス勢が立ち並ぶ75kgにあって、世界との実績という意味では、五味、次いで三島の存在が際立つ。だが、五味はさらにウェイト増を目論んでいるという話もあり、微妙な階級である。

マッハというビッグネームが存在する80kgだが、最近は長南や三崎の勢いが目立つ。階級自体のレベルは他と比べてもそれほど遜色ないが、外国人トップクラスとの対戦になると、骨格や筋力の違いなどが顕著に現れ始める階級かもしれない。

ほぼパンクラス勢で占められる85kgは、混戦模様の団子状態。これも外国人トップクラスとの比較で言うと、80kgと同じことが言える。

一つ飛ばして95kg、100kg、それ以上ともなると、高さはあっても裾野がないというか、「層」と呼べるだけの厚みがないのが現実。「外国人天国」の重量級においては、個々の選手の意識も横にいる日本人ではなく、対世界というのが明確だ。

そう見てくると、PRIDE出場組が軒を連ねる90kgはビッグネームが揃い、まだ実現していない顔ぶれも多い。桜庭×近藤といった夢のカードを筆頭に、近藤×金原や郷野×金原といった打撃対決、菊田×高瀬といった寝技対決もマニア好みだ。この階級で日本一を決める「ジャパングランプリ」を開催してほしいものだ。

総合格闘技を広めるためには、この人の言葉に耳を傾ける必要がある



K−1プロデューサー 谷川貞治氏



最も格闘技を一般層に広めること、ビジネスにすることを考え続けてきた人

**とにかく人に見られるための格闘技コンテンツを創ってきた。
格闘技のコアなファンに毛嫌いされようが、この人の目線はいつも一般層にあった。
雑誌からテレビ、さらに主催者側に立場が変わり、時代も変わった。
それでもこの人の視線の先は、そこに据えられたままだ。
その面白さが誌面、映像を通してもなかなか伝わらない。
総合格闘技の伝播はひじょうに難しい。
ROMANEXが始まった今だからこそ、
谷川さんの話が聞きたくなった、いや聞く必要があった（高島学）**

高島学＝聞き手・構成
text by Manabu takasima
今泉邦良＝撮影
photo by Kuniyoshi Imaizumi

K-1 PRODUCER SADAHARU TANIGAWA

——今回は総合格闘技を扱うムック本の取材ということで、総合格闘技がどうすれば一般受けするものになるのか？　K−1とROMANEXは、視点をどのように変えて一般層に売り込んでいるのか、その辺りのことを谷川さんにお伺いしたいと思います。

谷川　はい、分かりました。宜しく、お願いします。

——まず、なぜK−1が総合の大会を開く必要があったのか？　そこを説明していただけますか。

谷川　それはですね、まず防衛策ということですね。要はK−1ファイターに総合をやりたいという選手が増えてきた。と同時に、PRIDEとの関係が今は決して良くない。だから、選手が取られてしまう。以前のようにPRIDEがK−1を介して、選手と契約してくれていれば問題はなかったんですが、ミルコ・クロコップ以前のように…。今は、そういう状態じゃないので、K−1ファイターに総合の場というものを用意してあげないと、選手が離れていっちゃうので、そういう防衛的な部分が非常に強いですね。K−1が総合の大会を開くのは。

——それは引き抜き防止策という風に捉えていいわけですね。

谷川　まぁ、選手がやりたがっているので場所を作らなければということです。

——谷川さんは以前、K−1だけじゃなく、PRIDEでも内部の仕事をされていましたよね。

谷川　はい、K−1のプロデューサーになるまでですね。

——マッチメイクなんかも手掛けていたんですか？

谷川　そうですね。ただ、僕はどちらかというとK−1の方が、やはり比重が高くて。K−1とPRIDEが共同で動いたDYNAMITE!の時は、一生懸命やらさせて頂きましたよ。

——私がこの仕事を始めた頃、谷川さんは編集部の一番お偉いさんで、バリバリ仕事をされていて、末席で小さくなっていた私が、こんなことを言うのも憚れるのですが、谷川さんはいつも格闘技がどうすれば、世に伝わるかを必死で考えられていました。傍から見ていても。だからこそ、あのROMANEXという名称は、伝わりづらくて谷川さんらしくないという気がしたんです。総合を扱うようになると、谷川さんの磁場も狂ってしまうんでしょうか？　MAXと比較すると、切れのない名称ですよね。

谷川　ROMANEX……分かり辛いですか？

元々は猪木さんと一緒にやろうということで始まった企画で。まぁ猪木さんの好きな「男のロマン」とか「戦いのロマン」ということで、そこにExをつけた造語にしたんだけど。極上のロマンということで。まぁ大会名っていうのは、最初はなかなかしっくりこないものじゃないですか？　K-1だってPRIDEだって、最初はなんだろうなって思われていたけど、それが徐々に浸透してきて。あぁ、そう、高島君の言っているような意見が多いようなら、タイトルを変えることもあるかもしれないですね。

――総合って、総合格闘技という言葉、バーリトゥードという言葉、MMAという言葉、全てに説明が必要で伝わりにくいじゃないですか。

K-1なんて、最初の数年間だけでしたよね、「K-1のKは○○のK」なんていう必要があったの。でも、MMAとかバーリトゥードって、今でも括弧づけで説明し続けていますからね。

谷川　MMAって言う言葉はもう、PRIDEが商品登録してしまったから、使えないんですよねぇ。だから、もうちょっと分かりやすい言葉に変えるかもしれないけど、テレビ局が絡むと、なかなか大変なことも多くて。大会名って、もう使い古された言葉が多くて。アルティメットとか、グラジエイターとか、どこでも付いちゃっているし。ROMANEX、そんなに悪い名前でもないと思っているんだけどねぇ。

――谷川さんっぽくないなと、それが第一印象でした。谷川さんは分かっていても、いつも敢えて素人の目線で格闘技を見て、そして世間に広めようとしていたじゃないですか。そして、なるべく単純明快に。そこの部分で、らしくないネーミングだと。やはり、谷川さんでも総合は伝えにくいのかなと。

谷川　総合は僕、大好きですけどね、実は。伝えるのは、やはり難しい。K-1は見てすぐに理解できるけど、総合はマニアックになれば、いくらでもマニアックになっていくし。

――私と正反対で、競技化とか嫌いじゃないですか。谷川さんの理想の総合格闘技って、第4回UFCあたりだと思うんですよね。技術じゃなくて、凄い個性的な出場選手が多かった頃の。

谷川　UFCは第2回から4回まで、ずっと足を運んでいたのかな。あの頃のUFCは、高島君の言うとおり大好きですよ。どっちかというと競技・競技しているのより、他流試合とか異種格闘技戦の香りがする方が。確かに、そうですね。

――でも中井祐樹がジェラルゴ・ゴルドーと戦ったとき、総合の危険性にメスを入れて、安全対策を訴えていましたよね。

谷川　はいはいはいはい。アレは良くなかった。

――では、その気持ちはROMANEXのなかでも継承されているんでしょうか。

谷川　そりゃあ、そうですよ。特に主催者になったら、余計に気にしますよ。負傷者を出したくないですからね。そういう部分では凄く気を使っています。

――じゃあ、須藤元気vsバター・ビーンなんていうカードは、やっちゃぁいけない試合ですよね。アレを谷川さんが認めているなら、ROMANEXは肯定できない。

谷川　あぁ、あれ、あの試合ね。だけど、逆に言うとバター・ビーンだからやったわけで、絶対にボブ・サップvs須藤元気なんていうカードは組まないですよ。賭けといってしまえば賭けなんですけど、ああなると読んで、あの試合を組んだわけですよ。もちろん、何かあればすぐにストップをかけるよう審判団にはお願いしていましたし。「面白いからやってしまえ」という感じで組んだように見えたかもしれないけど、あれは危なくならないと踏んだ上での試合だったんです。だから、その辺はマッチメイクとして許される範囲だと思うんですよ。須藤元気vsアレクセイ・イグナショフは絶対にやっちゃぁいけないカードだけど、須藤元気vsバター・ビーンだからやってみた。グローブも大きなのをわざわざ探してきたわけで。

――谷川さんがテレビという媒体を通して、アピールしないといけない層っていうのは、ガードの状態から一本足を抜いたから沸くとかでなく、「プロレスラーは出血に強いんです」とか、「プロレスラーはタフなんです」という言葉で喜ぶ人たち。そういう総合格闘技ファンでない人達を相手にビジネスしているわけですよね。でも、本当はタフじゃないし、出血に強い人間なんて存在しない。谷川さんの総合格闘技を伝えるロジックのなかで、危険性はどのように一般層に伝えようと思っているのですか。

谷川　選手が「大丈夫だ」、「まだやれる」というのは、これは勝負がかかっているんでしょうがないと思うんです。でも、だからこそ危険を犯させてはいけない、競技としてキチンと止めないといけない部分ですね。だから、反則には絶対に厳しい態度で接していくし、藤田vsミルコのストップ、中邑vsイグナショフのストップだって、全然間違っていないですから。中邑君の試合がもめたのは、ブレイクなしというルールだったのに、何度もブレイクがあったからなんですよ。意図的にプロレスラー擁護の発言をする人はいても、絶対にストップは間違っていないと思っています。

競技・競技するより、他流試合、異種格闘戦が好き。でもレフェリングは重要

SADAHARU TANIGAWA

今の総合格闘技に、プロレスファンを引き入れる必要はない

――でも、プロレス・ファンは「やらせろー」となったわけですよね。

谷川　いや、でも見ている人たちも、絶対的に分かっている人が増えていますよ。継続していけば、増え続けます。

――今でも谷川さんのなかには、ROMANEXに「プロレス・ファンを引き込まないと」という考えはあるんですか。

谷川　いえ、それはまったくないですね。本当にプロレスラーが必要なんて思わないです。ただ藤田選手と中邑選手は、良い総合格闘家なんで、良い選手なんで使いたいというだけで。ええ。

――新日本ブランドとかは、関係ないということですね。

谷川　それは関係ないですね。ROMANEXをやっていくんだったら、プロレスラーでなく柔道家やレスリングの選手を育ててやっていきたい。プロレスラーは似て非なるものの専門家ですから。あっちの世界で一生懸命やっていればいいと思っています。プロレスラーを無理やり引きずり出す時代は終わっています。藤田選手も中邑選手も華があって、強いから出場してもらっているんです。

――以前はプロレス・ファンを取り込もうという戦略でしたよね。

谷川　今のファンにとっては、それはもう全く別々のもんだし、桜庭選手がグレイシーに勝つようになってから、ファンの意識のなかでも別々になったんじゃないですか。

――こんなこというと、非常に失礼なんですが、真面目一本槍だった谷川さんは一時期、プロレスを理解して、プロレス的なアングルを駆使することが大人で、少し悪っぽく見えるっていう雰囲気に呑まれていませんでしたか。

谷川　いやいやいや、そうじゃなくてファンの量ですよ、単純に。あの当時は格闘技ファンなんていなかったし、僕が格闘技通信をやり始めたころなんて、実券買って入ったファンなんて50人ぐらいしかいなかった。あとは関係者ばかり。でも、今はMAXで1万枚が完売するような時代になったし。そうしたら、そこにプロレスラーをよんで、席を埋める必要はないからね。MAXより広いファン層なんて、ボクシングぐらい。だから70kg級の世界中のボクシングファンに、「あぁ？　MAXって何だ？」って振り向いてもらえるよう作業が必要なくらいで。でも、前は本当に格闘技のファンなんていなかった。だから、そこにファンが居ればいいし、居ないのなら作っていかなければならないし、ファンを入れ替えていかないといけない。僕達が格闘技通信をやっていた時代っていうのは、プロレス・ファン、UWFファンが市場のほとんどを占めていた。彼らが一番ビジネスになっていたから、そうした訳ですよ。今はK-1やPRIDEの方が人も入っているし、社会的認知度も広いでしょう。

――依然として、その当時のロジックを用いているメディアがありますよね。

谷川　まったく意味がないと思いますよ。そう、格闘技専門誌はそんなことやる必要がない。格闘技のファンは今、テレビが主導になっているんだから、その人たちをいかに引き入れるかを考えればいいんで。逆に言うと、プロレス雑誌は、PRIDEとかK-1を視野に入れた発言や、文章を書かないと。数年前の格闘技通信とかゴング格闘技と同じ状況で、逆に言うとプロレス雑誌に関してはPRIDEとかK-1が出てくるのは理解できるけどね。格闘技雑誌にはもうプロレスはいらないと思いますね。

――今でも雑誌をチェックされているんですか。

谷川　面白いものを読みますけど、面白くないものは視界に入らないですね。だから、格闘技通信でも、なるほど、ここ読んでみようかっていうことはあるけど、全体的にワクワクするこ





とはないよね。それはプロレス雑誌もそうだし。今でも山本さんが何て言っているのか、金沢さんが何て言っているのか、井上編集長、山口日昇って何を言っているのかって、人で見ることはあるけど。

――まだ、山本さんが気になるもんですか？だって、ターザンこそ未だにプロレスの論理を格闘技に持ってきているだけじゃないですか。まぁ、プロレス界の人だから、立場逆転で格闘技が必要なのかもしれないですけど、谷川さんのさっきの言葉を借りれば。

谷川　山本さんも……、昔ほどインパクトがあって、山本さんの言うことを聞いているわけじゃないですけどね、ええ。

――谷川さん、私はガチ・バカとか言われていた時代がありますが、格闘技記者として当然だと思っていたんです。そのガチ・バカの論理でいうと、PRIDEやK-1に5万人入ることと同じように、ブラジリアン柔術という競技が、驚異的に競技人口を増やしているということは重要なんですよね。そういう裾野の広がりという部分が、谷川さんがやっているROMANEXとかと、いつかリンクしてくると思われますか？

谷川　それは思ってますよ。そういうステージにならないと、いけないわけだし。それこそPRIDEを手伝っているとき、一番夢中になったのが、吉田秀彦をこの世界に引き入れることだったから。柔道、レスリング、柔術、空手をやってきた人間が、どこまで総合でやれるのか。それが一番、生で見たい。厳しいスポーツの世界を生き抜いてきた人間のスキルが見てみたい。僕、グレイシー一族って大好きなんです。なぜ、グレイシーが好きかって言うと、勝負への拘り、負けに対する拘り。あれほどプロらしいプロはない、ビジネスになるというか。昔の極真もそうだったし、今はなくなっちゃって凄く寂しいんですけど。本当はそういう部分が一番好きなんです。エリオだって、凄いですよ、あの拘りは。PRIDEやK-1が何で人気が出たか、実は勝負論で攻めているから。これはGPの話ですけど、じゃあK-1 JAPANはそうじゃないと反論されれば、そうなんですけどね。ハハハハ。PRIDEの盛り上がりも、GPだから。でも、GPの勝負論はやればやるほど。同じグレイシーのなかでもヘンゾみたいにスポーツライクに「勝った負けた」という拘りが無くなってくると思うんです。K-1はそういう壁に何度も当たってきたんで。

――K-1でも壁に当たるのなら、総合のROMANEXというのは本当にテレビのコンテンツとして、伝えていくのが難しい分野じゃないですか。

谷川　回数を重ねないとですね、見ていても意味が分からない。だから、回数を重ねることが重要だと思うんですけど、ROMANEXの興行回数を増やすには、もう、K-1全体の興行数が多すぎて。次の予定もたっていないくらいだけど、秋にはやりますよ。とにかくROMANEXでは見ている人に分かってもらうためにアナウンサーが攻防を理解する必要がある。だから、総合格闘技に詳しい人間がアナウンサーの横に待機していて、技の名前とか教えているんですよ。総合系の技って、本当に難しいじゃないですか。あのねぇ、僕ね、高島君がCSでブラジルとか修斗とかの解説をやっているの見ていて、なんでこんなこと知っているのって聞き入っていたの。

――でもクビになりましたよ。ハハハハ。

谷川　ええ、そうなの？　技もそうだし、選手の名前とかも本当、良く知っていたじゃない？　逆に言うとさ、ああいう試合はあの解説がついてないと見られないよ。誰が誰だか、分からないのに、それがどんな選手で、どこで誰と戦ったとか、言ってくれてたじゃない。本当、誰が誰だか分からない試合を。だから、ああこういう奴が要るんだって、解説といっしょに画面を見ていたんだよ。

グレイシーの拘りこそ、プロフェッショナル

K-1 PRODUCER

K-1は減点法、総合は加点法

――ありがとうございます。でも、それはスカパーとか、好きな人間が見る、少しでも興味がある人間が見ているという前提に成り立っていた仕事で、自分でもそう意識してやっていましたし。ただ、谷川さんがやられている地上波というのは、もう誰でも良いから見せないといけないわけじゃないですか。だから、正直言って、谷川さんがやられていることを見て、「何やってんだ」って思ったこともあります。谷川さんが格通の編集長の頃、真剣勝負を謳い文句にしていながら、たまに違うことやっているところがあって、谷川さん、そこの会場なのに大きな声で「こんなコト、いつまでやっているんだ！」って、凄い剣幕になったことがあって。

谷川　あぁあぁあぁ、あの試合ね。

――谷川さんは、今でもああいう気持ちを持っているんですか。それともお金のために封印してしまったんですか。

谷川　そんなお金のためなんて、そんなことは……。

――お金っていうか、ビジネスのためにですね。

谷川　それをやっちゃあ、お終いです。ええ、特に今なんか。もう、どんな結果になろうが、それをやっちゃダメでしょうね。やっぱり、総合格闘技の世界は真剣勝負でやらないと。

――私は今でも、分からない試合があります。本当はやっていないのに、アゴが壊れていて、すぐにダウンするから、ワークと思われたりとか。K-1の選手なら、マイク・ベルナルド。ジャブで倒れるぐらい、アゴが弱いですよね、もう。

谷川　弱っているねぇ。

――そういう選手をこの過密スケジュールでどんどん使っていくって、これからも選手は体を痛め続けますよ。

谷川　それは本当に気をつけないといけない部分で、過密日程だから特に。K-1でいうと、本当に必要なのは興行を減らすこと。年齢のいった選手のケガが……。ジェロムにしてもピーターにしても、マーク・ハントもそうだったし。ジェロムも、ホーストも、ハントも、ミルコもいない。でも、今ある目新しい選手を使うとK-1はプロレスっぽいという声が当然出てくるし。今のK-1はいい意味でも悪い意味でも、ボブ・サップの功罪っていうのが……、まあ彼に頼らざるを得ないくらい選手が傷ついていたというのもあるし、ボブ・サップ的な世界を制限するタイミングは大切だと思っています。

――谷川さんのそういう声っていうのは、K-1でもROMANEXでも運営の隅々まで聞こえるんですか？　なんでも所帯が大きくなると難しい部分ってでてくるじゃないですか。

谷川　ええ、難しいこと多いですよ。選手と競技面、プロデュース面で理解してもらえればいいんですけど、選手に伝えるのが難しい。昔、アーツにしてもホーストにしても用心棒のようなものだった。アンディ・フグだってK-1がなかったら、食えないし。だから、本当に頑張って成功してやるという気持ちが強かった。でも、今の選手は食える土壌があるから、もう「幾らくれるの？」っていうのがあからさまで。

――K-1の流れでいうと。総合格闘技を伝える難しさって、武蔵を伝える難しさに通じると思うんです。武蔵ってKOで勝てない、でも本当に強くて、世界の強豪とタメをはれる唯一の日本人で、でも判定勝ちをいつも批判される。僕は彼を評価しないわけにはいかない。KO勝ちを狙ってKO負けするより、判定勝ちを狙って判定勝ちするほうが格闘技として、戦いとして正しいと思っているんです。でも、人々に面白さを伝えるとなると、これ以上厄介なことはない。「面白くないよ」といわれれば、それでオジャンですから。

谷川　K-1は、そもそも総合格闘技と違って減点法なんです。例えば裁定するとしたら、10対10からダウンやダメージを取られた方が、1ポイント、2ポイントと減っていく。でも、総合は加算方ですからね。いい投げがあった、良いポジションを取った、試合をコントロールしていたかどうか。そもそも違う種類の武器を各々が持っていて、自分自身の武器をとにかく使って加点していく。それが総合だと思うんです。K-1で守り主体になるのは減点法だから、でも総合で攻められないのはなぜだろうって。加点法だから積極的になればいいのに。それを許さないのがグラウンドでのポジション。一つのミスで、形成がガラリと変わってしまう。スタンドで右と左に位置が入れ代わっても、たとえ危険だったとしてもあまり伝わらない。でも、寝技で上下が入れ代われば、攻守逆転のような印象を与えることができる。そこじゃないかと。

――逆にいうと、ポジション交換が多ければ、総合でもその攻防は伝わるということですね。

谷川　はい。でも、それは選手にとって歓迎されるモノではない。僕、思うんですけど、例えばミルコが総合で凄い活躍ができたのは、あれ、最初はミルコのハートの弱さがポイントだったんです。ミルコを総合に出そうと思ったのは、

何も身体能力が高いだけじゃない。身体能力が高い選手は、K-1にはいくらでもいるんですね。ただ、イケイケの奴だと結局ガツーンといっちゃって、もの凄く簡単に負けちゃう。ミルコはどっちかというと臆病、慎重なんです。だから「コイツ、いいな」って送り出したんですね。立ち技の選手が、寝技に対応する新しいスタイル、ミルコ・スタイルっていうものを確立したじゃないですか。あれ、競技として総合は加点法なんだけど、ミスをしないスタイルを確立したんですよ。

——立ち技グレイシーですね。でも最後に極めじゃないけど、ビッグKOを持っている。理想的じゃないですか。

谷川　だから成功したんです。あれがガンガンいくK-1ファイターだったら、全然向いていないですよ。だから、総合ってそういう部分でも物凄く難しい。武蔵というファイターは、ひょっとしたら総合に向いていると思う。身体能力もあるし、ミスをしたら取り返しのつかない中で、いかに自分の身を守りながら大胆なことができるか。それがミルコやノゲイラ、ヒクソンにホイスなわけだし。武蔵はそういうスタイルを持っている総合格闘家になれると思いますね。

——今、谷川さんのなかで見ていて面白い総合格闘家は？

谷川　えーっと、今リングに上がっている選手で好きなのはノゲイラとシウバですね。あの二人は誰と戦っても面白い。勝つ姿が面白くて、どういう風に勝っていくのかが、それがPRIDEの方向性という感じがします。ノゲイラは寝技を面白くした。シウバはあそこまでアグレッシブになれるのかっていう部分で、珍しい存在。

——第2のミルコを期待できるK-1ファイターはいますか？　谷川さんのなかでは。

谷川　イグナショフ、それと残念な結果になったけどハントは好きです。PRIDEに行ってしまったけど、ハントは可能性あるなぁと。で、あと、もしやるんだったら武蔵でしょうね。

——谷川さんにとって、他の競技からの転出組ではなく、基礎から総合をコツコツとやってきた選手は、どのように映るんですか。

谷川　う〜ん……、須藤元気だとか山本KIDとか、ああいう選手は凄い。でも、須藤君もKIDもレスリングという基盤があるからねぇ。あと、今後きそうな日本人は秋山成勲君。柔道で名前のある選手が、この世界に入ってきたら凄く面白い。本当はそういう選手たちに、総合でコツコツやってきた人が勝てたら幸せなんですけどね。限界があるんですよ。勝つように見えない。だったら吉田とか秋山とかを期待してしまう。

——谷川さんの総合って、やっぱりどれだけレベルが上がろうが、戦いの中身は変わっても、目指しているのは第4回ぐらいまでのUFCですよね。

谷川　そうですね。そういう状況のなかで、総合だけをやってきた人間が勝てば凄く嬉しいんですけど。それと高田さんみたいな人が本当に強かったら、いいですけどね。ええ。

——それはない！　有りえないですよ。総合をコツコツとやっている選手が勝てないと言われ、なぜUWFにまだ幻想を抱くのかは理解できない。

谷川　ハハハハハ。そうね、まぁ、今、総合をやるには、何かきちんとした基礎をもっていて、そこに総合の知識を加えていく選手が強い。だから、日本人なら吉田選手、そして秋山選手に期待したい。この二人だって、そのままじゃ勝てないから、いろいろ工夫している。う〜ん、柔術とか総合をアマチュアからコツコツやっている子たちが、世界のトップに勝てるようになれば、本当は一番嬉しいことなんでなんですけどね。

——谷川さんと話をしたかったのは、何はともあれ、格闘技を人に見せるという努力を常にしている方だったから。ハッキリ言って、方向性は全く違っていても、何かを極限まで追求している人だから、何か総合が広まるヒントをいただけるんじゃないかと思って。そのなかで、絶対に伺いたかったのが、なぜ谷川さんはK-3を切り捨てたのに、ワールドMAXでビジネスを成功させることができたのか。一番、K-1の初期設定の世界観を表現できているMAXと世界最高峰の技術が集結していたK-3、どこに差があったのか。その答が、総合を伝播させる側の人間にとってヒントになるのではないかと。

谷川　K-3はとてもいい大会でした。技術もハートも。そうなると、やっぱり差は人なのかなぁ、最初は。魔裟斗、小比類巻、武田幸三、KID、須藤元気、安廣、HAYATOに大野とかまで充実しているじゃないですか、MAXは。K-3の頃、金泰泳が一人しかいなくて。次に続く日本人は後川聡之で、彼はK-1、K-2、K-3って全てのGPに出場しているんだから、なんか見ている方も分からなくなってくるし。ハハ。そういう意味でも、人なのかもしれないですねぇ、ええ。ほら、今、女子ゴルフって凄い人気あるんです。男子のゴルフは全然、視聴率でもダメなのに。たった一人、宮里藍が出てきただけで、こうまで変わるわけですよ。一般の視聴者の興味って。

やっぱり、人なんだよね

K-1 PRODUCER SADAHARU TANIGAWA

軸が出来ると回りも際立ってくる。

——なるほど。

谷川　その宮里藍が勝つか、それともキャリアを重ねている、これまでゴルフ界を引っ張ってきた人が勝つのか。宮里がいて、そこに一本の軸ができる。そして、回りも際立ってくる。ということは人から伝えるのが、一番手っ取り早いということ。K-3の頃、金ちゃんは軸になれなかった。対抗馬のイワン・ヒポリットも、名脇役ではなかったと思います。そういう意味で、MAXには魔裟斗という凄く分かりやすい軸がいる。その魔裟斗を中心に日本人トーナメントを開いても、武田とか小比類巻とか、魔裟斗と違うカラーの人間が出て、KIDっていう凄いキャラの持ち主まで現れた。

——キャラが立つ選手が多すぎると、反対にごちゃごちゃするということはありませんか。

谷川　いやいや、軸がしっかりできていればいいと思います。

——う〜ん、今日はお忙しいところ、わざわざ時間をとって頂いてありがとうございました。ホント、いろいろと考えさせてもらえそうです。

谷川　いえいえ。

——あのう、最後にもう一ついいですか？

谷川　ハイハイ。

——PRIDE武士道って、谷川さんはどう思われますか。

谷川　PRIDE武士道は一番分かりにくいですね。ええ。何がやりたいのか。

——あそこが定着すれば、日本の総合格闘技もしばらくは人々に受け入れられると思うんですが……。谷川さんだったら、こうするのにっていうのは？

谷川　あるけど言えないです。ハハハハハ。ヒント、与えちゃうから。

——ハハハハ。

谷川　まぁ、やり方はあると思いますよ。PRIDEにとって必要な大会だし。選手を育てる意味でも。K-1JAPANみたいに。K-1JAPANといっておきながらアーツやサップに頼っていたんだけど、それといっしょでミルコ頼りになっていますよね。ミルコを出すのはよくない。ミルコのためにも、あそこで戦っている選手のためにも。

——確かに毎大会、ミルコは出ています。

谷川　K-1JAPANがダメなのは、サップとか他の分かりやすいものを取りいれてしまったこと。だから、MAXを見てください。K-1MAXはMAXだけでやる。今年なんて、例えば2月の大会に魔裟斗が出ないと言ったんです。で、元気も出なかった。MAXの一番人気は魔裟斗で、二番目が元気なんです。小比類巻は沈んだままだったし。だからテレビの方とも相談して「いったい、どうしよう？　この大会は」ってなってたんです。もちろん、そこでサップを使おうっていう案もありました。でもね、ボブ・サップのスーパーファイトをMAXに持ってくると、MAXがグチャグチャになってしまう。だから、「よし、コヒで何とかするしかない！」って。ハハハハ。でも、ゴールデンだぞって声もありました。ハハハハハ。TBSも当然、なぜ魔裟斗と元気は出ないんだって話になって。でも、あそこでMAXはMAXのメンバーで踏ん張ることができた。きっと、ボブ・サップを2月の大会に出していたら、4月も7月もMAXはダメになっていたと思います。そこですよね、どこまで我慢できるか。ミルコと武士道と、そこだと思います。僕らもK-1JAPANで同じことをやってしまったから、分かるんです。だから、もっとやりようはあると思いますけど……。

——それは企業秘密ということですね。分かりました。今日はありがとうございました。

谷川　そうですね。ハハハハ。また、こういうのやりましょう。



インタビューに訪れたのは、K-1WORLD MAXの翌週で、アジアGPが行われる週の初め。多忙な谷川貞治氏は、この日の1時間しか取材に当てる時間はなかった

谷川貞治

たにがわさだはる

1961年9月27日生まれ。愛知県名古屋市出身。日本大学法学部政治経済学科卒業後、ベースボールマガジン社に入社。格闘技専門誌『格闘技通信』編集部に創刊時から所属し、二代目編集長になる。その後、1996年に同社を退社。同年株式会社ローデスを設立（専務取締役）し、CS衛星放送の格闘技チャンネル『FIGHTING TV SAMURAI』の立ち上げに参加。フジテレビのK-1中継の解説、格闘技情報番組『SRS』のコメンテーターを務めるなど、格闘技評論家として幅広く活躍。1999年6月に格闘技専門誌『SRS・DX』を創刊。2003年1月K-1イベントプロデューサーに就任。

JAPAN IS NO,1 !?

ここが変だよ、



日本の格闘技界

いまPPVやDVD・ビデオ発売により
日本人選手も海外で広く知られつつある。果たして世界のメディアの目に、
日本の格闘技界はどのように映っているのか。
アメリカ、ブラジルを始めとして、世界5カ国14人の記者にアンケートを実施。
絶賛、罵倒、意外な評価が並ぶ中、
見えてきた日本の格闘技界の問題点とは…？

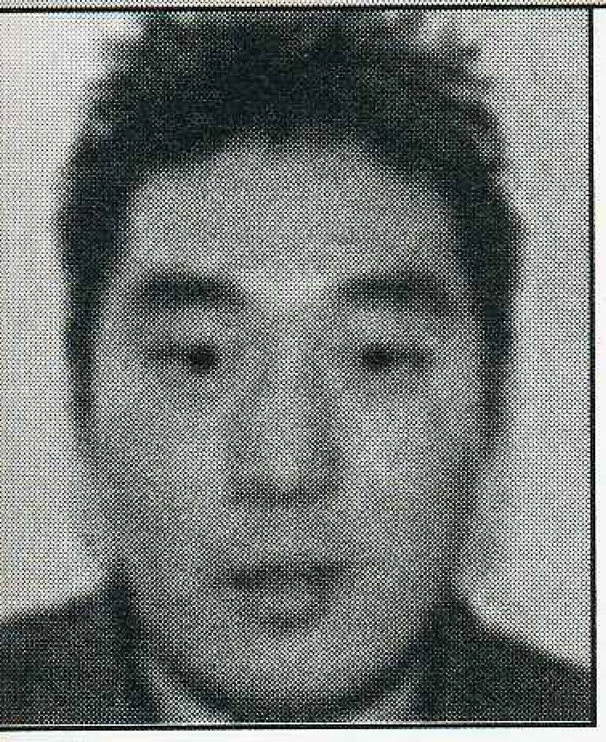
和良コウイチ＝構成
structuring & editing by Koichi Wara

福井正芳／高島学＝協力
supported by Masu Fukui ,Manabu Takasima

●アンケート項目

1. あなたの肩書き、活躍しているメディア
2. 好きな日本人選手（総合格闘技）とその理由
3. 以下の日本人選手についてどう思うのかひと言（質問2と被る場合は答えを省略）。
   a小川直也, b吉田秀彦, c桜庭和志, d近藤有己, e郷野聡寛, f高瀬大樹, g須藤元気
4. 日本の格闘技界で素晴らしいと思うところ（幾つでも可）
5. 日本の格闘技界で変だと思うところ（幾つでも可）

アーノルド・“スシボーイ”・リム（アメリカ）



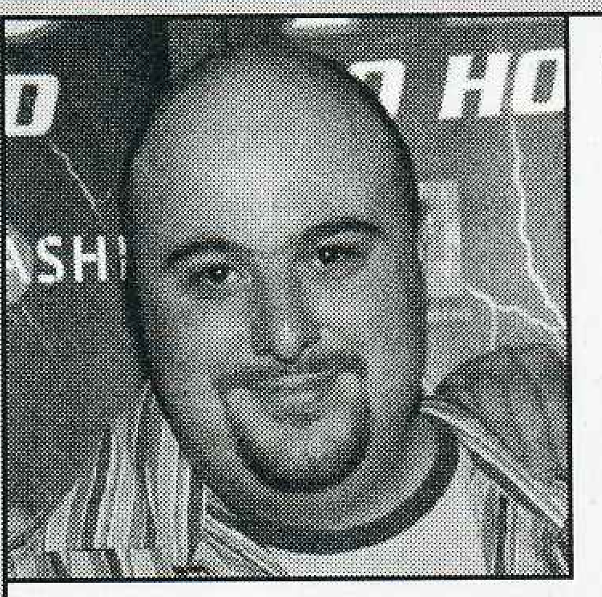
①MMARingreport.comのオーナー兼カメラマン②桜庭。③a．小川は本当にトップの重量級選手と戦うまで、アメリカやカナダでは敬意を払われることはない。b．寝技の技術はテイクダウン技術に匹敵する。道衣を着ても、フルに20分戦えそうなスタミナも見せている。ただ、試合中に怪我をすることが多いね。でも彼が強いのは誰も否定することができない。以前は北米のMMAファンの彼への評価は低かったが、彼はシウバとの戦いによって敬意を払われるようになった。c．彼の試合はいつも面白い。ただ勝つことのみに集中するのではなく、自分が不利なポジションになって殴られる恐れがあったとしても、桜庭はチャレンジするんだ。彼の表情などは見ていて本当に飽きない。彼は本当に数少ない、北米でも尊敬を集める日本人選手。問題は、たとえ相手が自分より大きかったとしても、戦おうとしてしまうところだ。彼が過酷なスケジュールで試合をこなしていなかったら、と思う。彼が使った多くの技が、次世代の選手にも引き継がれている。たとえば猪木一アリ状態でのローキックやモンゴリアンチョップなど。d．大変危険で、エキサイティングな選手だ。弱点としては、彼のレスリング技術ではよいレスラーのテイクダウンをディフェンスしきれないということ。だから、彼はマティシェンコ、パウロ・フィリオ、そしてティト・オーティズを打ち破ることができなかった。あと、彼は体重を185ポンドに落として戦うべきだね。e．とても完璧に近い選手。試合のどの局面をとっても、かなり堅実な技術を持っていると分かる。少し高飛車な態度で試合をするが、今のところは良い結果につながっている。f．彼の優れたガード技術やサブミッションの技術は、MMAの世界ではうまくかみ合っていないようだ。寝技の攻防も守備的で、膠着気味と判断されることも多い。下から攻撃することが多いのは、レスリング技術が洗練されていないからだ。g．グレコローマンスタイルのレスリング技術を持った、素晴らしい選手。独特の打撃技術と滑らかな寝技技術を持っている。たとえば飛びつき三角など、一発を仕掛けることを恐れない。彼は北米でも数少ない、「ファンがお金を出してでも見たい日本人選手」だと思うよ。④たとえ選手が負けたとしても、良い試合をした選手は再びリングに戻ってくることができる。あと、寝技も含めて、ファンがよくMMAを理解しているね。北米ではそういった知識豊富なファンが少ない。⑤PRIDEなどでは明確な階級制を持っていないところ。

マイケル・デサント（アメリカ）



①Insidefighting.comオーナー②桜庭が私の一番好きな選手だ。③a．小川の腰の強さや体の大きさ、テイクダウン技術は、対戦相手が唯一望みの打撃で勝負したくてもそうはさせない。そして彼は打撃の技術も持っていることを、ステファン・レコ戦で証明してみせた。まだ我々は彼の本当の実力を知らないが、これから総合のエリートたちによりテストされて行くことだろう。b．吉田も信じられないくらい才能豊かな選手。ドン・フライやホイス・グレイシーを破った選手であれば、誰でも総合の世界ではトップの一人と認識されるはず。彼はヴァンダレイとの試合では、非常に強いハートの持ち主でもあることをも証明した。c．まず誰とでも闘う真の戦士の精神を持っている。第二に、ヴァンダレイと3度も闘ったように、敵うはずがなさそうな相手にも闘う。第三に、彼は信じられないほどバランスの取れた打撃と寝技の技術を持っている。最後に、彼はとても謙虚であり、尊敬すべき選手だから。そして彼はいまでもキムラの名手だ。もし桜庭がずっと自分のサイズの相手だけ戦っていたら、今でも無敗を誇っていただろう。d．恐らくパンクラスの歴史の中でも最強の選手ではないか。しかし、205ポンドの階級では、ティト・オーティズ戦を見たら分かるが、少し身体が小さい。したがって、私はシウバ戦を少し危惧している。しかし近藤は何も恐れないし、非常にテクニックを持っている。私は桜庭との試合を見てみたいね。e．郷野もとてもいい選手。しかしその身長を考えると、185ポンドで闘うのは厳しいのではないか。彼がもし170ポンドに体重を落とす事ができたらもっと成功すると思う。f．高瀬は彼の階級では世界でもっとも攻撃的なガードポジションを使いこなす選手だ。彼は腕十字から三角絞めなどへの連係技に関しては本当にエキスパートだけど、あとはもっと打撃の練習をして穴を埋めたらどうだろうか。彼は本当のトップ選手と闘うときに、苦しんでいるね。私は彼を180ポンドの「PRIDEの門番」として見ている。g．打撃も寝技も大変良い、危険な選手だ。しかし、本当の世界のトップ選手とは戦っていない。K—1でBJとの試合を提案されたとき、それが彼にとっての本当のテストだったのではないだろうか。私はジョシュ・トムソン、シャオリンに次いで、彼を155ポンドの階級の3位にランキングしている。④アメリカに比べると、日本のファンは本当にこのスポーツが好きだ。勝とうが負けようが選手を尊敬しているし、打撃のみならず寝技についても熱心に勉強している。⑤郷野や美濃輪など多くの日本人選手が、自分の階級以外で闘っているように思う。

マイケル・スキアヴェロ（オーストラリア）



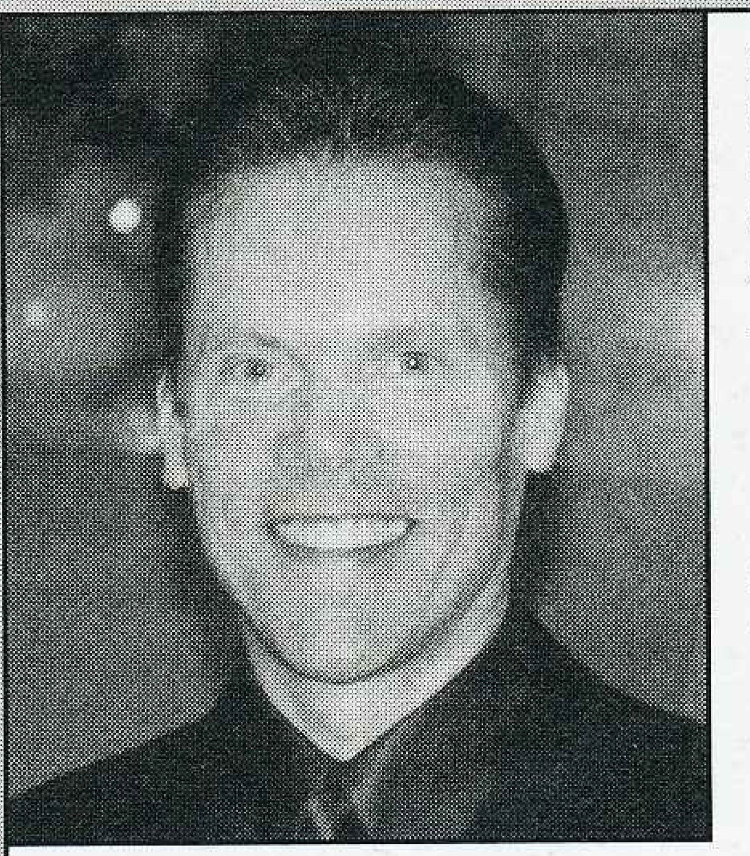
①インターナショナル・キックボクサー誌の編集者で、オーストラリア、ニュージーランドのＦＯＸスポーツ、スカイＴＶ、ＴＶＮＺなどでキックボクシングと総合の解説をしている。②桜庭だ。③b．とてもタフで、マーク・ハントに寝技の厳しさを教え、彼を極めてみせた。c．まったくもって最高だ！ 総合格闘技史上最高にエキサイティングな選手。彼は類まれなファイターであり、元祖グレイシー・キラーだ。いつもエキサイティングで、常に革命的な戦い方をして、他の選手には真似のできないトリックの数々を総合の試合で行なった。d．非常に技術のあるファイターだ。f．私の好きな選手の一人。オールラウンドな技術を持っている。g．非常にエキサイティングで、いつも我々を驚かせてくれる。そして非常に厳しい試合をいつも受け入れる。④桜庭のように日本人選手は創意工夫が素晴らしい。スタミナも優れている。⑤日本の選手の多くが、体が小さいことだ。もっとたくさん米を食べて、大型選手が増えてほしい！

マイク・スローン（アメリカ）



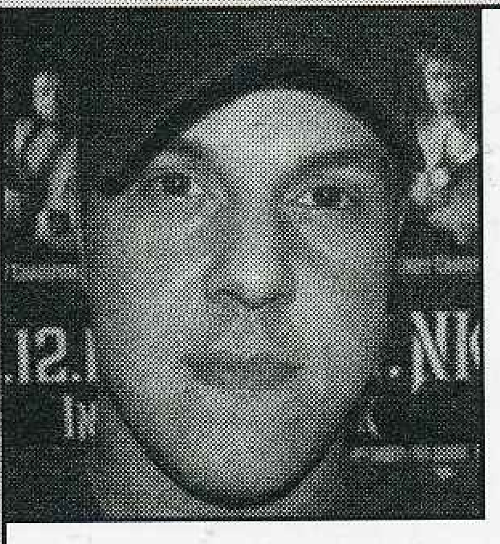
①Sherdog.comリードライター、KOSherdog.com編集長②ジャーナリストとして好みの選手がいることは好ましくないが、しかしながらずっと桜庭とルミナのファンだった。③a．アメリカではとても軽く見られている選手だと思う。でも強い選手の一人だと思うよ。b．強靭な足腰を持った上、すごい寝技の技術を持っている。すばらしい選手だが、彼もまたアメリカでは軽く見られている。c．ものすごく面白くて最高の選手だが、でも彼の一番良い日々は過ぎてしまった。最近では非常に怪我も多い。しかし先日のニーノ戦での勝利は、彼がまだ第一線で戦えることを証明している。d．とてもいい選手だけど、ヴァンダレイを倒せるとは思えない。アメリカでは彼もまたあまり知られた存在ではないね。f．高瀬!!! 彼もとても立派な選手だと思う。彼がアメリカに来て戦ってくれたらと、願っているよ。g．とても楽しい選手。彼は日本のきらびやかさを絵に描いたような感じだね。ＵＦＣ42のラドウィッグとの試合は、僕は元気が勝ったと思っている。そしてＵＦＣがもっと元気を起用したらいいなと願っているよ。とても強くて面白い選手だ。④アメリカと違ってファンが選手に敬意を払い、汚い野次が飛ばない。日本人は尊敬という言葉の意味を知っている。それと日本人はすばらしい演出をする。⑤日本のイベントはほとんどアメリカで放映されることがないことだ。ＤＶＤが発売されるまで待たなければならないし、できることならＰＰＶで日本のイベントを全部見てみたいよ。

スティーブン・クワトロ（アメリカ）



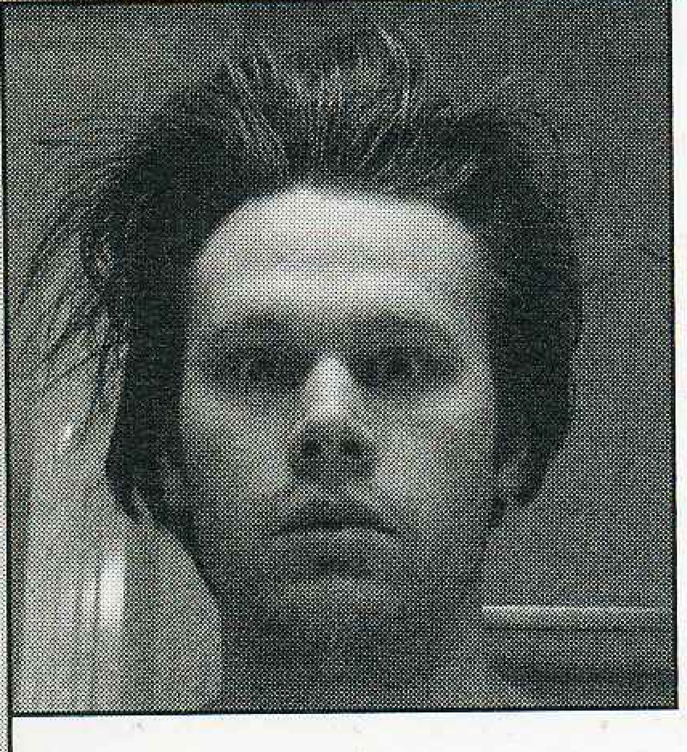
①米国放送版ＰＲＩＤＥやK—1を含む総合格闘技、立ち技格闘技の実況コメンテーター。BlackBeltMagazineライター、FightSportsMagazine編集者、KickBoxingRingReport編集者。②桜庭が私のお気に入り。③a．大変豊かな個性を持っている。もし彼が真剣に総合に取り組んだら、恐らく世界で最も優れた選手になることができるだろう。ただ、それが難しいだろうと思わせるのは、彼がプロレスと総合の二足わらじを履いていること。あと一つ私が大変驚くことは、誰がなんと言おうと彼は意に介さず、自分の道を歩んでいることだ。b彼は田村やシウバ、ホイスなど総合のツワモノと対戦してきている。彼が本当に集中してトレーニングしたら、総合の王者にもなれると人々は真剣に考え始めるだろう。c．いま多くの選手は本当に強い選手かショーマンのどちらかであるが、桜庭はその両方を兼ね備えている。私はブラックベルトマガジン用に初めて彼をインタビューしたときの事を今でも憶えている。本当に短い返事しかせず、インタビューを大変なものにしてくれた。そこで彼にいくつかの関節技を芝生の上で見せてくれるようにお願いした。今でもそのとき、腕十字やチョークされたときの写真を持っている。彼も自分と同じようなクレイジーなギャグセンスを持っていると感じたのだろう、それ以来日本で私を見るたび、彼は何かジョークをしようとしているのを感じた。彼は他のうるさく高飛車な選手や、相手を罵声して侮辱する選手とは違う。多くの人が忘れていることの一つに、彼はこの国で大変有名になって名声を得たが、いまだにその中味といったら田舎から出てきた無口な人間であることだ。d．好きだね。このリストの中では、一番男の中の男という感じがする。彼は日本でもっとも打撃に関しては危険な選手。ブラジルのシュートボクセでずっとトレーニングしてきたようにさえ思うときがある。f．アンデウソンを破ったときは、その勝ち方に大変驚かされた。彼はたとえ負けたことがあるにせよ、つねに強敵と戦い続けてきた。彼の精神力がその強さの秘訣だと思う。g．もっとも観客を魅了する選手。戦う相手とはまったく違う次元にいつもいて、まるで他の惑星から来たようにハイな状態で戦う。桜庭が引退したとき、元気がその独創性、テクニックをもって後継者になるのではないか。④本当に競技として社会が受け入れているところ。選手は映画俳優や、ロックスターのようにヒーローとして扱われている。⑤なぜプロレスラーが突然参加してくるのか。もし観客が彼らの試合を見て、それがあまりに面白くない試合になったら、団体は大変な努力を払わなければならない

ステファン・マルティネス（アメリカ）



①Sherdog.com カメラマン、試合レポーター②近藤、元気、桜庭。マッハは全体的にバランスが取れていて、とてもエキサイティングな選手。最近の不調から完全にトップに返り咲くことを願っている。三島は観客を喜ばせ、とても技術を持っている。彼がタイトルを取ってくれるといいな。③a．ファンではないね。彼はプロレスラーという肩書きだけで、大きな舞台で活躍できている。b．最初はただの新しいＰＲＩＤＥファンの開拓ツールのように思っていたが、シウバとの戦いを見たときに、今の尊敬される立場にいて当然だと思った。c．桜庭は片足タックルをやらせたらベスト。彼はみんなにMMAとは何かということを教えたね。世界でもっとも好きな選手。ホイス・グレイシーとの試合は、新しいMMAの時代に入ったと私には思えて、非常に印象に残っている。彼は引退するまえに絶対にシウバを倒されなければならない。d．体重差をまったく気にしないし、パンチやヒザ蹴りは日本人選手の中ではベストだ。日本人選手のトップ。もっと大きな興行に出てきてくれるといいと思う。PRIDEは彼を日本の次期エースとして、しっかりと見張っておく必要があるね。e．日本で２番目に優れたストライカー。もっとトップレベルの選手とマッチメイクをされるべきだ。PRIDEでのデビュー戦でショーグンに負けてしまったのはとても残念。でも必ず彼はＰＲＩＤＥに戻ってくると信じている。f．とても素晴らしいグラップラー。勝敗や判定は気にせず、とにかく相手を極めることに集中してほしい。g．元気は未来のMMAを象徴する選手。彼の寝技の技術はすばらしい。闘い方は奇妙だけど、彼は新しいMMAファンを、その奇妙なスタイルによって連れ込んでくると思う。④演出が信じられないぐらい良い。日本の団体は選手に対してとても敬意を払う。⑤団体同士での選手の交流が少ないことかな。

ジョー・ホール（アメリカ）



①フルコンタクトファイター誌ライター②私はいつも桜庭と佐藤ルミナのファンだった。なぜなら彼らは常に独特なスタイルを持って闘うから。現在の好きな選手は、今成と所(英男)。なぜなら彼らはとても攻撃的な試合をし、寝技においてとても優れているからだ。私は寝技の強い選手が、観客を楽しませる選手だと思っているよ。③a.小川は大変優れた柔道家だが、彼の打撃技術に関して疑いは隠せない。彼は恐らく総合でトップ選手とみなされることはないと思う。b.ヴァンダレイと闘ったときには驚かされた。彼は素晴らしいグラップラーだが、皆から評価されるためには本当にトップの選手達と闘う必要があると思う。c.もう既に伝説の選手。総合格闘技の歴史においては、彼の存在なくして語れない。しかし、彼は自分よりずっと重たい選手と戦い続けたため、もっと体のコンディションをいい状態でキープ出来たらということを考えると残念でならないね。d.いま最高の状態にあると思う。しかし、私は彼が自分のサイズの選手と対戦してほしい。そうすることによって、彼が本当に素晴らしい選手ということが分かるからだ。e.郷野はとても競争心が強く、素晴らしい選手。しかし、もし彼がなにかを成し遂げられるとしたら、もう既に成し遂げられていなければならないだろう。f.世界トップレベルの寝技を持った選手。彼のレスリング技術も私は認めているが、スタンドに穴があるね。g.須藤は大変観客を楽しませ、そして才能に恵まれている。しかしながら、本当に強い選手と戦いたいとは思っていないようだ。一方で、彼はBigNameとの戦いを望んでいる。BJペンと闘うよりもホイラーと戦う方を選んだけども、ビジネスライクに考えれば、その方が賢明かもしれない。④判定を狙うよりも、しっかり一本やKOで勝つ選手が多い。グラウンドでのエキサイティングな攻防ができる選手は、日本中にいる。⑤プロレスと総合の関係についていろいろ噂をされたりすること。ファンが「この試合はプロレスか？ それともガチか？」と疑うようなことはよくない。また、田村潔司×ボブ・サップといった、極端な体重のミスマッチによるマッチメイクも危険なので反対だ。

マルセロ・アロンゾ(ブラジル)



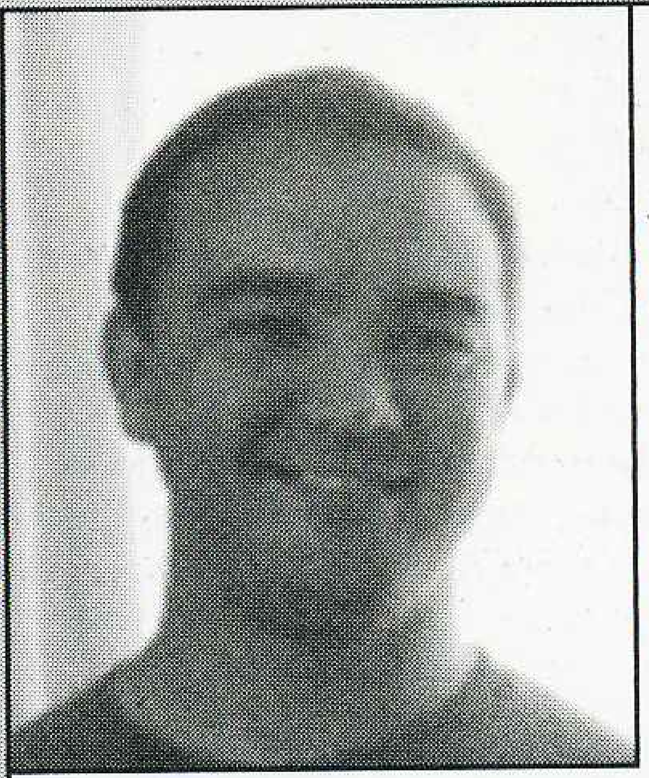
①ブラジルのタタミ・マガジンの編集人(創刊10年、現在通巻100号）をはじめ、世界の格闘技メディアの仕事をしている。格闘技通信(日本)、フルコンタクト・ファイター(米)、ブドー、カンプクンスト、シンツロン・ネグロ(以上ヨーロッパ)などの通信員も。②間違いなく桜庭和志だね。③a.彼の実力を判断するにはもう少し試合を見たい。トップ・ファイターと戦うところを見てみたい。ＰＲＩＤＥＧＰ決勝大会後なら、この質問にうまく答えられるだろう。b.すでにオリンピックで金メダルを獲っていながらバーリトゥードに出場し、シウバ相手にほとんど引き分けまでもっていった彼は、ライオンのハートを持っている。柔道ですでに伝説を築き上げているのに、新たにＶＴの技術を学び、1年もしないうちに世界一の選手と素晴らしい試合をしたのだから。ｃ．彼は生きた伝説だ。ホイスやヒクソンがブラジルを代表する選手であるように、桜庭も日本を代表する選手だ。彼こそが、日本もまたＶＴの強国であることを証明した選手なのだ。桜庭こそはブラジルで最も尊敬されている外国人選手だ。ｄ．非常にデンジャラスなヒザ蹴りを持っている。サウロ・ヒベイロとマリオ・スペーヒーをKOしてから、彼はブラジルで“ザ・ジュウジュツ・テラー”（柔術家の恐怖の的）と呼ばれている。彼はガイ・メッツアーやフランク・シャムロックにも勝っているし、私の意見では過去最高の日本人ファイターの一人だ。まだ29歳なのに、42勝もしている。ｅ．オールラウンドな選手で、彼の階級では最もデンジャラスな選手の1人だ。彼がニルソン・デ・カストロに２勝してから、私は彼に注目している。ｆ．最近非常に成長が著しく、素晴らしい寝技を見せている。この階級では世界でトップだと私が思っていたアンデウソン・シウバを破ってから、ブラジルで彼は有名になった。アンデウソン以外にもカーロス・ニュートンやクリス・ブレナン、ラヴァーン・クラークにも勝ってトップ・ファイターであることを証明している。ｇ．私が伸びるだろうと予想していた選手の一人。彼の柔術の師匠、マーカス・ヴィニシウス(柔術黒帯)は「もしゲンキが柔術衣を着て２ヵ月練習すれば、茶帯の柔術大会でかなりのところまで行くだろう」と私に言った。④選手に対する尊敬、プロフェッショナリズム、選手のレベルの高さだ。⑤プロレスラーを総合に連れてくること。プロレスも日本の文化の一つなのだろうが、いずれ非常に多くの素晴らしい総合格闘家が育って、プロレスラーを呼ぶ必要がなくなると思う。

レネ・マイアー（スイス）



①自分の総合格闘技ホームページ(www.mma-news.ch)を運営。②桜庭。③a. 彼には非常に感心した！ 総合7戦全勝で、ステファン・レコやゲーリー・グッドリッジにも勝っている。b. 総合界に足を踏み入れた柔道家の中で最も成功している選手。1敗は喫したが、あの敗北は勝利でもあった。ヴァンダレイと判定まで行ったのは素晴らしい。c. 最初から今に至るまで、彼は私の一番好きな日本人選手である。ホイラー、ヘンゾ、ホイス、ハイアンらグレイシー一族に連覇した唯一の日本人だ。私は今でもヒクソン戦が実現することを夢見ている。d. 60戦以上もした、最も忙しい日本人ファイター。非常にテクニカルなファイターだ。e. とてもいい選手だが、日本以外ではまだあまり知られていない。一度オクタゴンで見てみたい。f. とても技術のあるいい選手だ。彼の勝利はサブミッションが多い。PRIDE 武士道でカーロス・ニュートンに判定で勝ったことが一番の勝利だろう。g. 桜庭以外では、元気が非常に面白い選手だ。とても観客を楽しませる試合をする。これまで「まだ」14試合しかしていないが、ホイラーをKOした試合と、99年にパンクラスでネイサン・マーコートに一本勝ちした試合は素晴らしかった。④日本は非常に大会数が多いこと。また選手に対し、ファンが尊敬の念を持っているのもいい。カリスマ的選手がテレビや映画のスターにもなれる点は非常にユニークだ。⑤アメリカ(UFCなど)のようにドーピング検査が行なわれないことだ。

クリス・オンズカ（ハワイ）



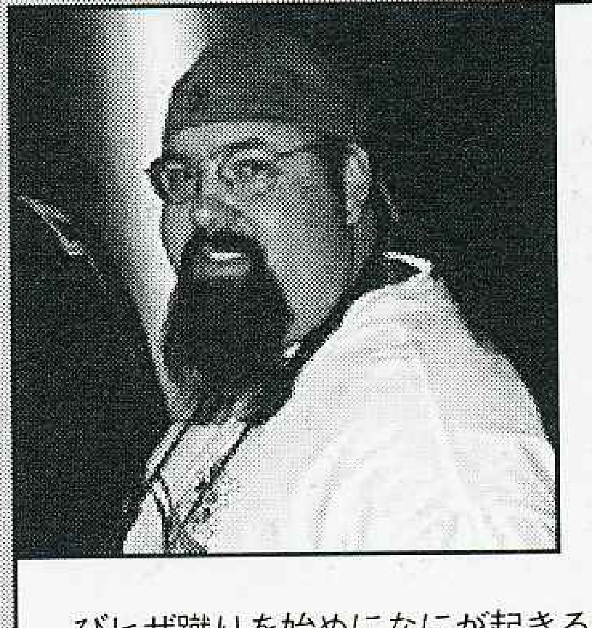
①フルコンタクト・ファイターや日本の雑誌に寄稿するエディター&写真家。日本の雑誌にも記事や写真を送っている。またハワイに関連した格闘技サイト、Onzuka.comを兄弟のマイクと一緒にやっている。②桜井“マッハ”速人だ。彼はコンプリート・ファイターだから。最近は調子が悪いが、負傷のせいだと思う。怪我をする以前、マッハは無敵だった。③a. 傑出したアスリートだ。彼はまだ総合のトップ選手と戦っていないので、総合における技術は広く試されていないが、その答えは恐らくPRIDEGP 決勝大会で出る。b. かなりのサブミッション技術と、偉大なテイクダウン技術、そして力の強さを見せてきた。ヴァンダレイとの試合では、偉大なストライカーと戦う能力があることを示した。しかしホイスとの再戦では、彼の戦いに穴があることを露呈したので、今後、そこを狙われる可能性がある。あの試合で自分の欠点を理解し、改善してくれているとよいと思う。彼は日本のミドル級で最も期待が持てる選手だ。c. 桜庭の強さはオールラウンドな点だ。誰を相手にしても、打撃でもレスリングでも寝技でも戦える。そしてもし相手の何かの技術が自分より優れている場合は、相手の得意分野でない戦いに持ち込んで試合を決めることができる。彼の最大の弱点は、積年の怪我と、リング外でのライフスタイルだろう。d. 近藤はミドル級の日本人で最大の希望である。その痛烈なヒザ蹴り、持久力、そしてその他の技術によって、近藤はどんな選手にとっても危険なファイターとなっている。e. 郷野はキャリアの初期には、その技術の高さで、非常に期待された選手だった。しかしながら、言葉では表せない何かが彼には欠けているようで、そのため真のトップ選手の中にまだ入れないでいる。f. ベテラン・ファイターだ。ハイな瞬間も、スランプも経験してきた。彼は世界最高の選手と渡り合える力があることを証明したが、力を出し切れずに終わってしまうことも多い。このまま落ちていくだけかと思っていると、大勝利で復活するという選手。g. 須藤は信じられないグラップリング技術と、いい打撃技術を持っているが、それを変則的スタイルの下に隠している。アンドレ・ペデネイラスと引き分けて以降、ドゥエイン・ラドウィックを除くすべての相手から一本を奪っている。須藤はオールラウンドなファイターで、“ライト級の桜庭”になれる選手だと思う。④ベスト・ファイターを呼ぶことができること。またファンの知識という点でも他の国をはるかに凌駕しているので技術のある試合が好まれ、負けても素晴らしい試合をした選手は賞賛されるという点がいい。⑤プロレスと総合格闘技の境界線があいまいになっていることだ。そのため、出るべきでないプロレスラーが出場している。あと以前は初めから勝敗が決められている試合がよく行なわれていた点だ。

デニス・マルティンス(ブラジル)



①日本、ヨーロッパ、アメリカの３つの格闘技雑誌と総合格闘技サイト１つで仕事をしている。ゴング格闘技ではブラジル通信員、スペインのクロス・コンバット・マガジンとフランスの雑誌では専属ライター、そしてウエッブではＡＤＣＣニュースにブラジルの記事を書いている。②近藤有己だ。③a．好きではない。彼は本当に強い選手と戦って、実力を試される必要がある。体も大きいし、体重もあり、まずまずの技術はあるが、特別なものはない。ｂ．吉田は戦士だが、ブラジルでは、彼の試合のいくつかは疑問視されている。しかしヴァンダレイらとの試合で強いハートを持っていることを証明した。彼が柔道衣を脱げば、もっと勝てるだろう。ｃ．素晴らしいファイターだ。プロレス団体出身でも、いいトレーニングを積めば、うまく戦い、相手のミスを突くことができると証明した。ｄ．彼はつねに頭一つ抜けたファイターだ。勇敢で、ヒザ蹴りとグラウンドのディフェンス技術は一級品だ。彼はもっと大きな大会で今以上の知名度を得るべき。日本の総合界で私が最も好きなファイターだ。ただグラウンドの戦いは少し改善した方がいいだろう。ｅ．ブラジル人との最近の４試合は非常に退屈だった。相手が攻めるのを待ってカウンターを狙うという彼の作戦は、あまりうまくいっていないと思う。ｆ．彼の寝技はいい。しかし彼はあまり力が強くないのか、せっかくサブミッションで一本を取れそうなポジションにいながら相手に逃げられてしまっている。ｇ．非常にエキサイティングで面白い選手だ。彼の戦術は相手に平静さを失わせ、ミスを犯させる。彼もまた、総合格闘技界でもっと有名になってしかるべき選手だ。④日本人が格闘家に敬意を払っていること。⑤リアル・ファイトの大会にフェイクを持ち込んでほしくない。

ジェフ・シャーウッド（アメリカ）



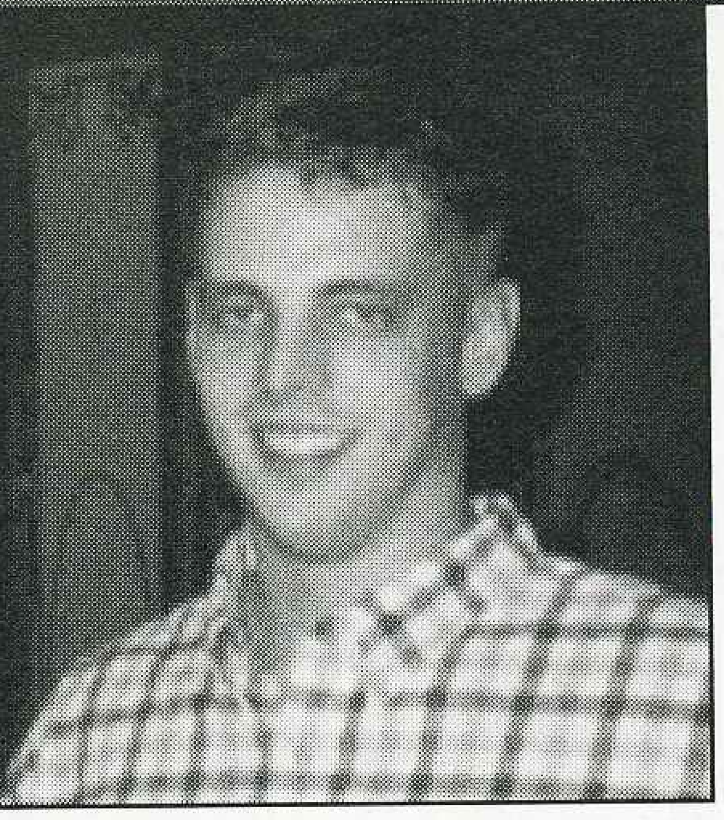
①Sherdogオーナー兼カメラマン②佐藤ルミナ。彼は今でも1Rならば一番エキサイティングな選手と思うし、信じられないハートを持っている。③a.アメリカ人は小川の事はあまり信用していない。私は彼がオリンピックで活躍したことには敬意を払うが、彼はＰＲＩＤＥGPで勝ち残るとは思えない。b.シウバと戦ったときにガッツを見せてくれて、実際少し驚かされた。彼は多くの日本人選手が持っている強いハートを見せてくれた。c.世界で一番すばらしい選手の一人。ＰＲＩＤＥほどのプロダクションであれば、今の彼の現状よりもっと長く、そしてもっと輝くようにマネージメントできたのではないか。彼は大きいサイズの選手と戦いすぎた。d．近藤の打撃はすばらしい。本当にクレイジーなストライカーであり、飛びヒザ蹴りを始めになにが起きるか分からない選手。e.本当の戦士の一人。彼は長い間戦っており、本当に大きなハートを持っていると感じる。f.すばらしい。彼の寝技の技術は目を見張るものがある。彼がアデウソン・シウバを仕留めたときは本当に驚かされた。g.須藤は本当のエンターテイナー。彼の入場シーンは誰もが見なければいけない。またブルース・リーみたいな戦い方は、とても面白いと思う。④ファンが試合をよく分かっているところだね。日本では選手がパスガードすると、それに対して声援が起こる。一方でアメリカだと、それに対するセクシャルな罵声さえ飛ぶことがあるから。⑤プロレスラーが総合の大会に絡んでいるのは、あまり芳しくないね。

チュエ・K・トゥルンカ（デンマーク）



①フリーの総合格闘技レポーター。ファイトバック・dkを経営し、ファイター・マガジンの総合格闘技担当編集者。それ以外に格闘技通信、トップ・ファイター、Man-Magazine.comなどにも記事を寄稿。デンマーク・ヨーロッパ・バーリトゥードTVのオフィシャル解説者でもある。②なんと言っても須藤元気だ！③ a．小川はいわゆる「専門家」によって、過小評価されすぎている。彼は97年に総合デビューしてから7勝無敗である。ステファン・レコ相手に大胆にも打ち合い、ダメージさえ与えた。たしかにいままではイージーな相手を与えられてきたが、彼は流れるようなテイクダウンと、堅実なグラウンド技術と偉大なファイティング・スピリットを見せて、カリスマ性を獲得しつつある。b.特にシウバ戦で、強い印象を与えた。シウバのパンチには、みごとなカウンターの投げを見せているし、打撃の攻防ですら「アックス・マーダラー（斧を持った殺人鬼）」シウバと渡り合って見せた。多くのアメリカの格闘技ファンや「専門家」に、リアルな強さを持ったファイターだということを、吉田は証明したのだ。c.桜庭は伝説的存在の一人だ。彼は素晴らしい独創性と技術を総合格闘技の世界に持ち込み、プロレスとレスリングと打撃の技術をユニークに混ぜ合わせたファイターである。シウバとの最初の試合で敗れるまでは、彼こそキング・オブ・MMAであった。しかしここ数年多くの体重が重い強豪と戦い続けてきたせいで、磨り減ってしまったようだ。d. 近藤は非常に経験豊かな、とてつもない選手だ。いまやシウバに過去4年で初めて土をつける可能性がある。体重差がありすぎたジョシュ・バーネット戦を除いて、過去2年負けていないし、非常にタフな相手と戦ってきた。e.郷野もまた、今が絶頂期だろう。ショーグン戦を除けば、01年以来無敗だ。彼は非常にエキサイティングなオールラウンドなファイターで、何年かのうちに非常に進化したが、真のトップ選手に比べて何かを欠いているように思える。f.彼の7勝9敗1分という戦績にだまされてはいけない！アンデウソン・シウバに対する勝利が示すように、彼のグラウンドテクニックは途轍もないものだ。ここ2戦も大きな勝利だった。クリス・ブレナンもカーロス・ニュートンもビッグネームだから。ただ、高瀬はある時はセンセーショナルそのものの選手だが、ある時は普通の選手に見える。g. この「ネオ・サムライ」は真のトップ・ランナーだ。アメリカやヨーロッパでも彼は最高に人気のある選手の一人。④ 試合の採点基準がいい。勝負をかけて極めにいく選手が評価される。選手の取り分も大きい。彼らには日本以外の場所で払われているような安いギャラでなく、高いファイトマネーを得るだけの価値があると思う。⑤日本の格闘技大会ではドーピング検査が行なわれないこと。あと、大きな体重差がある試合が行なわれている。大怪我をする可能性があるし、これはショービジネスであるが、何よりスポーツなのだということを忘れないでほしい。

ギャレット・ポー（アメリカ）



①Sherdog.comオーナー ②桜井“マッハ”速人。彼は常に強く殴るし、すばやいし、とても一生懸命戦うから。③a.そんなに興味はないね。プロレスラーという経歴に嫌気がさしますよ。b.ホイスを破ったということはすごいことだと思う。それと、彼の勝利が全て寝技でしっかり極めて勝っているところもすごいね。c.私がもっとも好きな選手の一人。でもヴァンダレイと3度も戦うのはどうかと思う。彼の体はボロボロだよね。d.非常にたくさん試合をこなしているところが好きだね。UFCでカフェ・ダンテスをKOで破ったときから彼のファンだよ。f.ヤーブローやアデウソン・シウバをやっつけて、いい試合をしているね。もっと彼の試合を見たいよ。g.彼は派手でいつも試合を面白くする。グラウンドでの動きもとてもスムーズで、彼の寝技はとても好きだ。④より良い選手がいて、より良いカードを組んでいること。ケージではなく、リングで戦うこと。アメリカでUFCのPPVを一本見るより、日本でPRIDEのPPVを買うほうがよっぽど安いこと。⑤観客がおとなしすぎるところかな。あと日本人の選手は、アメリカではあまり試合しないこと。

アメリカからは!? どう見えるのか

私は「逆輸入」格闘技業界人を目指し、会社を辞めて渡米して、そのまま米国の格闘技業界に片足を突っ込んできました。その後多くの選手やレフェリー、ジャーナリストらと交流を深めていく中、日本の格闘技業界について以下のようなことを多くの人から「ツッコまれた」経験がありました。

ここが変だよ、その①
日本人はなぜ負け続けても試合が組まれるの？「誰が見たいの、この選手」っていう人がなぜ出続けているの？

自分としては、「日本で行なわれる試合なんだから、しょうがないだろ。本当は強いんだぞ」と言うしかなかった。

しかし、かなりいろいろな人から、「日本人しか望まないカードだな、こりゃ」とか「アメリカでPPVされるときには、う○こタイムだな」とまで言われた。彼らが言うのも分からなくはない。実際自分が接していた多くの若手は必死にトレーニングして、総合格闘技のピラミッドを底辺からよじ登っている状況があったりする。世の中には本当に強い奴がゴロゴロいる。無名だけどメチャメチャ強い選手を見たいと思うのは、皆さんにはご理解いただけますよね。押忍！

ここが変だよ、その②
なんでマッチメイクがそんなに遅いの？ 選手にとって最高の状態で闘うっていうのは、とても重要ではないの？

これに対しては、「いや、日本ではファンが見たいカードを実現するため、ギリギリまで努力するんだ。その結果マッチメイクが試合直前になってしまうんだ」と言い訳をしていた。

確かにいまの日本の現状は、各選手も状況を分かっているのか、直前にオファーが出されても割と体調を整えて良いパフォーマンスをしている（と思う）。しかし、選手同士がハートも体も究極にチューンナップされた状態で戦ってもらいたい、とコアなファンは願っている。ハードトレーニングあってのグッドパフォーマンスです、押忍！

ここが変だよ、その③
ストップドントムーブ（以下SDM）ってなんだ

なぜ日本人はビンタされるのが好きなのか？

よ。そのあとヒョコヒョコ選手歩かせて～。金網にしろよ、金網に！

これは、仕方ないんじゃないの？ あくまで好みの問題だし。

確かにアメリカの総合は、金網の試合が非常に多い。少なくともスーパーブロウルやフックンシュートに行く予算がなかった自分にとって、米国でロープを張ったリングで行なわれる試合を取材する機会はなかった。自分がよく訪れたのは、8角形や5角形のケージファイト。金網が暴力的なイメージを助長する気がしなくもないが、個人的にはSDMがないのは明らかにいい。

実は自分がトレーニングしていた道場にもオクタゴンが設置されていて、その道場ではティト・オーティズが金網際でのテイクダウンを延々やっていた。金網を背にした状態から相手を攻める技術が想像以上にあるんだし、要は戦いが一度始まったら止めてほしくないんすよ！ 押忍！

スペースが少なくなってきたので、あとは走り書きにしておこう。海外のファンから見れば意外とこんなことも疑問だったのね、ってことで参考にして下さい（何の？）。

・いつもリング上で叫んでいる顔が長い日本人はだれですか？

・何で日本人はビンタされるのが好きなんですか？

・桜庭が使うテクニックは柔術じゃないんですか？ あれは何て言うジュツですか？

・松井大二郎はなんでそんなにすぐ出血するんですか？

・日本人選手はなぜ体が丸いんですか？（筋肉質ではない）

もうキリがないので、この辺で。

最後に、批判的な表現も使いましたが、日本の格闘技業界は世界から一目置かれています。なんせ、首相にオープンフィンガーグローブをはめさせている国ですから。格闘技イベントは、日本文化の重要なプロモーション・ツールだといえます。したがって、今後はもっと日本人選手にもがんばっていただきたいです！ 押忍！

（Sherdog.com福井正芳）



韓国総合格闘技界 その熱さの行方は……

ブロードバンド時代の総合創世記

**お隣の韓国では、日本の冬ソナ・ブームほどでないが、
総合格闘技が脚光を浴び始めた。
とはいっても、初めて韓国で本格的なプロ総合格闘技の大会が行なわれたのが、昨年の4月のこと。
K−1やPRIDEといったビッグショーをテレビで知った隣の国の人々は、
インターネットで世界中の情報を拾い、その熱に浮かれている風もある。
バブルにもならないほど、基礎が脆弱な中にあって、
じっくり足元を見つめている人々、浮かれ続けている人々、商業的効果のみを追及する人々が存在する。
6月には日本の報道陣も多数駆けつけた、初めての大規模な国際大会「グラジエイターFC」が2日間に渡り開催された。
果たして、この韓国の総合熱は一過性のものなのか、それとも一つの文化、ビジネスとして根付くものなのか。
韓国総合格闘技界の成り立ちから、振り返ってみたい**

高島　学＝文・写真
Text and Photo by Manabu Takashima

ったんです」（ハン）。

っている人々を捜しあてることが可能にな

その後、キムは米国カリフォルニアで行われているキング・オブ・ザ・ケージに出

需要が見込まれている。

一般への浸透度が深まると、当然のよう

Aを持っている。絶対に一般層にまで広がります。それがスピリットMCを始めた最

課題と可能性を浮き彫りにした

ATOR FC

6月26&27日の両日、ソウルのオリンピック公園第一体育館で、韓国総合格闘技界初の国際的ビッグイベント「グラジエイター・ファイティング・チャンピオンシップ（グラジエイターFC）」が開催された。

一昨年の11月にKPWという組織が、初めてアマチュアの総合格闘技トーナメントを開催したのに続き、昨年4月にはスピリット・マーシャル・チャレンジ（スピリットMC）による、初のプロ・トーナメントが行なわれた韓国の格闘技界。今回、2デイズ・イベントのグラジエイターFCには、ホジェリオ・ミノトゥロ・ノゲイラやアンデウソン・シウバ、ジェレミー・ホーン、そして日本からも美濃輪育久が出場。世界レベルのMMAファイターが訪韓し、MMAの頂点に位置するファイトを披露した。

これを以って、韓国に総合格闘技ブームが起こっていると理解しても何ら間違いではない。実際にブームになりつつあるのかもしれない。ただ、日本で見られた報道は、自分たちが見てきた10年以上の総合の歴史を、そのまま杓子定規に韓国に求め、重箱の隅をつつくまでもなく見て取れる欠点を大げさに取り上げている印象は拭えない。

これでは「韓国の総合格闘技」ブームなのか、「日本のマスコミにおける韓国総合格闘技を取り上げる」ブームなのか、分かったものではない。

日本の格闘技界は、韓国の総合格闘技の発展に無くてはならない強いパートナーシップを結べるはずだ。だが、このメディアの取り上げ方一つをとっても、ボタンの掛け違いだけは気を配る必要がある。

空路で僅か2時間の距離で、両国の首都は結ばれている。街並みも、他のどこの国と比較しても一番酷似しているだろう。

肌の色も同じだし、顔のつくりも西洋人が見れば見分けはつかないに違いない。食生活だって、西洋人よりずっと韓国の料理を日本人は美味しく食すことができる。

そして、物価が安い。だからといって、「物価が安くて、楽しい」という言葉がついた日本とでも勘違いしたような言動だけは慎まなければならない。

「PRIDEの場合はこうだとか、きっとルールミーティングでも言ってくる人間が出てくるだろうけど。そういう連中の言うことは、一切聞く耳をもつ必要はないから。これは俺たちが助けているとはいえ、韓国の人間が必死になってやっている大会なんだよ。こっちの人間がやりたいようにすればいい」

今回、このグラジエイターFCを全面的に支えてきた愛知県岡崎市にあるCMA誠ジムの諸岡秀克会長の言葉だ。

諸岡氏は、リング設営からレフェリーの手配、演出リハーサルまで自らの人脈をいかし、日本人の手によってグラジエイターFCの開催にこぎつけた人物だ。

何も経験がないことが分かっているから、日本から多くの人間を派遣し、自分たちが手本になるように動いてきた。

そう、「経験がない」、「歴史がない」ことは前もって分かっていることだ。

だからこそ、その経験、歴史を知ってこそ、韓国の総合格闘技について初めて論議できるようになる。

前述したように、韓国で総合格闘技の大会が初めて行なわれたのは、2002年11月。KPWが開いたトーナメントだった。

KPWとは、キック、パンチ、レスリングの頭文字をとったアマチュアの総合格闘技大会。アマチュアといっても、サッカーボールキックと寝技でのヒザ蹴りを廃したフルMMAルールを採用している。KPWを主催するハン・テユン&リ・スイルは、KPWを組織でなく大会と主張する。

「協会とか名乗ると、すぐに揉め事が起きるんです。だから、簡潔に大会だけ開いていきたいんです」（ハン）。

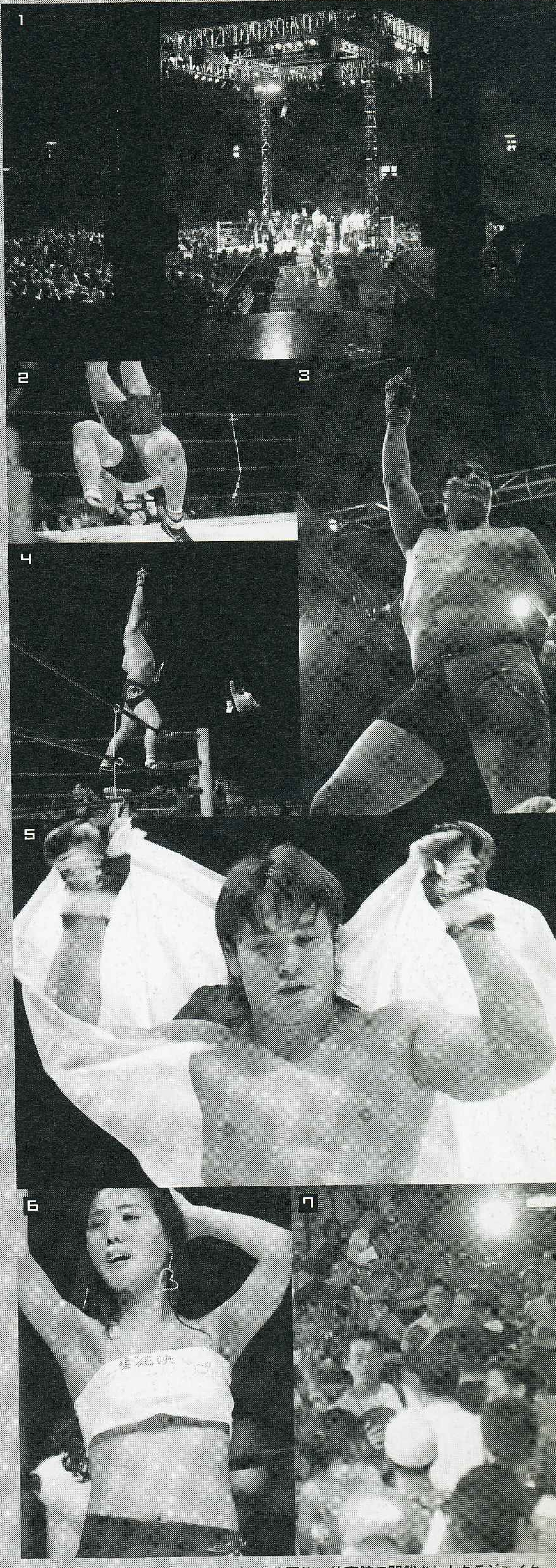
ハンとリの二人は、揃って90年代の前半期に韓国のプロレス団体に席を置いていた間柄にある。

1995年、プロレス留学のような形で日本を訪れたハンは、そこでパンクラスや修斗、いわゆる総合格闘技の存在を初めて知った。「男ならこういうことがやりたい」と、気持ちはすぐにシフトチェンジされたという。ただ、韓国に帰国してしまえば総合の練習場所などあるはずもない。

ハン同様、プロレス経由で総合に興味を持ったリは、そのプロレスラー時代に知り合った諸岡氏に相談した。そして「真剣をやりたいんだったら、誠ジムにおいで」という言葉と、航空券を用意してもらい、二人で日本を訪れた。98年まで、合計2年ほど日本で総合を学んだハンとリ。バトラーツやパンクラスでも練習し、ハンはパンクラスでプロの試合も経験している。

1998年にハンがプサン、リがソウルへ帰国し、各々で総合の道場を始め、日本で行なわれている総合の試合のビデオをもって韓国中を回ったが、快い感触を得るにはいたらなかった。

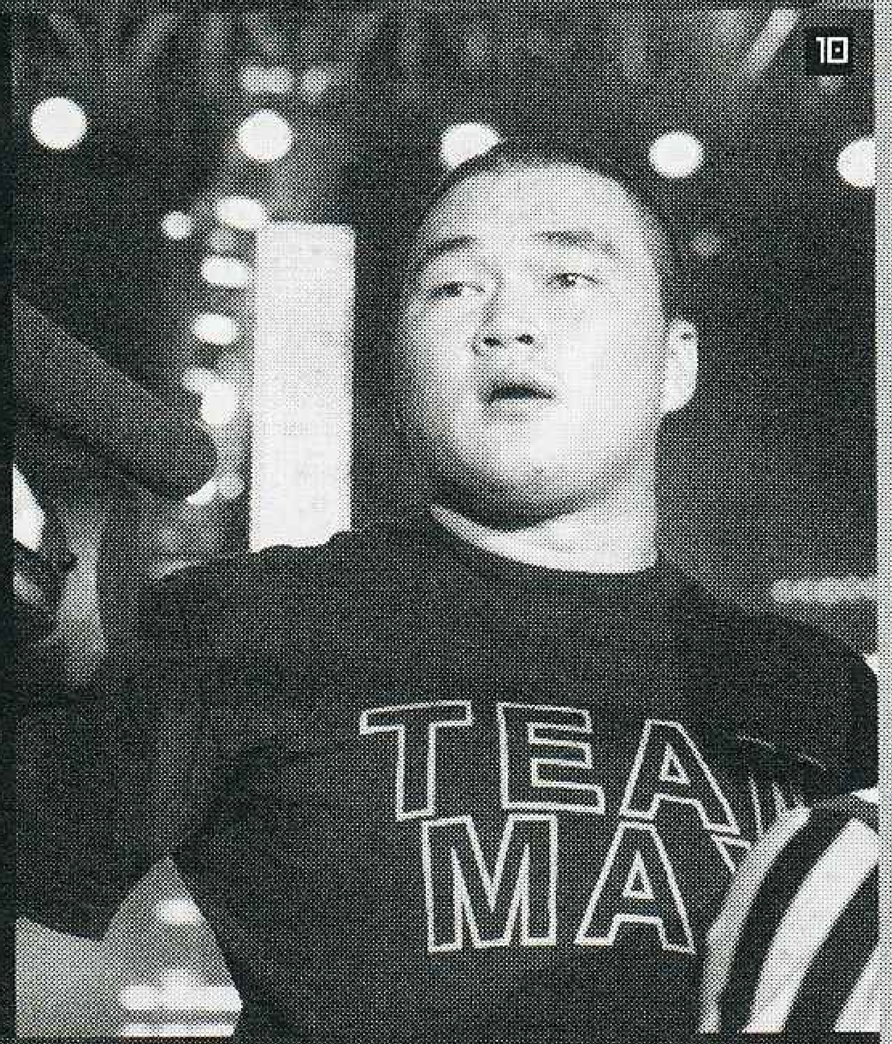
「ターニングポイントは、1999年でした。インターネットの普及がすすみ、実際に足を運ばない地域でも、総合に興味を持

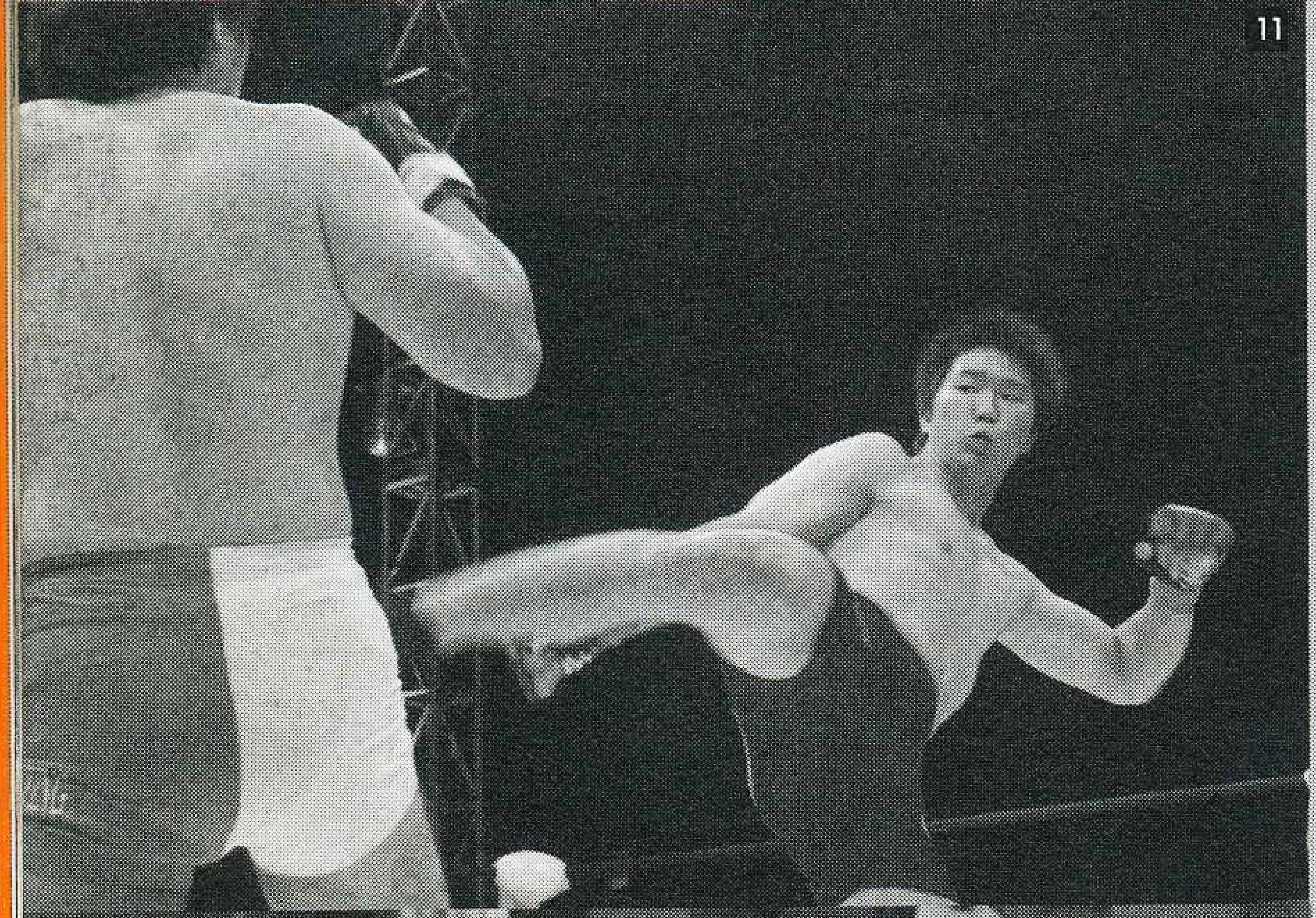


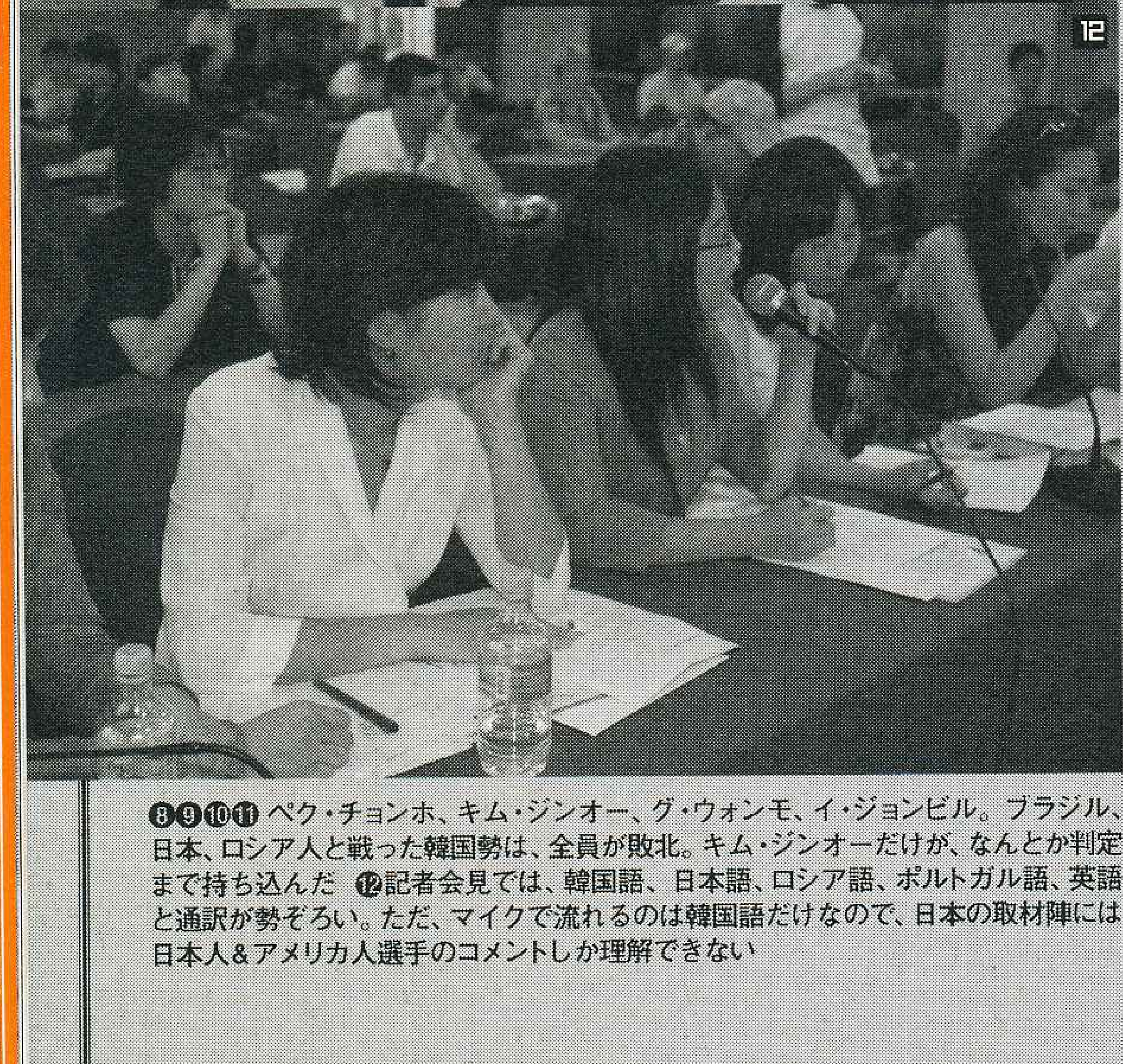
❶6月26&27日にソウルのオリンピック公園第一体育館で開催されたグラジエイター・ファイティング・チャンピオンシップ。花道、豪華なセットバック、スクリーン。日本でもここまで立派な舞台装置の大会はK―1とPRIDEぐらいだろう❷❸❹自国選手で一番人気は、チェ・ム・ベ。豪快な投げからパウンドで、ロシア人選手に圧勝した。人気をホンモノにするには、韓国人選手のスターは不可欠❺日本から参加した美濃輪育久が、試合後に日の丸を掲げてもブーイングはなし。対日感情は、明らかに変わってきている❻ラウンド・ガールは6人、色っぽい表情を浮かべるが、大会が終わってからの普段着とのギャップがかなりのものだった❼両日ともメインイベントは、ブラジル人vsアメリカ人のワールド・クラスファイト。1日目、アレックス・スティーブリングを下したホジェリオ・ノゲイラに、観客が群がっていく











❽❾❿⓫ペク・チョンホ、キム・ジンオー、グ・ウォンモ、イ・ジョンビル。ブラジル、日本、ロシア人と戦った韓国勢は、全員が敗北。キム・ジンオーだけが、なんとか判定まで持ち込んだ　⓬記者会見では、韓国語、日本語、ロシア語、ポルトガル語、英語と通訳が勢ぞろい。ただ、マイクで流れるのは韓国語だけなので、日本の取材陣には日本人&アメリカ人選手のコメントしか理解できない

っている人々を捜しあてることが可能になったんです」（ハン）。

アームロック・カフェと名づけられた彼らのネットを利用した会合は、わずか10人ほどの参加から徐々に広まり、99年にインターネットを通してUFCの映像が見られるようになる頃には、コアなファン層というものが、出来上がりつつあった。

ボクシング、キックボクシングなど伝統武道、オリンピック種目以外の格闘技は、立ち技ばかりだった韓国で、このコアなファンたちは、寝技の攻防に高い興味を示した。彼らに言わせると、「新しいもの好き」の国民性、そして「戦闘的な」国民性、二つの国民性が合致し、総合は興味を持たれやすいという。

とにかく情報不足が足かせとなり、普及に手間取ったが、ネット社会の実現がそれを解決してくれたと二人は言う。

情報がなく普及に苦戦したという部分で、キム・ジョンワンもハンやリと同じ我慢の時期を経験している。キムも彼ら同様プロレスラーだったが、1996年にパンクラスのオーディションを受け合格、その年の7月から翌年の8月までプロとして契約を結び、日本に滞在。パンクラスのリング自体は99年9月まで上がっている。

その後、キムは米国カリフォルニアで行われているキング・オブ・ザ・ケージに出場するなど、韓国随一の国際派ファイターとしてマニアックな知名度を誇り、グラジエイターFCでも、初日のセミファイナル＝韓国人選手のトリを務めている。

パンクラスと契約が切れ帰国したキムは、ソウル郊外にキム道場を開設した。もちろん、周りは総合の「そ」の字も分からない。キムは柔道場と兼用のジムで、わざわざ柔道のクラスに通う人間の前で総合の練習に興味を持った人間を誘う。ネットでコアなファンを開拓したハンやリと違い、キムはいわゆる一般の人々が総合に興味を持つまで、じっくり待ちの態勢で練習生の数を増やすことに務めた。その時が来る日をただ信じて——。

2002年、韓国国内でK—1、PRIDEなど日本のメジャー系プロモーションの試合が中継され、一気に総合格闘技が一般層に広まった。

2年後には地上波でK—1、ケーブルでPRIDE、パンクラス、DEEPが中継され、ケーブルの一つXTNでは修斗の中継も検討中というように、ケーブル・テレビのコンテンツとして、格闘技はかなりの需要が見込まれている。

グラジエイターFCは、課題と

一般への浸透度が深まると、当然のようにキム道場でも、総合志向の練習生の数が増えていった。キム・ジョンワンの大学の後輩キム・ソンチョルは体育教師の職を辞して、キム道場へやってきた。

イー・ジンオーは兵役を終え、そのまま仕事につくこともなく、総合格闘家を目指し、道場の門をくぐる。

キム・ソンチョルやイー・ジンオーのような無名の若者が総合格闘家を目指す気持ちを後押ししたのが、ハンとリが主宰するKPWのトーナメントだった。

2003年の2度目の大会では、大会結果を求め、彼らのホームページへのアクセスは、2日で30万以上のヒット数を数えた。

そして翌4月にスピリットMCが、チャンチュン体育館に7000人を超える観客を集め、プロ総合格闘技イベントを大々的に開催した。スピリットMC代表ミン・トンファン氏は、韓国最大手企業の一つサムスンの海外事業部に身を置き、大阪に1年間滞在。K—1を始めUFC、PRIDEの大ファンだった彼は、帰国後、起業家となり成功をつかんだ。そして、大好きな総合のプロモートに乗り出したのだった。

「韓国人は、総合格闘技を受け入れるDNAを持っている。絶対に一般層にまで広がります。それがスピリットMCを始めた最大の理由です」と、ミン氏。好きという理由だけでなく、ビジネスとして成功するという読み、自信が彼にはある。スピリットMCは、9月11日に5度目の大会を開催するなど、順調な活動を行っている。

ネット〜TV中継〜KPW〜スピリットMCと着実に歩を進める韓国の総合格闘技界。もちろん格闘技の本質も分からず、甘い目算でビジネスを展開しようとする者も現れる。グラジエイターFCの開催までに昨年11月のKO—king、今年5月のウルトラFCと、大々的に大会開催を打ち上げながら、そのまま頓挫した事件が2度も起こった。負債の積み重ねで身動きのとれないネオ・ファイトが、計画破綻により、負債を一掃。新しいプロモーション名で再起を図るという噂もある。

純粋に総合の普及を目指す者だけでなく、山師のような連中が業界に入り込んでくる——、これこそ総合が世に広まりつつある象徴的な例だろう。日本にもかつてUVFやU—JAPANという二つのプロモーションが、時も同じ1996年に出現している。そんな頃を経て日本の総合格闘技が飛躍したことを忘れてはならない。

現にこの1年で、韓国ではソウルを初め、各都市では総合の練習を取り入れる格闘技道場が目に見えて増加しているそうだ。

そして、チェ・ム・べというレスリングの世界で国際的な実績を残す選手が、MMA転向を決意した。チェは昨年10月に韓国で初めてプライベートのレスリング・ジム「タックル」を開設。だが、レスリングよりも総合志向の数ばかりが増えていき、いつのまにか自らが先頭を切って総合の技術の習得に励むようになっていた。

33歳の総合転向。チェは「やるたびにはまっていきます。まさか自分の身に、パンチを使うような時がくるとは思っていなかったのですが、日本のPRIDEに出させていただいて、おかげさまで道場生も増えましたし。総合さまさまです」と、笑顔を見せる。グラジエイターFCでは2日目のセミで、豪快な勝ち星を挙げたチェ。

彼が総合で成功するかどうかは、今後の五輪スポーツからの転向組の動向に強く影響を与えるに違いない。

1万7000人収容のオリンピック公園第一体育館は、厳しい言い方をするとガラガラとしか表現しようのない入りだった。しかし、二日間でトータル6000人ほどの韓国の人々が、世界レベルの総合格闘技を目にし、記憶に留めていることを見逃してはならない。フリーチケットの横行、高すぎるチケット料金など、数々の問題を残してはいるが、今大会を主催したKRSエンターテインメントのキム・インデ代表は、全ての赤字決算を見込んだうえで、満足気な笑みをリングサイドで見せ、最大の協力者である諸岡氏と固い握手を交わしている。

「この大会で総合とは何か、より広い層に理解してもらえたと思います。スピリットMCとは違う尺度を持った大会ですが、イベントの有り方として学ばせてもらいました。正直、予想よりずっと良い大会でした。グラジエイターFCは新しいブランドになりましたね。素晴らしいことです。私は今、自分がすべきことに集中する。それが一番大切なことだと理解しています」とミン氏。

グラジエイターFCを終えて、ミン氏の言う一番大切なことと同じ内容の課題を、ハン&リのKPW勢、そしてキム・ジョンワンも指摘している。

それは韓国人選手の育成に他ならない。

グラジエイターFCの前座に出場した選手達の技術は、日本のアマチュア大会に出ても勝てるかどうかという稚拙なものだった。とにかく、寝技を知らな過ぎる。

ハンは「日本でやっている試合がすぐできると思っているんです。頂点の大会だけを見て、基礎工事もしていないのに屋上に出ることだけを考えている」と言う。

「日本にはビッグショーだけじゃなくて、選手を育てる場があることを、選手もプロモーターも学ぶ必要があります。日本では長い歴史があって寝技を習得し、そして立ち技が多い試合展開になったのに、若い選手は立ち技だけでなんとかなると勘違いしています。それに大金がすぐ手にできると思っているんです（苦笑）」とは、リの意見だ。

キムは「キャリア不足を補うためのコーチがいない。これからも私たちは海外で多くのことを学び、韓国に持ち帰る必要がありますね」と解決策を講じ始めている。

寝技の技術に光明がないわけではない。リの言うように日本は彼らよりも長い総合の歴史があるが、寝技の習得を一から皆で試行錯誤する必要があった。

しかし、韓国には既にブラジリアン柔術の道場があり、そこで指導するジョン・フランクルはマサチューセッツでMMAの経験もある黒帯柔術家だ。純粋な柔術以外にも、MMAで役立つテクニックを持っており、既にチェとの交流も始まっている。

ミン氏は「とにかく韓国人選手で興行が成り立つマーケットを開拓すること。将来的には、その部分が一番大切になってくる。

ブラジリアン柔術、アマチュア=KPW、国内総合大会=スピリットMC 繁栄以前の普及に向け、ピースは揃いつつある

今はデニス・カンに代表される韓国系の海外滞在選手をドメスティック・スターとして登用し、彼らが引っ張ってくれる間に、若い世代が力をつける。そうすれば、総合格闘技は韓国に根付くことは間違いありません」と力強く言い切った。

インターネット、ケーブルTV、海外から押し寄せる情報のブロードバンド化が、この1年～2年の韓国の総合格闘技熱を煽ったことは間違いない。日本では長い年月をかけて普及が進められた総合格闘技だが、大きな大きなアドバルーンを掲げて、そこから基礎工事に入るのも、あながち遠回りとはいえない。それにいかに基礎工事が必要かも、このブロードバンド情報社会で知れ渡っていくに違いないだろう。

ブラジリアン柔術、KPW、スピリットMC、そしてグラジエイターFC。これらの形が整いつつあるピースが、一つ一つの役割をこなしていけば、もう少し落ち着いた総合格闘技界を築けるに違いない。

隣国日本に住んでいる格闘技関係者は、彼らの想いを利用するのではなく、互いのためになる交流をする必要がある。対馬海峡を挟んで、韓国と日本で東アジア総合格闘技経済圏が完成すれば、これほど両国にとってプラスになることはないのだから。



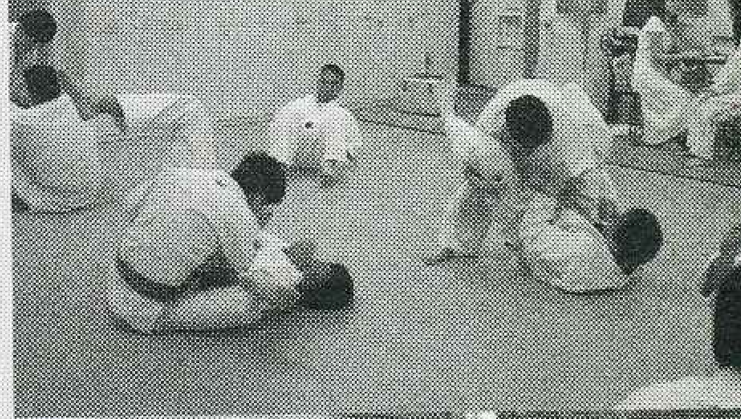













❶チェ・ム・べが主宰するチーム・タックル。韓国で初めてできたプライベート・レスリング・ジムだったが、総合を習う練習生の方が多い❷とにかく礼儀正しい練習生達。特に先輩・後輩の間の関係は、やはり儒教の国か❸キム道場のキム・ジョンワン。パンクラスと契約を結んでいたこともあり、カリフォルニアのKOTCでも戦っている韓国随一の国際派。真ん中はポテンシャルは高いキム・ジンホー、8月に美濃輪を慕い、日本の道場で修業する予定だ。右端のキム・ソンチョルはグラジエイターFCに出場し、KO負けを喫した選手。キム・ジョンワンの大学の後輩で、今後は現役よりも世界を回り指導者を目指したいという❹キム道場では、体重65kg程度の軽量級の練習生が、オープンフィンガー・グローブをつけてスパーリングをやっていた。全体の印象は打撃は切れがいいが、寝技は全くダメ。足の利かせ方はほとんど無いに等しい❺コリアン・トップチーム？　イメージ先行に実力がどこまで追いつくか❻ソウルにもあったブラジリアン柔術のアカデミー❼リとその師匠でバッハ系ホベウト・マイアの黒帯ジョン・フランクル。フランクルはカリフォルニアのチコに自らのアカデミーを構えているが、もうすぐ韓国の大学の教授になるハーバード出身の柔術家❽韓国人ファイターの成長を待ち、ドメスティックにこだわるスピリットMCのミン・トンファン代表。フリーチケットを100枚以下にし、なお3000人の観客を集める優良プロモーションで、諸岡氏も「一番信用できる」と太鼓判を押す韓国MMA界のキーパーソンといえる人物だ❾指導者のリ・ヒースンが紫帯で、青帯が極少数。ほとんどが白帯だが、グラジエイターFCに出ていた選手より、ずっと足を利かせることを知っている。奥には入門を申し込みに来た若い女性の姿も❿中央が韓日の架け橋として活躍するCMA誠ジム代表の諸岡秀克会長。左はリ・スイル、右はハン・テユン。アマチュア大会KPWを運営する二人は、キム・ジョンワンと並び韓国総合格闘技界の先駆け的存在


97年8月なので、スポセンでの渡辺さんレッスン最後の日かも…

Gachinko Column

［総合格闘技の現在を考える］

ガチコラ! Vol.1

日本BJJ黎明期～スポセン伝説

80年代後半、UWFを通じサンボがやりたくてたまらなくなっていた私ですが、高校のレスリング部を1年で辞めてしまった根性なしにはとうてい無理だろうとあきらめてました。でもやりたいなぁと悶々としながら、サンボ、コンバットレスリング、シューティング、リングスなど見て過ごした90年代前半、突如出現したのがグレイシー柔術。このとてつもなく魅力的で、目からウロコが落ちるその技術に、私はすっかりトリコ。そして、見る側からやる側へ行きたいけど行けずに悶々としてた私の背中を押してくれたのでした。

その頃はまだ柔術道場はなかったので、当初の願い通りサンボをやるためスポーツ会館に入りました（ちなみに、場所や名前が似てるためよく間違う人がいますが、スポーツ会館と新宿スポーツセンターは違います）。スポーツ会館で、まず目に付いたのはラッシャー木村さん。サンボでなくウエイトをやっているのですが、プロレスファン出身にとって生ラッシャーは感動もんでしたね。昔のゴングによると、国際プロレスはUWFより全然早くサンボを取り入れてたようです。ラッシャーさんがビクトル投げなど練習してる写真は衝撃的です。

今や世界的な選手の須藤元気も、ボーズ頭の高校3年生でサンボに来てました。そして、サンボ新人戦が96年3月に行われたのですが、（決勝は須藤元気vs今泉堅太郎、私は2回戦で今泉選手に負け）、一緒に出場してた人から、「実は新宿スポセンで柔術茶帯の人に柔術習ってる」と告白されビックリ。当時はまだたしか正道会館が柔術クラスできたばかりの頃。そこで私もぜひと、柔術を習わせていただくことになったのです。

そこで柔術を教えていたのが、現在アクシス柔術アカデミーの代表・渡辺孝真さんでした。本場ブラジルの柔術テクは、まさに目からウロコ。日曜午前の週一レッスンでしたが、毎週十数人の柔術トリコ男たちは、スポセンに熱心に通いました。その中には、現在プロ柔術プロモーターの浜島邦明くん（当時大学生）もいました。スポーツ会館からも、サンボ重鎮の竹内政司さん（現在、X-TREME柔術アカデミー代表）が参加するようになりました。

そして半年経った96年10月、ハワイでヘウソン・グレイシーが主催する柔術大会ハワイアンオープンに出場すべく、私は日本から4人で行きました。会場に行くと中井祐樹さんも単身で来ていました。これが中井さんの柔術大会デビューです。バリジャパの伝説もあり、ハワイでも中井さんはみんなに注目されていました。そして中井さんは青帯できっちり優勝。貴重なデビューと同じ場所にいて、うれしかったです。そんで、ハワイで一番衝撃的だったのがバレット・ヨシダ選手。その敏捷で独特な一本取りに行く姿は、柔術版ルミナのようで、こんな人がハワイにいるんだぁと感動して即ファンになりましたね。

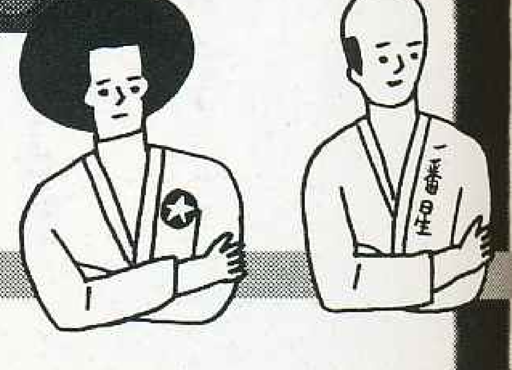
その後、渡辺さんのレッスンには色々な人が集まってきます。中井さん、エンセンさん、アンソニー・ネツラーさん、平さん、正道でインストラクターしてた人など。鳥合からも、植野雄くん（現在グレイシー・バッハ東京代表）、滝川直くん（現在、ブラジル修業中）など合流し、日曜午前の新宿スポセン（もしくは渋谷スポセン）は、マニアから見ると興味深い顔触れが揃っていました。ある日、エンセンが金原さんを連れてきた時は、ちと驚きました。その頃Uインターが嫌いで悪く言ってた私は、ビビりながら金原さんとスパーしたもんです。

当時は、渡辺さんのレッスン以外にも、友人と平日昼間のスポセンで自主練習をしてたのですが、そこで私ら以外にいたグループがグラバカ前の菊田軍団でした。菊田軍団の顔触れもマニアには興味深くて、私と友人はチラチラ横目で見ながら自主練してたもんです。残念ながら、小川直也が菊田軍団にやってきた時はいなかったので見れなかったですが、スポセン伝説のひとつとして見ておきたかったです。

あと当時の印象にあったのは、元骨法の多さです。ちょうどその頃、矢野卓見さんが骨法を辞めて鳥合破門会を作りスポセンで練習してたし、柔術やってる人の中にも元骨法の人がよくいました。スポセン周辺で練習してる人の1割は、元骨法ではないかと思うほどでしたね。

スポセンでの渡辺さんのレッスンは、97年8月まで続きました。9月からは、グレイシージャパン（後にアクシス柔術アカデミーに改名）ができたからです。スポセン時代のメンバーには、現在道場を持つ人がかなりいます。日本のブラジリアン柔術の隠れた歴史は、96、97年のスポセンにあったんだなぁと、いまあらためて思いますね。偶然にも、そんな場に参加できてよかったであります。

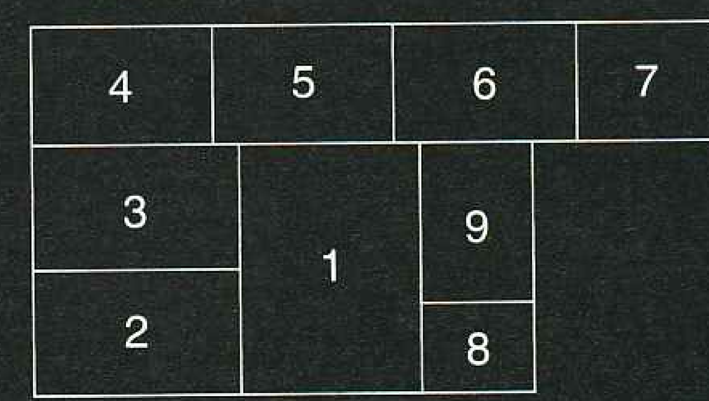

96年のハワイにて。浜島君（右から2番目）が今と別人です！



1 花くまゆうさく　はなくま・ゆうさく。1967年東京都出身。ご存知、アフロとハゲのイラストでお馴染の漫画家であり、柔術実践者としても知られる。

ドラゴンはどこでも修斗の象徴。緑と黄色で彩ったブラジルらしいトロフィー。





①ウィニング制プロフェッショナル修斗グローブ。まだ改良の余地が残っているが、一定の完成まで10年の試行錯誤を繰り返した。このような試みを繰り返すのは修斗だけと製造元もいう②日本のアマチュア修斗で使われているグローブ。進行をスムーズにするために紐でなくマジックテープで手首を固定。コストが安いマジックテープを各国の修斗運営陣は倣った。③UFCグローブで有名なオウアノ製のUSA修斗グローブ。拳頭部のパッドが、やや直角すぎ。指が外れやすい欠点がある。④ツインズ製のオランダ修斗グローブは、手首にもパッドが入っていて鉄槌攻撃のダメージを和らげる。⑤ブルーコーナー製を用いるのはスカンジナビアの大会。⑥クラスD用グローブは、サイズに関係なくパッドの厚みはLサイズ使用。もちろん、安全性を考慮しての処置。⑦これもクラスD用のフェイスガード。クラスCでは目やアゴが出ている専用ヘッドギアが、日本国内のみ存在する。⑧アブスメント・ガード。いわゆる女性版ファールカップ。安全面をシリアスに考えていないと、発想すらできない競技器具といえる。⑨協会広報誌「SHOOTO NEWS」、アマチュアの活動を網羅しているのはこの一冊だけ。専門誌では掲載できないキワドイ対談も売り

格闘技界の免罪符——、

修斗らしさとは……

プロフェッショナル・ファイティング・エンターテインメントとの狭間で

「SHOOTO NEWS」という日本修斗協会広報誌が、後楽園ホールで興行があるたびに発行されている。そのなかにISC（国際修斗コミッション）の広報ページ「修斗ガゼット」というコラムがある。その修斗ガゼットで、修斗のレフェリーを務めるISC事務局長・鈴木利治氏が、格闘技マスコミに噛み付いた。「脈絡のない修斗賛美」、「修斗を持ち上げる裏で、非難されるべきことが非難されないマスコミの姿勢」。競技として普及する修斗は、あまりにもマスコミの材料になりにくく、プロ修斗はイベント主体の総合格闘技の規模に歯が立たない。マスコミによって伝播されない、修斗らしさをここでは取り上げたい。

高島学＝文
text by Manabu Takashima

日本修斗協会広報誌「SHOOTO NEWS」のなかで、インターナショナル修斗コミッション事務局長・鈴木利治氏が、ちょっとした専門誌批判を掲載した。

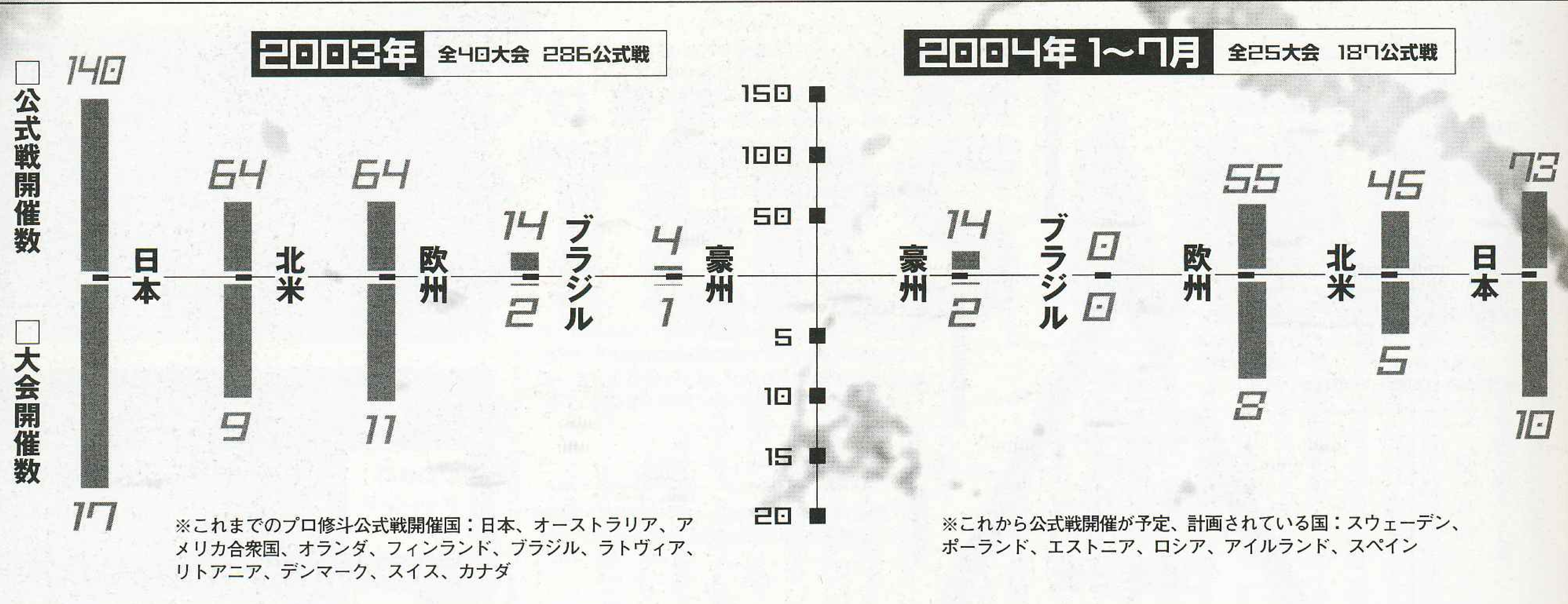
曰く、「修斗の人間はマスコミの記事に対して苦情をすることがほとんどない。よって、修斗に関してだけ、批判記事が掲載される。ジャーナリズムの批判精神を鼓舞する受け皿に、修斗がなっている。」さらに修斗が評価されることについても「脈絡もなく妙に賛美する取り上げ方。マスコミが正しいことをやっているものを、きちんと評価しますという自己主張に修斗を利用している。修斗を賛美することで、業界の不正に加担してきたことへの免罪符にしているつもりか。修斗の方針が正しいというのであれば、それに反しているところを批判しろ」という主旨のかなり辛らつな意見だった。

修斗を免罪符にしているのかという意見については、筆者が個人的にも以前から感じていたことだ。マスコミは当然、格闘技業界の内部のことに対して、ファンよりずっと詳しい。そして、全体利益の追求という言葉のもとで、ファンへの裏切り行為（八百長、もしくは八百長と見られる試合）はおろか、格闘技として明らかに危険な行為（体重差のある試合、力の差のある試合、マスクマンの出場、KO負けした選手の短期間でのリング復帰など）に対して批判することもない。取材拒否というリーサル・ウェポンを大会主催者側が持ち、ちょっとしたことで、その武器をちらつかせることが、これまでに何度もあったからだ。

そして、その最終兵器をちらつかせる主催者ほど、雑誌の購買数の動向を握っている大会を行なっているというのが、まぁ業界の常識だ。だから、いくら鈴木事務局が「私の投じたこの一石が、業界の健全化に寄与できることを期待しております」と言っても、マスコミの有り方は変わりようがない。他を批判するようなことになれば、その雑誌の命運は尽きるからである。

個々のマスコミは本来、正しい行ないをしている組織、個人を評価したいに決まっている。ジャーナリストを目指す者は、大抵心のどこかに正義感を隠れ持ち、この業

プロ修斗開催国

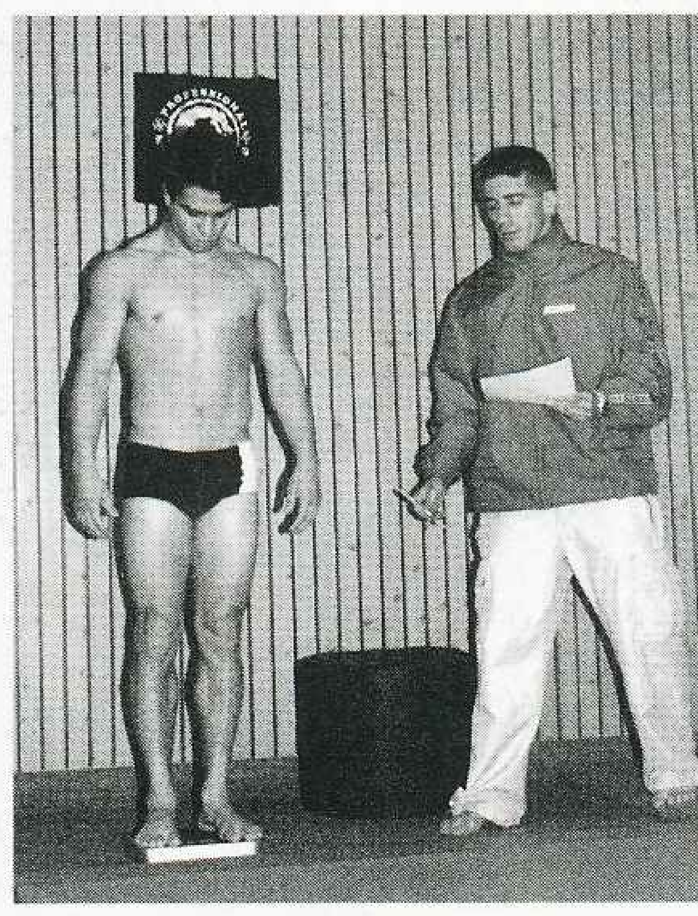
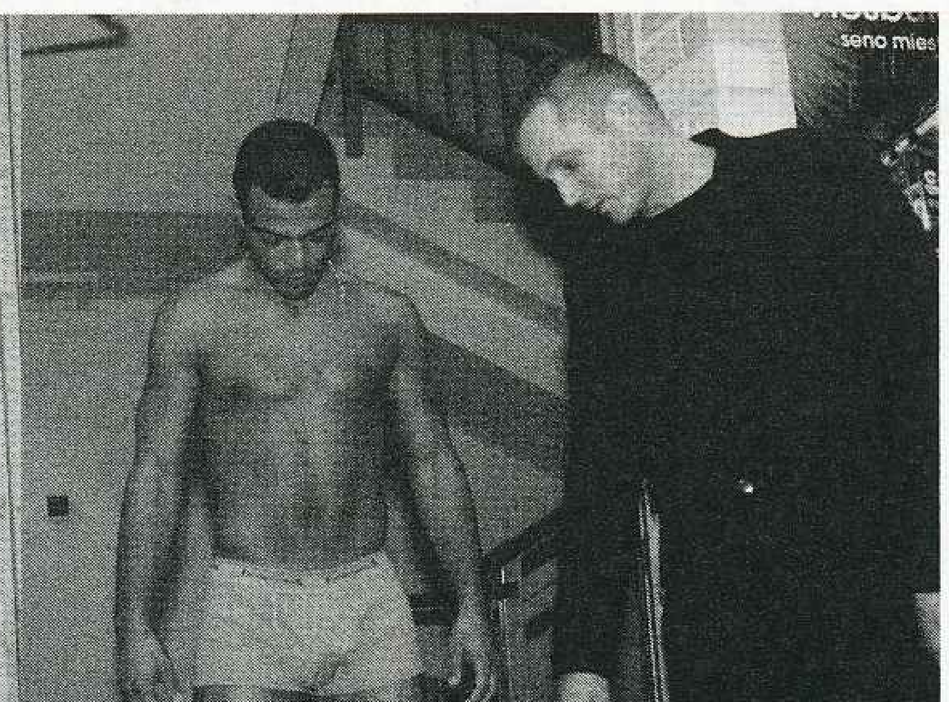


※これまでのプロ修斗公式戦開催国：日本、オーストラリア、アメリカ合衆国、オランダ、フィンランド、ブラジル、ラトヴィア、リトアニア、デンマーク、スイス、カナダ

※これから公式戦開催が予定、計画されている国：スウェーデン、ポーランド、エストニア、ロシア、アイルランド、スペイン



米国シカゴエリアで公式戦をひらく、アイアンハート・クラウン。ゴールド・ドラゴン誕生。

日本のようにボクシング用の計量器が使用されているのは、北米、豪州など一部。リトアニアやスイスは、どこかほのぼのとしているか。



ドラゴンはどこでも修斗の象徴。緑と黄色で彩ったブラジルらしいトロフィー。

世界11カ国で統一ルール、レギュレーション下のプロ公式戦開催は評価に値しないのか

界に入ってきたに違いない。だからこそ、彼らはプライベートになると修斗を褒めるが、それが誌面に反映されることはない。「最後に残るのは、修斗ですよ」なんて、絶対に誌面に掲載できない言葉を吐いても、その本音は「じゃぁ、正しいことをやっている修斗を載せれば、雑誌が売れるようになってくれよ」と哀願したいくらいなのだ。

そんなマスコミの姿勢が必要なのもまた、修斗の現実。マスコミの姿勢が気に入らないなら、修斗がリーサル・ウェポンを突き刺せばいい。それができないのが、現在の修斗という組織の力だということを認める必要がある。実際に最終兵器をちらつかせることができる組織は、マスコミより強い立場にいる。そして修斗は弱い立場にある。

きっと、アマ修斗を取り仕切る人物なら、「どうせ掲載されないから、取材拒否でいいですよ」と担架を切ることも可能だろう。では、プロモート活動を行なっている者、そして選手としてはどうだろう？「マスコミが修斗を利用する」、「正しく評価しない」からといって、地上波放送もなく、スカパー系のCSでしか電波に乗らない。そんな自分たちのことを、少しでもページを割いて紹介してくれる専門誌を相手に、取材拒否なんて手段がとれるだろうか。まったくもって「否」である。

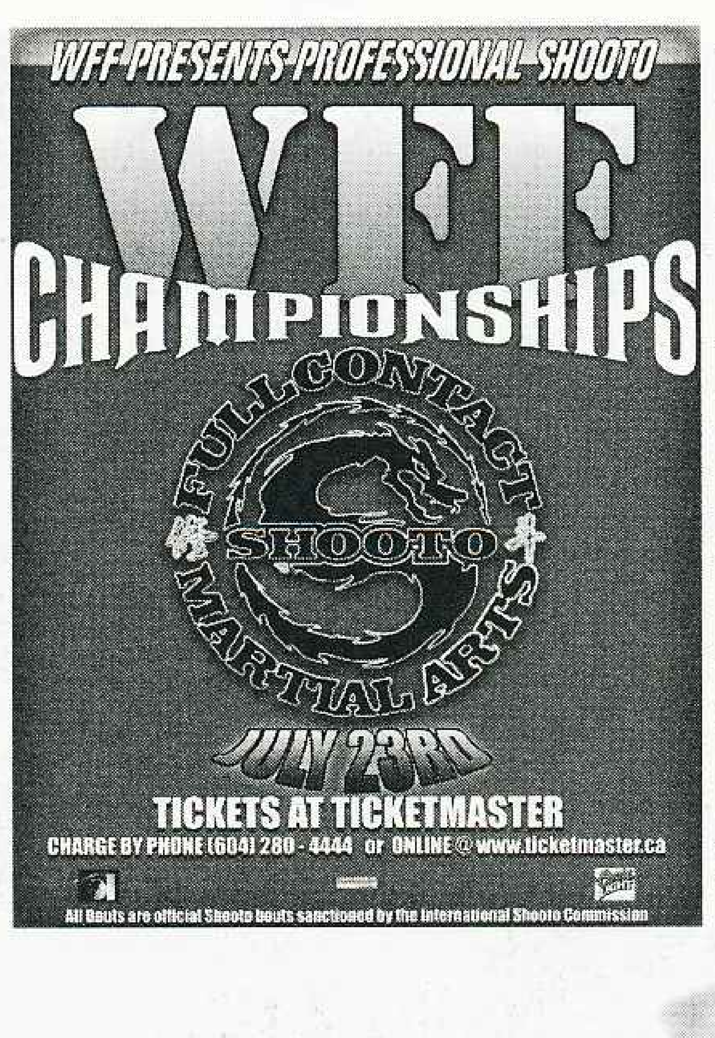
長年の積み重なった想いがあったのだろうが、鈴木事務局長は本当はもっと違うことが言いたかったのではないだろうか。別に他のことは気にせずに、「では、修斗の良い点。評価される点をきちんと掲載してください」と。これこそ、広報誌で述べた内容と表裏一体の真理だと思う。

修斗の評価すべき点は、その競技性、そして世界への伝播という2点につきるだろう。2003年の活動を見ても、プロ公式戦が世界9カ国で、全286試合行われている。そんなMMA組織は、後にも先にも修斗しか存在しない。

国内の興行数17、公式戦140というのは、PRIDEの6興行、51試合を大きく上回る。規模が違うという反論は、この際はなし。ここでは競技性に関して述べているのだから。ただ、同規模という点を顧み



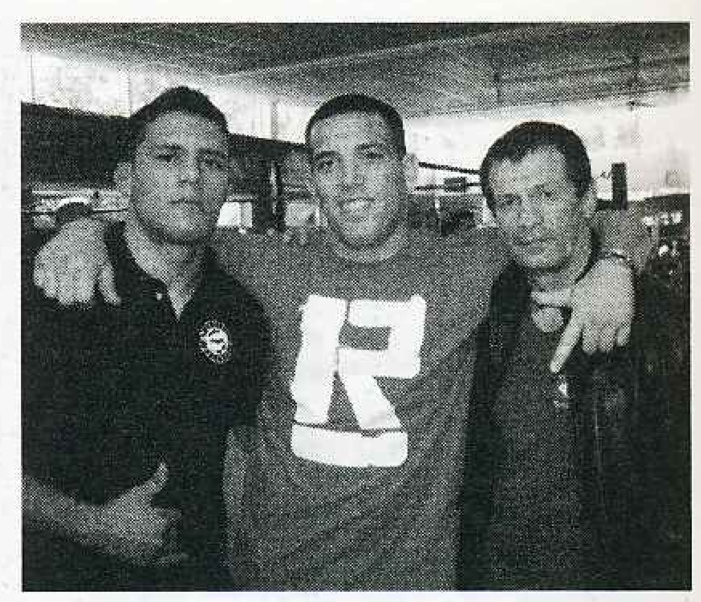
ハワイで行なわれたソルジャー・ファイトナイトは、日本のサステインがスポンサー資金で興行をとりもった新しいスタイルのイベント方法。ハワイでの定着を狙う。



7月23日に初めて公式戦が行われたカナダ、バンクーバー大会のポスター。WFF（ワールド・フリースタイル・ファイティング）チャンピオンシップが、その舞台。



オーストラリア・メルボルン大会。豪州では計量が、大々的に行なわれる。

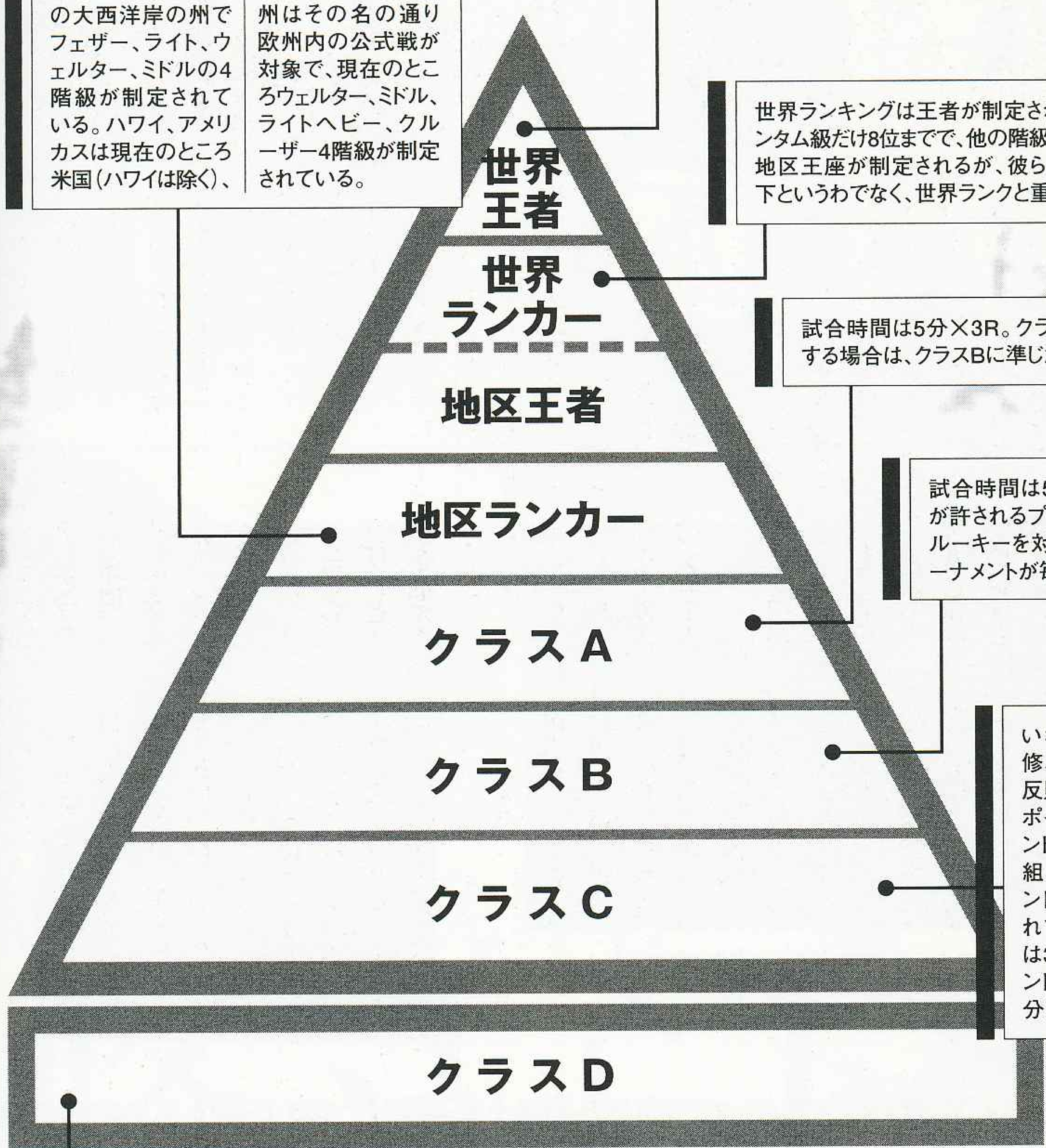


佐藤ルミナのR−Tシャツを着る欧州修斗代表マルタイン・デヨング。欧州での普及は著し、またオランダは、日本についでアマ修斗が定期的に開催されている。

NKA

日本発信の修斗以外に、アマチュア総…をオープンし、シューターズ・インター…である。これにより、他の格闘技経験者…イ・ケースで選手に試合を提供してきた

修斗のヒエラルキー



修斗の世界王者は、6人。バンタム級がマモル（横浜）、フェザー級は松根良太（パレストラ松戸）、ライト級はアレッシャンドリ・フランカ・ノゲイラ（WFC／ブラジル）、ウェルター級はヴィトー・ヒベイロ（ノヴァウニオン／ブラジル）、ミドル級がジェイク・シールズ（シーザー・グレイシー柔術／米国）、そしてライトヘビー級が須田匡昇（クラブJ）。

地区ランキングはパシフィックリム（環太平洋）、アメリカス（米大陸）、ヨーロピアン（全欧州）の3つの地区。環太平洋は日本、豪州、北米の大西洋岸の州でフェザー、ライト、ウェルター、ミドルの4階級が制定されている。ハワイ、アメリカスは現在のところ米国（ハワイは除く）、カナダ、ブラジルの公式戦に適用され、フェザー、ライト、ウェルター、ミドル、ライトヘビーの5階級で37名の選手が選定されている。全欧州はその名の通り欧州内の公式戦が対象で、現在のところウェルター、ミドル、ライトヘビー、クルーザー4階級が制定されている。

世界ランキングは王者が制定されている6階級。バンタム級だけ8位までで、他の階級は10位まで。今後、地区王座が制定されるが、彼らは世界ランカーの下というわけでなく、世界ランクと重複するようになる。

試合時間は5分×3R。クラスBの選手と対戦する場合は、クラスBに準じた試合時間で戦う。

試合時間は5分×2R。パウンドが許されるプロ・ルール。国内のルーキーを対象に新人王決定トーナメントが毎年行われている。

いわゆるアマチュア修斗。寝技で打撃は反則、スタンドの打撃ポイント、組み技ポイントと、減点十加点が組み合わさったポイント・システムが取られている。試合時間は3分×2R。トーナメント戦は準決勝まで4分×1R制がとられる。

スタンドで顔面へのヒザ禁止、ヒールホールド、Vクロス、クロックヘッドシザースなど負傷に直結する関節技も禁止事項に含まれる2分×2Rの試合。フェイスガードを着用し、より安全性を重視している初心者用ルール。ただビギナーだけでなく社会人など、より安全に修斗をやってみたいという人々のために作られた。30歳以上、キャリア2戦以下の練習生に適用される。

G-SHOOTO JAPAN 女子修斗

クラスA 5分×2R　男子のクラスBルールと同じ

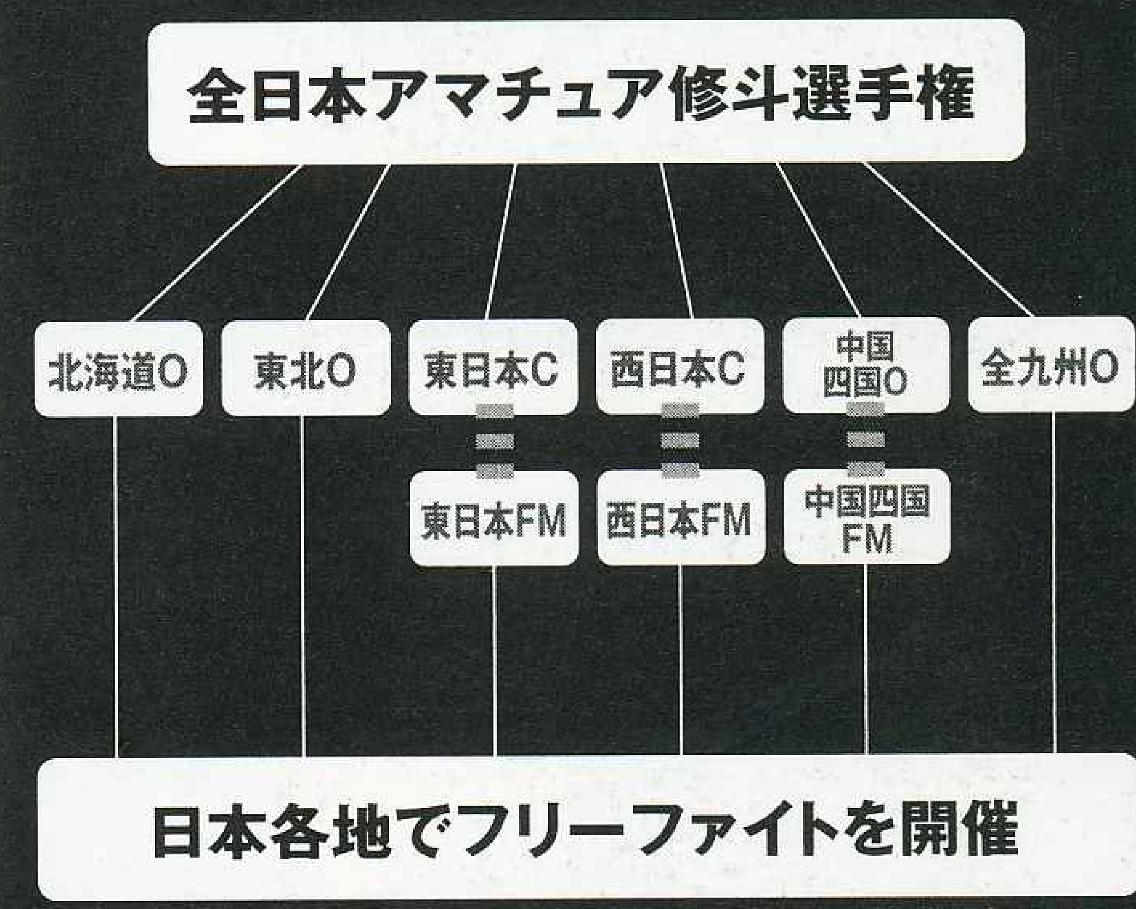
クラスB ヘッドギアを外したクラスCルール。ポイント制はとらない

クラスC 男子のクラスCルール、アマチュア女子修斗

○かねてより女子だけのプロモーションは発足させないとしていたプロ修斗だが、女子への普及、安全性の追及、カンフル剤的な役割を目的とし11月末をめどに活動を開始する。クラスAでも2R、クラスBは顔面パンチを禁止とした女子修斗ルールを採用する。ZEPPグループの全面支援のもと行われる。海外の女子公式戦は、米国インディアナ州のHnSが力を入れている

アマチュア修斗の仕組み

プロ修斗チャレンジマッチ　全日本出場レベル選手にだけ1試合出場が許されるアマチュアの非公式戦で、ルールはクラスBに準じているが、TKOなどのストップはクラスCルール同様に早い。将来の地方興行の試運転、競技の最終形を見せることで普及を図る目的がある



日本全国で展開されるアマチュア修斗の大会フリーファイトは、ワンマッチ制の大会。全国3地区（05年からは4地区の予定）のオープントーナメント（O）、3地区における選手権大会（C）の戦績に応じて、全日本出場選手が決定する。また4地区では新人向けのフレッシュマントーナメントも開催されている。登録制を取っており、現在約2000名が協会に選手登録している。海外ではサウスパシフィック選手権、ユーロ・オープントーナメントなどトーナメント戦のほか、フィンランド、ブラジル、ハワイで行われており、カナダのトロント、米国フロリダからも大会開催要望が届いている。

飛び級ライセンス

アマチュア修斗に出場していないが、プロに相応しい選手は面接などを経て、ライセンスが発行される仕組み。女子選手や、最近では和術慧舟會の中原太陽選手に適用されたが、今後も数人の飛び級デビューがある模様。海外でアマ修斗を行なっていない外国人選手を招聘するのと要は同じ実力査定があると見てよいだろう。

修斗グラップリング

修斗協会から公式戦として認められているグラップリングの試合。プロライセンス保持者も参加できる。ポイントはアマチュア修斗から打撃を取り払ったもの。

修斗ストライキング

ボクシング・グローブ着用の寝技のないルール。テイクダウンを奪った時点で、ブレイクがかかりスタンドへ戻る。引き込みも許されているが、減点になるだけですぐに立ち上がらなければならない。公式戦ではなく、あくまでもスタンドのスキルアップのための練習用ルール。協会では安全面を考慮したレギュレーションは作っていく予定。

てもパンクラスは14興行で112試合。さらに海外進出では比較にならない（しつこいようだが、競技面に限っては）。北米でも5つのプロモーションで計9興行、64の公式戦をこなしている。これもUFCの5大会、41試合を上回っている。

今年になっても大会、試合数の増加は継続している。国内は安定期に入りつつあるが、それでも7月までの7ヵ月で10興行73試合、海外の15興行114試合という数字は、昨年の23興行148試合に早くも肩を並べようとしている。

マスコミも認める修斗の正しさ、それは八百長行為の撤廃と、安全性の追及。ならば世界にこれだけ、その"正しさ"が伝わっているということ。実は試合数云々よりも、本当の価値はここにある。

鈴木事務局長にしてみれば、ただ闇雲に（後楽園大会が盛り上がったからといって）修斗を持ち上げるのでなく、そういうことを評価の対象として取り上げて欲しいということだろう。

そしてトップ選手が抜けても、選手が育つのが修斗の強みと書くのなら、ここに挙げた「選手の育成プログラムの存在、上を目指すヒエラルキーの形成を説明してほしい」、あるいは「ここまで本気で、アマからプロを目指す選手のために、日本全国で活動している組織はない」と取り上げないことに怒りを感じているのに違いない。

「最後に残るのが修斗」かどうか、それは誰にも分からない。世の中の常は、究極的には正しいか悪いかではなく、受け入れられるか、見向きもされないかの二つに一つだから。ただ、彼らが信念を持って作り上げてきた、いわゆる修斗の理念に対して、修斗に属している中から、「修斗以外なら」ということで安全性を無視した試合出場があるというのは、非常に将来を危うくする。

競技性の話だ。高いファイトマネーを欲して、選手が流出するよりも、安全性を無視した行動に選手が出ることや、プロのレフェリーが一人しかいないことのほうが、よほど危惧される問題。マスコミ批判とともに、自己批判も忘れないでもらいたい。修斗を安っぽい免罪符にしないためにも。

text by Tue K,TRNKA

北欧の修斗？？
アマチュアを確立し、プロ競技として勝負

SHOOTERS MMAって何？

日本発信の修斗以外に、アマチュア総合格闘技戦を大量にこなし、そしてプロフェッショナル・ファイターを輩出。さらに自らMMAの興行を行なう組織が、ヨーロッパにあることをご存知だろうか？

スウェーデン第二の都市ヨーテボリに本拠地を置くシューターズMMAは、ノルウェイ、デンマーク、フィンランド、イギリス、ドイツ、そしてイタリアと7カ国、40支部に300人の選手を抱える欧州随一の総合格闘技グループだ。

12歳の頃より、柔道、トラディショナル柔術、極真カラテ、ムエタイ、ボクシングなど、ありとあらゆるマーシャル・アーツの練習を経験してきたオーガスト・ワレンという人物が、このシューターズの長だ。

1995年にアメリカへ渡り、あのバートベイルが主宰するシュートファイティングに出会ったワレン。主宰者こそ日本でUWF系のプロレス団体で活躍した組織だが、ボクシングのISKAと連係をはかり、アメリカ国内ではプロレスとは一線を画した活動を行っていたシュートファイティングのアイデンティティをスウェーデンに持ち帰った。

欧州7カ国に広がる参加40ジムと300人のアマチュア・シューター

1996年1月、ワレンは2つの道場をオープンし、シューターズ・インターナショナルを発足させた。欧州各地で、盛んにセミナーを行ない、シュートファイティングの普及に努めた。そして1997年に初めてコンペティションを開催。

ルールはオープンハンドで、スタンドでも顔面へのヒザ蹴りは反則、寝技における一切の打撃は禁止で、ロープエスケープも認められるルールだった。掌底ルールが施行されたのは、「当時、欧州では実用にたえるオープンフィンガー・グローブが開発されていなかったから」と、後になってワレンは語っているが、実際は彼が本拠を置くスウェーデンでは、寝技での打撃攻撃は認められていなかったからという見方も根強い。

何はともあれ、この寝技でパンチが許されないルールは、配下の選手のスタンドでの打撃、そして関節技の技術を大いに飛躍させた。この点も1995年にパウンドを解禁する以前の修斗の選手と非常に似通った技術体系を身につけていたといえる。

ワレンのクレバーさをよく表しているのが、選手を育てるだけでなく、ヨーテボリにあるルプス・ジムでインストラクター養成専門のクラスを設けていることである。これにより、他の格闘技経験者で、シュートファイティングの習得を望むにはやや年をとりすぎたと思う世代まで、取り込むことに成功。短期間でここまで加盟ジムを増やすことができた一つの要因に、このインストラクター養成クラスの存在がある。

シューターズでは各国の選手権に加え、ノルディック選手権など国際大会も毎年開き、階級別の王者を認定してきた。2000年に入ると、念願の使用に耐えうるオープンフィンガーグローブ=スレイヤー・グローブも完成、寝技での打撃は禁止のままだが、スタンドの攻防が掌底から同グローブ着用の拳を使った攻撃に変化した。

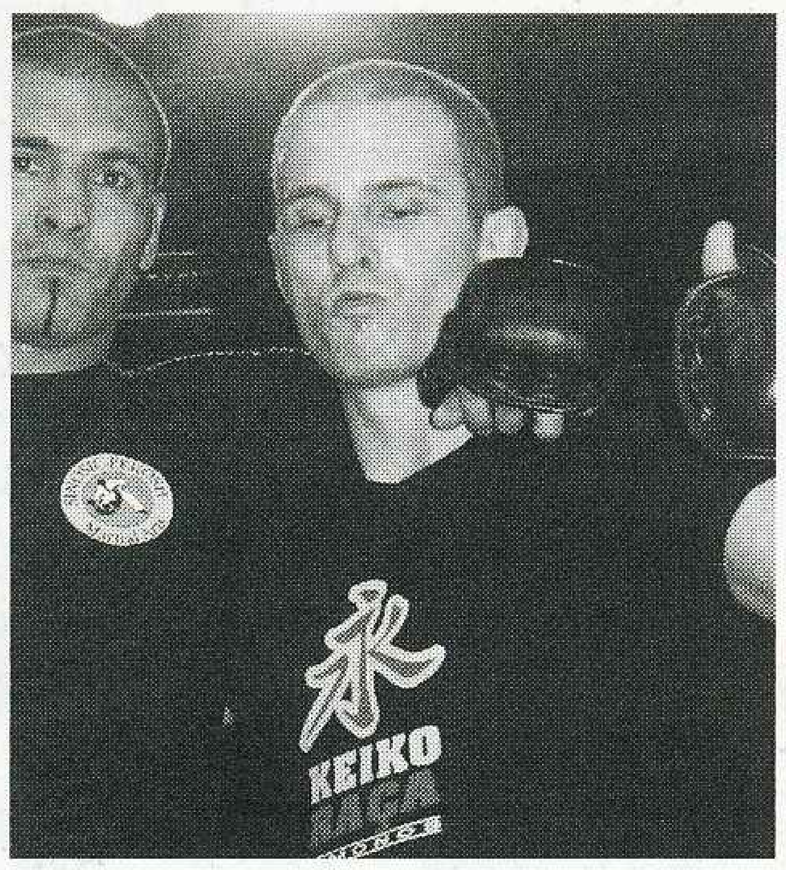
技術体系が完成し、選手のレベルが上がってくるとワレンは、次にシュートファイティング・ルールと、ムエタイ、サブミッション・レスリング、トラディショナル柔術などの混合コンペティション「ファイターズ・エクストリーム」というイベントを開催。自らもエルビス・シノシックやヴァーノン・ホワイトら世界の強豪と対戦している。

充実したアマチュア活動に加え、プロとして戦う場を作るなど、ケース・バイ・ケースで選手に試合を提供してきたシューターズ。トーマス・ヒッテン、ラーシュ・ビサンド、ダニエル・ベリマンなど軽量級から重量級の王者クラスが、欧州で行なわれているMMA（パウンドのある試合）に興味を持ち出場するようになってくると、ついに2003年12月にヨーロピアン・バーリトゥード（EVT）を主催した。

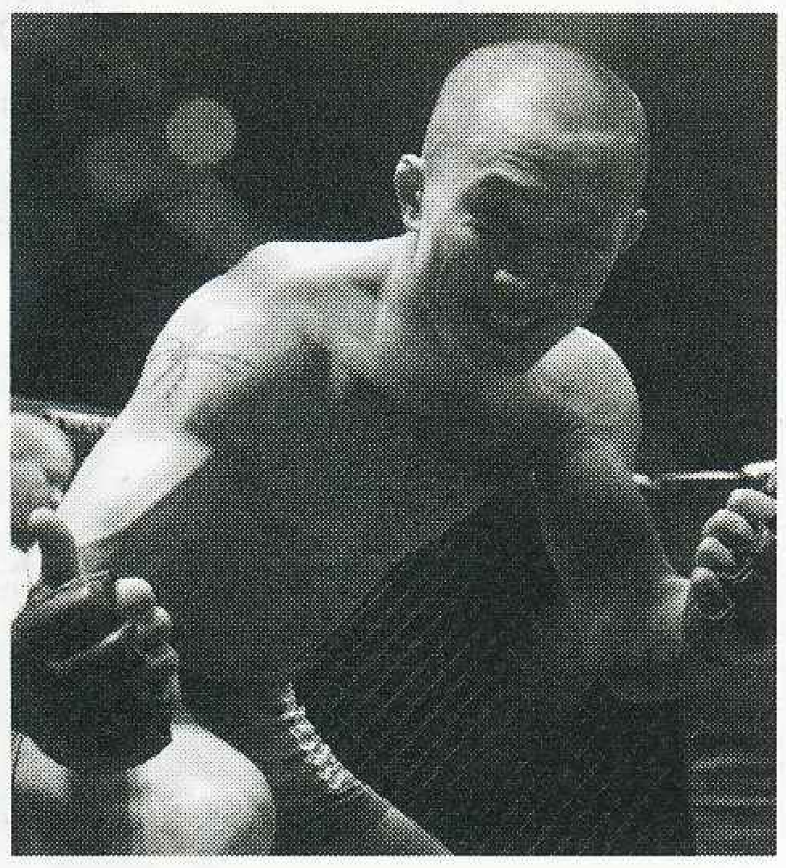
デンマーク、ストックホルムと順調に大会開催をこなすEVTは、北欧で初めてケージを使用した大会で、北米からガイ・メッツァーや欧州各国からも当地のトップ出場選手を招聘しイベントとしても成功を収めている。

今や30名を越えるプロ選手を抱えたシューターズでは、アマチュア時代に当然のように顔を合わした同門対決をEVTで廃し、シューターズ勢がチームとして外敵を迎え撃つ興行スタイルも成立させた。

一歩一歩、基礎作りに時間を費やし、ゆっくりと進歩してきたシューターズ。ここにきてパウンドを解禁したことにより、今後シャープな打撃、スピーディな寝技＆サブミッションを持つ彼らの名が、世界のMMAシーンで頻繁に聞かれることになるだろう。



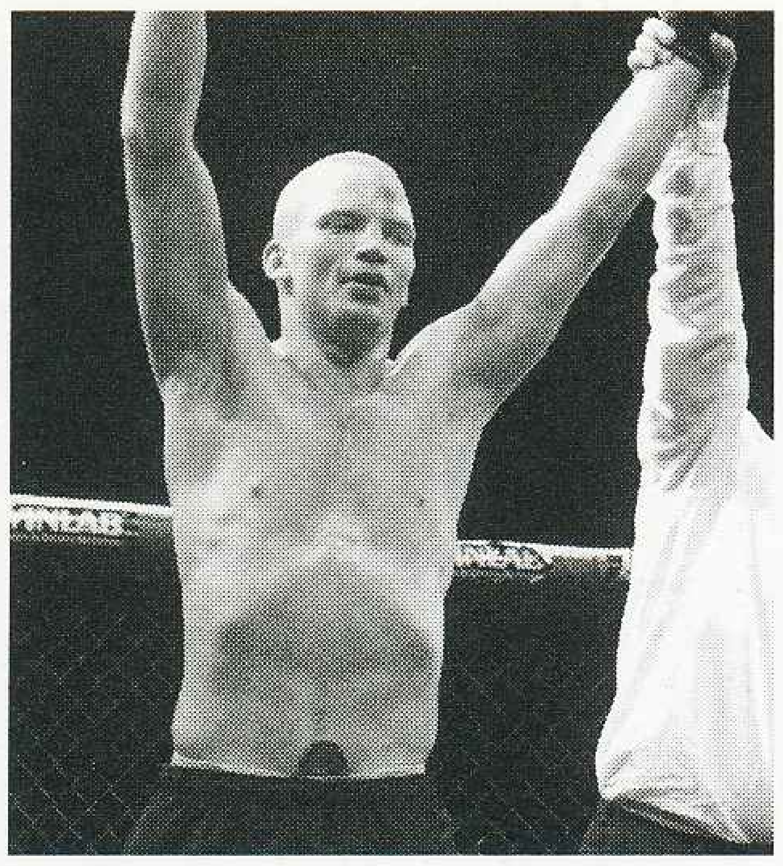
アウグスト・ワレン（ルプス／スウェーデン）
シューターズの総帥。パウンド導入以降はまだリングに上がっていない。



トーマス・ヒッテン（オオカミ／ノルウェイ）
軽量級のテクニシャン。プロ修斗に来日経験もある韓国系ノルウェイ人。



ピエール・ギレット（ツナミ／米国）
英国在住の米国人。英国のMMA大会アルティメット・コンバットで活躍中。



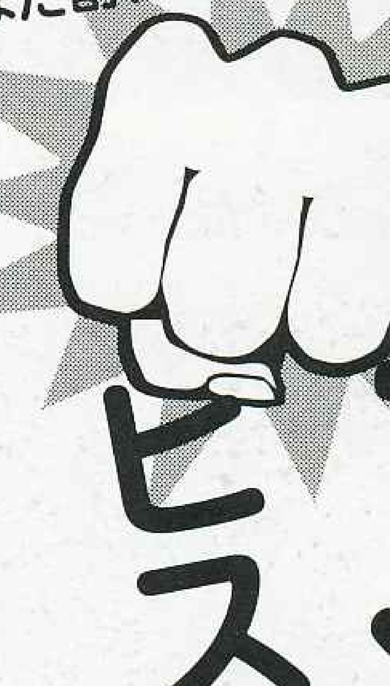
マーティン・カンプマン（KFT／デンマーク）
鋭い打撃と容赦ないパウンドで実力急上昇中。MMA戦績は4戦4勝。

女子格闘技関連年表

日付・会場	出来事
95・4・30 後楽園ホール	前年の初興行に続き、全日本キックで第2回女子キック単独興行「闘志端麗」開催
96・7・7 東京ベイNKホール	バーリトゥード・ジャパン'96で、堀田祐美子vsマーゴット・ネーホフトの女子ワンマッチが行なわれる
96・7・28 クラブチッタ川崎	第3回全日本アマ修斗選手権で、4名参加で修斗初の女子公式戦が行なわれる
96・11・17 有明コロシアム	U-JAPANで、高橋洋子vsビッキー・レビーの女子ワンマッチが行なわれる
97・12・8 名古屋国際会議場	CMAオクタゴンチャレンジで、女子3試合が行なわれる
98・6・13 後楽園ホール	吉本女子プロレスJ'dの格闘技戦で藪下めぐみと中西百重が対戦。60分ドローに
98・12・18 横浜文化体育館	女子プロレス・アルシオンで「女子格闘技の祭典」と題し、フリーファイト2試合のほか、ブラジリアン柔術特別試合、女子キックワンマッチが行なわれる
98・5・31 北沢タウンホール	日本女子プロボクシング大会旗揚げ
00・9・15 オーストラリア	シドニーオリンピック開催。女子柔道48kg級で田村亮子が金メダル、テコンドー女子67kg級で岡本依子が銅メダルを獲得
01・7・27 国立代々木体育館第二競技場	全日本女子プロレスで、WWWAシングル王者(当時)伊藤薫がエリン・トーヒルとVT戦
01・9・19 スイス・ローザンヌ	国際オリンピック協会(IOC)の理事会で、女子レスリングの五輪正式種目が決定

まだ続く?
まだ割れる!?

女子総合ヒストリー



95・7・18 女子プロレスLLPWで、L1開催(駒沢公園オリンピック体育館)

L-1

94年のヒクソン初来日で、にわかに勃興した総合ブーム。これにいち早く飛びついたのが、"女子プロ界最強の男"神取忍を擁する女子プロレス団体LLPW。世界初の女子版アルティメット大会と銘打ち、8人参加のワンデートーナメント「L―1」を開催した。目つき、急所攻撃以外何でもありの過激ルールだったため、堀田祐美子の頭突きで遠藤美月の顔面が変形する凄惨なシーンも。大会は、神取から一本勝ちを奪った巨漢のロシア柔道家・グンダレンコの優勝に終わったが、興行的には赤字だった。

96・8・12 全日本女子プロレスで、U☆TOPトーナメント開催(日本武道館)

98・10・10 L―1リベンジ開催(両国国技館)
神取がグンダレンコへのリベンジに挑んだほか、堀田、飛鳥、八木淳子らが参戦

00・11・22 L―12000開催(国立代々木競技場第二体育館)神取vs堀田、久保田有希vsクーネンなどが行なわれる。来場したモハメド・アリの娘、レイラに、神取が対戦を要求

00・12・5 ReMix開催(日本武道館)

ReMix



プロレスの運営に携わっていた篠泰樹氏がプロデュースした、初の本格的女子総合格闘技大会。L―1などで行なわれた無謀なルールを整備し、グラウンドの制限時間20秒、頭突き・パウンド禁止とし、凄惨なシーンの排除に努めた。戦前はタレント・桜庭あつこの格闘技初挑戦で話題を集めたが、フタを開ければ12名参加のトーナメントでクオリティーの高い試合が続出。中でも94キロの体重差を覆し、巨漢・グンダレンコを下した藪下めぐみは、一夜にして女子総合のヒロインとなった。その藪下を下したマーロス・クーネンが優勝。女子総合の魅力を初めて伝えた大会といえるだろう

00・12・17 SMACK GIRL旗揚げ(後楽園ホール)

U★TOPトーナメント

全日本女子プロレスで2日間にわたり行なわれた女子プロレスオールスター戦の中に、8名参加の総合トーナメント「U☆TOP」が組み込まれた。ロジーナ・イリーナ、イルマ・ヘルホーフ、マーゴット・ネーホフトら、未知の強豪の発掘に貢献した大会。ルール設定やレフェリーを修斗コミッションが務めたことも興味深い。また堀田祐美子、ライオネス飛鳥など、くすぶるベテランレスラーに新境地開拓のチャンスも提供した。トーナメントを制したのは、ロシアの柔道家・ロジーナ。

巷で「女子総合格闘技は、まだ始まったばかり」というフレーズをよく聞くが、その萌芽までさかのぼれば、実は10年近い歴史がある。そこで、女子格闘技全般の流れも参考にしつつ、女子総合の歩みを改めて検証してみよう

松本幸代=文
text by Yukiyo Matsumoto

女子総合の流れを時系列で並べた表の中で、現在の女子総合のポジションは短期間で急伸張しているようにも思える。でも、もうちょっとブレイクしてもいいんじゃない? という停滞感も感じさせる微妙なポジションに至ったエポックメーキングな事件は、3つに絞られる。

まずは、なんといっても「RiMix」開催だ。これ以前の女子総合大会は、女子プロレス団体主催で行なわれたため、女子プロの派手な試合演出と比較され"女子総合=地味で怖い"という印象を与えるにとどまっていた。

「RiMix」では、グラウンド20秒ルールを最大限に活かした藪下めぐみが、スピーディーな試合を繰り広げ、これまでのイメージを一新。また優勝したのが巨漢ファイターではなく、テクニックとビジュアルを兼ね備えたマーロス・クーネンだったこともあり、女子総合が強さも美しさもアピールできる優良ソフトであることが、一夜にして証明されたのである。

2つ目のエポックメーキングは、「SMACK GIRL」の旗揚げだ。「RiMix」が開催されたとはいえ、まだまだ未開拓の分野だっただけに、月イチ開催を強行したのは無謀以外の何者でもない。

だがこの結果、柔道、サンボ、空手など腕に覚えのある者も、格闘技経験ゼロの女のコも、とりあえず闘う場を確保された。「女子格闘技といえば女子プロレスラーの度胸試しの場」という固定観念が短期間で払拭され、純・女子総合格闘家を誕生させた点で、スマック旗揚げの意味は大きい。

そして3つ目は「AXの旗揚げ」だが、この事件は功罪半ばする結果を招いている。スマック旗揚げ1年足らずでの分裂は、見る側に混乱を与えてしまった。「たら・れば」の話をするのは無意味だが、もしスマックの一組織時代が続いていたら、エース・星野育蒔を巡り、辻結花、藤井惠、そしてキック界からWINDY智美、ジェット・イズミ、NORIKOなどなど、ミドル級の一大戦国時代という分かりやすい図式が早々と提示でき、女子総合が一気にブレイクした可能性は大きい。

02・2・28 北沢タウンホール	修斗で国内初の女子公式戦として、星野育蒔 vs 尾上佳子戦が行なわれる
02・10・14 駒沢公園オリンピック体育館	藤井惠プロデュースによる女子だけのアマチュア・グラップリング大会「GFC」開催
02・12・18 国立代々木体育館第二競技場	女子ボクシング大会で、ライカがシャロン・アニオスを下し、WIBA世界フェザー級王座を奪取
03・1・26 北沢タウンホール	女子立ち技格闘技大会「Girls SHOCK」旗揚げ
03・2・25 ディファ有明	TBS『サイボーグ魂』のコーナー企画として、女子総合格闘技大会開催
03・3・29 長野県白馬村ウイング21	禅道会所属選手を中心とした女子総合格闘技大会「ARCADIA」開催
03・5・11 横浜アリーナ	全日本女子プロレス35周年記念大会で、藤井巳幸 vs エリカ・モントーヤによる格闘技戦が行なわれる
03・5・11 岐阜県・で愛ドーム	現新極真会主催により、フルコンタクト空手史上初の無差別の女子世界大会が行なわれる
03・7・13 グランキューブ大阪	DEEPで、辻結花 vs アンナ・ミッシエル・ダンテスの女子ワンマッチが行なわれる
03・9・1 北沢タウンホール	初の女子プロ柔術大会「Gi-Feminino」開催
03・9・14 アメリカ・ニューヨーク	レスリング世界選手権で、女子が5階級で金メダルを獲得。また4階級のアテネ五輪出場資格を獲得
03・12・26 タイ・ランシット	女子ムエタイ大会で、渡邊久江とNORIKOがインターナショナル王座を奪取
04・5・7 ディファ有明	TBS『黄金筋肉』主催による「女子総合格闘技 最強女王決定トーナメント」が開催される

00・12・17 SMACK GIRL旗揚げ（後楽園ホール）

01・5・3 ReMix第2回大会開催
高橋 vs クーネン、八木 vs グンダレンコ、薮下 vs トーヒルはすべて日本選手が敗れた

01・5・24 SMACK GIRLが月イチ開催をスタート（clubATOM）
日本人選手育成を目的に、SMACK GIRLが本格スタートした。星野育蒔が巨漢の元女子プロレスラー鳥巣朱美に快勝し、一気にブレイク

01・10・31 AX旗揚げ（北沢タウンホール）…活動休止

03・5・22 GALS（ギャルズ）旗揚げ（北沢タウンホール）
柔術やキックのワンマッチも取り入れ女子格闘技の博覧会を目指したが、同年8月30日の第2回大会を最後に活動休止

04・2・8 LOVE IMPACT旗揚げ（ディファ有明）

04・4・18 CROSS SECTION旗揚げ

04・11月中旬〜下旬 G—SHOOTO JAPAN旗揚げ

SMACK GIRL




Re Mixの妹分的な扱いでスタートを切ったのが、現在も続くSMAK GIRLだ。当初は「渋谷系女子格闘技」のコンセプトで渋谷のクラブを舞台に開催。しなしさとこ、金子真理、星野育蒔ら後のキーパーソンが、ここで経験を積んでいる。02年からは舞台をディファ有明や六本木ヴェルファーレに移し定期開催を継続。02年12月にはライト級でしなしさとこ、ミドル級で辻結花、2人の王者が誕生した。当初はエンターテイメント路線を打ち出していたが、03年前後からグラップリングや柔術トーナメント、新人育成のためのアマチュア大会などを積極的に開催し、女子総合の底辺拡大を目指している。

AX



スマックのルールディレクターやレフェリーを務めた木村浩一郎プロデューサーが、より格闘技色の強い大会を目指し旗揚げ。人気急上昇中の"天然格闘少女"星野育撤をエースに、第2回大会からは後楽園ホールに進出した。第4回以降、スマックから継承していたグラウンド30秒ルールを「世界のすう勢として前時代的」と排除。通常ルールのほか、出場選手によりストライキングやグラップリングルールなど、細かいルール設定にこだわりを見せた。星野vs辻、星野vsWINDY智美、藤井惠vsジェット・イズミなど質の高いカードを提供したが、興行的には苦戦を強いられ、02年7月26日の第5回を最後に、活動を休止している。

LOVE IMPACT




選手の安全面、健康管理の徹底、また金銭面やメディア露出など、選手にとって魅力的な場を提供することを目指し、スマックを離脱した芸能事務所の柴田賢一郎氏を代表に旗揚げ。ルールディレクターとして、スマック元レフェリーの市瀬猛氏、スーパーバイザーとしてDEEP佐伯繁代表が運営陣に名を連ねる。主要選手はスマック・ライト級王者・しなしさとこのほか、石原美和子、金子真理ら禅道会勢。グラウンド無制限の総合ルールのほか、ストライキングルール、空手ワンマッチも取り入れている変則マッチメイク。今後は芸能事務所の強みから、メディアへの積極進出を狙う。

CROSS SECTION




「格闘技を熟知しないスタッフにより運営され」たり、「選手の管理や資金的な問題を生むイベントすら開催されて」いる現状の女子格闘技界に「楔を打ち込む」べく、GCMがスタートさせた大会。グラウンドの制限時間はなし。これまであらゆる大会に女子選手を派遣し、旗揚げ後もスマックとは選手の提供を通じて交流があることから、堅実な選手育成と高レベルなマッチメイクが期待される。「DEMOLION」や「CONTENDERS」で培った運営ノウハウは最大の強みだ。

G-SHOOTO JAPAN



女子修斗普及を願う若林太郎氏に、AX元プロデューサー・木村浩一郎氏が共鳴、協会常任理事会の承認を得て、正式に女子修斗団体「G-SHOOTO JAPAN」の旗揚げが決定した。女子独自の競技システムとして、プロとアマの間にもう一段階ステップアップのカテゴリーを作り、女子選手に明確な目標設定を提供する予定だ。全国展開するイベントスペース・Zepp Tokyoと提携しながら、関東地区に偏りがちな女子大会開催を各地区に拡大し、オーディションなども開きながら、じっくりと新エース発掘を目指す

ただ、星野を失ったスマックが、しなしさとこや渡邊久江らをメイン級に抜擢し、その後の活躍を促したこと、またAX活動休止後、"女子総合の老舗"の自負を強め、アマや柔術大会などを積極的に開催しながら底辺拡大に努めていることは、間接的ながらもAX旗揚げが影響している。

04年に入るやプロモーション組織が次々に誕生し、まさにカオスの様相を呈する女子総合界だが、ここに来て、また新たな団体設立のニュースが飛び込んできた。それが「G—SHOOTO JAPAN」。修斗協会常任理事会で正式に承認され、今秋の旗揚げが決定している。

この団体の最大の強みは、アマ修斗大会で推し進めた地方開催のノウハウを、そのまま活かせること。東京に一極集中している女子総合大会を全国に分散させ、隠れた逸材を発掘するプランも練っているという。

大会だけが増えていく現状で、選手層の薄さが最大の懸案材料だっただけに、粘り強く浸透させていけば、真の意味での女子総合普及と、その先のブレイクの起爆剤となるかもしれない。まだ日が浅いとはいえ"女子総合のカオス"には、そろそろ終止符が打たれるべきである。

女子修斗の新団体について、設立を進める

という皮肉が込められたものだった。つま

たら、総合をやめようと思っていたから」

続けていくことは変わらないし、いつでも

A

co.jp

羽柴まゆみ



Publicity stunt

Fighting is beautiful.

Big turnover was carried out.

私、本気です。

**「ビジュアル先行」「売名行為」。
03年2月の総合格闘技戦デビュー以来、羽柴まゆみの行くところ、
しつこいほどにこれらの言葉がついて回る。
元グラビア・アイドルから女子格闘家への転身を図る羽柴の
格闘技への“本気度”は、一体どれほどのものだろう――**

松本幸代＝文
text by Yukiyo Matsumoto
丹羽納子＝撮影
photo by Noriko Niwa

女子修斗の新団体について、設立を進める若林太郎氏にインタビューした時のことだ。「これまでの女子格闘技は、見る側のことを考えすぎた」という内容に話が及ぶと、若林氏はため息をつきながら、こんな持論を展開してくれた。

「マッチメークを組む人は、どうしても『その子カワイイの？』という目で見てしまう。マスコミもそうですよ。それは絶対必要条件じゃない、絶対ダメです。それじゃダメ、強くなると美しくなるんですよ。強くなると美しくなるんですよ。桜庭和志は格好よくはないけど、でも、カッコイイじゃないですか」

格闘家はリングの上で強さ（勝ち負けの強さであったり、ハートの強さであったり）を証明していくごとに独特のオーラを身にまとい、男、女の別なく美しくなっていく。

若林氏の言葉に「確かにその通りだ」と相槌を打ちながら、筆者の頭の中にふと、こんな言葉が浮かんだ。

「強くなった者は自然と美しさを身につけていくけど、反対に、美しい者が強さを身につけていくのは、けっこうイバラの道かもしれないな」

そしてこの言葉とともに、すぐさまイメージされた像が羽柴まゆみだった。抜群のルックス、華奢な体、抜けるように白い肌。格闘技とは相容れない、だが世間がほうってはおかないビジュアルで、今もっとも注目を集めている女子総合格闘家だ。

総合デビューは03年2月。TBS『サイボーグ魂』の番組企画で行なわれた女子総合大会のワンマッチに出場したが、この時は「グラビア・アイドルが顔を殴られる、殴る」「グラビア・アイドルなのに頑張っている」というレベルの話題にとどまった。

羽柴がジョシカク・ファンに強烈な印象を与えたのが、プロデビューとなった同年6月のSMACKGIRLだ。第0試合としてナナチャンチンとの対戦が組まれたのだが、対戦カードにつけられたタイトルは「負けたら即引退スペシャル？」。14戦全敗と崖っぷちのナナチャンチンに「グラビア・アイドルにまで負けたら目も当てられないよ」という皮肉が込められたものだった。つまり羽柴は、ナナチャンチン初勝利のために仕向けられた、うってつけの相手とみなされていたのだ。

ところが試合は、わずか58秒で決着がついてしまう。羽柴のKO勝ちだった。それもただのKOではない。ナナチャンチンを強引に倒すや、その腹を思いきり踏みつけまくり、戦意を喪失させたのである。

この一戦で感じた恐怖を、ナナチャンチンは次のように振り返っている。

「入場の時なんてセーラー服で出てくるし、余裕で勝てる、イケるって思ってたんだけど、でもリングに上がったら、キャラが急に変わってて『これ、ケンカ？』って。あとから聞いた話だと、彼女も格闘技を知らないから、反則にならないギリギリのところで勝とうっていう作戦だったみたいで」

いくらメイクをしても、美しさには限界が…でも強くなっていくのは、限りがないんです。

たしかにこの作戦は、まだほとんど技を持たない羽柴のために、トレーナーがルール規定のすき間をついて考案したものだった。だが筆者が驚かされたのは、踏みつけの奇襲作戦ではない。試合で発していた彼女の気迫であり、覚悟だった。

様々なジャンルの女子格闘技を取材しているが、格闘技を取ったら自分には何も残らないというほどの覚悟を、リングの上で見せてくれる選手は極めて少ない。実際は多くの選手が覚悟を抱いているとは思うのだが、それを闘いで"表現"するにはある種の"才能"が必要だ。グラビア・アイドルとだけ認識していた羽柴に、その才能を感じてしまったことに、心底驚いた。

この時の心境を聞いてみると、やはり羽柴は相当の覚悟を持って、あの一戦に臨んでいた。

「負けたら『最弱』って決めつけられてしまうから、とにかく勝ちたかった。踏んでいる時は『やらなきゃ殺される！』じゃないですけど、ただ一所懸命で、戸惑ってるヒマなんてなかった。それにこの試合に負けたら、総合をやめようと思っていたから」

総合格闘技に取り組み始めたものの、グラビア・アイドルからの転身とあって、彼女はアイドル時代には思いもよらなかった中傷を浴び続けていた。たとえば「どうせ話題づくりだろ」、たとえば「顔だけだろ」、さらには「グラビア・アイドルなんて言ってるけど、他の子のほうがカワイイじゃん」。

羽柴まゆみは十分に傷つき、傷つくことに疲れ果てていた。そんな精神状態の中でもぎ取った勝利だからこそ、羽柴にとってこの一戦の意味は大きかった。

04年7月末現在、戦績は7戦2勝5敗。技術差もあるが、152cm、40kgの小柄な体格に見合う対戦相手がなかなか見つからず、時に体重差のある選手に遊ばれてしまうこともある。だが「今回はローキック」「今回はタックル」と、一戦一戦テーマを決めて臨む試合では、徐々にではあるが、着実に成長の跡もうかがわせている。

04年5月には、ミドル級国内最強といわれる辻結花へもチャレンジしたが、1ラウンドにヒザ十字で玉砕。しかし羽柴戦を終えた辻は「羽柴さん、根性がありますよね。パンチでダウンさせた時、もう立ってこないと思ったのに立ってきたし、最後まで目が死んでなかったですからね」。

それでも「人気が出て芸能活動が忙しくなったら、いつの間にか格闘技界からフェードアウトしてしまうんじゃないの？」という周囲の声は相変わらずだ。

「いくら何を言われても、自分が注目されている証拠だから、気になりません」と答えていた羽柴だが、半ば試すように、あえて同じ質問をぶつけてみると、顔が一瞬きつくなり、声のトーンも下がった。

「フェードアウトなんて全然。BBDoll[※]の新しい道場もできたので、そこで練習を続けていくことは変わらないし、いつでも試合に出られるように準備しておきたいです。総合格闘技の選手なので」

「総合格闘技の選手」という部分に、彼女は一層の力を込めた。「自信があるんですね」と言うと「はい。最初は言えなかったんですけど、3月に同じ体格の選手と闘って判定で勝てたことで、初めてほかの女子格闘家の方に交じってスタートラインに立てた気がしたんです。まだ一番底辺なんですけどね」。少し照れながらも、迷いのない調子で、そう答えた。

ビジュアルありきも自分の大切なキャラクター。「ますますビジュアルを磨いていきたいし、技のほうも一緒に磨いていきたい」と、他人の目を気にせず言えるようにもなった。それでも美しさと強さ、どちらかを選べと言われたら、今は間違いなく「強さ」と答えられる。

「メイクをしてキレイになっていくのも、女の子的には凄く嬉しいんですけど、自分の顔ってやっぱり限界がある（笑）。美しさっていうのは、生きていくうちに自分の中から出てくるものもあるだろうし。でも格闘技をやってうまくなったり、強くなっていくのは、実感があるじゃないですか。上は限りなく。それが今、楽しいんです」



Mayumi Hashiba
はしば・まゆみ
1982年10月21日、香川県出身
身長152cm、体重40kg
BBDoll所属
総合格闘技戦績（04年7月末現在）7戦2勝5敗
HPアドレス：http://kittyfilms.fmp.or.jp/mayumi/

※BBDoll道場…世田谷区北沢1−20−19クレセントビルB1F　連絡先：bbdollism@naver.co.jp

ナナチャンチン



ワタシが引退する理由

連戦連敗のダメダメファイターとしてのみ、その存在が認知されているナナチャンチンだが、実はあの星野育蒔と並び、女子総合大会「SMACK GIRL」の創成期メンバーだったことは、意外に知られていない。20戦20敗を機に引退を決意したナナチャンチンが、女子総合の歩みと、その渦中にあった自身の“役割”について振り返る

松本幸代＝文
text by Yukiyo Matsumoto

今泉邦良＝撮影
photo by Kuniyoshi Imaizumi

Nanachanchin
ナナチャンチン
1978年6月25日、静岡県静岡市出身
身長145cm、体重45kg
総合格闘技戦績20戦20敗
所属フリー

引退の理由を尋ねると「20戦を区切りに、1回自分をリセットしなきゃいけないかなと思って」と、ナナチャンチンは答えた。「リセット」という言葉をナナチャンチンから聞くと「それはそうだろうな」と、素直に納得してしまう。01年4月のデビューから、04年6月の〝負けたら即引退マッチ“であっさり秒殺負けするまで、実に20戦20敗。しかも判定は1回きり、残りはすべて一本もしくはKO負けで、秒殺負けも6回を数える。この惨憺たる戦績をリセットしたい気持ちは痛いほど分かる。

と思ったら、「リセット」にはもう少し別の意味が含まれているという。その意味を知るには、彼女の格闘家人生を改めて振り返ってみる必要があるかもしれない。

「どうしても女子プロレスラーになりたくて、中学の頃、お母さんに電話で問い合わせまでしてもらったけど、背が小さいからダメでした」。当時も今も147cm、45kg。格闘技をやるにはあまりに不利な体格だ。

それでもリングに上がるという夢を捨て切れず、インディープロレスの覆面マネジャーを経て、探し当てた先が旗揚げ目前の女子総合大会「SMACK GIRL」だった。選手といえば、現役および元女子プロレスラーがほとんどという中で、シロウトの女の子第一号“として、いの一番に名乗りを上げたのだった。

プロデビューの相手は「柔道をやってる人って聞いてたけど、顔を見た時『あ、勝てるな』と思った」。ところが試合をしてみたら、相手のものすごいミドルキックをもろに受け、泣きながら悶絶KO負け。まあ無理もない。その相手というのは、後に女子総合の初期ブームをつくる、あの星野育蒔だったのだから。

実力差も体格差もある星野とナナチャンチンが、当たり前のように試合をしていた事実だけでも、女子総合創成期の混沌が伝わってくるではないか。ともかく、こうして〝北の最小兵器“ナナチャンチンの連敗ロードはスタートを切る。

「渋谷のクラブで月1回出てた頃に、お客さんに言われたんですよ。『ナナチャンチン、もうオファーないと思うけど、頑張ってね』って」。めげることはなかった。リングに上がれるだけでも嬉しかったし、いつかは勝てるだろうと思っていたからだ。

そのお客の予想に反して、デビューの翌年になってもオファーは続いた。

「なんでお呼びがかかるかっていうと、『デビュー戦はナナチャンチンと当ててほしい』っていう選手が、いっぱい出てきちゃったんですよ。屈辱？ 全然。だってあたしの胸を借りたいわけですからね。むしろ誇りに思っちゃった。それが勘違いの第一歩だったんですけど（苦笑）」

02年には10大会に出場し、負けっぷりの見事さと、映像を駆使した「ナナチャンチン劇場」で、スマックに欠かせないキャラとなったナナチャンチンだが、03年になると参戦回数はわずか3回と激減してしまう。

その理由を問うと、ナナチャンチンは自身のケガによる欠場とともに、女子総合そのものの変化をあげた。

「前は女子の人数が少なかったし、1、2回闘うと消えていく人もいた。そういう中で、自分はやられ役っていうか…みんなが出やすい場をつくるっていう役割だったと思うんですよ。でも今はやる人がいっぱい出てきて、しかも強くて、その役ももういらないという目で見られてるかもしれない」

スマック以外の大会にもマメに足を運ぶ彼女は、そのたびに「私って必要なのかな、必要じゃないのかな」と自問自答を繰り返している。人からあからさまに「不要」の態度を示された時は「悔しくて、目が開かなくなるぐらい泣いちゃいました」。

そんな中途半端に揺れる自分と決別するために、彼女は「リセット」を選んだ。でも負けたままの引退は悔しくない？

「うん、それはやっぱり悔しい。総合にはけじめをつけたけど、今、柔術をやってるし、『見てろよ、柔術で頑張ってやる！』っていう気持ちはありますね」

その悔しさをもっと早く出せばよかったのに…という感想はグッと飲み込んで、とにかく今は、ナナチャンチンのへこまない格闘ロード第二章にエールを送りたい。

女子格闘技記事を深読みしたら…あるある！

あなたもフェミコードにひっかかっている？



性差万別

「リングの上はジェンダーフリー。オレ（だけ）は"ジョシカク"を男子と同じ目線で見ているよ」と豪語する男性記者は多い。が！記事の端々に出ちゃうんだな、「でもやっぱ、オンナのコはカワイくなきゃなぁ」という永遠の夢見るユメオ君や「男の舞台にオンナは上がってくんな！」的恫喝男の顔がね。そんな記事を集めて、ちょっとだけ突っ込んでみました。

姉崎美香＝文
text by Mika Anezaki

いきなりでアレですが、この本の第1弾みたいな感じで発売された『柔術王』で「それってちょっとどうなのよ」的な一文を発見しちゃいました。

〈可愛い娘が、柔術なんていう得体の知れない格闘技にはまり、生傷が耐えない。（中略）「私、柔術と入籍しました」なんて台詞を吐く。あなたが女の子の親なら、どんな気持ちになるだろうか〉難易度★★

女子柔術家・鈴木尚美の熱い思いを、高島学氏がしたためたコラムの冒頭文です。総合や柔術に女性がまだまだ少なかった時代の、鈴木選手の奮闘がリアルに描かれていて読み応え十分。でもなんでしょっぱなに「女の子の親」を持ち出すんだろうなぁ。確かに親は心配してるだろうけど…今更こういう切り口もないんじゃない？　女子格闘家のお母さんと話したりするけど、心配しつつも「私が好きなことができなかった分、とことんやらせたい」という人も多いんだよね。コラムの締めも、今の生き方に満足しているという鈴木選手のコメントを受けて**〈親御さんも何の心配もなく、一歩下がった位置から、彼女の姿を眺めることができるに違いない〉難易度★★**

男子選手が「一生を格闘技に捧げる」というと「えらい！　それでこそ男だ！」となるのに、女が同じ台詞を吐くと、途端に「親は心配しない？　結婚は？」と可哀想な視線で見られてしまう。この大きなお世話的発想は、当分なくならないんだろうなぁ。女のほうはそんなこと百も承知で、とっくに腹を括ってるのに。

でもこんなこと書いちゃうと、恫喝男系から「子供もいない女だから、親の気持ちが分からんのじゃ！」とケンモホロロに言われちゃうことは間違いない…のじゃ。

ちょっと悲しくなったので、次は明るい話題でいきましょー。取り上げるのは格闘技雑誌の老舗『ゴング格闘技』。ワタシ的に大注目のライターさんがいるんですよ。"性差万別界のスター"安村将史氏でっす！

まずは同誌03年1月号で、女子格闘家・渡邊久江を取り上げた記事。「過去の試合のビデオといまの自分を比べると、自分の成長過程も分かりますしね」との渡邊のコメントに、いたく感じ入った様子で続けた一文が**〈20歳の女性とは思えない発言。自分を知るというのは単純なことかもしれないが、案外気づかないものである〉難易度★**

う〜ん、どうでしょーっ。「20歳とは思えない」と書くだけでも、若さに対する通俗的な思い込みがあるのに「20歳の女性」と限定してしまうところに、この筆者の女に対するガッチガチの理想&思想が詰まっちゃってる。「自分を知る」という「単純なこと」に一番気づいてないのは、書いてるご本人だったりして。

安村節の白眉は、同誌04年2月号、ムエタイ界戦士・ナムワーンノーイの紹介文。16歳のタイの美少女"ナムちゃん"に、とにかくゾッコンな様子で**〈インタビューに答える時の微笑は、こちらをうっとりさせるほど愛くるしく、見とれてしまう。いかん、いかん〉難易度★**

こうなると夢見るユメオくんの勢いは止まらない。「日本でまた試合がしたい。日本のモノって可愛いものが多いから」というナムちゃんに**〈それって単なる観光じゃん、とツッコミを入れたくなる場面もあったが、可愛いから許しましょう〉難易度★**

国内外の"可愛い"女子格闘家の皆さん、安村氏には何をやっても「可愛いから許」されるようですよ！　このユメオくん全開コラムの締めくくりは、〈今度、再会するときは笑顔で迎えたい。きっとナムちゃんも『サワディーカー（こんにちは）！』と笑顔で応えてくれるはずだ〉。えっとー…たぶん、応えてくれないと思うよ！

さてお次は格闘技ライターとしてよく名前を見かける布施鋼治氏。ふだんは冷静沈着な文章とお見受けするが、こと女子格闘家がテーマとなるや、**〈蹴りあり、歌あり、笑顔あり。もうナムちゃんに首ったけ〉**（『格闘技通信No．345』）と、安村氏にはかなわないものの、微妙に磁場が狂い始める。

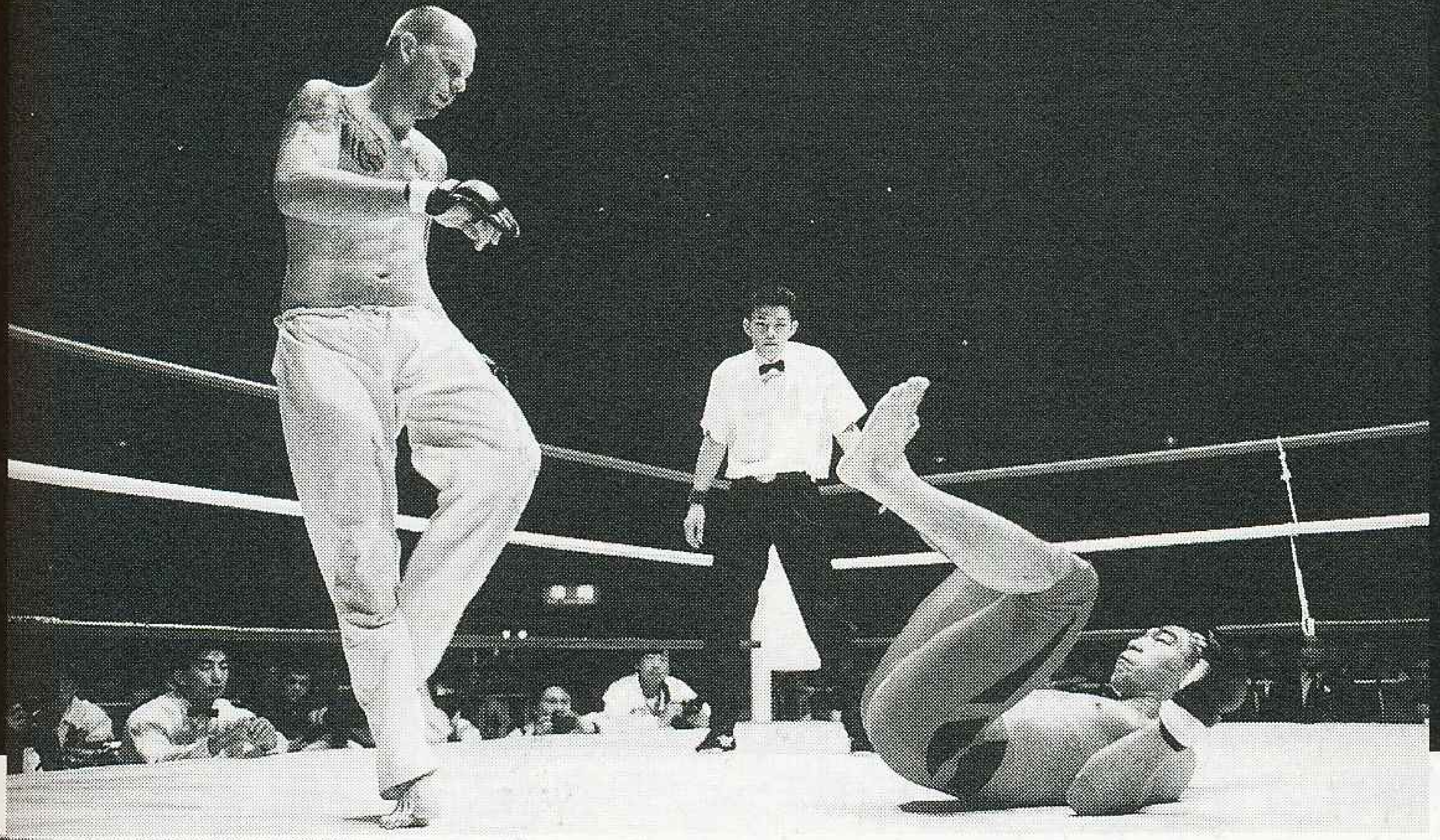
SKY PerfecTV！HPの『格闘徒然草』というコラムの中で、渡邊久江について書いたヤツなんか、オジさんモード全開ですよ！**〈渡邊の第一印象は「単なるコギャル」だった。（中略）対照的に私は人生の折り返し地点を過ぎてしまった完全なオヤジ世代〉難易度★★**

「俺はオヤジ。今どきのことは分からん」という免罪符を得た上で、"単なる"コギャルと失礼無比なご発言。よっぽどコギャルにひどい目に会ったんでしょうか…。ところが「実際に話してみたら大違い」だったらしく、〈気づけば、私は当たり前のように「久江ちゃん」と呼ぶようになっていた〉。そして布施氏はある結論にたどりつく。それは**〈渡邊は宇宙人ではない。コギャルだって、気立てのいいコはいるのだ〉難易度★★★**

そりゃあいますって！　気立てのよくないオヤジもいれば、キレやすいサマ男くん（ヨン様系のヤサおとこ）もいるようにさっ。「盛りを過ぎた（とは言ってないか）オヤジ」という立場から、今どきの女のコを読み解くっていう"狙い"は分かるんだけど、どうも「女は気立てのいいのが一番」という頑固な意思を感じてしまうんだな。

といろいろ失礼千番なことを言ってきましたが、最後に一つだけ。この本で取り上げられてる女子格闘家が、羽柴まゆみとナナチャンチンらしいじゃないですか!?「性差万別」なんてワタシに書かせといて、この本自体が、「どうせ女のコ載せるなら、カワイくて弱っぽいコのほうがいいっしょ」っていう恫喝男っぽい匂いを感じるんだけど、どうなんですかぁっ!?

★ ごくごく平均的な【夢見るユメオくん】系
★★ イマどきそれかい！の【恫喝男】系
★★★ 一番やっかいない【エセフェミ】系



Gachinko Column
[総合格闘技の現在を考える]

ガチコラ! Vol.2

中井祐樹が教えてくれた、大切なこと…

もし、名勝負の定義に「観客をリングに集中させる」という項目が、含まれているとしたら、試合中に多くの観客がトイレに行くために席を立ち、ちゃかしたようなヤジが絶えなかった中井祐樹とジェラルド・ゴルドーの一戦は、名勝負にはならないのかもしれない。

95年4月20日、日本武道館。(→日付、要チェックお願いします。)

寝技で顔面パンチが認められた試合——、その先駆けともいえる米国のUFCは、高まる関心とともに「野蛮」、「凄惨」、「非スポーツ」という轟々たる非難を浴びていた。そして、パウンド、サッカーボールキックを日本の格闘技界に持ち込んだバーリトゥード・ジャパンを観に来る観客のなかには、批判対象となる攻撃を使った過激なシーンを期待する輩も少なくなかった。なんせ、寝技になって本気で人間の顔面を殴ったり、踏みつけたりするシーンなど、そこ以外に存在しなかった時代だ。

そして、その会場には業界に入って、まだ90日ほど経過したばかりの右も左も分からないフリーライターもやってきていた。担当試合は、なし。コメント取り援助、平たく言えば先輩方が外国人のコメントを取るときに、簡単な通訳をする役目だった。右も左も分からないのは試合が始まっても同じこと。コメントを取りに行く時間より、ずっとリングを眺めている時間の方が長かった。一応はビデオ撮りのためにコメント・スペースは設けられているものの、ヒクソン以外の出場選手のコメントは、控え室で勝手気ままにきくことができる。

そんなのどかな時代でもあった。

よって先輩の記者方から、「高島、○○のところへ行くぞ」という声がかからない限り、チケットを買って会場に入ったお客さんと一緒、リング上の動向を見ているだけでいい。そして、リングに集中している先輩方からは、なかなか声は掛からない。

声もなく固唾を呑んでリング上の攻防を見つめる記者陣。トイレへ行ったり、腹ごなしをしたりする観客と対照的な姿だ。これほどまで、観客席と記者席の間に温度差を感じた大会は、10年になろうかという(長くもないが、決して短くもない)記者人生のなかで、後にも先にもバーリトゥード・ジャパン95だけだと言い切ることができる。

70kgに満たない中井が、100kgを超えるゴルドーをテイクダウンしようと、コーナーに詰めるが、ロープ掴みが許されていたルールだけに、なかなか寝技に持ち込むことができない。ストンピング、パウンドを期待する観客はブーイングを連呼し、セコンドの緊迫が伝わってくる距離にいる取材陣だけが、拳を握りしめ、リング上を凝視し続けていた。もちろん、この時、中井がたった二つしかない眼球の輝きのうち一つを失っているなんて記者陣の誰も気づいていなかった。

中井がヒールホールドでタップを奪った瞬間、駆け出し記者の左右に座っていた先輩陣は、拳を突き上げ、言葉にならない叫びを発しながら立ち上がっていた。「記者だって人間だ」中立に徹することが当然なようで、決して客観的な意見なんて持てない。なんとなく、そう感じた瞬間だった。今なら、記者っていうのは客観的に捉えようとした物事を、主観を以って伝える人種なんだよ、とひとりごちている高島学がいるに違いない。

スカパーもない、スポーツ新聞に格闘技が紹介されることなんて、考えられないこの頃、中井vsジェラルド・ゴルドーの一戦は、ごく限られた媒体によって、どのように伝えられたのか。

新米記者がお世話になっていた格通では、体重差がある戦いの危険度の高さ、レフェリングの重要性が指摘された。規制の少ないVTでさえ、ごく僅かな反則事項を守ることができない人間が存在するということ。人間のモラルに関してまで、記事は及んでいたように思う。

この一戦は、真剣に格闘技と向かい合う者に「最も大切なのは安全性」という意識を強く芽生えさせた。そして、真剣に格闘技に向かう気持ちのなかった新米記者の心の奥底で何かを揺さぶる試合になった。

ペケーニョが初めて日本にやってくる3年前だ。フロント・スリーパーは極まらないというのが業界の定説だった。にも関わらずプロレス界を背負ってでてきた人間のロープ越しのこの技が、さもヒクソンを追い込んだように、数少ない媒体のなかの多くが、そんな戯言を活字にしていた。

それらの報道に対し、顔を真っ赤にし、両足ジャンプで怒りを露にした編集者がいた。その人は、ひとしきり怒りを発散させると、僕を呼び、編集後記のページを開いて見せた。用件は、僕が書いた「悪貨は良貨を駆逐する」という一説に関して、「食べていけなくなるよ」という指導+クレームだった。

この業界で身を立てようなんて覚悟もなかった新米記者の心の奥底に、メラメラとした炎が燃え上がった瞬間だった。

あれから9年が過ぎた。ブラジリアン柔術世界大会=ムンジアルを取材するための機中で、このコラムを書いている。心の奥底にある炎は、なんとかまだ燃え続けている。ブラジルで、中井祐樹が戦う——。

2 高島 学　１９６７年兵庫県出身。９５年１月よりフリーライターに。海外取材の経験と知識では業界ナンバーワン。一時は格闘技通信とゴング格闘技の両誌で原稿を書いていた唯一のライター。

RINGS,
THOSE DAYS and NOW.........

11 May 1991 ASTRAL STEP 1st SPRIT-U

07 Dec. 1991 ASTRAL STEP FINAL BLAZE UP

29 Oct. 1992 MEGA-BATTLE TOURNAMENT' 92 1st ROUND

28 Feb. 1993 Experimentation League Round 1

28 Apr. 1995 RISING SERIES UZUKI

24 Aug. 1996 MAELSTROM 6th

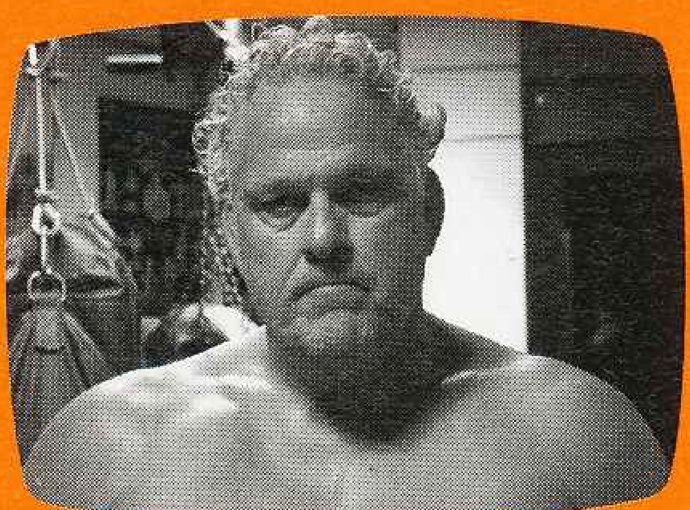
20 Jul. 1998 CAPTURED AKIRA MAEDA RINGS Last Match

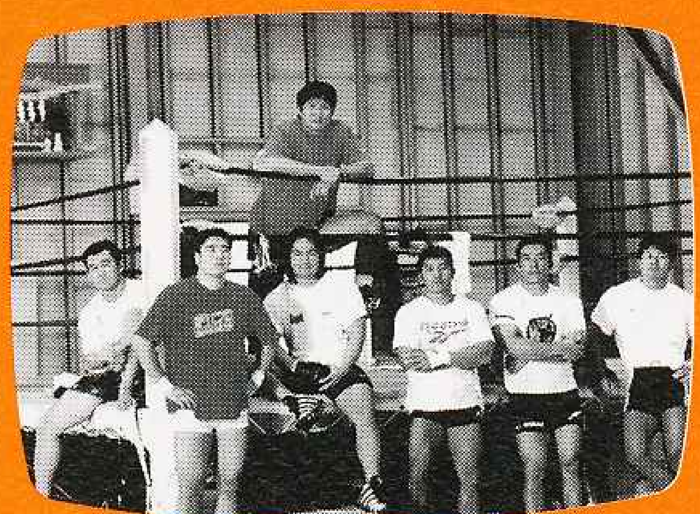
21 Feb. 1999 AKIRA MAEDA Retirement fight The Final

28 Oct. 1999 RISE 6th WORLD MEGA-BATTLE OPEN TOURNAMANT
KING of KINGS A Block

21 Sep. 2001 BATTLE GENESIS Vol.8

15 Feb. 2002 WORLD TITLE SERIES GRAND-FINAL






前田日明が作り上げたファイティング・ネットワーク——、ＲＩＮＧＳとは一体なんだったのだろうか？
活動期間10年、停止後２年半の刻を経ても、まだその答えは見つからない。
クリス・ドールマン、リトアニア、ジャパン勢の現在、そしてＺＳＴ——。
今も世界中に散らばるリングスというパズルのピースを今、改めて集めてみた。
リングスと生きたあの頃、そして今。
総合格闘技界に生きる全ての人間の中に、ＲＩＮＧＳは今も存在する。



The man has spent
long days of martialarts
And now he miss the best friend.of him

Last RINGS
クリス・ドールマン
「私は前田の連絡を待っている」

今もリングスの名をオランダに残すクリス・ドールマン。
UWFからリングスと続いた前田日明とのつながりを、一人心に留める男。
彼こそ、世界で最後のリングス構成員といえる

Text & Photo by Bunko ENDO

①今も鋭い眼光は健在、クリス・ドールマン。②オランダのグラップリング＆総合格闘技界の首領の下には、いつの時代も「明日のチャンピオンを目指す」人間が多く集う③ドルマンのジムの玄関には、当然のようにRINGS HOLLANDの看板が掲げられている。④柔道家時代のドールマン、左端が彼だ。⑤こちらはサンビスト時代。髪型、顔つきは変化してもその立派な体躯に変化はない









――リングス・ジャパンが活動停止してから、2年半が経過しました。当時、リングスに参戦していた選手は、PRIDEを初めとする総合格闘技の檜舞台で活躍し続けています。ただ、リングス・ネットワークのなかで今も名実ともに、リングスとして活動しているのはリングス・オランダだけです。リングスの活動を旗揚げから最後まで支えてきたクリス・ドールマンさんにリングス、そしてあなたの格闘技人生について、語っていただきたいと思います。

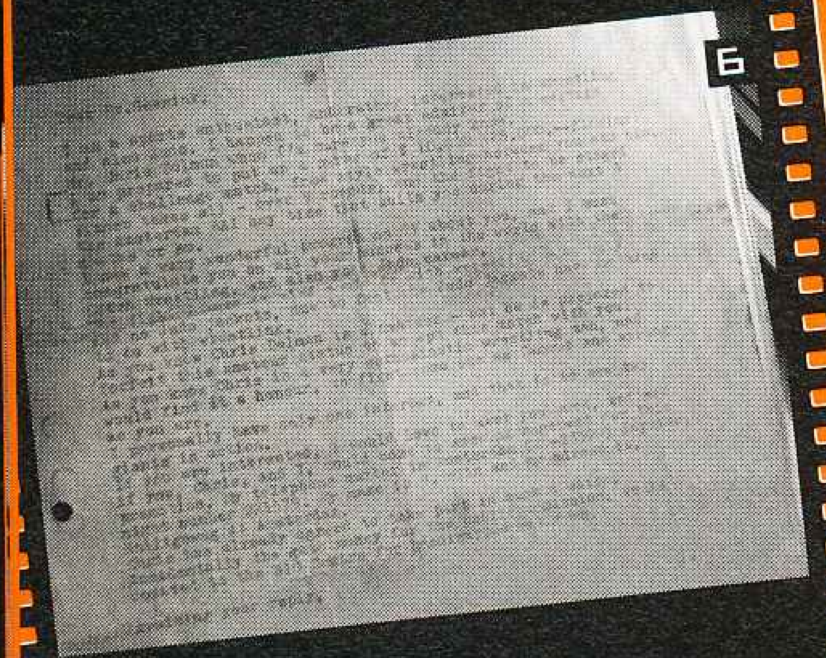
ドールマン なんでも聞いてくれ。

――日本では以前、ドールマンさんの格闘技キャリアは900戦以上という風に紹介されたことがあります。

ドールマン どうなんだろうな、その数字は？ それくらい戦っているかもしれないが分からんよ、自分でも。17歳から40歳まで柔道、サンボ、レスリングのグレコとフリーのトーナメントに出場し続けていた。グラップリングの大会は何でも参加していたんだ。ストロングマン・コンテストにも出たことがあるよ。まぁ、その900という数がどこから出たのか分からないけ

（※１）64年の東京オリンピックでは初めて競技として柔道が採用されたが、その際、重量級金メダルを獲得したのがオランダ人のアントン・ヘーシンクである。73年から全日本プロレスに参戦し活躍した。77年全日本プロレスを離れ、オランダに帰国。国際オリンピック委員会（ＩＯＣ）委員に就任。（※2）柔道のミュンヘン五輪金メダリストであり、アントニオ猪木とのプロレス試合で有名。（※3）大山倍達の内弟子であり、極真空手をオランダ～欧州に伝承した。オランダ格闘技の父と言われる人物。

「猪木に挑戦表明してくれ」と言う話だった
「リアルでやりたい」と申し入れたんだ

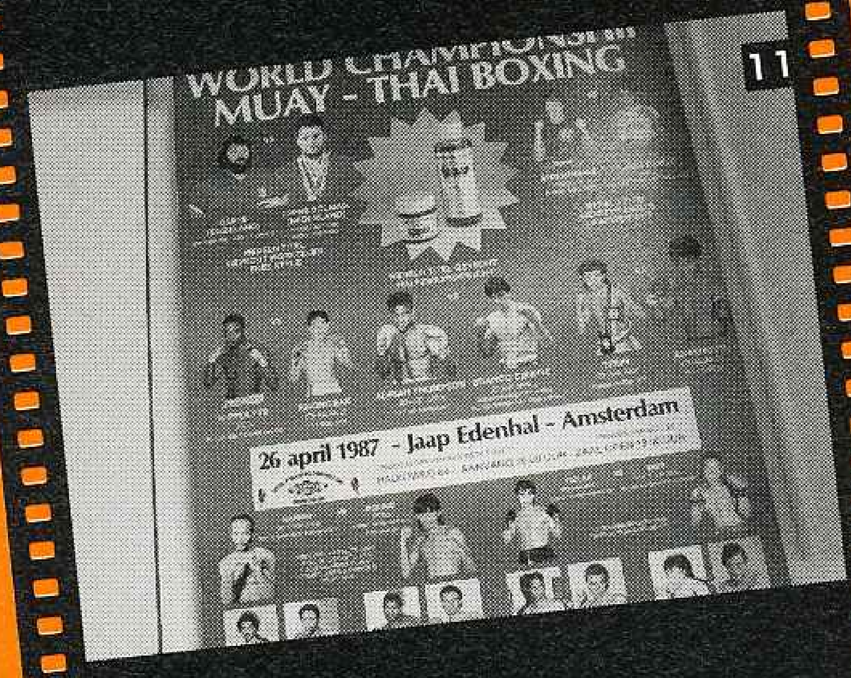












ど、多くの組み技の大会はトーナメント戦で、私が緒戦で負けるようなことはなかったから、まぁ、９００戦以上は軽く戦っているだろうな、なんせ23年間だからな。

――もともと、なぜ格闘技を始めたのでしょうか。

ドールマン　性分としか言いようがないだろうね。第二次世界大戦が終わった頃、５人兄弟の末っ子だった私は、満足いく量がない食事を兄と奪い合うようにして食べなくてはならなかった。それが大きな要因かもしれない。生きる上で強さが必要だという認識が自然と生まれ、中学生の頃から柔道や空手を学び、17歳で大会に出るようになったんだ。

――今でこそ総合格闘技は世界中で高い人気を得ていますが、当時のオランダで打撃と組み技、どちらも練習していた格闘家はいたのでしょうか？

ドールマン　いや、私だけだったな。アントン・ヘーシンク（※1）、ウィリアム・ルスカ（※2）は柔道一筋、ああ、ヤン・ブルミン（※3）は空手と柔道をやっていた。だが、格闘技の範疇に入るものは全てに手を染めていたのは私ぐらいだろう。

――打撃だけの試合は出場していませんね。

ドールマン　物事には何にでも理由がある。打撃の練習はしていたよ。今でもキック、ボクシング、空手を続けている。でも、打撃だけの試合に出られる肉体を私は持っていないんだ。19歳の時にヘーシンクと柔道の練習をしていて、腕十字で右腕を壊されてしまった。当時、すでに世界のトップだった奴は、自分に酔うというのか、偏執的な部分があって、タップしても相手がケガをするまで技を解かないんだ。数日後、練習に復帰した私の左腕も、また彼に同じように壊されてしまった。それから、私の両腕は真っ直ぐ伸びなくなってね。フックは打ててもストレートが打てないから、打撃だけの試合は出られない。しかしな、痛めた箇所は強くなると言うが、実際、私はこの曲がった腕で袈裟固めや腕関節がよく極まるようになったんだ（笑）。

――その後、ヘーシンクとは？

ドールマン　「ファックユー」だよ。柔道で強くても人間的に問題があればしょうがない。30歳の時、私は公式に奴に対戦の要望を提出した。組み技の試合で、勝った方が１２０００ドル全てをもらうというものだ。75年頃の話だから、今でいう3万ドルほどの価値があったと思う。「あなたが勝てば、賞金は全てあなたのもの。私が勝てば、全額、孤児院に寄付する」と要望書には書き加えた。もちろん、奴は受けなかったよ。もう歳だったし、オリンピック委員の一人で、復讐されることを望まなかった。金に汚い奴だけど、誘いに乗ってこなかったよ。

⑥ドールマンがヘーシンクに送った挑戦状
⑦トム・ハーリンクと行なったオランダ初の総合格闘技の大会「パンクラチオン」のポスター。
⑧⑨ドールマンと日本を結びつけたジェフ・ケイプス戦のポスター。ドールマンの他にはムエタイ、ルシア・ライカ、ブランコ・シカティク、イワン・ヒポリット、オーランド・ウィットらが出場していた。ヒポリットとシカティクは、その後、総合にもチャレンジしている。
⑩アントニオ猪木と異種格闘技戦を戦う前のウィリアム・ルスカと。
⑪そのルスカとは柔道のオランダ選手権で何度も顔を合わせ、1971年にはドールマンが勝利しオランダ王者に輝いている。

――81年にはトム・ハーリンク（※4）と総合の試合を開催しましたね。

ドールマン　1回だけな。キックの大会で私の試合だけが総合だった。でも、観戦していた警官から「これはスポーツじゃない。今後は開催を認めない」と通達があった。仕方がない、ちょっと時代が早すぎたんだ。

――その後、日本と関わりを持つことになり、プロフェッショナルとして活動していくことになりましたね。

ドールマン　実はな、プロということなら、私はプロレスをアムステルダムでやったことがあるんだ。

――えっ？　アムスでプロレスが？

ドールマン　１９６０年代にはクラスナポルスキー・ホテルで、ベルギーのプロモーターが盛んにプロレス興行を開いていた。「キャッチ」という名前でね。私は色んな寝技のムーブを知っているということでオファーを受け参戦したんだ。でも、予め決められた動きができなくて、試合中に相手をのしてしまった。プロモーターが怒ってね。「頭を使え、約束を守れ」ってね。私はその場で、クビになったんだ（笑）。１９６７年の話だ。大昔の話さ。それでも１９８７年に私がジェフ・ケイプスと柔道vsサンボという組み技の試合をしたときに、プロレスのことを覚えているファンもいて、「これもセットアップされている試合なのか？」って聞かれたもんだ。もちろん、リアルファイトだった。キックじゃないと、観客には理解されなかった時代だ。オランダでは70年代にキックボクシングが盛んになり、完全にキャッチは廃れてしまったから。実はこのケイプスとの試合こそ、私と日本と結びつけるきっかになったんだ。

――というのは？

ドールマン　ケイプスに勝ったあと、新日本プロレスにいたバッファロー・アレン（※5）から連絡が入り、イタリアに新日本プロレスが来るので、招待するということだった。それで家族全員でローマに行った。新日本からの招待で、「来られるのならアントニオ猪木に挑戦表明をしてくれ」という話だった。欧州の組み技王とでも、彼らは捉えたんだろうな、ケイプスに勝ったことで。私は決められた通り、猪木に挑戦を宣言した。私はプロレスが何か理解している。ルスカと猪木の試合もつぶさに見た。セコンドで日本へ行ったから、試合前の猪木とルスカの本番さながらの練習だって見た。私は時間潰しにフジワラ（藤原喜明）とスパーリングしていたよ。だから、試合自体は「リアルでやりたい」と申し入れたんだ。ローマのホテルの一室で詰めの交渉を行ったときにね。

――でも、実現しませんでしたよね。

ドールマン　新日本側の返答は「それはで

（※4）ドージョー・チャクリキの創始者であり会長。K-1のブランコ・シカティク、ピーター・アーツを育てた人物。（※5）７５年にパン・アメリカン王者になり、７６年のモントリオールオリンピックでは重量級の銅メダルを獲得。その後、新日本プロレスで、坂口征二と柔道ジャケットマッチを行う。当時の名前はバッファロー・アレン・コージ。その後バッドニュース・アレンと改名しプロレスラーとしてデビュー。

きない」ということだった。だから、私は家族とローマ観光をしてオランダへ帰った。その後も、ルスカが「プロレスを楽しめ、日本での待遇は素晴らしいぞ」と説得し続けていたよ。でも私はカジノを経営していて、経済的に全く困ったことはなかったから大嫌いなショーアップされたプロレスをすることはなかった。まぁ経済的に苦しければ、プロレスラーになっていたかもしれない。そんな頃だよ、初めてアキラ・マエダとUWFという名を聞いたのは。

——それは、どういう経緯だったのですか。

ドールマン 新日本と話し合いが続いていたときに、目白ジムのヤン・プラスから「全日本キックボクシングが、猪木とやるならUWFの前田とやる方がドールマンには合っていると言っている」と持ちかけられたんだ。UWFは激しい戦いをする団体だと教えられた。悩んだよ。何をするという以前の話で、ルスカとプラス、二人の友人からの申し入れだった。私はブルミンのところへ相談に行った。ブルミンはなぜかサムライの話をし、そしてマエダを選べと言ったんだよ。だから、私は新日本プロレスではなく、UWFを選択した。

——そのとき、リアルファイトを申し入れたと聞いています。

ドールマン そうだ。だが、彼らの返答は「観客は寝技主体の試合には興味がない。時代は打撃重視、だからスタンド中心の試合にする必要がある」というものだった。マエダは当時、カリスマ的な存在だった。グラップラーの私が、立ち技だけで彼に勝つことは難しい、彼は負けるわけにはいかない立場だったし。従来のプロレスより、遥かにハードなプロレス、一歩間違えるとケガをしかねないモノ。それがUWFだったんだ。その後、東京ドームの大会に私とともにディック・フライが呼ばれた。UWFはオランダの格闘家にとって、未来へ繋がる扉になったんだ。

——ただ、UWFは激しくともプロレスでしかなかった。ドールマンさんは、真剣勝負を極めたいとは思わなかったのですか。UWFが解散し、リングスの一員として活動していくことになった時も。

ドールマン 当時、そんなことが可能なプロ団体は一つもなかった。理想に近いのはUWF、そしてリングスだった。多くの問題を抱えていたマエダが、リングスを設立するときに私を頼った。マエダとのつながりは私にとって特別なものだ。だから、私はリングスの旗揚げに呼応した。リングスの初代王者にもなった。前田が感謝の気持ちを表してくれた結果だと思う。フライ、ヘルマン・レンティング、オランダの選手は皆、良い待遇を受けていた。

——ドールマンさん、あなたにとってプロレス、UWF&リングス、そして現在のリングス・オランダ、これらに対しどのような区分けを持っているのですか。

ドールマン プロレスは論外だ。UWFやリングスは、当時、理想に一番近いものだった。ただ、オランダではUWFやリングスが見せていたものは提供できない。この国はリアルしか通用しない。

——その理由は?

ドールマン 小さな国だ。情報がすぐに洩れ伝わる。みんな話し好きだし。その点、日本の選手は口が堅い。選手から情報が洩れることがないし、マスコミも一緒になって秘密を守る。だからファンは想像で語るしかない。オランダでは「リアルでやる」といえば、リアルでやるしかない。セットアップされたことが分かると、次から誰も会場に足を運ばなくなるだろう。

CHRIS DOLMAN
クリス・ドールマン

1945年2月17日生まれ。身長187cm
オランダ・アムステルダム出身。
1966年、1981年、1982年、1985年、サンボ世界選手権優勝。
1974年、柔道ヨーロッパ選手権優勝。
1989年5月4日、U.W.F.大阪球場大会にて前田日明戦でプロデビュー。
1995年選手引退。

「KoKルールへの移行は、オランダ人選手にとって衝撃的な出来事だった」

——なるほど。ただ、1995年のリングス・オランダ旗揚げ当初の幾つかは、私には相当セットアップされていた試合が含まれていたように見えましたが。ドールマンさん自身と前田日明の試合、そしてアンドレイ・コピイロフvsハンス・ナイマンの試合にしても。

ドールマン ……。私の引退試合だ。それに旗揚げ興行だ。何も言わなくても、マエダは私に敬意を表してくれたんだ。ロシアだって同じリングスの名の下で活動していた。マエダにしても、コピイロフにしても誠実な対応をしてくれただけだと思う。

——誠実な対応ですか。その一方で、あの時に山本○○（現○○）とルディ・イヴォルド戦の写真が新聞のトップを飾り、ボコボコになったイヴォルド選手の顔が大きな話題になりました。

ドールマン あれからが大変だったよ。これはスポーツなのか、喧嘩なのかという問題になり、テレビでも取り上げられた。フライ、バス・ルッテン、ジェラルド・ゴルドーが一般人と討論することになった。その一般人のなかには、バウンサーとして働いていた選手たちに痛い目にあった連中もいてな。要は自分が悪いから、バウンサーにお仕置きされたのに、その逆恨みもあって、フライはテレビのなかで随分と責められていたよ（笑）。政府のスポーツ大臣は女性で、総合格闘技を嫌っていた。私は何度も何度も政府に話し合いに出向いた。結局、調査機関をおいて、その調査結果で認可の是非を決定するという結論になったんだ。

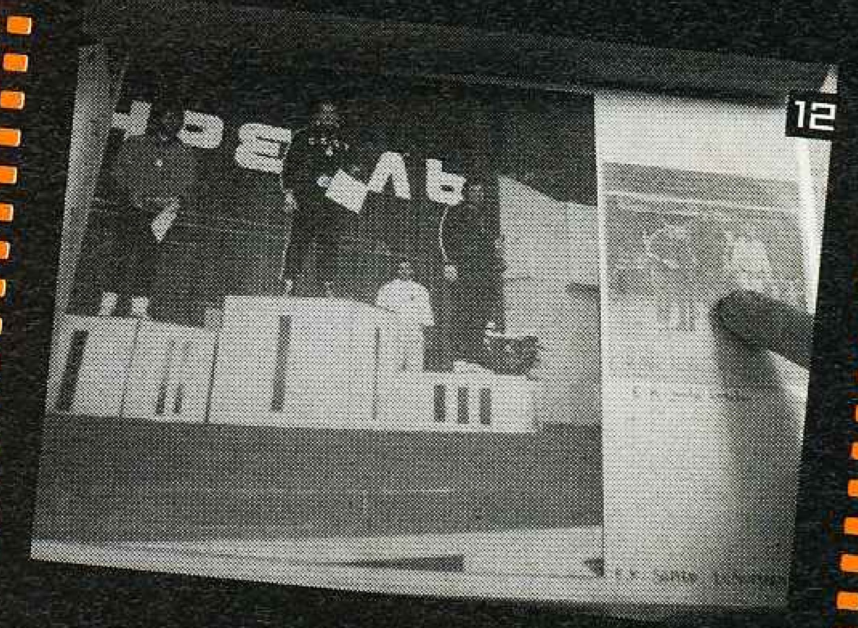
——私も政府の調査機関に呼ばれ、ホテル・オークラのカフェで4時間も、いろんな質問を受けました。私を政府の人間に紹介したのはルッテンでした。「日本でいかに総合格闘技が社会から認知されているか、日本人に説明してもらおう」というのが、スマートな彼の考えだったみたいです。

ドールマン いや、君にも迷惑をかけたな。でも、お陰様で調査開始から5年も年月を費やして、政府からは正式にオリンピック委員会参加という認可を受けた。焦らずに時間をかけた成果だと思っている。

——その後、日本のリングスではKoKルールが採用され、形を大きく変えます。

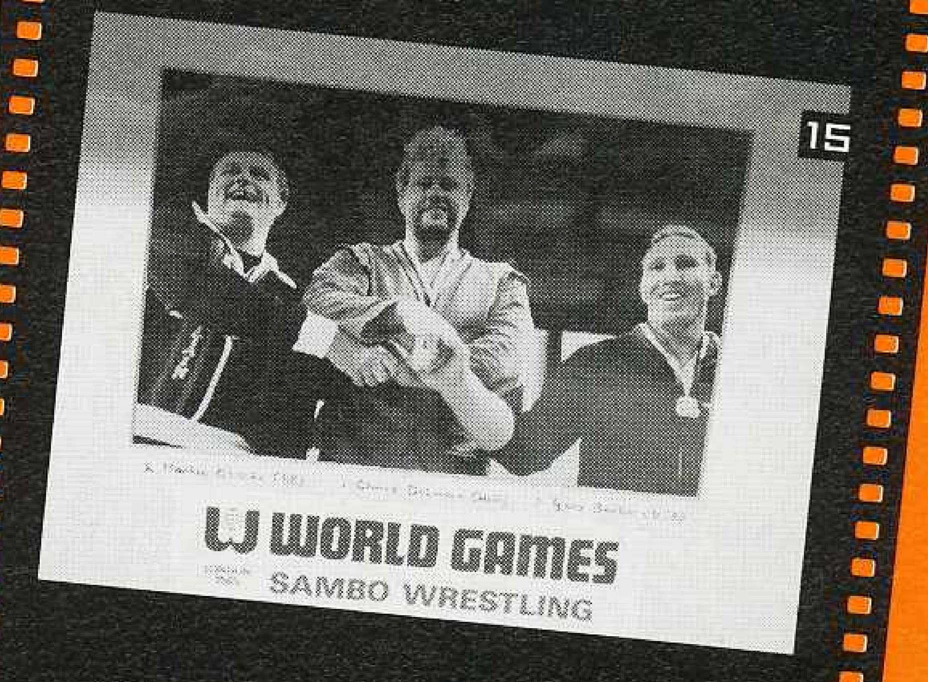
ドールマン オランダの選手にとって、衝撃的なルール変更だった。寝技を真剣に学ばないと勝てなくなったからな。寝技の技術を持たない選手、特にフライはアレルギーを起こした。ナイマンもそうだった。寝

⑫⑬1969年、モスクワで行なわれたサンボ世界大会で準優勝に輝く。⑭スペインのマドリッドでも2位。⑮1985年ワールド・ゲームス・ロンドン大会では、見事に優勝。⑯オランダのレスリング大会で優勝した際に贈られる襷のようなモノが、別荘に一室の壁を埋め尽くす。

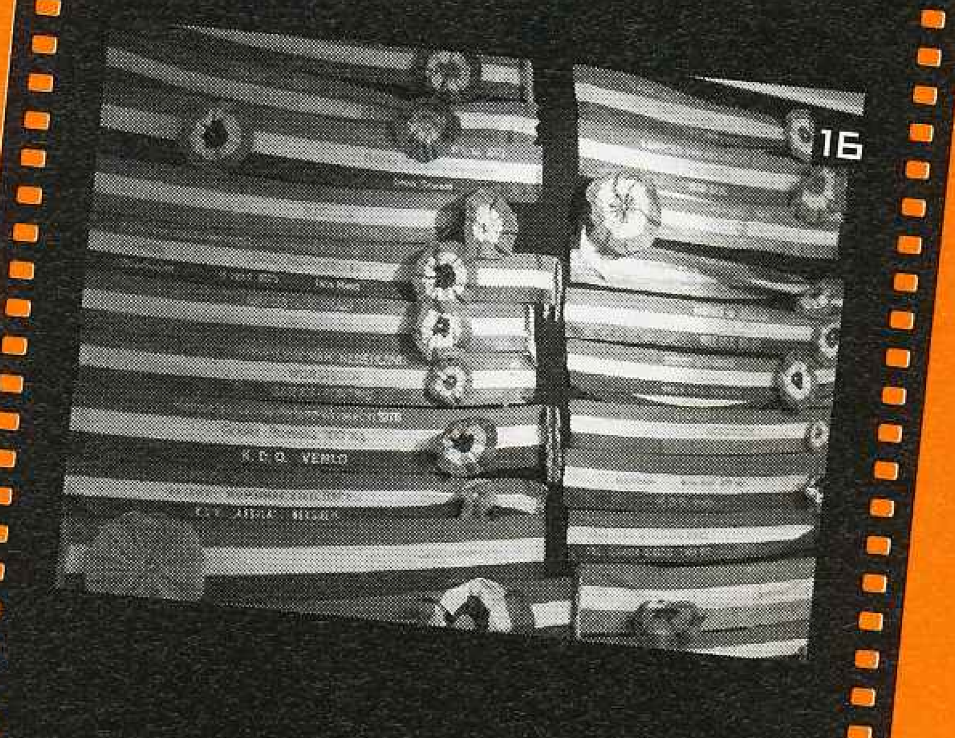

12


13


14



15


16

「不本意なことだとは思うが、PRIDEという場で前田の理想は実現した」

技を知らないと勝てない。でもフライは寝技だけだと、練習でビギナーにも取られる。それを嫌がった。そして、とうとう練習に来なくなってしまったんだ。プライドが邪魔をした。これも仕方ないことだよ。

──その後、リングス・ジャパンは活動停止に追い込まれてしまいました。

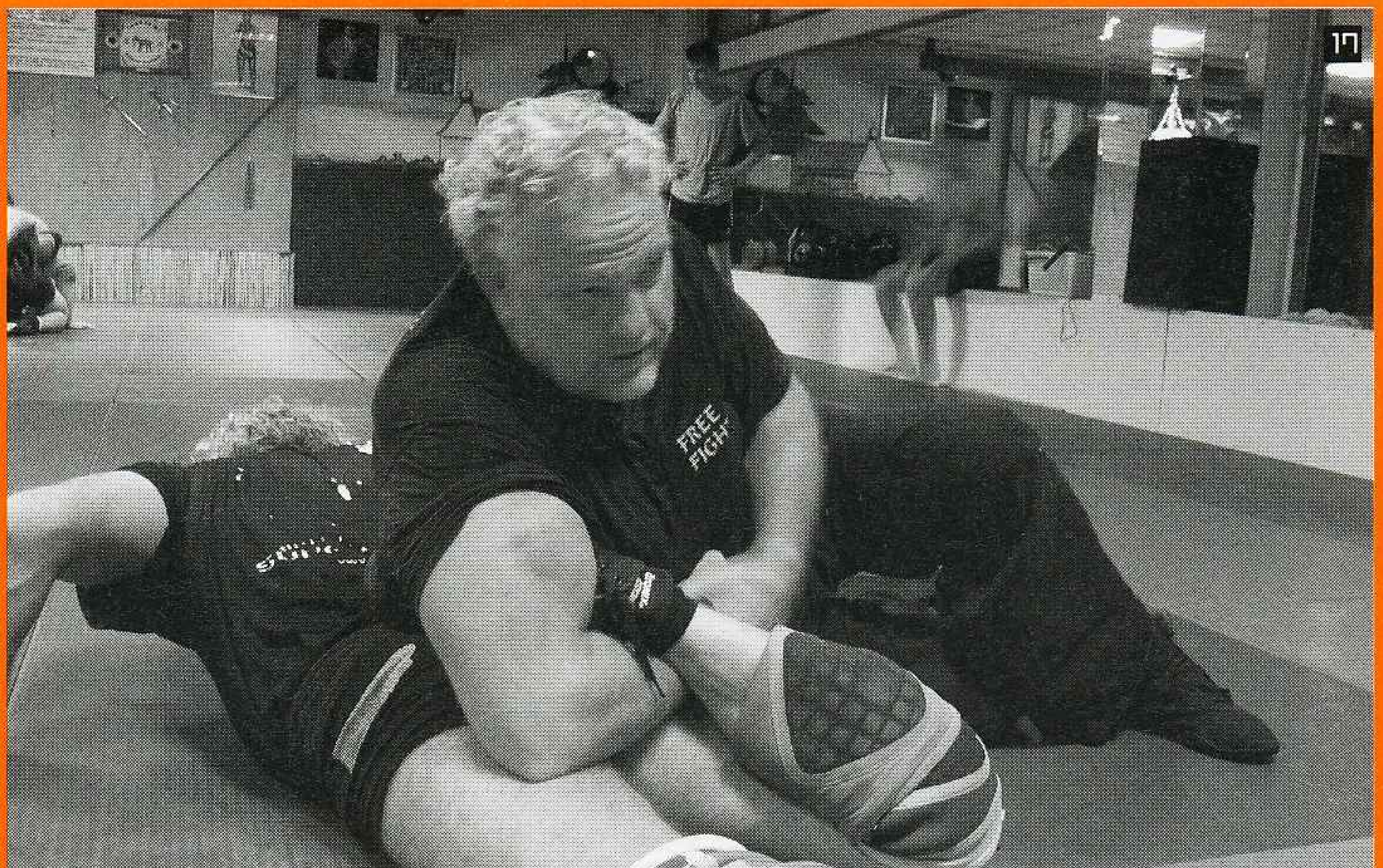
ドールマン マエダから「活動を停止する」という連絡があった。あれから2年半、何も連絡がない。こちらからコンタクトを試みても、何も返答がないんだ。私は終始、リングスという名の下で活動してきた。マエダが活動再開する際には、いつでも協力できるようにしてきた。マエダは経済的に困窮していないのか？　人は経済的な問題により私生活を乱してしまうことが多々ある。マエダは、本当は心優しい男なんだ。その優しさに付け込む人間が、この社会には多い。前田を利用する人間が多過ぎた。特に彼の身近な人間の中に。

──ドールマンさんはリングス・ジャパンの活動停止後も、リングスの活動を続けています。でも、多くのリングス・ネットワークのメンバーはリングスを見切りました。

ドールマン 金だ。皆、金が必要なんだ。理想や看板では生活できない。誰も彼らを責めることはできない。マエダがすぐに活動を再開できていれば、ロシアン・トップチームは今もリングス・ロシアのままだっただろう。仕方がないことだ。それに選手の現役生活は長くない。戦う場所は必要だからな。マエダにとって不本意なことだとは思うが、PRIDEという場で彼の理想は実現したように私は思っている。旧リングスのメンバーが、PRIDEのトップじゃないか。選手の力を見抜く能力をマエダが持っていたということの証だよ。選手を抱え込んでも金はかかる。他所から引き抜いても当然、金が必要だ。いずれ総合格闘技界は大きな壁にぶつかるだろうな。特に日本の総合格闘技は、ヨーロッパでは考えられないビックビジネスに成長した。多くの選手が、日本のことだけを考えている。金は重要だ。ただそれに捉われてしまって、人として大切なことを忘れた人間の結末は悲惨なものになると思わないか？　今はいいだろう。だが、恥を忘れた人間の最後は悲しいものになる。最も大切なことは、人間としての誠実さであり、信義だ。まぁ、他人が何をしようが構わない。私は、このオランダでリングスという名の下で、選手を育てながら、地道にリングス・オランダは成長させていきたいだけだよ。私はリングスを背負っている。マエダとの心のつながりがある。いや、心のつながりがあると私が信じている。自分の信じていることを自分から裏切るようなことはできない。







⑰来年で還暦を迎えるドールマン。腕力を利した足関節は健在。⑱今もドールマンのジムには総合志向の練習生が多く集まってくる。リングス・オランダ大会は、ロープエスケープ&ダウン健在のままパウンド導入に踏み切る模様。確実に時代は変化し、技術は進歩している。⑲ドールマンを支える愛妻オルガさんと、愛娘のシャロンさん。

「前田は身近な人間に恵まれなかった。だが、恥を忘れた人間の最後は悲しいものになる。最も大切なことは、人間としての誠実さであり、信義だ」

──前田さんから、「ドルマン、好きにしていいよ」と言われたら、どうしますか。

ドールマン 辛いことだ。でも、私は変わらない。93年にパンクラス旗揚げ前の船木と鈴木がオランダに来た。選手の獲得のためだ。「誰か世話してください」ということだったが、私は「それはできない」と答えた。私にはマエダとのつながりがある。彼らは「ドルマンさんには決して、迷惑はかけない」と言ってくれたが、私の名前でパンクラスに選手を送ることはできなかった。だから、顔見知りでリングスのメンバーでもなかったルッテンを彼らに紹介したんだ。「勝手に連れていくのは構わない」と言ってな。10年以上たっても、私の気持ちはあの頃のままで何も変わっていないよ。

──リングス以外にも、2H2H、イッツ・ショータイムなどオランダでは、順調に総合格闘技が成長しています。

ドールマン アマチュアで修斗も活動しているし、皆が上手くいけばいい。協力して、全てが成功すればいいんだ。オランダはこれから強くなる。徐々にな。リングスに関していうと、フライは今、自分の道場を持つようになった。コーチはボブ・シュクライバーだ。フライとナイマン、シュクライバーはリングス・オランダの正式役員になり、私をヘルプしてくれている。フレデリック・オーストロンはユトレヒトで医者をしている。ウィリー・ウィルヘルムは死んだと聞いていたが、実はポルトガルで生きていた（笑）。レンティングは長期休暇中、つまり刑務所だ（笑）。ウィリー・ピータースはアーネムで、セキュリティーの部長だ。デニス・ラーフェンはオランダを支える選手になるポテンシャルを持っていたのに、ヒザの負傷で現役を退いてしまった。今も私のジムでコーチをしている。

──ドールマンさん自身は？

ドールマン 私か？　日曜以外は毎日、練習している。まぁ、家にいても何もすることがないから、家ではムスッとした顔のようだ。妻のオルガも「もうちょっと、柔らかい表情にならないの？　ここは道場じゃないのよ」って、いつも文句を言っているよ。まぁ、彼女の言う通りだ。女性はいつの世も正しい。家では居場所がないということだよ（笑）。これも昔から変わりない。

──ドールマンさん、今日は本当にありがとうございました。最後に今もリングスに愛着を持っている日本のファンに一言お願いします。

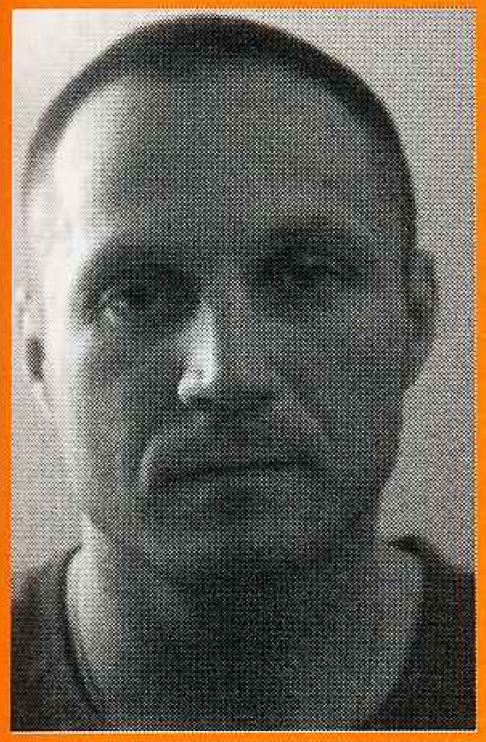
ドールマン 私はリングスを守り、発展させ、今後も選手を育てていく。それが私の仕事だ。これはファンだけじゃない、マエダに言いたいことなんだ。私はずっと待っている。マエダが活動再開を断念すると言わない限り、私はマエダの連絡を待っている。

[インタビュアー紹介]

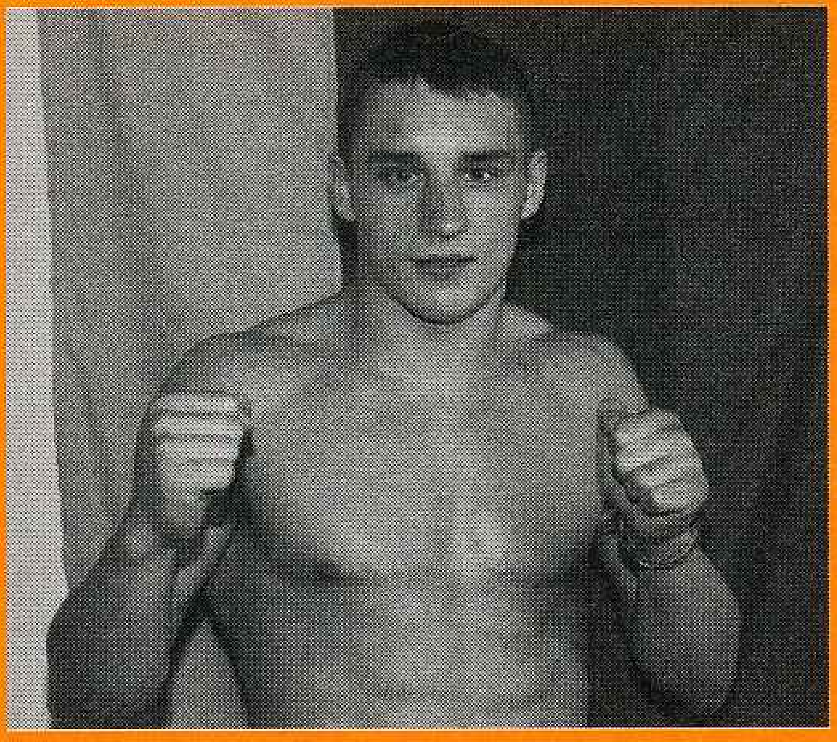
Bunko ENDO

遠藤文康

1957年1月26日 北海道士別市出身。47歳。京都で教員生活を10年した後、自分への挑戦の意味で教職を辞して1991年の湾岸戦争の真っ最中にオランダへ移住。ダイヤモンド会社で3年勤務した後、日本食の店を94年秋から7年間営業。01年秋に日本企業へ売却譲渡。93年より雑誌「格闘技通信」のオランダ通信員。オランダにやってくる日本のほぼ全団体にわたる格闘技選手の世話をし続け、オランダのほぼ全ての格闘技関係者とは友人状態。現在の本業は現地日本企業相手にお弁当のケータリングサービス業。A & B Europe Bunta vof 代表。最近は時々オランダの映画やテレビCMにも出演している。桂文珍に激似だった時代も。



ドナタス・シマナイティス。リトアニアで総合格闘技を国家レベルの人気競技に仕立て上げた最大の功労者。



ZSTのリングでも人気者レミギウス・モリカビュチス。レミーガの愛称で親しまれている。



ブシドーMMAで一番人気を誇るケッティス・スミルノヴァスは、新設される修斗クルーザー級全欧州王者候補。



ブシドーのエース＝エギリウス・ヴァラビーチェスはリングス・ジャパンの経験者。

現職大統領が、試合を観戦する国

世界でも最もMMAが認知されている

リトアニア

Lithuania



ブシドー・リトアニア、2度目の国際大会開催時には、当時の現職リトアニア大統領ヴァルダス・アダムクス氏が観戦に訪れた。

「リングス・リトアニアが、出発点」

——リトアニア・ブシドーMMA代表ドナタス・シマナイティス



1990年にソビエト連邦から独立を宣言したリトアニア。まだ14年間の歴史しかない、新しい国のスポーツ界では、総合格闘技がバスケットボールに次ぐ人気を誇る。現職大統領が観戦に訪れ、今では地上波で週に3つのTVプログラムを持つブシドーMMA。抑圧された歴史の反動ともとれる、この勢い。リングス・ジャパン活動停止後、修斗&ZSTと絆を深めるブシドーMMA代表ドナタス・シマナイティスは「リングス・リトアニアこそ、我が人生の出発点」と言う。

高島学＝文
text by Manabu Takashima

ドナタス・シマナイティス＝写真提供
photo provided by Donatas Simanaitis

「もしリングス・ジャパンが今も活動していたら？　もちろんリングス・リトアニアの名は今も残っているでしょうね」

ブシドーMMA協会代表ドナタス・シマナイティスは、こう語る。

リングス・リトアニアは、日本のリングスが活動を停止する直前にネットワークに加わった、いわばリングス・ネットワークの末っ子だった。

ただこのリングス・リトアニアという名称に関しては、日本側が受ける印象と、シマナイティスが持つ実情とでは多少隔たりがある。「我々の組織の名はあくまでもブシドー（MMAという言葉が名称に加わったのは昨年から）です。ブシドーがリングスの試合をするからブシドー・リングス、修斗公式戦をするからブシドー修斗です」とシマナイティス。実はブシドーのポスターやパンフレットに見られるリングス・リトアニア、リトアニア修斗という組織は現地では存在しない。

これらの名称は、あくまでも日本向けのビジネス・ワードだ。リングスや修斗の名など必要ないほど、ブシドーはリトアニアの人々、社会で完全に根を下ろしている。

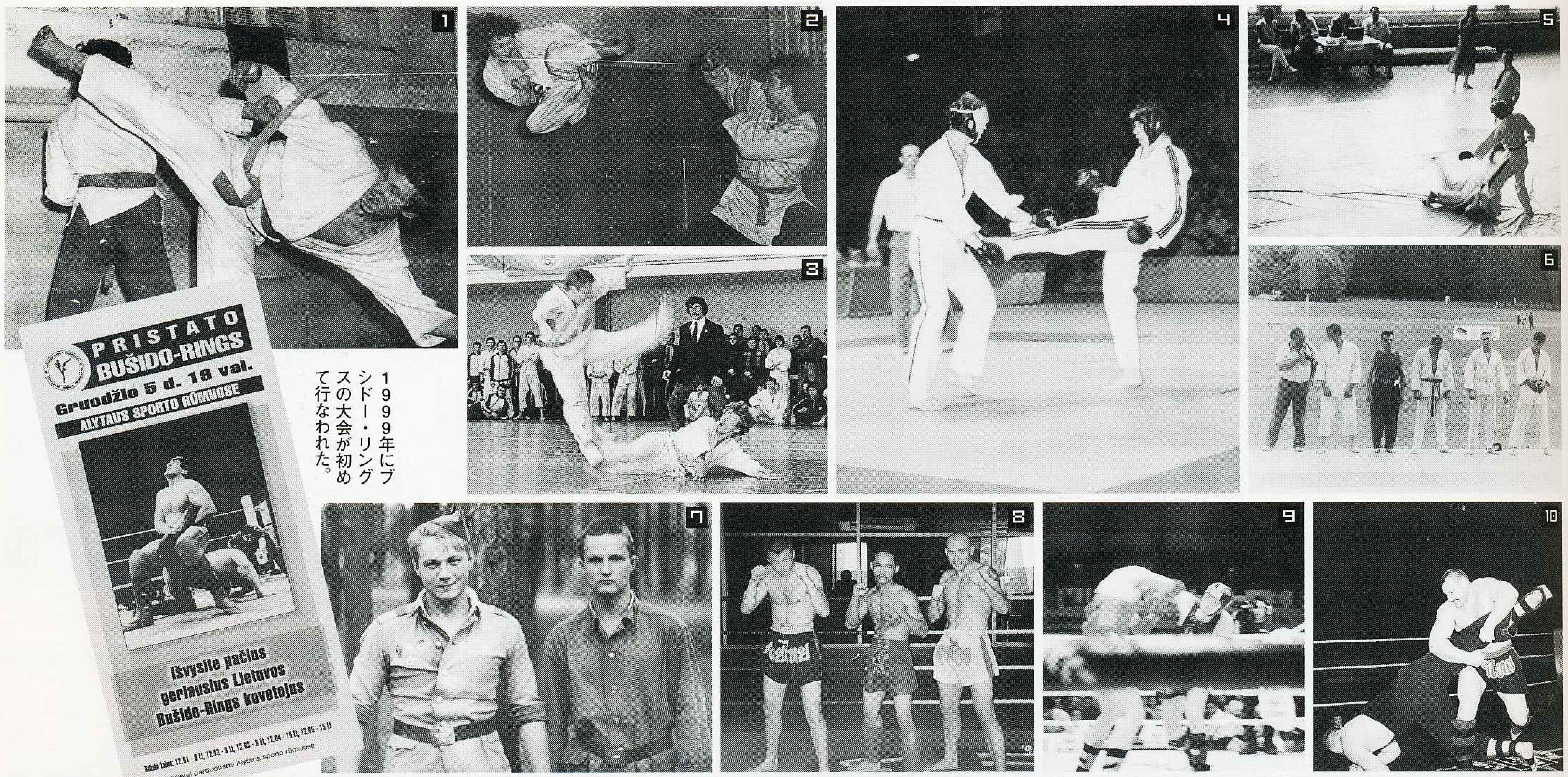
なんせブシドーMMAでは、毎週土・日の2日間だけで二つの地上波テレビ局で、3つの中継枠を持っている。

土曜の午後8時からブシドーのビッグショーを中心に放送する「ブシドー・リーガ」という1時間番組がTV4で。同じくTV4では、同じ土曜の午後10時から100分間の「ブシドー修斗」という日本のプロ修斗公式戦を放送するプログラムも組んでいる。ブシドー国内のスモールショーから抜粋して試合の模様を流す30分番組「ブシドーLt」を日曜日に放送するのは、TV3だ。「ブシドーはリトアニア国内で、バスケットボールに次ぐ人気スポーツの地位を勝ち取りました」と豪語するシマナイティスだが、これは大言でもなんでもない。

現在、ブシドーMMAに加盟するジムは34に上り、プロとして生活できるトップ選手もちらほら見られるようになってきた。

そんなブシドー発展の背景には、長い間味わってきた国家としての苦しみ、その抑

当局にばれないよう地下活動のようなカラテの稽古



1999年にブシドー・リングスの大会が初めて行なわれた。

①カラテがソ連政府から認められていなかった時代に、当局に稽古をしていることがばれると連行させるにも関わらず、カラテに打ち込んだ若き日のロマス・ナビスカス（右）。現在はリトアニア士道館＆アゾーラス・ジム代表。ブシドーMMAの大会でレフェリーも務める。写真は1976年当時のもの。②ナビスカス氏と稽古に励んだアルギルダス・アルテェビュチス（左）は、現在リトアニア松濤館カラテの代表。③練習することも許されていなかったというのに、トーナメントも開催していた。リトアニア人の頑固さがここにも表れている。④&⑤オープンフィンガー・グローブ（拳サポ）に道衣、ヘッドギア着用で打撃、投げ、関節技が認められていた「コビーニャス・セビーギュノス・サヴァノーリョ・ジェイディーニャス」という護身術の大会。軍指導でソ連政権下の80年代にも行なわれていた大会は、今もリトアニア国防義勇軍が主催する国体のような大会のなかで行なわれている。コンバット・サンボ以外にこのような大会が行なわれ、観客が入っていること自体が驚きだ。ちなみに寝技の制限時間は2分だったそうだ。⑥シマナイティスはリトアニアが独立した後、1990年と1991年に80kg級で2連覇を達成している。右から二人目がドナタス。⑦ソビエト軍時代のシマナイティス（左）。軍隊内のバルト選手権ではボクシングとサンボで優勝。スポーツマイスターの称号を得る。⑧&⑨1996年に現ティターナスジム会長のワリウス・ミシュナスとタイへムエタイ修行に。世界アマチュア・ムエタイにも出場した。⑩リトアニア・ブシドーの最初の王者は、ヴァタウラス・モティエユナス。一体、どんな技術体系だったのだろうか？

圧に反動するかのようなシマナイティスの活発な活動という二つのビッグエレメントが存在する。

リトアニアは、エストニア&ラトヴィアとともにバルト3国と呼ばれ、その歴史のほとんどがポーランドおよびロシアの支配下にあり、ようやく1990年に前述したエストニア&ラトヴィアと手を取り合うようにソビエト連邦から独立を勝ち取った。

シマナイティスが少年～青年期を過ごしたのは、当然ソ連時代。当時、ソ連では柔道、レスリング、サンボ、ボクシング以外の格闘技を学ぶことが禁じられていた。

今でこそブシドーMMAのレフェリー、そして士道館カラテのリトアニア支部長として活躍するロマス・ナビスカスも、当局にばれないよう有志を集い、地下活動のようにカラテの稽古に励んでいたという。

シマナイティスは、このソ連時代に許されていた4つの格闘技のうち3種目で輝かしい戦績を残している。

ソ連内の一共和国だったリトアニアの柔道選手権で優勝すること4度、全ソ選手権にも出場している。「柔道ができるのなら、サンボも問題ないだろう」と強制的に出場させられたリトアニア・サンボ選手権でも3度に渡り金メダルを獲得できた。

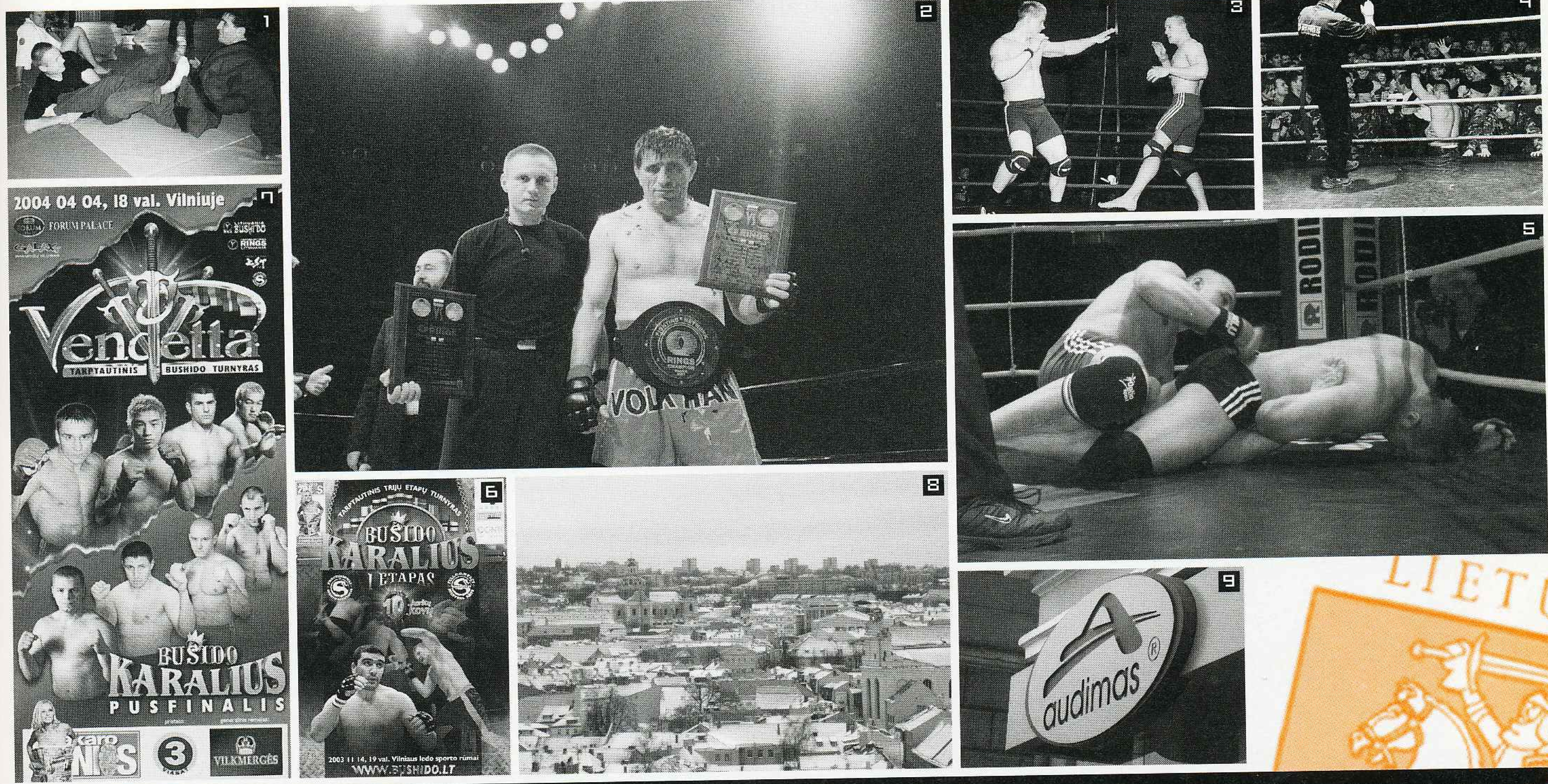
1988年、ソビエト陸軍に召集された彼は、スポーツ専門の模範部隊に所属したが、彼以外の部隊の面々は全員がボクサーだった。組み技系だったシマナイティスにとって、「それはそれは大変な日々」（シマナイティス談）が続いた。

だが、この間のボクシング・トレーニングにより、彼の内側に隠れていた打撃の資質が開花した。入隊1年後に開かれた軍隊内のボクシング・バルチック選手権で優勝、スポーツマイスターの称号まで手にする。

1990年、リトアニアの独立により軍を除隊したシマナイティスは、ソ連時代から行われていた護身術選手権（道衣十拳サポ着用で、スタンドでの直接打撃、投げ、寝技での関節技が認められていた）の80kg級を2連覇している。「6試合で6KOでした」というシマナイティス、その後フェイスガード着用のパンクレイションなど試

みるが、93年に初めてみたワイクーに魅せられ、ムエタイに傾倒していった。
この間、92年に故郷アリートゥスでローニナス・ジムを開いていた彼は、96年になり念願のタイ遠征、ムエタイ修行を行った。タイでは世界アマ・ムエタイ選手権にも出場している。
97年、シマナイティスの人生に大きな転換期が訪れた。テレビでブシドーを名乗ったUWFインターの中継がスタート、翌98年から試合はリングスのものに変わったが、プログラム名は変わらず、「ブシドー」のまま。彼はこの年にリトアニア・ブシドー協会を設立した。「この戦いが、リトアニアの格闘家たちが世界で活躍する突破口になる」。こう直感し、翌99年には早くもアリートゥスで第1回ブシドーの大会を開催している。8試合中5試合がリアルファイトで、3試合はアレンジしたものだった。
テレビで見た世界が、そのままシマナイティスの先生だった。シマナイティスは「でも、すぐに時代は変わるという予感がありました。国際大会を開くようになり、最初の2大会はアレンジした試合をいれましたが、その後はリアルファイトしか行っていません」と言う。
その2度目の国際大会には、当時のリトアニア大統領ヴァルダス・アグムクス氏が招かれ、リングサイドで試合を観戦している。世界中に広がり続ける総合格闘技だが、一体、リトアニア以外のどこの国で現職の大統領が会場を訪れることがあるだろうか。
シマナイティスの成功の裏には、社会主義国家から資本主義社会への変化に、当時の支配階層とは対称的に、彼が機敏に対応できたことが大きい。リトアニア経済の中心は、シマナイティスのような独立を20代中旬で迎えた若者たちの活躍する場になっていた。加えて旧体制下で手にしたスポーツマイスターの称号、軍とのネットワークも、ブシドーの短期間での発展に何らかしらの関係があることは想像に難くない。
国際大会を開くために、旧宗主国といえるロシアの格闘技関係者の信頼を得たシマナイティスは、ついにリングス・ネットワークの末席に名を連ねることに成功した。

Uインターの中継「ブシドー」がスタート、そしてリングスへ



①1999年にテレビのブシドー中継で、絶大な人気を誇っていたヴォルク・ハンが、セミナーを開催。②2001年5月8日、現時点でエキシビション以外でハンがリングにあがった最後の試合は、ここリトアニアの地だ。③今ではオープンフィンガー・グローブをつけ、修斗ルールとZSTルールで興行を行なっているが、活動開始当初は当然、掌底＆ロープエスケープ有りのリングス・ルールが採用されていた。④独立してもロシアとのつながりが強いのは、国情もリング上も同じ。イリューヒン・ミーシャに観客がどっと押し寄せ、セキュリティを任されている軍隊がミーシャをガードする。⑤去年の4月にはPRIDE世界ヘビー級王者エメリヤーエンコ・ヒョードルも、リトアニア・マットを踏んだ。⑥2003年11月からブシドーMMAでは、正式に修斗公式戦を行なうように。「リングス・ルールならブシドー・リングス、修斗ルールならブシドー修斗。それだけのこと」と、シナマイティスは日本では組織と捉えがちな名称についてズバリ断言する。⑦今年の4月に所英男＆内山貴博のZST勢もブシドーMMAへ。所は2年連続の出場で、現地の人気も高い。⑧世界遺産に指定されるリトアニアの首都ビリニュスの旧市街地は、雪化粧に埋まる日々が多い。⑨ビリニュス市街で見つけた、リトアニアのスポーツ・ブランド「アウディマス」。かなりの優良企業。歴史の新しい国で、しかも経済状況が一転したことによって、ブシドーもアウディマスにも、西側資本主義社会にはないチャンスを手にした。

そして、リングス・ジャパンの興行をその目で捉え、肌で雰囲気を感じたことは、シマナイティスにとって計り知れない経験となった。ライティング、音響効果、豪華なパンレットのつくり、会場内にながれるBGMまで、ブシドーの興行を訪れたリングスを知る関係者は「本当に雰囲気が似ている」という言葉を残している。
週に3日も4日も300キロをドライブする生活。タフな肉体と精神を、ブシドーの発展に捧げてきたシマナイティスは、リングス・ジャパンの活動停止を、日本格闘技会との関係を消滅させることと同意語として、捉えることだけはできなかった。
その結果、リングス色の強く残るZSTや、さらに修斗と接触。表裏のない人間性は人と話すときの最大の武器になった。
ZSTのリングではレミーガこと、レミギウス・モリカビュチスがレギュラーとなり、昨年10月からブシドーの興行はプロ修斗公式戦として行なわれるようになった。加えて、日本のプロ修斗興行にも5人のリトアニア人格闘家が参戦している。
目下のところ、順風満帆にしか見えないブシドーの活動だが、一つ、大きな問題を抱えている。来日選手の戦績が、どうにも芳しくない。鋭い打撃と果敢な一本狙いは観客の支持を集めるが、柔術を基礎としたポジショニングに疎いため、なかなか白星に結びつかない。そんな状況にも、「私たちには柔術より優れたサンボがあるので問題ない。すぐに勝てるようになります」とシマナイティスはサラリと言ってのける。
この頑固でストレートな性格で、ブシドーを引っ張ってきたシマナイティスは最近、総合格闘技だけでなく、カラテ、クンフー、柔道などを束ねるリトアニア・マーシャルアーツ協会の代表にも就いたという。
リトアニア国内で彼に対抗して、総合の興行を行なおうと試みる者など、一人もいない。磐石な体制を築いた。「リングスは学校のようなものでした。そして、この国の総合のスタート時点でした」と彼は言う。
ドナタス・シマナイティスはリングスという名の学校を卒業し、自分で定めたゴールに向かって、走り続けている。

ークの末席に名を連ねることに成功した。



リングス・ジャパンの現在。

〜ツワモノ共が夢の跡〜

2002年2月14日、総合格闘技の草分け的存在でもあったリングスが活動を休止した。突然の解散に見舞われたリングス・ジャパンの選手たちは動揺を隠せなかったが、現在はそれぞれの道を見つけてプロ活動を続けている。活動休止以前に、リングスを退団した選手たちも同様だ。彼らがリングスを離れた後、どんな活動をしているのかをまとめてみた。

熊久保英幸=文
text by Hideyuki Kumakubo

日本スポーツ出版社（集合写真・長井）、GBR（前田・滑川・伊藤）、アッパー（山本宜・成瀬・金原）=写真提供



前田日明（まえだ・あきら）

活動拠点=セミナーなど、充電中

1959年1月24日、大阪府出身

91年5月11日にリングスを旗揚げ、99年2月に引退し、その後はプロデューサーとしてリングスを運営していたが02年2月14日に活動を休止した。同年5月に開催された「プレミアム・チャレンジ」に選手を派遣したり、7月にはシュートボクシングの「S-CUP」でリングス提供試合として2試合をプロデュース。その後は表舞台にはほとんど出てくる事なく、第二次リングス旗揚げのための充電期間に突入。ZSTの解説、キックボクシングの藤原敏男祭りにゲストとして参加した時は、やはりマスコミの大きな注目を浴びた。04年6月には日本空手道撲名館で、「前田日明格闘術セミナー」を行ない、新日本プロレスなどで活躍中の中嶋勝彦を指導した。今後もこういったセミナーを全国各地で開催していく予定で、まずは地固め的な活動をしていくようだ。横井や金原などの試合をチェックする事も忘れずに、電話でアドバイスを送るなど元ジャパン選手たちを温かく見守ってもいる。

「これからも師匠の前田日明を目指して、このリングでリングスの強さを証明していきます！」

2004年2月15日、横浜アリーナで開催された『PRIDE武士道』に出場した滑川は、リングス時代から因縁のあったエギリウス・ヴァラビーチェスを下すと、力強くそう叫んだ。滑川のアピールはリングスファンの心に届き、「ありがとう」と多くの反響があったという。

それ以前の2001年12月23日にPRIDEで初勝利を収めた山本は、やはりリング上で「前田さん、ありがとうございました」と感謝の気持ちを述べ、2002年11月24日にPRIDE初参戦した金原は所属を"リングス・ジャパン"で通そうとしていた。つい最近の4月25日、PRIDEでノゲイラに大善戦した横井も、入場式の際にはリスペクトの意味を込めて"前田道場"のTシャツを着て登場している。

リングスから離れた後も、元ジャパンのメンバーは何かの形で、リングスへの思いをそれぞれ形や言葉にして表しているのだ。「前田道場」という共通の場所を失っても、完全に離れ離れになったわけではない。長井と成瀬は先輩後輩であったことをストーリーにして、新日本プロレスで魔界倶楽部という悪役軍団にいた長井を成瀬が説得、ついにはタッグを組むという物語を演じていた。元々、二人はリングス時代から仲が良く、先に離れた長井は常に成瀬のことを気にかけていた。

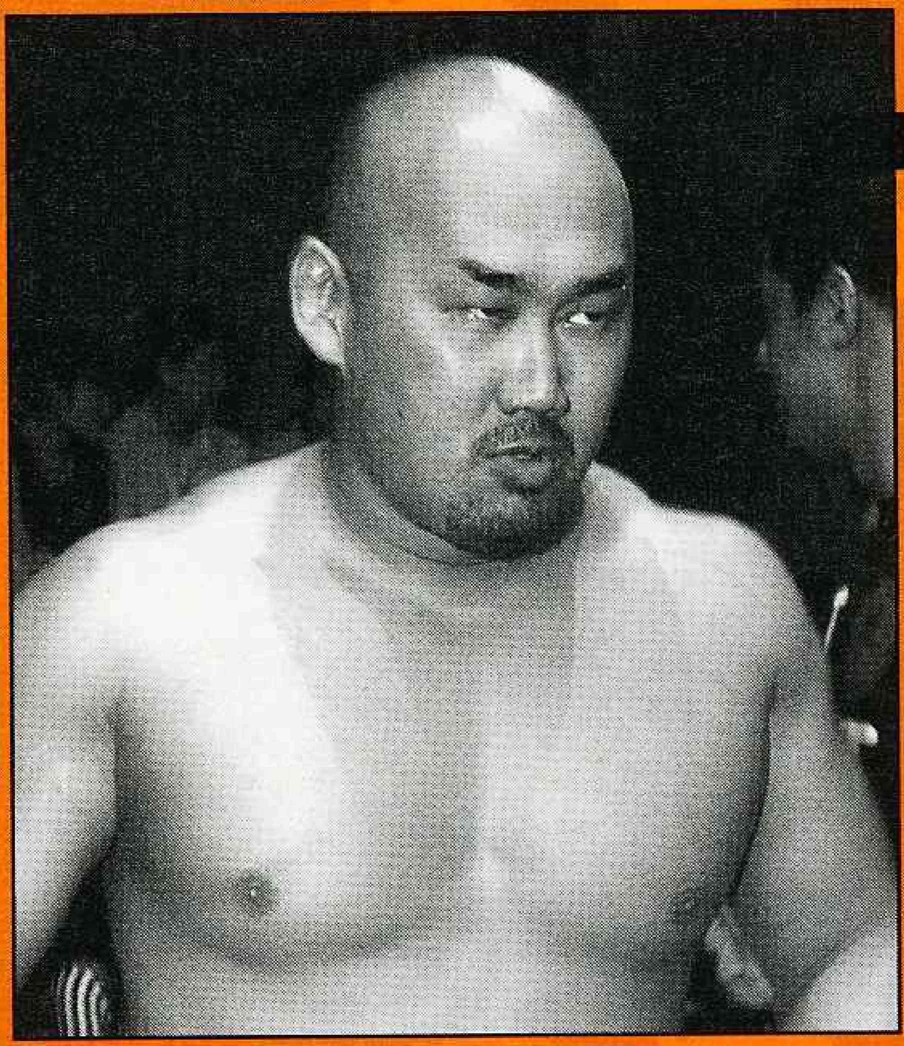
同じプロレスでは、坂田と横井が同じZERO-ONEのリングに上がり、タッグを組んだり対戦したりしている。田村の主宰するU-STYLEには坂田、滑川、伊藤がほぼレギュラー参戦し、旗揚げ1周年記念大会では高阪も出場して田村とのシングルマッチを行なった。

格闘技的な活動に目を向ければ、高阪が中心となって元ジャパン勢をまとめており、横井は同じチーム・アライアンスの所属である。また高阪が運営するジム「Gスクエア」には、成瀬、滑川、伊藤が練習に訪れ、逆に高阪が田村を訪ねて行って一緒に練習をしたこともあるという。Gスクエアで彼らの姿を見かけると、前田道場での風景を思い出し、ホッとした気持ちになる。

それにしても、元ジャパンの選手たちはなぜプロレスに出場するパターンが多いのだろうか？　PRIDEの他にも総合格闘技で戦う場があるというのに…と、ジャパン勢のその後の活動に疑問を持ったファンも多いだろう。

その先陣を切った長井は、「前田さんは違うと言ったけれど、僕はプロレスラーです」と公の場で発言、前田の怒りを買ったことがあった。元々、UWFインターに籍を置いていた事もあり、既成のプロレスへの思いが強かったのだろう。退団直後はシ

プロレスに出場した選手は 12人中9人 PRIDE、DEEPにも 活路を求めていった

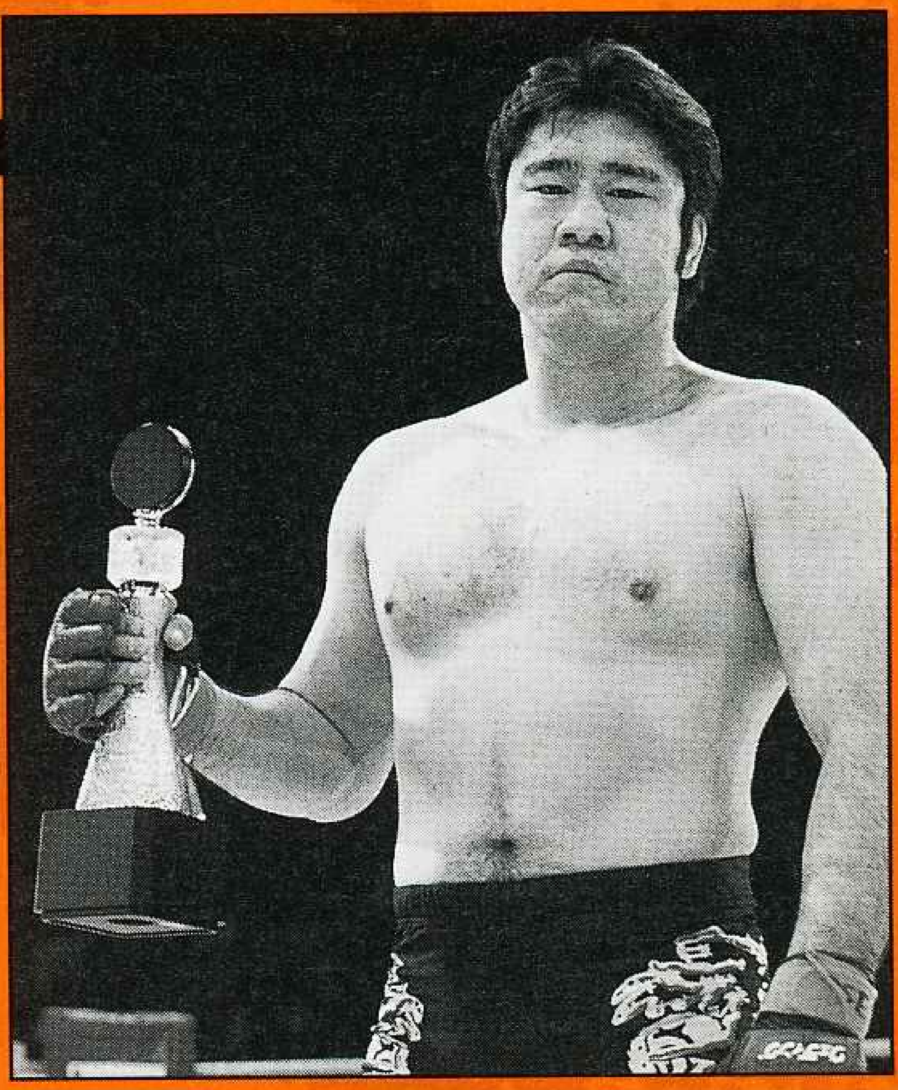


長井満也（ながい・みつや）

活動拠点＝新日本プロレス

1968年11月10日、北海道出身

32勝31敗1分の戦績を残して98年3月にリングスを退団後、フリーとしてK-1JAPAN、掣圏道、バトラーツに出場。K-1では5敗1無効試合の戦績を残し、バトラーツでは「ヤングジェネレーションバトル2000」で準優勝。00年11月からは全日本プロレスに参戦し、元Uインターの垣原賢人とタッグを組んで「世界最強タッグ決定リーグ戦」に出場、同チームで第69代アジア・タッグ王座を獲得。全日本に正式入団後は、エースの川田利明とタッグを組んで、2001年の最強タッグで準優勝を果たす。その後に「ジャイアント馬場杯」で優勝を遂げ、川田に「こんな短期間で成長した選手は見た事がない」と言わしめる。03年1月4日には東京ドームで行なわれた新日本プロレスに、魔界倶楽部の魔界5号として登場。同年2月16日には自らマスクを脱ぎ、正体を明かした。現在リングス時代から仲が良かった成瀬と共に新日本に参戦中。格闘技をやる気はもうないようだ。



山本宜久（やまもと・よしひさ）

活動拠点＝PRIDE

1970年7月3日、山口県出身

2001年7月にリングスを退団後、フリーとして同年9月PRIDEに参戦。アスエリオ・シウバに11秒で敗れ一念発起、高田道場入りした。同年12月にヤン・"ザ・ジャイアント"・ノルキヤを腕十字で降してPRIDE初勝利。リング上で「前田さん、ありがとうございました」と過去に決別する挨拶をした。翌年4月にはボブ・サップ、9月にはガイ・メッツアーに黒星を喫するも12月にアレクサンダー大塚から1年ぶりの勝利を収めた。その後、高田道場内マッチで松井大二郎、今村雄介に勝って桜庭和志に続く道場ナンバー2の座を獲得。03年11月のヒース・ヒーリング戦に敗れるも善戦して評価を高め、04年2月にはマーク・ケアーにも勝利。しかし、持ち前のやんちゃ発言が災いしてミルコ・クロコップとの試練の一戦が組まれてKO負け、同年5月にはチェ・ム・ベにいいところなく敗れて再び低迷している。「ありがとう、リングス。俺はもう一度、でっかい花を咲かせるために闘い続ける」

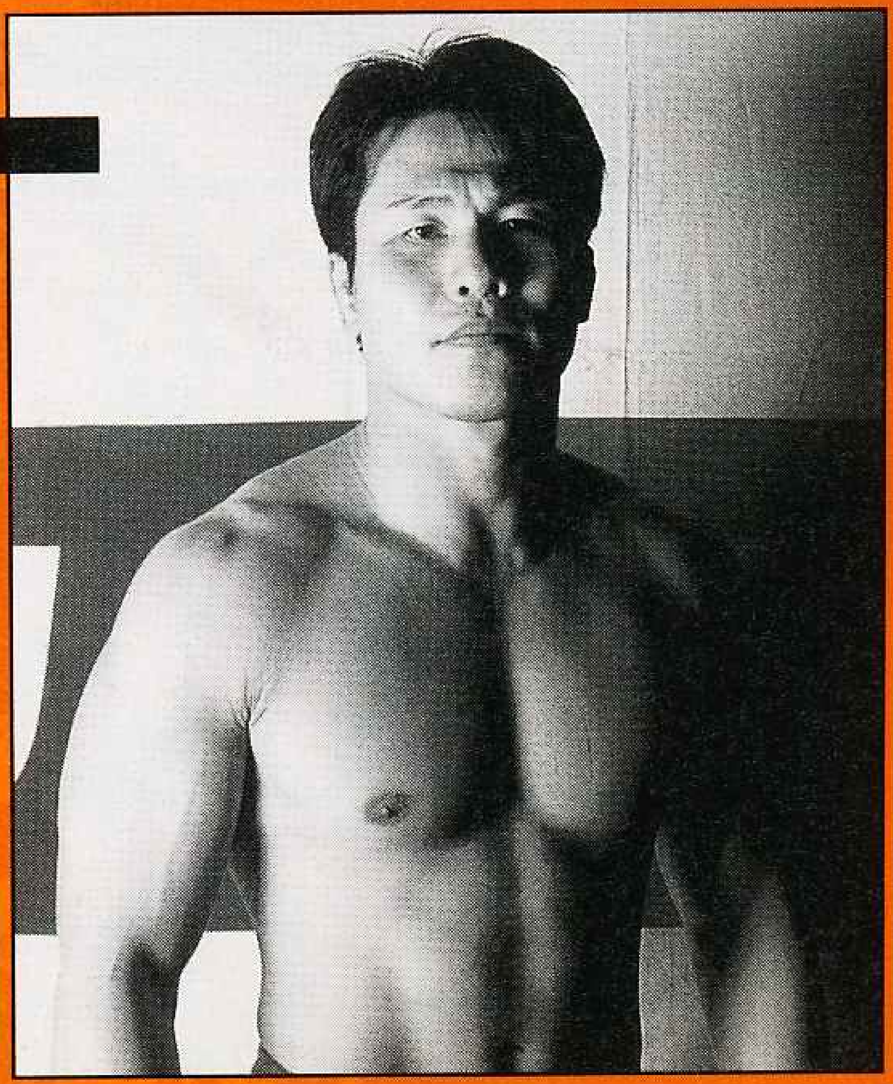


成瀬昌由（なるせ・まさゆき）

活動拠点＝新日本プロレス、K-1

1973年3月15日、東京都出身

推間板ヘルニアで長期欠場後、1試合を行ない01年5月にリングスを退団。フリーとして同年6月に新日本プロレスに参戦表明、7月に田中稔を破って第40代IWGPジュニアヘビー級王者となる。02年2月には新日本に正式入団、IWGPジュニアタッグ王座に挑戦したり、「ベスト・オブ・ザ・スーパージュニア」に参加したりと活躍する。しかし、故障癖は直らず03年2月から右肩負傷のため欠場、5月に行なわれた新日本の総合格闘技路線「アルティメット・クラッシュ」ではルールディレクターを務めた。復帰後、6月にはパンクラスの鈴木みのると対戦。8月からは魔界5号の長井と魔界倶楽部に入る入らないの劇場を繰り広げ、04年3月には初のタッグを結成している。02年12月にはリングス退団後、初の総合ルールに挑みヤン・"ザ・ジャイアント"・ノルキヤに勝利。Gスクエアに出稽古へ行ったり、「成瀬☆教室」というセミナーを開催したりと総合での活動も続けている。



田村潔司（たむら・きよし）

活動拠点＝PRIDE、U-STYLE

1969年12月17日、岡山県出身

2001年4月の試合を最後に、長期休養を宣言してリングスを退団。02年2月にPRIDEへ初参戦し、ヴァンダレイ・シウバにKO負けを喫した。6月にもボブ・サップに11秒でTKO負けを喫するが、9月にはパンクラスの美濃輪育久に判定勝ち。11月、Uインター時代からの因縁があった高田延彦の引退試合の相手を務め、KO勝ち。03年2月には自らが理想とするUWFスタイルのプロレス、「U-STYLE」を旗揚げした。その後はU-STYLEに専念していたが、8月に吉田秀彦と対戦して話題を呼び、袖車に敗れる。12月には桜庭和志との対戦をPRIDEが計画したが、「お互いがベストの状態でやりたい」とこれを拒否、元K-1戦士のロニー・セフォーと闘って勝利している。その後、ホイス・グレイシーとの対戦を表明するも、実現に至っていない。今後もU-STYLEと総合の試合を並行して続けていく予定ではあるが、「総合に関してはあと何戦やるか分からない」としている。U-FILE CAMPでは後進の指導にもあたる。

RINGS JAPAN



金原弘光（かねはら・ひろみつ）

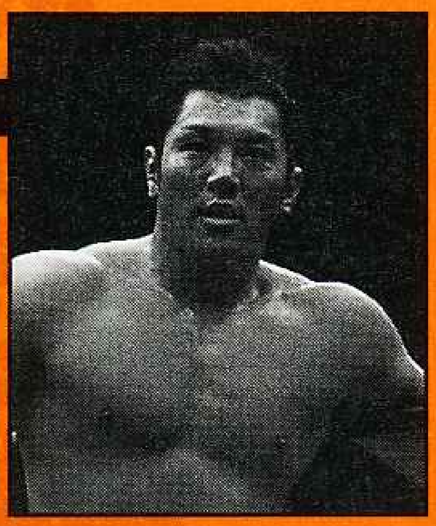
活動拠点＝PRIDE

1970年10月5日、愛知県出身

日本人選手の離脱が相次ぐ中、最後までリングス“最後のエース”として試合を続けた。02年11月にPRIDE初参戦、ヴァンダレイ・シウバと対戦するも、古傷の膝を痛めてTKO負け。その後、膝の手術と古傷のオーバーホールをするため長期戦線離脱。04年5月、復帰戦でいきなりミルコ・クロコップと対戦し、敗れはしたもののフルラウンド戦い抜いた。滑川とはたまに練習はするものの、基本的には独自路線を歩む。「リングスには今でも思い入れがありますよ。所属をリングス・ジャパンのままにしておこうと思ったほどですから」

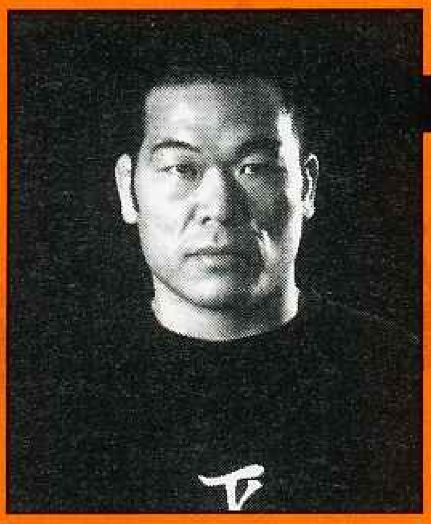
坂田 亘（さかた・わたる）

活動拠点＝ZERO-ONE、ハッスル、PRIDE



1973年3月11日、愛知県出身

01年6月10日、リングス退団。7月には名古屋に「坂田道場エボリューション」を設立。後進の指導にあたりながらDEEPに参戦していたが、01年12月からZERO-ONEに出場、プロレスラーとの二束のわらじを履くようになる。翌年12月には「天下一ジュニアトーナメント」で優勝して、天下一ジュニア王者となった。さらに、02年9月には巨乳グラビアアイドル小池栄子との熱愛が発覚し、世間を騒がせる大物ぶりを発揮。PRIDEに出場する他、小川率いるハッスル軍にも加入し、ヘビー級に転向してプロレスでもハッスルしている。



高阪 剛（こうさか・つよし）

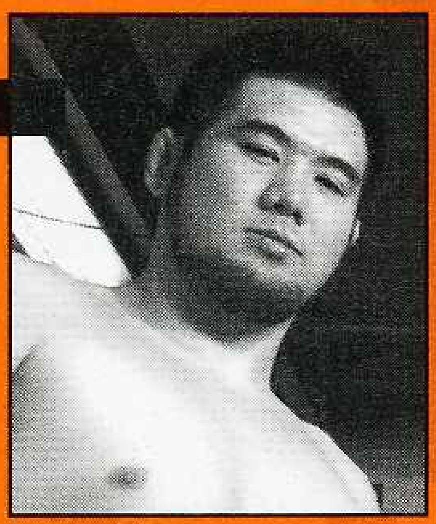
活動拠点＝アルティメットクラッシュ、U-STYLE

1970年3月6日、滋賀県出身

リングスには02年2月の最終興行まで在籍。リングス活動休止後はUFC、DEEPに出場したが、同年10月には新日本プロレスにも登場した。03年1月の高山善廣戦を最後に、「プロレスは難しい。しばらくはやらない」と宣言していたが、04年2月にU-STYLEで田村潔司とUWFスタイルのプロレスを披露した。自らが主宰するGスクエアには、滑川、横井、伊藤、成瀬らが練習に訪れている他、吉田秀彦や高橋義生なども練習に参加し、交流を深めている。また、セミナーや練習会を行なうなど後進の指導にも積極的に取り組んでいる。選手としても今後、試合を続けていく予定だ。

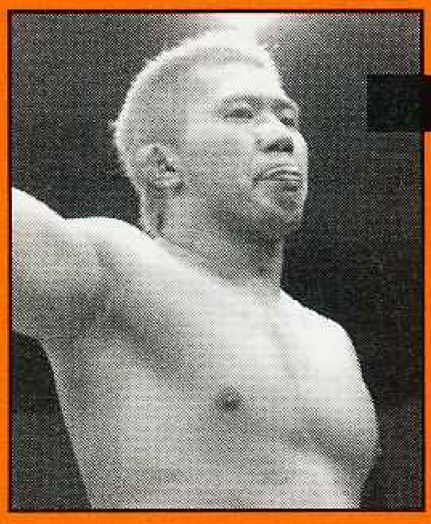
横井宏考（よこい・ひろたか）

活動拠点＝PRIDE、ZERO-ONE、ハッスル



1978年6月8日、北海道出身

01年8月にリングス最短デビューを果たすも、翌年2月に活動休止となってしまった。その後は、DEEP、レジェンドなどに出場、米国総合格闘技大会フックンシュートでは南東部ライトヘビー級王者となる。02年5月からはZERO-ONEに参戦して、プロレスラーに。先輩・坂田とタッグを結成したり、佐藤耕平と「ROWDY」というタッグチームを結成するなどすぐに馴染む。相手が椅子で攻撃してくると、その座る部分をパンチで吹っ飛ばすパフォーマンスが大ウケ。その一方、PRIDEでノゲイラを相手に大善戦する活躍も見せた。



滑川康仁（なめかわ・やすひと）

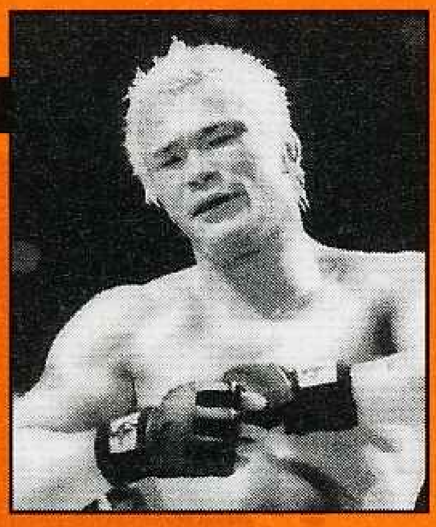
活動拠点＝DEEP、PRIDE、U-STYLE

1974年10月27日、茨城県出身

02年2月の活動休止までリングスに在籍。その後はフリーとなり、DEEPを主戦場に猪木ボンバイエ、PRIDE武士道、韓国グラジエーターなど積極的に出場。田村潔司の主宰するU-STYLEではプロレスラーとしてもデビューした。高阪のGスクエアに出稽古に行き、元ジャパン勢との練習を続ける他、金原とも親交がある。現在は「RISE FIGHT CLUB」というクラスを神奈川県小田原市に持ち、後進の指導にもあたっている。6月には「RISE FIGHT」という自分のDVDも発売された。密かにパチプロにもなりたいという野望も燃やしている。

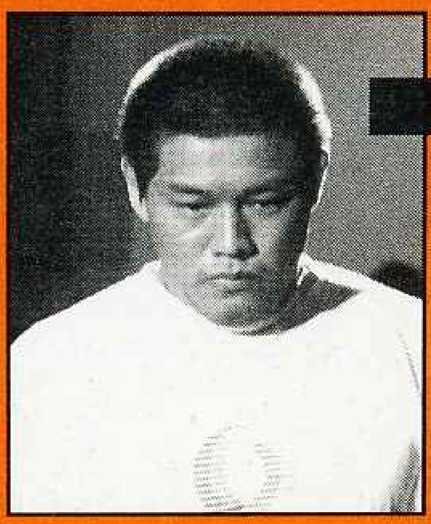
山本喧一（やまもと・けんいち）

活動拠点＝PRIDE、M－1



1976年7月11日、大阪府出身

98年初旬に所属していたKINGDOMが消滅し、同年3月よりリングス参戦。7月1日から正式にリングス・ジャパン所属となったが、99年2月に退団。11月にはUFC-J初代王者となり、前田への恩返しとして01年12月に再びリングス参戦、須藤元気と対戦した。02年11月からはPRIDEに出場、ケビン・ランデルマン、アレクサンダー大塚に敗れている。サイドビジネスで会社を経営していたが、デビュー10周年にあたる今年は選手生活の集大成として選手に専念、打撃を修得するために04年4月には「M-1」でムエタイ・デビューを果たしKO勝ちした。



伊藤博之（いとう・ひろゆき）

活動拠点＝DEEP、U-STYLE

1976年9月11日、静岡県出身

前田日明に憧れてリングス・ジャパン入門、01年9月にデビューするも、僅か3戦にして翌年2月に活動休止のためフリーに。その後はDEEPを主戦場にして、デモリッションなどに出場。なかなか勝ち星を挙げられなかったが、03年5月にドス・カラスJrから反則勝ちで初勝利、7月には奥山崞司に判定勝利して2勝目を挙げた。04年4月にはイギリスでリングスUK代表リー・ハスデルと対戦したが、KO負け。03年2月からは「U-STYLE」でプロレスにも挑戦している。現在はバイトをしながらGスクエアで練習し、今後はプロレスラーとしての活動に重点を置いていく方針である。

成瀬、滑川、横井、伊藤は高阪のジムで共に練習 ヤマケンはムエタイにも進出、それぞれの道を往く

ユートボクシングでの経験を活かしてK－1に参戦したが、プロレスへ身を投じた。

全日本プロレスではエースの川田とタッグを組み、「ジャイアント馬場杯」でも優勝するなどの大活躍。現在は新日本プロレスに活動の場を移し、中堅選手として立派に地位を築いている。プロレス転向組の中では、一番の出世頭と言えるかもしれない。

成瀬は”リングスが潰れる“と聞いた新日本の関係者が、次の活動の場として声をかけ、長期欠場の原因となった推間板ヘルニアの具合が思わしくなかったためと、多少の怪我なら試合に影響しないプロレスの世界を選んだ。新日本ではＩＷＧＰジュニアヘビー級王座を獲得（1度防衛）し、その後もジュニアヘビー級戦線で活躍。かつては”夢の対決“であったパンクラスの鈴木みのるとのシングルマッチも実現した。

しかし、プロレスを生業としながらも総合格闘技への思いも捨ててはいない。2003年12月31日の『K－1ダイナマイト』に出場し、総合ルールでヤン・”ザ・ジャイアント“・ノルキヤをスリーパーホールドで仕留めている。試合後には、「今回は高田道場の山本（宜久）や、横にいる長井（満也）先輩、高阪（剛）たち、リングスのトレーナーたちと練習しました。生まれ育ったリングスの人たちに支えてもらった。自分が生まれた場所、リングスを誇りに思っています」と言い、「新日本の看板を背負ってるんで、いつでも次の総合を受けられるという心構えを持って邁進していきたい。オファーはいつでも受ける」と宣言した。

この二人は特殊な例で、解散後にプロレスに転向した坂田（退団は解散前）、横井、伊藤はちょっと事情が違う。彼らはやりたくてプロレスを始めたわけではなく、食うためにやむを得ず始めた、と言った方が近いだろう。もし、リングスが存続していれば、プロレスをやる事はなかったはず。それでも、嫌々やっているわけではなく、坂田は「プロレスは格闘技より難しい」と言い、仕事としてやりがいを感じている。

ジャパン勢はこのように様々な活動を続けていながらも、「リングスは自分にとって大事な場所」である気持ちが全員共通しているのは嬉しい限り。滑川も、横井も、伊藤も「リングスが大好きでした。解散した時の事を考えると、今でも悲しくなる」と言う。しかし、もうひとつ共通した現在の心境がある。それは、「いつまでも懐かしんでても仕方がない」ということだ。

過去は過去。思い出は大事にしまっておいて、自分の誇りとして新しい道を歩んでいこう…もう後ろは振り返らない。それが、元リングス・ジャパンの仲間たちの、共通した現在の思いである。願わくば、田村や高阪が何度か口にした”リングス同窓会“を1度だけでも実現して欲しい。そう思うのは、きっと私だけではないはずだ。

ZST応援歌！

前田日明の大いなる遺産は、ZSTに受け継がれ進化を遂げている。

リングスの流れを汲み、前田が提唱したKOKルールをさらに「進化」させているのが"リアルバトル・エンターテイメント"「ZST」である。ソフト&ハード両面でリングスの色濃いZSTこそ、前田が目指した真の理想の体現ではないだろうか。

熊久保英幸=文　text by Hideyuki Kumakubo
GBR=写真提供　photo by GBR

「夢の続きを見ませんか？」

元リングス広報の上原譲氏から電話があったのは、リングスが解散して5ヵ月後ぐらいの時期だったと思う。彼が言うには、軽・中量級を中心とした大会をやりたいとのことだった。

当初、リングスでは最後の大会となってしまった02年2月大会より、中量級の賞金トーナメントを開始するプランが決定していた。その発案者であり、参加選手との交渉にあたっていたのが上原氏だったのである。彼は言った。「ほとんどの選手に出場の了承を頂いていたのに、こんな形になって申し訳ない。中量級のトーナメントだけでも、何とか実現させたいんです」。そのために、参加選手を引き止める説得とスポンサー探しを並行して行なっていると言う。冒頭の言葉は、私が編集を担当したリングス最後の増刊号のタイトル、「未完の夢」に引っ掛けてのものだった。

それから間もなくして、上原氏は団体を立ち上げた。それが「ZST（ゼスト）」だったのである。

上原氏は当初、大会名を「バトル・ジェネシス」にしようとしていた。この大会名は、リングスが後期に行なっていた若手日本人選手を中心としたイベントの名称である。上原氏は「自分はリングスで育った人間。それに、中量級のトーナメントはリングスで行なうはずのものだったから…」ということで、リングス色の濃い大会にしたかったからだ。そのため、古田リングアナ、野呂田メディカルアドバイザー、和田&平レフェリーや、当初はジャッジも藤原敏男（元キックボクサー）、太田章（ロス&ソウル五輪レスリング銀メダリスト）といったリングスでお馴染みのリングサイド・スタッフを起用した。

拘りはそれだけにとどまらず、試合前の選手紹介VTRはリングス中継の制作会社に依頼、テレビ中継の実況&解説もリングス同様に高柳&熊久保が務めている。

本当は赤いブレザーを着た、前田日明にもリングサイドにいて欲しかったが、それは諸事情により叶わなかった。だから、「バトル・ジェネシス」の名称の使用は断念した。その代わり、KOKルールの使用は前田から了承を得る事が出来た。

エースとして白羽の矢が立ったのは、リングス中量級で無敗を誇っていた小谷直之だった。他にも矢野卓見、所英男、佐々木恭介といったリングス参戦者に声を掛け、リングス・リトアニア&オーストラリアの参戦も取り付けた。「本当は滑川、横井にも出て欲しかった」と上原氏は当時語っていたが、二人が出場しなかった事が、逆にZSTのカラーを決定付けることになる。

それはライト級、すなわち70kg以下の選手のための大会として発展していく事になったからだ。小谷、所、矢野、今成正和の全く個性が違う中心選手4人には"ZST四兄弟"というチーム名（？）が付けられた。彼らはKOKルールで、それこそ水を得た魚のように輝きを放った。

02年11月の旗揚げ当初は、タッグマッチが行なわれる以外はリングスの「バトル・ジェネシス」の域を出なかったが、03年6月の「ZST3」からはより個性が発揮される事になる。「ZSTは競技性主体よりもお客さん主体の、リアルバトル・エンターテイメントです」と宣言したのだ。具体的には判定決着を廃止、膠着ブレイクをより速くすることによって、よりアグレッシブでスピーディーな一本勝ちを促すようにルールをマイナーチェンジしたのである。

試合中にはトランス・ミュージックがバックに流れ、選手紹介VTRも選手の個性がよく分かるようにお笑い要素も入れたものに変わった。さらに、ラウンドガール（通称ZSTガール）は"業界随一"とも言われる容姿端麗な女の子を揃えてタレント化し、試合に華を添える。会場は03年3月の「ZST2」よりライブ会場としてお馴染みのお台場Zepp Tokyoを使用し、ライティングや音響にも力を入れてよりライブ感覚を取り入れた。

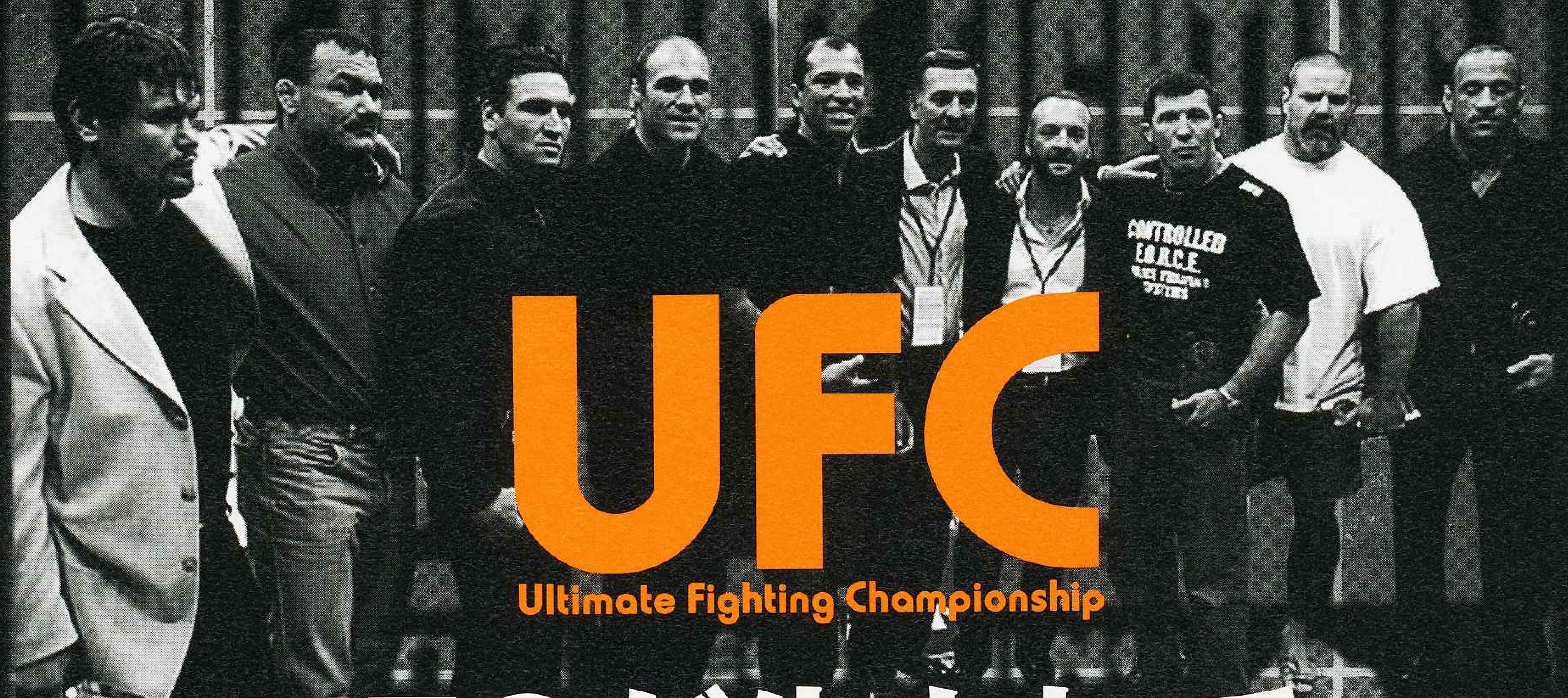
ZSTの人気に火がついたのは、03年11月に開催された「ZST・GP」だ。そう、上原氏が暖め続けてきた中量級の賞金トーナメントが遂に実現したのである。それまでの大会はトーナメントへの出場権を賭けた試合として位置づけており、第一期ZSTの集大成として開催された。試合はまさに、「KOKルールの魅力がフルに発揮された」と各マスコミが報じたとおりの、スピーディーでアグレッシブな一本勝ちの連続となった。この大会が話題を呼び、以後の大会はソールドアウトが続いている。

「ZST・GP」を見て、思った事がある。それは、KOKルールは中量級選手の試合を、より面白く見せるためのルールだったということだ。スピードと速い展開のテクニックを重視するKOKルールだからこそ、中量級の特性がより生かされるのである。

リングスは"U系"という言葉で括られたように当初はプロレスの枠内で語られていたが、KOKルールの導入によって競技性を増し、格闘技に完全にシフトして行った。しかし、観客の目も意識するエンターテイメント性も持ち続けようとしていた。観客の目を慣れさせて、徐々に理想の形を追求していこうというのが、前田日明が口癖のように言っていた「進化」なのである。

その前田の理想としていた形は、現在のZSTにあるのではないか。観客が楽しめる事を第一に置いたエンターテイメント性を重視しながらも、小谷や所の実力は競技性を重視する修斗の選手たちと較べても、なんら遜色のないレベルを持っている。前田の言った、「ルールが試合をデザインする」という言葉はZSTによって証明され、若い層を中心に支持されている。ZSTを見ていると、「前田が本当にやりたかったのは、これだったんだ」と思う。

リングスは志半ばで帆を畳んだが、前田がやって来た事は決して無駄ではなかった。リングスを見て育った世代が、前田が提唱した大いなる遺産を受け継いで、さらなる「進化」を遂げている。その進化過程に私たちは立ち会っているのだ。「夢の続き」は、まだ終わらない。

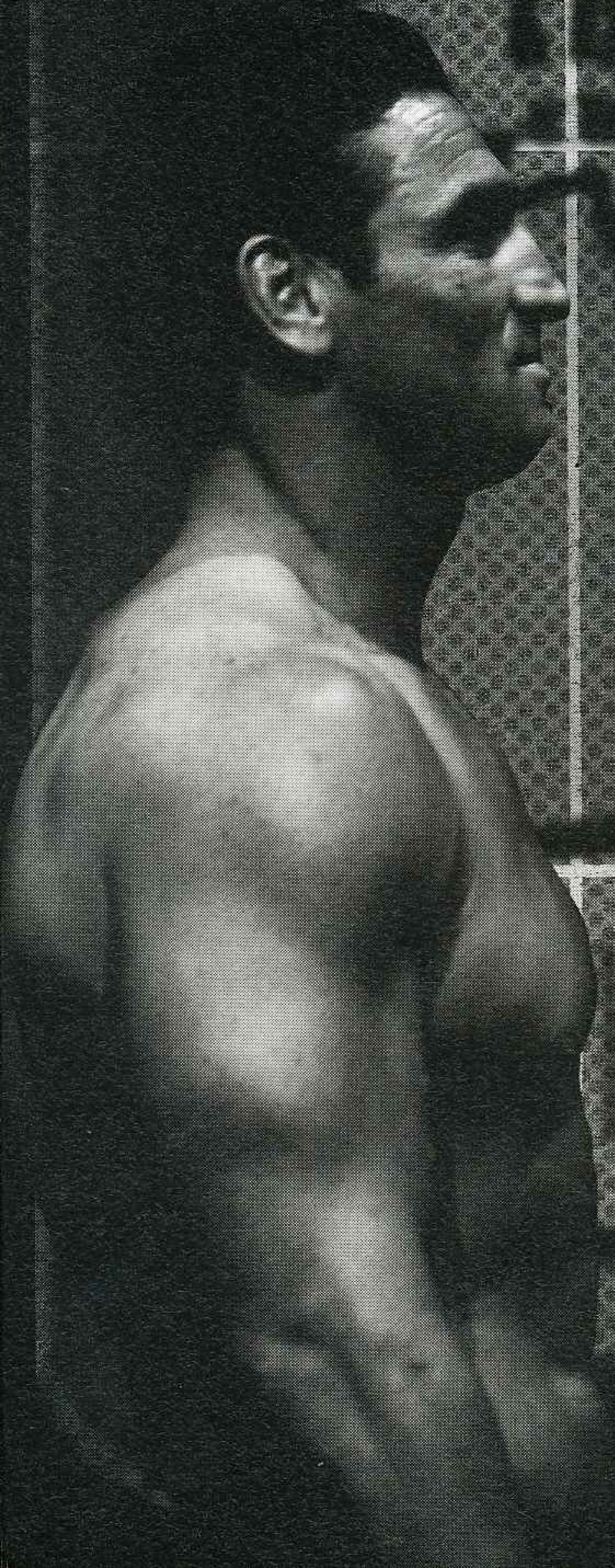


UFC

Ultimate Fighting Championship

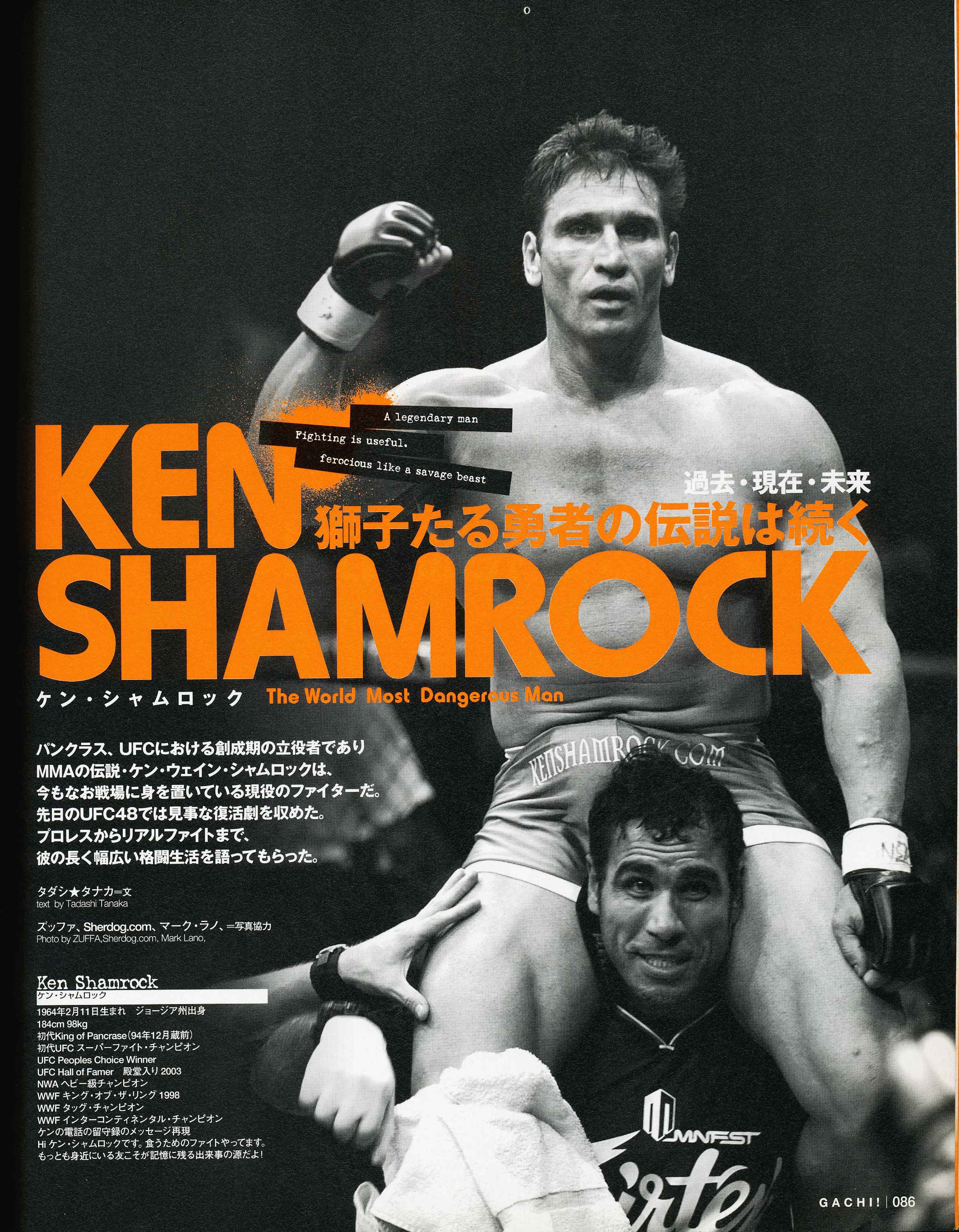
UFCが生まれて、そして総合格闘技10年…

1993年11月コロラド州デンバーにて第1回アルティメットファイティングチャンピオンシップ開催
1994年7月東京ベイNKホールにてバーリトゥード・ジャパン'94 開催



今をときめくPRIDEが始まってから今年で7年。
そもそもMMAが世に知れる契機となった
衝撃のUFCが誕生したのはもう10年前である。
「もう」なのか「たった」なのか。
一見華やかに見える闘いの舞台だが、そこにあがる選手たちは、
それぞれの様々な思い、生活、人生を抱えて闘ってきた。





A legendary man
Fighting is useful.
ferocious like a savage beast

KEN SHAMROCK

過去・現在・未来
獅子たる勇者の伝説は続く

ケン・シャムロック　**The World Most Dangerous Man**

**パンクラス、UFCにおける創成期の立役者であり
MMAの伝説・ケン・ウェイン・シャムロックは、
今もなお戦場に身を置いている現役のファイターだ。
先日のUFC48では見事な復活劇を収めた。
プロレスからリアルファイトまで、
彼の長く幅広い格闘生活を語ってもらった。**

タダシ★タナカ=文
text by Tadashi Tanaka

ズッファ、Sherdog.com、マーク・ラノ、=写真協力
Photo by ZUFFA,Sherdog.com, Mark Lano,

Ken Shamrock
ケン・シャムロック

1964年2月11日生まれ　ジョージア州出身
184cm 98kg
初代King of Pancrase（94年12月蔵前）
初代UFC スーパーファイト・チャンピオン
UFC Peoples Choice Winner
UFC Hall of Famer　殿堂入り 2003
NWA ヘビー級チャンピオン
WWF キング・オブ・ザ・リング 1998
WWF タッグ・チャンピオン
WWF インターコンティネンタル・チャンピオン
ケンの電話の留守録のメッセージ再現
Hi ケン・シャムロックです。食うためのファイトやってます。
もっとも身近にいる友こそが記憶に残る出来事の源だよ！



UFC48 PAYBACK

04年6月19日

競技路線のUFCが スペクタクル重視に!?

ケン・シャムロック(1R86秒KO)キモ

ケンとティトの試合が目玉となったUFC40（02年11月）ではPPVが15万件を記録。これによって96年2月以来のキモ戦が実現された。現役ランキング戦よりオールドタイマーのカードがメインになってしまうのはシュート革命の退化なのか？

船木に教わったサークル・フットワークで差しあいのままオクタゴンを徘徊。キモが顔を下げた瞬間ヒザ蹴りがアゴに炸裂。



――まずは、UFC48でのキモ戦の勝利おめでとうございます。40歳という年齢を思えば、誰もが感慨を持って貴方がオクタゴンに入るのを見つめ、そして印象的な秒殺KOを堪能させてもらいました。

ケン ありがとう。ハードなトレーニングをやり続けられるハートを持っていれば、やりとげられるってことだね。

――今回は開催地がラスベガスだったことで、ステロイドの検査もありました。

ケン ああ、長年ごちゃごちゃ言ってくる輩がいたからなぁ。ネガティブなコメントは無視してるんだよ。証明できたんだからいいじゃないか。やるべきことをやって（勝てば）それがすべてだろ？

――さて、さっそく大会終了後にティト・オーティズと激しい口論になったことが伝えられています。貴方の場合、プロレスもやっているので（こういう口論が）どこまで本気なのかと冷ややかに見ている人間も少なくありません。ドン・フライ戦（PRIDE19）前の「ハードロック・カフェ」での記者会見でも、あわやの乱闘騒ぎでした。これらはパフォーマンスなんですか？

ケン フライに関してはリアルだよ。なにひとつもワークト・アウト（演出）した部分なんかないぜ。俺は俺なんだ。アイツとは問題があった。それをお互いが表に出したってことさ。少なくとも俺は芝居してるんじゃない。あいつがどうなのかはわからんけど。

――つまりショービジネスではないんですね？

ケン 俺は感情的なファイターなんだ。相手の気に入らないところ、あるいは嫌いなところを持ち出して、怒りの感情を創ることも戦いの動機になるからね。『怒り』は重要なんだよ。

――なるほど。それは面白い自己分析です。さて、少年時代のことからお聞きしたいのですが、アイリッシュ系のボブ・シャムロックさんが養護施設をやっていて、そこであなたは育てられたんですよね？　だからヒスパニック系のフランクとも血のつながりはない。貴方はイタリア系ですよね？

ケン そうだけど血は関係ないよ。ボブは父親だし、フランクはずっと一緒にグループ・ホームで育ったんだから弟で間違いない。

――でも我々は、フランクとの不仲のニュースを何度も聞かされたんですが…。

ケン あのさ、どこの家族だって何か問題は起こるもんだろ。良い時もあれば悪い時もある。でも人生は短いだろ？　フランクに怒ったときはあったけど、もうそれは過去のことだ。両方にミスがあったんだけど、今はもう前に進まないとな。

――フランクは試合をするんですか？　年末に猪木祭に出る話があったり、DSEと契約したという噂も聞きました。

俺は感情的なファイターなんだ、怒りは重要なんだよ

フランクとの不仲はもう過去のことさ

ケン う～ん、俺は奴の契約交渉には関わってないからわからないよ。多分、交渉の条件にフランクは不満なんじゃないか。

――貴方がアメフトの格好した写真をネットで見たことがあって驚きました。

ケン プロのフットボーラーを目指していたよ。高校でもカレッジでもやっていたからね。（カリフォルニア州の）サクラメントではセミプロでもあった。ただ、ちょうどその頃はプロレスに入門しようとしていた時期でもあったんだ。

――ナイトクラブの用心棒をしていて、"ワンパンチ・シャムロック"と呼ばれていた時期もありましたよね。

ケン ああ、タフマン・コンテストにも出たからな。海軍の仕事をやって、さてこれからどうしたものかと迷っていた時期だよ。

――それでボブさんが、プロレスラーになることを薦めて、ノースカロライナに行ったんですよね？

ケン その通りだ。ネルソン・ロイヤルとジーン・アンダーソンのキャンプに申し込んでくれた。それで半年後にはもうプロレスラーだよ。ネルソン相手にデビュー戦だからね。

――そこからのブッキングで全日本プロレスに参戦したのが日本での初登場ですね。

ケン ああ、ミスター馬場の所だ。そもそも俺は海外に出たことがなかったからね。文化の違う国に来てとにかく驚いたっていうのが第一印象かな。みんな親切でお辞儀したりするし、尊敬を持って接してくれたしね。エラく昔のことのように思える。

――なにか当時のエピソードがあればお願いします。

ケン 小橋ともやったよ。それからカンナム・コネクション（エキスプレス）のダグ・ファーナスには世話になったし、タッグで馬場とも当たったしね。対戦相手はバラエティーに富んでいてすごく勉強になったなぁ。俺はまだ6ヶ月の経験しかないヒヨコなのに、他の連中はもう何年もやっているベテランばかりだったからね。馬場からも直接今までとは違ったフォールの仕方とか、色々なムーブ（技のこと）を教えてもらったんだよ。

――道場で教わったんですか？

ケン いやいや、ツアーしていたから試合前の合同練習があってね。素晴らしい経験だったね。

――小橋は現在チャンピオンです。

ケン ああ、知ってるよ。若手時代は"ジェットジル"って呼んでたんだ。とにかく動きが早かったからね。ブン、ブン、ブンと次々にムーブを出していた。当時からずば抜けていたからよく覚えている。それで彼が武道館でメインを勤めたとき、俺はPRIDEのメインだからね。（ノア情報に対して）へえ～、東京ドーム（7月10日）でやるんだ。ちょうど彼とはキャリアが並行してたんだよなぁ。

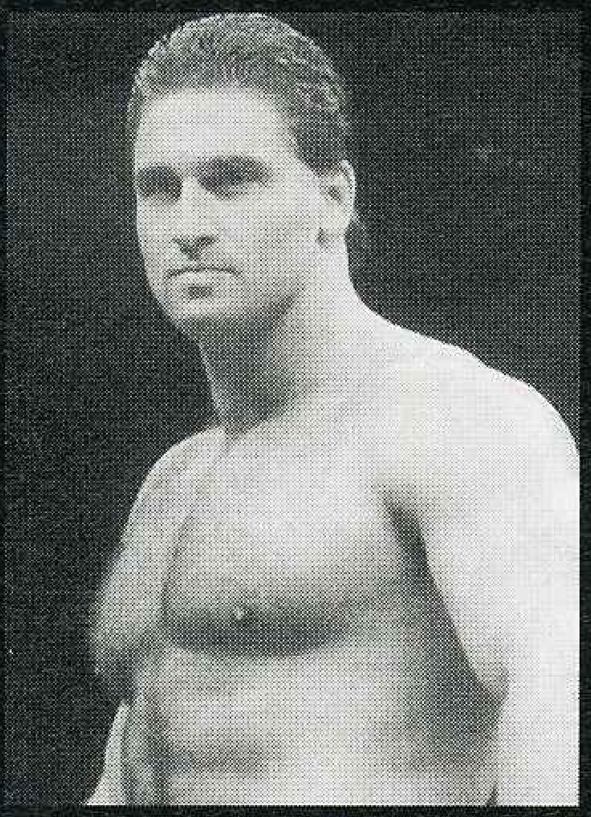
――それからUWFとの運命の出会いがありました。

ケン 最初にあのスタイルを紹介してくれたのはディーン・マレンコだよ。そこからサミー空中に話がいって、安生戦がデビューだった。大阪の大会場だったから、ああこれで俺はプロのファイターになったと思ったね。2戦目は船木だよ。

――それから藤原組に移籍しました。次のステップへの実験が試みられた団体です。東京ドーム（92年10月）ではドン・中矢・ニールセンに勝利しています。

ケン ああ、あれはシュート（真剣勝負）だった。高橋（義生）もタイのキックボクサーに勝利した。この2つはリアルファイトだったんだ。あっという間の秒殺さ。簡単だったよ。

――そして93年にパンクラスが創立されます。それまでのプロレスとは違っていました。最初にオール・シュートのグループとして出発すると聞いたとき、貴方はそれが成功すると思いましたか？



ノースカロライナ時代、まだ若きグリーンボーイのケン・シャムロック。

ケン 俺は単純にグレイト！としか思わなかったなぁ。シュート・スタイルがやりたかったわけだしね。ただ誤解しないでくれよ。自分はプロレスも両方尊重していた。ただ（パンクラスに加わったのは）船木や鈴木と友達だったというのがあるからね。

――いざ始まってからも、真剣勝負が続けられるのかとか、お客に伝わるのかなど、不安はあったでしょうね。

ケン 確かにタフだったね。でも時間がたつにつれてお客さんもパンクラスがリアル・スタッフだと気が付いてきたんじゃないかな？

――じゃあ、あんまり心配はしてなかったんですね。

ケン ああ、俺はもとから小さなことは気にかけてなかった。リアルにやりたかったわけだしね。

――船木に勝ったのは嬉しかったでしょ？

ケン まったくだ。それまでの俺たちは道場では極めあっていたけど、リングにあがればオール・エンタテインメントでやっていた。ところが真剣勝負での初のリアル興行ってことになったときに、仲間内では俺が一体どの程度までやれるかってことがよく話題になっていたんだよね。それがサイドチョークで勝てたから、証明したって思いがあって喜びも格別だったね。

――それから1ヶ月後にUFCが始まります。貴方はUFC、パンクラス両方にかかわったキーパーソンでしたね。

ケン おかしなことなんだけど、そうなってしまったよね。UFCのチャンピオンになり、パンクラスのチャンピオンでもあった。UFCで闘うことによって、アメリカのファンが俺のスタイルがどこから来ているのか知りたがるようになり、パンクラスを紹介する役目を負うようになった。同時に日本のファンにはUFCを広めたってことかな。

――まったくです。「ホイス・グレイシーがMMAを始めた」って意見がありますが、私は貴方が最大の貢献者だと信じて疑いません。

ケン グレイシーはアイデアを持ってきた。でもそれを一般にポピュラーにしたのは俺だよ。そういう風に解釈しているなぁ。

電話取材が長くなったので一度終了させて再度トライした。二度目の国際電話をとったのが奥さんかと思われる女性だった…。

――あの～、失礼ですがWWFで妹役として出ていたライアン・シャムロックことアリシア・ウェブさんですよね？（PRIDEでの試合にも付いてきていて試合直後にキスした場面がPPVにも残っている）

トーニャ 違うわ。それはケンの昔のガールフレンドでしょ？ 私の名前はトーニャ。ケンとはお互いが10代の頃からの幼馴染なの。一緒にスーザンビルで育って、27年来の付き合いなの。そして結婚したってわけ。私たちには7人の子供と孫（全部両者の連れ子）がいるのよ。

――ええ～、それは知りませんでした。

（電話をケンに替わってもらう）

一体いつ結婚なされたんですか？

ケン え～と、2月だよ。

――今年ですか？ それじゃ新婚じゃないですか。まったく知りませんでした。

ケン いや～、プライベートは公開したくないからね。プレスには言ってなかったな。

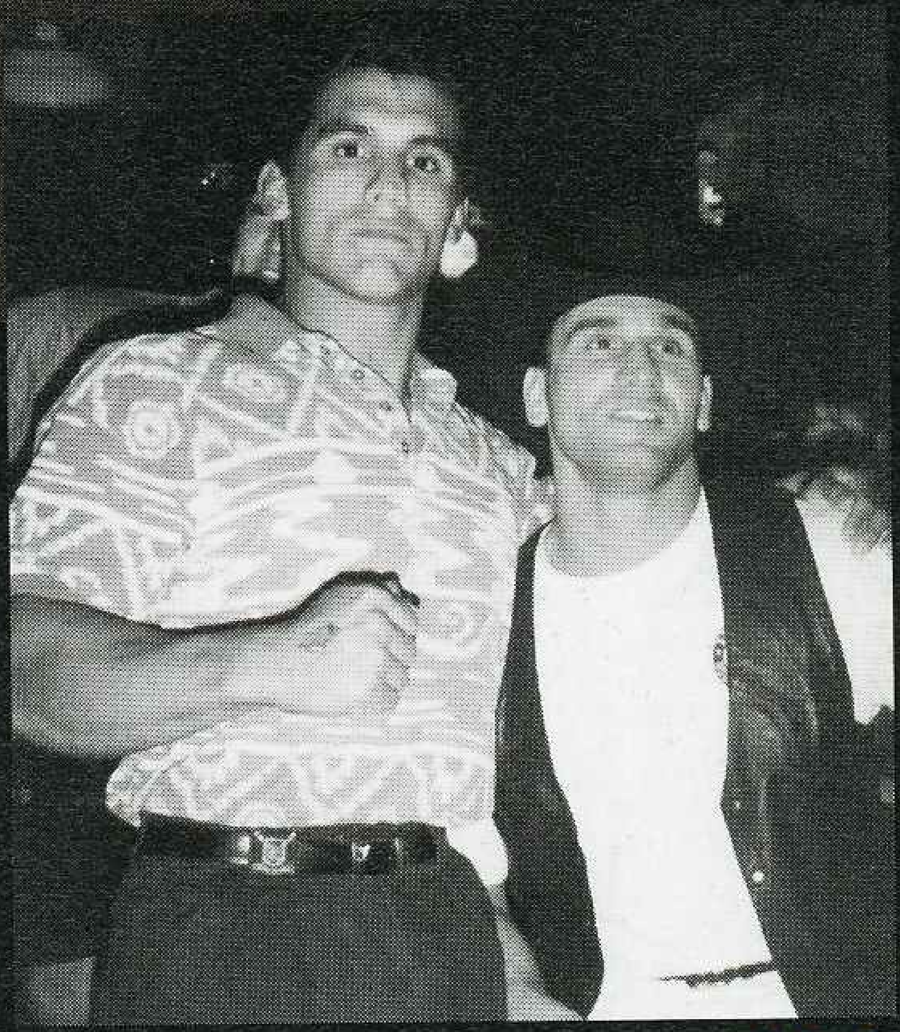
――おめでとうございます。さて、パンクラス時代に話を戻したいと思います。真剣勝負という革命は10年続いてしまいました。

ケン 『これはグレイトなことだ』とは思っていたけど、MMAの将来のことまでは深く考えてなかったなぁ。最初に将来のことを意識して考えるようになったのは、ACL（前十字靱帯断裂、及び半月板損傷）をやっちまったあとだよ。そこからUFCやパンクラスがどこに行こうとしているか考えるようになった。

UFC Era
ユーエフシー・エラ



左から、ケン、ボブ、フランクのシャムロック親子。これはUFC6でケンがダン・スバーンを破った際の祝勝パーティ。



フランクシャムロックとのツーショット。この後ケンとフランクはライオンズデンの所属の問題で仲たがいをしている。



ベルトをもって自宅でご満悦のケン。

グレイシーがアイデアを出し 俺がポピュラーにしたってわけさ

――ケガをしたのはいつでしたっけ？

ケン え～と、いつだっけ…？ 少なくとも俺は、その後のドン・フライ戦、ティト・オーティズ戦は治してないまま試合をしたんだ。でも今はもう完全に手術をして、それからキモをぶっ潰してやったってわけさ。

――そのキモ戦ではエリック・パーソンをトレーナーに迎えました。彼は修斗の元チャンピオンとして日本でよく知られています。どうして彼とつながったんですか？

ケン いろんなトレーナーを探していたところに、彼が来たんだよ。彼が日本で戦っていたことも知っていたし、ピンとくるものがあったんだ。ああ、彼とならやっていけるってね。

――日本のマニアが喜ぶストーリーですよ。彼はもう試合をしないですかねぇ？

ケン もう教えるだけのようだね。ダン・イノサントとも一緒だし、彼自身の道場も持っている。

――パンクラスのタイトルマッチがありました。そして当時貴方にはUFCからの勧誘もありましたね。

ケン そう。俺はアメリカの方で自分を試してみたかった。でもパンクラスは、チャンピオンでいるなら活動は制限するといってきたんだ。UFCで戦いたいと思ってる俺に対して、彼らはそれ以上は望んでいなかったということさ。それ以上は勘弁してくれよ。

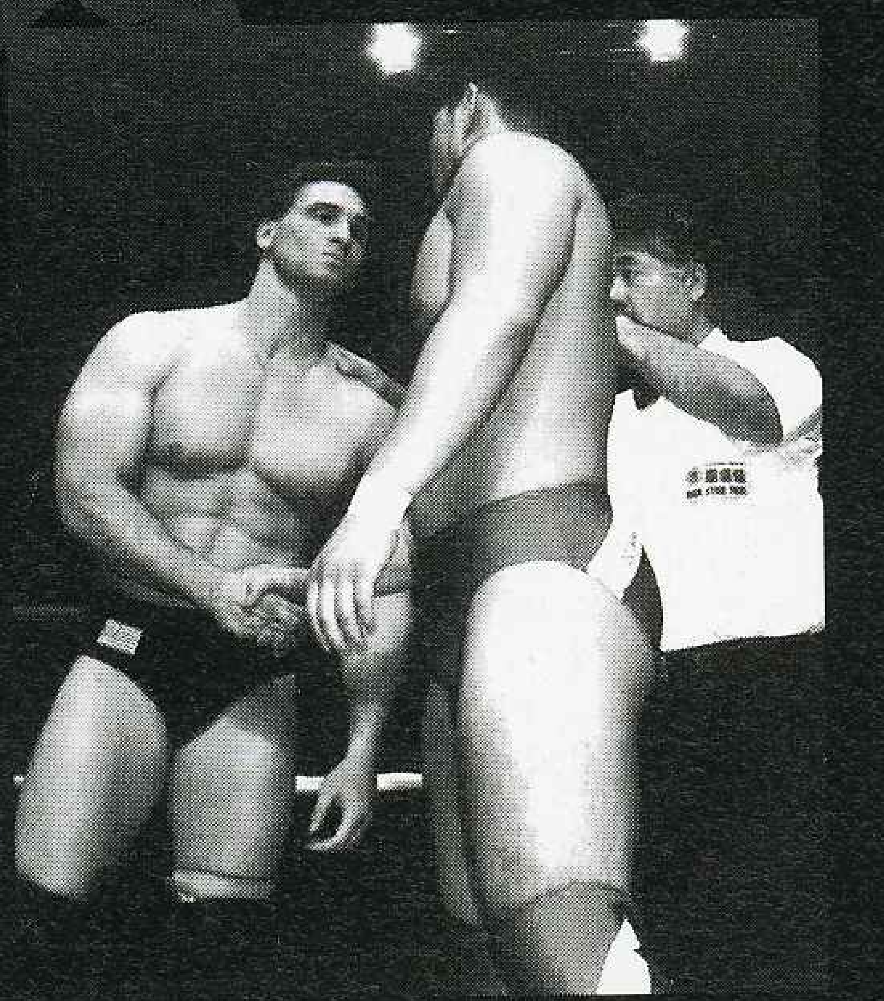
――その後、貴方はパンクラスと契約のことで訴訟になっていますね。

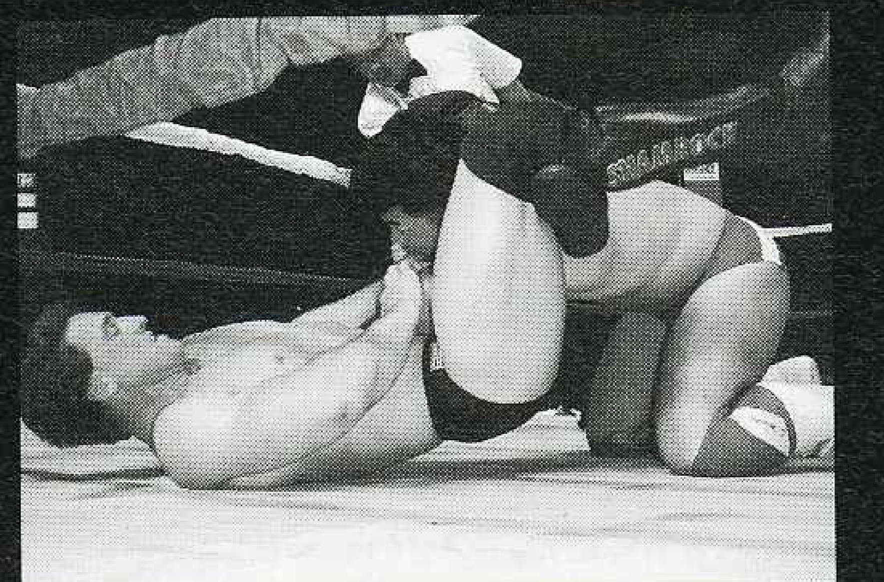
ケン それも何も答えられないよ。なにもしゃべってはいけないという条件になっているものだから。

――パンクラス時代は素晴らしいものでした。

ケン まったくだ。そりゃハッピーな時期もあれば、そうでない時期もある。でもそん

藤原組
フジワラグミ





藤原組時代、鈴木みのるとの試合。パンクラスにケンが再登場する日は来るのだろうか。

WWF Era
ダブリュダブリューエフ・エラ



WWFのバックステージにて。ケンの右でシャムロックTシャツを着ているのが幼なじみのフレッド・ビレトニコフ・ジュニア（NFLの伝説的人物の息子）。右から二番目が父親のボブ・シャムロック。



WWFでのオーエンハートとの試合前。レガースが印象的。彼はシュートスタイルのギミックで活躍していた。

なことはそもそもはじめての経験じゃない。よくあることなんだ。他の日本のプロモーションでもそういう問題はしょっちゅう起こっているだろ。オフィス側とファイターがうまくいかないってこと。

――いつかパンクラスにカムバックする姿をイメージできますか？　それとももう和解はないのでしょうか？

ケン いや、ネバー・セイ・ネバー（諺で「物事に不可能なんてない」）だよ。なにか問題が起こったとしても、俺はそれを乗り越えていく。うまくいかなかったからといって、それで人を憎んでもしょうがないじゃないか。俺はあの時自分が正しいと思った道を行ったし、彼らは彼らが正しいと思った。もう終わったことだよ。パンクラスのリングに上がることだってあるかもしれない。

――話題をWWFに変えましょう。97年2月のRAWに突然登場しました。4月の東京ドームでの橋本真也戦が発表されていたので関係者は驚きました。

ケン その発表は間違いだよ。俺は新日本とは正式に契約してなかった。まだ交渉の段階で、その後彼らは答えを持ってこないままだったんだ。親父のボブはそれと同時にWWFとも交渉していて、そっちが先に条件がまとまったってわけさ。

――非常に正しい選択でしたね。UFCはケーブル放送から締め出されて苦難の時期にちょうど突入しました。一方でアメリカのプロレスは空前絶後の繁栄を迎える前夜でした。WWF時代は貴方にとって何だったのでしょうか？

ケン ただツアーがキツいのなんのって…。トレーニングする時間が全然ないんだぜ。食事はおかしくなるし、生活が不規則になる。とにかく疲れきってしまったよ。

――でも、ビンス・マクマホンが電話してきたら出る気はあるんでしょ？

ケン そうだけど、今はまた（WWEの）ビジネスが落ちてるからなぁ。だからインディーのショーには出てるけど、自分にとってはまたUFCの方が魅力的になってきているんだ。

――なるほど。タイミングですよね。ところで、貴方のサイトをみると、次に闘ってほしい相手をファンが投票するようになっていて、ティトとの再戦、タンク・アボット戦に混じってビル・ゴールドバークの名前もありました。あれは何だったんですか？

ケン 一緒にトレーニングしたこともあるし、彼がMMAに興味を持ってることも知ってたからね。彼ほどの有名なスターが俺と闘ってくれたら業界にとって良いことだろ？

――でも彼は、貴方の友人なんですよね？

ケン いや、これはビジネスなんだから。もし彼がMMAをやるんだったら、いまさら一からなんて出来ないだろ？　彼が興味があってやってみたいって言うんだったら、俺みたいな奴と闘うしかないじゃないか？　だったら喜んで受けますってこと。それだけだよ。

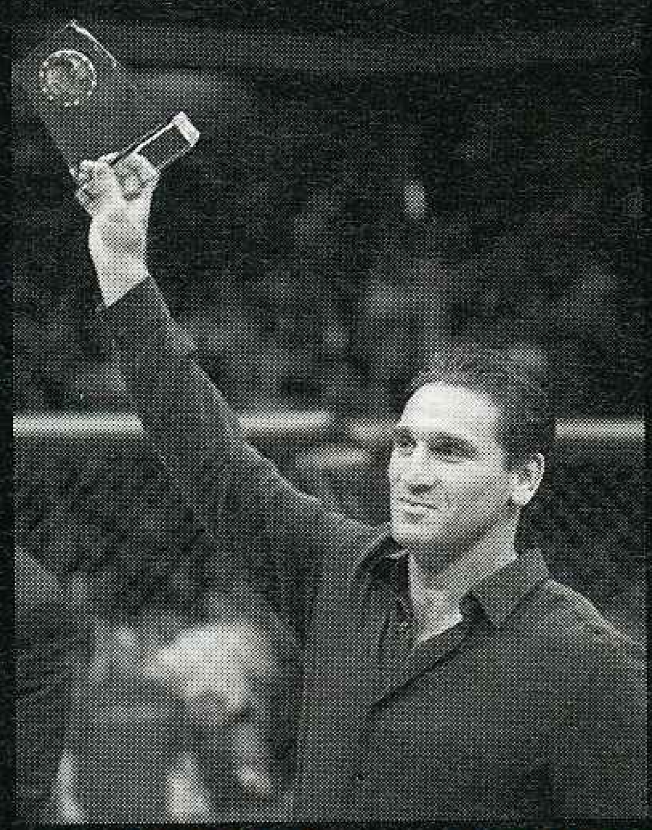
――さて、ライオンズ・デンについてお伺いします。いわゆるその名前の道場というのは存在しないんですよね？

ケン いや、そんなことはないさ。そういう

WWFはツアーがキツくてまいったよ
俺はまだ燃えている、あと何試合だなんて考えたくもないなぁ

Hall of Fame
ハールオブフェイム





昨年11月に行われたUFC45ではUFC10周年ということで、UFC HALL OF FAMEの発表が行われた。ホイス、コールマン、フライ、タンクアボットなどとともにケン・シャムロックも受賞。ホイス・グレイシーとの握手は長くMMAを見てきた人達には感動的なシーン。

特定の場所をもう持ってないってことは言えるけど、チームはずっとサポートしているし、俺のトレーニング器具が置いてあって彼らがトレーニングする場所もある。それがライオンズ・デンであって、いわゆるキャンプ（合宿付訓練コース）の運営はしなくなったというだけさ。ガイ・メッツァーはダラスでやってるし、マイキー・バーネットはオクラホマ州タルサでがんばっている。（ライオンズ・デンの）スピリットは永遠なんだよ。

――尊敬する選手の名前を挙げてください。

ケン マット・ヒューズは（MMAの）すべての要素を持っていて、しかも人間的にいい奴ときている。全く偉そうにしないし、気さくにしゃべれる男だけど、パウンド・フォー・パウンドではダントツの実力者だ。BJペンも同じだね。小さいけど素晴らしい。ヴァンダレイ・シウバがいかに凄いかは皆がわかっているだろう？　フランク・ミアもがんばっているじゃないか。

――イアン・フリーマンにロンドンで負けてましたよ。

ケン それはまだ彼が学んでいる段階の敗戦だろ？　今どんどんよくなっているよ。ヘビー級ではベストのサブミッション・ガイだと思うんだ。

――貴方は彼と戦いたいですか？

ケン まぁ今はティトとの再戦が優先課題だからね。でもそのカードは十分にありだな。

――しかし、若い選手の名前ばかり出てきたんで驚きました。もっと古い選手の名前でコメントいただけませんか？

ケン それなら船木だな。いつも一緒に練習していたし、俺たちはいい試合もやった。彼からいろんな技術も学んだしね。ファイターとしても、人間としても尊敬しているよ。

――船木は俳優になってしまって、プロレスにも総合にも戻ってきてません。

ケン それが船木だよ。俺が尊敬する点でもある。スパっと辞めたからね。

――貴方もある時期、将来は映画に進みたいとか言ってませんでしたか？

ケン ははは。まぁ何度かチョイ役で出たことはあるけど、自分はそれを職業にしようとは思ってない。

――ファイターですからね。

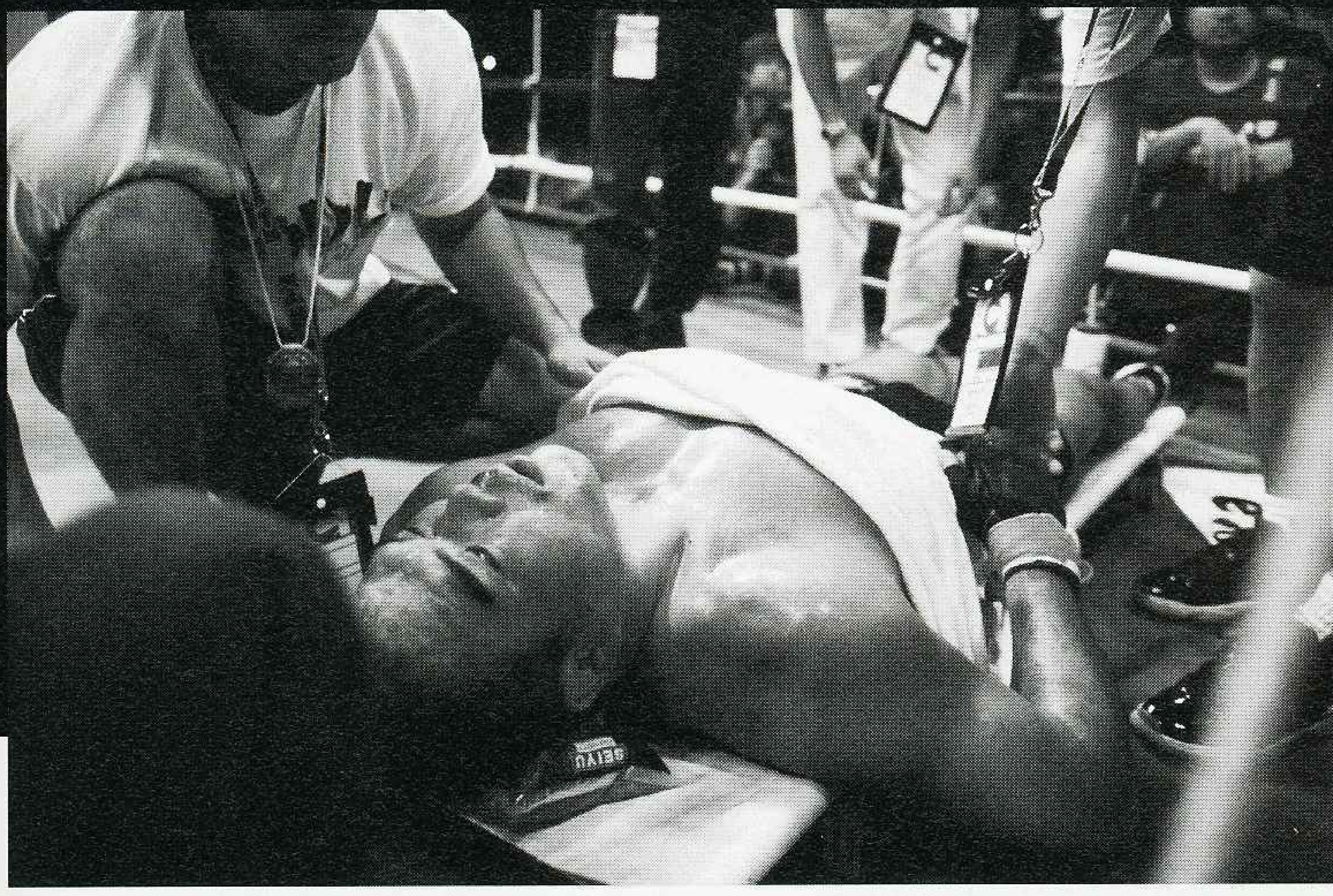
ケン へへへ。

――今後の貴方はどうなるんですか？　たとえば「あと3試合で終わり」とか、「45歳までやる」という風にゴールを決めているんですか？

ケン いや〜、そういうのはないなぁ。やれるだけやりたいってのが本音だよ。俺はまだファイアー（炎）を持っている。まだデザイアー（願望）もある。そしてボディー（肉体）もまだ付いてきている。この3つの要素が備わり続けている限り、ずっと続けていきたいね。あと何試合かなんて考えたくもないね。

――素晴らしいです。なにか日本のファンにメッセージはありますか？

ケン ああ、俺は日本とアメリカで15年間ファイトしてきたからなぁ。とにかく自分を応援してきてくれた皆さんには感謝の気持ちで一杯だよ。ありがとう、ありがとう、ありがとう！



Gachinko Column

［総合格闘技の現在を考える］

ガチコラ! vol.3

「マジで死んだ?!」と思った

最近ではどの団体も選手の身の安全を考慮し、試合を早めに止める傾向にある。凄惨で残酷な試合は確実に減っている。いま思うと、初期のUFCやバーリトゥードは、思わず目を背けたくなるようなシーンが多かった。

その中でもUFCは、暴力と流血を売りにしており、特に第二回大会では、失神した相手に馬乗りになり、エルボーを落とす場面が連続して、怪我人が続出。当時、UFCのレフェリーには試合を止める権限がなく、選手自身のタップか、セコンドのタオル投入以外に試合は止められなかった。金網のすぐ側で試合を撮影していた私も、全く動かなくなった選手を見て、さすがに「やばい、死んだか？」と、感じたほどである。

しかし、そのKOされた選手が、試合後のパーティーに出席しているのを見て、無責任にも「人間の体は意外と丈夫なものだ」と、思えるようになっていた。

そんな能天気な私が、リングサイドで倒れた選手を見て「マジで死んだ!?」と、感じた試合がある。それは01年8月19日、さいたまスーパーアリーナの『K−1 JAPAN GP決勝戦 第二部K−1 VS 猪木軍』で行なわれた、安田忠夫×レネ・ローゼの試合である。

3ラウンド開始直後、それはまさしく私の目の前、僅か数十センチの距離で起こった。ローゼの左ハイキックが、安田の首にとぐろを巻くように直撃。白目をむいたまま、安田は頭から崩れ落ちてゆく。120kg以上の人間が受身を取らずに倒れた衝撃で、リングが悲鳴を上げ、その反動でマットが波打った。レフェリーはすぐに試合を止め、リングドクターが安田の元に駆け寄った。

そのときである。「グー、グー、グー」――。倒れている安田は何といびきをかき始めたのだ。低音で濁りのある嫌な音。それは明らかに脳に何らかの障害が起きている音だ。私はとっさに本で読んだことのある『脳卒中や脳挫傷の人は、無意識でいびきをかき始める』というのを思い出した。

「これはやばいぞ、このまま意識が戻らないと、大変なことになるかもしれない」と、自分があたふたしてもどうにもならないのに、撮影よりも安田のことが心配になってきた。

そんな私の心配をよそに、リングドクターは適切な処置を行ない、しばらくして安田の意識も回復した。勿論いびきは止まっている。少し様子が落ち着いた安田に対し、ドクターが話しかけた。

「ここがどこかわかりますか？」

少しの間をおいて、安田が呂律の回らない口調で答えた。

「両国、両国国技館」

リングサイドでそのやり取りを聞いていた私は、あ然とした。安田が『孝乃富士』という四股名で力士だったのは、有名な話である。「さいたまスーパーアリーナ」を「両国国技館」と答えてしまった安田は、相撲時代の記憶まで遡ってしまったのか？もしそうなら、重度の記憶喪失であることは間違いない…。

その後も安田の体力回復を待っていたが、最終的には担架で控え室まで運ぶことになった。私のいるエプロンから担架を運び出そうとしているのだが、安田の体が重いことや、その様子を撮影しようとするカメラマンが何重にも立ちふさがり、運び出せない。安田が倒れてからの状況を知っている私は、気が気ではない。早く運び出さねば、取り返しのつかないことになるかもしれない。ついに私はカメラを持つ手を担架に替え、他のスタッフと一緒に安田の巨体を運び出した。

いままで担架で選手が運ばれるのは何度も見ているし、撮影もしている。だが、私が選手を担架で運んだのは、後にも先にもこの一回だけである。

実はこれ以降、私は試合前に必ず行なう儀式がある。宗教に興味は全くないが、「選手に怪我などありませぬように。選手が無事でありますように」と、心の中で祈ることにしている。それが私なりの選手に対するせめてもの感謝とリスペクトの気持ちなのである。

3 長尾 迪

ながお・すすむ。1962年北海道出身。UFC、PRIDE、K−1の黎明期からリングサイドで肉薄し続けるガチンコフォトグラファー。

栄光と挫折の格闘人生

元祖パウンダー、マーク・コールマン。
強烈なテイクダウンからのパンチと頭突きでUFCを制し、
さらにPRIDEでは4ポイントからの膝攻撃を
最大限に生かしてきた典型的なパワーファイターだ。
そんな彼の栄光と挫折の格闘人生を振り返る。
ファイターとはなんなのか。
格闘家が生活していくというのはどういうことなのか。

タダシ★タナカ=文
text by Tadashi Tanaka
日本スポーツ出版（p91試合）、シャードッグ（p93試合）、マーク・ラノ（p93練習）、ズッファ（P94）=写真協力
Photos by Japan Sports Publishing, Sherdog.com, Mark Lano, ZUFFA

MARK COLEMAN

Ground & Pound

マーク・コールマン

Nobody can
Stop my takedown
Fighter's life of a glory and frustration

コールマンもまた、日本が主戦場のファイターだ。北米ではHBOのドキュメント映画『スマッシング・マシーン』でPRIDEグランプリ2000優勝時の舞台裏が取材され、広く一般にも紹介されている。そこで描かれていたのは主にレスリング仲間のマーク・ケアーの栄光と転落で、対照的にコールマンのほうは幸せ一杯のファミリーマンとして記録されていた。しかし、ある時間的断面を切り取った映画と違い、実際には番組が放送されたあたりから夫婦仲の危機が始まったという。

突然のインタビュー申し込みは、彼の5歳の娘が電話を取ったことから始まった。すでに離婚した情報を聞いていたボクは、いきなり子供の声だったので、かけ間違えたかと思ってあせった。

「え？ 日本からのインタビュー？ 構わないけどオレは日本でヒマがあったのに…」

——すいません。行き違いで東京で捕まえられなかったんです。それで『ZERO-ONE』のツアーで地方に行かれてしまい、『ハッスル・ハウス』後楽園ホールの翌日には帰国されたそうですから。

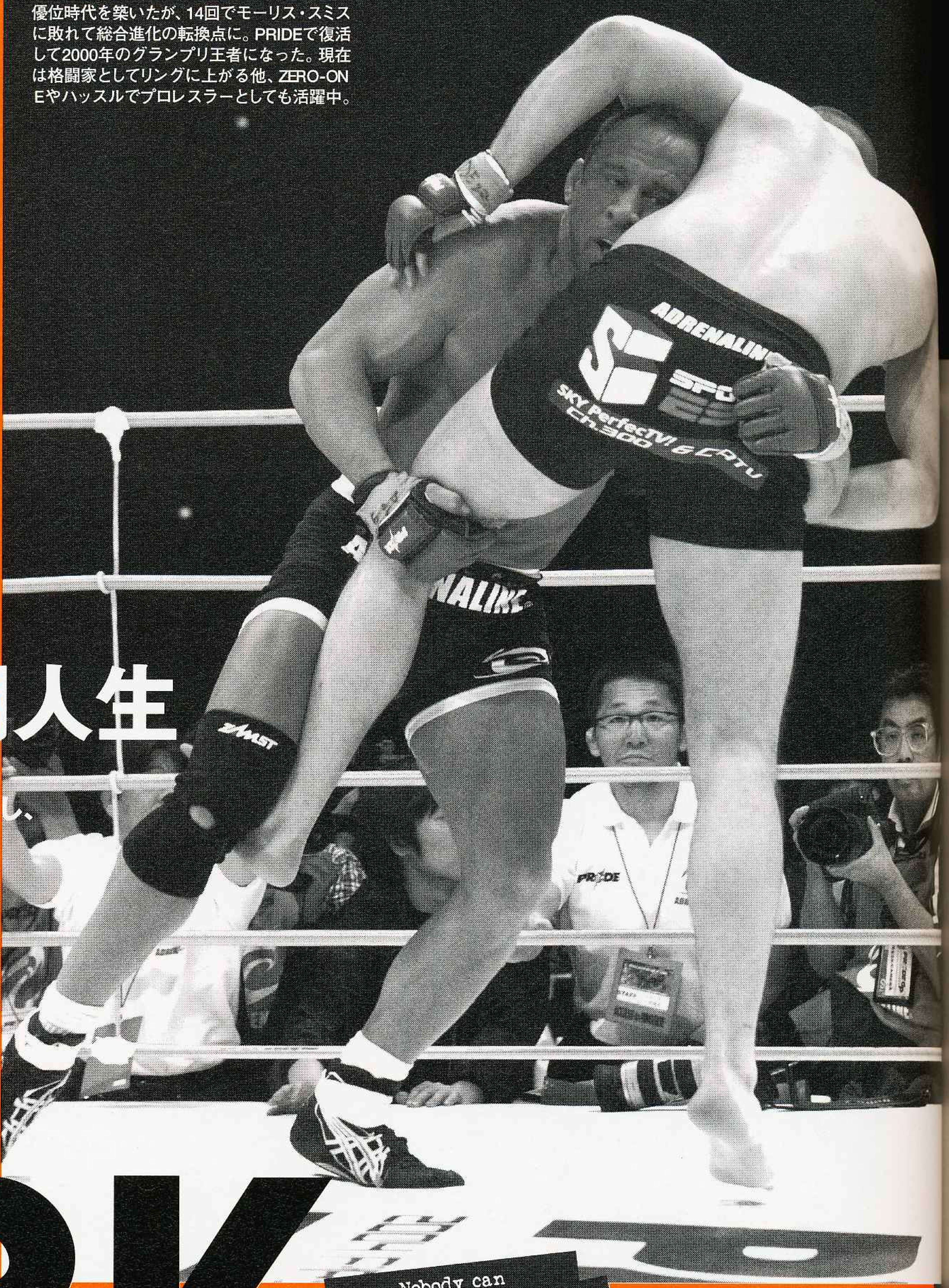
「そうなんだ。今、ちょうどボクの人生は混乱していてね。実は別れた妻と子供が、行くところがなくなってまた急に戻ってきたところだったんだよ。これはまた凄いタイミングで日本からの電話が鳴ったもんだな。だからさっき娘が電話に出たんだよ。もう2年も家庭がごちゃごちゃしていてね。しかし戻って来たって言っても、なにも再婚するわけじゃない。住むところの問題だけだからね」

Mark Coleman

マーク・コールマン

1964年12年20日　アメリカ オハイオ州生まれ　ハンマーハウス代表185cm 111kg

91年レスリングで世界選手権2位、92年バルセロナ五輪7位の実績を持つ。UFCでは第10回、11回とヘビー級トーナメントを連覇。13回でダン・スバーンを破って初代UFCヘビー級王座に輝く。総合の歴史において、グラウンド＆パウンドを武器にしたアマレス出身者の優位時代を築いたが、14回でモーリス・スミスに敗れて総合進化の転換点に。PRIDEで復活して2000年のグランプリ王者になった。現在は格闘家としてリングに上がる他、ZERO-ONEやハッスルでプロレスラーとしても活躍中。



ケビンとは助けたり助けられたりしてきた親友なんだ

オハイオ州のフリーモントという田舎町で育った少年は、決して普通の平均的な子供ではなかったという。むしろ他の誰とも違っているタイプだったそうだ。

——あなたはどんな子供だったんですか？

「5～6歳の段階ですでに『ベストになりたい』って強く意識していたからね。それがフットボールだろうが、レスリングだろうが、ベースボールだろうが、とにかくなにかスポーツで秀でたいという欲求が強かったんだ。

家庭は貧しかったよ。親は大工みたいなもんだった。3人の姉妹と一人の弟の俺は真ん中だよ。5人の子供を育てるわけだから大変なことだ。そんな環境から『大きなガキは大きなパワーを持つ』というテーマを意識するようになった。どちらかといえばシャイだった俺は、目をつけられるのが嫌だった。年上から小突き回されたりするのはかなわないからね。だから小さい頃から自分が大きくなろう、強くなろうと思ったもんさ。8～9歳の頃にはバーベルを上げてたよ。他のクラスメートに比べても全ての面で早熟になっていったね。「男」になっていったんだ。

ハイスクールではその3つのスポーツ（野球、アメフト、レスリング）のどれでも州のベストになっていた。4年ある高校の2年でレスリングの州チャンピオンになったときは、これは自分の生涯について回る大きな業績だと思ったものさ。もっとも現実にはその栄誉を感じてられたのはたった2週間だけどな（笑）」

——カレッジではどうだったんですか。

「カレッジでは、どれか一つを選ばなければならない。正直俺はフットボーラーになりたかった。実績もあったから夢が叶うと信じていたのに、奨学金の声はかからなかったんだ。自分の行った高校は小さいところで有名じゃなかったからね。レスリングだけがお金を出してくれたから、自分は行きたくもないカレッジ（マイアミ・オハイオ）に3年行くことになったんだ。

後に有名なオハイオ・ステイツの方からスカウトされて、最後の2年（合計5年）でやっと名門レスリング部に行けたんだ。最終年になる88年にナショナル・チャンピオンになってついに夢は実現したな。卒業したんだけど、そのときにフレッシュマンで入学してきたのがケビン・ランデルマンだった。そういう長い付き合いなんだよ、俺たちは」

——彼はあなたを父親のように思っていると聞きますが。

「彼は父親に虐待された過去があるから、確かに俺が父親代わりみたいなもんだった。でもね、俺が彼を助けたのと同じくらい、彼は俺を助けてくれたんだよ。俺のほうが年上だってだけで、（関係は）対等なんだ。俺がポジティブな影響を及ぼしたなら、彼もまた俺にポジティブな影響をもたらしてくれている。だから親友なんだよ」

——卒業後はどうしたんですか。

「卒業してからも五輪があったから、州立大学は俺にアシスタント・コーチの仕事と肩書きをくれた。これは88年から93年まで続いたね。いや、なにもする仕事なんかないさ。トレーニングするだけ。チャンピオンになることが目的だよ。強いて言えば、他のビッグボーイズたちが怠けてないかを見張る役かな。ケビンはそれからカレッジ史上最高のレスラーになっていったね。俺はずっとその輝かしい戦歴のコーナーにいたんだぜ」

——あなた自身はどうだったんですか。

「俺の方はといえば、89年には若手の有望株扱いで90年には五輪スタイルのトップ3に入った。91年にはUSナショナルの王者になって五輪チームに入れた。それからパンナム・ゲームで金メダル、世界選手権で銀メダル、92年に五輪に行けたことはPRIDE王者になったことに次いで、俺のキャリアのハイライトだったんじゃないかな？ ただ、ソウルでは2連敗しての7位。最低の出来だった。だから経歴の汚点のハイライトにもなってしまった。それでぷっつり気持ちの糸が切れたというか、燃え尽きてしまったんだ。26歳だったけど、『虎の瞳』（やる気）を失ってしまったんだよ。酒ばっかり飲んでいてね。3年ぐらいはろくでなし状態だったね。用心棒の仕事にありついて、それで妻に出会った。もちろんその段階ではガールフレンドだね。で、五輪より女の尻を追いかけてるほうが自分の中で重要になってしまったんだ」

——格闘技のPPVがあなたの人生を変えたそうですが。

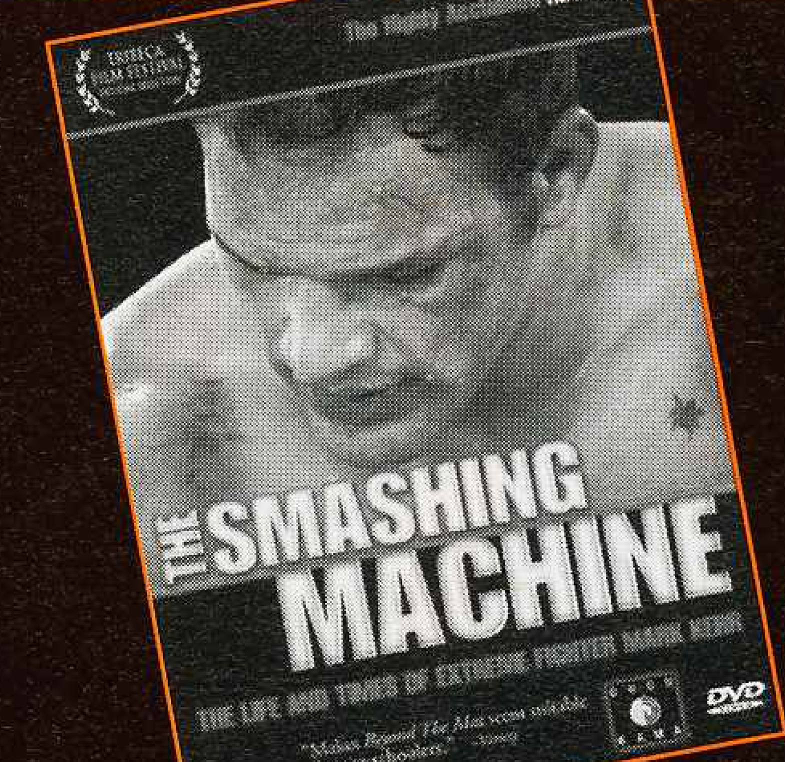
「そんなときにUWFインターナショナルとUFCのPPVに出会ったんだ。最初は『トゥルーなのか、リアルなのか』よくわからなかったよ。それまではレスリングが人生のすべてで、ゴールド（金メダル）だけを追いかけていた。だけど、あれ（メダル）は本当にゴールド（黄金）なのかって。黄金のように見えるけど、実は違うんじゃないかって悩んだね。（アマレスは）子供を育てたり、請求書を払えるものじゃないんだよな。ところがプロフェッショナルの格闘技のビデオをみて、多分これが俺のやりたいことじゃないかって思ったわけだ。ゲーリー・オブライト（当時はUWFインターナショナル選手）は自分より学年が上だし、彼はヘビー級で自分の階級は下だったから闘ったことはなかったんだけど、彼のことは当然知っていたね。アメリカンPPVで彼がタカダと闘っている日本からの中継を見たんだ。そりゃすごく興奮したよ。3回闘ってたね。3回とももの凄い試合だった。確かにアレが俺を変えたかもしれないね。まったくだよ」

UインターとUFCのPPVを見て俺の人生が変わったんだ

——UFCに到るまではどうだったんですか。

「93、94年は負け犬同然さ。まともなことは何もやってない。でも95年からまた次の五輪目指してやる気になってね。カート・アングルに勝ったのはその年だよ。2年もトレーニングしてなかったのに勝てちゃったから、俺は結構やれるなと思ったね。ただ、せっかくの動機をちゃんと持続できなかったら、結局その年はカートがチャンピオンになっていたな。それでもう一回だけやってみようと96年の五輪予選に行って、マーク・ケアーには勝ったんだけど次の選手に負けてしまってたんだ。

そのときにリチャード・ハミルトン（UFC当時のマネージャー）が、五輪に残れなかった俺、ケアー、それからトム・エリクソンにUFC出場の契約書を持ってきたんだよ。他の二人は尻込みしていたな。でも俺は、もうこれしかないって感じたんだ。契約書の中身までよく読まずにね。『俺はケアーにも勝てる、エリクソンにも勝てる。その他、どんなやつにも勝てる』って宣言したよ」



『Smashing Machine』
昨年、アメリカの大手ケーブルテレビHBO（ホーム・ボックス・オフィス）から全米に放映されたドキュメンタリー映画。霊長類最強といわれたマークケアーの格闘家としての転落を描いた衝撃の作品。ここでは、薬と女性に振り回されるケアーに対し、家庭円満で、選手としても絶好調なコールマンを見ることが出来る。これはそれがDVD化されたもの。インターネットショップ・アマゾン（http://www.amazon.co.jp）にて2800円程で購入可能。

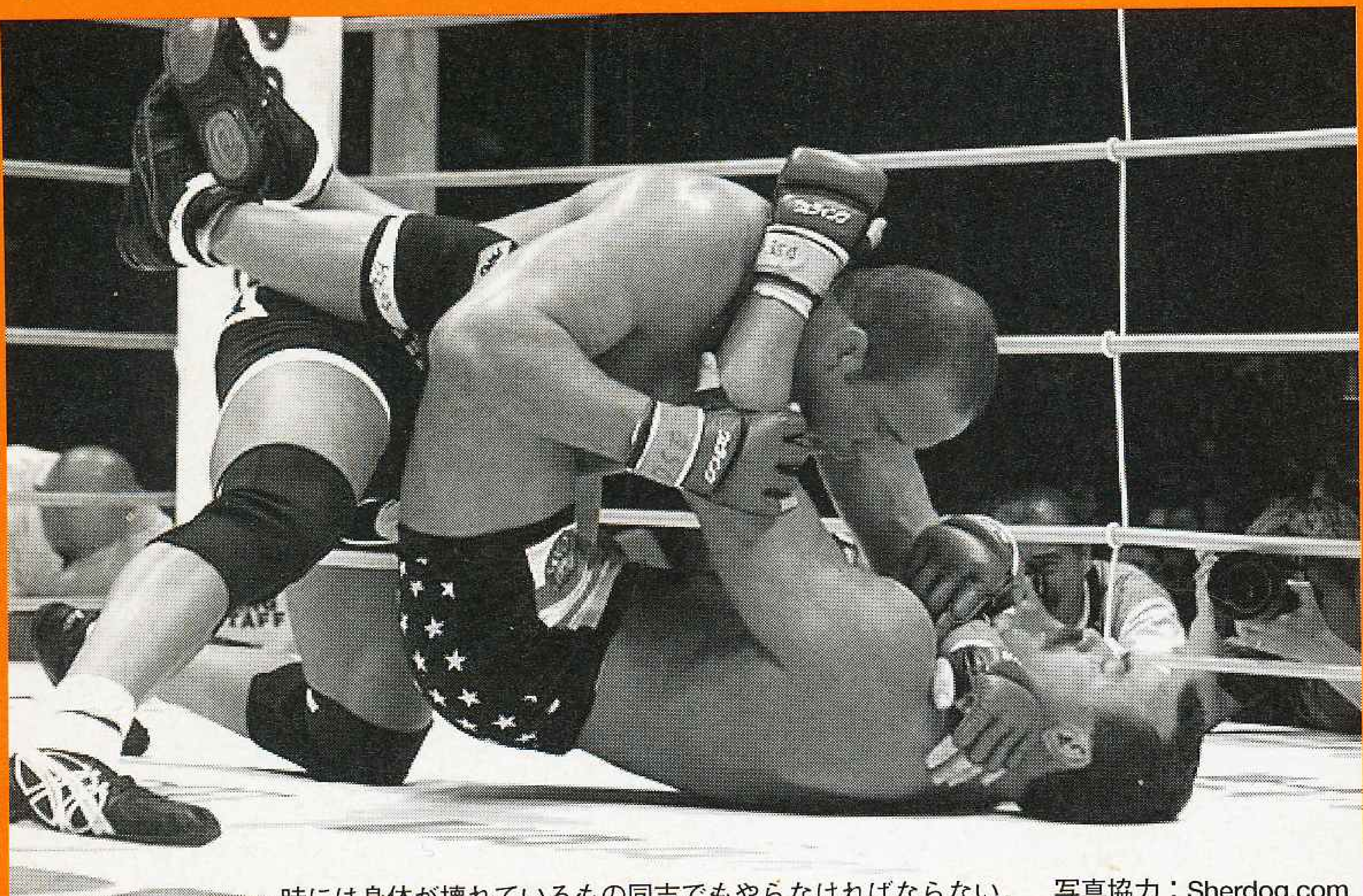
MARK COLEMAN

誘惑に勝ち練習に集中できる奴が試合に勝てるんだ

「それからわずか30日後、俺はUFC10に出ていた。そのアリゾナの30日間休みなしの特訓は、一日3回の集中したものだった。このとき、はじめてガールフレンドに別れを告げたんだ。オハイオを後にした俺は、誰にも練習の邪魔をさせなかったし、女は一切眼中になかった。だからオクタゴンに入ったときはグレイト・シェイプだったね。ファイターにとって重要なのは集中できてるかどうかなんだよな。映画『スマッシング・マシーン』をみたかい？」

――はい。

「（この世界は）薬物が手に入るし、女が妨げになる。マネージャーとビジネスでモメる。その他、あらゆる誘惑があるんだよ。96年（UFC）に関しては、俺がチャンピオンだったんだ。00年（PRIDE GP）もそうさ。その時は人生の優先順位を考え直したからね。一日に2度、3度とトレーニングができてるときは、夜退屈になったりなんてしないものだよ。だって、（練習が充実していれば）ひたすら疲れきってるだけだからね。『つまらない』と思うってことは、ちゃんと昼間に練習できてないってことさ」



時には身体が壊れているもの同志でもやらなければならない。　写真協力：Sherdog.com

――実際に初のオクタゴンはどうでしたか。

「総合の試合はナーバスにはなったけど、同時に自信もあったよ。ビデオをみてくれたらわかるけど、俺はイージーに片付けていった。決勝のドン・フライ戦は今だったらありえないね。（今のルールなら）とっくに途中で試合を止められてただろう。でもフライはさ、これまで戦ってきた中でもベストな選手じゃないんだけど、最もタフだとは断言できる。アイツは『参った』しないからね。

ルールはオリジナルUFCルールだった。頭突きが許されていたんだ。俺の武器はそれひとつで十分だった。気が付いたら優勝してたって感じさ。ハミルトンとはスグに問題が起こったなぁ。とんでもない契約内容だったからね。目と目を合わせられないぐらい険悪になったよ。でも、彼が俺をこの世界に導いてくれた事実は変わらないな」

――その後は波乱がありましたね。

「UFC10、11、12と勝ち進んだよ。自信過剰になっていたし、傲慢で高慢ちきになっていた。そこでモーリス・スミスにやられた（UFC14 97年7月）んだ。最初の3回でなぜ勝てたかって？　そりゃキツイ・トレーニングをしたからさ。それが全てだ。ところがスミス戦ではガス欠になってしまった。目を覚まされたね。足を20回、30回も蹴られるなんて初めての経験だった。（モーリスとは）再戦する契約だったんだ。俺は復讐の使命感に燃えて足を引き吊りながら1週間後にはハードなトレーニングを始めた。ところが運命はうまくいかないもんだな。アキレス腱を切っちまった。アップ・ダウンの人生って言うけど、俺の場合はローラーコースターだろ？　3大会勝ち続けて3本のベルトをものにして、急にドン底にまで落とされた。」

――それは辛い時期ですね。

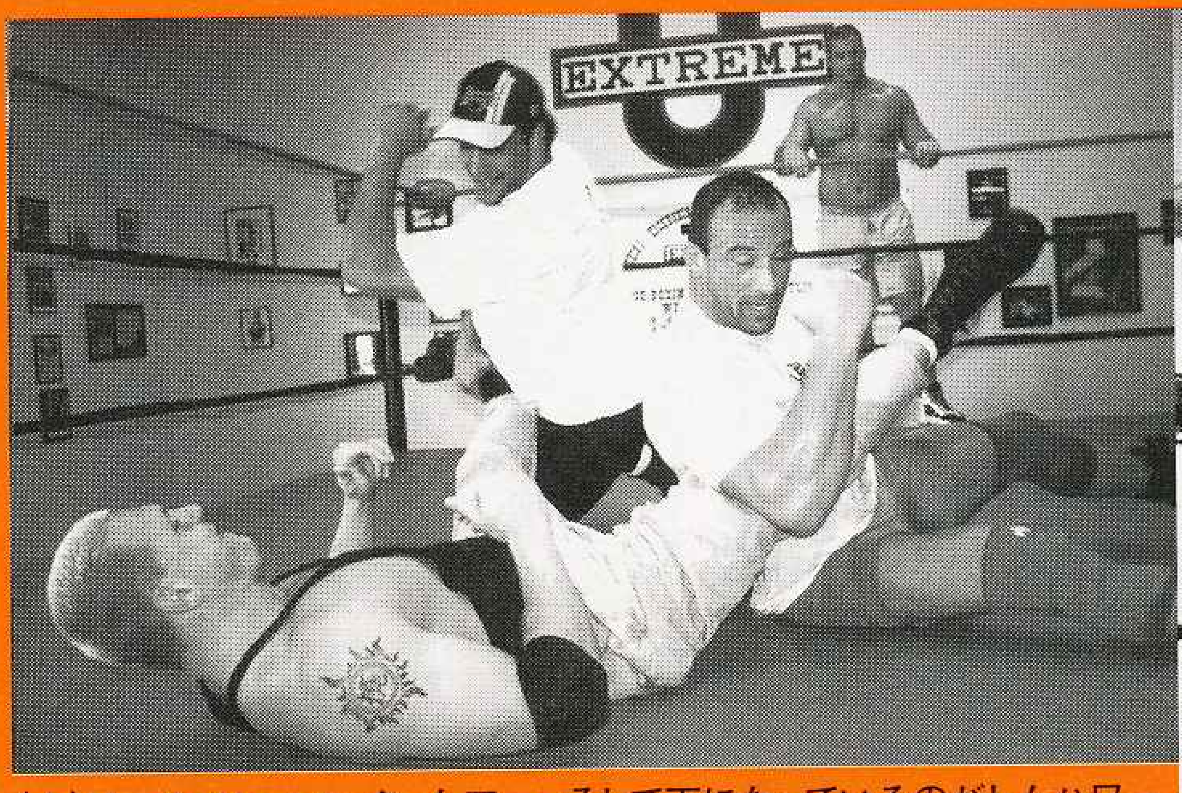
「ケガが直りきらないうちに練習に戻ったら、今度はヒザ（ACL／前十字靱帯断裂、及び半月板損傷）をやられて8ヵ月が潰れちまった。そんなときに闘ったのがピート・ウィリアムス（UFC17　98年5月）だよ。まだ完治してなかった状態でね。これで2連敗さ。さらにペドロ・ヒーゾとの試合（UFC18　99年1月）だ。俺は自分が勝ったと思った。だけど判定はヒーゾの勝ちだった。すると俺は33歳にして、もうポンコツ扱いだ。もう『ワッシュトアップ（出がらし）』ってことになっちまったんだ。そんな時に呼んでくれたのが日本だよ。

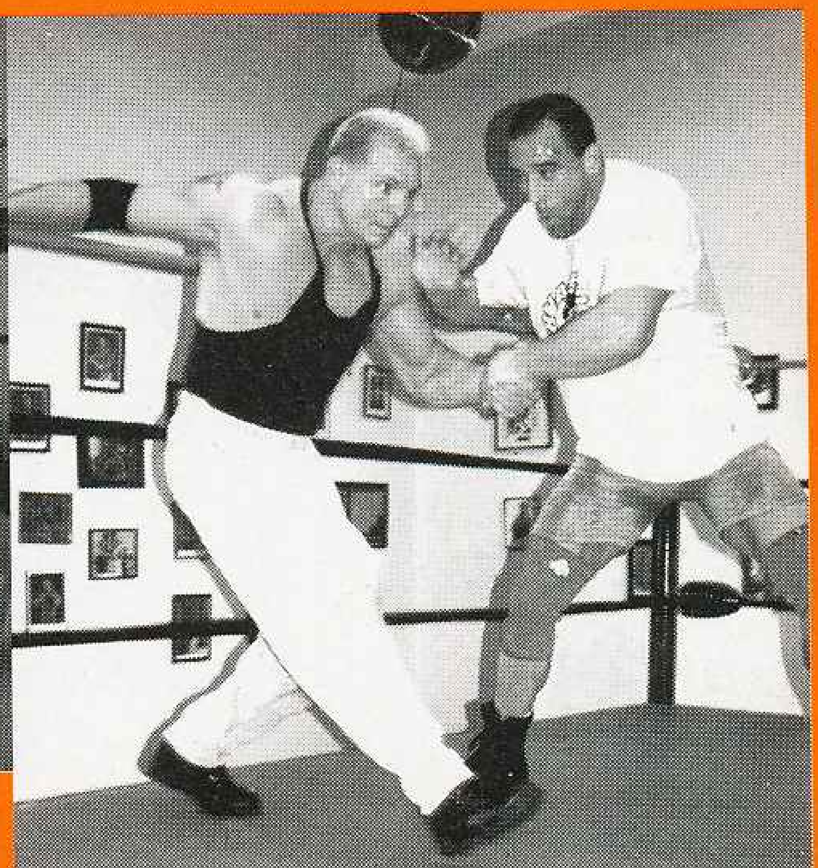
そこからはわかっているよね。00年のPRIDEグランプリに勝ったら今度は皆（メディア）が『アイツが帰ってきた！』とか言い出すんだぜ。急にランキングのトップになってね（笑）。俺が勝つことは期待されてなかったからね。でも俺が焦点を絞って闘えば、敵なしってことさ。ところがそこから先はDSEとの契約がまとまらなくて9ヵ月も総合のリングに戻ってこれなかった。なにしろ俺が勝つことは予定されてなかったからね。周囲もどう反応していいのかわからなかったんだろう。チャンピオンなら、その肩書きを背負っていかなくちゃならない。俺もそれにふさわしい扱いをしてくれなければ困るんだ。ビジネスだろ？　王者としての報酬を貰わないとね。

アラン・ゴエスを失神させたのは01年5月のことさ。いざ契約が完了してからはミスター猪木からマーシャル・アーツ王者のベルトを貰ったり、バナナのCMに出たりと、最高の扱いを受けたよ。

――シェーバーのCMも良かったですよ。

しかし良い期間は続かないな。首をケガしてしまったんだ。もう二度とファイトできないって程ではなかったけど、トレーニングができなかったんだ。ノゲイラ戦ではまたヒザをやったしね。あっちもこっちも体にガタがきていた。首のせいで体の左半分に力が入らないんだ。02年から04年までは、トレーニングすらまともにできない苦しい時期だった。そして私生活では別居と離婚があった。それでもドン・フライとは闘わなくてはならなかった。アイツだってガタガタの体で闘ったからなぁ。ファンのみんなが見たい試合にはならなかったね」





(上)コールマン、マーク・ケアー、そして下になっているのがトムハワード。(右)ロープワークを勉強するマークとトム・ハワード。プロレスではリアルファイトにはない難しさが必要とされる。　写真協力：Mark Lano

MARK COLEMAN

プロレスラーは尊敬に値するよ 俺もなんとか付いていってる状態さ

ファイターはケガとプライベートという壁を乗り越えて闘っていかなくてはならない。前日に電話した際には以下のように語ってくれた。

「ノゲイラ戦を落とした頃が私生活で最悪だった。そういうことを言い訳にはしたくなかったんだが、ちゃんと練習できてなかったことは否定できないよ」

――そして今年のヘビー級グランプリでは、エメリヤーエンコ・ヒョードルに一回戦で負けてしまいました。

「ちょうど首の手術をした後の最初の試合だった。プロレスラーのカート・アングルが同じく首の手術をして成功したと聞いたから、彼に紹介してもらったんだよ。ピッツバークに住んでいる韓国人のドクターJHOだ。『もう次の日には痛みすらない』っていう手術だったたんだけど、確かにその通りだったな。ただね、だからといって、そこをまたスグに痛めてしまうリスクは犯せない。試合はメインイベントだったんだ。練習中のケガで突然キャンセルという事態だけは絶対に避けねばならない。だから、丘を走ったり、マシーンを使ったメニューしかできなかったんだ。これは言い訳じゃないよ。ショーのメインを勤めるってことは、お金を払ってきてくれたお客さんに責任があるからね。50％の状態だったってことさ」

――ケビン・ランデルマンとの練習中にやってしまった事故でしたっけ？

「いやいや、それもさらに悪化させた原因ではあるけど、首の件はもう3年もボクを悩ませてきたんだ。ドン・フライ戦でヤバくなったものだからね。」

そしてマークを悩ませるのはケガだけではない。

「今は悪いところはない。だから言い訳もできないね（笑）。もっとも私生活のことを持ち出されたら、話はまた別になってしまう。俺がチャンピオンだったときは、食べて、寝て、トレーニングの繰り返しさ。だけど子供ができてからはそうはいかない。試合に100％集中できた奴が勝つからね。39歳だけどがんばるしかない。いや、年のことは心配してないんだ。ケン・シャムロックやランディー・クゥートアもがんばっている。精神面が備わっているとき、マーク・コールマンに勝てる奴はいないよ」

――ミルコ・クロコップが8月のグランプリ決勝で貴方と対戦するという計画があるようにも噂されてます。

「その話は聞いたけど8月は出ないよ。さっき言ったように、ようやく首も完治して、マシーン相手でなく実戦スパーリングがやれるようになったからね。今はダン・ボビッシュなんかとキャンプをするつもりだから…。『ハッスル』の予定も入っているし、総合の試合は今度こそ万全に準備してから出たいんだ。だから多分10月になるね」

――プロレスに関しても意欲的だ。

「プロレスラーは続けていく。二人の娘の存在は俺ががんばっていく動機になっているよ。最初はストレートなシュート・スタイルだったけど、今はもっとプロレスのムーブも覚えていっている最中さ。トップロープに上って飛んだりはできないけどね。『ハッスル』は今ブームになりつつあるからな。このチャンスを逃したくないよ」

――高田が自叙伝を書きました。「プロレス時代はフェイクだった」ことをカミングアウトしているんです。

「全部知ってるよ。今日本のプロレスビジネスが死にかけているから、なにかしなきゃいけない。その起爆剤として“もう教えたほうがいい”ってことだよ。これまで日本では正しく教育されてこなかったんだろ？　今オレのプロレス上の役は高田モンスター軍のキャプテンだ。我々アメリカンのニュースタイルのプロレスが、古い日本のプロレスを壊すというコンセプトさ。

PRIDEファイターがハッスルに来てやっつけられたら、ファンにとってもプロレスラーが世界で一番強いってことになる。それでいいじゃないか。実際プロレスほど大変な仕事はないぜ。とてもデンジャラスだし、チャレンジングだと感じている。オレももっとムーブを覚えなければならない。今後はこちらに注力したいから、もっと練習しないとな。プロレスラーほど尊敬に値するものはないぜ。ほんとに凄い連中ばかりなんだ。オレは懸命になんとかついていっている状態さ」

――スティーブ・コリノとの試合（ゼロワン）は立派なメインイベントでしたね。

「見てくれたのかい？　そりゃ嬉しいなぁ。それを誉められるのは本当に嬉しいよ。プロレスはMMAファイトよりも大変なんだぜ。それをわかって欲しいんだよなぁ」

――韓国の『ネオファイト』でのウェス・シムズとの試合で問題が起きましたね。宣伝と違ってエキシビションだったからです。これは何があったんですか。

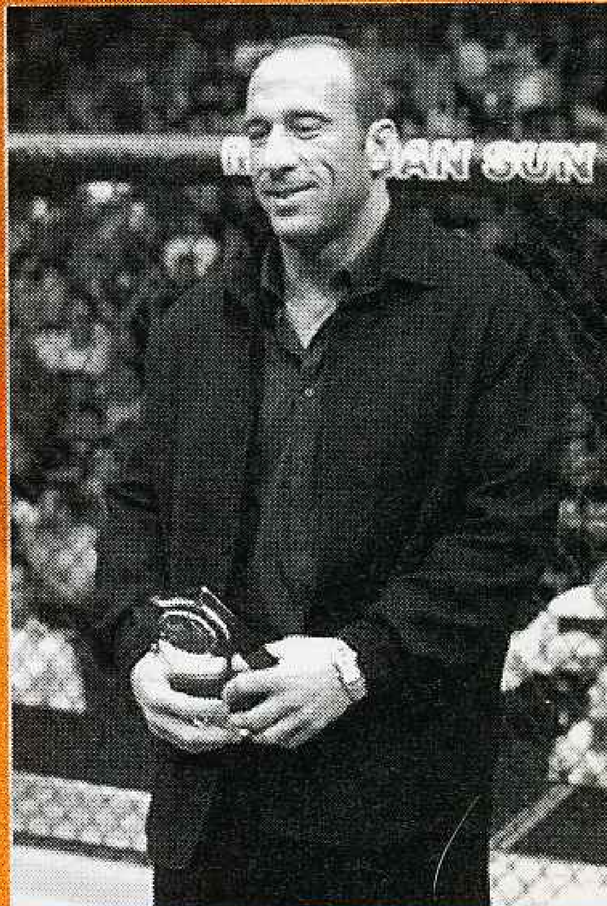
「それはコリアン側の誤解だよ。オレはずっとPRIDEに全て委ねているし、忠誠を誓っている。だから他のリングで試合はしない。最初から『チームメイトとエキシビションの試合をしてくれ』と言われたから行った。（韓国は）92年の五輪以来だしね。こっちは生徒とマジに戦うわけがないじゃないか。クリスマス前のナイスな小遣い稼ぎだと思っただけさ」

マークのMMAに対する意欲と自信は消えない。

「若い奴らがなぜ強いかっていったら肉体じゃないいんだ。他に惑わされるものがなくて練習に集中できるからなんだよ。自分の若い頃を振り返っても、“今日は一日ハードなトレーニングができただろうか”ってことだけが関心事で、他のことを気にかける必要がなかった。でも今じゃ子供の面倒をみなければならない。いや、不満を言いたいんじゃない。そういう世界だということをわかって欲しいんだ。それでも自分はラッキーな方だったはずだよ。

26、27歳の連中は俺にとって愛すべきガキンチョって感じかな。ヒョードルは俺のファンだったんだ。ヒーローだったんだってさ。だから（この間の試合で）彼は俺の腕を折らなかった。ギリギリで緩めたんだ。終わってから『勝ってしまってすまない』みたいな、謝り口調なのがおかしかったよ。彼とは友達なんだ。今は彼が世界のトップだ。だけど、まだ俺は終わってないぜ。再戦があれば今度は俺が彼に謝り口調になる番さ。誰も俺と闘いたがっている奴はいない。俺はいつだってデンジャラスだからな。

誰も俺のテイクダウンをストップしてない。俺はまだまだ向上するさ。なぜかって？　俺にはそもそもコーチがいない。アマレス時代でも、ファイターでも、俺はいつも自己練習だった。ハンマーハウスはそういうグループなんだよ。自然と皆が俺を中心にトレーニングしている。俺がシャムロックと特訓したっていうことが噂になってたけど、それは2日間だけだ。（パット）ミレティッチ・キャンプでの10日間は本当に最高のものだった。でも39年間の内の10日間なんてどれほどのモンなんだい？　基本的に俺はずっと自分だけでやってきたと思ってる。先生はいなかったんだ。だからオハイオを出て、また30日間のキャンプ（出稽古）をやってみたいもんだ。まぁ子供がいるから難しいんだけどね。カリフォルニアに行ってサブミッションを学びたいなぁ。サブミッションが俺の欠点だろうからね。レスリングは頭に入っている。それが俺たちのベースだ。でも他の技術も学びたいと思っている。常に向上したいんだ。」



彼もまたUFCの殿堂入りを果たした英雄の一人である。彼がMMAで果たした功績は大きい。

MARK COLEMAN



Gachinko Column
[総合格闘技の現在を考える]

ガチコラ! vol.4

私が「フェイク」をやっていた、あの頃

「異種格闘技戦」を3回、やったことがある。

ルールはKOK以前のリングスがベース。ロープエスケープあり。ストライカー(相手)はグローブを着用し、グラップラー(私)は素手で掌底が許される。

最初の相手は、ジャズドラマーであり冒険家としても知られたNさん。大道塾で稽古していたことがある人だったが、試合は私がヒザ十字固めで勝った。

次の相手は、寸止め空手の経験があるMくん。身長186㎝、体重は90kgもある巨漢で、当時の私とは約25kgぐらい差があった。寝技に持ち込んでも強引に何度もロープエスケープされ(また試合場が狭かった…)、ヘロヘロになりながらも、V1アームロックだったかVクロスだかを極めた。バキバキと音が鳴り、とても後味が悪いものだった。

最後は、高校時代にボクシング、卒業してからは名門の某キックジムにも通っていたKくん。この試合は映像が残っているので、展開は細かく覚えている。2度続けてテイクダウンしながらすぐにロープ(床に張ったテープがロープの目印だった)に逃げられたが、最後は双手刈りで倒してから腕十字を極めた。

自慢話をしたいのではない。実はこれらの試合は、半分「フェイク」だったのだ。

いずれも前半のラウンドは相手のいいところ(打撃)、後半はこっちのいいところ(組み技)を出して、派手な攻防で観客を沸かせる。そして、最後のラウンドに「真剣勝負」という取り決めをしていたのだ。

なぜこんなことを決めていたのか。「格闘技の攻防なんて、一般人には分かるわけない」と思っていたからだ。

時は94年の春から夏にかけてのこと。もちろん、これは当然プロの試合でもなければ、きちんとしたアマチュアのトーナメントでもない(当時はアマチュアの総合格闘技大会自体がほとんど行なわれていなかった)。知り合いなどが集まるイベントというか余興みたいなもので、ただの草試合だった。

当時の格闘技界といえば、前年の11月に第1回UFCが行なわれ、ホイス・グレイシーが優勝。グレイシー柔術の存在を知らしめた。そしてグラウンドにおける素手の顔面パンチありというルールが、とてつもないインパクトを日本にもたらしていた。94年7月には、ヒクソンが初めて日本で試合を行なうことになる。日本のプロ格闘技団体といえば、依然プロレスを脱しきれていないような情況だった。

素手による掌底からオープンフィンガーグローブによるパンチへ、そしてグラウンドでの顔面が許されるルールがスタンダードになった現在から見れば、まさにこの時代から総合格闘技が本格的に始まったといってもよい。

ここで思い出して愕然とするのは、私自身は自分のフェイクに何もやましいものを感じていなかったことだ。あとで知り合いに「途中で帰っちゃった」と言われて、「あの後が真剣勝負で面白かったのに!」と言い放っていた私。

要するに、いま「マスコミとしての義務がなんたら…」と言っている男は、マスコミに入る前の格闘技ファン時代に、「格闘技の攻防なんて一般人に分かるわけない」と普通に思っていたのである。

Kくんとの試合から約3カ月後に私は『ゴング格闘技』に務め始めるわけだが、あれから10年。日本の総合格闘技の試合もまったく様変わりし、ファンの見る目は格段に上がった。ほとんど全てが真剣勝負である。しかし、ここで「ほとんど」としか書けないところがまた、現時点であることも事実だ。

一方、プロレスラーが総合の試合をすると、「あれはヤオ」と何でもかんでも決めつける人がいる。ファンでは好きなように議論すればよいが、これで飯を食べている記者がである。「プロレスラーが真剣勝負をするわけないだろう」。そこにあるのは状況論だけであって、技術論はない。単なる業界話好きで、細かな攻防について語れる技量もない。倫理もない。

最後に、もしいまだに胸を張って「日本の格闘技界には真剣勝負しかない」と言い切れない情況にあるのならば、それは記者自身があまりにも技術について不勉強であることと、共通の根っこがあるのではないかと指摘しておきたい。

4 和良コウイチ　わら・こういち。1969年東京都出身。94年10月から約6年間『ゴング格闘技』誌の編集を務め、現在はフリー。組み技をこよなく愛すサブミッションライター。柔道三段、柔術紫帯。

エディ・ブラボーの

UFC入門!!

Ultimate Fighting Championship

MMAの元祖、本場といえばUFC(アルティメット・ファイティング・チャンピオンシップ)だ。金網で囲われたオクタゴンで繰り広げられる闘いはまさにアメリカならではのど迫力。トップクラスが集うPRIDEと比べた場合でも平均した実力はUFCの方が上と言われるぐらいレベルが高い。そんなUFCファイター達をUFCの名物コメンテーターであり、柔術家としても実績あるエディ・ブラボーに紹介してもらおう。

エディ・ブラボー=文 Text by Eddie Bravo　写真提供=UFC Photo by UFC　ひねリン=協力 Special Thanks by hinerin

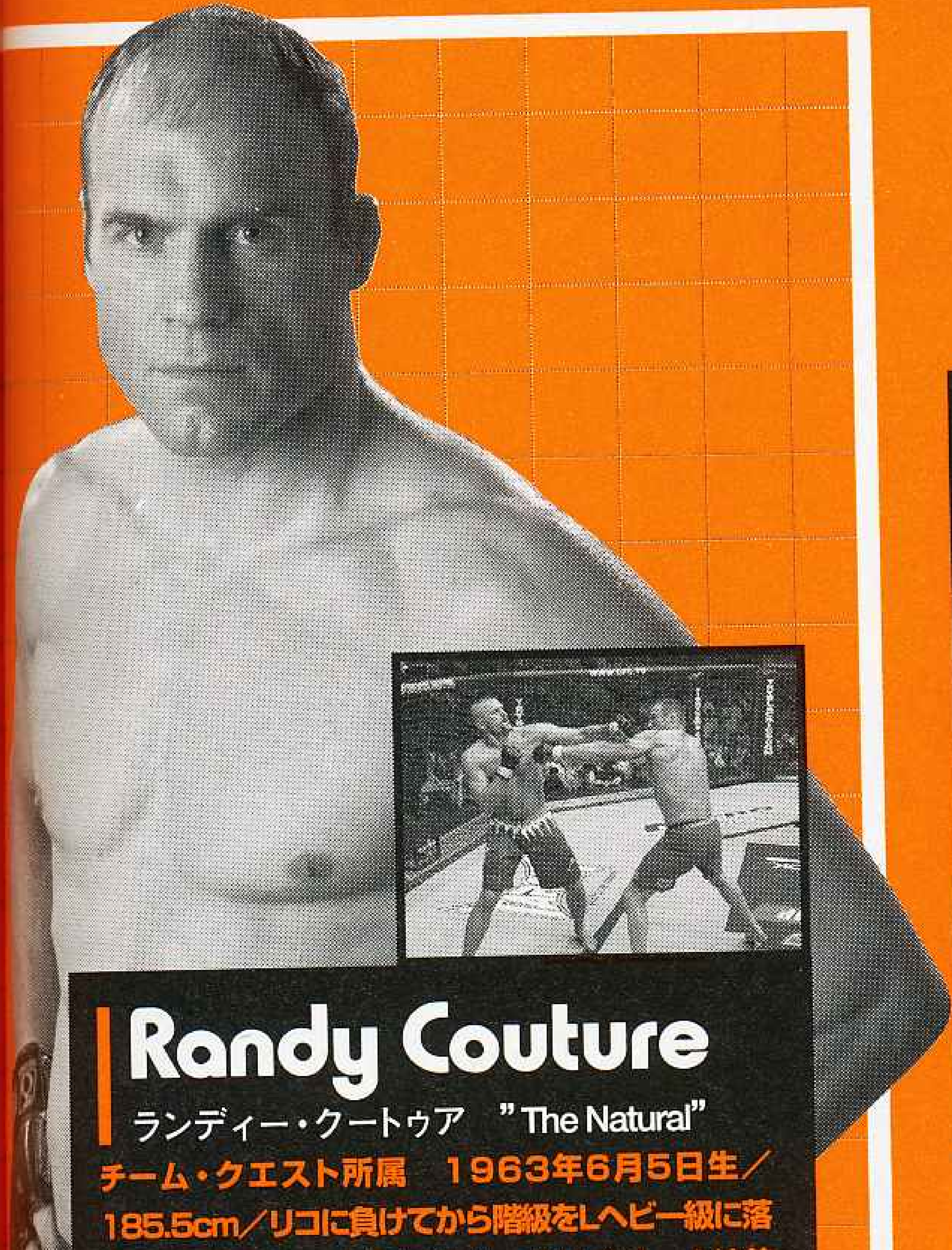


UFCのインタビュアー、コメンテーターであり、ユニークな話術に定評がある。ブラジリアン柔術の猛者でもあり、2003年のアブダビコンバットではホイラー・グレイシーから三角絞めで一本勝ちを果たしている。
※エディのスーパーテクニックとスーパーギャグが堪能できるDVD「The Twister」が欲しい人はこの日本語申し込み先のアドレスへメールしてください!> eddiebravojapan@hotmail.com

Class of UFC >>>

HEAVY

□ ヘビー級



Randy Couture

ランディー・クートゥア "The Natural"

チーム・クエスト所属　1963年6月5日生/185.5cm/リコに負けてから階級をLヘビー級に落とし、ティト、チャックに勝利した。次はヴィトーと決着戦か。

ランディーは、世界レベルのグレコローマン・レスラーであり、信じられないくらい熱心にトレーニングをするんだ。長い間ヘビー級選手として成功を収めてきたんだけど、Lヘビー級に落としてからはさらに圧倒的な存在になって、UFCではヘビー&Lヘビーの両王座を制した初の選手になったんだ。同時に彼は、打撃選手としても本物になったね。ここ数試合ではプロ並みのボクシングテクニックを見せている。柔術テクニックはレスラーとしては決して悪くはないが、完璧になるためには、もっとパスガード、マウント、下からの攻撃の練習をする必要があるな。



Tim Sylvia

ティム・シルビア "The Mine-iac"

1977年3月5日生/203cm/チーム・エクストリーム所属/リコ・ロドリゲス、ガン・マギーに勝利し王者となるが、先日のUFC48ではフランク・ミアに腕を折られる。

シルビアは自信満々な奴だね。UFCヘビー級の中でも圧倒的にリーチが長いんだ。そのリーチを生かした立ち技の打撃が得意だね。特に右クロスの威力は強烈だぜ。テイクダウンを防御する能力も一級品だし、たいていの選手のタックルは切っちまうな。グラウンド技術はまだまだ上達の余地が大きいね。特に世界レベルのレスラーを相手にするってなったら、やっぱり(下になって)ガードからの攻撃をしなくちゃならないし、もしあいつが腕の良いストライカーと戦うことになったら、テイクダウンを取って、レフェリーに立たされる前にパスガードして極めちまわないとならないってわけさ。

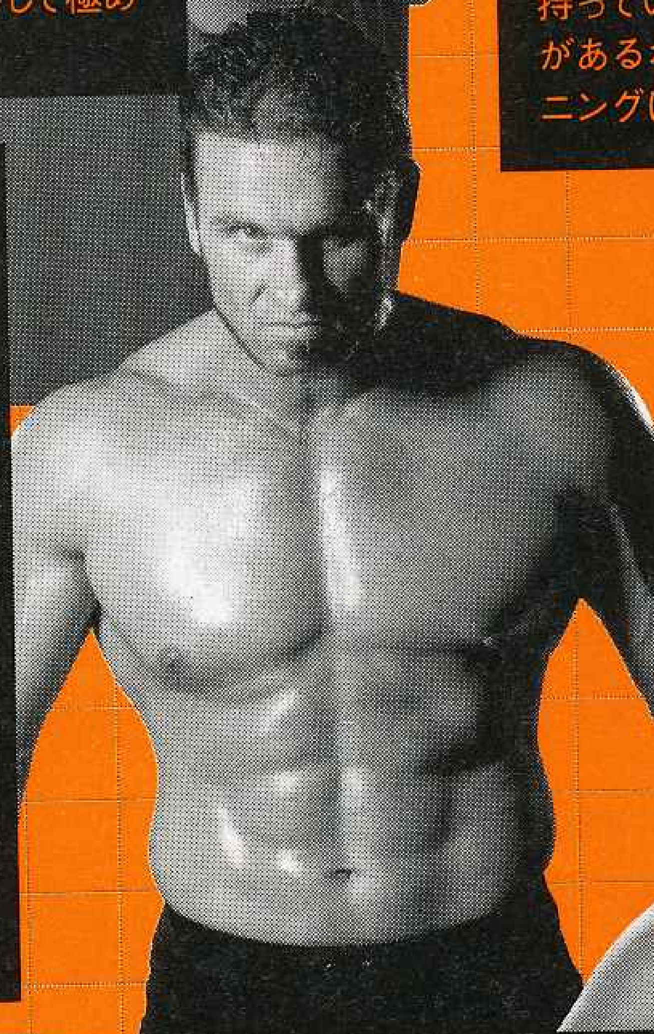


Wes Sims

ウェス・シムズ "The Project"

1979年10月12日生まれ/213cm/ハンマーハウス所属/フランク・ミアに踏みつけ攻撃による反則負けを喫したが、その後再戦し、こんどはTKO負けとなった。

すごく長身で、バカみたいな力を持つこのシムズは、コーチであるマーク・コールマンの「THE PROJECT(秘密兵器)」として知られている。シムズは間違いなく、現在のMMAにおいてもっとも恐いもの知らずな野郎のひとりだ。すごく短い準備期間で試合をオファーされても、なにも躊躇することなくオクタゴンに乗り込んでくる。だがシムズはまだまだ新米だし、MMAでは何のバックグラウンドも持っていない。全ての分野においてもっと練習する必要があるね。おそらく1、2年くらいは試合を控えて、トレーニングに集中するのがベストなんじゃないか?



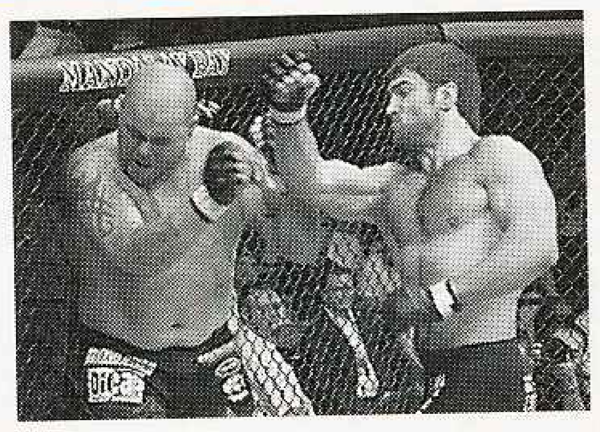
Ken Shamrock

ケン・シャムロック

1964年2月11日生/184cm/ライオンズデン所属

ケン・シャムロックはこのスポーツにおける伝説だし、MMAの初期からいつも世界のトップに君臨し続けていて、未だにデンジャラスな選手であり続けているね。シャムロックは、なかなか高いレスリング力を持つ足関節のスペシャリストとしてこのスポーツにやって来て、その後すぐに、ノックアウトパワーを持つパンチを身に付けた。

彼は確かな足関節技の技術を持ってるし、グラウンドの防御技術も非常に高いんだけど、それでもまだ寝技で上達の余地があるな。パスガード、バックを取ってコントロールすること、マウントポジションからの極め、下からの攻撃など、他にもやるべきことは多いね。



アンドレイ・アルロフスキー

なぜかエディのセレクトに入っていないが、今UFCでは注目の選手。UFC32、36でリコ・ロドリゲス、ペドロ・ヒーゾに負けているが、その後、イアン・フリーマン、ウラディミール・マチュシエンコ、ウエズリー"キャベジ"コレイラと連勝。力強いスタンド打撃は今後も期待度大だ!㊎

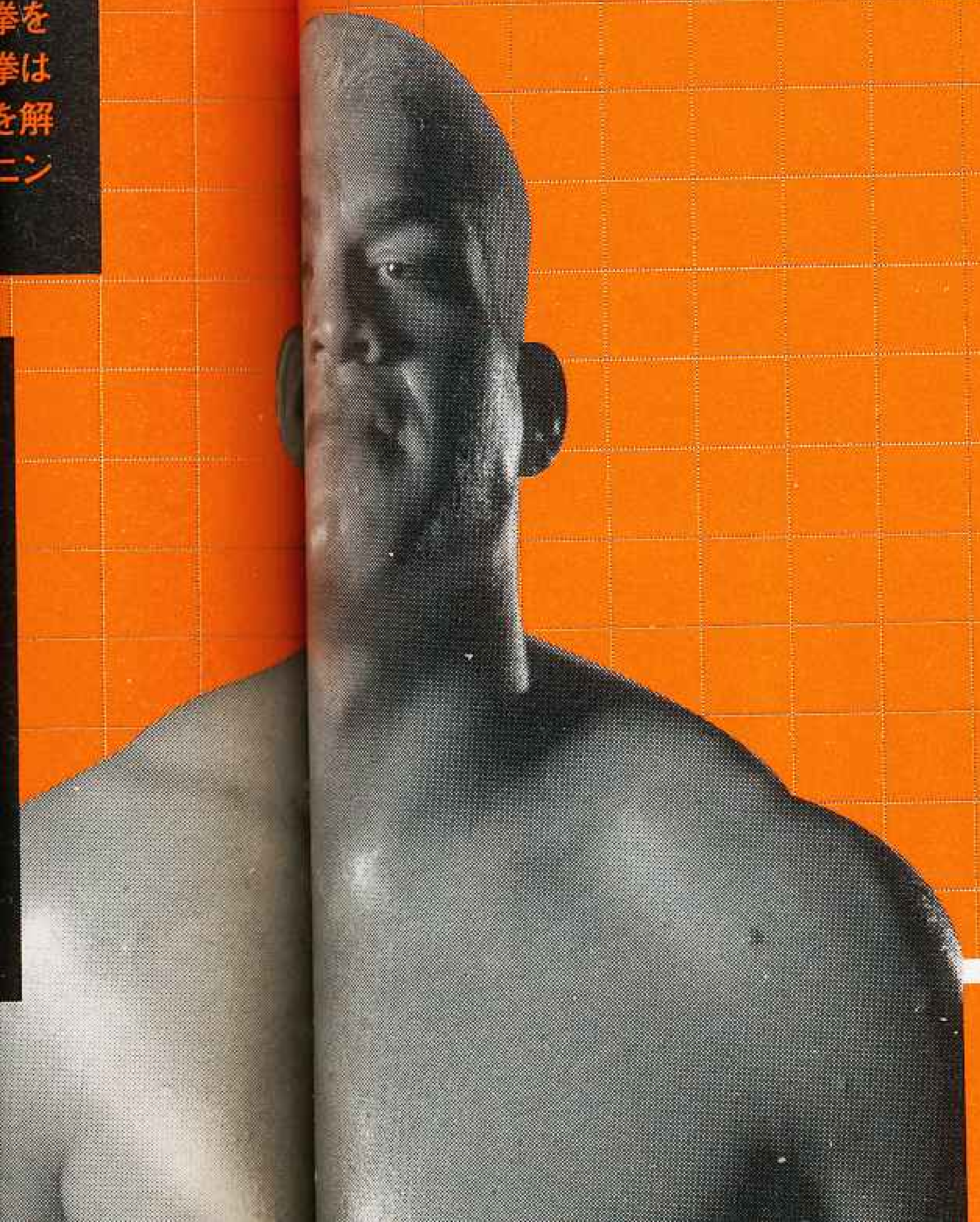


Frank Mir

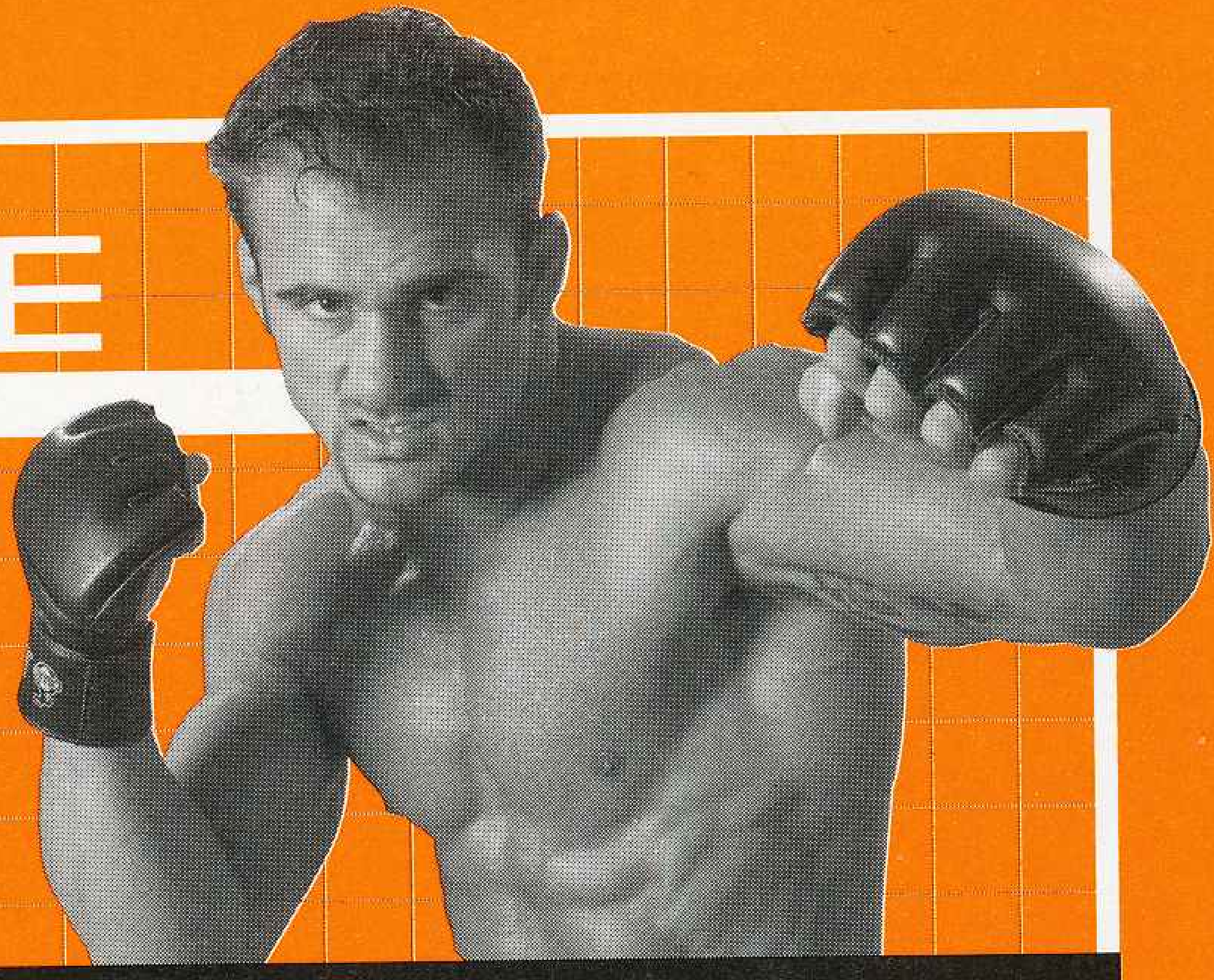
フランク・ミア

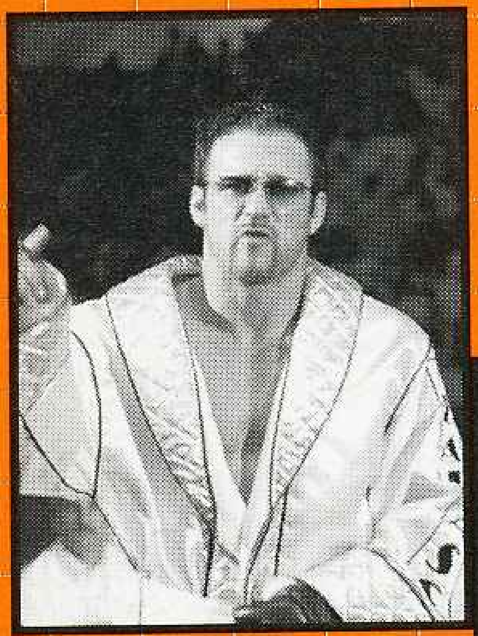
1979年5月24日生/185.5cm/ヒカルド・ピエス柔術所属/ホベルト・トラベン、ピート・ウィリアムスにアームロックで勝利。フリーマンにTKO負けしているが、UFC48でティムの腕をへし折りヘビー級王者に。

ミアは最も上手い関節技スペシャリストのひとりだね。軽量級選手のように動き、柔術を駆使して常に相手を極めにいく。ミアは、ギ(道衣)着用の柔術からギ無しへの転向を、ほとんどの柔術世界王者より見事にやり遂げているね。そして同時に彼はネバダ州のレスリング王者でもあるんだ! 打撃能力も悪くない。ムエタイ技術は試合ごとに上達しているし、彼はそれを金網の中で恐れずに試しているね。やつの唯一の弱点は、よく知られているように試合中にガス欠になっちまうことだな。スタミナを強化できるんだったら、常にヘビー級戦線において、脅威の存在だと思うよ。



Class of UFC >>> MIDDLE
□ ミドル級

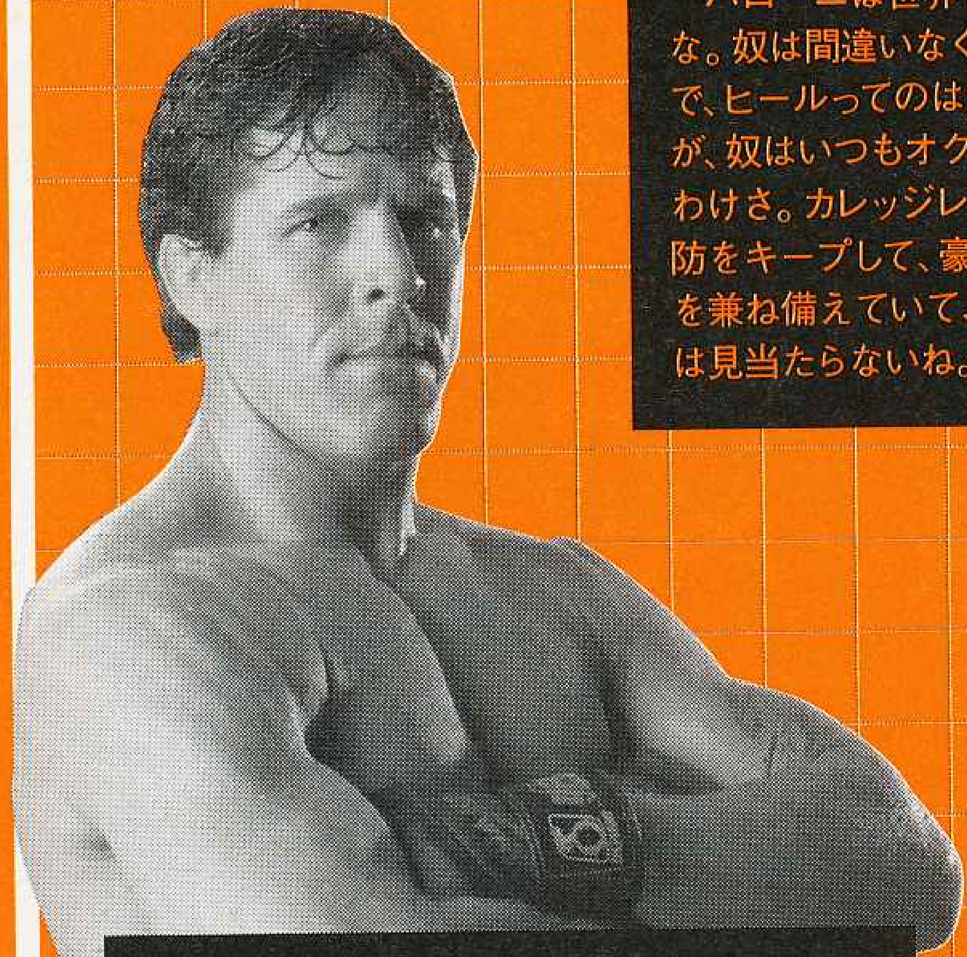




Phil Baroni
フィル・バローニ "New York Bad Ass"

1978年4月16日生／175cm／ニックワン・キックジム所属／デイブ・メネー、アマール・スロエフにKO勝ちも、リンドランド、タナーそれぞれに2連敗。

バローニは世界でもっとも自信満々で傲慢な選手だと言っていいだろうな。奴は間違いなくこのスポーツにおいてヒール(悪役)だ。プロレスと同じで、ヒールってのは大事なもんだ。人がバローニを好きだろうが嫌いだろうが、奴はいつもオクタゴンの中でエキサイティングな存在であり続けるってわけさ。カレッジレスラーとしてのキャリアも持っているから、スタンドの攻防をキープして、豪快に殴り合おうとする。そのパンチはスピードとパワーを兼ね備えていて、奴との殴り合いに賭けようなんて思う男は同じ階級には見当たらないね。リンドランドとの二戦では、奴の弱点がよく見えたよね。



Evan Tanner
エヴァン・タナー

1971年2月11日生／183cm／チーム・クエスト所属／なにげにVTではティト、リッチ・フランクリン戦の2敗しかしていない。

タナーはこの階級における、最上のサブミッションスペシャリストのひとりだ。ブスタマンチには劣るけど、多くの柔術家より上だね。レスリングも上手いし、特にクリンチが上手くって、そこからヒザやヒジを打ち込んで来るんだ。凄く熱心な練習態度と、膨大なMMA経験があるから、彼の負けに賭けることはなかなか難しいな。タナーはとてもオールラウンドな選手なんだけど、まだまだボクシング技術は学ぶべきことが多いね。もちろん、タナーくらい寝技が上手い選手だとしたって、常に柔術には上達の余地があるものなんだ。



Matt Lindland
マット・リンドランド"The Law"

1970年5月17日生／183cm／チーム・クエスト所属／ヒカルド・アルメイダ、パット・ミレティッチに勝利するもムリーロ・ブスタマンチに完敗。

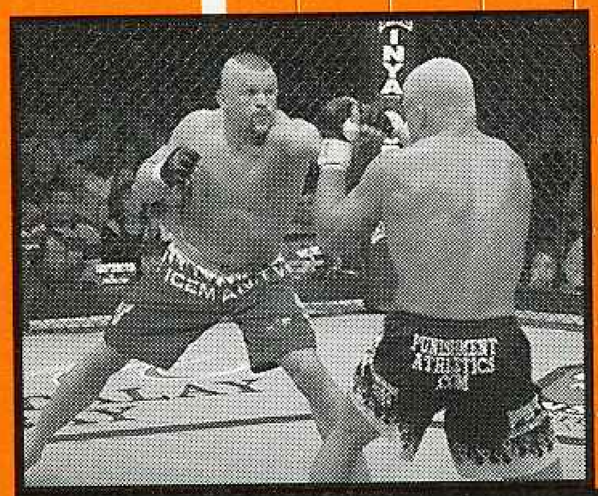
リンドランドは、この世界において最も高い実績を持ったレスラーだね。オリンピックの銀メダリストであり、試合ではいつも、上のポジションから相手を圧倒してきた。彼は古典的なグラウンド&パウンダーであり、それで大いに成功してきた。柔術テクニックの上達に取り組んでいるみたいだけど、極め(関節技)の分野においてはまだまだ未熟だね。最優先にすべきはパスガードとマウントからの攻撃の練習だ。今までマウントを取って(打撃で)勝ったこともあるけど、関節技もマスターすることで、観客を退屈なグラウンド&パウンド判定決着から解放することができるだろう。打撃の形も良くないな。もっと立ち技の練習に時間を割いた方がいいだろうな。



リー・マーレイ

あのティトとUFCのパーティ会場で喧嘩をしKOしてしまったという伝説を持つ男。UFCではまだ一勝しているに過ぎないが、過去にはあのペレにもKO勝ちしている。入場時のパンクな風ぼう、異常に筋肉質でしまった肉体、マイクをとれば強烈なイギリス訛り。危険な匂いのする魅力的な選手だ。ティトとの対戦を噂されるが実現はいかに!㊢

Class of UFC >>> Light HEAVY
□ ライトヘビー級

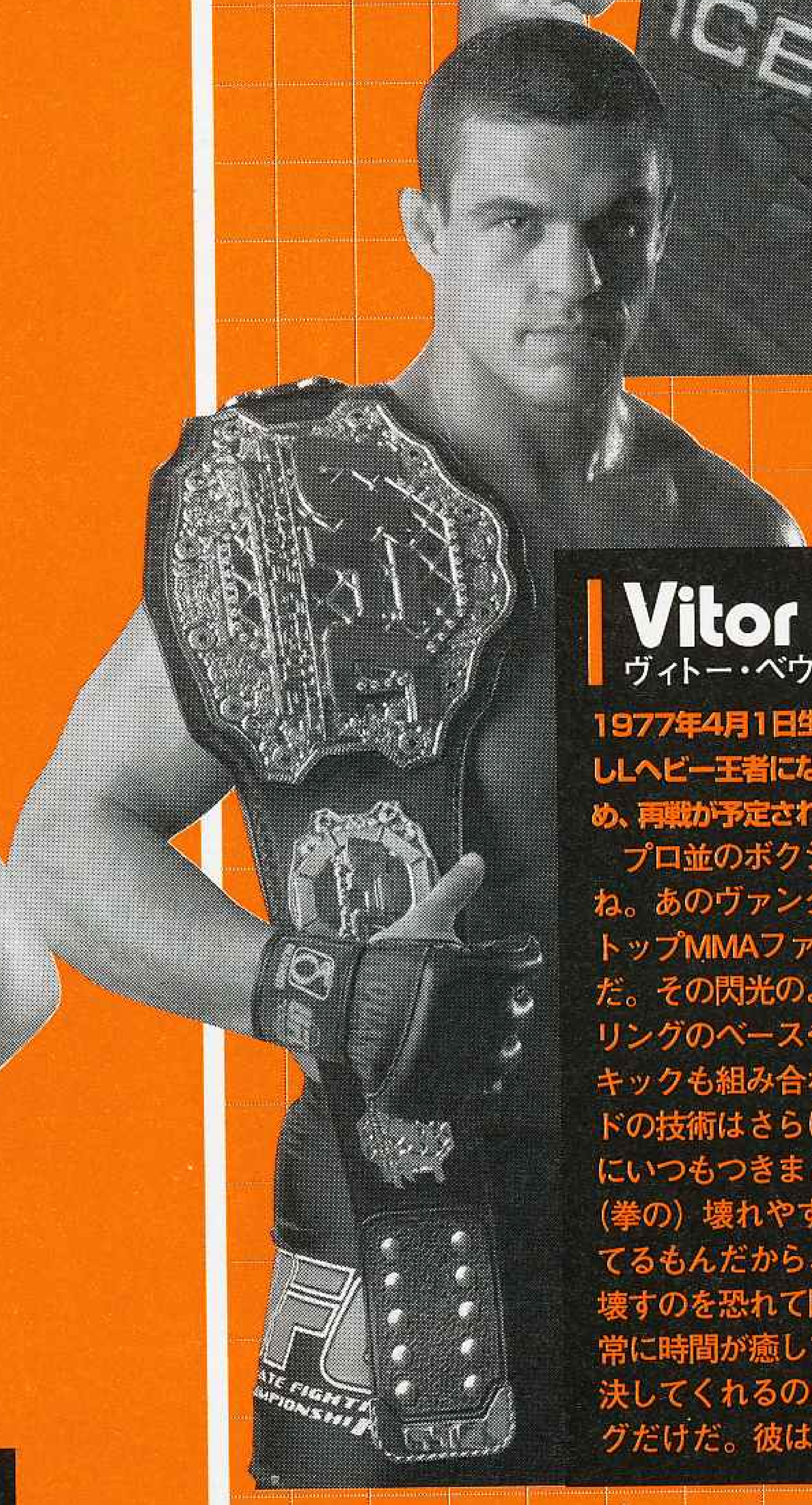




Chuck Liddell
チャック・リデル "The Iceman"

1969年12月17日生／188cm／ピット・ファイトチーム所属／メッツァー、ランデルマン、ブスタマンチ、ヴィトー、ババル、と驚異的なメンツに勝利を続けてきた。

チャックは学生時代に全米レベルでレスリングをやっていたし、ずっとストライカーでもあったんだ。そのレスリング技術を生かしてテイクダウンを防ぎつつ、立ち技の打撃をぶち込むのが好きだね。特に、本物のノックアウトパワーを持つ豪快なオーバーハンドライトと左フックを得意としている。いつも誰にも負けない強い自信を持っていて、だからこそ「アイスマン(氷の男)」と呼ばれているんだ。思い通りにスタンドで試合を終始している時は問題ないんだが、相手に抑えこまれた時には、たいがい負けている。彼は柔術全般をもっと練習する必要があるけど、特にガードだな。チャックが負けた最近の二試合は、共に寝かされた状態でやられたからな。





Vitor Belfort
ヴィトー・ベウフォート "Phenom"

1977年4月1日生／183cm／UFC46ではクートゥアに勝利しLヘビー王者になるが、勝因がアクシデント的なものだったため、再戦が予定されている。

プロ並のボクシング技術を持つ非常に珍しい柔術家だね。あのヴァンダレイ・シウバをはじめとして、多くのトップMMAファイター達からKO勝ちを記録しているんだ。その閃光のようなパンチに加えて、素晴らしいレスリングのベースも身に付けているし、最近はヒザ蹴りやキックも組み合わせるようになって、彼の優れたスタンドの技術はさらに完全なものになりつつあるな。ただ彼にいつもつきまとう問題があって、それは、スタミナと(拳の)壊れやすさだ。すごくハードに速いパンチを当てるもんだから、逆に奴が打ち疲れてしまったり、拳を壊すのを恐れて殴れなくなったりするんだ。壊れた拳は常に時間が癒してくれるだろうが、スタミナの問題を解決してくれるのは、もっと激しい心肺機能のトレーニングだけだ。彼は関節技の技術を磨く必要もあるな。

Tito Ortiz
ティト・オーティズ "Huntington Beach Bad Boy"

1975年1月23日生／188cm／チーム・パニッシュメント所属／常勝の王者として君臨していたが、クートゥア、リデルに負けてからは一気に下降気味。

ティト・オーティズが自信を持ってオクタゴンに入って来た時、奴は事実上無敵の存在だよ。凶悪なグラウンド&パウンドを使う凄惨なレスラーであり、その試合のほとんどは残虐な終わり方をする。相手の顔に残るのは、血、打撲、腫れ、切り傷…。打撃技術と柔術はまだまだ磨く必要があるけど、彼はなかなかオールラウンドな選手なんだ。奴にもっとも大切なのは自信だね。チャックに負けた時は彼はあまりにも自信なさげだったな。おそらくその前にクートゥアに負けたことで、めっきり自信を失ってしまったんじゃないか。





Class of UFC >>>

WELTER

□ ウェルター級



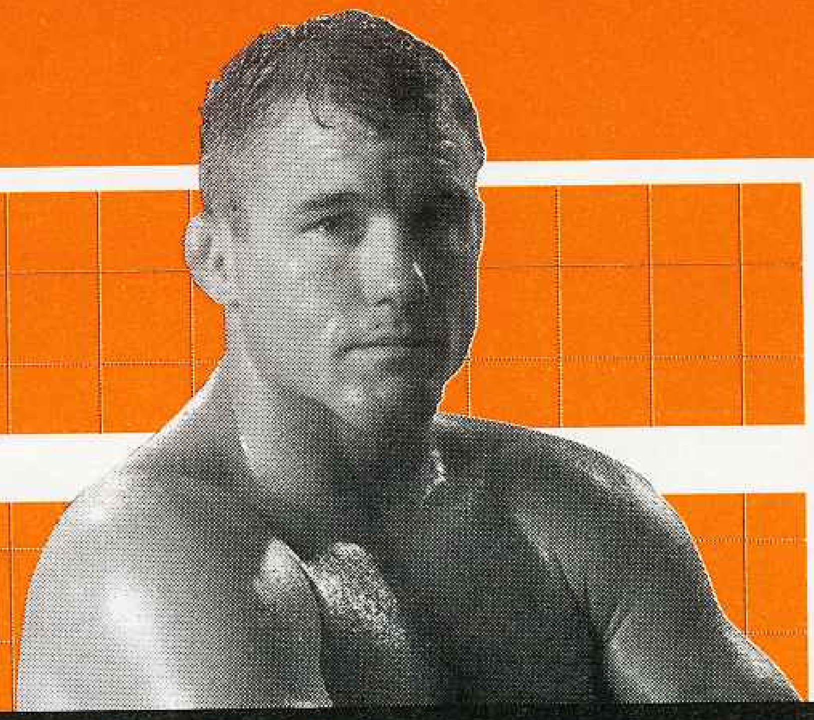


Frank Trigg

フランク・トリッグ　"Twinkle Toes"

1972年5月7日生／177.5cm／rAw所属／マッハ、ヒューズに負けてはいるが、ラバーン・クラーク、デニス・ホールマンに勝利している。

トリッグは、ヒューズと同じように、強力なレスリング能力を生かしたグラウンド&パウンドによって、その長いMMAキャリアの中で勝利の山を築いてきた。すばらしく熱心な練習態度のおかげでズバ抜けた心肺能力を身に付けていて、激しい攻撃をぶっ続けるから、ほとんどの相手はへろへろさ。彼の打撃技術はまずまずだけど、まだ大いに向上させる必要があるな。以前、桜井速人に立ち技でやられたことでもわかるだろ。でも彼の真の弱点は柔術にある。そのうち彼より優れたレスラーにテイクダウンされ、ガードからの攻撃を余儀無くされることもあるかもしれないからね。



Matt Hughes

マット・ヒューズ

1973年10月13日生／175.5cm／チーム・エクストリーム所属／桜井速人、ニュートン、トリッグらに勝利。長く無敵と言われたがBJ.ペンに負ける。

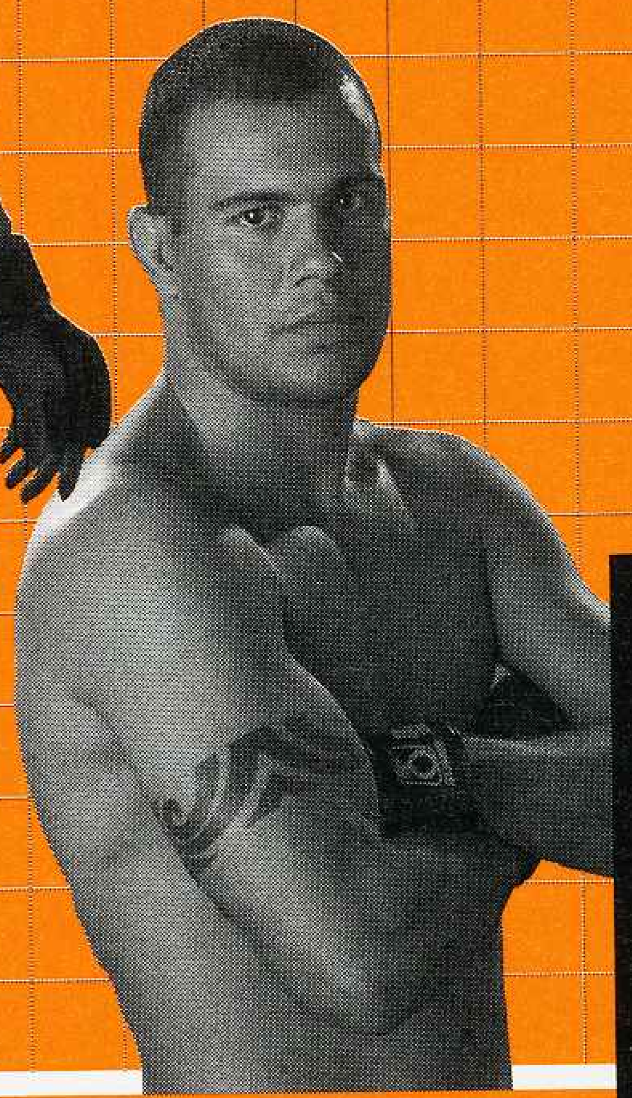
マット・ヒューズは、今年の初めにBJペンと戦うまでの数年間、圧倒的な強さを誇るアメリカ人レスラーとして君臨してきたね。ほとんどの相手は彼のテイクダウンを防ぐことができず、そのままパワースラムで叩き付けられたりしてたもんだ。彼のグラウンド&パウンドは世界最高レベルで、恐れを知らぬ精神力のおかげで、彼はいつも潜在能力をフルに発揮してきたんだ。ヒューズは打撃のテクニックを向上させ続ける必要があるな。MMAデビューの頃からしたらだいぶ上達してはいるけどね。まったく同じことが彼の柔術についても言える。彼はパスガードとマウントからの攻撃の練習を最優先に取り組むべきだ。

Nick Diaz

ニック・ディアズ

1983年8月2日生／182cm／シーザー・グレイシー・アカデミー所属／UFCでは2戦2勝。そのうち一勝はロビー・ローラー。

ディアズは、世界のほとんどの柔術ファイター達よりはるかに勇敢な男だね。彼はそのことを、ロビー・ローラーという最も恐れられているハードパンチャーと渡り合い、ノックアウトしたことで証明した。ディアズはとても巧みな柔術家として知られているけど、こいつが打撃もできるなんて誰も想像してなかったよな。ディアズには確かな柔術の腕前と見事な立ち技の技術があるから、大きな穴が非常に少ない選手だ。もっとも大きな弱点を挙げるとしたらレスリングかな。打撃と柔術技術を向上させ続けつつ、テイクダウン技術を徹底的に練習したら、ディアズは次期UFCウェルター級王座の第一候補になるだろうな。

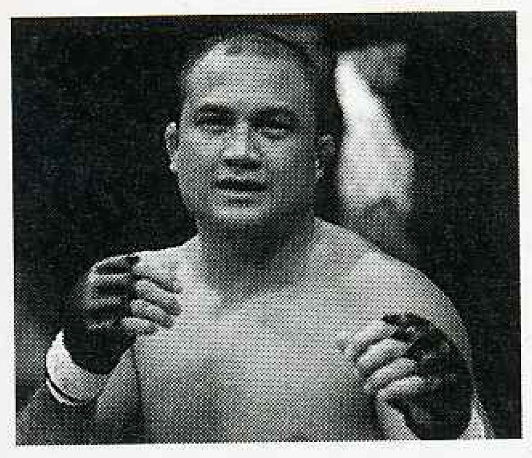


Renato Verissimo

ヘナート・ベヒーシモ　"Charuto"

1973年8月3日生／185.5cm／ノヴァウニオン所属

このスポーツでは比較的ルーキーだけど、短い期間に莫大なリスペクトを得ることに成功したね。彼はすでにギル・カスティーリョ、カーロス・ニュートンといったUFC経験者達から勝利を奪っていて、ウェルター級戦線のベスト5に浮上していた。その後、マット・ヒューズと戦い、物議をかもした判定で敗れはしたけど、それでも彼の株は上がる一方だ。なにせ彼はその試合で、大部分の柔術家に欠けているもの、つまり攻撃的なガードを見せつけたんだから。ベヒーシモは打撃とレスリングを磨き続ける必要があるな。どっちもすでになかなかのモノではあるけどね。彼の柔術はとても優れたものだけど、おそらく少し俺のラバーガードを学んだら、彼の技術レベルはまったく新しい次元に入ると思うよ。



B.J.ペン

ライト級で猛威をふるったBJが業を煮やしてウェルター級に挑戦。なんと階級上で圧倒的な強さを誇っていたチャンピオン、マット・ヒューズをいとも簡単に下してしまった。今はK-1に出場したことを理由にベルトを剥奪されてしまった。本誌インタビューを見る限りでは、今後UFC参戦はないのだろうか。いずれにせよ、現在のパウンドフォーパウンドと言っておかしくない存在だ。㊞

Class of UFC >>>

LIGHT

□ ライト級



Genki Sudo

須藤元気　"The Neo Samurai"

1978年3月8日生／175cm／ビバリーヒルズ柔術クラブ所属／ドゥエイン・ラドウィッグ戦で唯一の黒星を喫した以外は負け無し。今後はさらなる強豪との試合が期待される。

須藤は、このスポーツでもっとも強烈なショーマンだ。常識はずれな入場シーンから、試合中のクレイジー・カンフーの動きまでね。だが誤解しちゃいけない。スドーは強い。すばらしいレスリングの基礎を持っているし、優れた柔術テクニックと、あなどれない打撃を持ち合わせている。彼は最新の試合で、伝説の男ホイラー・グレイシーに勝利し、さらに株を上げたね。ホイラーさんはお気の毒だ。5月というのは彼にとって良くない月なんだな。確か2003年の5月にも、彼はあるとてもハンサムな男に三角締めでやられていたよな。須藤よ、ホイラーを倒した者同士、大舞台で俺と戦ってみるってのはどうだい？



Matt Serra

マット・セラ　"The Terror"

1974年6月2日生／167.5cm／ヘンゾ・グレイシー柔術所属／BJ、ディン・トーマスに破れるもその後2連勝。

セラは優れた柔術技術の使い手として知られているな。ヘンゾ・グレイシーの黒帯で、ショーニー・カーター戦でオモプラッタって技をUFCファンに初めて見せてくれたし、またその「モンキースタイル柔術」をケリー・デュランティー戦で使って腕十字〜マウント〜三角という連係で観客の目を眩ませた。当初はまったくレスリングと打撃ができなかったけど、最近はそっちも大いに上達しているね。彼は天才柔術家として評価が高いにもかかわらず、最近はサブミッションで相手を仕留められなくなっているな。もしセラが、我が10th Planet Jiu Jitsu道場で6ヵ月練習すれば、大いに変わって来ると思うよ！

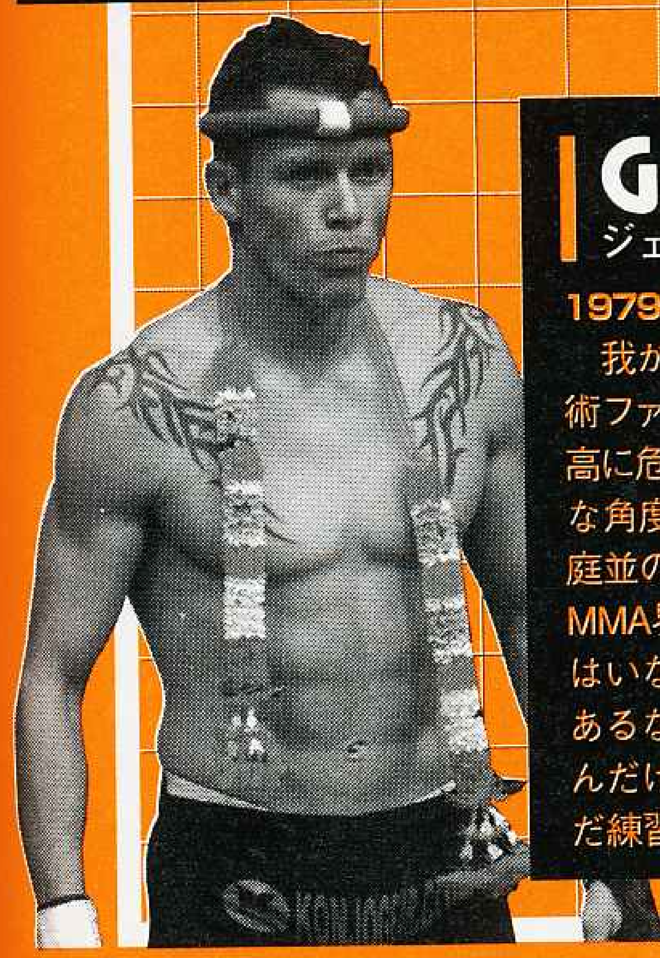


Josh Thomson

ジョシュ・トムソン　"The Punk"

1978年9月21日生／177.5cm／アメリカン・キックボクシング・アカデミー所属／UFC46ではエルメス・フランカに勝利！

トムソンは、カレッジレスラーが危険なストライカーに変身して、同時にとんでもなく滑らかな柔術テクニックも身に付けているっていう、類い稀なる存在だ。彼にはMMAの三大局面（レスリング、柔術、キックボクシング）のすべてが備わっているね。いつも優れたレスリング能力を生かしながら、ノックアウトやサブミッションで相手を破壊し続けているだろ。ガードからの三角絞めやハイキックで勝利していることでもわかる通り、彼は優れたテクニシャンだね。この若きファイターの未来は非常に明るい。トムソンが今年のどこかで、UFCライト級王者になるんじゃないかな。



Gerald Strebendt

ジェラルド・ストリベント

1979年3月1日生／175cm／10th Planet 柔術所属／UFCでは一戦一敗。

我が弟子ジェラルドは、このスポーツ全体の中でもっとも攻撃的な柔術ファイターだ。彼が持つサブミッション兵器をざっと挙げてみれば、最高に危険で動きのあるラバーガード、カミソリの如く鋭いパスガード、様々な角度から繰り出されるツイスター、破壊的なバックからの裸絞め、桜庭並のキムラロック、そして非常に攻撃的なマウントポジション、など。MMA界にこのジェラルドほど寝技で多くの武器を身に付けている選手はいないってことさ。でも彼は、もっと立ち技技術を向上させる必要があるな。ハードにムエタイのトレーニングをして、打たれ強くなるといいんだけどね。高校時代にレスリングをやってはいたけど、こっちもまだまだ練習しなくてはいけないね

■もし現地に行くことがある人で、エディの10th Planet Jiu Jitsuで柔術を練習してみたいという人は、スポーツジム「The Bomb Squad Gym」へ。ボクシング、キックボクシングクラスも開講していて、あのロブ・カーマンがプライベートレッスンをしてくれるとのことです。ボブ・サップがK-1ベガス大会でキモと戦う際に、ここで練習していったこともあったとか。

「The Bomb Squad Gym」7327 Santa Monica Blvd. W Hollywood, CA 90046　Tel:323-969-9966

ノゲイラの50倍強い男が日本を襲う?!

ビースト・オズィンガ

**「やがてホドリゴ・ミノタウロ・ノゲイラの
50倍のテクニックを持つ男が日本に上陸し、
君たちはぶったまげ、MMAの世界は一変するだろう」
エディ・ブラボーが自信満々に予告する男の名は、
ブライアン・「ビースト」・オズィンガ。
アメリカ格闘技界においても、まだ一切が謎に包まれた存在だ。
そんな彼は「ビースト」のニックネームとはうらはらに、
むしろ静かなたたずまいの男だった。
しかし彼に現在のMMA界トップの技術について尋ねると…。**

ひねリン＝取材・撮影
photo&interview by Hinerin



It has a technique.
Any technique doesn't exist in Pride.
Minotauro is nothing to speak of.

Brian Beast Ozinga
ブライアン・"ビースト"・オズィンガ
1971年6月24日、アメリカ・シカゴ出身
身長190cm、体重100kg
10th Planet Jiu Jitsu所属

——はじめに、ズバリあなたは何者なのかを教えてください。

オズィンガ　俺はシカゴから来て、ロスに移って来たのは3年前だ。それまでまったく格闘技をやったことはなかったが、友人を介してこのジムのことを知り、エディ・ブラボーと出会ったんだ。

——それまでストリートファイトなどはやっていた？

オズィンガ　まったくないね。バスケットをやっていただけだよ。

——なるほど。エディと会ってみてどう思いましたか？

オズィンガ　とても面白い人であるのに加え、素晴らしい指導者だ。彼のファイトスタイルは革命的であり、やがて全ての者たちの戦い方を変えるだろう。私は自分自身が世界でそれを披露する、最初の人間になるつもりだ。

——あなたの毎日のトレーニングは？

オズィンガ　今は、寝技の練習ばかりをやっている。1日2、3時間かな。当然ギ無しだ。ギは着たことがないし、今後も着るつもりはないよ。また、週に3、4回はウエイトトレーニングをしている。

——レスリングや打撃の練習は？

オズィンガ　それが今、私が直面しつつある課題だ。次のステージでやるべきことではある。

——あなたはすでに、いくつかの大会で好成績を挙げられていますが？

オズィンガ　今のところ出場した全てのトーナメントで無敗だ。クリス・ブレナン主催の（サブミッションレスリング）大会では、いつも優勝している（註：前回のグラップラーズ・クエストでは決勝を棄権し2位に終わっているが、"試合で負けていない"のは事実）。それに、サブミッション以外の勝ち方をしたことはない。エディの技術体系は、ポイントにはこだわらないんだ。

——あなたの戦い方は、やはりエディに似ているのですか？　引き込んでラバーガードを使い、サブミッションを狙うという。

オズィンガ　そうだ。ラバーガードにおけるミッション・コントロール（ガードで自分の足を上げて手でつかむ）からの攻撃、ハーフガードでロックダウン（エディ流の二重絡み）してからの攻撃。入り方はいろいろあるが、到着点はいつも同じ、タップアウトだ。

——最も得意なサブミッションは？

オズィンガ　三角絞めだ。エディがホイラーに極めた仕掛けからの——相手の腕を抱えて手首を捕らえる——形が一番得意だ。

——師匠のエディは、あなたをいずれMMAに進出させるとのことですが？

PRIDEに「寝技の技術」は存在しない！

オズィンガ　その通り。2年以内に、PRIDEなど大きな舞台に出ることを狙っているよ。

——現在PRIDEのトップ選手達の寝技について、思うところはありますか？

オズィンガ　現時点のPRIDEに「寝技の技術」などというものは存在しない。

——なんと！　では、ミノタウロ・ノゲイラの寝技はいかがですか？

オズィンガ　彼が「寝技の技術」を持っているかのように見えるのは、他の選手達がまったく何もできないからだ。彼は未だに、自分がギを着ているかのような戦い方をする。相手のギをつかむことに慣れているから相手の手首をつかむけど、それではどうしてもパウンドを食らう。でも我々は、戦いがグラウンドに入った瞬間から相手の体を抱えてしまうんだ。裸の人間の体には、抱えるべき場所がある。それ故に我々の技術は革命的なんだよ。

——では、ヒョードルは？　彼は非常に強烈なパウンドを持っていますが？

オズィンガ　我々のシステムでは、誰が相手であるかは重要ではない。どんな相手にもすぐにキツく密着してしまうからね。ミノタウロがヒョードルにあれだけパンチを食らった理由の一つは、寝技の攻防において、相手との間に大きな距離があったからだ。我々はさまざまな方法で距離を潰し、相手のパンチの威力を殺すことができる。パウンドの威力を殺すことこそ、我々のシステムのもっとも重要な目的の一つだ。

——武士道における、高瀬×ニュートン戦は御覧になりましたか？　高瀬はエディ・ブラボー風の動きを見せていましたが？

オズィンガ　ああ、我々はみんなでその試合を見ていたよ。確かにエディ・ブラボー風ではあったが、エディ・ブラボー・スタイルとは言えないね。彼はミッション・コントロールから第2、第3のムーブへと仕掛けることはできなかったしね。

——それをやって観客を沸せることができるのが、あなたというわけですね。

オズィンガ　そうだ。このスポーツは、サブミッションが得意な選手達が制圧することで始まったが、やがてストライカー達に取って代わった。サブミッションというアートは不毛の地に追い込まれた。現在はまるで粗雑なサブミッションが、テクニカルであると考えられている。だから新しい世代の寝技師が必要なんだ！

——なるほど。「サブミッション・アーティストのリベンジ」ですね。

オズィンガ　そうだ。きっと日本の人々は我々の戦いを、つまりサブミッションというアートを高く評価してくれるはずだ。

——次の大会の予定はありますか？

オズィンガ　ジョー・モレイラ主催のサブミッションレスリング大会が7月にあるから、それに出るつもりだ。（註・2試合とも一本勝ちで優勝した）

——最後に日本の読者にメッセージを。

オズィンガ　私の試合を見てくれれば、それが全てを物語るはずだ。

ステロイドの真実
～何が問題なのか～

**一口にステロイドというが、実際これはどういう実態を持つものなのだろうか。
こうした薬物は我々が思っている以上にスポーツ界に蔓延している。
それに関して我々が誤った認識をもっている部分があることも否定できない。
海外から日本、昔と今のドーピング事情についてレポートしてみた。**

タダシ★タナカ＝文　text by Tadashi Tanaka

メジャーリーグのオールスター戦は、イチローに加えてファン投票で選ばれたゴジラ松井のたった一度の登場もあり、日本でも生中継され多くのファンが夢の競演を楽しんでいた。しかし前日におこなわれたホームラン・ダービーの北米版実況で、殿堂入りしているジョー・モーガンがステロイド汚染を切り出した話題をご存知だろうか？

日本人選手活躍の観点からしか見てないなら気が付かないが、バリー・ボンズ、サミー・ソーサ、マーク・マグワイアらの使用疑惑は何度も新聞や雑誌記事にされ、また彼らへの供給者が逮捕されたこともある。

忘れもしない98年、大リーグのホームラン記録更新作戦は、スポーツ・エンタテインメントはどの業界でも純然競技ではありえないことの同時進行ドキュメントでもあった。プロの世界は最初にビジネスありき。客が来ないのなら作り試合疑惑も薬物乱用もないということだ。マクガイアの魔法の70号がホーム球場のセントルイスで爆発するに至っては、格闘技界の片八百長疑惑の比ではない。投手たちが来年の野球界の売り上げ増と名誉を求めて、事前の相談がなくとも甘い球はかり出していた。こうして94年の半年ストライキの影響からやっと抜け出せたとされている。

そこで格闘技界である。ステロイドは筋肉増強剤と翻訳されているが、試合で痛んだ肉体を早急に治癒させる効果もあるわけで、だからファイターが使わざるをえないという言い訳がある。

古くにはプロレスラー、フリッツ・フォン・エリック家の悲劇があった。あの一族では次々と兄弟が自殺していったが、フリッツという男は、息子たちにステロイドを買ってきては十代の頃からせっせと注射を打ってきた張本人であった。35歳で死に急いだブライアン・ピルマンや、27歳で亡くなったルイ・スピコリの中毒も記憶に残るものである。カート・ヘニングはキャラ上の"ミスター・パーフェクト"などとはほど遠い悩める二世レスラーであった。リストを書き出したらきりがない。

またプロレスではステロイド関連の裁判が91年にあり、ここで自身が使用者でもあったビンス・マクマホン代表は無罪となっている。つまりビンスの「私はステロイドを使えと言ったことは無い。使われていたことは事実だとしても、私はそれを示唆したことは無い」という主張が認められたからだが、これは勿論詭弁だ。

例えばダイナマイト・キッドの自伝「Pure Dynamite」の中に、ハッキリと「あの時代にステロイドを使わなければ仕事なんか貰えなかった」と書かれている。そしてキッドは車イス生活を余儀なくされている。ジュニア級のパイオニア戦士として藤波辰爾やタイガーマスクと戦っていた頃と、WWF時代の膨らんだヘビー級の肉体を映像比較すれば、ステロイドがどういうものかはわかりやすい。

ステロイド無知の国、日本

この記事の主旨はステロイド使用に反対するものでもなければ、無論肯定するものでもない。外人インタビューを多くこなしてきた経験から、使う側の観点を紹介したり、冷静に現状を報告するものだ。

北米では「国境を越えてメキシコに行けば何でも手にいる」と言われたりもするし、ネットで違法物を買うことも難しくない。日本でのイメージの盲点は、錠剤や粉で売られているものも沢山あるということ。「私は注射は打ってません」には、なんの信憑性もない。「アンドロステジオンは五輪ではダメだが大リーグでは禁止ではない」ということも知られてないだろう。ステロイドという用語は世界的にもタブーだが、先にあげた野球の英雄たちはアンドロステジオン使用は認めている。それに受身をとることが格闘芸術の基本であるプロレスラーの場合、鎮痛剤の乱用とステロイド類の使用を分けることは不可能だ。

いずれにせよ死亡率の高さは異常で、この十年だけで若くして30名ほどが心臓発作など薬物関連と思われる不審な死をとげた。プロ・ファイターの数はフットボーラーや野球選手より圧倒的に少ないから、単純に割り算をすればスポーツ界で汚染度が一番高いことは言うまでもない。ステロイドは見栄えのする外見を作るだけでなく、心臓肥大をももたらす。

日本に関して最初に書かなければならないことは、正規の検査機関がどこにもないという恐るべき事実である（※注）。ルールや契約書に禁止と書いてあるからといって、一度もテストしてないから意味はない。仮にこの状況が変わったとしても、今度はコストの問題がある。検査は一回数千ドルと非常に高額で、ラスベガスでのUFCもタイトル戦のみが対象だ。AIDSや肝炎の有無を調べる血液検査すら自己申告が多く、古い書類を出させるだけの大会も少なくないのが現場である。

「日本はステロイド天国だ。検査がおこなわれていたら、大変なことになって興行自体が成立しない」――この発言はライバル関係にあるUFC重役のものなので実態については割り引いて考えたにせよ、北米では何度も活字にされている。そしてネバダ州アスレチックコミッション（NSAC）は尿検査の結果、K-1ラスベガス大会に出場したデューウィー・クーパーから、ステロイドの陽性反応が出たと5月11日付の異議申立書で明らかにした。クーパーはノブ・ハヤシらを破っての準優勝。こうして海外大会時のみ、ようやく実名が発覚するのが実情である。

「90年代に活躍した某A選手は、成長ホルモン使用が引き金となり白血病を発症。さらにステロイド連用により臓器血管が弱っていたので、発病すると一気に症状が進んで悪化し死亡するに至ったと聞いています」（スポーツ紙記者）という証言もある。武蔵が『格闘技通信』でアンドロステジオン使用を告白してもいる。ジェレル・ヴェネチアン（失格）とステファン・レコ（微量）はスイス大会でクロ判定された。腕を折られて欠場していた某選手は、「過去の使用の後遺症に苦しめられたのではないか」と推測されている。骨が折れやすくなるのも症状のひとつなのだ。

ボブ・サップは21世紀の格闘界をさらなるお茶の間の話題に高めた功労者だが、「NFLでは大きな活躍をせぬままステロイド検査でクビにされた」事実はスポーツ雑誌の『Sports yeah!』などが活字にしている。

前田日明のリングスが出てきたときが、薬物使用の弊害が最初に関係者間で議論される契機であった。中継するWOWOWのイメージ・キャラにも"サイボーグ"として選ばれていたディック・フライだが、その見事な肉体と、決まったパスタを毎日食べる食生活が話題になったものの、裏ではステロイドを常用していたことは公然の秘密である。後年シャワー室で彼の局所を目撃したレフェリーは、その後遺症の恐ろ

※　検査機関がないと書いたが、本来の業務目的ではない「三菱化学ビーシーエル」が一社ある。日本にも五輪委員会が認定した機関が必要というだけで、どうしても必要な場合のみ分析可能という程度。日本のプロスポーツ界では原則血液検査しかおこなわれてないというのが記事の主旨。

しさに震え上がったという。概してオランダの選手は使用者が多く、ガチンコをやるようになってからは、ウルトラマンよろしくカラータイマーが消えた途端に、ガス欠を起こして負ける選手が続出していた。それまで伝説扱いだったマルコ・ファスがアレキサンダー大塚に負けたとき、「薬をやって失敗した」と英語版PRIDEでバス・ルッテンが弁解して話題になったことがあった。

桜庭和志はインタビューでステロイドについて聞かれ、「ファイターの活躍できる期間が短い以上、制限を唱える立場にない」と正直に答えていた。またそのオフレコでは、某B選手のアマチュア時代の体重と、総合格闘技時代の体重がいかに違うかを指摘して、その場が大笑いになったエピソードもある。

思い込みで偏見のあるファンが多いのも格闘技界の宿命で、自分のひいきの選手はシロになる。アメリカ人は一般的にオープンだが、ブラジル人は興奮剤も含めてなかなか口を開かない。一方で、ブラジルに行ったことがあるなら、いかに薬物天国で、値段も安いことかわかるだろう。柔術信奉者はアマレス系の米国選手はステロイダーだと決めつけ、果物を食べるグレイシー・ダイエットを美化する傾向にあるが、C選手は日本でのデビュー戦から急にでかくなり始め、乳首にバンテージをはってきたときは疑惑が頂点に達した。ステロイドは女性化乳房などの副作用があり、手術したあとを隠したとしか説明しようがなかったからだ。

どこで線引きするべきなのか!?

さて、私は小誌を含めて、これまでかなりの数の外人選手を直撃し、他の記者が尻込みするステロイド疑惑もズバズバ聞いてきたと自認している。ただし、本人が使用を認めたことは一度もない。誰もいないのだ。また取材の窓口からの要請で、せっかく本人の言い分を聞けたのに、そもそも紙面に使えなかったことも少なくない。

以前、アメリカのレスリング・オブザーバー紙主幹のデイブ・メルツァーとこの件でメモを交換したことがあるが、世界的にみても、過去のステロイド使用を自著などでまともに告白したのはダイナマイト・キッドと船木誠勝だけという驚くべき調査結果もあり、それほどタブーということになる。

あれだけUFCデビュー当時から疑惑を指摘され、ライバルのダン・スバーンによる「最強は誰ですか?」との記者質問に、「それはステロイドありのランキングか？　なければオレ様がチャンピオンだ」という有名な当てつけの台詞が残っているケン・シャムロックでさえ、あらゆるジャーナリストに否定を繰り返してきた。

最近の話題では、ティト・オーティズがパット・ミレティッチ・チームのことをステロイド軍呼ばわりして、ネット掲示板の格好のネタにされていた。ティム・シルビアはヘビー級王者を剥奪されたが、参謀格のジェレミー・ホーンが「ファイターが使うのは仕方がない」とネットに書き込んだこともある以上、いくら親分のパットが否定しても苦しい。かといって、たまたま検査にパスしたティトは大口を叩くほど完全に潔白なのか？　この議論を始めると不毛になってしまう。

タバコや酒が自動販売機で買えてしまう特殊な日本において、体に害のある薬物がどうだの、健康によくないなどの忠告がいかに不自然な議論か。日本は子供が平気でコーヒーを飲んでいる不思議な国として海外では有名で、コーラだって強力なカフェインに違いない。コーヒーで車イス生活にはならないにせよ、かぜ薬でも検査に反応するという基本認識を棚に上げて、ステロイドなどの是非を語ることはナンセンスになる。

普通に市販されているプロテイン類やサプリメントも成分が灰色に近いものがあるし、そもそも国によって認可基準が違うという現実もある。欧州で売られているのに米国ではダメとか、その逆もあるわけで、注射でないものにも、疑い出したらきりがない。

そもそもアマレス選手がよく使用する蛋白同化（アナボリック）ステロイドは検査をすり抜けることができる。ドーピングチェックは、使用する薬物の選択・使用時期の設定、マスキング等で切り抜けることが可能なのだ。禁止しても、使う奴は使う。それでバレない奴もいる。新しい成分はどんどん開発されているから、検査逃れはいたちごっこ。不公平な世界なのである。

それにヒステリックに使用を否定したところで、一般人ですら、本人の知らないところで一般薬として違法薬物は使われている現実がある。アトピー治療クリームだって、その他大量事故の治療に使われた可能性だって考えられる。注射器で意図的に使った者だけがクロなどという線引きに意味はない。格闘技界はもともと新興スポーツで、もともと怪しげな興行関係者や、バーの用心棒上がりの力自慢がリングに参加しだしたアングラ世界だが、子供たちのヒーローであるべき野球のホームラン・バッターが、ほとんどクロという現実は無視できないものがある。

野球界、大相撲、国会証言

若返り治療におけるヒト成長ホルモン（HGH）の効能についてはもはや誰も否定できなくなった。運動の組み換え剤は錠剤やスプレー式まであり、違法性の認識がまるでない。女子プロレスの人間国宝メイ・ヤングは、80歳を超えて変身をとげている。恐ろしい現実がある。お笑いスポーツ番組では、常識的にはあり得ないくらい速く走ったり、死人を甦らせるようなマネを主催者はやってはいけないはずだが、魔法の薬のせいで許されてしまった逸話が活字にされた。野球界の戦後の黄金期を支えた選手の寿命は確実に引き伸ばされたという証言もある。

長州力や橋本真也の世代までは、本当にちゃんこを食って体を大きくしてきたが、かといって現在の50歳代の国会議員がサイパン合宿で日本では買えないプロテインを飲んでがんばっているのだから、いわゆる素朴は使ってないからといって「ナチュラル」を自慢してもしょうがない。また、その後の世代になると、すでにサプリメントは食事メニューに組み込まれている。さらにはステロイド使用の自覚から、妻が妊娠したときにもしも奇形が生まれてきたらは数知れず。それがロッカールームの現実であって、否定してもしょうがない。

国会証言で権威があるとは思わないが、松浪健四郎議員が大相撲のステロイド疑惑を、日本人の体格が著しく変わっていないのに、この十年で力士の平均体重が急激に増えたデータを持ち出して、クロを主張したこともある。しかし、それで大相撲に検査が導入されたわけではない。スポーツ・ドクターのなかにはファン気質というか、タニマチ感覚のボランティアも多く、ひいきの選手に頼まれれば処方箋を書いてしまう実態は日本も他国も変わりない。

鹿の角の粉の効用を提唱するところから疑惑を始めると、ステロイド類の使用を自明とは思わなくなる。ガチンコだろうがプロレスだろうが、私が格闘技に求めているのは、誰がストロンゲストかではなく、グレイテストかどうかだ。「誰が一番強いのか」を探し求めた結果、93年にリアルファイトという禁断の扉が開けられることになったわけだが、その先にあったのは底なし沼であった。勝ち続けた無敗選手が神格化されるわけでも、チケットを売ったわけでもなく、無惨に負け続けて記憶に残った格闘家もいる。最強ランキングなどというまやかしこそが信じられない。

ジョシュ・バーネットの師匠でありマネージャーでもあったマット・ヒュームは、UFC王座剥奪の公聴会で反論した。「検査が現時点でいい加減で確実ではない」「非公式な結果を公表するのは間違っている」。謝罪すべしとまで抵抗したことで、かえって心証を悪くした感が否めない。この教訓からティム・シルビアのケースでは、最初からあっさり認めて謹慎期間を短くさせた美談があった。いずれにせよ、プロ・スポーツはどこもダブル・スタンダードにしかならない。

マーク・ケアーにインタビューした際には彼はきっぱりと日本で自分がステロイド使用者だと活字にされ、DSE関係者でさえそう思い込んでいることの誤りを必死で訴えていた。「PRIDEグランプリ2000」をクライマックスとするケアーの栄光と転落を描いた秀作ドキュメンタリー映画『スマッシング・マシーン』には、画面上にも沢山の薬物や注射器が出てくる。専門的な薬物名もズラズラ語られるが、それらはすべて鎮痛剤であって、確かにステロイドという言葉は一度も出てきていない。英語で言うペイン・キラー依存症になってしまったケアーのことをカメラは追っているのであって、なんでもかんでもステロイドだと決め付けてもしょうがないわけだ。

格闘技界で心配なのは、むしろ鎮痛剤の乱用なのである。

Truth of steroid

ガードポジション進化論あるいはラバー・ガード封印宣言？

ガードポジションをいま考えたい。そんな気持ちにさせられたのは、
5・23PRIDE武士道其の参、高瀬大樹×カーロス・ニュートン戦だったようだ。
ラバーガードを駆使してキャッチも奪い判定勝ちを収めた高瀬だが、
観客の多くにはあのガードが単なるホールディングにしか映らなかったようだ。
「高度な技術の攻防」「いや、単なる膠着試合」と試合の評価も分かれるようだ、
それはさておき、あの体勢から何を狙ったのかを本人に聞いてみた。
そこから見える総合格闘技におけるガードのあり方とは…？

和良コウイチ＝文
text by Koichi Wara

大屋美和＝撮影（左頁）
photo by Miwa ohya

日本スポーツ出版社＝写真提供（右頁）

相手のパウンドが防げる利点があるけど三角絞めぐらいしか攻めができない。

——高瀬選手のよくやる、あの足を抱えるガードポジションは何と自分では呼んでいるんですか？　エディ・ブラボーのそれはラバー・ガードといいますが。

高瀬　特に名前はないです。あれは攻めて来ない人とか、相手の出方によって臨機応変に使い分けるんです。

——パウンドが強い相手とか？

高瀬　パウンドが強い相手と、あと判定勝ち狙い用。この間のカーロス（・ニュートン）のような、亀になってコツコツパンチを打ってくる相手にもいい。

——このガードはエディ・ブラボーに影響された？

高瀬　前にエディ・ブラボーが俺の試合を見たんだろうとか言っていましたけど、見てないですよ（笑）。2年ぐらい前に練習のとき、思いついたんですよ、あそこから三角絞めの入り方を。練習では結構決まったんですよね。ジョイユ（デ・オリベイラ）と戦った辺りです。ジョイユ戦でも1回仕掛けたんですよ。

——あのガードの利点は？

高瀬　この前ニーノも桜庭さんとの試合でやっていましたね。あそこから彼の場合は極めに行かないですけど。僕の場合は相手を固定して殴るときにもやるんです。カーロス戦ではすぐにスタミナが切れて動けなかったんですけど（笑）。

——カーロス戦は酷評されました。

高瀬　ＰＲＩＤＥではやるべきガードじゃなかったかもしれませんね。

——あ、そうですか？

高瀬　柔術の大会とかサブミッションの大会とかならいいですですけどね。

——総合には向いていないガード？

高瀬　向いていないと思います。汗で滑ってくるとすっぽ抜けちゃうし、判定になってもジャッジが分からないから。「ノーホールディング」とレフェリーがよく言うじゃないですか。それだと思われちゃうし、本当に勝ちたいんだったら、違うガードを総合ではオススメしますよ。

——企画の根底が崩れていくような…（笑）。

高瀬　もっといいガードがありますよ。

——あのガードは、相手にとっても自ら攻めなければ守りやすい？

高瀬　守れる。僕が前にジョイユに掛けたとき、カーロスがその試合を見に来ていたんですよ。その後にＵＦＣに行ってアメリカでカーロスと練習したとき、あれを掛けたら「それ知っているよ」とカーロスが笑いながら言って。でも、まったく知らない人にはかかりますよ。

——膝の柔らかさも要求されるんじゃないですか。

高瀬　いや、結構固くても極まりますよ。そんなにふにゃふにゃしていなくても。

——でも、三角絞め以外に展開はないんですか。

高瀬　ない（笑）。

——マッハ戦でもそれをずっとやっていたのは、三角しか狙っていなかったから？

高瀬　なにせ酸欠で2、3Rの記憶がないもので（笑）。

——確認しますが、あれは密着する分強いパウンドを防ぐという利点もある。

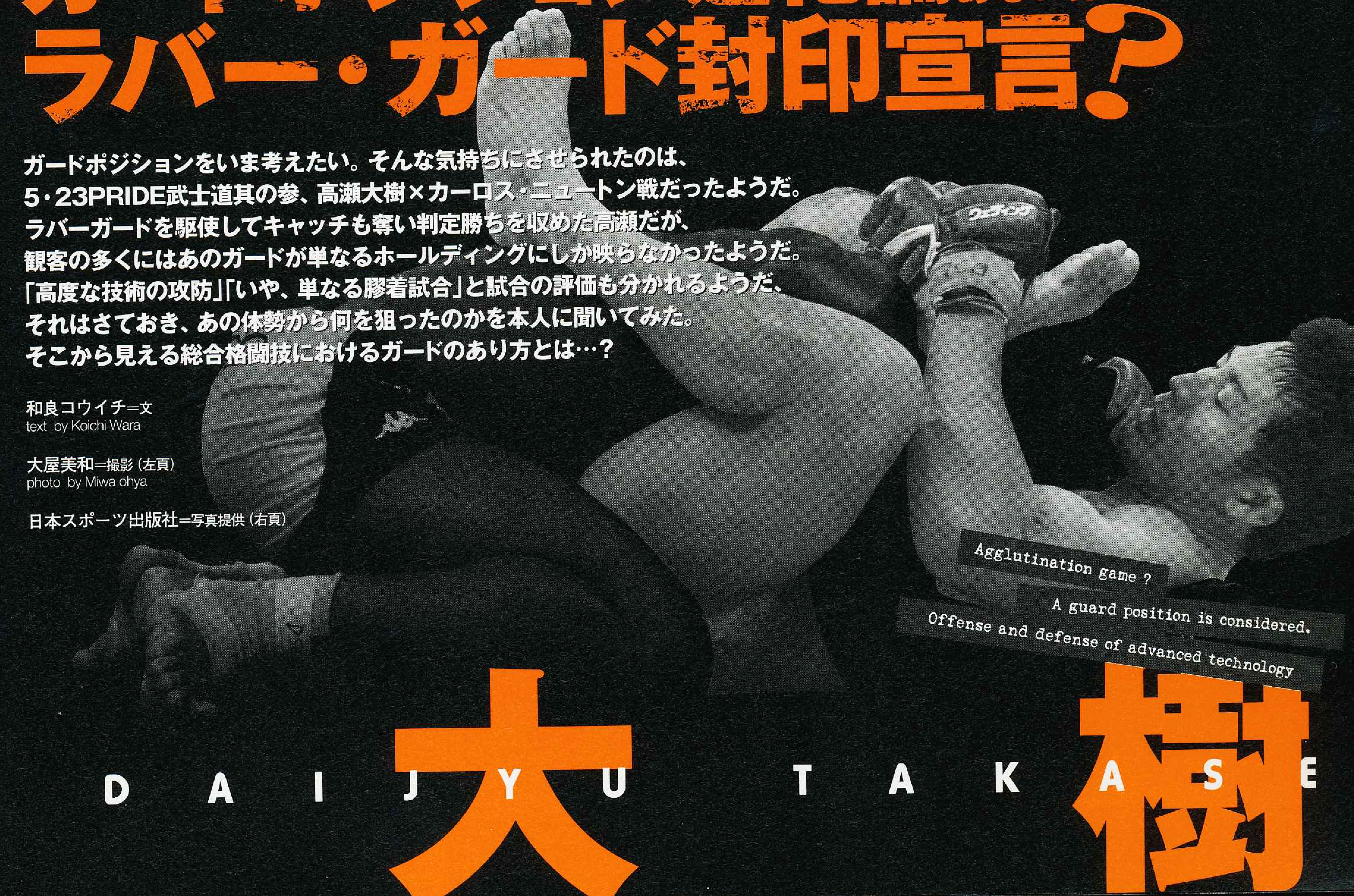
高瀬　ありますけど、自分も一つの技しかつなげられないというのもありますね。ガードには三段階あって、べちゃっとくっついている密着とちょっと隙間が空いているのと、ボーンと隙間が空いたガードがあって、あれが一番隙間がないガードなんです。相手も攻めることができないけど、こちらの攻撃パターンもかなり狭まって読まれちゃう。ホールディングして膠着していると思われるガードだし、お客さんも見た目的に膠着していると見るし…。

——それで榊原社長にも酷評されると（笑）。

高瀬　（笑）。興行者としての視点なので真摯に受け止めています。

——これからもガードポジション一本でいきますよ、みたいな宣言はないですか。

高瀬　ないっすよ（笑）。クリス・ブレナン



戦だって一回もガード取っていないじゃな
ですか。足の裏を腰骨につけるやつ。
高瀬　いや、試合のとき、たまたまここに
駄目。それは間違いない。

戦だって一回もガード取っていないじゃないですか。

——いや、昔からの印象が。

高瀬　駄目ですね、その印象は(笑)。

——でもいまホイスのようにクローズドガードだけという選手もいませんね。

高瀬　そうですね。でもクローズはクローズで利点ありますよ。相手が亀の状態のときは、クローズから三角極まりやすいし。

——ノゲイラみたいなガードは使わないんですか。足の裏を腰骨につけるやつ。

高瀬　それだったら他のガードをおすすめします(左下参照)。常にスイープができるというのがあるし、それで揺さぶって他の技にいける。アキレスとか足関に気をつけないといけないけど、相手が足を取ってきたらすぐ立てますよ。シウバも桜庭さんとやったとき、ここからヒザをぶつけていました。

——それでヒザを使うのを知った?

高瀬　いや、試合のとき、たまたまここにホドリゴの顔があったから…(笑)。

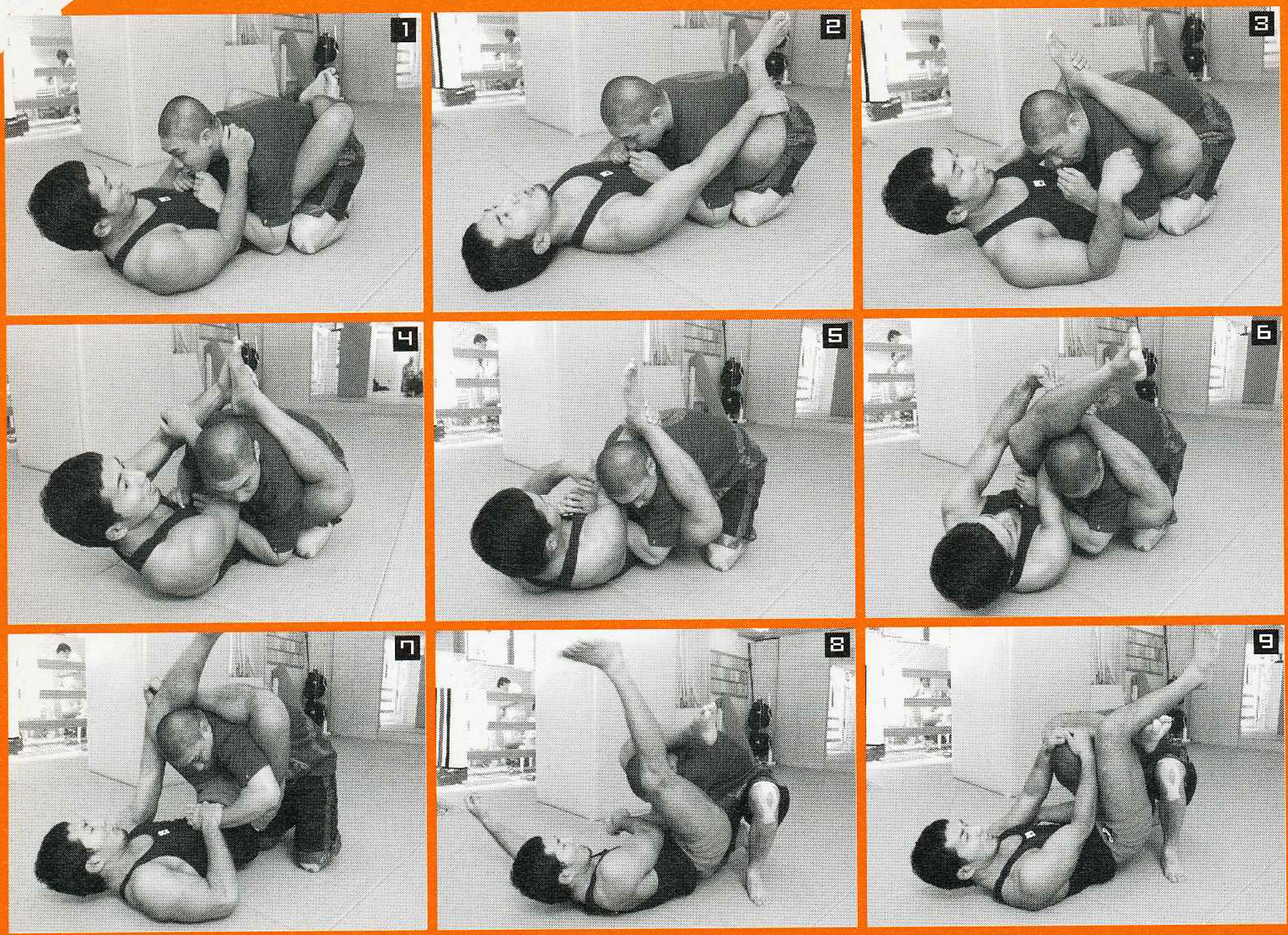
——総合のガードポジションで一番大事なことは何ですか。

高瀬　うーん…決定打をもらわないことですね。打撃がある総合になると。ただし上の人も下からの仕掛けが怖かったら思い切りパンチが打てないし、ダメージのないコツコツパンチになる。だからガードを取っている人は、上の人の3倍は動かなければ駄目。それは間違いない。

——いまやノゲイラだって研究されて、もう下から取るのは難しい状況でありますからね。

高瀬　難しいですね。相手がストライカーだったら取れるかもしれないけど、いま同じ土台の人から取るのはすごい難しい。キャッチするのさえ難しいじゃないですか。だからいつでも相手を蹴って、立てるようにしておくべきですね。

これがラバーガードの狙いだ!



ガードポジションを取ったら、相手が亀になってディフェンスを固めてきた場合。右足を高く上げて、左手でその足首をつかみ、相手の頭を下げさせる。次にヒジや前腕部で相手の頭を横に制しながら、右手に足首を持ち替える。

このとき、左手で顔を殴ると、相手は防ごうとして右手を上げてくる。そこで、左足をそのまま三角絞めのように右足首に引っかけ、絞め上げる。

このままでもタップを奪えるが、「相手の肩がでかい場合や身体がごつい奴にははまらないときがある。日本人は足が短いから」と高瀬は言う。

ここから、しっかりとした三角絞めの形に持っていくにはどうしたらよいか。まず右手を抜く。このままでは絞まらないので足を組み替え、正式な三角絞めの形に持っていく。「これがベストなラバーガードからの三角絞めです」

詳しくは内緒だけど…
いま最先端のお奨めガードポジション

ラバーガードに早々と見切りをつけた(?)高瀬が、いま自らよく使用し、かつ総合でお奨めだというガードポジションを紹介してもらった。

Aはここから「打撃」もできるガードポジション。右ヒザをガーンと相手の顔に叩き込むのだ。「ホドリゴとやったとき、あいつ青タンできていましたよ。試合中に"ちょっと待ってよ"みたいな感じで(笑)」。

頭を抱えながら左ヒザは相手の右脇を開けさせ、右手で上からのパンチを抑えている状態だ。相手がパスしてこようと自分の右側に回ってくれば、カウンターの三角絞めが極まりやすい。オーソドックスに下からアームロックに取ることもできるし、スイープで揺さぶることもできる。

Bはまだ研究中というガードポジション。両手で相手の片手を引きつけて固定し、もう片手は足で制する。

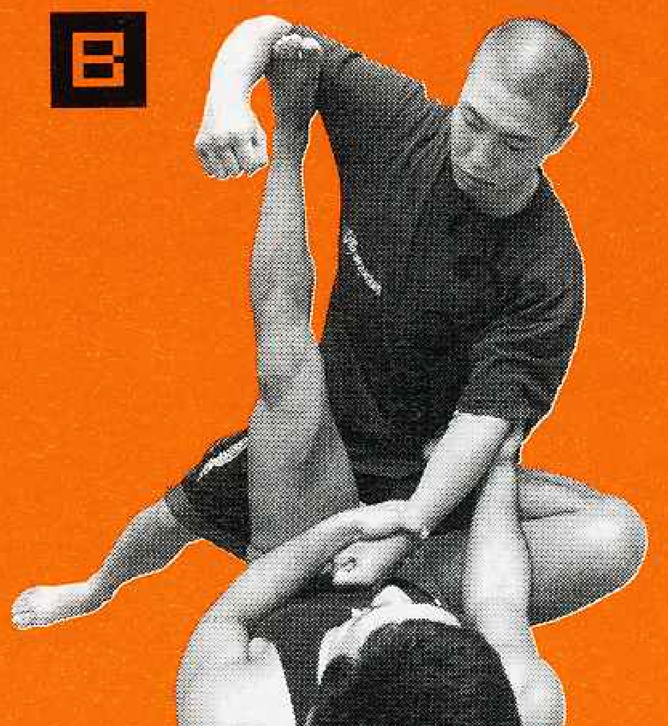
「相手を両足で押すと嫌だから前に出るんですよ、人間って。フェイントですね。引きたかったら押せ、押したかったら引けと」。

この原理を利用して、相手が前に出たときに左足を外し、前のめりになったところで三角絞めに入る。相手が立ち上がっても、足を組み替えて草刈スイープも狙うことができる。

A



B



Daijyu Takase
たかせ・だいじゅ
1978年3月20日、埼玉県北足立郡出身
身長180cm、体重87kg、フリー
現在はBCG (03-3560-7911) で柔術クラスを指導。

高　瀬



★プレゼントアンケート★
本誌をお読みいただいたご感想などをアンケートでお答え下さい。ご応募いただいた方の中から抽選でプレゼントを差し上げます。ご希望の方は下記URLにパソコン、携帯電話などでアクセスし、必要事項を記入の上ご応募下さい。なお、携帯電話の場合、一部古い機種やPHSだと応募できない場合があります。ご了承下さい。
http://www.infor.co.jp/gachi

PRODUCER
Ken Sawada

CHIEF EDITOR
Ken Sawada

WRITER
Koichi Waragai
Manabu Takashima
Hideyuki Kumakubo
Hinerin
Kouji Shigeta
Masa Fukui
Mika Anezaki
Norihiro Hashimoto
Shu Inagaki
Susumu Nagao
Tadashi Tanaka
Yukiyo Matsumoto
Yusaku Hanakuma

DESIGNER
Zapp!:
Yukinori Hidaka
Ken Suzuki
Ryu Sakai
Hideyuki Kaise
Ryo Ohi
Yukihiro Nakajima
Ryouichi Suzuki

発行人:豊島誠志
編集人:沢田建
発行・発売:インフォレスト株式会社
〒162-0825
東京都新宿区神楽坂6-59
tel:03-5229-4616(営業)
03-5229-5726(編集)
03-5229-4351(広告)

ご意見ご感想などあればこちらまでよろしくお願いします。
gachi@infor.co.jp

ガチンコ★LOVE



佐藤ルミナ

RUMINA SATO

He stops, and looks back
upon these ten years
And begins to fight again.

10年目の佐藤ルミナ

**UFCの開催の翌年、11月7日に初マットを踏み、
これまでに年に3度のペースで、寝技で顔面パンチ有りの戦いを
こなしている選手がいる。10年に渡り、総合格闘技界を生き抜いてきた。
以前のように華麗な一本勝ちはもう見られない。
ひょっとしたら、それほどリングに立つ姿も見られないのかもしれない。
だが、どんなに泥臭くなっても、観客の誰もが彼に熱狂する。
PRIDEでもK－1でもない、修斗という限られた世界で、
極度に蒸留された強さへの憧れは、今も衰えない。
佐藤ルミナ、今、必死になれる30歳がいる。**

高島 学＝取材・文
text by Manabu Takashima

和智正夫＝撮影
photo by Masao Wachi

そうだと思うんです。打撃は才能、努力も必要だけどセンス。寝技はセンスがなくても、強くなる。だから、競技人口が増えた。競技人口が増えたことは、素晴らしいことだと思いますよ。そのなかから、打撃ができる人が修斗に上がってくれればいいんで。

22 今の修斗に欠けているものは？

やっぱり興行的なもの。あと、ファイトマネーが上がれば、誰も他所にはいかないし。それからヘビー級を何とかしないと。色々あるんだろうけど、せめてライトヘビー級までは。郷野と菊田さんが居てくれたら、ね。ちょっと修斗は堅過ぎる面があったかも。俺も過去に八百長をやっていた団体の人、修斗のリングに上がって欲しくないという気持ちはあるけど、もう今、現役の連中は知らない世代だから、もういいのかなっていうのは思い始めています。八百長をやっている奴なんて、もういないですからね。そこをどう区切りをつけるのかでしょうね。でも、拘りは忘れないでやらないと、流されてしまうので、その拘りは大切にしないといけないです。

23 今の修斗で誇りに思えるものは？

自分のなかでは間違ったことはやっていないということ。世界に広まり、アマチュアもやっている。日本中でアマ修斗がある。最後に笑うのは修斗。引退してからになると思うけど、「修斗やっていて良かった」と絶対に思う、と思っているんで。

24 今の自分に欠けているものは？

私生活は充実しているんで、打撃です。

25 今の自分で最も誇りに思えるところは？

流されずに、ここまで一つのことをやってきたこと。人生で初めてですから、一つのことをこんなにやって来られたのは。

26 10年前、10年後に秋本が町会議員になっていると思っていた？

ハハハハ、あの人は面白いこと、変わっていることをやっていると思っていました。面白いこと、人の役に立つことをやっているなと。

27 10年前、10年後に巽が一流企業で働いていると思っていた？

あの人についても、同じです。凄い変わり者だから。でもチャンピオンになっていると思っていたんですけどね。あんなに早く辞めると思ってなかった。でも、違うジャンルでも頂点に立てる人なんで。２０、３０年後にはどこかの一流企業の社長になっているかもしれない人です。

28 10年前、10年後に和道がブラジルと日本を行ったり来たり、オーバーステイして役所から睨まれたり、とことん安定していない人間になると思っていた？

思ってました。アイツは定職につかず、汚い生活をしているだろうと。で、「服ください」、「服ください」っていう生活は、あれはもう一生変わらないと思います。ハハハハハ。

29 10年前、10年後に自分はどうなっていると思っていた？

チャンピオンになっているはずだったんですけど。２、３階級制覇している予定だった。あの頃の発想だと、８０kg台になってヘビー級と戦っていると思っていましたね。

30 実現できた理由は？または、そうならなかったのはなぜだと思う？？？？？？？？？

流行りすぎたからかな。層が厚くなった、自分で思っている以上に。それと途中で練習しなくなったから。

31 1年後、自分は何をやっていると思う？？？？

修斗をやっていますよ。

32 3年後、自分は何をやっていると思う？または何をやっていたい？

チャンピオンになっていたい。

33 10年後、自分は何をやっていると思う？または何をやっていたい？

引退しているかもしれないけど……、金持ちになっていたい。チョット普通よりも、時間とお金に余裕がある。良い立場にいたい。常にサーフィンができる環境を作りたい。

34 10年前の自分と、5年前の自分の違いは？

10年前は何も知らない人間、怖いものなしでイケイケでした。５年前は天狗で、怠慢でした。都会に流されていた。友達が増えて、修斗の有り方もソッチ系に傾いていたし。５年前で自分も若かったから、楽しい方向に流された時期。精神的に弱かった。

35 5年前と今の自分の違いは？

今は遊びつくしたから。５年前にやっていないことを今、やれるようになった。「あの時やっていれば」と思うのが、まだ練習できる歳で良かったと思います。反省している自分。あと、あの頃はやせたくなかった。有酸素運動をしたくなくて、有りえない話ですね。走ってなかったけど、今は走っているのも違います。

36 20年後の修斗はどうなっていると思う？

近いうちに、また少し大きくなる機会があったら大きな揉め事がありそうですね。坂本派とか、桜田派とか。コミッションだって分裂しているかもしれないし。でも、そうやって大きくなっていると。選手に関していえば、プロだった連中が引退してトレーナーになっているんだから、練習体系確立してもっと強い選手が増えているでしょうね。俺らのような手探りじゃなくて、マニュアルができているでしょうね。

37 UFCの人間は、ルミナのスタイルは今でも最高。でも、世界のトップと戦うとあの戦いはできない。年も取った。坂本は、ルミナにイージーな対戦相手を用意し、強いルミナを見せ続けるべきと言っていたが、この意見についてどう思う？

ハハハハハ。それジョー・シルバ？　興行主的な考えだから、そういうのもありなんじゃないですか。俺は嫌だけどね。俺はできるだけ強い相手と戦いたいし。

38 今も格通が、修斗の人気があった時のルミナを求めていることに対して、どう思う？

俺もそうなりたい。あの頃に戻りたい。

39 例えば前座、クラスBの試合なのに、一番大きく誌面で扱われることに対して、どう思う？

プロとしての俺の価値を見て扱ってくれているのだから、メインの選手には悪いなっていう気持ちもありますけど、ハッキリ言ってメインの試合より面白い試合をやっているし、自信もあるし、わかせていると思っている。それでもし、他の選手がブーブー言うなら、俺と同じことやってみろという感じです。そういう風に扱われるのはプロだからしょうがないけど、別にランキングとか強さのバロメーターもあるわけだし。良い試合しているから、ランキングが上がるなんてことがあったらおかしいけど。理想はランキングのトップで、大きく扱われることですね。

40 格闘技雑誌を読みますか？

あんまり読まないですね。

41 読むなら、どんなページを？読まないなら、他にどんな雑誌を読みますか？

読むなら自分のページ。他で読むのはサーフィン雑誌。サーフィンに本当にはまっているから、早起きするくせがついて、朝からジョギングするようになったし、夜遊びもしなくなりました。

42 今の自分があるのは、誰のおかげだと思っている？

お母さんのおかげ、ハハハハ。誰って言われても、もう応援してくれた方々のおかげです。くさいけど。俺が負けて、雑誌とか出なくなって離れていった人もいるけど、でも、ずっと信じていてくれる人の方が多かった。凄く幸せだと思います。

43 今の夢は？

チャンピオンになること。あと、家が欲しい。広い家が欲しい。実家の下に２００坪で６０００万。小田原が見渡せて、古いけど建物が残っていて。実家のすぐ下だから、そこを買えば佐藤村みたいになれるんで。そこを買って、結婚して、子供と住みたい。

44 「なぜ、リングに上がるの？」と記者に聞かれたら、何と答える？

今、聞かれているじゃないですか。う〜ん、男だから。やり残したこともあるし、だからじゃないですか。

45 「なぜ、リングに上がるの？」と彼女に聞かれたら、何と答える？

それは「もう上がるな、修斗をやめて」ということですね。「俺の勝手だ」って。彼女よりリング。

46 リング上に娘を上げて、写真を撮ってもらう選手を見て、どう思う？

記念の試合ならいいけど、毎回っていうのはどうかな。

47 後輩に恵まれていると思う？

思います。練習でも強いし、勝田にしても、植松にしても。で、みんな良い奴だし。植松は泣いてくれるし。物凄く感謝しています。

48 先輩に恵まれていると思う？

あのう、Ｋさんはどうかと思うけど。朝日さんとか、伊藤さんだ、大河内さんだって、木口の先輩には本当に恵まれていましたし、俺は本当にいい環境で生きていますね。

49 友人に恵まれていると思う？

恵まれています。恵まれすぎです。格闘技以外でも知り合いができて。いろんな相談に乗ってくれる人がいるんで。

50 今のプロ修斗のリングでの目標は？

まずは環太平洋ライト級トーナメントに勝つことです。あと、世界を獲るためにコツコツとやっていくこと。最初に宇野君と戦って勝っていたら、引退していたと思うけど、この歳になって、こういう風に言えるのも、本当にいいもんですよ。

RUMINA SATO

The selected way, the way which was not chosen

～今のルミナに50の質問

01 こないだのバオ・クアーチ戦の印象は？

意外にスッキリ勝てた。もっと粘られるかなと思ったけど、マウントも簡単にとれたしグラウンドに関しては、思いのほかアッサリといけました。打撃に関しては、またやっていたことが出せなかった。ローキックに相手の大振りの右が来るのは分かっていたし、対策していたのに腰が引けてしまった。もっと遠い距離からローを打つつもりだったのに……。打撃に関して反省点は残りましたね。でも、前回よりは少し進歩したかなと。最近は以前より１試合の重みを、感じるようになっています。

02 10年前の今頃、誰とどんな練習をしていた？

秋本じん、巽宇宙、和道稔之、朝日さん、桜田さん、山田学さん、中井さん。木口道場時代だから大河内衛さんと凄く練習していた。スパーリングばかりで、技術練習はほとんど無かった時代で。打撃もヘッドギアなしで、殴り合っていた。技術もへったくれもなかったですね。ポジショニングの概念もない時代で、関節技の極めっこだった。ＵＦＣが始まった直後で、まだ修斗も寝技の顔面有りは解禁されていなかったけど、そういう風に時代は変わると思って練習していたころですね。そういうことを踏まえた練習をし始めていた。秋本さんが凄くそういうことを考えていて、今は反則だけど掌の一番硬い部分で殴るとか、拳頭より鉄槌の方が効くんじゃないかって。先輩とかは顔面有りに対して「野蛮」とか、嫌悪感を持っていたけど、俺たちは若かったし、「これからはそういう風になっていくんだ」って、興味があった。総合を始める奴は、限りなくケンカに近いものを求めるし、規制が少ない方がやり甲斐を感じてもいました。ビビリながらも興味があって、頭突きの練習とかもしてました。

03 10年前の今頃、誰が一番強いと思っていた？

川口さん、川口健次さんが相当強いと思っていた。修斗で一番強い人が、一番強いと思っていたんで。やっぱり川口さんが強いと思っていましたね。

04 10年前の今頃、その後の10年で修斗はどうなっていると思っていた？

10年後というのは考えていなかったけど、とにかく将来は相当なレベルで世間に広がっていると思っていましたね。自分が広めてやるっていう気持ちでいたし。トップ・プロは修斗だけで喰えるようになると思っていた。

05 この10年で一番、印象に残っている自分の試合は?

宇野君に負けた試合、最初に負けた試合ですかね。強がりとかじゃなくて、本当に自信があって、98パーセントぐらい1ラウンドで一本勝ちする自信があったし。周りもそうだったと、誰もが俺が１ラウンドで一本勝ちするって思っていたんじゃないですか。それがあんな結果になってしまって。怖さを知りましたね。

06 この10年で、試合前に一番ワクワクした自分の試合は？

ワクワク？　最初のころは恐怖心が本当になかったし、どんどん次がやりたいって毎試合後に思っていました。100パーセント勝てるって思っていたし、物凄い自分に自信があった。ジョエル・ギャルソンに負けるまで、絶対に負ける気がしなかった。ジョン・ルイスと最初に戦う前も、絶対に何とかなるって思っていた。今から思うと、「なんだったんだろうな、あの自信は？」ってなりますね。練習でも誰にも負けなかったし、レベルが低かったんだろうけど、100kgぐらいある奴とやっても負けなかった。俺も格闘技のキャリアがほとんどなかったんで、「俺って凄いな」なんて思ってしまって。

07 この10年で一番悔しかった試合は？

２回目に宇野君に負けたとき。悔しいというより、本当に周りの皆に悪いなっていうのが、凄くありましたね。凄く期待されていたし、2回目もアレかよって。しかも１ラウンドで、スコッとやられて。そういう意味では、あれが一番悔しい試合かもしれないですね。

08 この10年で一番痛かった試合は？

試合中に痛いと思ったのは、五味との試合。試合中にずっと「バカになる。バカになる」って。グラウンドでコツコツとパウンドもらって、いっそのことＫＯしてくれって。一発、ドカンとやるか、パスしてくれぇって。どんな態勢からでも、殴られて。試合中に痛いと感じたのは、あの試合が初めてだった。あと、試合後に痛かったのは、ジョン・ルイスとやって眼窩底骨折したときですね。

09 この10年で、一番嬉しかった試合は？

勝ったら全部嬉しいですよ。ただ、最近の試合も嬉しいですよ。99年のバリジャパに勝って泣いた試合も嬉しかったし。こないだ、4月のエリカス・ペ、ペト、ペトなんとかっていう奴に勝った試合も嬉しかった。自分のなかでウォーッとなりましたね。ただ、一番は分からない。勝った試合は、全部、一番嬉しいかも。ボテーリョ？　ああ、あれも嬉しかった。でも、忘れていた。ああ、あの試合は嬉しかった。最初、やられそうで、盛り返して、最後は一本。流れがあったし、でも、忘れていたなぁ、もう。

10 この10年の対戦相手のなかで、一番強かった選手は？

ペケーニョ。ああ、でもあの試合は分からない。一番強い選手か？　総合的には宇野君だと思う。1回目は体調的なものもあったけど、2回目は完全な負けだし。ウェルター級では宇野君、ライト級じゃペケーニョと言やぁペケーニョ……。でも、あれは何とも言えないですね。

11 この10年の対戦相手のなかで、闘っていて一番面白かった相手は？

鈴木マサト戦とか面白かったですね。打撃ももらって。「当たったら、俺やられる」っていう真剣の切り合いみたいな感じがしました。むこうも、俺に取られたら終わるっていう雰囲気で戦っていたから、そういう意味で「どっちか最初にやった方が勝つ」っていう凝縮された３分間でしたね。あれはスリリングで面白かった。

12 この10年間で、一番嬉しかったことは?

一番、一番っていうのは分からないですけど、修斗をやっていて色んな人と出会えたこと、ですね。

13 この10年間で、一番悲しかったことは?

特に無いですね。小さなことはあったかもしれないけど、基本的にマイナスに捉えないんで。

14 この10年間で、最も腹が立ったことは?

これも細かいことはたくさんあるけど、ほとんど別にいいやぁなんてなりますから。色んな人が世の中にはいるんだから、その人の個性としてみないと。色んなことが起こりますからね。そうやって見ないと、Ｋさんとやっていけないですよ。もう10年ですから。皆、抜けていくのに。「あの人のこと信用できない」とかいって。でも、子供なんだから分かってあげないと。

15 この10年で、一番練習していた時期は?

最近、ここ２～３年です。若いときはもっとやっていたかもしれないけど、コンスタントにやっているのは今ですね。もう無理な練習はできないけど。以前は自分で「やっている」、「やっている」っていっても、遊びの合い間に「やっている」ということで。負け始めたりして、３年、４年前、その前後２～３年っていうのは、誰よりも遊んでました。朝まで飲んで、昼まで寝て。アスリートではなかった。クラブで顔を売るような生活で、ダメでしたね。最近、勝てるようになったのは、きちんとした生活を送るようになったからというのは、あると思います。生活がガラッとかわったので、この２年ぐらい。まったく夜遊びしなくなったんで。

16 この10年、他人の試合で一番印象に残っている試合は?

中井さんのバリジャパ、ゴルドー戦ですね。俺、リングサイドで担架係として見ていて……、格好良かったです。

17 修斗のリングに上がっていた、一番楽しかった時代は?

常に楽しいですよ。チョット前は、あんまりだったけど、最近はまた凄く楽しい。勝ち続けていた頃も、そりゃあ楽しいし。強がりじゃなくて、人生凄く楽しいですもん。

18 今のプロ修斗のリング上をどう思う?

こないだ（７月１７日）の後楽園、客として客観的に見てつまらなかった。プロとして自覚をもって、戦って欲しい。これまで今年は、良い試合が続いていたから、ああいう大会もあるんでしょうね。それでもメインやセミに出場できる選手は、考えて欲しいというのはあります。巧いより、強さを見せて欲しい。

19 おそらくルミナの中では修斗はもっと、人気の高いスポーツになっているという期待があったと思うが、現状をどう捉えている?

ショー的要素が強いものも多いし、派手なものも多い。今はしょうがないかなと。でも、ずっと続くのは修斗だから。まぁ、当初の予定とは違ったけど、格闘技が金になるようになった。それが実は大きいんだと思います。それは選手にとって良いことだし。

20 PRIDEを初めとして、真剣勝負を売りにする総合格闘技がこんなに人気が出たことをどう思う?

何も知らない人が、興味を持ってくれることは嬉しい。そのへんにいる、おじちゃんとかおばちゃんがボブ・サップのことを知っている。そういうのは嬉しいし、Ｋ－１の石井館長のおかげだと思っています。Ｋ－１とＰＲＩＤＥのおかげですね。東京中、どこでも総合の練習ができるようになったんだし、10年前じゃ考えられないことだから。単純に男だったら、単品より全部がやりたいの当たり前だし。知れば、皆、絶対に食いつくと思ってました。ただ、最初はレベルが低かったから、柔道やレスリングの人は「なんだアレ？」みたいなところがあったけど、そのレベルが上がるとやっぱり柔道やレスリングの人も移ってくるじゃないですか。そういう一流の人たちが、ああいうルールでやると、このままじゃ負けちゃうなって、思ってくれるようになったと。

21 アマチュア修斗でなく、柔術の競技人口がこんなに増えていることをどう思う?

修斗よりも打撃がない分、入りやすい。寝技は努力すれば強くなる。道衣はやったことないけど、寝技っていうことなら、

RUMINA SATO

10年間、現在、これからの10年を考える上で、今の佐藤ルミナ

今年の年末に、佐藤ルミナの全試合が収録されたDVDが発売される予定だという。

現役生活10年間の集大成といえるDVD——今年の11月で彼がプロ修斗のリングに上がってから、もう10年になる。

修斗では、引退する選手や何かの機会に、その選手の全試合を収録した非売品十カバーつきのDVDをプレゼントするというチョット小粋な風潮があるが、この話を耳にしたルミナは「俺もああいうのが、欲しかったから。凄く嬉しい。早く完成しないかぁ」と、洩らしたという。

ルミナがデビュー10周年記念のDVD発売を喜び、心待ちにしている言葉を聞き、ある人は「そういうことを考えるようになったのか、う〜ん、もうそろそろ退くことを考えるようになったのかもね」と寂しそうに語った。そういえば、ルミナは前ページにある50個の質問のなかで、ある問いに対して「結婚して、子供と住みたい」という返答をしている。彼の口から結婚という言葉を聞いたのは、初めてのことだ。

「佐藤ルミナと引退」——、この二つの単語を組み合わせることは、物凄く切実な問題である、のと同時にどこか現実味がない。

良くも悪くもこの10年間、ルミナは、他の人間と違う特別な何かを発散させている人間だった。ある意味、総合格闘技を変えたシューターだといっても過言でない。

「一つのことをやってきたことを誇りに思う」と言うルミナ。もちろん、その一つのこととは修斗を指す。振り返ってみれば、ルミナのプロ修斗デビューは、僅かプロ化4年後だったんだと今にして気付かされた。

古株、ベテランもベテラン、超ベテランと呼ばれてもおかしくない。なんせルミナは、今では数少ない寝技での顔面パンチが解禁される前のシューティングを経験している人間だ。プロ修斗に限らず、今の総合格闘技のリングで見られる現役シューターで、この顔面パンチ無しルールを経験しているのは、朝日昇、大石真丈、秋本じん、そしてルミナと数えるほどしかいない。

ルミナ以外のメンバーの名を眺める限り、顔面パンチなしを経験しているシューターは、そろいも揃って大ベテランと形容されている。

ルミナのデビュー2戦目、96年の5月にプロ修斗は全ての公式戦で、寝技における顔面パンチの導入に踏み切った。

まだ、パウンドなんていう固有名詞も存在しなかったころ、「シューティングではなくなる」という内外の声を、創始者・佐山聡が一蹴し、決めた判断だった。

結果的に寝技での顔面パンチ導入は、修斗に多くのものをもたらした英断だった。それ以前の修斗が、なかなか格闘技ファンの間にも定着しなかった理由の一つに、見ていて分かり辛いという部分がある。当時は格闘技っぽいことが総合格闘技界を占拠し、倒れても倒れても立つ、クルクル回るような試合展開がファンのなかでも常識だったことも影響しているだろうが、とにかく修斗の戦いはゴチャゴチャと何をやっているのか、理解しがたいものだった。しかし、寝技での顔面パンチは、それら分かりにくさを吹き飛ばすインパクトを持っていた。ルミナはこのインパクトを完全に自分の追い風とした。

デビュー戦をヒザ固めというあまり総合のリングで見ることがない関節技で勝利したルミナ。パウンドが認められていない当時から、修斗が抱えていた分かり難さを払拭するような戦いをしていた彼は、パウンドの導入で修斗の枠を超えた格闘技界、そして世間に対してストレートに強さが分かる戦いを実践した。”分かりやすさ“、これこそルミナを語る上でキーワードだ。

「自分達こそ、正しいことをやっているのに世間は、格闘技界は俺らのことを認めようとしない」。もしくは「分からない人は分からなくていいんですよ。これが本物だから」。そんな怨念や冷ややかな感情がリング上を支配していた修斗のリングに、ルミナが「俺らがやっていることが、一番凄いんだよ。だから、もっと見に来てくれよ」という、ストレートな感情を持ち込んだ。

”殴って、倒して、極める“から、”殴って、倒して、倒れた相手を殴って、そして極める“へ。”倒れた相手を殴る“は、その前後にある”殴る、倒す、極める“という動作がいかに大切であるかを、難しい理屈なしに人々に説くことができた。

他のファイターより、ほんの少し仕掛けが早いのか、独特のリズムをもっていたのか。多分にルミナの試合は他の選手よりも、これら一連の動きのディティールが鮮明で、伝わりやすかった。

日の出の勢いで勝ち星を挙げる、面白い試合をするシューターは、瞬く間に専門誌や一般誌で取りあげられる様になった。

この時期、佐藤ルミナを語る上で使われた合言葉は「オシャレな格闘家」、これ一点に尽きるだろう。

ここに展開されるロジックの裏側には、格闘技界、格闘技に勤しむ者は、野暮ったく、どんくさいという固定観念があった。まぁ、あながち外れてもない意見だが、だから髪の毛を変えたり、普通に着るものの選択をし、サーフィンに興味を持ったりするルミナが、特別視された。

リング上に分かりやすさという迫力ある攻防を持ち込んだ一方で、彼は「普通の人間だって、格闘技はできるんですよ」という新しいイメージを伝えるメッセンジャーの役割を果たしていた。

格闘家が、ごく普通の人間だということ、そしてリング上ではパウンドが当然になった頃、彼はデビュー当時の快進撃とは裏腹に、なかなか勝てない人気者になっていった。「想像以上に層が厚くなったのと、天狗になって練習しなかったから」——、これも50個の質問の一つに対する、彼の答だ。

結婚、云々よりも、この練習しなかった自分を認めた言葉には、驚きを通り越して、彼の持つ人間としての核の部分が、すっかり変わったことに気づかされた。

ごく普通に、そして分かりやすく勝利を目指した姿勢は、彼をいつの間にか、格好よく生きようとする人間に変えていた。

それは、本当に格好良いかどうかではなく、格好よく見える生き方を選択していたことになる。そして、格好悪い自分をどこかに追いやる。敗北、練習で若い選手に極められる、後輩より動けない、——、そんな自分を見ないようにしてきたことを、ルミナ自身が自覚するようになっていた。

これだな。きっと、これだ。

最近——、いや4月のエリカス・ペトライティス戦の彼の勝利に、多くの人間が共鳴したが、その理由が今ひとつ、ピンときていなかった。技術が高い試合でなかったし、ドロドロで、華麗な試合内容でもなかった。ルミナは血まみれになりながら、世界的には何のネームバリューもない対戦相手に、必死になって刃向かっていた。

そうやって掴んだ勝利に対しての、あの後楽園ホールの爆発的な盛り上がりは、ルミナが等身大の自分を受け入れ、やみくもに勝つことだけを目指した結果だった。

泥臭い必死な姿に、誰もが魅せられ、取り憑かれていたのだった。どんな相手だろうが勝つために闇雲になれる自分を取り戻せた彼は、再び周囲の人間にとって”特別な存在“になった。

2004年の30歳になった佐藤ルミナが露になり、そんな彼に再び（以前のように）、人々は心を奪われる。

そこでは、現在の力、体力、技術を見極めることができるルミナと、戦うことに対してデビューしたころと変わりない気持ちを持つルミナが同居している。

ルミナのデビュー前を想像すると——実際はそんなことはなかっただろうが——、木口道場での練習を終えた秋本じん、巽宇宙、和道稔之、そしてルミナが夕日を背に将来の夢を語るというような情景ばかりが、目に浮かぶ。夢中になって話す秋本とルミナ、そして難しい単語を駆使する巽。彼ら3人の回りを行ったり来たり、「腹へりましたよ。何か、喰いましょうよ」と纏わりつく和道。青春時代と表現しても、何ら照れを感じないノスタルジックな感覚。

それだけルミナも、周囲も長い年月を経てきた。

そして今のルミナは、当時と同じ真っ白な気持ちでリングに向かうことができる。

4人で語り合った将来の自分の姿、そこでは佐藤ルミナ大全集ビデオ、結婚生活、そして——、チャンピオンになることが思い描かれていたに違いない。そして、次の10年間がもうすぐ、始まる。

★佐藤ルミナの戦績

プロ修斗戦績　27戦19勝（15Ｓ／2KO）1分

94.11.7	○	（2R2分18秒 膝固め）マイケル・マコラフ
95.6.4	○	（1R2分23秒 TKO）矢野勝義
95.7.29	○	（1R2分14秒 腕ひしぎ十字固め）ロン・バリッキー
95.9.26	○	（1R2分1秒 TKO）大杉勇
96.1.20	○	（1R3分 腕ひしぎ十字固め）鈴木マサト
96.3.5	○	（1R4分4秒 スリーパーホールド）九平
97.1.18	○	（3R1分24秒 ヒールホールド）ヒカルド”リッキー”ボテーリョ
97.4.6	○	（1R2分21秒 ヒールホールド）アリ・ミホウビ
97.8.27	○	（1R51秒 腕ひしぎ十字固め）アラン・フリード
97.10.12	○	（1R2分1秒 ストレートアームバー）モーリス・コーリー
98.3.1	●	（1R3分53秒 腕ひしぎ十字固め）ジョエル・ギャルソン
98.4.26	○	（1R31秒 腕ひしぎ十字固め）マイケル・ビュール
99.1.15	○	（1R6秒 腕ひしぎ十字固め）チャールズ・テイラー
99.5.29	●	（3R4分2秒 スリーパーホールド）宇野薫
99.10.29	○	（1R54秒 アンクルホールド）フィル・ジョンズ
00.4.15	○	（1R18秒 スリーパーホールド）イーブス・エドワーズ
00.8.27	○	（テクニカル判定 3-0）桑原卓也
00.12.17	●	（1R2分9秒 KO）宇野薫
01.8.26	○	（判定 3-0）マーシオ・クロマド
01.12.16	●	（判定 0-3）五味隆典
02.6.29	●	（判定 0-3）ハビエル・バスケス
02.11.15	△	（3R判定 1-0）タクミ
03.3.18	●	（1R2分9秒 TKO）ヨアキム・ハンセン
03.6.27	○	（1R2分12秒 ヒールホールド）ライアン・アッカーマン
03.12.14	●	（1R41秒 ネックロック）アレッシャンドリ・ノゲイラ
04.5.3	○	（2R2分20秒 三角絞め）エリカス・ペトライティス
04.7.9	○	（1R3分2秒 腕ひしぎ十字固め）パオ・クアーチ

バーリ・トゥード・ジャパン戦績　4戦2勝1敗1分

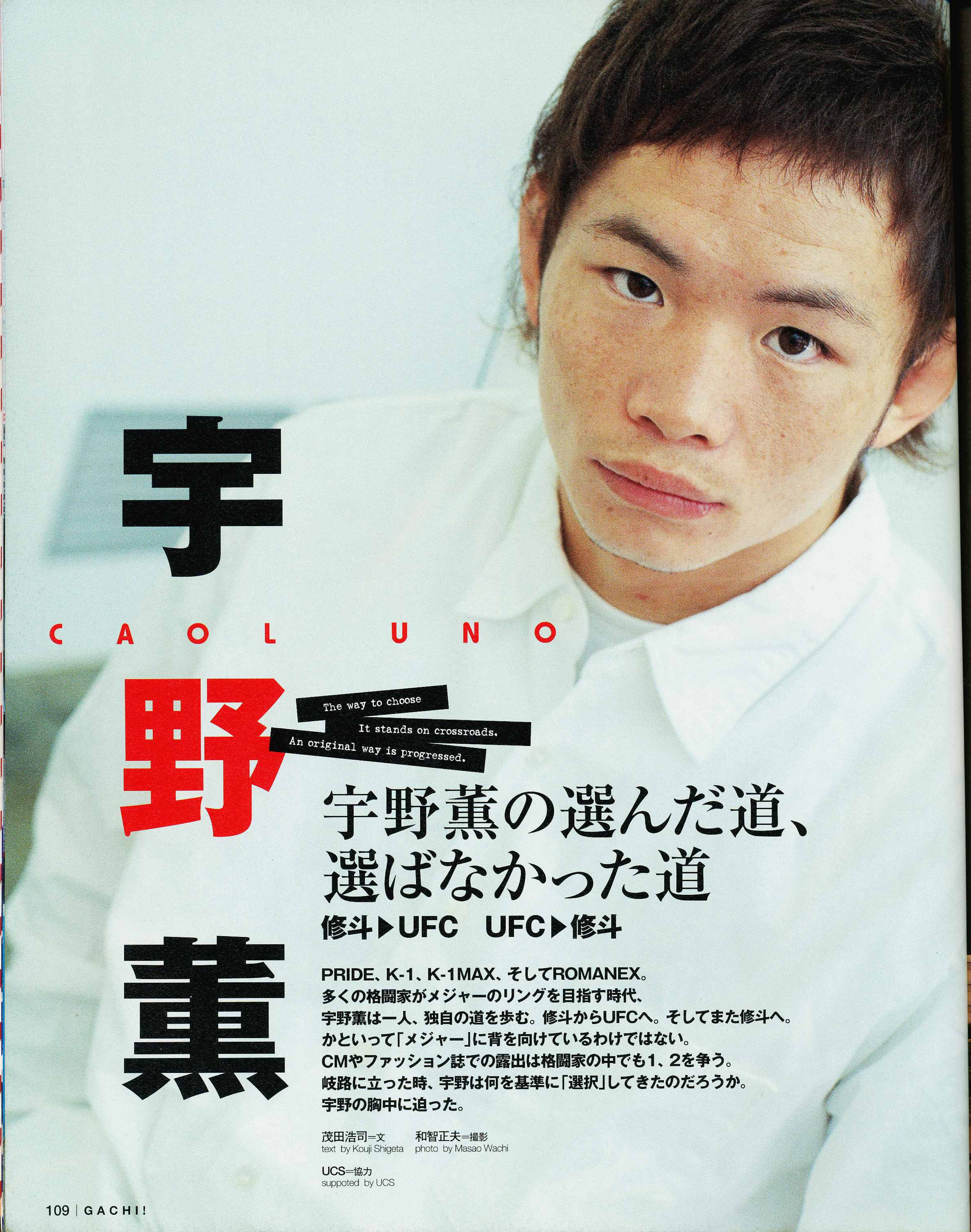
96.7.7	△	（3R終了）ジョン・ルイス
97.11.27	○	（2R1分21秒 腕ひしぎ十字固め）ジョン・ルイス
98.10.25	●	（1R4分20秒 TKO）アンドレ・ペデネイラス
99.12.11	○	（1R1分1秒 膝十字固め）ハファエル・コルデイロ



Rumina Sato

佐藤ルミナ

1973年12月29日生まれ、神奈川県小田原市出身。
身長167cm、体重67kg、K'zファクトリー所属。
日本人で初めて黒帯ブラジリアン柔術家から足関節で一本を奪う。華のある試合で修斗の立役者になる。



宇野薫

CAOL UNO

The way to choose
It stands on crossroads.
An original way is progressed.

宇野薫の選んだ道、選ばなかった道

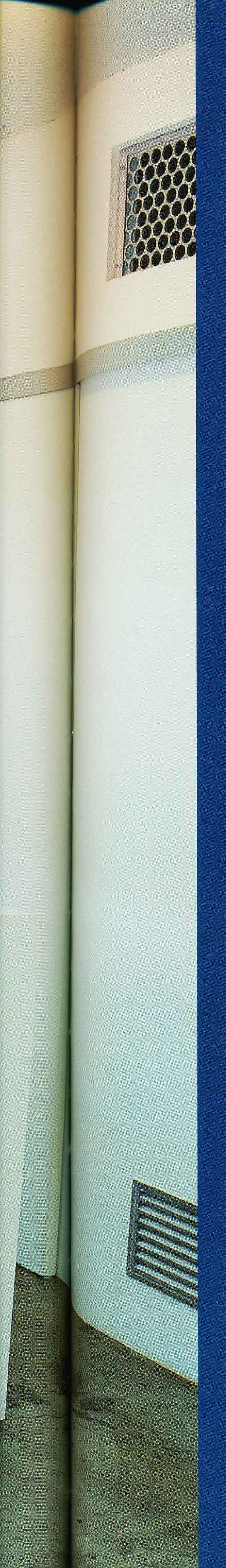
修斗▶UFC　UFC▶修斗

**PRIDE、K-1、K-1MAX、そしてROMANEX。
多くの格闘家がメジャーのリングを目指す時代、
宇野薫は一人、独自の道を歩む。修斗からUFCへ。そしてまた修斗へ。
かといって「メジャー」に背を向けているわけではない。
CMやファッション誌での露出は格闘家の中でも1、2を争う。
岐路に立った時、宇野は何を基準に「選択」してきたのだろうか。
宇野の胸中に迫った。**

茂田浩司＝文
text by Kouji Shigeta

和智正夫＝撮影
photo by Masao Wachi

UCS＝協力
suppoted by UCS



「向こう」に行くと、自分の意図に反することが起きるんじゃないかって…

横浜・桜木町駅の商店街の外れに目指すUCS(宇野薫商店)はあった。目印は壁から突き出した星のオブジェ。駐車場や民家に囲まれた古びたビルの1階にポツンとたたずんでいる。

写真撮影から始める。宇野がレジの置いてあるカウンターに立った。「客は『あ、宇野だ!』って来るの?」

「いや、好きなブランドを買いに来られる方もいますし、横浜の観光に来られて、こういうところがあるねっていらっしゃる人もいますし、で、僕がたまたまお店に立ってると、最初は服とか見てるんですけど、あっ! とかって(笑)。そのリアクションが面白いですね(笑)」

「店で『見られてる』って意識は? 鼻糞ほじくってるわけにもいかないでしょ?」

「普通に立ってますよ(笑)。いる時は勧めたり、普通に写真とかも全然、OKしますし。最近ちょっとお店にいる時間が少なくなっちゃったんですけど」

この、彼が「普通の感覚」を持ち続けていることは、よくよく考えると凄いことなのではないだろうか。数年前にお茶のCMで高倉健と共演し、最近ではGショックのポスターやカタログでモデルを務める男なのである。そういえば桜木町に向かう途中、原宿駅にも宇野の顔半分がアップになった(もう半分は時計で隠れてる)看板で見た。

そう言うと宇野は驚きの声を上げた。

「えー、そうなんですか。渋谷とか、出没情報を皆さんに頂いてるんですけど、原宿は初めて聞きました(笑)」

まるで他人事なのである。

宇野は独自の位置にいる格闘家である。主戦場は修斗からUFC、そしてまた修斗へ。地上波での露出という点で言えば最近はK-1の須藤やKID、PRIDE武士道の五味と三島の方が多い。専門誌ももっぱら彼らを取り上げる。

しかし、世間への露出を見ると宇野はいまなお格闘家の中でもトップクラスである。Gショックの前は車、その前がお茶。ファッション誌で「宇野君の新居紹介!」なる特集記事を目にしたこともある。引っ越しが特集になる男なのである。

メジャーを目指し、ひたすら露出しようとするわけではなく、場所やタイミングを選びながら露出する。その抑制の効いた露出が他の格闘家とは違う「宇野薫」独自のイメージを作り上げる。

「お話を頂いたら、色々な人に相談します。最後は自分の感覚とかイメージで、これはやった方がいいとか判断をして」

宇野は「こっち側」と「向こう側」という言葉で説明する。自分でコントロール出来る範囲の、小さなところ、宇野の好きなところが「こっち」。実像とは違う「宇野薫像」が作られてしまいかねないところ、大きなところでの露出が「向こう」。だが、宇野に自己顕示欲や功名心がなかったわけではないだろう。まして、ショップをオープンしたら、PRしてその存在を広く知って貰い、売り上げに繋げなくてはならない。手っ取り早いのは宇野自身が広告塔になって多くのメディアに露出することのはず。だが、宇野は従来の露出方法を変えようとせず、地道に売り上げを増やす道を選んだ。

「たまに自分がもしそういう風(有名)になったらどうなるのかな」、と思ったこともありますけど、"向こう"に行くと自分の意図に反することが起きるんじゃないかって。色々な場所に行けなくなったり、ややこしいことになるのかなと」

CAOL★UNO

The selected way, the way which was not chosen

大きいところよりも小さい方、好きな方を選んでしまうかもしれません

格闘家・宇野薫には2度、自分の進路、自分の主戦場を選んだことがあった。

一度目は、佐藤ルミナを再戦でも破り、修斗ウェルター級王座防衛に成功した2000年12月。その場でベルト返上を宣言した宇野に対して、メディアは「PRIDE移籍」を報じたが、彼は否定。「総合のメジャーリーグ、UFCに挑戦します」と宣言して主戦場をUFCに移した。

二度目はそのUFCとの契約を終えた昨年秋である。奇しくも同時期にPRIDE武士道がスタート。K-1もROMANEX開催に向けて総合選手を求めていた。宇野が希望したならば、そのどちらのリングにも上がれたことだろう。しかし、彼が選んだのは「修斗復帰」だった。

一度目の選択は分からなくはない。当時のPRIDEには中軽量級選手は存在しなかった。宇野をエースにして新設する動きがあったのかもしれないが、先々が不透明であったことは確かだろう。

だが、先の二度目の選択はどうか。

昨年12月のNKホールに宇野が登場し、王者シャオリンへの挑戦を表明した時は驚きもあったが、同時に絶妙な選択だと思った。他の選手と一緒にPRIDEやK-1に流れれば「その他大勢」に埋もれてしまいかねないが、一人で逆方向に走ればその独自性を確保出来る。

直観的に「周囲に気を遣ったのだろうな」とも思った。修斗で育った宇野が、アメリカでの活動を終えて古巣に戻るということは「順番を間違えたらいけない。昔から応援してくれてる人を大事にしなさい」と諭す母親や、「筋を通すこと」の大切さを説くGCMの久保社長の教えを守ったことになる。彼をアマチュア時代から知る修斗関係者たちとの絆も保たれる。

しかし、少しずつ、宇野が修斗に復帰した理由は「皆と逆を行く」天の邪鬼的な発想や、周りへの気配りだけなのだろうか、と思い始めた。

そう考え出したきっかけは今年3月の修斗復帰戦、川尻達也との試合だった。宇野は川尻の強打に対して一歩も退かず、時には自ら踏み込んでパンチを放った。組みつき、川尻の腿へヒザを打ち込み、ロープを掴んでまでもテイクダウンされまいとする。目を見開き、敢然と川尻に向かっていく宇野を見ているうちに、自分は宇野の修斗復帰への思いを正確に理解していないのではないかと思えてならなかった。

「UFCに行った時から、日本に戻って試合をするなら自分の中では修斗だと考えてました」

綺麗事と取られかねない言葉ではあるが、宇野が建前を並べているとは思わない。その言葉もまた彼の本音なのだろう。

「大きいところよりも、小さい方、好きな方を選んでしまうのかもしれないですね」

CMや雑誌での露出を見れば、そうした傾向が彼にはある。「好み」を優先した、ということはあるのだろう。

どれも彼の本音には違いないが、どこか核心に触れた気がしない。それはこれまでに行なった何回かの宇野へのインタビューでも常に感じてきたことだった。

地上波への露出や、高額なファイトマネーの魅力を捨ててまでも修斗を選んだ理由の核心部分が知りたい。本音を語って貰いたかった。

だが過去に宇野を取材した感触から考えると、彼は周囲を気遣い、肝心なところ、こちらが一番聞きたい部分を飲み込んでしまう恐れがある。そこで今回は宇野を中心に


UNOCAOL

大勢で語り合う形を取った。話は行きつ戻りつ、格闘技から下ネタ、噂話、そしてまた格闘技へ。同席していたカメラマン氏に後で「あれは何の取材だったの？」と聞かれたほど話題に一貫性はなかったが、こちらが聞き出したいのはただ一つ「なぜ修斗を選んだのか」だ。聞き方はその都度変えたが、何度もその質問をする。その度に、宇野の答えは微妙に変わる。何かを選ぶ時、その理由がたった一つということなどありえないのだから、当然そうなるだろう。

　取材時間が1時間半を越えた頃、また同じ質問をした。なぜ他のリングではなくて、修斗でなくてはならなかったのか？

　他のリングにはなくて、修斗にあるものとは何なのだろう。

　ここで宇野は初めて、PRIDEやROMANEXに対してかねてから「違和感」を抱いていたことを告白した。

「自分よりも大きい選手の中に自分がいても、っていうのは昔から持ってました。逆に言うと（重量級の中に入る）自信がないっていうところもあるんでしょうけど」

　ヘビー級の中に中量級選手が入った時にどう映るのか。宇野はすでにUFCで経験済みだった。UFCでは中軽量級選手の扱いが悪くなる傾向があるという。「豪快な殴り合い、倒し合い」を興行の売りにすれば重量級中心にシフトするのは当然だ。それはK-1やPRIDEを見ても明らかだ。

　宇野自身、武士道やROMANEXに出るメリットはよく理解している。だが、宇野の場合、それでは「試合に向かうモチベーション」が高められない。

「メディアに出る上で凄く魅力的で『仕事』として出る考えもあるかもしれないですけど『ただ仕事だけなのかな？』っていうところはあります。武士道でもROMANEXでもただポン、と試合をしても…。仕事プラス、ランキングとかチャンピオンという明確な目標がないと。ただでさえ、目標がないと僕の中ではなかなか難しいところがあって…」

自分よりも大きな選手の中にいても、っていうのは昔から持っていました。



Caol Uno
うの・かおる
1975年5月8日、神奈川県横須賀市出身
身長170cm、体重73kg
和術慧舟會所属
元修斗ウェルター級王者

　口ごもりながら、宇野は消え入りそうな声で話した。とうとう、彼の核心部分に触れた、と思った。

「あの試合も少し覚悟はしてました。やっぱり結果次第では…」

　あの試合とは、言うまでもなく川尻戦である。試合中に見せた宇野の凄まじい形相は、その戦いに「引退」を賭け、自身を崖っぷちに追い込んだ証だったのである。

　試合後に感想を問われて宇野は答えた。

「首の皮一枚繋がりました」

　選手の言うことじゃないかもしれないですけど、との前置きがあったために「選手としての商品価値を落とさずに済んだ」という、プロデューサー的な感覚から発せられた言葉だと理解していた。しかし、それは内容によっては引退も覚悟して臨んだ宇野が、瀬戸際で残った、まだ選手を続けられる、と安堵した、その心情を表現した言葉だったのである。

「対戦相手もきついと思う相手を選んで、1戦1戦覚悟してて、結構身を削って。苦しいところもあります。それだから、あんまり試合が出来なくなったのかもしれない

CAOL★UNO

The selected way, the way which was not chosen

ですね。前は2ヵ月に1回ぐらいやって大丈夫だったんですけど…」

「宇野は、今度の試合で辞めてしまうかもしれません」

　GCMの久保社長は過去に何度か周囲にそう漏らしている。チャンピオンとして挑戦者・佐藤ルミナを迎えた修斗ウェルター級王座防衛戦や、BJペンとのUFCライト級王座決定戦がそうだった。結果はルミナにはKO勝ち。BJとは5分5ラウンド戦ってドロー。どちらも「格闘家・宇野薫」の代表作と言うべき試合である。周囲にも「これでダメなら引退するのだろう」と感じさせるほどに覚悟を決め、練習で限界まで自分を追い込み、そして試合で結果を残して宇野は今日まで選手を続けてきた。

　引退まで覚悟して自分を追い込む姿は、魔裟斗と重なって見える。昨年、K-1世界王者という究極の目標を達成した魔裟斗は、今年の世界大会を前に「3連覇して引退する」と発言した。彼にはMAXで何としてでも手に入れたいものはもうない。3連覇というハードルを設定して「引退して楽になりたい、重圧から解放されたい」という気持ちを奮い立たせたのだ。

　魔裟斗の気持ちが分かるのでは、と言うと宇野は少し神妙な面持ちでうなずいた。

「多分、分かると思います。僕は…、ルミナさんに一回目勝って、そこで目標を達成してしまったところがあるんですよ」

　宇野にも、何の迷いもなく、真直ぐにリングに向かった時期があった。格闘技を始めた頃からの目標である「憧れの人」佐藤ルミナの背中を追いかけていた頃だ。

「目標は一つしかなくて、そこに向かって一つ一つ段階を踏んでいくだけでしたから。周りを気にするより自分の地力を付けることばかりで。練習はきつかったですけど、何をやっても楽しかった」

　ルミナに勝利した瞬間、勝てば嬉しく、負ければ悔しく、また明日から練習を頑張ろうと思う、宇野にとっての牧歌的な時代は終わった。格闘技を始めた頃からの大きな目標を、思いがけず早くに達成してしまった彼を待っていたのは「ルミナに勝った男」の看板の重さであり、わずか11秒で失神KO負けを喫したBJペンとの再戦であり、自分の実力がシビアに測定される川尻戦であった。ルミナとの試合に勝利してからの宇野に、心の底から格闘技が楽しいと思える瞬間が幾つあっただろうか。

　だが、何度も挫折を味わう中で宇野が獲得したものの大きさを思う。川尻戦で見せた猛々しい表情、強打に一歩も退かない姿勢。UFCで揉まれて、宇野薫は一段と強く逞しくなった。

「修斗のチャンピオンを目指したいです。UFCもまだ諦めてないですし」

　次はシャオリンか、川尻か。それともハンセンか。いずれにせよ、これからの宇野の試合は一つも見逃せない。覚悟を決めてリングに上がる男の顔をしっかりと目の中に焼き付けておきたい、と思った。

　2時間以上に及んだ取材を終えて帰ろうとすると、お母さんから取材陣一人一人にUCS特製ミニタオルが配られた。宇野君には珍しく下ネタまで喋っていただきました、と挨拶するとお母さんは宇野の顔をのぞきこんで豪快に笑った。

「そうよ、そんな遠慮してちゃダメよ！」

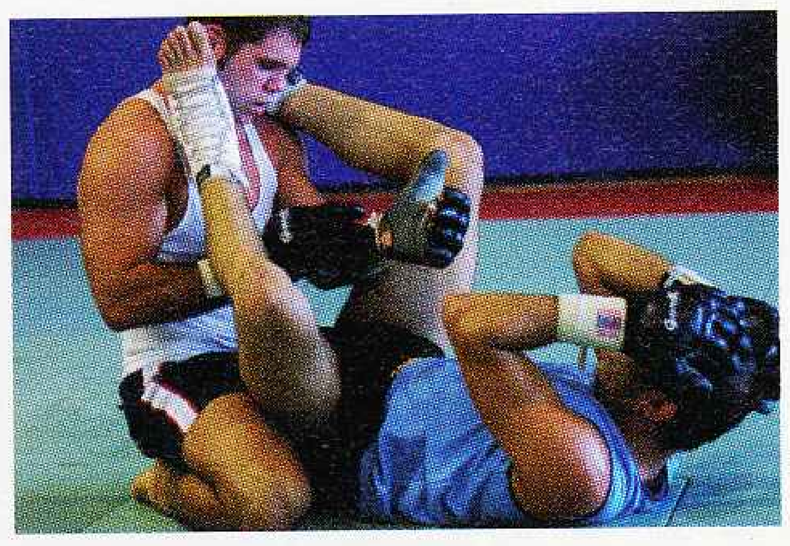
　元気なお母さんと苦笑する宇野と、お姉さん、お兄さんの宇野一家総出のお見送りを受けてUCSを後にした。



MMAの未来形
アメリカン・トップチーム
～エリート集団に息づくハングリー精神～

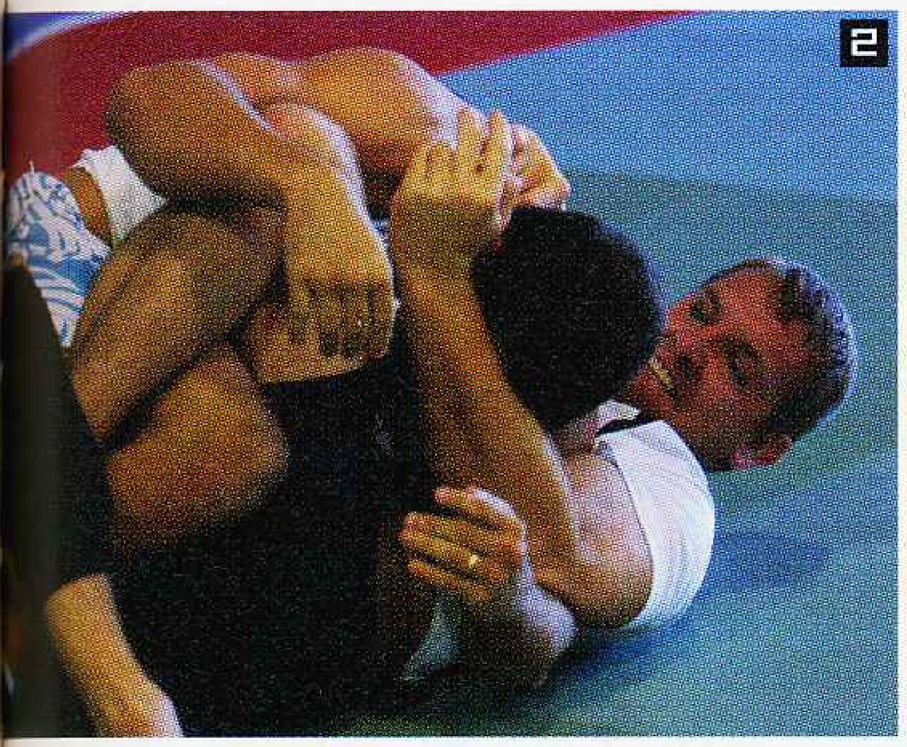
総合格闘家を目指す者にとって、夢のような空間、夢のような現実、
それがアメリカン・トップチームが選手に提供している待遇である。
実業家ダン・ランバートの潤沢な資金により、誰もがうらやむ週給制を成立させたATT。
練習して収入を得る。ファイトマネーを肩代わりしてもらってまで、経験を積める。
この恵まれた環境で所属選手たちに芽生えた感情は、
世界中のどのアカデミーの格闘家を上回るハングリー精神だった。
究極のアメと鞭政策が、MMAビジネスを変える。

Text and Pix by Manabu Takashima











①突然、ヒカルド・リボーリオがプロ契約選手を集め怒鳴り始めた。曰く「プロなら時間を守れ。練習時間中は気を抜くな。1000ドルやそこらのファイトマネーで満足するなら、すぐチームを去れ」と、気が緩んでいた若い選手を叱責した。②オーナーのダン・ランバートは、早朝のトレーニングと、息子さんのクラスがある水曜夜に道場を訪れる。柔術茶帯、パンナム柔術、サブミッション・レスリングのマスター・クラスでは何度も優勝を重ねている。③ブラジリアン・トップチームを創った人物リボーリオ。技術を語らせると、右に出る者はいないと言われる技師。指導力、若い選手に対する掌握術は大したもの。④テコンドーのコーチと、ダスティン・デニス。ちょっとミスマッチな顔合わせも、ATT内では当然のこと。⑤マットの片隅には、テレビとビデオ、DVDデッキが備え付けられており、対戦相手の動きを細かくチャックしながら、対策が続く。

「とにかく、ここにやってくる選手たちのスパーリングを見たらいいよ。彼らがどんな気持ちで、ここで毎日を過ごしているか、きっと理解できると思うからね」。

アメリカン・トップチームのオーナー、ダン・ランバートは、「待遇の良さが、選手からハングリー精神を奪うことにつながるのでは」という記者の問いかけを一笑した。それはごく限られた一部の成功者だけが持つ、自信に満ち溢れた微笑だった。

どこまでも広がる青い空と、想像していたよりも、少し湿度が高いフロリダ。マイアミを車で北上すること30分の距離にあるフォートローダーデイルにATTは巨大アカデミーを構えている。

海岸線と湿地帯の間を造成し、まるで摩天楼を持つ大都会なみの片側3車線の道路。のどかな避寒地フロリダに最近増えつつある、郊外型都市空間の典型のような街並。

ATTがなければ、この街の名前を知る格闘技ファン、関係者はほとんどこの世に存在しなかっただろう。

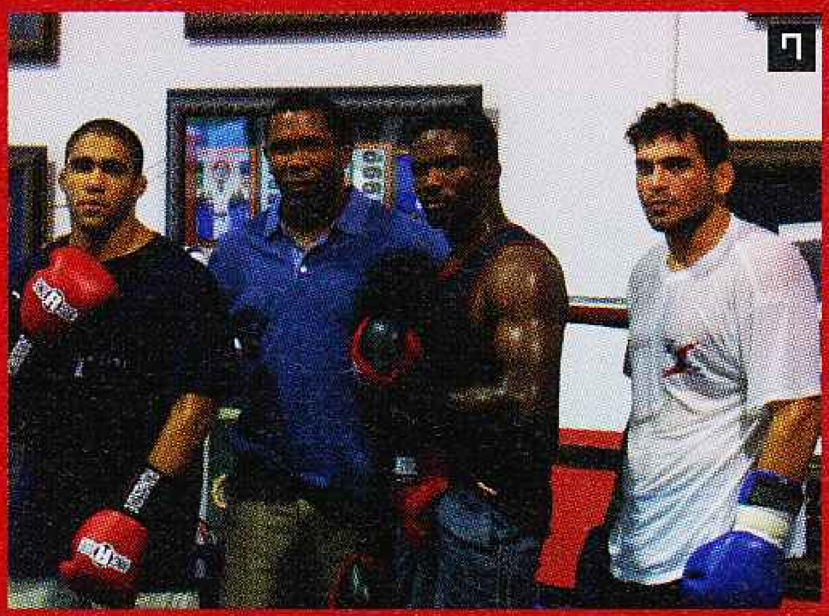
約740平米の敷地に、90畳もある柔術マット。ボクシングのリングに、ウェイトの器具も揃っているアカデミー（秋には2倍の広さとオクタゴンまで用意される新しい道場に移動する）。ここで練習することを認められたプロ契約選手、プロ候補選手はアパート、食費が用意され、練習費用ももちろん掛からない。サプリメント各種、練習道具も支給されるだけでなく、選手のキャリアに応じた週給制が採られているのは、もう有名な話だろう。

しかも、キャリアを積むために目前のアブソリュート・ファイティング・チャンピオンシップというMMA大会まで、用意されているのだ。これを恵まれた環境といわずして、どんな表現方法が当てはまるというのだろう。

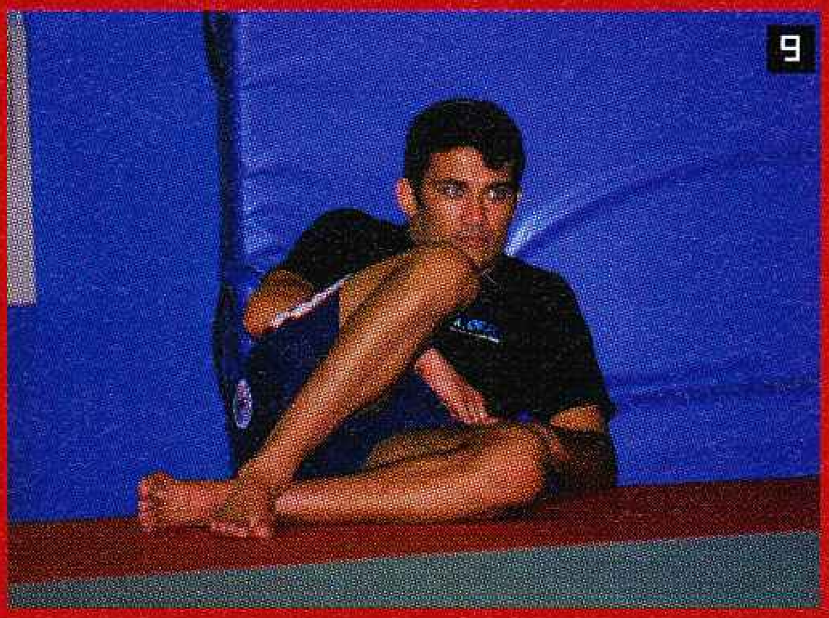
ATTの存在を初めて知ったのは2001年の秋頃だろうか。インディアナ州でプロ修斗公式戦を行っているフックシュートを取材したとき、エルミス・フランカら数名の選手がこのチーム名を名乗り、アンダーカードに出場していた。

「ATT？　ブラジリアン・トップチーム

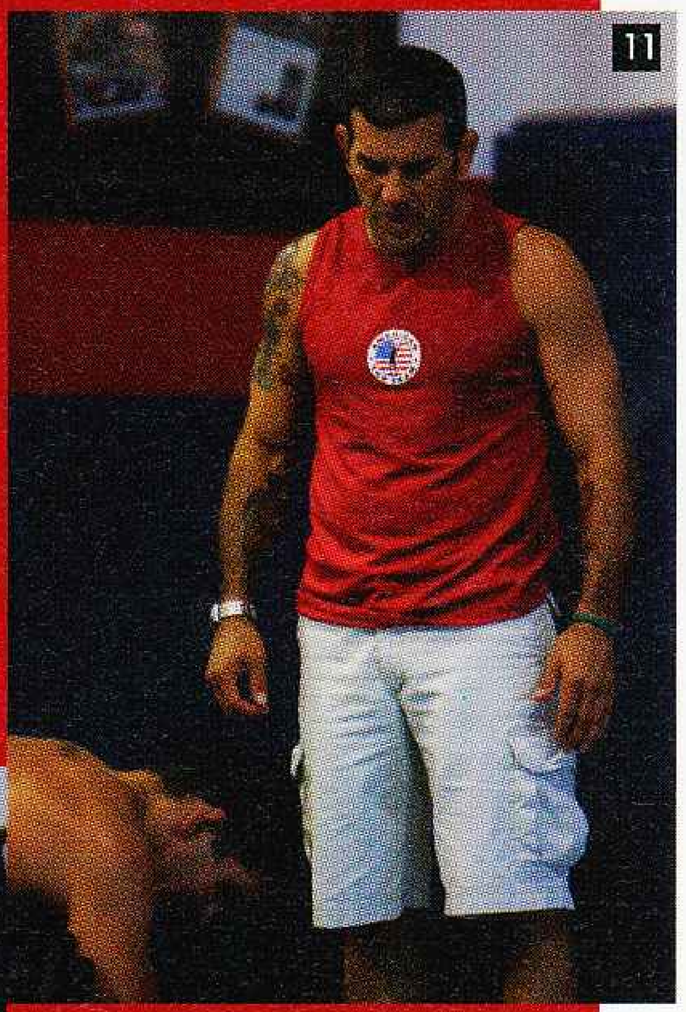














⑥マルコス・パルピーニャ。MMAは興味のないブラジリアン。現役としてはサブミッション・レスリングに集中しており、任されている支部ではMMAのクラスはない。⑦左からジェシアス・カバウカンチ、ボクシング・コーチのハワード・デイビス、ディン・トーマス、ダスティン・デニス。デイビスはモントリオール五輪の金メダリスト。⑧米国のMMAシーンで活躍する国原継悟も、ATTで生活する。スパーの相手マルセル・フェレイラはブラジルBTT組の一人。⑨ZSTグランプリを制し、PRIDE武士道にも来日したマーカス・アウレリオ。今のところ、ATTで一番の高給取りか？ ⑩チアゴ・ピッチブル（左）とエジソン・ジニス。ピッチブルはブラジル北東部からATTへ。ジニスはATT設立前からチャンスを求め、フロリダにやってきていた。⑪&⑫20年も前にフロリダに移住してきたマルセーロ・シウヴェイラ。弟コナンとマイアミのガレージで柔術アカデミーを開いて、ここまでやってきた。コナンは麻薬のトラブルで、奉仕活動中。「1度の過ちは許す。2度目はない！」という熱血漢は、トレーニングの指導中も熱くなって、思わず蹴りが出てしまった。

のまがいものか？」と、米国の記者仲間と嘲笑していた最中、（正直言って）あんまりオシャレでないATTのロゴマークがついたロングスリープTシャツを着たヒカルド・リボーリオ、コナン・シウヴェイラの姿を発見した。ATTという短絡な名前への違和感は拭えないままだったが、とにかくBTTの創始者リボーリオの存在が、なんとなく頭にひっかかり始めた。

大会が始まり、リングサイドで写真を撮っていると、後方で子供が走り回っている。と思った直後には、横に割り込んできて、カメラマンが持つにはチャチすぎるが、5～6歳のガキが手にするには立派すぎるオートフォーカスのカメラで、ラウンドの合間に、ATT所属選手を撮りまくっている。ようやく後方に目をやると、リングサイドにはフェンスで区切られた、15席ほどのATT応援団シートが設けられていた……。

試合後、大会関係者の一人が耳打ちをしてくれた内容は「ATTの連中には、ダン・ランバートがついていて、どうも自分の好きな選手を試合に出す代わりに大会のスポンサーになっているらしい」ということだった。ダン・ランバート、確かワールド・エクストリーム・ファイティングというド派手な打ち上げ花火のような大会をスポンサードしていた、あの大富豪か――。MMA好きの風変わりな金持ちが、選手やセコンド、練習仲間に自分の息子までプライベートジェット機で運んでくるという噂を聞いたことがある。日本には存在しない、大物が米国のMMAには時折、出現する。

この大会以降、UFCを始めとする北米の大会を取材するたびにATTのTシャツを着た集団を目にするようになった。

そして、昨年4月エルミス・フランカのUFCデビューを前後して、ATTの実像が伝わるようになってきた。

世界中からビデオを収集するほど、子供の頃から大のプロレス・ファンだったランバートのお気に入りは、シューター、フッカーと呼ばれる、セメントに強いタフガイたちだった。「スティーブ・ウィリアムス、ゲーリー・オブライト、そしてリッキー・チョーシューの顔面を蹴り上げてしまったアキラ・マエダね」、ニヤリ――、さきほどとは違う種類の笑顔を見せるランバート。プロレスやMMAの話をしているときは、本業のホテル経営、ファイナンシャル関連の会社など20に上るビジネスについて語るときよりも、ずっと楽しそうな表情になる。

タフガイ好きは、UFCの開始とともにごく当然のようにMMAに魅せられていった。1995年、エクストリーム・ファイティングに出場したブラジリアン柔術家コナン・シウヴェイラが、マイアミ在住と知るやいなや、「次の週には私のところで柔術のアカデミーを作るというコントラクトにサインしてもらった」（ランバート）。

コナンと実兄マルセーロ・シウヴェイラは、カーウソン・グレイシーの黒帯で今から20年も前にフロリダへ移住。ブラジリアン柔術なんて名乗っても、誰にも分かってもらえないので、「セルフィディフェンス」という言葉を売りに、マイアミの自宅ガレージで柔術を教えていた苦労人だ。

彼らの道場で自らも柔術の練習に励んでいたランバートに、一人の道場生がMMAの大会を開くので資金援助を願い出てきた。

それが前述したWEFのプロモーター、ジャーミー・レヴァインだ。ランバートはコナンの教え子に試合の機会を与えるという条件で、スポンサードを了承した。「多くのMMAショーは、ビジネスとして成立していない。私の資金援助で友人に試合の機会が増えるなら、それで満足。もちろん、ポケットマネーだから会社の人間は何も文句を言わないしね」。ランバートのプライベートジェットによるMMAイベント行脚は、こうして始まった。「今までビデオで見ることしかできなかった選手の試合が、ライブで見られる」とポケットマネーを浪費し続けてきた彼に、一つの転機が訪れた。

それが2001年9月、ムリーロ・ブスタマンチのセコンドとしてラスベガスを訪れていたリボーリオが、「英語を学ぶためにしばらくアメリカに滞在したい」という言葉を耳にしたときだった。

コナンやマルセーロとも、カーウソン・グレイシー柔術で同門だったリボーリオは、第1回ムンジアルで優勝するなど、柔術での実績も抜群で、バンコ・デ・ブラジルのスポンサードを長期間にわたって受けていた、柔術界を代表する人格者だ。

師カーウソンとの決別により、BTTをムリーロ・ブスタマンチ、マリオ・スペーヒーと立ち上げた際、恩師ヒカルド・デラヒーバの道場を仮の練習場として確保し、バンコ・デ・ブラジルの保養施設内にアカデミーを作る約束をとりつけた。BTT成立の一番の功労者こそリボーリオだった。「6ヶ月間、指導と経営を助けて欲しい」というランバートの要請を二つ返事で承諾したリボーリオは、その後、アメリカ人女性と結ばれ、フロリダを終の棲家とすることになる。

半年の滞在が、人生を賭けるチャレンジに変化したATTの存在をリボーリオは「ここにMMAの未来、僕の夢、選手達の将来があるんだ」と興奮した面持ちで語る。

冷静沈着な紳士と思われがちなリボーリオだが、実はかなりの熱血漢だ。選手を思う気持ち、ATTにかける思いが、時折、選手たちに対する不満という形で、爆発することがある。

それは空港で記者をピックアップすることを命じられた若い所属選手が、2時間遅刻したことに端を発した。「約束が守れない奴は、アカデミーから出て行ってくれ。ここで私やマルセーロの要求は絶対だ。私たちの言いつけを守れない奴が、どうやって一緒に戦っていくことが

ATT

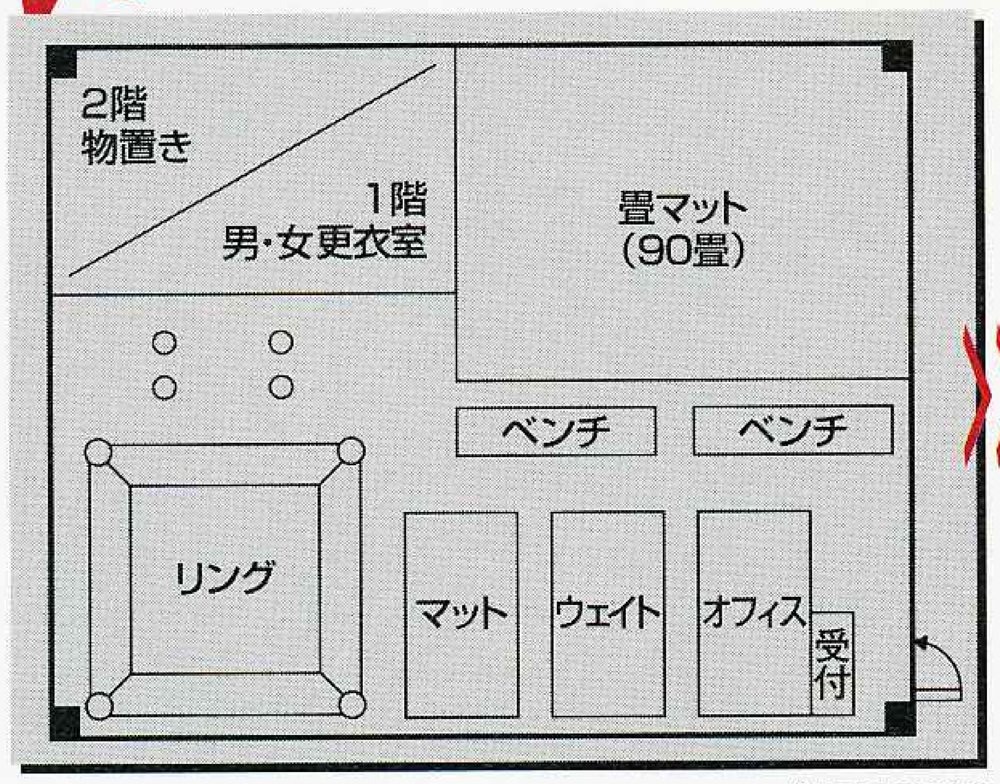
ATTクラス割り

MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
サブミッションリスリング Mat A 8:30AM to 10:00AM	ブラジリアン柔術 Mat A 8:30AM to 10:00AM	サブミッションリスリング Mat A 8:30AM to 10:00AM	ブラジリアン柔術 Mat A 8:30AM to 10:00AM	サブミッションリスリング Mat A 8:30AM to 10:00AM	テコンドー Mat A 9:00AM to 11:00AM
プロファイターズ Mat A 9:00AM to 12:00PM	プロファイターズ Mat A 9:00AM to 11:00AM	プロファイターズ Mat A 9:00AM to 12:00PM	プロファイターズ Mat A 9:00AM to 11:00AM	プロファイターズ Mat A 9:00AM to 12:00PM	ブラジリアン柔術 Mat A 11:00AM to 1:00PM
	テコンドー&キックボクシング Mat A 3:30PM to 7:30PM		テコンドー&キックボクシング Mat A 3:30PM to 7:30PM	テコンドー Mat B 3:30PM to 6:00PM	
プロファイターズ Mat A 4:30PM to 5:30PM	プロファイターズ Mat A 4:30PM to 5:00PM	プロファイターズ Mat A 4:30PM to 5:30PM	プロファイターズ Mat A 4:30PM to 5:30PM	プロファイターズ Mat A 4:30PM to 5:30PM	
キッズブラジリアン柔術 Mat B 5:30PM to 6:00PM	キッズ柔道 Mat A 4:30PM to 8:30PM	キッズブラジリアン柔術 Mat B 5:30PM to 6:30PM	キッズ柔道 Mat A 4:30PM to 8:30PM	キッズブラジリアン柔術 Mat B 5:30PM to 6:30PM	
ブラジリアン柔術 Mat A 6:00PM to 8:00PM	ムエタイ Muay Thai 6:30PM to 7:30PM	ブラジリアン柔術 Mat A 6:00PM to 8:00PM	ムエタイ Muay Thai 6:30PM to 7:30PM	ブラジリアン柔術 Mat A 6:00PM to 8:00PM	
ボクシング Boxing 6:00PM to 8:00PM	ブラジリアン柔術 Mat A 6:30PM to 8:30PM	ボクシング Boxing 6:00PM to 8:00PM	サブミッションリスリング Mat A 4:30PM to 8:30PM	ボクシング Boxing 6:00PM to 8:00PM	

ATT支部と責任者一覧

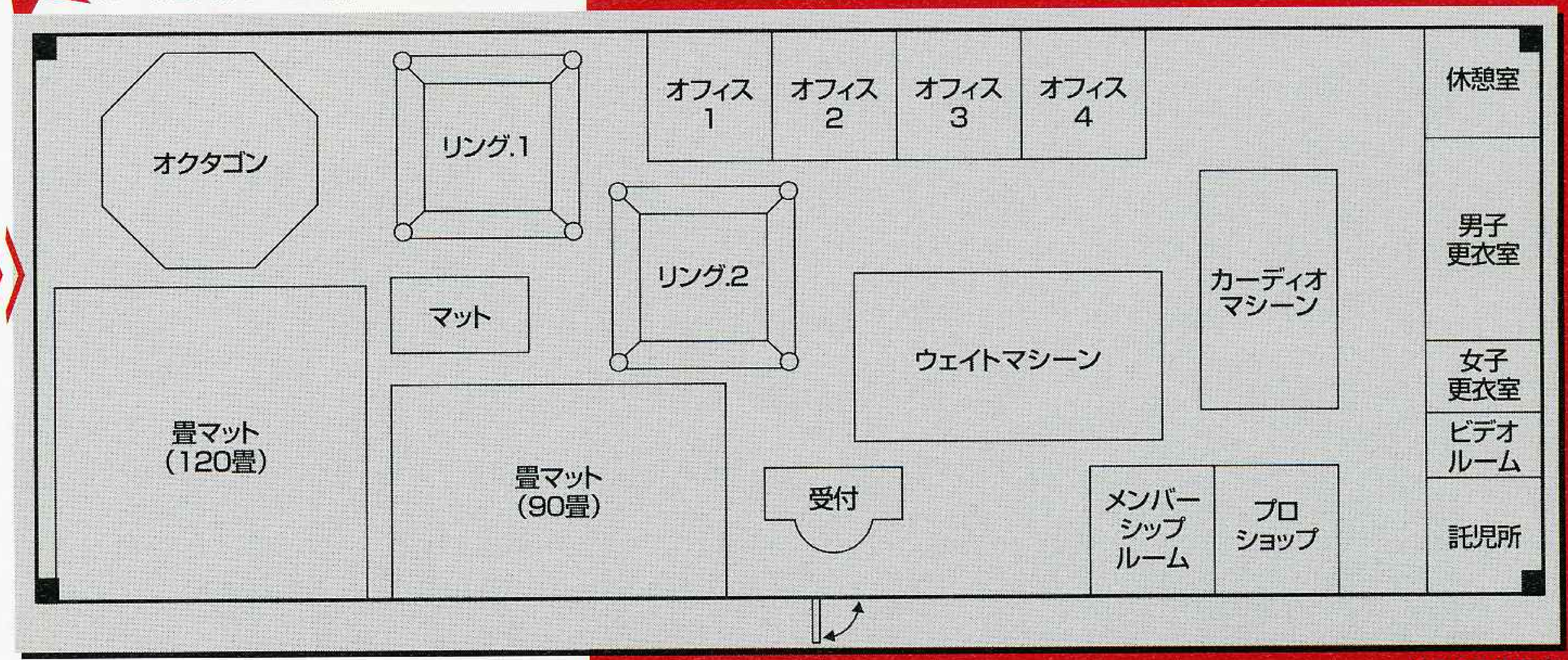
	場所	責任者
本部	ココナッツクリーク	ヒカルド・リボーリオ
支部	ポートセントルイ	ディン・トーマス
	ウェストパーム	マルコス・パルビーニャ
	デルレイ	マーカス・アウレリオ
	ボカラトン	マルセル・フェレイラ
	マルゲート	エジソン・ジニス
	ハリウッド	黒帯が交代で指導
	マイアミ	モアシール・ボカ・オリベイラ

現在のATTアカデミー



約740平米

今秋に完成する新ATTアカデミー



約1670平米

できる。待ち合わせの時間が守れない奴は、練習時間も守れないし、遠征へ行くときの飛行機の時間だって守れない。日常生活の一つ一つのことを、きちんと意識し、自分を変えるんだ。お前たちはプロフェッショナルだ。きちんと練習しない奴、約束を守らない奴は、チームの一員じゃない！　そんな奴はすぐに出て行け。いつまでも500ドルや1000ドルで戦う選手のままでいいのか！　もっと強くなりたい、金持ちになりたいのだったら約束を守れ！」。30分以上に渡り、彼は怒鳴り続けていた。「何で、言っている意味が分からないんだ！」。マルセーロが、練習の指導中に選手を蹴り上げるシーンも目にした。日本以外で体罰を与える練習を見たのは初めてだ。

もちろん、蹴り上げられた選手は反抗的な態度などとるわけがない。リボーリオの言うとおり、マルセーロの指示は絶対だ。

「ハングリーさを奪う?」なんて下らない質問をランバートにしたのだろうか……。ATTの所属選手は、この恵まれた待遇が永遠に手にできるとは思っていない。結果を残さなければ、この生活が続かないことを理解している。早くATT首脳から認められ、支部を持つ身分にならないと、いつチームから契約を打ち切られるか、分からない。練習で手を抜いたり、与えられた機会を何度も逃しているようでは、契約は打ち切られて当然だ。支部を持つようになると週給こそなくなるが、ライセンス費用を差引いた稼ぎが自分のものになる。言い換えれば、経営者としての度量が試されるわけだ。ジム経営で成功するということは、ATTの勢力拡大を担っていくことを意味する。サポートした分は、取り返す。オフィスに出かけるためアカデミーを後にするランバートに、「ATTを作った目的」を尋ねると、「選手が自分の力で人生を楽しめるようになることをサポートする」という答が返ってきた。最高の環境は用意する。ただし、成功を掴むことができるかどうかは、全て自分次第。

誰よりもハングリーなエリート集団、それがアメリカン・トップチームの現実だ。





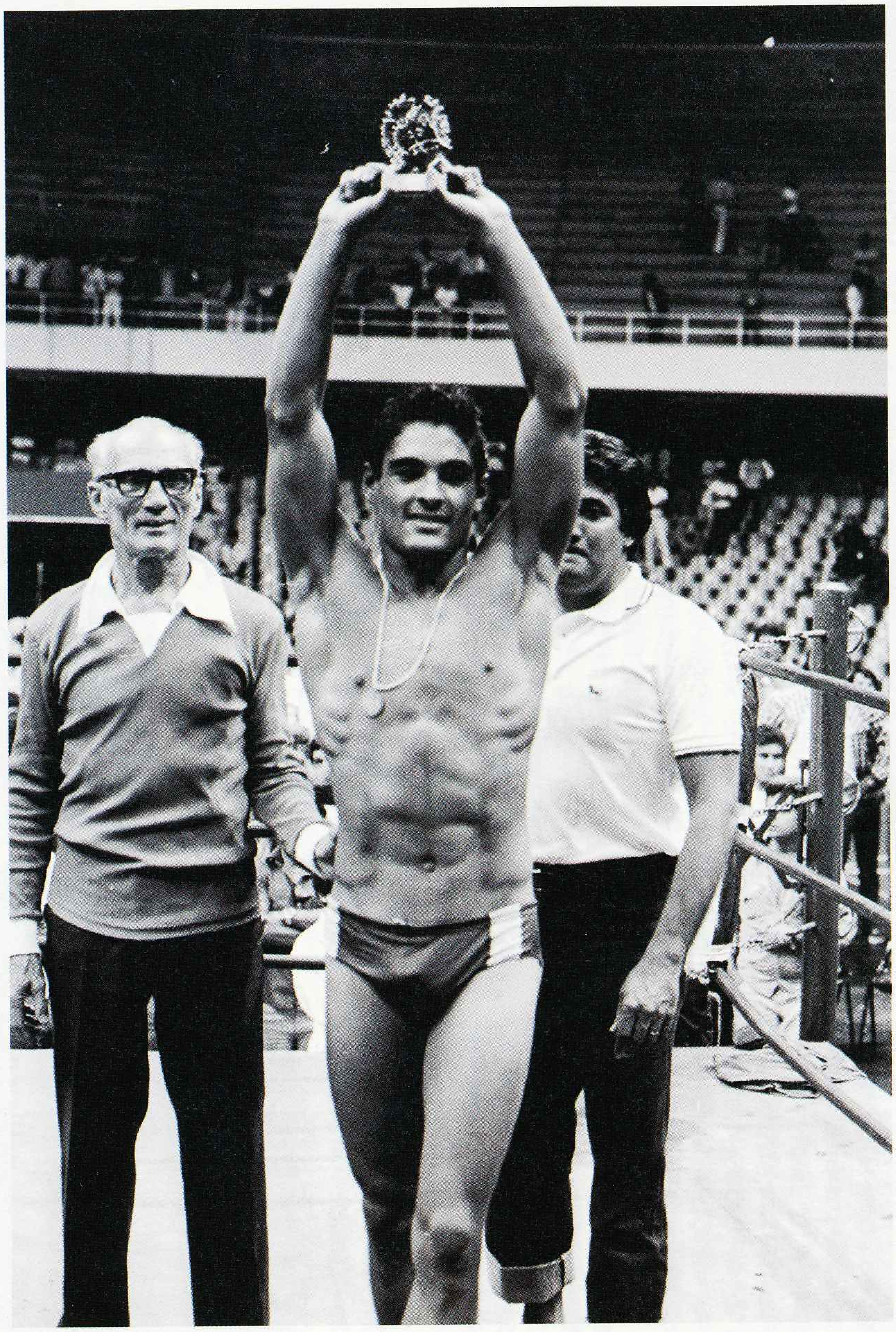








①MMAに関係なく、ボクシングの世界王者を目指す若者もATTに足を運ぶ。②ムエタイ・コーチのクリスチャン。ダイエット目的の女性から、MMA選手、キックボクサー志望の選手、全てを指導する。③キッズ・クラスから一般クラスまで、パブリック相手の午後の柔術を受け持つのはジニス。2000年ムンジアル・ペナ級準優勝者だ。④フィットネス感覚の女性も大歓迎、格闘技道場経営に彼女のような道場生は欠かせない。⑤モアシール・ボカ・オリベイラ、中小のMMA大会で腕を磨き、大舞台への出場を目指す。⑥アメリカン・トップチーム、その目標はアメリカでなく世界制覇だ。



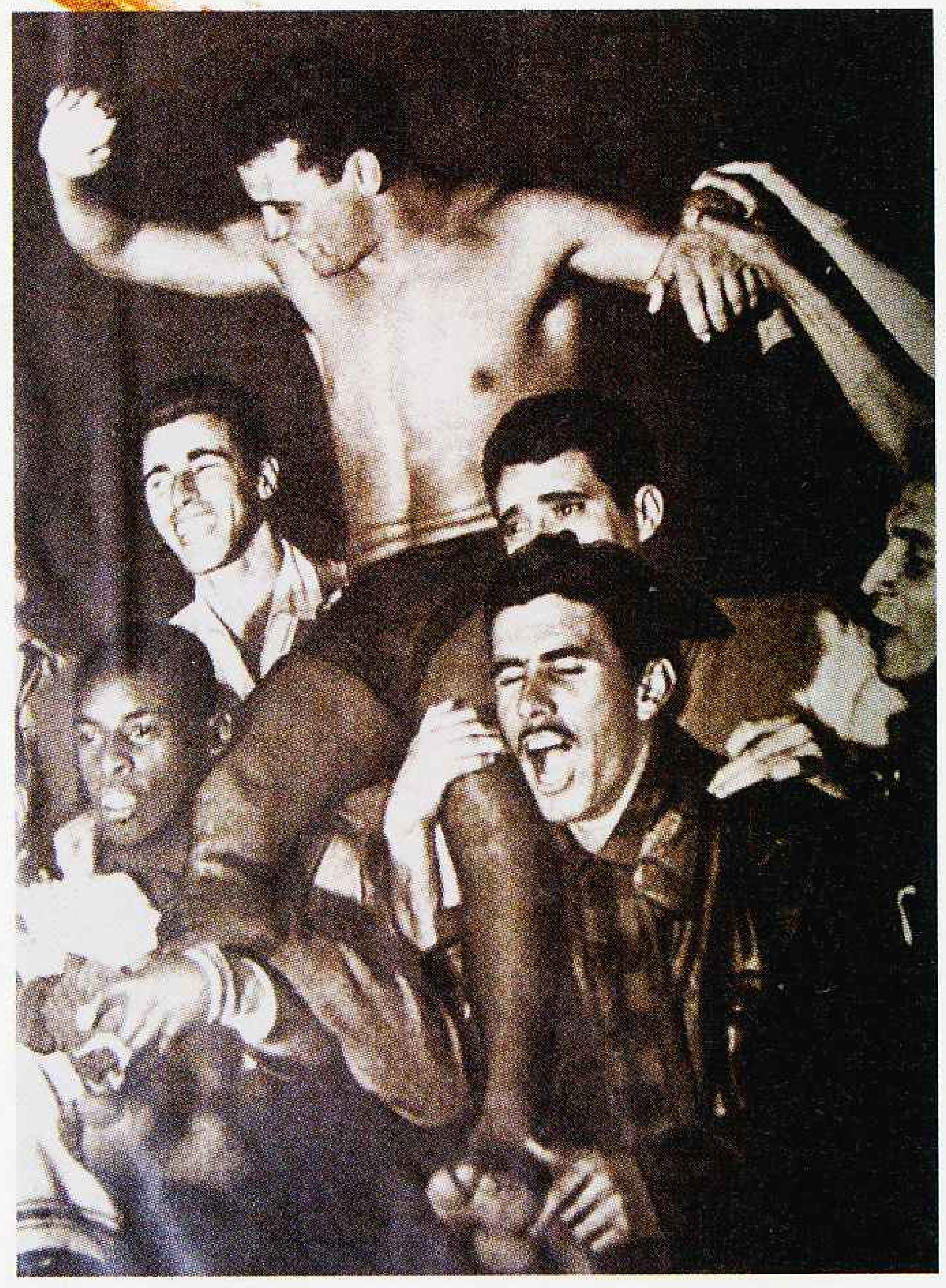
1980年4月25日、ヒクソンvsズール第1戦。マウントパンチからチョークを極めて勝利したヒクソンに左後方はエリオ　Joaquim Firmino/Correio Braziliense

ブラジル――、バーリトゥード――、

モノクロームな日々

マルセーロ・アロンソ＝写真提供
collect, posed pix and original by Marcelo Alonso

高島学＝文
text by Manabu Takashima


叔父エリオの後を引き継いだのは、カーウソンだった

1930年代から、グレイシー柔術の持つ技術の有効性をアピールするためにエリオ・グレイシーが度々用いた手段、それがバーリトゥードだった。

ブラジル人の平均的な体格よりずっとずっと小さなエリオが、一回りも二回りも大きな対戦相手からタップを奪う姿は人々の共感を呼び、エリオは1930年代半ばから引退を決意した1955年まで何度もブラジルの新聞の表紙に登場している。

そのエリオがヴァウデマー・サンタナとの3時間45分の死闘の末敗れたあと、彼の後を継ぎ、表紙を飾るようになったのは、エリオの甥カーウソン・グレイシーだった。カーウソンは叔父のように肉体的なハンディを持っていたわけではないが、すでに「グレイシー」の姓は、十分に浸透しており、人々はグレイシーがサンタナにリベンジを果たす試合を強く待ち望んでいた。

カーウソンvsサンタナは、マラカナンジーニョ体育館に2万の観客を集め、49分の激闘を制したカーウソンの雄姿は、ジアリオ・ノイチ、ウルティモ・オラ、ジャルナル・ドス・スポルチ、ジアリオ・ノチシアスという人気4誌の表紙を占拠した。

カーウソンは70年代半ばまでの20年間で19度バーリトゥードに挑み、無敗のままリングを下りている。

バーリトゥード生誕の地、ブラジル。世界的な規模で行われる大会こそ、日本やアメリカに先んじられているが、国内で行われているメッカ・ワールド・バーリトゥード、ジャングル・ファイトなどは世界最高水準のクオリティを誇っている。

ただ、一見VT王国のように報じられがちな彼の地だが、VTが盛んに開催されるようになったのは、PPVの普及によりビジネスとして成立するようになったごく最近のことでしかない。ブラジルでVTがお茶の間の定番だった時代を手繰り寄せようと思えば、1959年にまで遡らなくてはならない。しかも、それがVTとメディアのたった一度の蜜月だった――。

「月曜日の夜はVTをお楽しみに」という宣伝文句が存在したかどうかは窺い知ることはできないが、1959年のブラジルでは「エロイズ・ド・ヒンギ（リングのヒーロー）」という番組が、TVコンチネンタルにより、全土にライブ中継されていた。

マッチメーカーはエリオと長兄カルロス。リオのフラメンゴ体育館にリングを組み、毎週5~6人のグレイシーの教え子が、ボクシングやカポエイラ、ルタリーブリ、カラテなど他のスタイルの格闘家と対戦する。TVにリードされたVTの試合時間は5分×3R、現代の世界水準と同じであった。

ジョアォン・アルベルト・バヘットはこの番組の中でまさにヒーローだった。

エリオの愛弟子でカーウソンのベスト・スパーリングパートナーは、毎週のようにリングにあがり、パンチでなく関節技で勝つスタイルで、多くのマスコミ、視聴者から支持を集めていく。

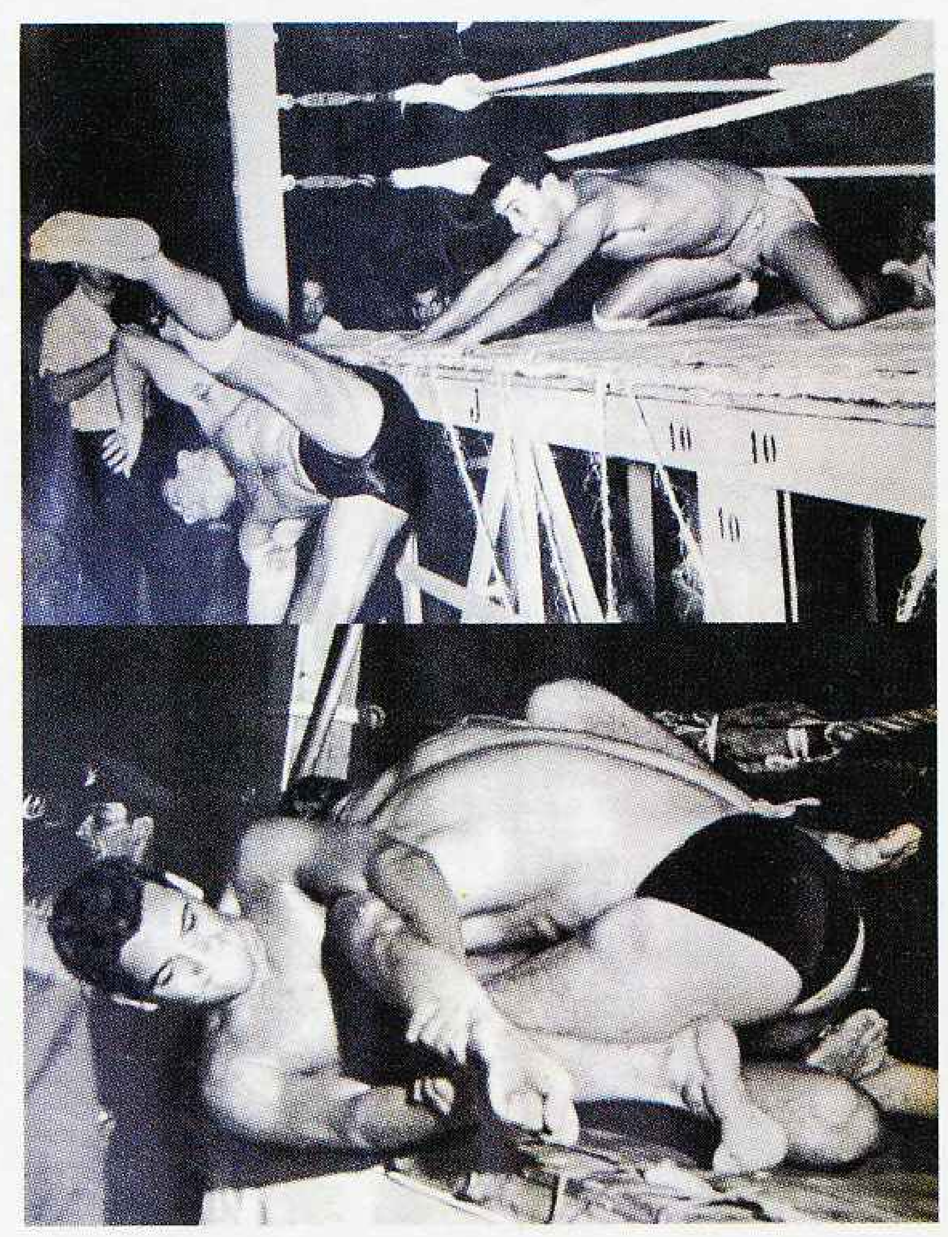
同TVプログラムは、右肩上がりに評判を上げ、半年後にはついにマラカナンジーニョに進出。その最初の大会で74キロのバヘットは、86キロのルタリーブリ選手ソアレス・ビナグレと対戦。パンチの交錯のあと、自らガードポジションをとったバヘットは、ソアレスにアームロックを極めた。

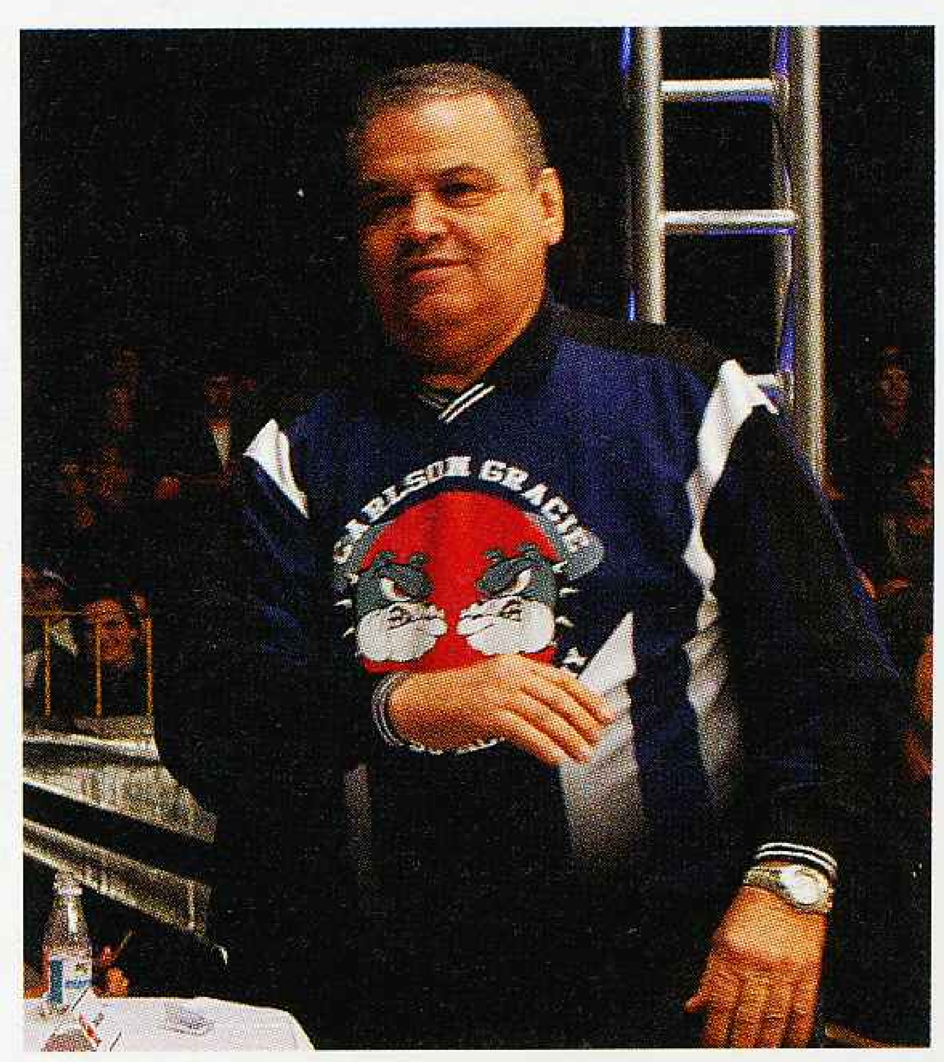
「もう完全に極まっていたから、私はレフェリーに試合を止めるように要請したんだ。その時、ソアレスは自らロールし始めた。しかも、間違った方向にね」（バヘット）。

夜の10時代、ラテン民族国家ブラジルではまだまだ宵の口、数多くの人々がソアレスの腕が折れる瞬間をテレビで見ていた。そして有力紙オ・グローボの朝刊の見出しには「逃げようとした腕が、折られてしまった」という文字が躍り、リングのヒーロー＝バヘットに非難が集中した。

この事件が機会になったのではないだろうが、その後、弁護士、大学教授、そして現在もサイコロジストとその名を馳せるバヘットは、VTだけでなく格闘技界から身を引き、エロイズ・ド・ヒンギは打ち切られてしまった。70歳をこえ、好々爺にしかみえないバヘットだが、この件になると苦渋の表情を露にし、「毎週火曜の朝は、祝福の電話がたくさんかかってきて大変だった。それがあの日は、誰もが私を非難し、


エリオや破ったヴァウデマー・サンタナとは6度も戦い4勝2分
Cruzeiro magazine


カーウソンがパサリートという格闘家と戦ったVT。アームロックはハーフガードから仕掛けられている。上から殴るカーウソン・スタイルというのは、誤報だったのかもしれない……。当時はリング上から対戦相手を落とすことは認められており、よく見られたようだ

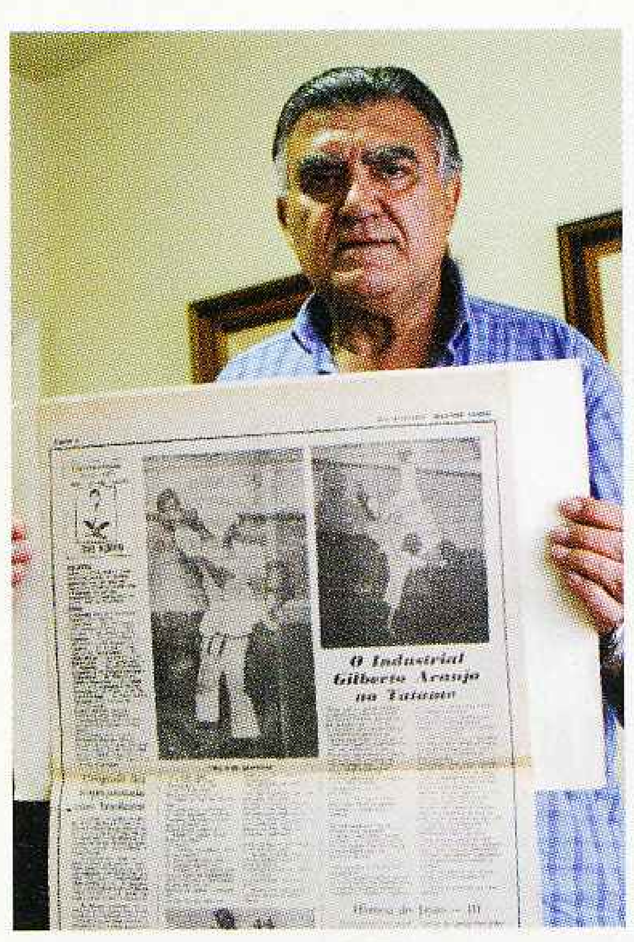

現在のカーウソン。当時の面影が無いのも致し方ない



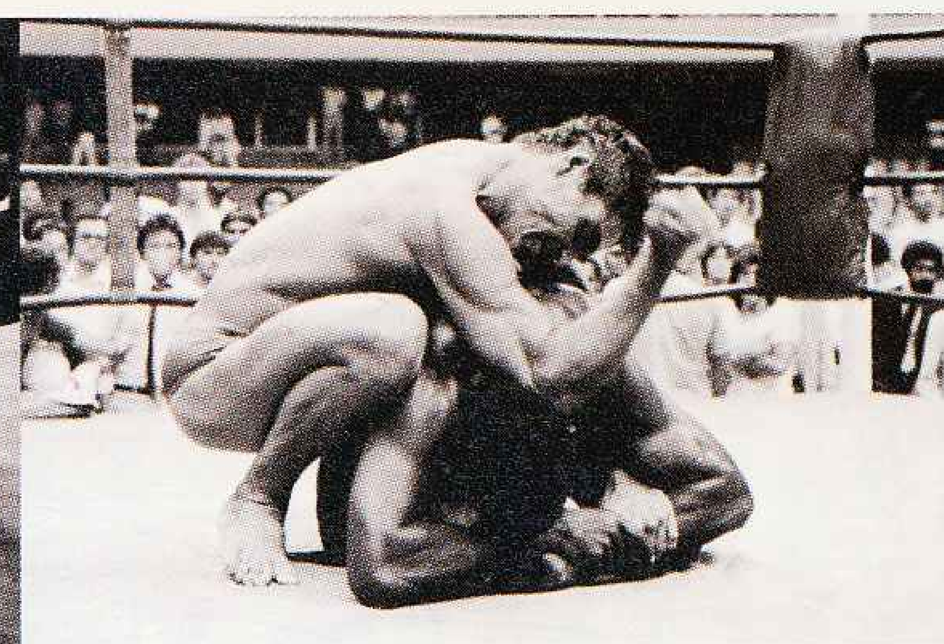
エロイズ・ド・ヒンギ（リングのヒーロー）が打ち切られる原因となった、マラカナンジーニョ大会のポスター。ジョアォン・アルベルト・バヘットの名がメインイベントに

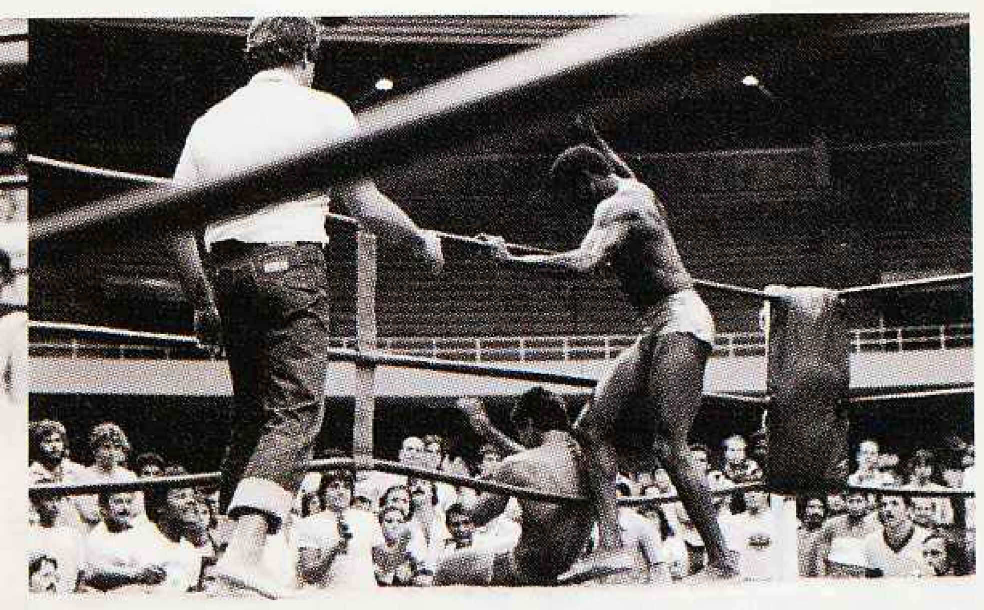


腕が折れたことを大々的に報道する新聞


バヘットは、当時の新聞のスクラップを大切に保管している







ヒクソンvsズール第1章。ヒクソンは3度もリング外に落とされた。必死でヒクソンを拾い上げようとしているのが、ホーウス・グレイシー。伝説の最強柔術家である　Joaquim Firmino/Correio Braziliense

テレビVTから、ホーウス、そしてヒクソンの時代に

嫌がらせの電話が後を絶たなかった。スポンサーも下りてしまい、番組は続行不可能になってしまったんだ。それまでにこやかに話しかけてきた記者たちが、一斉にバッシングしてきたんだ。私にとって、今でも大きな心の傷になっている」と語る。

60年代、新聞の支持とスポンサーを失ったVTは、それでも人々の興味は持続しており、リオの小さな体育館、そしてノーチスト（ブラジル北東部）では、大々的なVT興行が続いていた。一番人気はやはりカーウソンで、イヴァン・ゴメスやエウクリディス・ペレイラ、パサリート、グアナイル・ヴィアウらと激闘を繰り返した。

しかし、１９７４年カーウソンがVTから引退すると、その熱も完全に冷め、80年代入るまで、VT興行が行われた形跡はほとんど残っていない。

ブラジルはブルース・リー人気の絶頂下にあり、かつてのVTファンも立ち技打撃系格闘技に夢中になっていた。グレイシーの名も、ブルース・リーには適わなかったのである。この間、グレイシー人気を支えていたのはホーウスだが、彼はVTでなく、サンボ、レスリング、そしてカラテなど柔術以外の大会で活躍し、その名を高めていった。そんなホーウスが1度だけVTシーンに姿を現したことがある。

１９７６年、ブルース・リー人気で勢いづいたとあるカラテのマスターが、エリオとホリオンのデモンストレーションを見て、「あんなのすぐに真っ二つにしてやるよ」と挑発。後にUFCを作り上げたホリオンが、クルービ・オリンピコで、グレイシーvsカラテをプロモートし、そのメインにホーウスが用いられた。

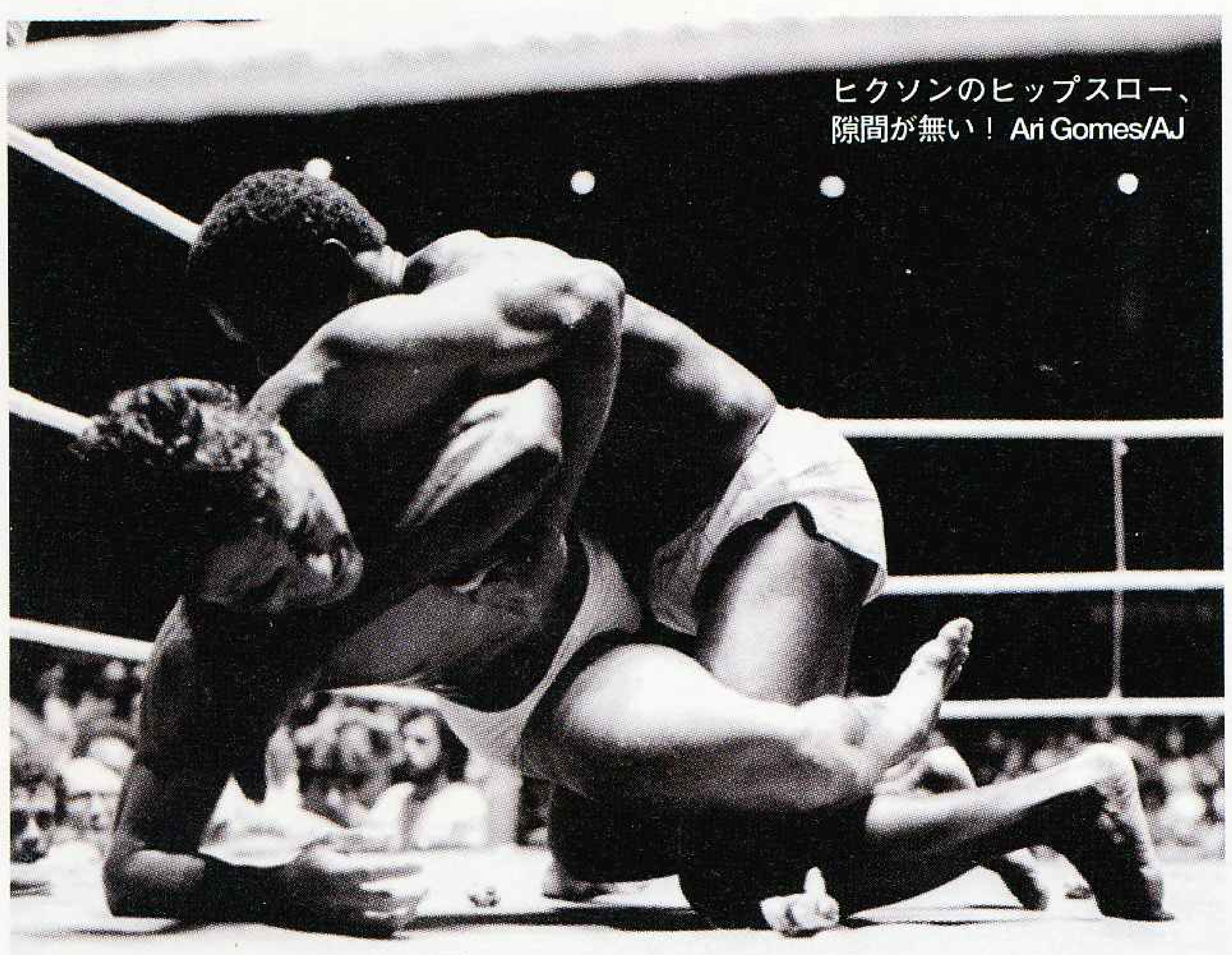
この試合、25歳のホーウスは1分も費やすことなくチョークでカラテ家に快勝、その後31歳で亡くなるまで人前で行われたVTには、ついぞ1度も登場していない。

グレイシーからすれば伝説の存在ホーウスは、長きに渡るルタリーブリと柔術の血で血を拭うような関係の原因となった、プライベートVTを行っていたことが判明した。１９８０年、ズールのグレイシーに対する挑戦をエリオの判断でヒクソンに譲っていたホーウス（UFCでホイスがまず出場し、万が一敗れたときのためにヒクソンが残されていたのと同じケース）だったが、ナンバーワンの地位は不動であった。

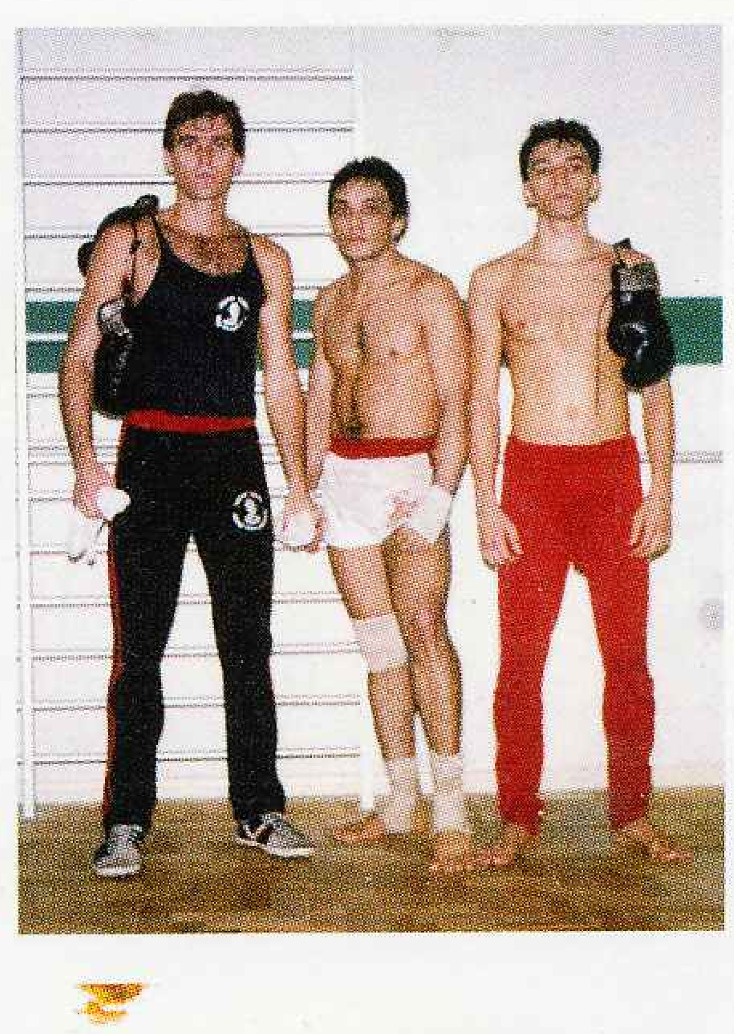
１９８２年の初め、15歳のシャーウス・グレイシーが、高名なムエタイ指導者フラービオ・モリナの義弟マリオ・ドゥーモに暴行を受けた。この知らせを受けたホーウスは、20人からなるメンバーで、モリナのムエタイ・アカデミーを襲撃。

現在はアカデミア・ボクセタイのマスターで、ノゲイラ兄弟やマリオ・スペーヒーの打撃コーチであるルイス・アウベスによると、この日モリナのアカデミーは、チルドレン・クラスの最中で指導員以下、ファイターと呼べる成年男子は4名。そこに20人の柔術家たちが襲撃してきたのだという。これはもうVTでなく集団暴行事件といっていいだろう。

後に触れるが、ムエタイ勢はルタリーブリと関係を深め、柔術vsルタ&ムエタイの争いは、20世紀の終わりまで続いてしまった。そんな因縁の原因を作ったホーウスは、この襲撃事件の数ヵ月後、ハングライダーの事故で命を散らせている。



ヒクソンのヒップスロー、隙間が無い！ Ari Gomes/AJ



ホーウスとのトラブルにより、長きに渡る柔術vsムエタイ（&ルタリーブリ）の因縁を作るきっかけとなったフラービオ・モリーナ（左）。中央は若き日のルイス・アウベス。現在はマリオ・スペーヒー、ノゲイラ兄弟らのムエタイ・コーチを務めているのだから、時代は変わるというもの（写真提供ルイス・アウベス）

１９８０年、ノーチストで70戦に及ぶVTキャリアを誇り、未だ無敗というズールが、多くのVTファイター同様に「グレイシーへの挑戦」を宣言した。

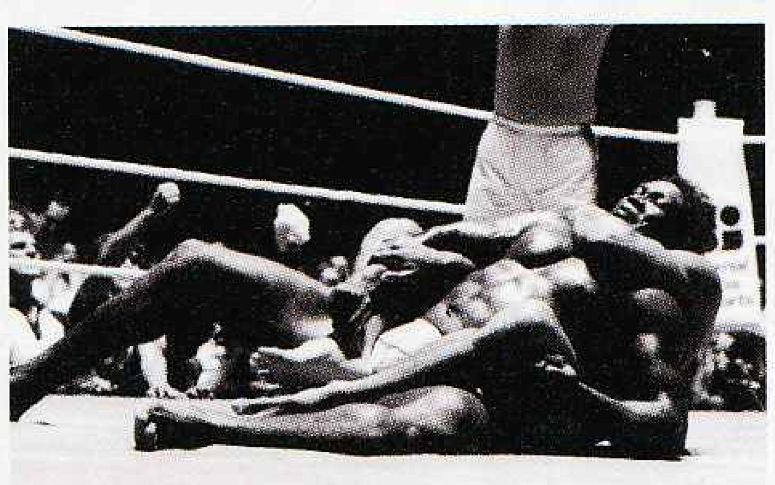
これを受けたエリオは、ホーウスでなく弱冠19歳、78キロのヒクソンを抜擢した。１９０センチ、90キロのズールと若きヒクソンが対峙したのは１９８０年4月25日、ブラジリアだった。試合時間は10分×3R。反則は目つき、噛みつき、急所攻撃のみのオリジナルVTルールが採用された。



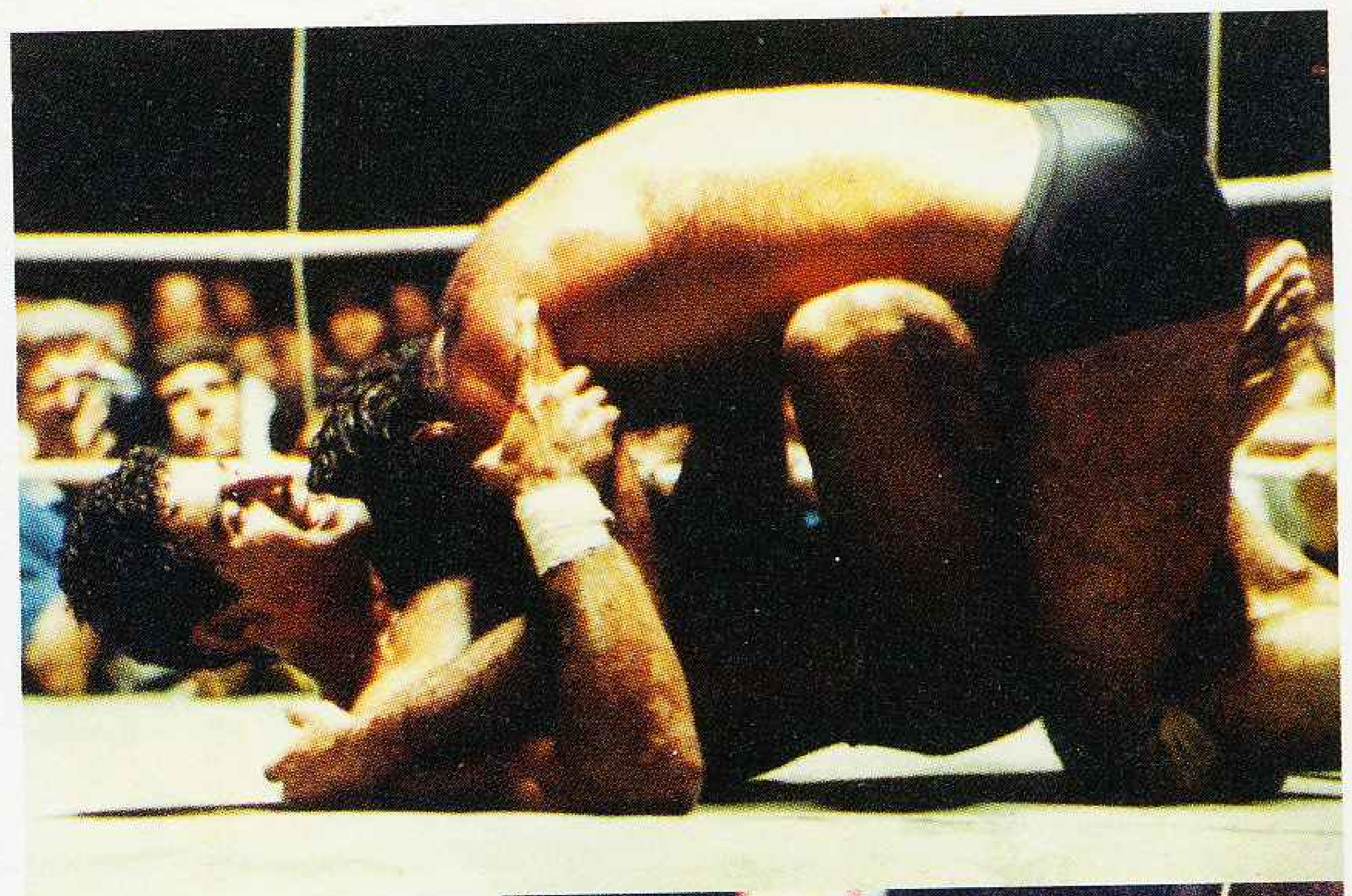
segunda-feira, 14/11/83　Jornal dos Sports

Gracie derrota Rei Zulu no "vale-tudo"

2度目のヒクソンvsズールを伝えるジャーナル・ド・スポルチ



1983年11月13日2度目のズール戦で、ヒクソンはガードを強いられたが、下から仕掛け続ける。最後はバックに回りこんで、マタレオンでタップを奪った Ari Gomes/AJB





誰もがヒクソンのクビを狙っていた時代のVT。柔術vsムエタイ決戦で、マルコ・ファスはカーウソン・グレイシーの一番弟子フェルナンド・ピンドゥーカと痛み分けのドロー。ファスの名前が、ブラジル格闘技界に響き渡った（写真提供フェルナンド・ピンドゥーカ）

ヒクソンは徹底して、打撃戦を避けた。というのもズールは、オープンハンドで爪を伸ばして戦うのが常套手段だったからだ。

3度もリング下に落とされたヒクソンだが、リング上ではギロチン、チョークとズールを追い込み、1Rが終了。2Rになると、パンチでテイクダウンからマウントを奪い、パンチ→チョークとベーシックな流れで、一本勝ちを収めた。1996年、ヒクソンはブラジルに帰郷した際に、「あの試合が一番ハードだった。ホーウスとエリオがセコンドに居てくれなかったら、どうなったか本当のところは分からない」と述べている。リング下に放り投げられた際に、かなりのダメージを受けていたという話も伝わっている。

明白に決着がついたはずの、ヒクソンvsズール。その第2弾が行われたのは、1983年11月13日のことだった。前回の試合が完勝だったにも関わらずグレイシーがズールのリベンジの要求に応えたのには、理由があった。カーウソンの引退以来、VTにソッポを向いていたマスコミが、若きヒクソンに注目するようになったのだ。

そして打撃系に道場ビジネスで後れをとっていた彼らは、マラカナンジーニョでの一戦を機に、柔術人気の復興を託していたのだった。果たしてズールは既にヒクソンの敵ではなく、時間だけは6分以上長く戦ったが、チャンスらしいチャンスを掴むことなく、アッサリと一本負けを喫した。

柔術とルタリーブリ、15年に渡る骨肉の争いが始まる そしてヒクソンの渡米

ジョーナル・ド・ブラジル、オ・グローボ、ジョーナル・ド・スポルチの三大メジャー新聞がこの試合を大きく取り扱い、柔術はその地位を回復したのであった。

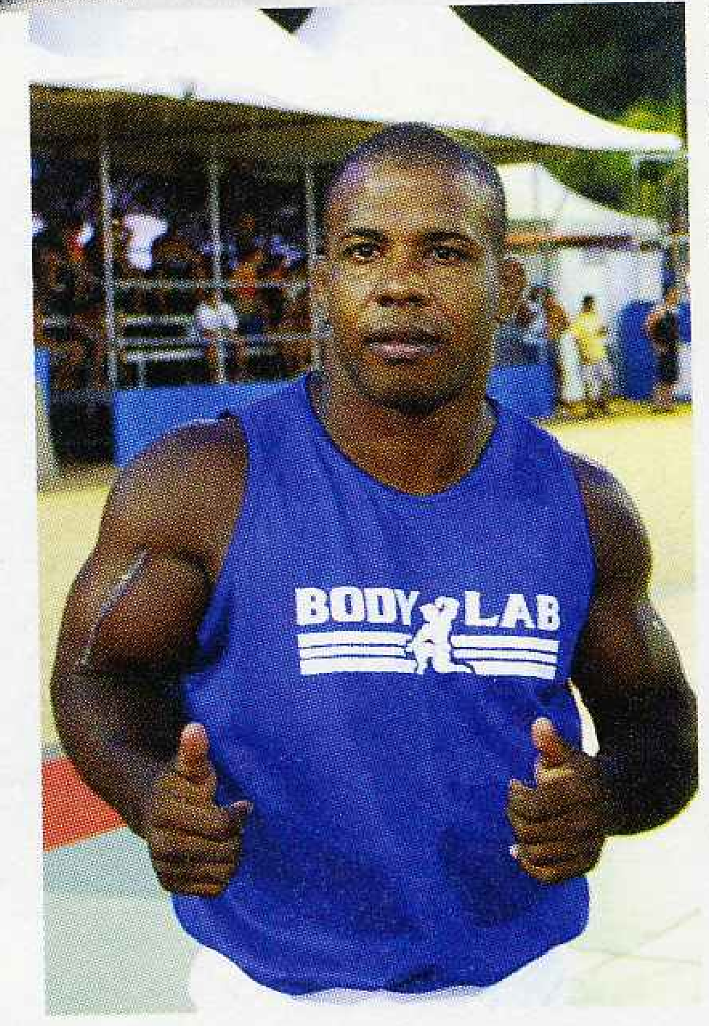
マラカナンジーニョが再び、VTで熱を帯びたのは、その1年後、1984年11月30日のことだ。ホーウスにアカデミーを襲撃されたモリナが、柔術vsムエタイ4対4、ヒクソン戦を含めた挑戦をエリオに持ちかけた。これをエリオは了承したが、ヒクソンが拒否。彼の愛弟子マルセーロ・ベーリンギ（故人）に勝てば、モリナの挑戦を受けることで話はまとまった。

モリナが選んだムエタイチームのメンバーは、彼自身にマルコ・ファス、エウジェニオ・タデウ、そしてナラーニの4人。彼らはルタリーブリのファウスト・ブルノシーラのアカデミーで、ウゴ・デュアルチ、マルセーロ・メンジスら（後の対柔術主力部隊）と組み技の習得に励んだ。

「奴らはよそのアカデミーを襲ったりしていたから、グレイシーと戦うという状況では、すぐに皆が一致団結できたんだ」とファス。そして、メンジスがナラーニに変わって試合に出場すると強く希望し、ムエタイ&ルタリーブリ連合が成立した。



ルタリーブリのエウジェニオ・タデウが、ヘナン・ピタンギの道衣を掴みパンチで圧勝した Noemi Horta/Jornal dos Sports



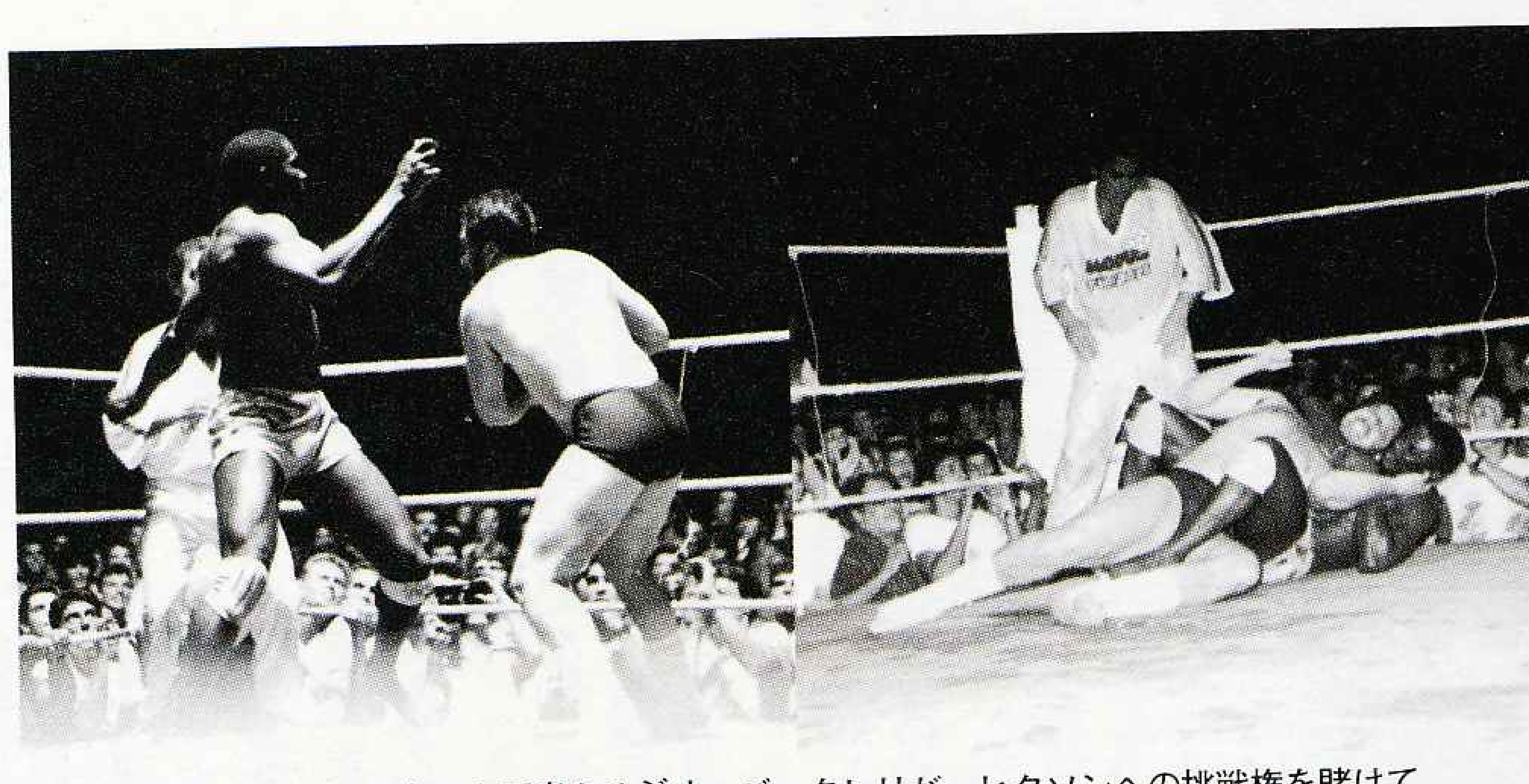
現在40歳のエウジェニオ・タデウ。96年8月に来日している大ベテランは、去年もメッカVTのリングに上がっている

グレイシーからはベーリンギの他、フェルナンド・ピンドゥーカ、ヘーナン・ピタンギ、イナシオ・アラガォンが選抜された。「ディサフィオ・ジ・マーシャルアーツ柔術vsムエタイ」はタデウvsピタンギの一戦で幕を開けた。そして、柔術衣を着てリングに上がったピタンギは、襟や袖口をタデウにつかまれ、嫌というほどパンチを浴び、TKO負け。2試合目にムエタイ側から登場したのブルーノ・ルッシオ。負傷したメンジスに変わり、グレイシー側が用意したカンフー選手は、あっという間にチョークでアラガォンに敗れた。

カーウソンの一番弟子ピンドゥーカとファスの一戦は、ファスがスタンドを支配し、寝技になるとピンドゥーカがパウンドで攻めるという展開が続き、ドローに。マルコ・ファスの名が、メジャーになる一戦となった。因縁の決着戦では、ヒクソンの愛弟子ベーリンギは、モリナを全く相手にせず、マウントパンチで圧倒。コーナーからタオルがとんでも、黒帯柔術家のレフェリーはそのタオルで顔を拭いて、投げ返すという暴挙に出ると、モリナのセコンドは、リングになだれ込み、試合をストップさせ、この大会は柔術側の勝利で終わった。「ルッシオはムエタイじゃないから、1勝1敗1分だ。レフェリーにしても柔術側の人間じゃないか、アンフェアすぎる」というムエタイ・ルタ勢の不満の声を残して。

実はこの大会、対抗戦の後にズールvsセルジオ・バッタレリの一戦が組まれている。バッタレリはヒクソンへの挑戦を申し出たが、これをエリオが「ズールに勝ったら」と条件づけ、当時キックボクサーとして高い人気を誇ったバッタレリの名をラインナップに連ねることに成功したのだ。ヒクソンという絶対的な存在が、多くの副産物（サイドビジネス）を生む時代になっていた。この後、柔術とルタはストリート、ビーチ、アカデミーと、ことあるごとに対立していくが、ヒクソンは興行という舞台のVTには1度として登場せず、1989年4月にブラジルを去る。

その後、何度か噂には上ったもののヒクソンが母国ブラジルのリングに立つことは2度となかった——。



無敵のフルコンタクト・キック王者セルジオ・バッタレリが、ヒクソンへの挑戦権を賭けてズールと対戦し4分未満で、チョークにより失神　Andre Durao/AJB



バッタレリは、その後キックに専念に26戦24勝の戦績を残す。IVCの開催を経て、今ではK—1の南米責任者として活躍中だ



2004年9月10日発行　発行・発売／インフォレスト株式会社　〒162-0825　東京都新宿区神楽坂6-59　TEL.03-5229-4616（営業）　発行人／豊島誠志　編集人／沢田建

9784902566437
ISBN4-902566-43-5
C9476 ¥933E
1929476009333
定価**980**円 本体933円
雑誌60212-43

ガチ！★MAGAZINE

PRIDEから修斗まで、格闘技大解剖！

2004年9月10日発行　発行・発売／インフォレスト株式会社　〒162-0825　東京都新宿区神楽坂6-59　TEL.03-5229-4616（営業）　発行人／[illegible]　編集人／[illegible]

INFOREST